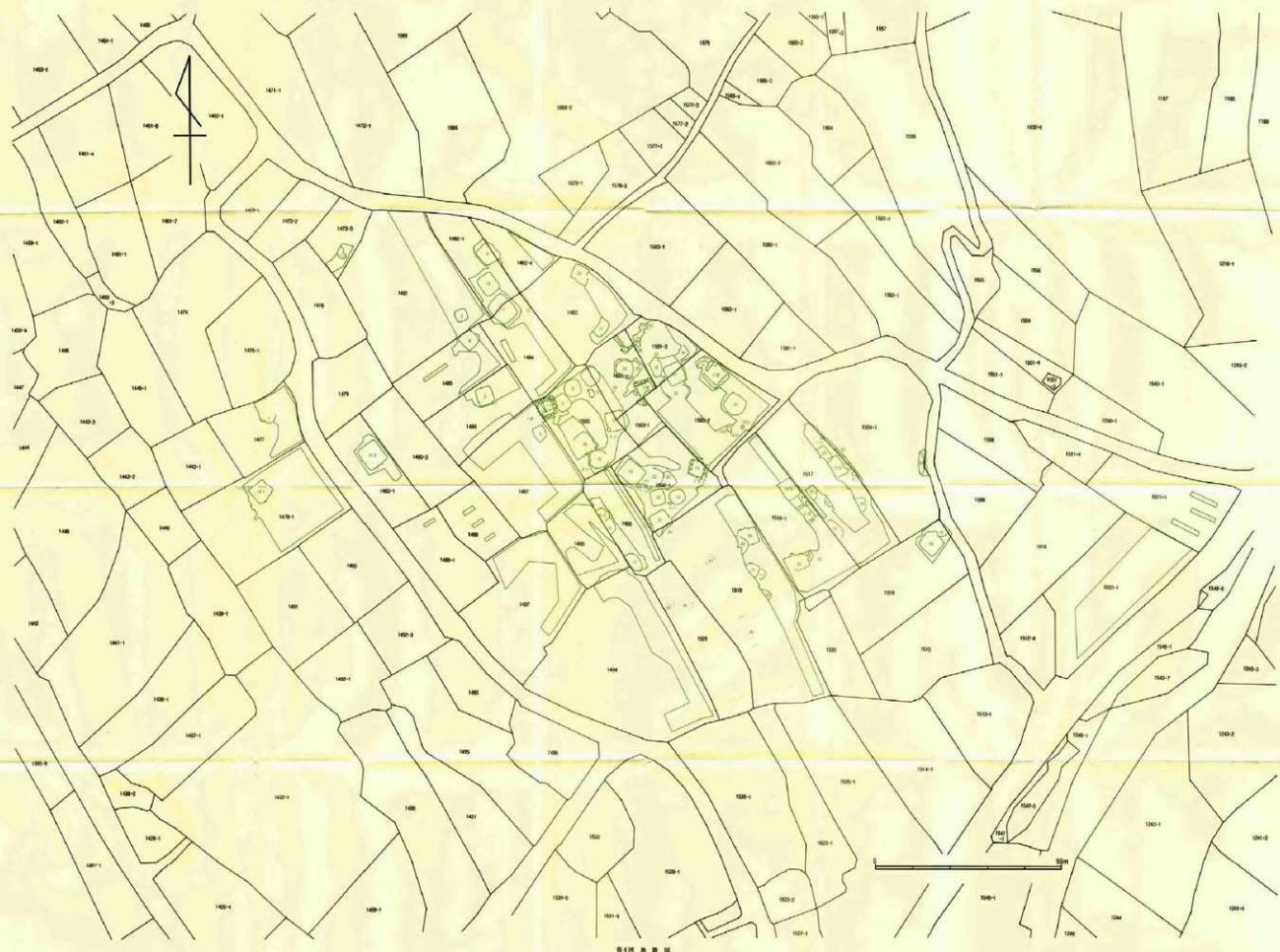
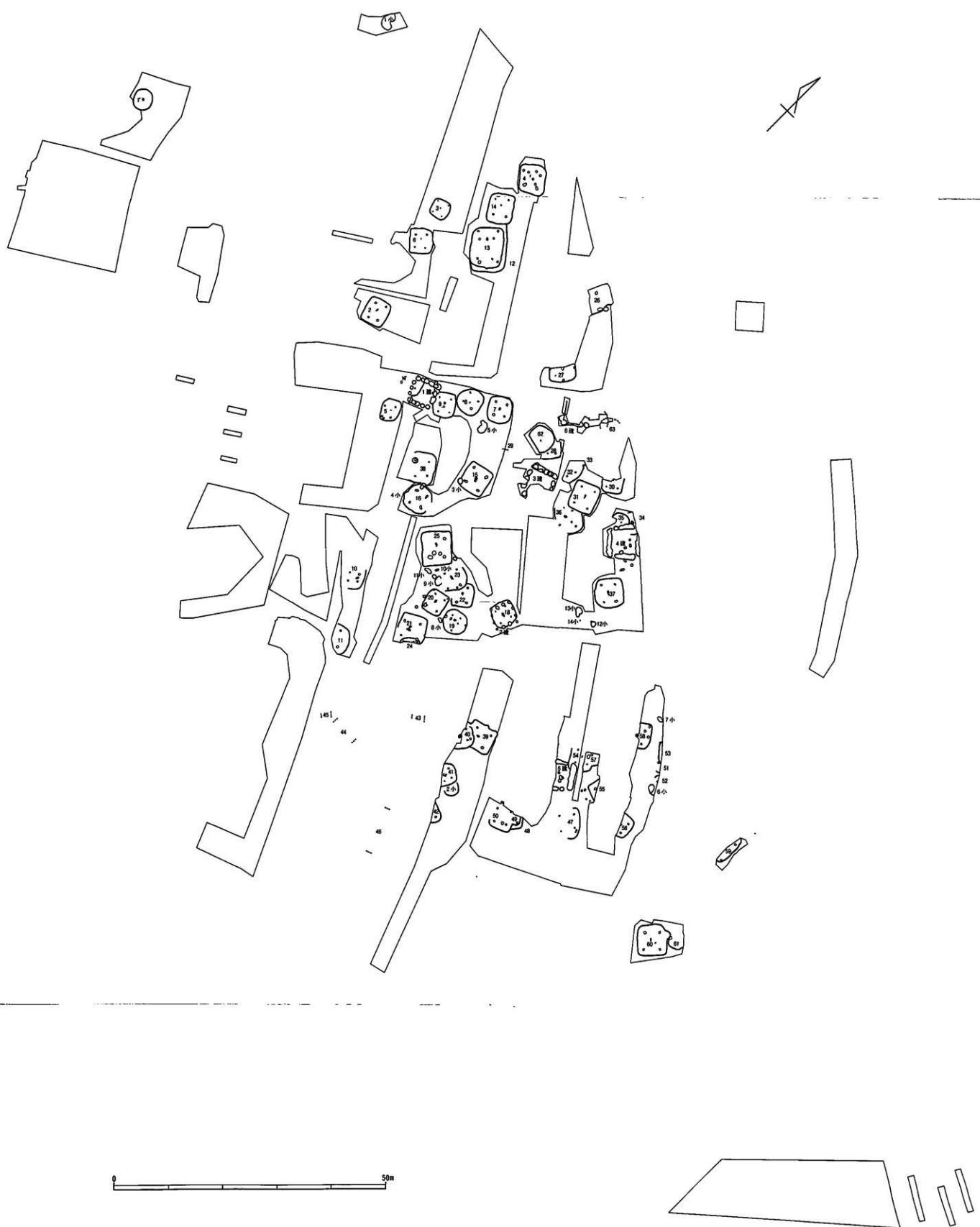


坂 平

八ヶ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址







第322図 平安時代、中・近世遺構配置図（1:500）

序

思ひぬ偶然から、新しい発見が生まれることがある。

富士見町は、井戸尻遺跡や藤内遺跡に代表されるように、縄文中期の遺跡の宝庫である。では、それよりさらに時代を遡った縄文前期はじめ頃の、阿久遺跡と肩を並べるような古い遺跡は無いのか、そうした思いがしないわけではなかった。その疑問が、坂平遺跡の発掘によって解明されたわけである。

この坂平地籍は、落合地区上葛木の集落から釜無川を右手に見て、旧甲州街道を下葛木に向かって進んで行くと、川下に向かっているのになぜか緩い登り坂になる。それは八ヶ岳側から釜無川に流れこむ鹿ノ沢川のつくった扇状地が高台になっているからであり、その中程の道路脇には、近くの氾濫跡から掘り出された応安の宝鏡印塔が置かれている。つまり、この辺りから山付きにかけて広がる扇状台地が坂平と呼ばれているのである。

この地籍が土地改良整備事業の対象に決まった頃までは、誰しもこの地に縄文時代の遺跡など予想をしていなかったということである。ところが、平成8年、表層の耕土を剥いでいく過程で、現場を見に行った当時の文化財担当者が、土器の破片や黒曜石を見つけた。このことから急遽、坂平遺跡の発掘が始まったわけである。その調査の経緯は本文の中で詳細に述べられているが、まさに偶発的な調査の始まりであったと言えよう。

その年の11月の中頃、発掘現場で見学会が開かれ、一緒に見せて頂いた。水田耕土の下にローム層が広がり、住居址の片隅に、少しひびが入っているが完全な形で、尖り底の深鉢が伏せられていたのが印象的であった。口径25cm、高さ30cmほどの無文の素朴な鉢である。住居址の形態や石器等から見ても、縄文前期はじめ頃の土器であることは間違いないとのことであった。この鉢は現在、考古館に展示されているが、これまでこの地で見られなかった味わいのあるものである。

この坂平遺跡の発掘で、改めて富士見町の縄文前期前業の遺跡の存在が確認され、さらには諏訪広域圏の縄文前期遺跡の広がりが見直されるようになるのではないかと思うのである。そして、この地方の前期縄文文化がどのような過程を辿って隆盛を極めたのか、それは当時の大地の変動や気象の変化とどう関係があったのか等、興味は尽きない。

この報告書がより多くの皆さんに活用され、今後の縄文文化の探求に役立つことを期待すると共に、発掘調査及び本書編纂に関係した方々や、ご協力を頂いた土地改良整備事業関係の皆様方に対し厚くお礼を申し上げたいと思います。たいへん有難うございました。

平成16年3月

富士見町教育委員会

教育長 小松睦示

例　　言

一、本書は、土地改良総合整備事業に伴い、平成8年（1996）に富士見町教育委員会が行った坂平（さかだいら）遺跡の発掘調査報告書である。

二、執筆分担は次の通りである。

第一章：小林公明

第二章一節：小松隆史 二節一：樋口誠司・小松隆史 二節二：樋口誠司

第三章：小松隆史

第四章：小松隆史

第五章一節：樋口誠司 二節：小松隆史 三節一：樋口誠司・小林公明（石斧の項は小松隆史）三節二：小松隆史 四節：樋口誠司 五節：小林公明

三、実測図の作製分担は次の通りである。

遺構：吉岡博子・小口明子・小池敦子

大形石器：吉岡博子・樋口誠司

小形石器：小松隆史・吉岡博子・小口明子・小池敦子

土器・土器拓影：小口明子・小池敦子・平出恵美

中・近世の遺物：小松隆史

四、遺構図ほかの表記法は次の通りである。

1 方位は磁北を指す。

2 水糸高は標高（m）を示す。

3 輪郭を確認したのみで発掘していない柱穴や小穴は破線で示し、周溝は下端線や法の表現を伴わない実線で示した。また、失われていたり検出できなかった箇所は破線で示し、埋め戻して貼り床されている箇所は一点破線で示した。

4 主柱穴の内側を結んだ細線は、叩き状に堅くなっている床の範囲を示す。

5 緑線は、当該遺構に掘り込まれた中・近世の小竪穴の輪郭である。

6 石器の石質で「スレート」としたものは、片状の発達した粘板岩を指す。

7 土器の拓断面図及び実測図のうち、植物質の纖維が含まれているものについては網目をかけている。

五、地緒図の第4図と、遺構全体図の第5図・322図の3葉は、別に付した。

六、本報告に関する出土品と調査記録は、井戸尻考古館に保管・展示されている。

七、発掘から報告書の作成に至るまでの間に、多くの方々から御教示と御協力をいただいた。

お名前を記して深く感謝申し上げたい。

朝香輝朗 今福利恵 今村善興 岩崎孝治 小野正文 横原功一 小池 孝 小島孝修
小林健治 小林深志 小林康男 小松 学 五味一郎 五味裕史 佐藤美枝子 佐野 隆
瀧谷昌彦 島田恵子 島田哲男 高見俊樹 田中 基 長崎元廣 長沢宏昌 樋口昇一
平出一治 保阪太一 宮坂 清 武藤雄六 百瀬一郎 守矢昌文

目 次

序 例 言

第一章 遺跡の環境と調査の経緯	1
一、遺跡の環境 (1, 2図)	1
二、調査の経緯 (3, 4図)	5
第二章 縄文時代の遺構と遺物	9
第一節 遺 構	9
一、遺構の概観 (5図)	9
二、住居址 (6~56図)	10
三、建物址 (57~64図)	67
四、小竪穴 (65, 66図)	74
五、黒曜石の集積	78
第二節 遺 物	79
一、石 器 (67~252図)	79
二、土 器 (253~321図)	332
第三章 平安時代の遺構と遺物	417
一、遺 構 (322, 323~328図)	417
二、遺 物 (329~339図)	424
第四章 中・近世の遺構と遺物	437
一、遺 構 (322, 340, 341図)	437
二、中・近世および近代の遺物 (342, 343図)	441

第五章　まとめと考察	445
第一節　坂平遺跡の土器文化　(344図)	445
第二節　集落と住居と建物　(345～347図).....	456
第三節　石器のすがた　(348～363図).....	468
第四節　土器の煮炊痕　(364, 365図).....	502
第五節　坂平遺跡の時代　(366図)	505
あ　と　が　き	514

図　版　　1～52

第一章 遺跡の環境と調査の経緯

一、遺跡の環境

位置

八ヶ岳南麓の末端近くに位置する中央東線の信濃境駅付近は、井戸尻遺跡群と称される縄文時代中期の遺跡地帯としてつとに著名である。この辺りでは、八ヶ岳火山列の南端に位置する編笠山の裾野が、北西から南東に抜ける糸魚川—静岡構造線に沿う谷にはば直行する向きとなっている。その末端は、標高差およそ120メートルを糸静線に沿う釜無の谷になだれ落ち、中小の河川は急崖を開析して釜無川（富士川）に注いでいる。これらの河川のうち唯一、鹿ノ沢川は扇状地を発達させている。坂平遺跡は、その鹿ノ沢川の扇状地に立地する。

信濃境駅から真っ直ぐ下って標高850メートルの山麓の縁に至り、つづら折りを下れば、甲州街道（現国道20号線）の宿であった上萬木に出る。標高は730メートル。ここで集落の下手の東南の方を向けば、家並み越しに、段丘のような高まりが国道側に突き出しているのが目にに入る。集落の下手で国道から樹形を折れて旧道に入り、ゆるやかに坂を上れば、その平坦な高まりの一帯は水田となっている。ここが、坂平地籍である。すぐ先は下萬木で、同じ高まりの面が集落となっている。

扇状地

この地形は全体として、山麓から出てくる鹿ノ沢川の谷口に形成された紛れもない扇状地である。現在の川筋はほぼ中央を流れ、扇端をV字形に刻んで釜無川に注いでいる。その規模は、河道沿いで扇頂から扇端まで500メートルであり、両端はそれぞれ西北側と東南側に隣する百々川と生沢川までの間、およそ800メートルに広がっている。下萬木区から上ってくる農道より東南側は、入道村、字坪木とよばれる地籍である。

鹿ノ沢川じたいも、扇頂に口を開ける沢筋は広々として流れも緩やかで、奥の方まで水田が開かれている。他の中小河川で、このような状態はみられず、かなり開析が進んでいる。

八ヶ岳側で、扇状地は珍しい。立場川より南麓側で、釜無川に注ぐ中小河川は甲六川まで8本ほど数えられるが、なぜか鹿ノ沢川のみに扇状地が形成されたのである。その理由と成因は、一体のものだろう。また、この地形は現在の河道の左岸、下萬木の集落が固まっている扇端部が釜無川に著しく張り出して、谷を狭めている。なぜ釜無の本流に削り取られなかったのか、これも不思議なことであるが、国道の改修によりコンクリートで固められる以前、鹿ノ沢川の

遺跡の環境と調査の経緯



第1図 坂平遺跡位置図 (1:25,000 国土地理院発行)



第2図 遺跡附近地形図 (1:5,000 平成元年測図 網目の範囲が前期集落)

遺跡の環境と調査の経緯

左岸の道路法面には対岸と同じ赤石層群の岩が露出していたという。⁽¹⁾

ところで、この地形には別な顔も見え隠れしている。比べられるのは、上葛木の集落を間においた夏焼地籍のよく似た地形である。そこは、切掛川の谷口の左岸が顯著な段丘状の高まりをみせて、南東向きに傾斜している。それは、こちらの扇状地の右岸側が北西にゆるゆると傾斜するのに對峙するかのようである。規模もほば等しく、水田と畑になっている。ここは周知の遺跡であって、縄文時代、平安時代、中近世の遺物が採集されている。⁽²⁾

その夏焼の高所から眺めれば、坂平はあたかも釜無川左岸の段丘のように見える。もちろん、坂平にも夏焼にも釜無川の堆積層は認められないから、河岸段丘ではない。その基盤は、八ヶ岳の砂礫層とその下の火砕流堆積物である。したがってこれらの地形は歴とした山麓の一部であって、構造線に沿う地下活動のなせるものと考えられる。夏焼の場合、切掛川の谷口は北西側に「く」の字形に折れ曲がっている。糸静線に沿って北西方向に地盤が押し上げられたと考えれば、これらることは説明がつく。

下葛木断層

この辺りでは、より顯著な活断層の存在が知られている。いわゆる下葛木断層である。百々川のたもとから旧甲州街道はゆるやかな上り勾配となる。この辺は扇端部で、旧道の左手には岩ごつの草地が細長く残され、石仏や供養塔がいくつも並んでいる。坂を上りきる辺に「子乃神」の碑が立っており、同所には町の有形文化財に指定されている「應安五壬子年 十二月初日」の年紀を刻んだ大形の宝篋印塔の基礎石の破片と隅飾りの破片がある。そこを過ぎて鹿ノ沢川の現河道の手前あたりにさしかかると、道路から扇端側が2メートルほど小高くなっているのに気づく。

改めて見回すと、河道に沿う甚だ緩やかな扇状地の中軸面がここで尻上りになって土壘状の高まりをなしている。一部は開田により切り取られているが、巨岩の露出する石間の草地で、その幅はおよそ30メートルある。そして水田の切り盛りはあれ、扇端側はまた緩やかな傾斜の平坦面にもどって、その先は、国道の法面として固められているが、比高差15メートルの急崖となって切れ落ちる。国道からは、さらに10メートル余りの高低差で釜無川の現河床に達する。

振り返ってみれば、子乃神の碑の辺りも一番低い水田との間に同程度の高低差がついており、坂に沿う岩ごつの草地も一連のものであることが知られる。

逆断層によるとみられるこの隆起は、河道を隔てた下葛木の真福寺の境内に連なる。境内の裏側には、鹿ノ沢川の旧河道の名残ともみられる窪地が入っていて、断層線と同じ南東方向に抜けている。これが、下葛木断層とよばれる活断層である。⁽³⁾

この続きは、県境をなす甲六川左岸の松木平にみられる。そこも夏焼によく似た段丘状の地形であるが、釜無川に削られてか、規模は小さい。釜無川を眼下にする縁には、やはり高さ2メートル強、幅25メートルほどの石ごつの土壘状の高まりが連なっている。平成7年(1995)、

調査の経緯

ここで通産省地質調査所による活断層のトレンチ調査が行なわれた。やはり縄文時代の遺跡があるらしく、黒曜石のかけらが散見される。活断層調査の折に、中期初頭の土器片と凹石が露出していた。

これより下流、釜無川の左岸は、延々と並崎まで続く七里岩の切り立った崖となっている。昭和57年（1982年）8月初めの台風と集中豪雨による大出水で国界橋下流の釜無川河床が異常な洗掘を受け、「ミニ・グランドキャニオン」とよばれる峡谷地形が出現したことは、まだ記憶に新しい。ふだん見ることのできない地層と糸静線をはじめ、それに平行する断層群が露わになった。

下葛木断層はおよそ8000～6000年前と5000～4000年前に活動し、最新の活動は1200年前以降だという。

坂平の扇状地には、20～15万年前とされる古八ヶ岳の活動期以降の、糸魚川一静岡構造線に沿うさまざまな地盤の動きが秘められている。

谷筋の山麓

さて前後するけれど、この辺りは西北から東南に流れる釜無川の谷筋であり、旧甲州街道の国道20号線に沿って集落が連なっている。坂を登った山麓部とは趣を異にした風景である。前面を構造線の断層崖である前山がふさぎ、後背は山麓崖面の山林で、一部は田畠となってい。谷筋はわりと浅く、東南に開けて富士が遠望される。西北側に潮上する川筋は、立場川との合流点まで3.5キロメートル。そこで大きく左折するので、その向うの低い山で空は浅く限られている。

こうしたなかにあって、坂平地籍はきわめて特異な位置を占めている。すなわち、鹿ノ沢の河道あたりに立つと、扇頂部に口を開いた沢筋の向うに、福笠山と西岳、権現岳から三ツ頭の峰々を難なく見ることが出来るのである。山麓面へ上の山もここでは妙に低くて、上の山麓面に居る感覚とさしたる違いがない。無理もない。坂平にあっては、その上の山麓端の標高が810メートルと低く、扇頂部は750メートルで、その高低差は60メートルしかない。扇端部でも80メートル差である。上葛木の集落へ下るつづら折りの標高差120メートルの半分なのである。

釜無川の谷筋にあっても八ヶ岳の山麓。これこそ、坂平地籍に固有な地理、土地感覚といえよう。

二、調査の経緯

水田の改変

上葛木区では、坂平地籍の土地改良整備事業が採択されたことを受け、平成6年に土地所有者による整備委員会が発足した。そして平成8年（1996）の秋口、5.3ヘクタールを対象に団

遺跡の環境と調査の経緯

体営土地改良総合整備事業として着手した。鹿ノ沢の河道に沿う農道より右岸側、旧甲州街道に沿う活断層線より上手側の範囲である。事業に先立ち、町の土地改良係から埋蔵文化財の有無について照会があったが、現地を確認したのち遺跡はないだろうと伝えた。

応安の宝篋印塔の破片は明治時代、鹿ノ沢の大溝水でできた氾濫原を復旧した際に掘り出され、ここに集められたと伝えられている。そこかしこに大きな岩塊が頭を出しているうえ、水田の石積みにも地山の巨石が組み込まれているので、こんな岩ごつの扇状地に遺跡はあるまいと判断したのである。ことによると宝篋印塔と同時代の石造物かなにか出てくるかもしれないが、という程度の思いにとどまった。

遺跡の露出

ところが、工事が始まってしばらく経った9月中旬、文化財係長の小林公明が現場を見に行き、耕土を剥いで山に盛った田を見回ったところ、黒曜石のかけらが比較的みられ、いくつかの土器片や石器も出ているのに気付いた。扇頂から河道側は総じて砂礫混じりの黒色土で、遺物は少ない。子乃神の石碑のあたり、断層線沿いの低い田は、水が滲み出てじくじくしていた。

また、1494番田に、見るからに新しい感じのする黒色土のつまつた円形の穴が30ほど群集しているのを認めた。そこで、とりあえずこれらを掘ってみることにした。つまっている土の状態からみて中世から近世頃の貯蔵穴かと思われるが、時代の決め手となる遺物は一片も見当たらなかった。

それから一月半ほど、新たな耕土の剥ぎ取り工事は中断されていたが、10月下旬になって耕土剥ぎが山側へ移ってゆくと、水田下は安定したローム層で、1477番田に土目の古そうな縄文時代の円形住居址の埋没が露わとなった。早速これを発掘したところ、前期初頭ころのものと判明した。

そしてこれにとどまらず、数日のうちに次々と縄文時代の方形ないし長方形住居址の埋没が確認され、出土した土器片から前期前葉の中越期の集落遺跡であることが明らかとなった。加えて、平安時代の住居址も発見された。例の中・近世頃の穴も多数ある。急遽、地元の委員会に連絡して、土地改良係と協議したが、今になって工事を中断するわけにはゆかず、工事と並行して可能な限りの発掘調査を行なうほしかなかった。11月初旬、遺跡の発見届けと発掘通知を提出し、必要経費の予算化を講じつつ緊急の調査に入った。この秋は、別に大花遺跡の発掘作業が続いており、その目鼻がついてからのことだった。

緊急の発掘

発掘期間じたいが厳冬期に入る12月末までの2ヶ月足らずの猶予しかないうえ、すでに進行中の工事日程の大枠の中で行なわなければならないため、もとより全面的な調査はできない。施工業者の好意によって部分的に盛土や表土を除去してもらい、その限られた範囲を発掘した。だいたい様子の知れた中・近世のものと思われる穴は、掘らないこととした。



第3図 坂平地籍測量図 (1:3,000 平成6年 アルプス測量株式会社作製)

遺跡の環境と調査の経緯

当初、15~20軒ほどと推定していた前期の住居址はさらに増えつけ、予想をはるかに上回る大集落であることが毎日確かとなってきた。11月17日には見学会を催し、地元を中心に120名ほどの参加者に現場を見ていただいた。12月半ばを過ぎてからは、主柱穴以外の穴や周溝の発掘も断念せざるをえなかった。その分、一軒でも多くの住居址を掘ることに人手を回した。

これまでと、現場を撤収したのは暮れもおし迫った12月28日だった。遺構面が一晩に3センチ厚も凍る季節になっていた。年明けの1月中旬から2月初めの間も、工事の合い間に縫ってぎりぎりまで立ち会い調査を行なった。

およそこのような状態で、最終的に調査または確認した前期の遺構は、住居址63軒・建物址6棟・小堅穴15基にのぼった。だが、発掘面積は、推定される集落範囲のおよそ5分の2弱に過ぎなかった。ほか、平安時代の住居址6軒を発掘し、中・近世のものと思われる小堅穴は、91基を確認した（第4図）。

それでも非常事態というべき調査が遂行できたのは、地元の今井嘉幸委員長をはじめとする整備委員会と地主の方々のご理解、ならびに余裕のない工事日程の中で最大限の表土取りをしていただいた北沢興業のご尽力に負うところがきわめて大きかった。記して感謝申し上げる次第である。

調査体制

主体者	富士見町教育委員会 教育長小松善示
担当者	小林公明
調査・測量	樋口誠司 小松隆史 吉岡博子 吉川哲也 小池敦子 田中 基 島田哲男 五味尚文 小林美知子
発掘作業	小平辰夫 小林ノリ子 小林道子 小林やす子 名取 武 名取武史 平出卓爾 平出虎一 平出みね子 藤森正幸 武藤きのえ 前嶋岳彦 吉川浩二 エンジェル賢治

注

- (1) 武藤雄六氏による
- (2) 平成14年に土地改良事業に伴って発掘した。富士見町教育委員会「夏焼遺跡」 2003
- (3) 信濃毎日新聞社編集局『信州の活断層を歩く』 1998

第二章 繩文時代の遺構と遺物

第一節 遺構

一、遺構の概観

坂平遺跡では縄文時代前期の初頭から前葉の住居址63軒と、6棟の建物址、15基の小竪穴が発掘された。ごく一部分の発掘にとどまったもの、断面の確認のみにとどまったものもあるが、下吉井期から中越期にかけての大規模な集落であることが判明した。集落は鹿ノ沢によって形成された扇状地の側縁に占地し、およそ長径170m、短径90mの範囲に広がる（第5図）。

発掘の経緯に記したような事情により、調査できた面積は遺跡全体のおよそ5分の2弱と考えられ、当初は単純計算で180軒を上回る住居址が存在するのではないかとも推測された。しかし遺跡の北東側は急傾斜の山裾となり、水田の耕土を除去した状態では、沢が北から入り込んでいるのが認められ、遺構の落ち込みは確認できなかった。水田の下土手側に遺構が埋没していた可能性は高いが、おおむねこのあたりで集落のはずれとなるのではないかと思われる。

63軒の住居址のうち、初頭の下吉井期および花積下層期が7軒、下吉井期から前葉の中越期への移行期が18軒、中越期が31軒で、不明なものが7軒である。

下吉井期の住居は、東端の花積下層期の61号址と西端の1号址を除けば、おおむねまとまっている。下吉井期から中越期の移行期には、下吉井期の住居域を中心に集落を拡大、中越期にかけておおよそ二つの環状をなすように広がる。

建物址は下吉井期には見られず、移行期から建てられるようになり、いずれも住居域の内側に位置する。

小竪穴は住居域に重なるようにあり、その分布は一定のまとまりをもたないようだ。

住居址はその多くが隅丸方形か隅丸長方形ないしは方形か長方形で、しっかりした四つの主柱穴を有し、地床炉をもつのが一般的である。また、ほとんどの住居の床面に、鏡餅状の扁平石、あるいは平板石が残されていることも特徴的である。

また、63軒の住居址のうち12軒が焼失住居であり、時期不詳の1軒を除き、いずれも移行期から中越期の住居址である。うち9軒には炭化材や焼土が残されていた。これらは集落全域にわたって、距離を置いて点在しており、一軒の家からの頬焼とは思われない。また、一つの集落の中で、これだけの数の焼失住居がある事例はあまり聞かない。

縄文時代の造構と遺物

以下、これらの造構について住居址、建物址、小堅穴、黒曜石の集積の順で記述する。なお、小堅穴や一部の住居址は図版の関係上、ほかの造構と同一版に図化されているものもある。また、住居内出土の遺物、特に住居址の床面に据えられている鏡餅状扁平石など、大形の石器や土器については、できる限り図化した。小形の遺物のなかには、出土地点のみの記録にとどめたものもある。これらの遺物にも、遺物図版と共通の番号をふってある。

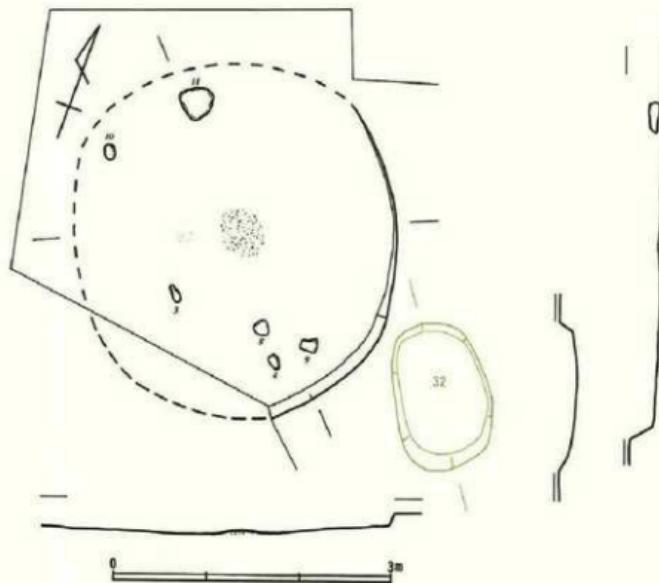
二、住居址

第1号住居址（第6図）

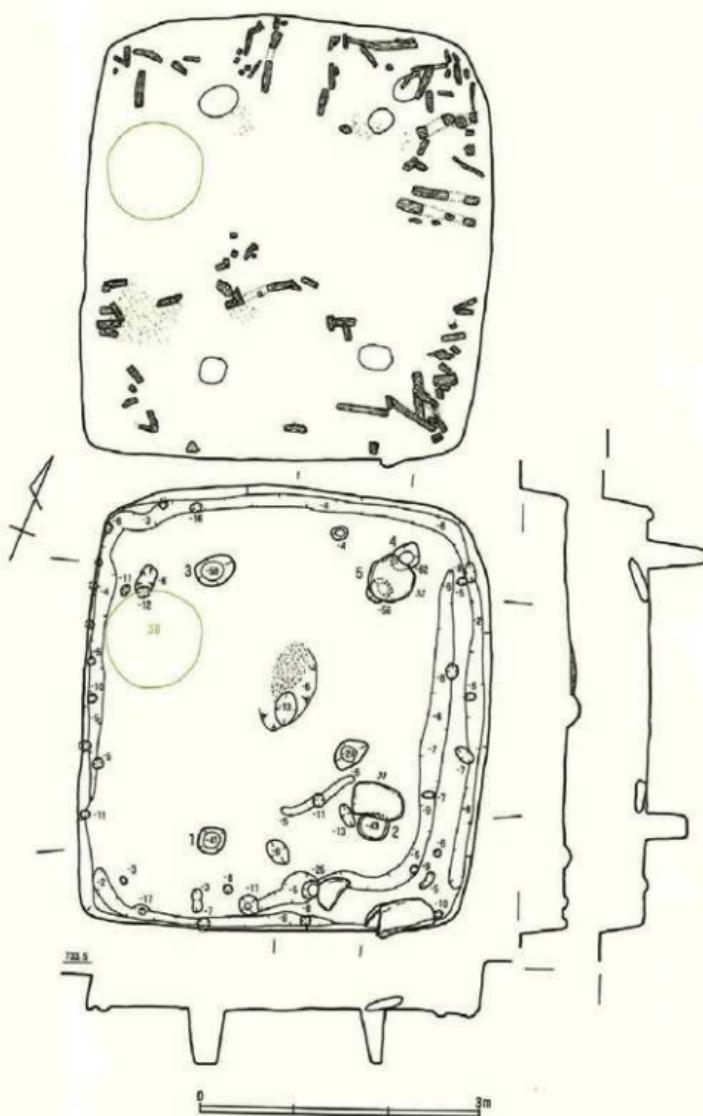
集落の西縁で発見された。開田時に上部と西壁を削られているが、ほぼ円形の住居である。堆土は木炭粒を多く含む暗褐色土。

柱穴は確認できなかった。ほぼ中央に円形の地床炉があり、その南西の床も焼けている。

床面の磨り石10と大形の平板石11のほか、棒状藤器の3、両端が敲かれた安山岩疊の4、小形の鏡餅状扁平石の8、鏡餅状扁平石の破片9が床面近くから出土している。



第6図 第1号住居址 (1:60)



第7図 第2号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す

縄文時代の遺構と遺物

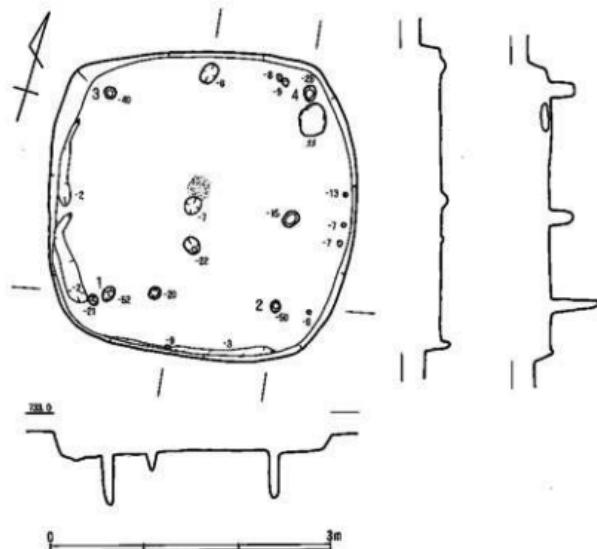
少ないながらも出土した遺物から、下吉井期とみておきたい。

第2号住居址（第7図）

北の角がやや円みをおびた、南東-北西軸の方形住居。南東が入り口であろうか。埋没後に堆土上面から中・近世の小竪穴38号が掘り込まれている。堆土は木炭混じりの暗褐色土。本住居址は焼失住居で、堆土下部には炭化材と焼土が多く残っていた。炭化材は栗とみられる直径5~10cmほどのもので、壁際に多く、部分的に住居中央から放射状に埋もれていた。

主柱穴は1~4であろう。柱穴5は鏡餅状扁平石32によって覆われていた。重複する周溝から、本住居址には拡張があったと考えられる。内側の周溝は柱穴1・2・3・5に伴うものかもしれない。南西壁際の周溝には、ほぼ等間隔に小穴が穿たれていた。住居の主軸線上やや奥壁よりに、同方向に長い楕円の地床炉があり、わずか皿状にくぼんでいる。この炉は入り口側に小穴を伴う。

遺物には、柱穴4に立っていた柱に立てかけたかのように出土した鏡餅状扁平石32のほか、柱穴2の縁に据え置かれている鏡餅状扁平石31がある。また東角の南壁には、板状の安山岩が立てかけられていた。



第8図 第3号住居址 (1:60)

本址は前期前葉の中越期であろう。なお、炭化材からは、 $5,940 \pm 80$ (3,990B.C.) という放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値が得られた。

第3号住居址（第8図）

一辺が3~3.5mの小形の住居。南南東-北北西軸の隅丸方形で、南側が入り口だろう。暗褐色の堆土で、水田の地形直下、検出面すれすれから礫群がみられた。これは縄文時代中期によく見られる礫・遺物溜まりに似ており、礫の中に多くの遺物が混じっている。

主柱穴は1~4で、4を除くほかの主柱穴は細く深いため、材の打ち込みも考えられる。床は平らで地山礫の露出はなく、周溝は西と南の壁際のみにみられる。中央にはほぼ円形の地床炉がある。

北角の床面に輝緑岩の鏡餅状扁平石55が平らに据えられていた。遺物はあまり多くない。

本址は中越期である。

第4号住居址（第9図）

新旧2時期が切り合う住居址。床面の高さに差はない。焼土などから新旧を判断した。

旧住居址 隅丸方形で、南南東-北北西軸の住居。東角付近に最大15cm厚の焼土が堆積し、その下には炭と焼土混じりの黒色土がみられた。また、炭化材が壁に沿って横たわっており、このことから旧住居は焼失住居であることがしられた。

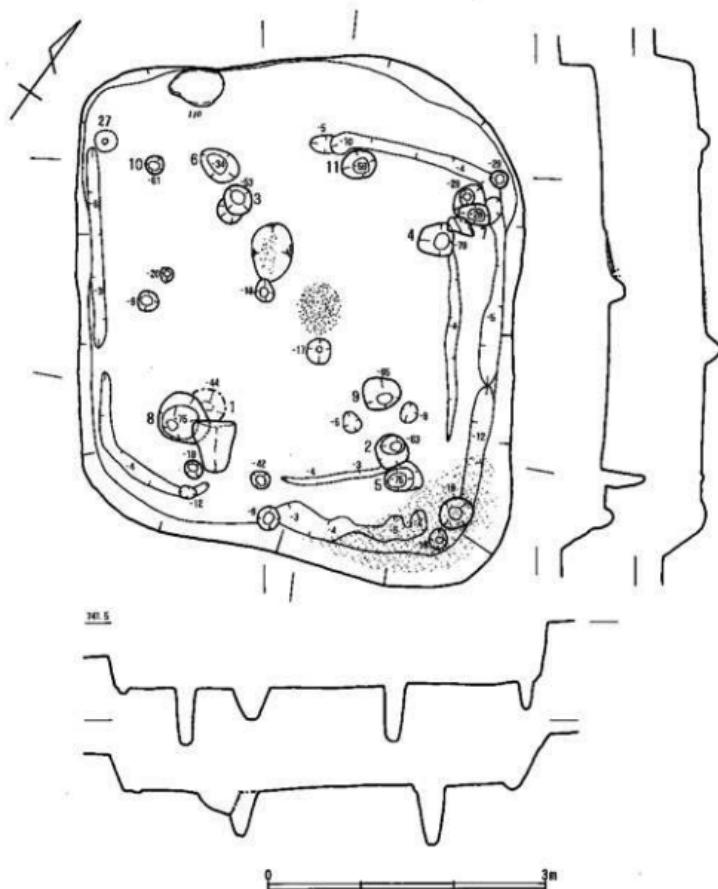
主柱穴は1~4だが、それぞれの外側に対応する柱穴5~8（8は新住居と共通）があり、主柱穴の添え柱があったか、もしくは住居の拡張があったのかもしれない。柱穴4・5は炭・焼土混じりの黒色土で埋まり、柱穴1はロームで蓋をされて新住居の貼床となっていた。東半に周溝がめぐっている。主柱穴で囲まれた中央に堅く赤変した地床炉があり、南側に小穴を伴う。地床炉の向きや位置から、こちらが入り口だと考えられる。

新住居址 旧住居より13度ほど東へ軸が振れる、南東-北西軸の隅丸長方形住居。旧住居と同様、南東側が入り口になるものと思われる。炭混じりの暗褐色土。南東壁より柱穴11にかけての堆土中に礫溜まりがある。また、焼失家屋である旧住居の焼土や炭の層を切って作られているため、旧住居の焼土層が東角付近に残っている。

主柱穴は8~11で、北西側を除く壁際には周溝がめぐる。主軸線上やや奥壁よりに地床炉がある。炉は同方向にやや長い楕円で、若干皿状にくぼみ、南側に小穴を伴う。この炉床と小穴は露出した地山礫によって区切られている。旧住居に比べるとやや柔らかい。

堆土中の礫溜まりは、礫群中から堆土上面にかけて遺物が多く、この礫群の下、床面までは少なかった。西角近くに底を欠かれた土器27が伏せられており、土器の口縁は2cmほど、ローム床にくい込んでいた。これの北、奥壁西角よりの床面に鏡餅状扁平石110が平らに据えられていた。

本址は中越期であるが、遺物から新旧の時期差を確定するにはいたらなかった。

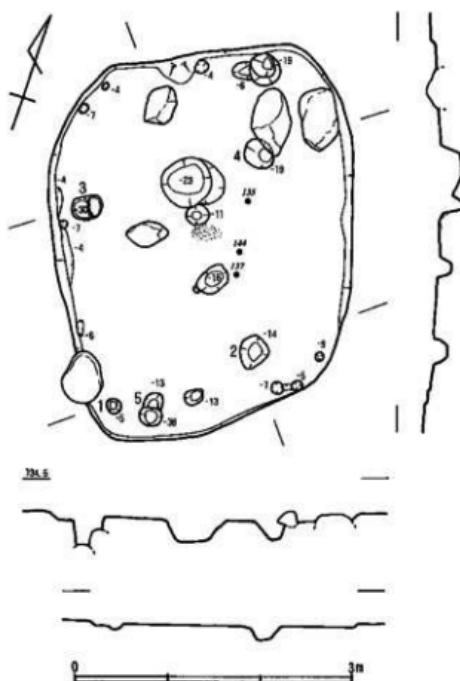


第9図 第4号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す

第5号住居址 (第10図)

歪んだ隅丸長方形の住居で、南南東-北北西軸。南南東側が入り口であろう。開田の際に上部を削られて浅い。

主柱穴は1～4と考えられるが、柱穴1より柱穴5の方が深く、しっかりしている。床には大きな地山礫がいくつも露出している。奥壁には一部、スロープのような傾斜が認められた。



第10図 第5号住居址 (1:60)

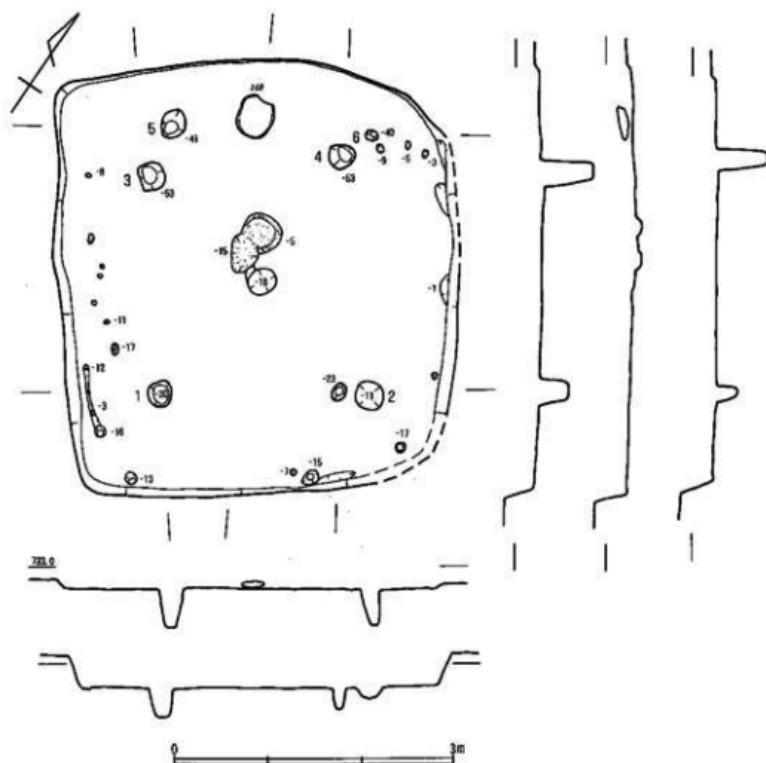
周溝は西壁際にとぎれとぎれにみられ、奥壁際には小穴がある。炉はほぼ中央にあり、堅い。奥壁側に小穴を伴う。

柱穴3と5の中には、丸石のような礫が入っていた。柱穴2の北西床面には面取りしてある扁平な安山岩礫137が、その北には、床に接するように磨り石135と、拳大の安山岩礫144が残されていた。遺物の出土は少なかった。また、1487番田の西畦で発見された鏡餅状扁平石142は本住居址に属するものである可能性が高い。

本址は中越期である。

第6号住居址（第11図）

西と南の角がしっかりした方形住居で、南東-北西軸。奥壁側は田の石積みの下になっていたが、これを除去して全体を確認した。しかし、この石積みの下、北西壁上部は削られている。東壁も開田時に部分的に削られていた。

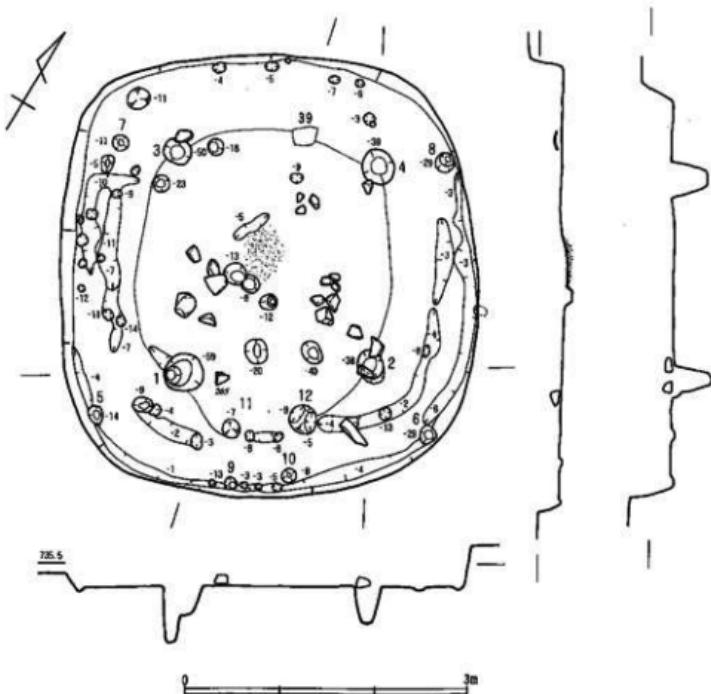


第11図 第6号住居址 (1:60)

主柱穴は1～4だが、5・6も深くしっかりしている。床面は、おおむね主柱穴に囲まれる範囲に地山礫が多く露出し、凸凹している。周溝と小穴はとぎれていてつながらない。炉は主軸線上やや奥壁よりにあり、三つの浅く丸い底の穴を伴う。それぞれ底が焼けており、土器を据えるための穴とも、それぞれが炉であるとも考えられる。入り口は南東であろう。

主軸線上の北西壁際の床上に鏡餅状扁平石168が平らに据えられていた。遺物はそれほど多くない。

本址は、下吉井期から中越期への移行期の住居址である。



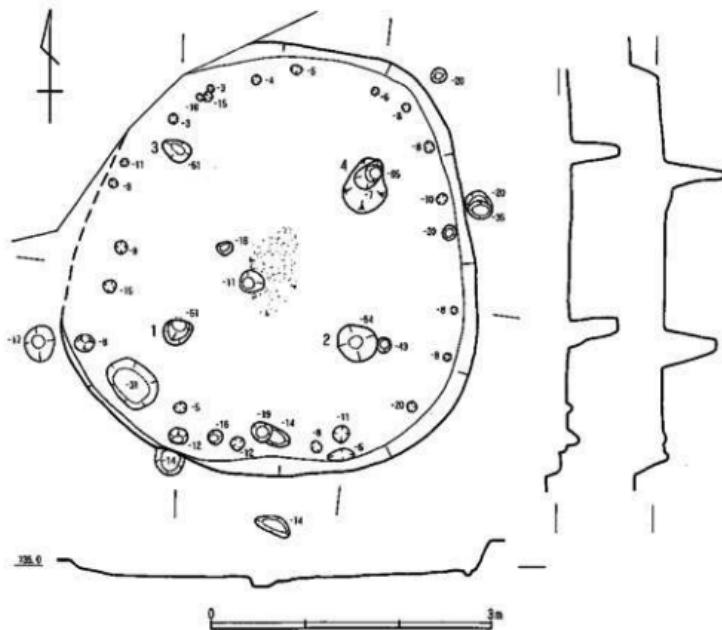
第12図 第7号住居址 (1:60)

第7号住居址 (第12図)

胴が張って円みをおびた隅丸方形住居で、南東-北西軸。北東壁は田の土手下に入っていて遺存状態がよかった。

主柱穴は1～4で、それぞれの外側に拡張に伴うとみられる柱穴5～8がある。また南東側に何らかの入り口施設の存在を思わせる9～12があり、ここから主柱穴1～4に囲まれた範囲の床面がよくしまっていて堅い。周溝は壁際とその内側の2条が認められる。ただし北西壁側にはみられない。炉は住居のはば中央、奥壁よりにある。主軸方向にやや長い楕円形で、小穴が三つ隣接する。炉や床の堅くしまった面のあり方から、南東側が入り口であろう。

床面から数cm浮いて砾が散在していた。その中で鏡餅状扁平石の破片265が床面より2cm上で出土した。また東角よりの一帯の床上で磨り石・凹石や丸石のような砾が集中して出土している。入り口壁際の柱穴9の脇でも磨り石が立った状態で出土した。さらに柱穴1と2の床面



第13図 第8号住居址 (1:60)

レベル直下にはそれぞれ2個と4個の拳大から幼児の頭大の礫が埋まっており、柱穴6の上面からは凹石233と円柱状の安山岩礫239が並んで出土した。北西壁よりの床面には土器39が横たわっていた。遺物は比較的多く残されていた。

本址は、下吉井期から中越期への移行期の住居址であろう。

第8号住居址（第13図）

7号住居址に隣接して検出された。南-北軸の円形に近い隅丸方形住居で、北が狭い台形状。西側は削平され、立ち上がりがはっきりしない。堆土は黒褐色で、床から10cmほど浮いて幼児の拳大～大人の拳大の礫が集石状にまとまっていた。また20cmほど浮いて大形の安山岩礫が2個、立石のように立てられていた。

主柱穴は1～4で、1～3と2～4の延長上の南壁際にそれぞれ2個の小穴があり、入り口施設の存在を思わせる。周溝はみられないが、壁際に小穴がめぐる。炉は主軸方向に長い楕円だが、よく焼けているわけではなく、焼土が散っている程度のものだった。西に小穴を伴って

いる。

遺物が多い。南西隅の穴より石錠342が、柱穴2の底から10cmほど上から磨り石が出土した。堆土中の遺物も多く、黒曜石のチップが多量に発見された。また北壁中程の隙から赤チャートの有肩諸刃石器440が出土している。

本址も7号址同様、移行期の住居址である。

なお本住居址周辺には柱穴状の穴が多く検出されているが、本址に伴うものかはつきりしなかった。

第9号住居址（第14図）

8号住居址の南西に隣接する、南東-北西軸の隅丸方形住居。西角を平安時代の4号住居址に切られている。この平安4号址とほぼ重なる1号建物址を埋めているものとみられたが、土器からはこの新旧関係を確定することができない。暗褐色～黒褐色の堆土で、床面近くに焼土が広がり、その上に炭化材、さらにその上に礫が遺存した。焼失住居であることがしられる。

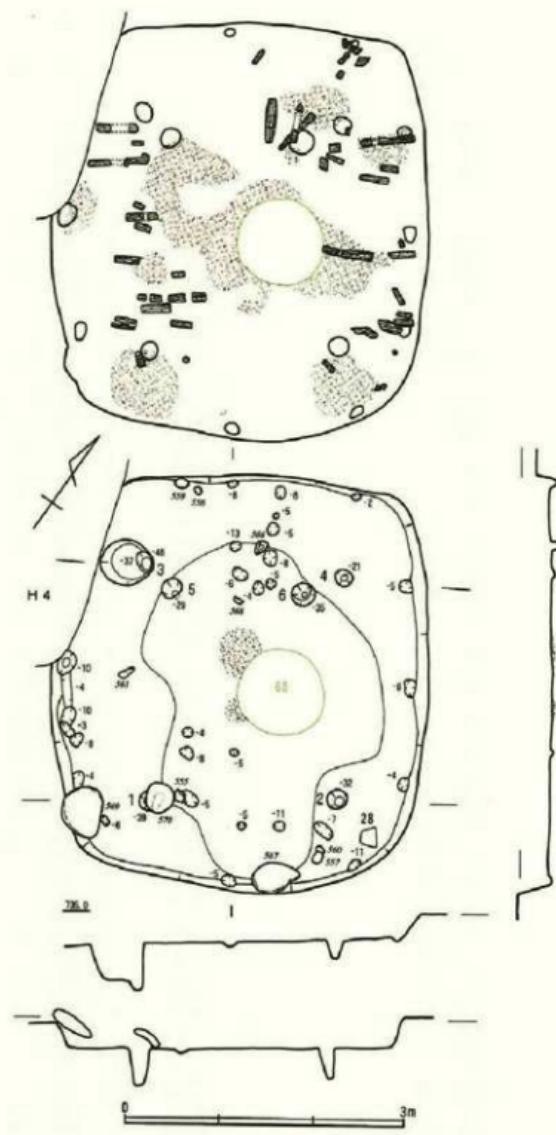
炭化材は栗とみられ、直径は10cmほどで、最大のものは長さ50cmであった。なかには半割りと思われる材もあった。

主柱穴は1～4だが、柱穴3・4の内側に一対の柱穴5・6がある。主柱穴に囲まれる床面はしまって堅く、南東はこの面が壁まで広がる。周溝はみられない。南西壁際のものも、周溝というより連続する小穴といった方が適當だと思われる。これらを含め、壁際には等間隔で小穴が並び、これらに対応する炭化材がみられた。このなかには、穴の上に載り、床から壁にそって立ち上っているものもあった。また、ほぼ主軸線上の北西壁から炉にかけては、小穴が列をなしている。炉は、主軸線上の住居ほぼ中央に二箇所あるが、中・近世の小堅穴68号に切られている。床の堅くしまった面と炉の様子から南東側が入り口と見られる。

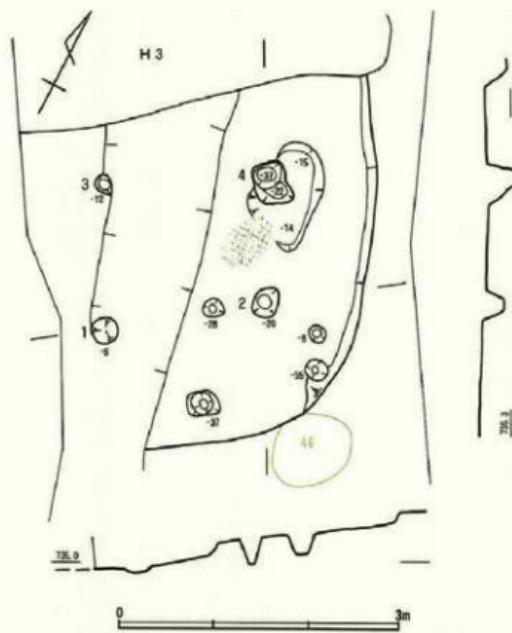
入り口と想定される部分と南角の壁に立てかけるように、鏡餅状扁平石567と569が残されていた。567の脇には大形の磨り石560と、粗形凹石557があり、その近く東角際に床面から若干浮いて土器の胴部28が横たわっていた。この土器の内部には焼土と炭が多量に入っていた。また、柱に立てかけてあたらしく、磨りうす570が伏せられたように柱穴1を覆っていた。この傍らに粗刃穀器555があった。柱穴1と3の中間床面からは大形の棒状礫561が出土している。柱穴6内からは、有肩刃広石器572と搔器573が出土した。なおまた、炉から奥壁にかけての小穴列の上の堆土中には礫が直線的に並んでいた。この礫の列は床の小穴列と一部で重なる。幼児の拳大～人頭大の礫が12個あり、この中には磨りうすの破片566や鏡餅状扁平石の破片568が含まれていた。

本址は中越期に属する。

炭化材や小穴のあり方から、この時期の住居の上屋構造を考える好例だといえるだろう。



第14図 第9号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す



第15図 第10号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す

第10号住居址（第15図）

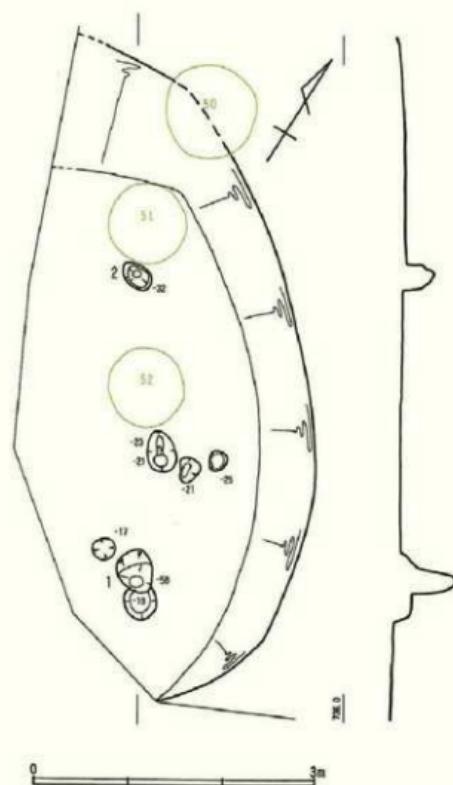
平安時代の3号住居址に北西壁を切られ、南西壁は調査区外で開田時に削平されているうえ、石積みによる搅乱も受けしており、床面の残りは悪い。残る北東壁も削られて低いが、この輪郭から本址は南東-北西軸の隅丸方形住居であると考えられる。

主柱穴は1～4。ロームの床面は北東から南西に傾斜している。柱穴2と4の間に薄い褐色土混じりの焼土がみられたが、床面より10cmほど高く、炉とは考えにくい。炉は搅乱部にあったと思われる。

本址の遺物は前期初頭の下吉井式を主に前業の中越式が若干混じっているが、下吉井式の土器が圧倒的に優勢であり、下吉井期の住居址としてよいだろう。

第11号住居址（第16図）

10号住居址の南東に検出された。暗褐色の堆土。壁の立ち上がりがはっきりせず、不整形な住居である。南西側は田の石積みによって搅乱を受けるとともに、下手に接する1494番田の開



第16図 第11号住居址 (1:60)

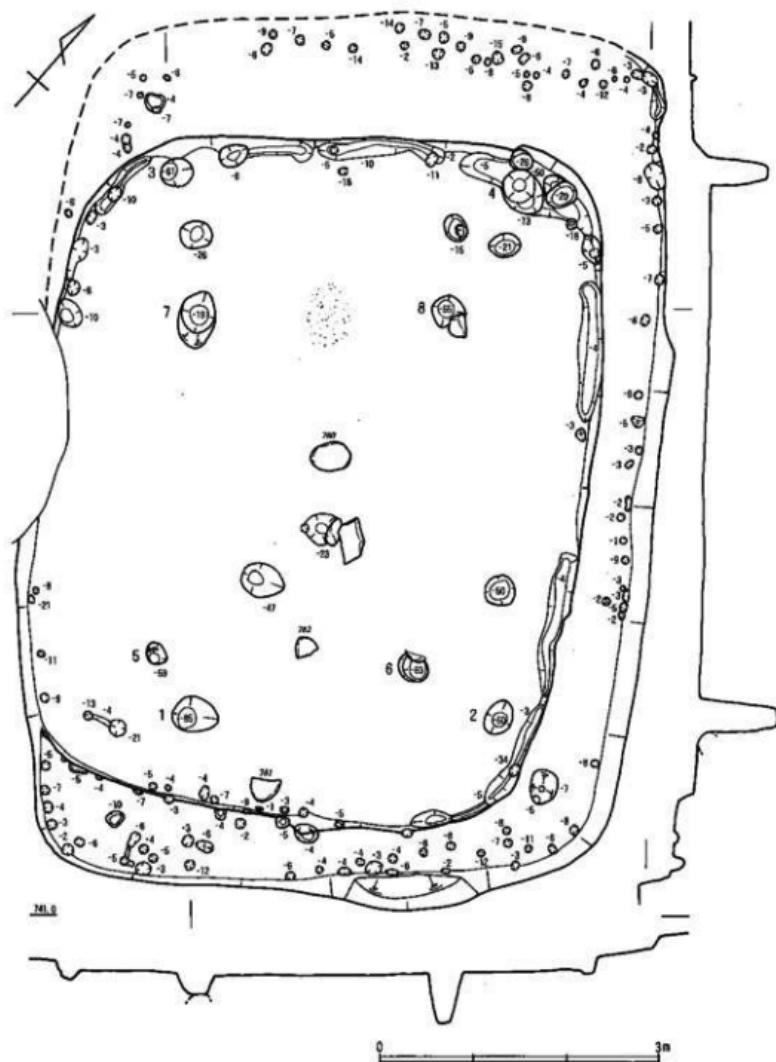
田のため大きく削平され、1494番田では本址に係わる遺構は発見されなかった。また、本址は中・近世の小竪穴群の一角にあり、50・51・52号に切られている。

1・2が主柱穴だと思われる。

出土した土器片のほとんどが、下吉井期のものである。この時期の住居址であろう。

第12・13号住居址 (第17図)

1484番田で他の住居より大きな暗褐色土の遺構の落ち込みを検出した。12号住居址として掘り下げてゆくと、内側にもう一軒重なり合う住居址が確認できたので、これを13号住居址とした。堆土中に認められた集疊が13号址の輪郭の内側に堆積していること、12号址の床が13号址



第17図 第12、13号住居址 (1:60)

縄文時代の遺構と遺物

を覆っていないことなどから12号址が古く、13号址が12号址を切っているものと判断した。しかし、13号址の存在が確認されたのは調査が大分進んでからのことだったので、遺物は両住居に分けることが出来なかった。

第12号住居址 推定される長軸が9mを超える大形の住居址。南東-北西軸の隅丸長方形。13号址に相似形に切られ、床の大部分を掘り抜かれている。北と西の壁の一部は開田の際に削られ、西壁の中程の一部は石積みによって破壊されている。主柱穴1~4はいずれも深く、しっかりしている。周溝はみられず、壁に沿って小穴が並んでいる。失われている北西側の輪郭も、この小穴の並びからおおよそ推測することが出来る。床は13号址によってほとんど失われているが、残された墻際の床面は堅くない。

第13号住居址 西壁の一部を重ねて、12号址の中にすっぽりおさまる、ほぼ同軸の隅丸長方形住居。12号址より一回り小さく、長軸7.5mほどだが、他の住居に比べれば格段に大きい。

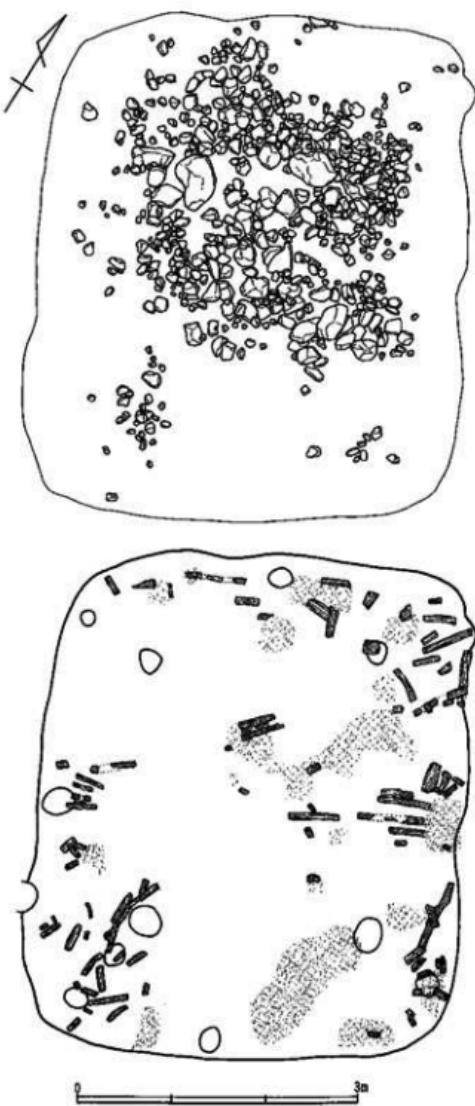
主柱穴は5~8で、北と東の壁際には周溝もめぐる。柱穴7・8の間に細かな焼土粒がわずかに散る程度の部分がある。ロームは焼けていないが、床には他にしっかりした焼土ではなく、これを本址の炉と考えたい。柱穴の間、主軸線上の床は拳大~人頭大の地山疊が露出し、ゴツゴツしている。

堆土は暗褐色土で、小砂利のような地山石がかなり多く混じる。とてもよくしまっており、堅い。堆土中に集疊があり、焼土も三箇所に認められた。このレベルからは土器（第321図1~3）のほか、磨製石斧704や石庖丁713、水晶製の有肩鍔刃石器820など多くの遺物が出土し、鏡餅状扁平石781・782もこの堆土中から出土した。また、12号址の床面レベルでは、本址の中央部に径4mほどの黒色土のレンズ状堆積が認められた。この中にあった焼土の直下に鏡餅状扁平石780が、その南東には板状石があった。これは13号址床面より20cmほど高い位置である。

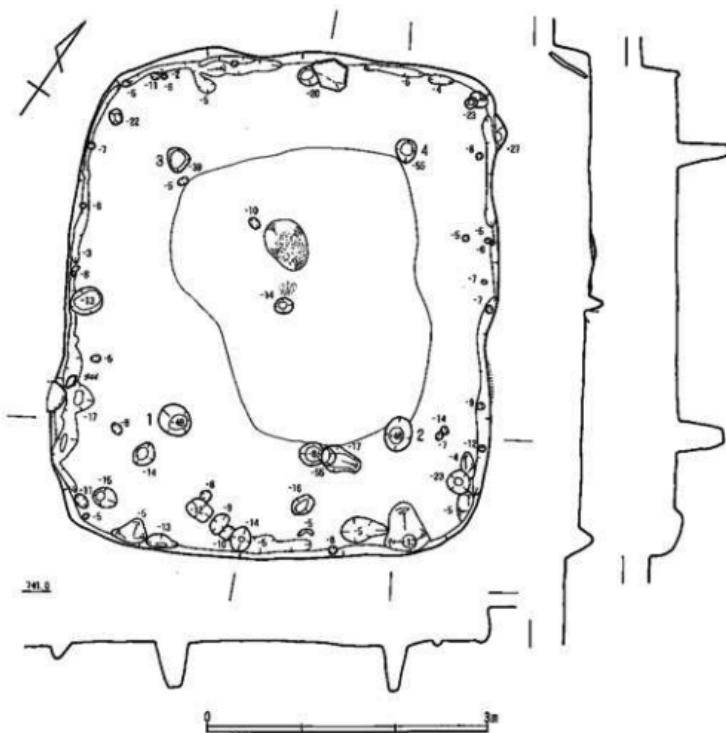
12・13号址出土の土器は大きく分けて、中越式と諸磯b式・c式の3時期に分けられる。13号址から出土した土器の8割以上が中越式で、同期の纖維を混入する無文の土器と前期初頭の下吉井式の纖維土器が若干出土している。いっぽう獸面突起と諸磯b式・c式の破片は、12号の確認面から13号址を覆っていた焼土を含む集疊の上面に見られただけで、この下からは出土していない。そして12号址からは時代を判定できる土器が出土しなかった。このことから12・13号址は中越期での新旧としてとらえておくのが妥当と思われる。

第14号住居址（第18、19図）

12・13号住居址に並んで検出された。主軸方向もほぼ同じで、12号址と南東側でわずかに切り合っているが開田時の削平のため、新旧関係はつかめなかった。12・13号址ほどではないが、一般的な住居よりは一回り大きい隅丸長方形住居。堆土上面には疊が多量にみられ、集疊をなしていた。この集疊は拳大から大人の胸ほどもある疊で構成され、北壁側より中央へ向かって傾斜している。住居廃絶後のくぼ地へ、こちら側から投げ込まれたものであろうか。集疊は楊



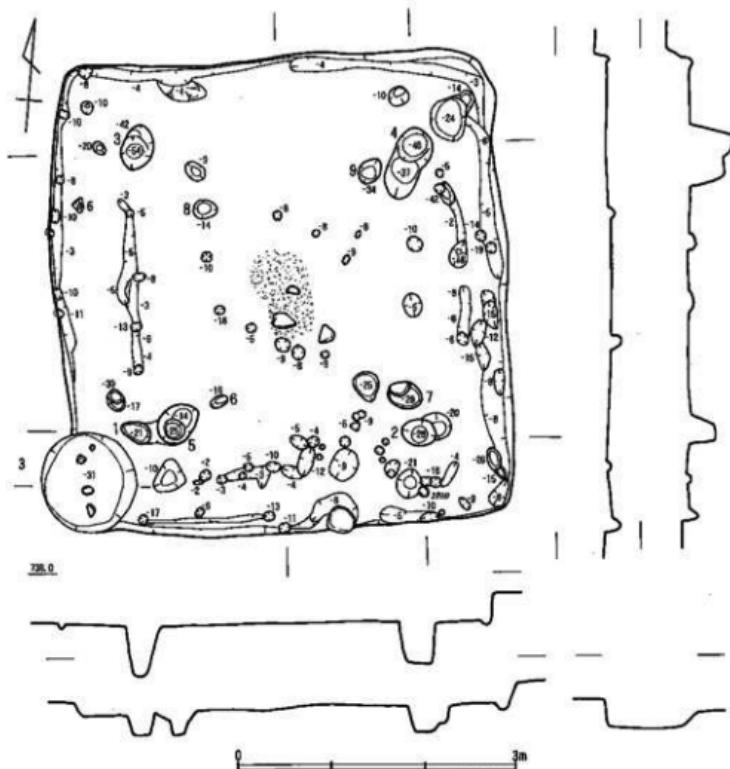
第18図 第14号住居址上面の集疊と炭化材 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す



第19図 第14号住居址 (1:60)

色土にローム粒が混じる、やや明るい色調の土で覆われていた。集謫以外の部分の堆土は柔らかい炭混じりの黒色土であり、これは16号址の堆土の様子によく似ている。また、集謫の下から炭化材と焼土が出土し、焼失家屋であることが判明した。材は栗だと思われる。直径は5～15cmで、住居中央からおおむね放射状をなし、なかには板のようなものもあった。炭化材の下には小石混じりの非常に堅い暗褐色土があり、この様子は13号址の堆土によく似ている。

主柱穴は1～4。このほかに各角と各辺中央に側柱穴がある。壁はほぼ直立しており、壁際ほぼ全周に周溝がめぐる。この周溝の中にもほぼ等間隔で小穴が穿たれている。主柱穴に埋まれた床は堅く、主軸線上に炉がある。三箇所焼土がみられたが、いずれも炉であったと考えたい。北壁よりの炉はわずかに掘りくぼめられ、南側の小さい焼土は小穴を作った。床の堅くしまった



第20図 第15号住居址および3号小竪穴 (1:60)

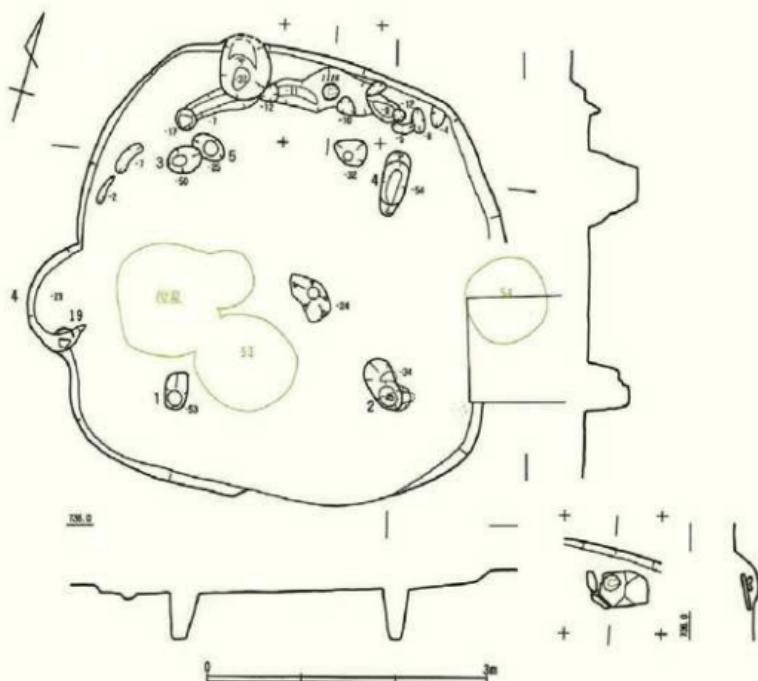
面や炉の様子から、南東壁側が入り口であったと思われる。

北壁に3cm厚の板状の安山岩が立てかけられていた。よく似た例は2号址にみられ、また壁際に平らに置かれていたものとして16号址の例がある。また、柱穴2の南東の壁よりに直径10cmほどの花崗岩があった。遺物は比較的多い。

本址は中越期に属する。なお炭化材からは、 $5,860 \pm 80$ (3,910B.C.) という¹⁴C年代測定値⁽²⁾が得られた。

第15号住居址 (第20図)

ほぼ南北-北軸の方形住居。開田時に上面を削られており浅い。南西隅に盤状の穴 (3号小竪



第21図 第16号住居址および4号小竪穴 (1:60)

穴）があるが、本址との新旧関係は不明である。

主柱穴は1～5と考えられるが、主柱穴はいずれも二つが重なっていること、内側の柱穴6～9と二重にめぐる周溝や小穴の様子から、建て替え、あるいは拡張があったことがうかがえる。炉はほぼ中央に位置し、やや主軸方向に長い。周辺には小穴が並ぶ。炉にかかるものだろうか。

南東角近くの小穴の脇に凹石1010が置かれ、柱穴3の南西脇の床上に土器6が横倒しで残されていた。遺物はあまり多くない。

下吉井期と中越期の土器が混在する。本址は移行期の住居址であろう。

第16号住居址（第21図）

隅丸方形住居では南北軸。壁が部分的に失われている。また、床の西壁近くはいわゆるロームマウンドによる捻転ロームや擾乱、中・近世の小竪穴53号によって損なわれている。北

住居址

壁上にある穴は38号住居址の南東外にある穴と接しているが、この穴は本址に伴うものではないと思われる。堆土は暗褐色～黒褐色土で、上部は検出面より2cm厚ほどが柔らかい炭混じりの黒色土であった。この土の様子は14号住居址上面の様子とよく似ている。

主柱穴は1～4だと考えられるが、住居の輪郭と柱穴の軸にズレが生じる。あるいは柱穴2・5と南北に長い4の北側、これらに加え失われている南西の床に柱穴があったと仮定すれば、ほぼ平面形に沿った軸の主柱穴を設定できよう。周溝は北壁際のみにみられる。主柱穴に囲まれた床にやや不整形の穴があり、黒色土に焼土と炭が混じっている程度の土が溜まっている。強く焼けているわけではないが、これを炉と考えたい。

ほぼ主軸線上、北壁際の周溝の一部を蓋するように2cm厚の板状の安山岩が置かれており、その直下の周溝中に中形の磨りうす1118が伏せられていた。不整形な周溝は単なる溝ではなく、埋納施設の可能性もある。

柱穴内からはそれぞれ石器がいくつか出土している。中でも柱穴2からは若干の焼土と共に有刃広石器1123と搔器1126、不定形の剥片石器1143と棒状の礫3点が出土した。また、柱穴1の南壁の際と、4の南東側の堆土中に拳大の花崗岩があったが、風化が著しく形のまま取り上げることはできなかった。遺物は比較的多かった。

本址は中越期に属する。

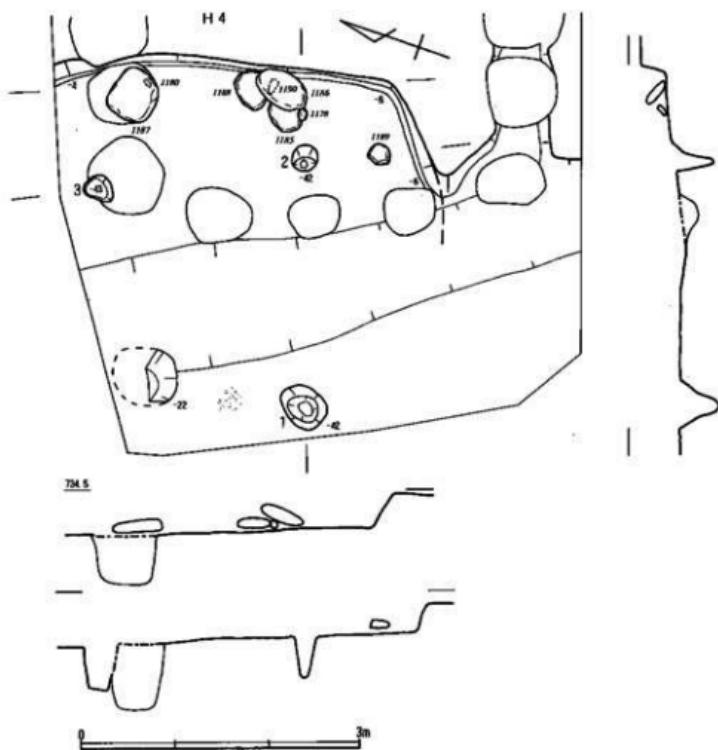
なお、西壁を4号小豎穴が切っている。堆土は本址より明るく、穴の南隣には土器19が立てられていた。堆土と土器の出土状況から4号穴が16号址より新しいと判断された。

第17号住居址（第22図）

平安時代の4号住居址の西に検出された隅丸方形住居。田の石積みや沙によって破壊されており、残りはよくない。北東壁は平安4号址の下に埋まっていた。

残る主柱穴は1～3で、これに対応する西の柱穴は調査区外にあり、擾乱により失われているようだ。ただこの場合、入り口が南東向きならば柱穴2と3の間に比べ1と2の間が長いことになるが、あるいは北側2本の主柱穴は調査区外にあるのかもしれない。または、南西側が入り口になる可能性も高いと思われる。床は擾乱のため中央部が損なわれている。炉はここにあったものと考えられる。残りのよい側の壁際には周溝がみられる。全て掘って調査することが出来なかつたが、部分的に深さを確認した。

本址で特筆すべきこととして、東壁際に発見された3個の鏡餅状扁平石と、凹石・安山岩礫各1個で構成された集積がある。床面に1185と1188が並んで平らに据えられ、この上に1186が重ねられていた。1185の南に凹石1178が載るように接している。また上の1186を取り除くと、1185と1188の間に面取りした安山岩礫1190が三つの大形の鏡餅状扁平石に守られるように置かれていた。この北側にも鏡餅状扁平石1187が平らに据えられていた。これは1号建物址の柱穴13の上である。この石も取り外してみると下から凹石1180が発見された。この1187が1号建物



第22図 第17号住居址 (1:60)

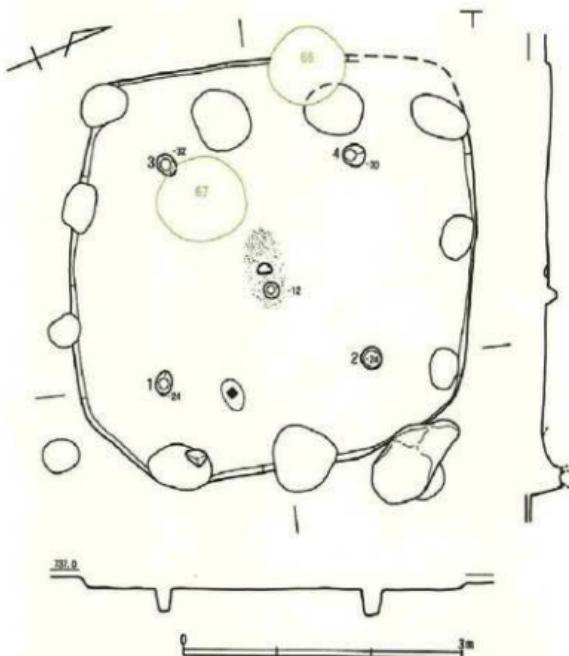
址の柱穴13を本址の床面レベルで水平に覆っていたことから、本址が1号建物址より新しいと考えられる。南東の隅近く、床面から若干浮いて割れた磨りうす1189も出土している。

本址は中越期に属する。

第18号住居址（第23図）

隅丸方形の住居で、東南東-西北西軸。田の上土手側に位置するため上部をかなり削られており、残りは浅い。特に北西角と、北と西の壁は残りがよくない。2号建物址とほぼ重なっているが、上部が削られていることによって新旧を確定できなかった。また本址の堆土と2号建物址の柱穴埋土はいずれも同じような暗褐色で、色の違いもわからなかった。

主柱穴は1~4で、いずれも浅い。建て替えの柱穴ではなく、いたってシンプル。床は堅くし



第23図 第18号住居址 (1:60) 黒の菱形は黒曜石の集積を示す

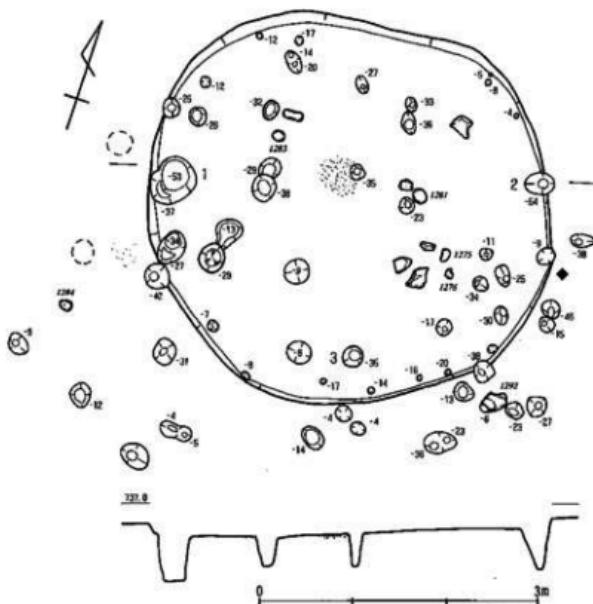
まっているが、所々に地山礫が露出する。周溝や壁に沿って並ぶ小穴はみられず、一部を中心・近世の小竪穴66・67号に切られている。炉は主軸線上の住居中央にあり、同方向に長い。西側がより強く焼け、炉の中程には安山岩礫が置かれ、この東側に小穴が穿たれている。炉の様子から南東側が入り口であったと考えられる。

柱穴1の北東の床面から黒曜石の小片が集中して見つかった。また同柱穴からは不定形の剥片石器1240が、柱穴2からは凹石1221・1222が出土している。

本址は中越期に属する。

第19号住居址 (第24図)

18号住居址の南西で検出された。円形で上部が削られているために住居の掘り込みは浅い。住居址の内外に直径10~40cm程度の柱穴様の穴がいくつもみられた。他の住居のように規格的な四本柱にはならないが、深くしっかりとした柱穴1・2・3を結ぶ線が、3を頂点とした直角二等辺三角形になるため、これらを主柱穴と考えておきたい。床面は軟弱で周溝はみられない。



第24図 第19号住居址 (1:60) 黒の菱形は黒曜石の集積を示す

いが、壁際に小穴がめぐる。炉はほぼ円形で、やや北西よりにある。

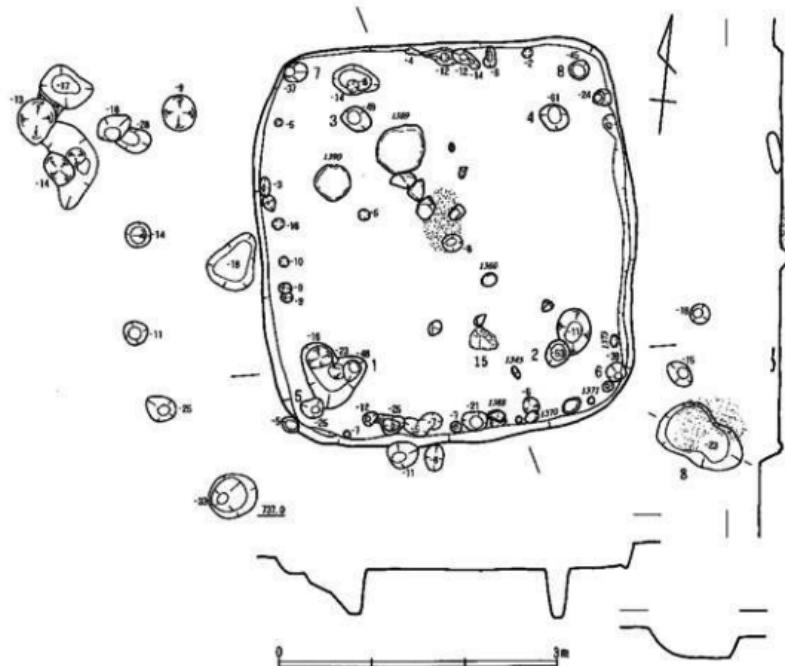
東の壁の外に黒曜石の小片がまとまっていた。また、南東壁の外に輝緑岩の鏡餅状扁平石の破片1292があった。遺物はそれほど多くはない。

本址は前期初頭の下吉井期に属する。

第20号住居址 (第25図)

19号住居址の西に20・22・23号住居址が重なり合うように検出され、20号址は他の住居址に切られておらず全体を調査できた。北北西-南南東軸の隅丸方形で、上部は開田の際に削られている。

主柱穴は1～4で、それぞれの外側の壁際に柱穴5～8がある。周溝は東壁際のみで他は小穴が連続しているが、これらに拡張の痕跡がないことと、柱穴5～8が壁ぎりぎりにあることなどから、5～8は側柱であったと考えたい。しかし、柱穴1～3の周辺にはいくつか穴が認められるので、柱の建て替えはあったと思われる。床は主柱穴の内側が叩きしめられたように堅く、水平。炉は主軸線上やや北よりにあり、同方向に長く、南側に小穴を伴う。入り口は南



第25図 第20号住居址および8号小竪穴 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す

側であろう。

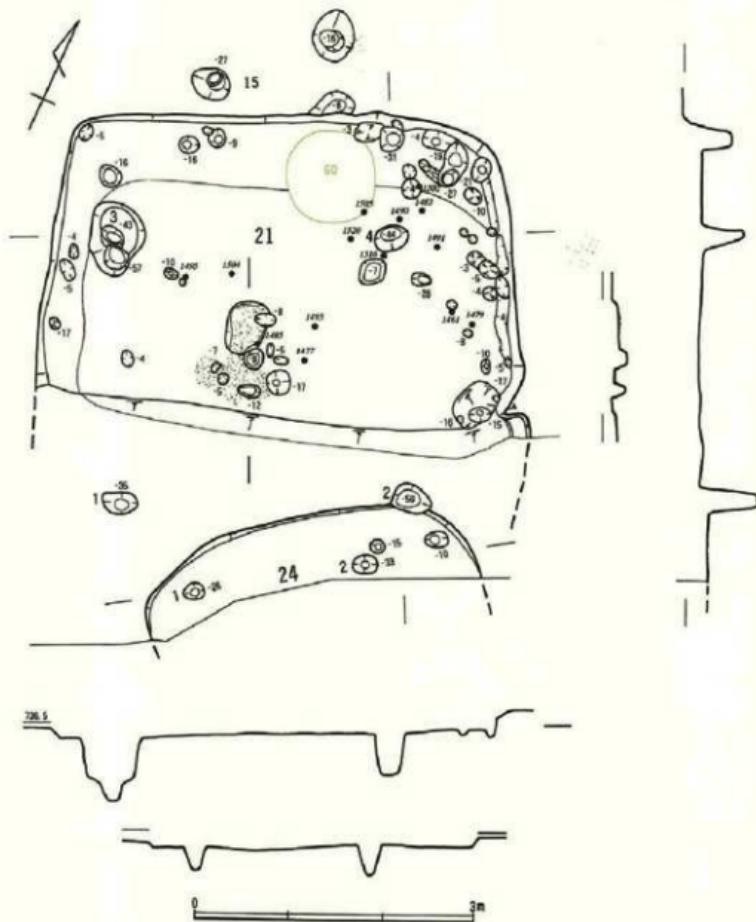
遺物や礫の多くは、ローム床面より数cm～10cmほど浮いて遺存した。床面の遺物では、柱穴2の近くに土器15が横たわっており、南東の隣付近には棒状器1345、磨りうすの破片1388、安山岩器1370・1371・1373があった。また柱穴3の近くに鏡餅状扁平石1389と1390が並んで、平らに据えられていた。遺物が多い。

本址は中越期に属する。

また、本址の周辺には柱穴様の穴がいくつもある。建物址になるものではないが、住居西側の一群は弧状に並んでいた。これらの穴からは、中越の土器が2片、繊維土器が1片出土している。南東角の外には8号小竪穴がある。

第21号住居址（第26図）

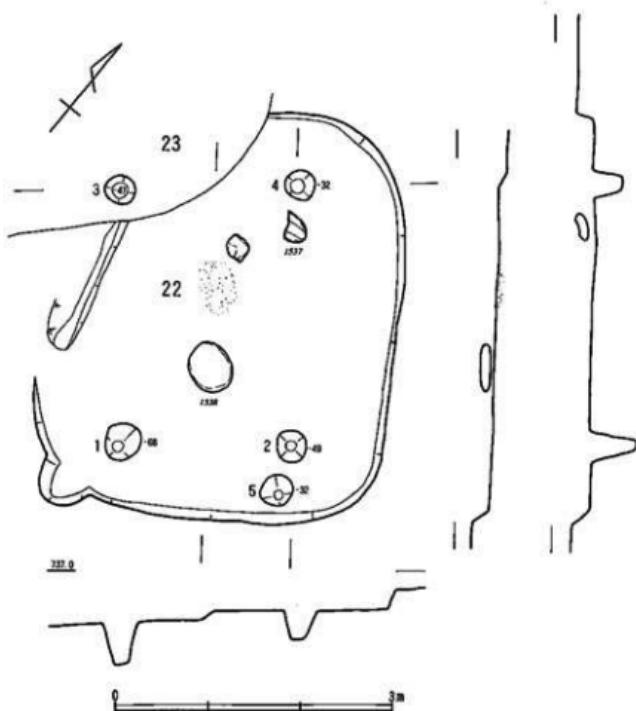
方形の住居で、南南東-北北西軸。南東半は石積みと沙によって破壊され、一部を中・近世



第26図 第21、24号住居址および15号小竪穴（1:60）点と線の集合は焼土を示す

の小竪穴60号に切られている。

主柱穴は1～4で、この内側の床は堅い。周溝は北東の壁際のみで、北東隅の付近に小穴も集中している。炉は4本の主柱穴のほぼ中央にあり、不整形。北側はやや掘りくぼめられているが、南側に不整形に広がった部分は、ロームの床面が焼けているという程度のものであった。炉の様子、柱穴3・4の内側にも柱穴があることから、本址も建て替えがあったかもしれない。



第27図 第22号住居址 (1:60)

北東隅から中央にかけて床の直上ないしは床上4~5cmに礫が散在していた。この中に遺物も含まれており、磨り石・凹石の類が目立つ。遺物は比較的多い。

本址は、下吉井期から中越期への移行期の住居址である。

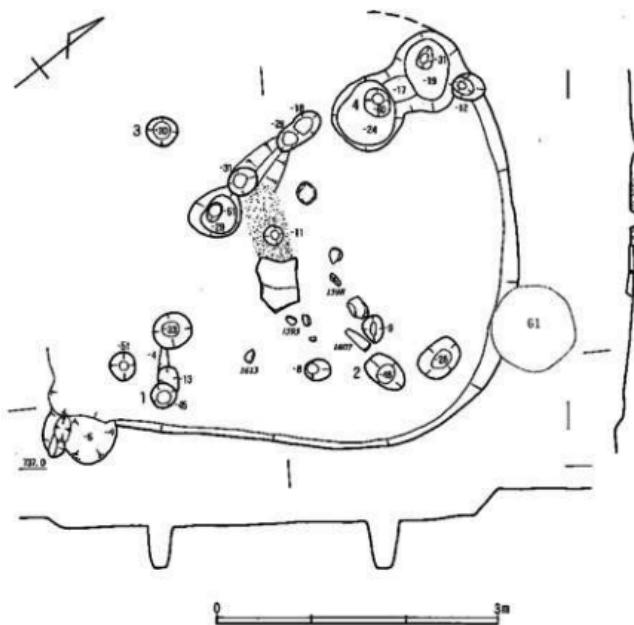
第24号住居址（第26図）

小形の住居で、ほぼ南東~北西軸の隅丸方形。石積みを除去し、21号住居址の南東隅の柱穴を探す際に褐色の落ち込みを検出した。浅い壁の立ち上がりを確認できたが、南東側はほとんど失われていた。主柱穴は1・2。輪郭と柱穴を結ぶ軸が若干ずれるようだ。

遺物は少なく、時期を確定するには十分でない。

第22号住居址（第27図）

20号住居址の北東に検出された、南東~北西軸の隅丸長方形住居。西角で23号住居址と切り



第28図 第23号住居址 (1:60)

合う。検出面での観察では22号址が新しいように思えたが、切り合ひ部分の土層でははっきりしなかった。西側の床面上に溝状の落ち込みがあるが、検出面より黒くはっきり見えたので、新しいものであると判断された。

主柱穴は1~4で、2の南に柱穴5がある以外、本址には柱穴や周溝、小穴もみられず、すっきりしている。主柱穴の内側が堅い叩き状の水平な床。炉は主軸線上やや北西よりにあり、同方向に長い。南東側が入り口と考えられる。

床面および堆土中に礫などはみられなかった。遺物はあまり多くない。炉の南東に鏡餅状扁平石1538が、柱穴4の脇に磨りうすの破片1537が、いずれも床からわずかに浮いて正位で残されていた。

本址は中越期に属する。

第23号住居址 (第28図)

隅丸方形の住居で、南東-北西軸。東角で22号住居址と切り合う。北東壁は円みをおび、西

鋪の壁は開田の際に削られている。

主柱穴は1～4とみられるが、1・2周辺にはいくつか形のよい穴がある。また柱穴ではないが、炉の西から柱穴4、さらに北の角にかけて、一列に穴が連なっている。床は主柱穴に囲まれる内側が叩き状で堅い。炉は主軸線上、住居のはば中央にあって同方向に長く、真ん中に小穴が穿たれている。南東側には板状の安山岩が水平に置かれており、この下の床面も焼けていた。石は中央で二つに割れている。これは阿久遺跡の74号（旧）住居址（黒浜並行期）に類似例がある。

炉にかかる板状の安山岩の東側を、L字状にとりかこむように遺物（磨り石の破片1595、方柱状の櫛1607、棒状櫛器1598）や、扁平な川原石1613が並んでいた。炉の北東脇には人頭大の花崗岩の礫が置かれていたが、風化が著しく、取り上げることが出来なかった。いずれもローム床面より2～3cm浮いている。遺物の量はそれほど多くはない。

本址は下吉井期と中越期の土器が混在している。移行期の住居址であろう。

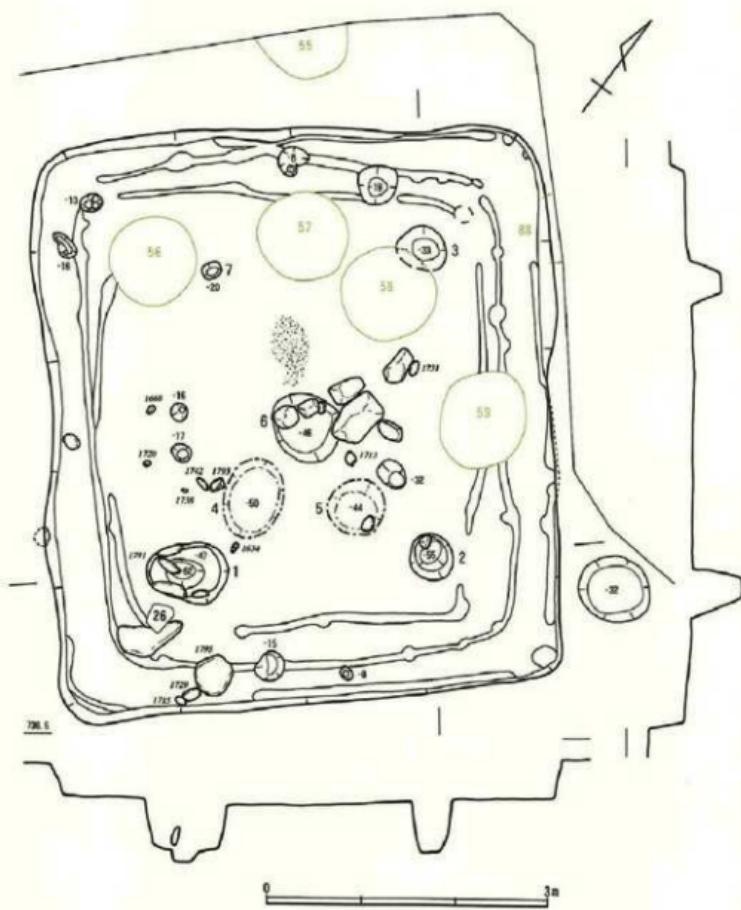
第25号住居址（第29図）

23号住居址の西で、ほかの住居址との切り合いなく検出されたが、何箇所か中・近世の小堅穴（56～59、88号）があけられている。やや大形の長方形住居であり、南東-北西軸のしっかり整った平面形をしている。堆土は暗褐色で、堆土中に礫溜まりがみられた。

主柱穴は1～3で、これに対応する西側の柱穴は損なわれている。柱穴1内の北と南西の隅に1本ずつ、柱穴2内の東隅に1本、そして柱穴4内の北と南の隅に1本ずつ、直径20～30cmの柱痕が認められた。このうち柱穴4と5はそれぞれ北半が貼り床されていた。この柱穴4・5に隣接して住居のはば中央に穴6があるが、4・5によく似た感じの穴であるため柱穴としておく。周溝は多少の交差はみられるもののおよそ3重にめぐっているが、精査は出来なかつた。炉は主軸線上やや北西よりで、よく焼けてロームが強く赤変していた。

本址は柱痕・柱穴と周溝の様子から2回の拡張、三時期を想定しうる。第1期は柱穴4・5・7と柱穴3を切る後世の小堅穴58号によって失われたものを主柱穴とし、最も内側の周溝を床の輪郭とする。第2期は柱穴1の北側の柱痕・柱穴2・柱穴7の西の後世の小堅穴56号によって失われたもの・柱穴3を主柱穴とし、二番目の周溝を床の輪郭とする。第3期は柱穴1の南西隅の柱痕・柱穴2の東隅の柱痕・柱穴7の西の小堅穴56号によって失われたもの・柱穴3を主柱穴とし、現存する壁とそれに伴う周溝の時期である。炉は位置を変えずに、主軸を意識しつつ拡張されたようだ。

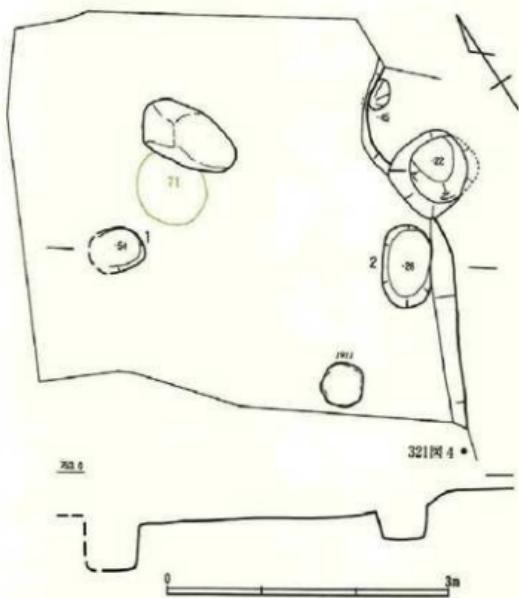
遺物の量は非常に多い。堆土中の礫溜まりにも遺物が多く含まれており、柱痕を避けるように広がっていた。南東の燈籠の床には輝緑岩の鏡餅状扁平石1795と凹石1715、安山岩礫1729が、列をなして据えられていた。また鏡餅状扁平石1791が柱を支えるように穴の中に立てられていた。柱穴1近くには土器26があり、出土した土器はこの他にも2個体が復元できた。



第29図 第25号住居址 (1:60)

主体をなすのは中越期の土器であることから、本址は中越期に属する。また、土器は前期初頭の下吉井式と木島式が混在している。

なお、本址の東にある穴は褐色の堆土で、土器片が1片のみ出土している。



第30図 第26号住居址 (1:60)

第26号住居址 (第30図)

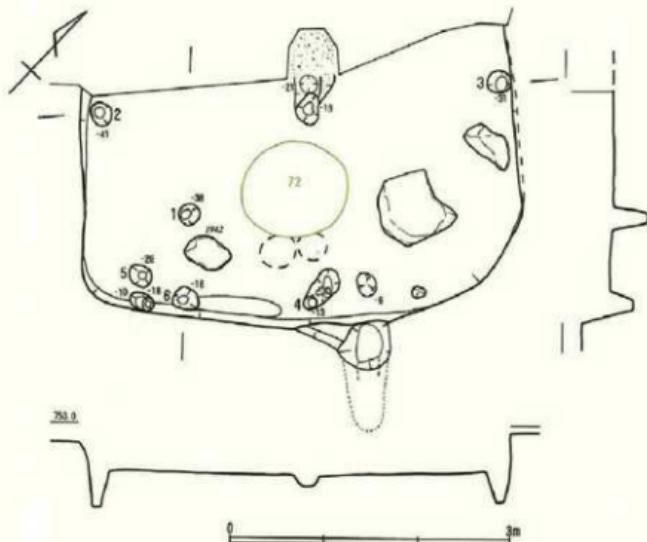
他の住居址の堆土よりやや黒味の強い黒褐色の落ち込みが検出され、部分的に掘り下げたところほぼ水平な面が確認されたため住居と判断して調査した。南東壁の立ち上がりは認められたが、残りはよくない。東角から北東へ壁が延び、床面レベルも10~13cmこちらが高いので、切り合う他の住居の存在も考えられる。

本址内には柱穴1・2がある。床は柔らかく、北西側は沢が入っていて、全面を明確に捉えることは出来なかった。炉も発見できなかった。

南隅の住居床面に磨りうす1911が平らに据えられていた。

遺物は少ないが、本址は中越期に属するものであろう。

なお、住居南側の発掘境の本址検出面直下より、绳文晩期の土器（第321図4）が出土している。サブトレンチによる調査では、これに伴う造構は確認できなかった。



第31図 第27号住居址 (1:60)

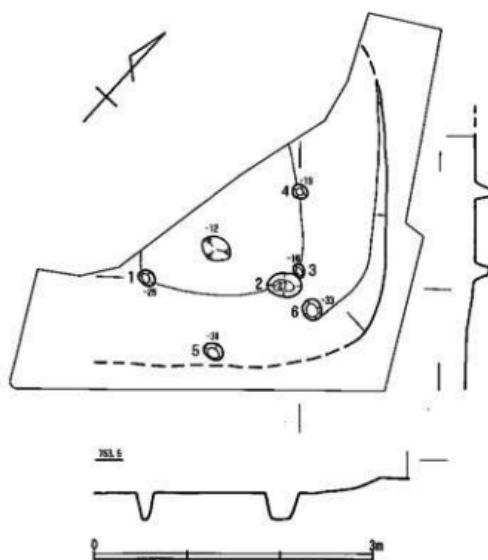
第27号住居址 (第31図)

隅丸方形の住居で、ほぼ南東-北西軸。暗褐色のよくしまった堆土で、北東側では三角堆土の発達がみられた。一部は中・近世の小竪穴72号に切られている。本址の北西半分は発掘できなかった。壁は全体的に直立ないしは壁上部がせり出しがみである。

主柱穴と思われるものは柱穴1のみだが、これに対応する位置に中央のややくぼんだ磨りうすのような地山跡が露出しており、これを礎石のように利用していた可能性もある。また、柱穴2・3・4など側壁の中間に位置する柱穴がしっかりしているので、これら側柱が上屋を支える重要な役割を果たしていたものであろう。柱穴5・6といった補助的な柱もある。周溝は南東壁際の一部にあるのみ。この周溝と柱穴4の北西にある二つの穴は調査できなかった。

床は堅くしまっている。炉は住居のはば中央だが、焼土粒や炭が散っている程度で、しっかり焼けているわけではない。南東側に小穴が二つ連なる。また、南東壁には細長い横穴がある。この南東側が入り口であろうか。

柱穴1の南東床面に鏡餅状扁平石1942が平らに据えられていた。遺物はそれほど多くない。本址は中越期に属する。



第32図 第28号住居址 (1:60)

第28号住居址 (第32図)

北東壁の立ち上がりが検出された。上部を削られており輪郭がはっきりしない。不整形な住居址らしい。西側は発掘できなかった。

柱穴は1～6がある。中でも柱穴1・2・5・6は比較的深く、上屋にかかる主要な柱だと思われるが、並びはすっきりしない。柱穴1～4の内側の床は堅くしまっているので、1・2を主柱穴とみることができるかもしれない。炉は調査区外で未発見。

遺物は多くはないが柱穴5の上部、床面レベルに幼児の拳大の花崗岩が入っていた。

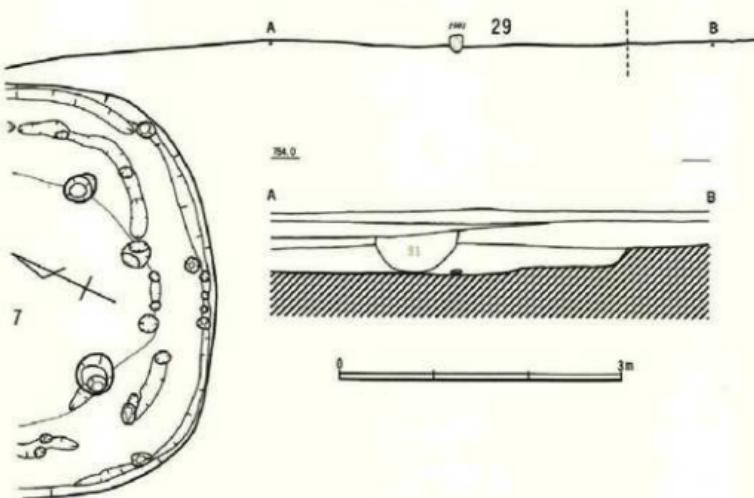
本址出土の土器はそれほど多くないが、前期初頭の下吉井期の住居址と考えられる。

第29号住居址 (第33図)

1501-1番田の下土手で断面のみ記録できた住居址。暗褐色の堆土でほぼ単層。南側の壁と床面は確認できたが、北側の壁の立ち上がりは破壊のためか、確認できなかった。あるいは大形住居かもしれない。

南壁から1.1mほど北の床面に、磨りうす1991が伏せられていた。

本址は出土した遺物は少なく、時期は不明である。



第33図 第29号住居址 (1:60)

第30号住居址 (第34図)

ほぼ南東-北西軸の隅丸長方形住居。南東の隅は直角に近い。堆土は暗褐色で、礫が若干含まれていた。北西側は発掘できなかった。

主柱穴は1・2と、掘ることが出来ず位置のみ確認できた柱穴3。この他に南東の壁際に柱穴4・5があって、1・2に対応している。おおよそ主柱穴に囲まれた範囲の床は堅くしまっている。周溝は東壁際にわずかに認められた。炉はほぼ中央にあり、南東側に小穴を伴う。入り口は南東側と考えられる。

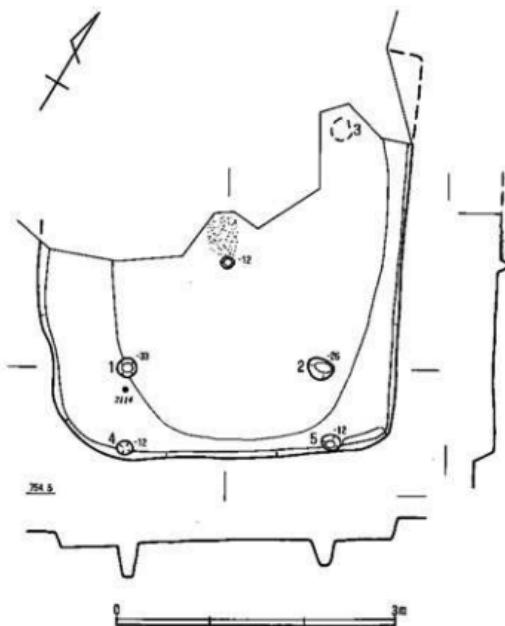
柱穴1の脇の床面に面取りされた安山岩礫2114があった。

本址は、下吉井期から中越期への移行期の住居址である。

第31号住居址 (第35図)

長方形住居で、南南東-北北西軸。南で36号住居址を切り、中・近世の小竪穴78号によって一部が損なわれている。暗褐色の堆土だが、住居南半には焼土と炭化材がみられたほか、主柱穴の内側、床上2~10cmに草炭状の漆黒土層があったので、焼失住居であると考えられる。炭化材の直径は10cmほどで、床に着いている。数cmの漆黒土層を挟んで焼土がみられた。

主柱は1~4だが、北壁と南壁に3本ずつ側柱5・6・7と8・9・10がある。床は、主柱穴の内側が非常に堅い叩き状をなしている。周溝は東西と南東の壁付近のみにみられる。炉は

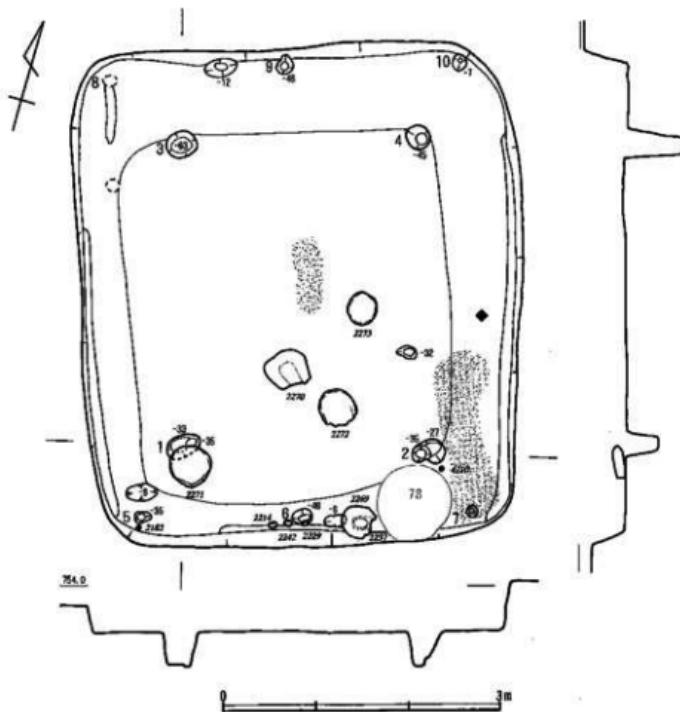


第34図 第30号住居址 (1:60)

主軸線上、住居は中央にあり、同方向に長い梢円形を呈する。

本址の遺物は非常に多い。南半には特に多くの遺物が残されていた。磨りうす2269と2270はいずれも床面に伏せられており、2269は粗形の凹石2237を抱くようにしていた。鏡餅状扁平石が3個(2271・2272・2273)も床面に水平に据えられていた。2271は柱穴1を一部覆うようにしている。柱に立てかけられていたものであろうか。南東壁の柱穴6付近の床面には磨り石類2214・2242・2229が等間隔に並べられ、南角近くの壁には方柱状の棒状砾2182が立てかけられていた。柱穴2の脇から块状耳飾4210が出土している。東壁寄り中程の床面には幼児の拳大2個と、多数の剥片・石核からなる黒曜石の集積があった。また、柱穴3のやや南の床上に、直径15~20cmほどの赤と白の花崗岩が一対、並べ置かれていた。

本址は、下吉井期から中越期への移行期の住居址である。

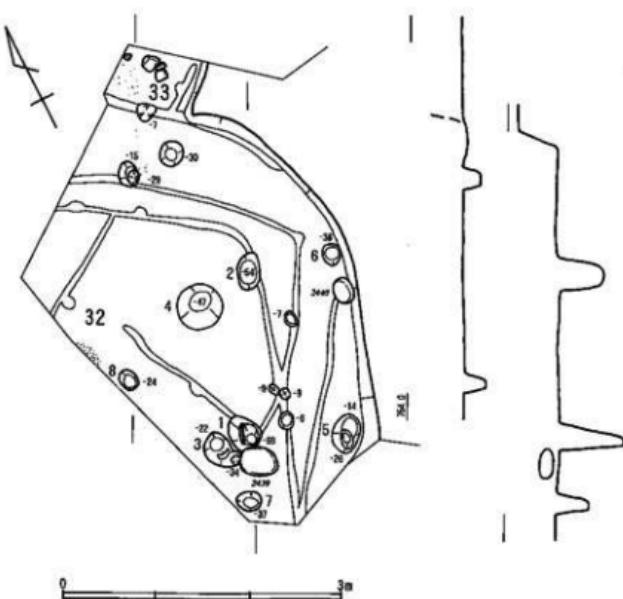


第35図 第31号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を、黒の菱形は黒曜石の集積を示す

第32号住居址 (第36図)

隅丸方形の住居と思われるが、一部しか発掘できなかったうえ、拡張や切り合いが多く、はっきりしない。33号住居址と北で切り合うが、土層観察から本址が新しいことがわかっている。33号址の周溝の一部が本址床にみられることから、両住居址の床面にはあまりレベル差がなかったことがわかる。

柱穴1・2は主柱で、柱穴5・6がこれに伴う側柱とみられ、南東が入り口となるだろう。柱穴1内には柱を支えるためだろうか、板状の安山岩が立てられていた。床は叩き状で堅く、複雑に周溝が検出されたが、調査できなかった。この重複する周溝から数回の建て替え、拡張が推測される。柱穴3・4もこれに伴うものであろうか。また、柱穴1から北西に延びる周溝の存在から、柱穴7・8を主柱とする小形の住居が本址と切り合っている可能性がある。炉は



第36図 第32、33号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す

調査区境内にかろうじて確認できた。その位置から主柱穴1・2の住居に伴うものであろう。

柱穴1・3周辺の床面から床上数cmにかけて礫が散在していた。柱穴1の脇の礫群中、ロームの床面から4cmほど上で、磨りうす2439が水平に出土した。遺物は比較的多い。

本址は中越期である。

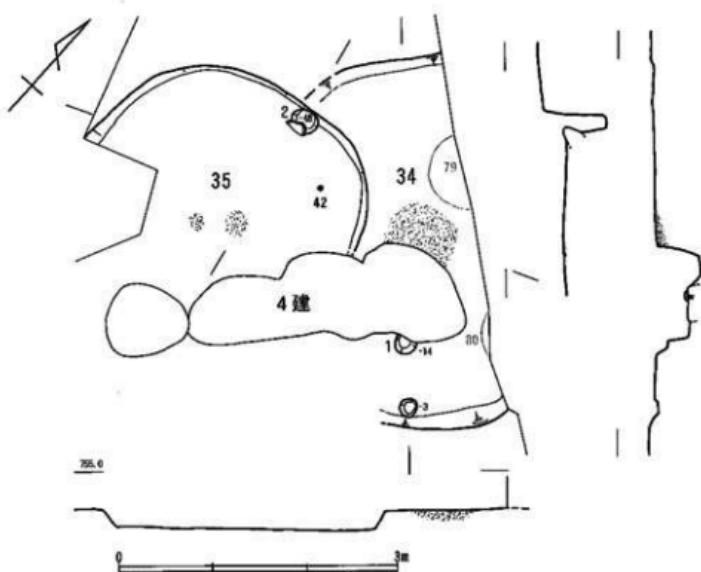
第33号住居址（第36図）

32号住居址に切られている。壁と床の一部だけの発掘であったため、全体の輪郭や規模は不明である。床は堅い。32号址の輪郭の外に焼土が残っており、焼尖住居であったらしい。

第34号住居址（第37図）

35号住居址、4号建物址と切り合って検出された。開田時に上部を削られて浅く、北東と南西の角が調査区外で全体の輪郭がはっきりしないが、小形の隅丸長方形住居と思われる。南南東~北北西軸であろう。堆土は暗褐色。

主柱穴ははっきりしない。柱穴1があるので、これに対応する柱穴は発見できなかった。住居ほぼ中央の炉は大きい。焼土は厚く、赤味が強くて堅い。この炉を4号建物址の柱穴4の



第37図 第34、35号住居址 (1:60)

掘り方が切っていることから、4号建物址より本址の方が古いことがわかるが、35号住居址との新旧関係はわからなかった。

なお、炉の西側の堆土上層から、ミニチュア土器42が出土している。

本址は、下吉井期から中越期への移行期の住居址である。

第35号住居址（第37図）

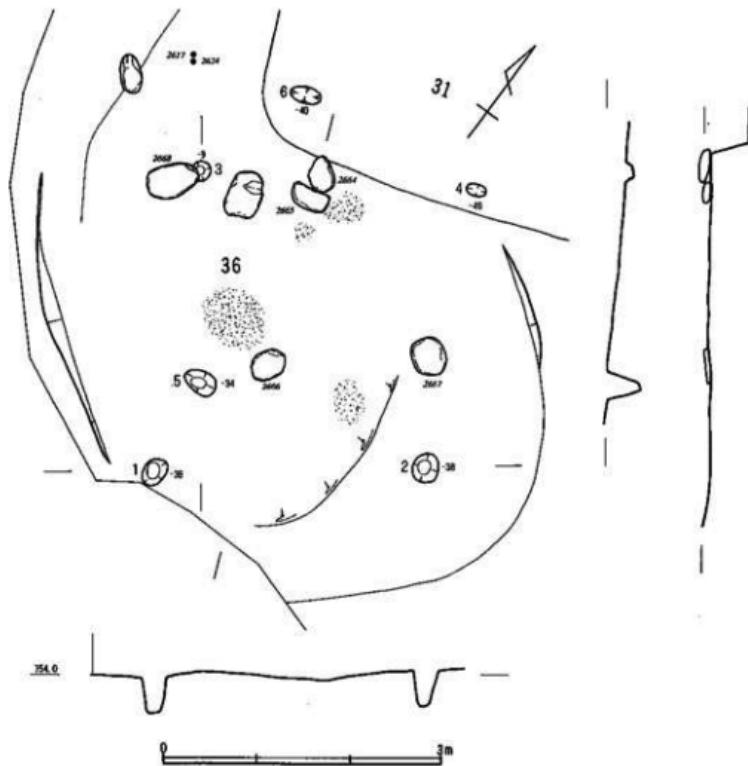
34号住居址、4号建物址と重複して検出された。34号址と同様、開田時に上部を削られて浅い。北半が調査でき、その様子からほぼ南北軸の、小形の隅丸方形住居と考えられる。堆土は暗褐色で34号址と差がない。

柱穴は2のみが確認された。床は柔らかく、ほぼ中央に二箇所、ロームの赤変が認められた。炉であろう。

出土遺物は少なく、中越期を主に下吉井期の土器が若干混じっている。本址は中越期に属すると考えられる。

第36号住居址（第38図）

上部を削られているうえ、石積みによる擾乱などが激しく、輪郭が明瞭につかめなかった。



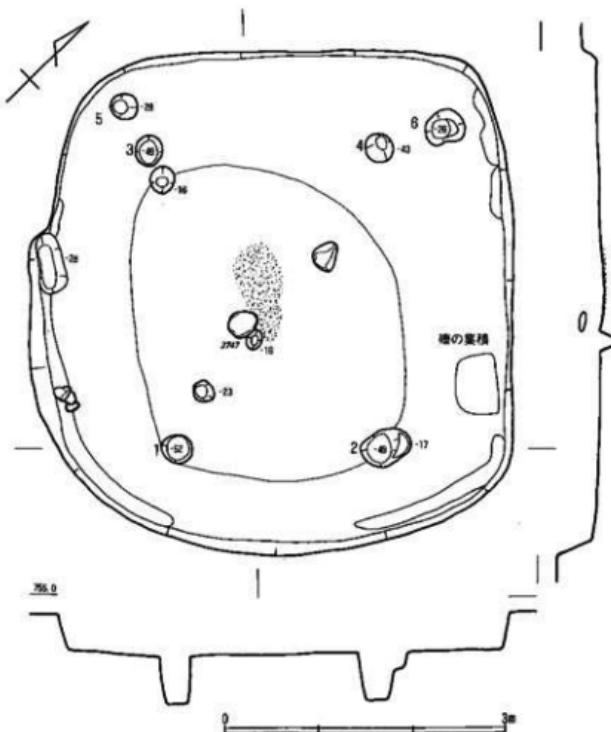
第38図 第36号住居址 (1:60)

北を31号住居址に切られている。

柱穴は複数あるものの住居の輪郭に沿って並ばず、対応関係がはっきりしないが、おおむね二時期を想定しうる。

旧住居は柱穴1～4を主柱とし、新住居の主柱穴は5・2・6と、31号址を損ねる中・近世の小豎穴78号によって失われているものと考えたい。この新旧関係は柱穴1が人頭大の礫によって塞がれていたことを根拠としている。床は堅いが、炉となりうる焼土は複数あり、どの住居に対応するものは不明である。

遺物は多い。3個の鏡餅状扁平石(2664・2667と輝緑岩の2668)と平板石2665・2666が床面



第39図 第37号住居址 (1:60)

に平らに掘えられている。2668の礫の跡も、ほぼ同じレベルに置かれている。本址北西側で、磨り石2617と凹石2624が堆土のやや高いレベルで、並んで出土した。

本址は前期初頭の下吉井式にわずか中越式が混じる。下吉井期の住居とみておきたい。なお、建て替えが認められるが、遺物や住居の状況から、この新旧は下吉井期の建て替えだと考えられる。

第37号住居址 (第39図)

隅丸方形の住居だが、南北壁の中程から東隅にかけては円く膨らんでいる。南東-北西軸。堆土はよくしまった非常に堅い暗褐色土で、堆土中には炭や遺物が少ない。

主柱穴は1～4で、柱穴5・6がこれに次ぐ。1・2・5・6が主柱穴になることも考えら

住居址

れる。主柱穴に囲まれる範囲の床は堅い。周溝は一部を除く南東半と北隅近くにあるが、調査することが出来なかった。炉はほぼ中央にあり、主軸方向に長く、南東側に小穴を伴う。入り口は南東側と考えられ、柱穴と炉の様子から二時期ある可能性もある。

住居址はほぼ中央の堆土上面で、鏡餅状扁平石2747が炉側にやや傾いて発見された。また、東角のやや北側より堆土上面から拳大～掌大の礫の集積がみつかった。全てほぼ同じレベルにあり、中でも壁よりの礫6個は整然と壁のラインに沿って並べられていた。この対辺、南角のやや北より壁際からは、花崗岩1点を含む礫3個が重なるように発見された。柱穴3からは磨り石2730が、柱穴2からは拳大の礫が3個出土している。また、西隅の柱穴3・5付近の上面攢乱部より、鏡餅状扁平石2748が発見された。本址に伴うものと考えたい。

本址は中越期に属する。

第38号住居址（第40図）

16号住居址の北西に隣接する、南東～北西軸の隅丸長方形住居。開田時に上部を削られ、南西壁も削平されて立ち上がりは確認できなかった。一部が中・近世の小豎穴89号により損なわれている。

主柱穴は1～4と5・6・7・4の2組が考えられる。柱穴3を覆っていた石の存在から、1～4が旧、5・6・7・4が新であろう。主柱穴内側の南東よりの床が堅くなっている。南東側が入り口であろうか。炉は、住居は中央に焼土が散っている程度である。これを挟むように北東と南西の床が強く焼けている。固化できなかったが、北東壁上部には垂木の炭化痕と思われる黒斑が点々と残されていた。床が焼けていることなどから考えて焼失住居であった可能性が高い。旧住居が被災したのち、炭化材などを片づけて新住居を構築したのかもしれない。

遺物は比較的多い。南東の壁際に土器34が横倒しになっていた。この土器の下の床面も焼けている、非常に堅い。炉の北東、床面の直上に、掌大の扁平円礫2877があった。

南東の壁外の小豎穴は、一部が16号住居址の北壁上の小豎穴と切り合っている。また、本址周辺には小さな柱穴状の穴がいくつか検出されたが調査できなかった。その小穴群の時期も特定できなかった。

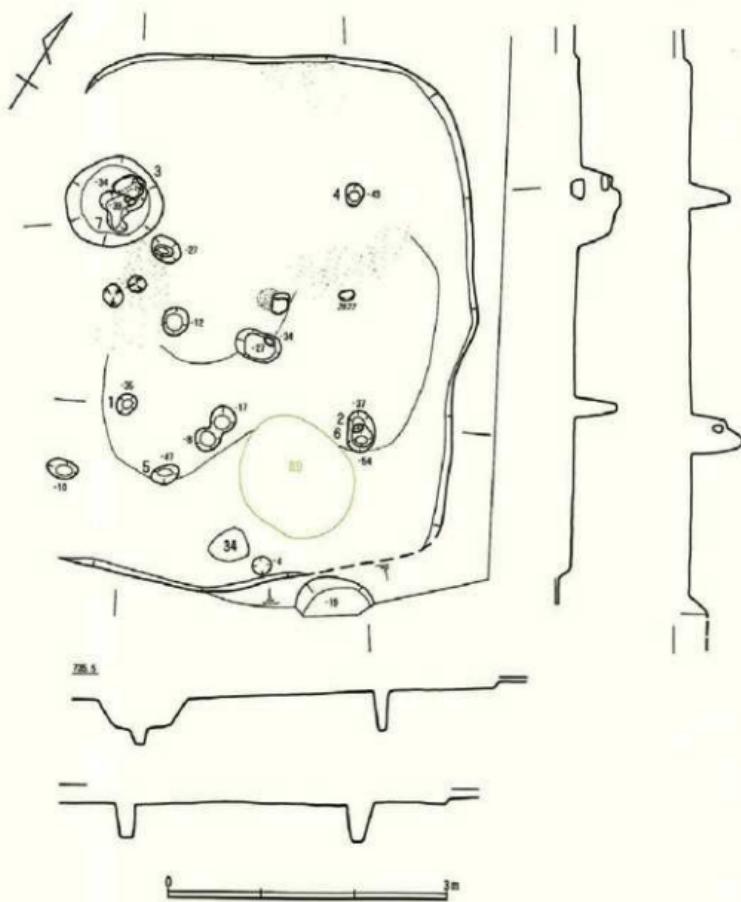
本址は、下吉井期から中越期への移行期の住居址である。

第39号住居址（第41図）

長方形住居で、東北東～西南西軸。南西で40号住居址と重複するが、新旧関係は不明である。

主柱穴は1～4。床・柱穴内には地山礫が露出し、床は全体的に柔らかい。柱穴1と2は縁と底に小石を詰めている。東と南側に周溝があるが調査できなかった。炉は住居の主軸線上や西よりにあり、同方向に長く、東側に小穴を伴う。入り口は東北東ではないかと思われる。

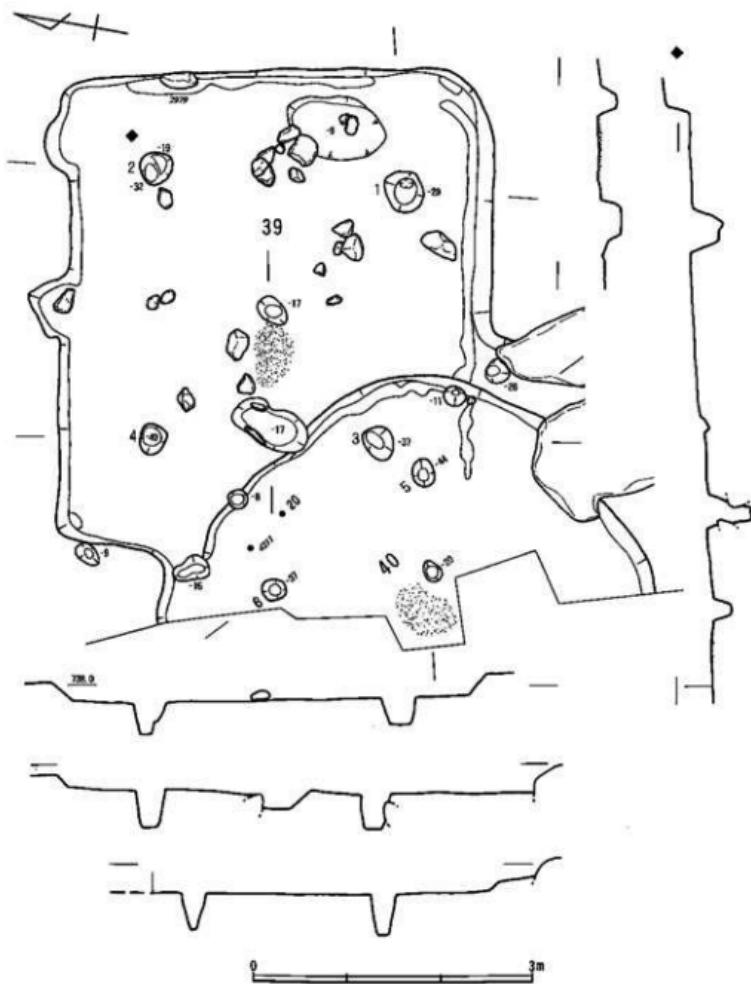
遺物は比較的多い。北隅よりの北東壁に磨りうす2979が立てかけられていた。そして、この



第40図 第38号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す

角近くの床から柱穴 2 の縁にかけて黒曜石の集積がみられた。剝片が中心で、石器が39点と剝片が80点、チップ25点を数える。また本址の東角から南南東へ2.2mほどの屋外のソフトローム上に、幼児の拳大の黒曜石 5 個が集積されていた。

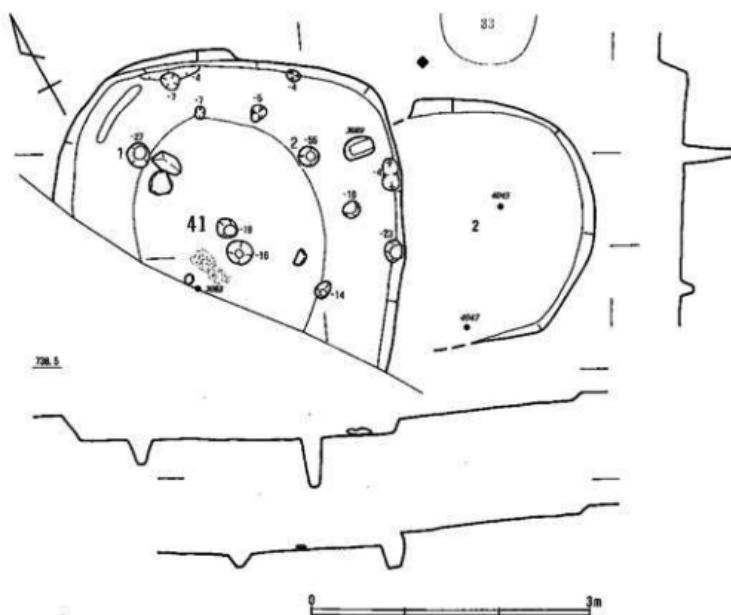
本址は中越期に属する。



第41図 第39、40号住居址 (1:60) 黒の菱形は黒曜石の集積を示す

第40号住居址 (第41図)

隅丸方形の住居で、南東-北西軸と思われる。西半分は発掘できなかった。39号住居址と切り合うも、その新旧ははっきりしない。南東壁の主軸線上に地山の大岩が露出している。この



第42図 第41号住居址および2号小堅穴（1：60）黒の菱形は黒曜石の集積を示す

大岩の脇のローム面に、 $80 \times 60\text{cm}$ の範囲でこの時代のものと思われる集石がみられた。しっかりした穴を作るものではなく、ただ砾を集めてあるという程度のものだった。

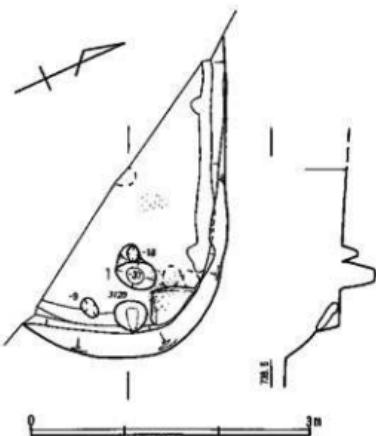
5・6が主柱穴。床は水平な叩き状で、ベラベラと剥がれる。周溝が北東側にみられるが、調査はできなかった。炉は住居はほ中央にあり、北東-南西にやや長い。東に小穴を作う。

遺物はあまり多くない。北角の近くに土器20が残され、その脇から珠状耳飾4211が出土した。本址は、下吉井期から中越期への移行期の住居址である。

第41号住居址（第42図）

隅丸長方形の住居で、南西-北東軸、もしくは南東-北西軸だと思われる。南西側は発掘できなかった。暗褐色の堆土で、南東で2号小堅穴と重複するが、ともに全く同じ質の堆土であり、新旧は不明。この小堅穴は本址の付帯施設であるかもしれない。

主柱穴は1・2があり、対応する柱穴は調査区外。床面は叩き状で水平、ベラベラと剥がれる感じである。北角付近に周溝が見られた。炉は、南東-北西方向の「8」の字状に連続した感じで焼けている。



第43図 第42号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す

遺物は多くない。東角近くの床面に磨りうす3089が正位で据えられており、この脇から風化が進んだ人頭大の花崗岩が、また炉の西の発掘境からは、床から6cm浮いて粗形凹石3088が出土した。

また、2号小竪穴と切り合う東角の壁外に黒曜石の集積が見られた。

本址も40号址と同様、移行期の住居址である。

第42号住居址 (第43図)

隅丸方形と思われる住居址の東隅付近のみを発掘したにとどまる。黒褐色の堆土で、検出面から-40cmほどで木炭と焼土層を、床の直上2~3cmは炭に由来すると思われる堅い漆黒土層を確認した。焼失住居であろう。

柱穴も東角近くの柱穴1を発掘したのみ。床は焼けていることもあるが、非常に堅い叩き状である。周溝や側柱も確認したが掘ることは出来なかった。

発掘が住居址の一隅に限られたわりには、多くの遺物が出土した。柱穴1の南東の壁に、磨りうす3120が立てかけられていた。また、この柱穴から南西の調査区外にかけて、複数の人頭大砾を中心とした大きめの砾の集積が認められたが、この砾群は磨りうすを覆っていなかった。

本址は中越期に属する。

第43号住居址 (第5図)

本址は検出前に破壊されてしまい、断面で壁の立ち上がりと柱穴を一つ確認するにとどまった。確認された柱穴は深さ25cm。南側は擾乱を受けて床、壁ともに失われていた。

縄文時代の遺構と遺物

出土した土器片はわずかで、時期は不明である。

第44号住居址（第5図）

43号住居址と同様、すでに破壊されており、断面で壁と床、炉を確認した。ちょうど住居の中心を通るラインだろうか、柱穴はみられない。確認できた範囲の床は幅5cmほどで、若干西よりに地床炉がある。

本址も遺物はあまり多くないが、中越期に属すると思われる。

第45号住居址（第5図）

本址も破壊されている。北側の床と壁の立ち上がりのみ確認できた。南側は擾乱を受けており、床や壁はともに失われていた。

遺物は極めて少なく、帰属時期を判断できない。

第46号住居址（第5図）

西側の壁の立ち上がりのみ確認できた。床は東へ8.6mまで追ったが、炉や柱穴、東側の壁の立ち上がりは確認できなかった。大形住居であった可能性もあるが、壁が削られているのかもしれず、詳細は不明。

本址は、下吉井期から中越期への移行期の住居址と考えられる。

第47号住居址（第44図）

南西半分は水田による削平を受けており、柱穴の下部だけが検出された。残存する側壁からほほ南東-北西軸の隅丸長方形住居だと考えられる。主柱穴は1~4だと思われるが、2よりはむしろ5・6の方がしっかりとした柱穴である。床は壁より30cmほど間隔をおいた内側が堅い。北角には周溝とまではいかない長楕円の穴が3個連続している。炉は、柱穴の位置からみるとやや北東によっている感じを受ける。主軸方向に長く、南東側に小穴を伴う。また、北隅を中心炭化材が床面に残り、焼失住居であると判断された。炭化材の直径は10cm程度、長さは、最も長いもので60cmほどであった。残っている部分は、放射状に壁から内側を向いている。なお、柱穴5は焼土に覆われていた。入り口は南東側と推定される。

本址は中越期に属する。

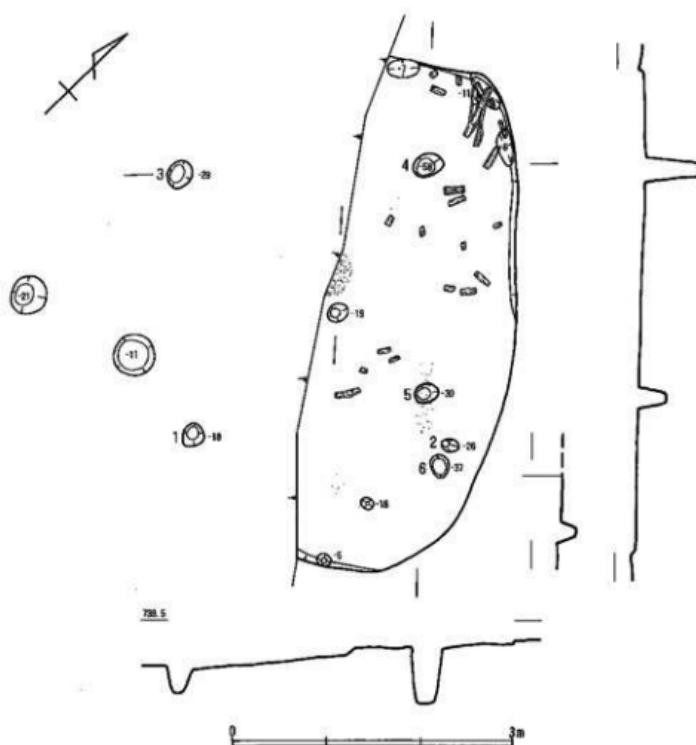
第48号住居址（第45図）

49号・50号住居址と重なって検出されたが、それらに切られる住居である。北半は発掘できなかった。残存する東角から、南東-北西軸の長方形住居とみられる。

主柱穴は柱穴1・2ないしは柱穴3・2が考えられる。床の状況は東隅のわずかな部分以外は49・50号址に削られているため、不明である。炉も調査区外であろう。

また、上面で49号址の存在が確認できなかったため、本址と49号址の遺物を明確に区分することが出来なかった。

本址は中越期に属すると思われる。



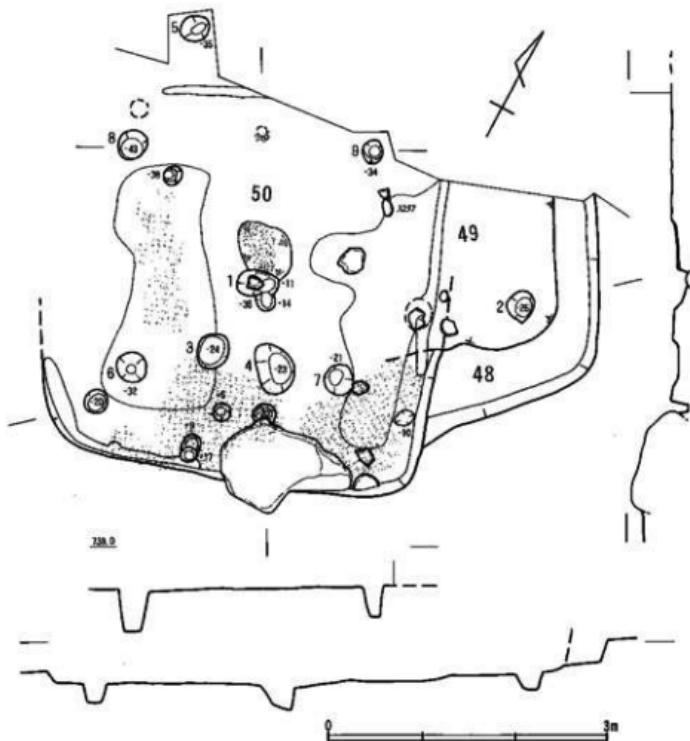
第44図 第47号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す

第49号住居址 (第45図)

48号址の床を切って掘り込まれたラインと、50号住居址に残されていた焼土・炭化材を含む褐色土を切るラインが長方形の住居の輪郭を残し、この内側の床と考えられる部分にレベル差が認められなかったことから、48号・50号住居址より新しい住居の存在がしられた。

主柱穴は4・2・5が考えられる。2については48号址と共に用いているとみておきたい。柱穴2は堆土上面で黒色の柱痕が確認されたことから、この柱は最後まで立っていたことが推察される。炉は調査区外のため確認できなかった。

床面から20cmほど浮いて、大形の安山岩礫3257が出土しており、ほぼこのレベルに礫が多く残されていた。



第45図 第48、49、50号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を示す

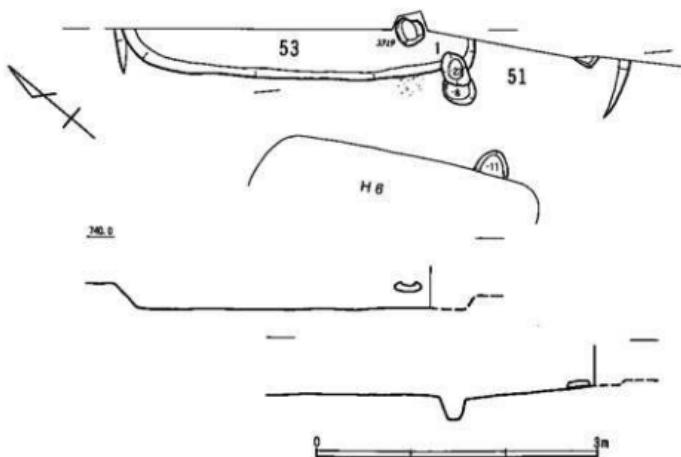
本址は中越期である。

第50号住居址（第45図）

隅丸方形の住居で、南南東-北北西軸。上面は削られ、北西壁も削り取られている。

主柱穴は6～9であろう。南角と北西ならびに北東の壁際に周溝がめぐっている。炉は主軸線上のやや北西よりにある。同方向に長く、皿状にくぼんでおり、南東側に小穴を伴う。入り口であったと考えられる南東側の壁には、大きな地山跡が露出している。この壁に小穴がいくつかみられ、入り口の施設であったかもしれない。

本址は焼失住居であり、焼土と炭化材を多量に含む褐色土が残されていた。この焼土の広がりから48→50→49号址の新旧関係を想定することができた。柱穴7の東脇の床面には、風化し



第46図 第51, 53号住居址 (1:60)

て崩れた花崗岩があった。直径15~20cm程度の卵形である。

本址も中越期に属する。

第51号住居址（第46図）

住居の南西側のみが発掘できた。南西壁は開田の際に削平されており、輪郭をはっきりつかめなかつたが、南西に隣り合う平安時代の6号住居址の竈脇の壁上に、本址の堆土と同じ褐色土がつまつた浅い穴があり、これが本址に伴うとみればさらに南西に広がる可能性がある。また内側には、53号住居址が本址を切って重なっている。

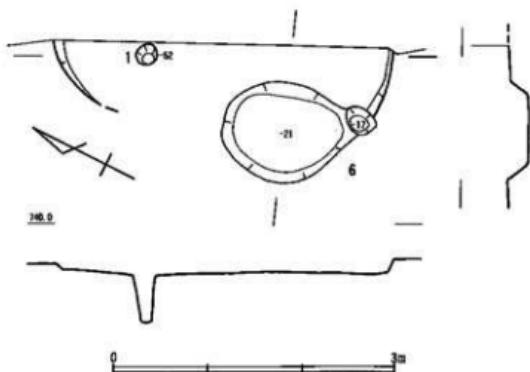
柱穴は一つ（1）が確認できたのみである。これが主柱穴の一つだと考えれば、対応する柱穴は53号址によって失われているか、調査区外にあるものと考えられよう。床は堅くない。柱穴1の北東の床に焼けている部分がある。これを53号址が切っていることから、本址よりも53号址が新しいものと判断される。

遺物は極めて少なく、帰属時期を判断できない。

第53号住居址（第46図）

51号住居址と北西壁が接し、51号址の内側を切る小形の方形住居址とみられる。暗褐色の堆土上より破損した磨りうす3319が正位で出土した。

本址は中越期に属する。



第47図 第52号住居址および6号小豎穴 (1:60)

第52号住居址（第47図）

51号・53号住居址の南東に隣接して発見されたが、北東側の大部分は発掘できなかった。南西壁は開田時に削平されている。南隅で壘状の穴、6号小豎穴と重複しているが、ともに似たような暗褐色の堆土で新旧は不明。

柱穴は一つ（1）だけ確認できた。床は堅くない。

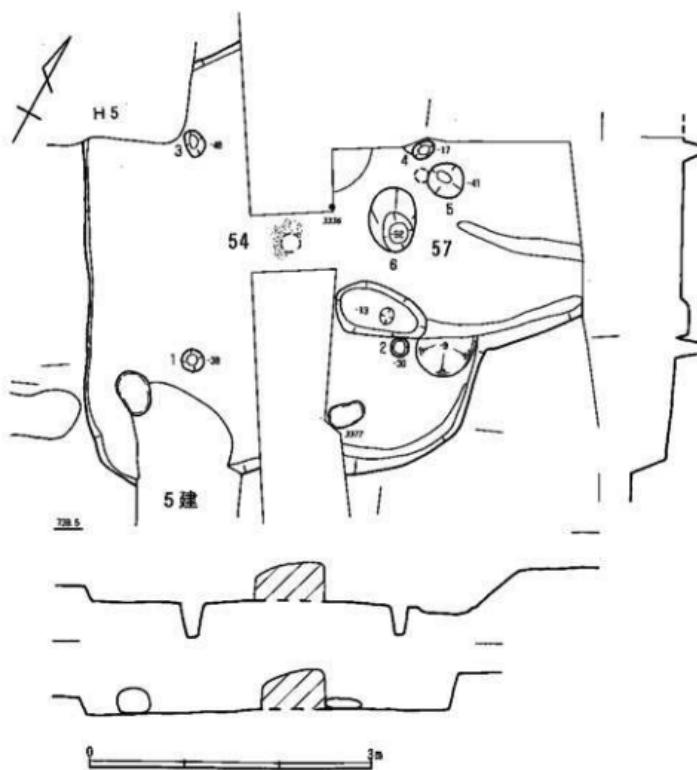
本址は、下吉井期から中越期への移行期の住居址である。

第54号住居址（第48図）

隅丸方形の住居で、南東-北西軸。住居址の主軸線上に水田境の石積みがあり、この下部は一部を除き調査できなかった。土層の観察から、57号住居址を切っていることが、さらに床面の礫が5号建物址の柱穴の掘り方を覆っていることから、この建物址よりも新しいことがしらされた。さらに西角が平安時代の5号住居址に切られている。堆土は上半分が黒褐色土、下半分が暗褐色土であった。

主柱穴は1～4とみられるが、4がやや外へ開いており、ほかの三つに比べ浅い。4の西、調査区外にかけて掘ることのできなかった柱穴があり、これが主柱穴になるかもしれない。周溝は東角付近にのみ見られたが、掘れなかった。床はあまり堅くないが、炉の北西、柱穴3・4の間に若干しまった面が認められた。炉は主軸線上やや北西よりであり大きくはない。南東側に小穴を伴う。入り口は南東側と考えられる。

遺物は多い。南東の床面に鏡餅状扁平石3377が平らに据えられていたほか、黒褐色堆土のド部（暗褐色土との境界）で石斧3336が刃部を下にして立った状態で発見されている。



第48図 第54、57号住居址 (1:60)

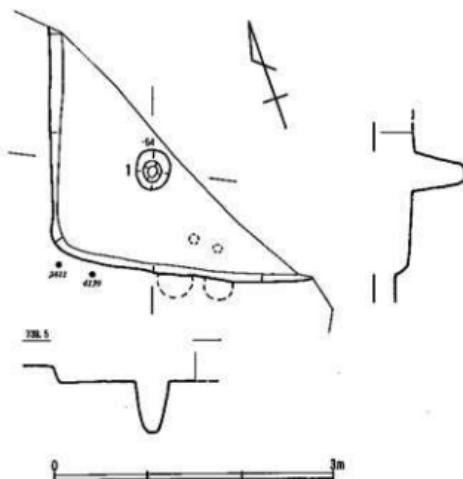
本址は中越期に属する。

第57号住居址（第48図）

54号住居址に切られている住居址。南西を54号址に切られ、北東側は発掘できなかったために、輪郭がつかめなかった。

本址には二時期あると考えられる。一方は柱穴5と内側の周溝、もう一方は柱穴6と外側の周溝ならびに側壁がそれにあたるが、床はほぼ同じレベルであり、この新旧は判断できない。床は堅くない。

本址から出土した土器はごく少量だが、下吉井期から中越期への移行期の住居址であろう。



第49図 第55号住居址 (1:60)

第55号住居址 (第49図)

54号住居址の南東に位置するが、南東の隅付近のみ発掘できたにとどまる。方形の住居址である。上部は削られていた。暗褐色の堆土で、床は叩き状とまではいかないものの平坦にしてきれいである。主柱穴1は深く、しっかりしている。

南壁際の床面には、1mほどの間隔をおいて一対の拳大の花崗岩が置かれていた。また、東隅の外で小形の磨製石斧3411と磨り石4139が発見されている。

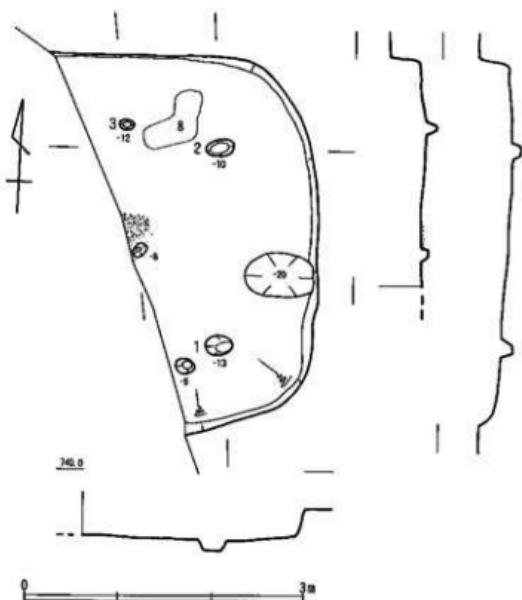
本址も遺物はごく少量だが、下吉井期から中越期への移行期の住居址だと思われる。

なお、本址周辺には黒～褐色の柱穴状の小穴が散在し、南壁にも二つかかっている。後世のものと判断されたが、これらは建物にはならなかった。

第56号住居址 (第50図)

ほぼ南北軸の隅丸方形住居で、およそ半分を発掘できた。堆土は暗褐色で、礫を多く含み、堅い。主柱穴は1・2で、主軸上に柱穴3がある。地山に礫が多いためかいずれも浅い。床と壁にも一面に地山礫が露出しており、ゴツゴツしている。また、柱穴1より南側は床面が若干高く、地山礫の露出が著しい。こちら側が入り口であろうか。炉はほぼ住居の中央にあり、南側に小穴を伴う。

柱穴2・3の間の床には、土器8が横倒しの状態で残されていた。



第50図 第56号住居址 (1:60)

本址は中越期に属する。

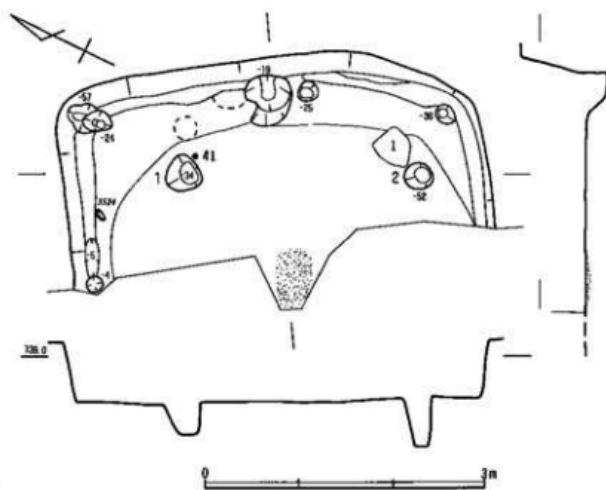
第58号住居址（第51図）

方形の住居。住居の北東半分が調査できた。堆土は炭粒を多く含む暗褐色上で、この堆土中に大石があり、大石の下にはロームが入っている。さらにそのロームの下部には10cm厚の焼土混じりの炭層があり、その下にハードロームとソフトロームの混じり層があつて床面に達する。本住居址は焼失住居である。床は内側が堅くしまっているが、南東は壁までこの面が広がり、ほぼ全体に周溝がめぐっていた。しかし、周溝と一部の穴は掘れなかつた。

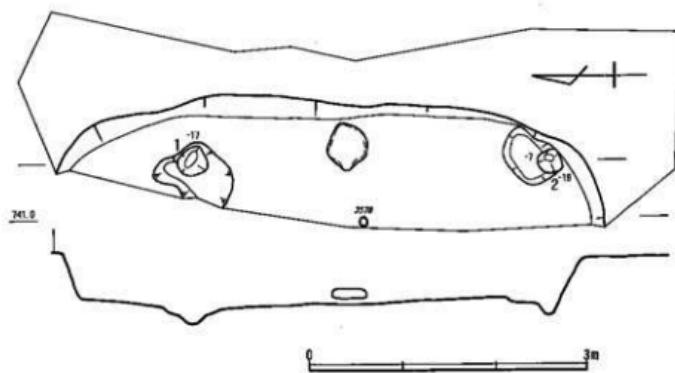
主柱穴とみられる柱穴1・2の他に、各角と壁の中程に側柱と見られる柱穴が並ぶ。炉は調査区境ぎりぎりに検出できた。南西-北東に長い梢円で、これが本址の軸になるのだろう。

遺物は多い。柱穴2の脇の床には土器1が横たわり、柱穴1の脇の床にも土器41が遺存した。また、北西壁近くの床よりわずか高い位置に、輝緑岩の小形磨りうす3524が掻き出し口を下にして立った状態で発見された。

本址は中越期に属する。なお、炭化材からは、 $7,120 \pm 90$ (5,170B.C.) という¹⁴C年代測定



第51図 第58号住居址 (1:60)



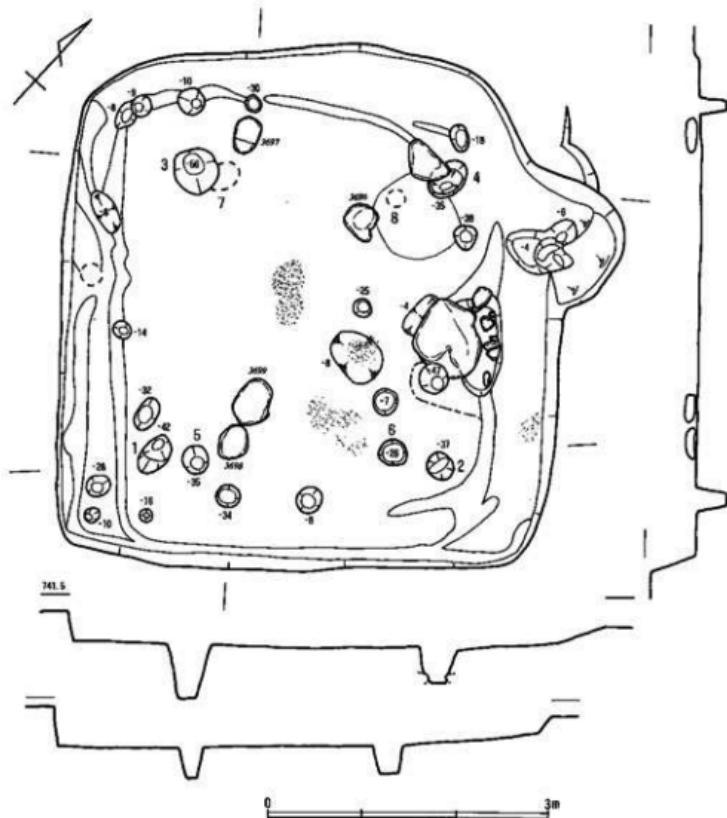
第52図 第59号住居址 (1:60)

⁽³⁾ 値が得られた。ほかの住居址の測定値に比べ、1,000年以上も古い結果であり、問題を残す。

第59号住居址（第52図）

東の壁際部分のみが発掘できた隅丸方形住居址。堆土は炭と焼土粒を含む黒褐色土で、床はそれほど堅くない。主柱穴は1・2と思われるが2は角ぎりぎりにあり、1も決して深くはない。どちらかというと副柱といった方が適切であるかもしれない。

遺物はあまり多くない。発掘場の床面に磨り石大の磨りうす3578が伏せられていた。また、



第53図 第60号住居址 (1:60) 点と線の集合は焼土を、縦線は貼り床の範囲を示す

縄文時代の遺構と遺物

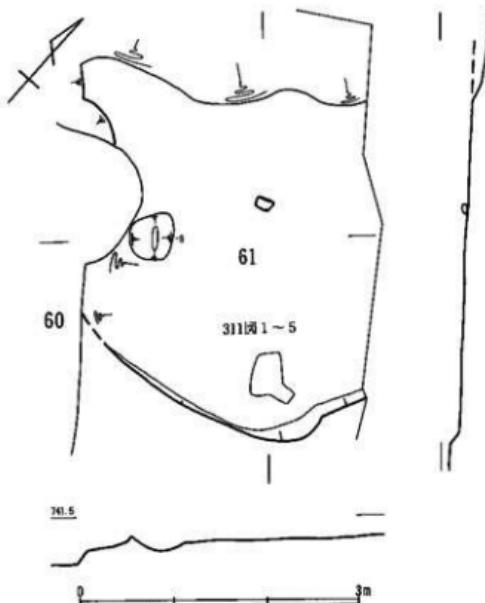
柱穴の中間に墻際に、床から数cm浮いて平板石があった。

本址は、下吉井期から中越期への移行期の住居址である。

第60号住居址（第53図）

北と西の隅が円みを帯びた、南東-北西軸の隅丸方形住居。北東で61号住居址と接するので、北東壁の張り出しこそこの影響かもしれない。暗褐色の堆土で、床面近くには焼土と炭化材があった。焼失住居であろう。炭化材は直径6cmほど、長いものではなく、量も少なかった。また、堆土上面から床面近くまで礫が混在している。特に南東側の礫は堆土上面に近く、北西側は床に近い。柱穴1・5付近には上面に集中して礫が見られた。

床はあまり堅くない。柱穴4の南側が径90cmほど、若干堅くしまっている。主柱穴は1~4であろうが、周溝に内外二時期が想定されることから、柱穴5~8が内側の周溝に伴う主柱穴であったと考えることができよう。あるいは、内側住居から外側住居への拡張ではなく、1・6・3・8と5・2・7・4をそれぞれの主柱とする横にずれた2軒となる可能性もある。なお、周溝と柱穴の一部は据ることことができなかつた。炉はほぼ中央、主軸方向に長い「8」の字



第54図 第61号住居址 (1:60)

住居址

状で、ここからも二時期あったことがうかがわれる。北西側は特によく焼けており、堅い。

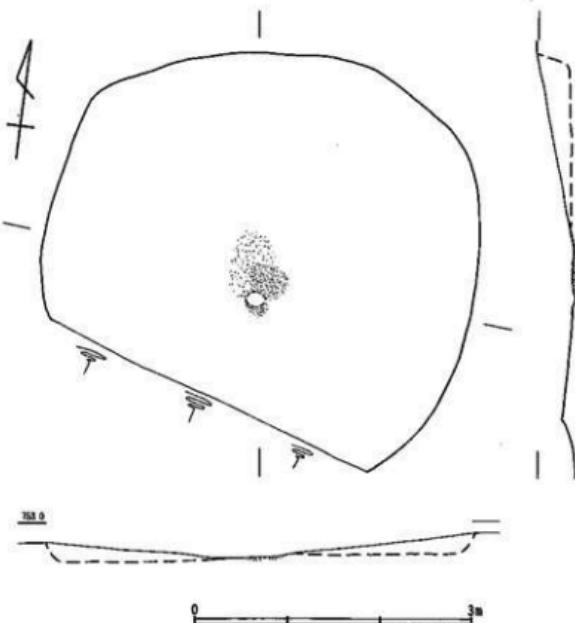
遺物は多い。柱穴3の北側床面に鏡餅状扁平石3697が、柱穴5の北側床面には鏡餅状扁平石3698と3699が縦に連なるように置かれ、柱穴8の南床面には磨りうす3696が正位で水平に置かれていた。

出土した土器は中越期を主とするが、下吉井期の土器もかなりの量が出土している。本址は花積下層期の61号址を切っており、下吉井期から中越期への移行期の住居址と考えてよいと思われる。

第61号住居址（第54図）

60号住居址の北東に接して暗褐色の落ち込みが見つかり、平らな床面が確認できたので61号住居址とした。北西側の床や壁は失われている。また、60号址と接する壁と床は一部掘り切れていません。本址は不整形で炉と柱穴がないため、あるいは小竪穴とする方が適切かもしれない。

南壁近くの床に土器がまとまっており、この北東側の床面は一部堅くしまっている。



第55図 第62号住居址（1:60）

縄文時代の遺構と遺物

遺物はすべて花崗下層期であり、この時期に位置づけられよう。

第62号住居址（第55図）

ブルドーザーによって押された土の下から暗褐色土の落ち込みが発見されたため、住居址と判断して確認調査を行った。嚴冬期であったことと、時間的な制約から完全に調査することができず、住居の輪郭と炉の確認にとどまった。

ほぼ南北軸の隅丸方形住居と思われるが、壁の上部は削平されており、詳細は不明。柱穴も調査できなかった。堆土は暗褐色～褐色で、なかでも比較的明るい色調の土が、北側の壁に沿って内側に堆積していた。炉の南の床は平らで全体的に堅くしまっているが、南西は破壊されている。炉は重複がみられ、南側に小穴を伴うが、これの深さは確かめられなかった。

堆土中には拳大の花崗岩が5・6個あったが、いずれも粉々になり、取り上げられなかった。

本址には、下吉井期と中越期の二時期の土器が混在する。移行期の住居址であろう。

第63号住居址（第56図）

ごく部分的な調査ではあったが水平な床面が確認され、住居址と判断された。床はあまり堅くない。暗褐色の堆土で、南西側の壁は失われていたが、

南西-北東方向の壁と南東-北西方向の壁と思われる立ち

上がりが確認できた。立ち上がりは切り合っており、2

軒の住居址が存在すると考えられる。双方の床は同レベル、水平で段差なく、ごく部分的な調査とあって、新旧

ははっきりしない。しかし、ロームの床面直上に、水平

に置かれていた二つの磨りうす3896と3897が南東-北西

壁の住居に伴うとすると側壁の下に潜るかたちになるた

め、これら2つの磨りうすは南西-北東壁の住居に伴う

と考えられ、こちらが新しい住居である可能性が高い。

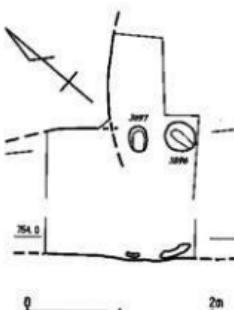
本址に伴う遺物はこの磨りうすのみであり、区別して

取り上げることもできなかったため、63号址として一括

する。

時期決定をする遺物が得られなかったため、本址の帰

属時期は不明とせざるをえない。

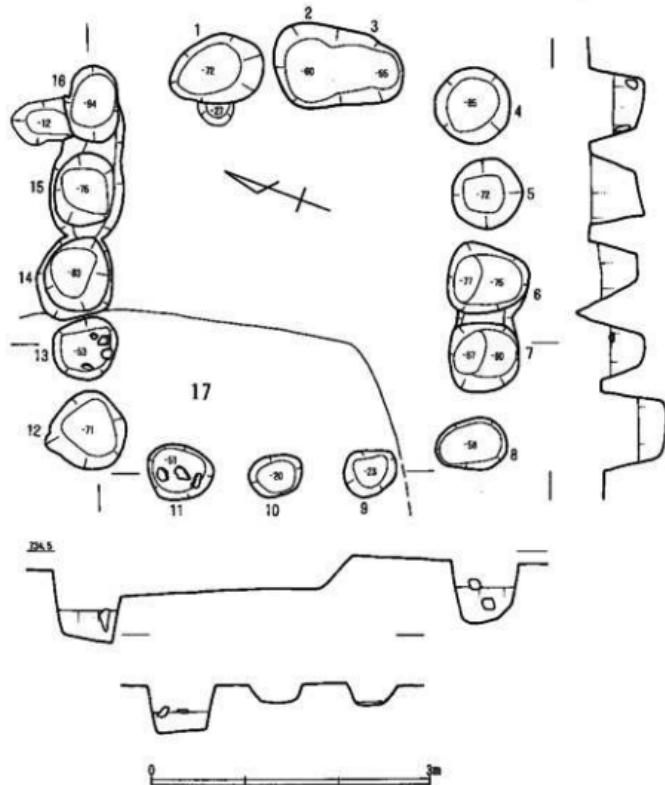


第56図 第63号住居址 (1:60)

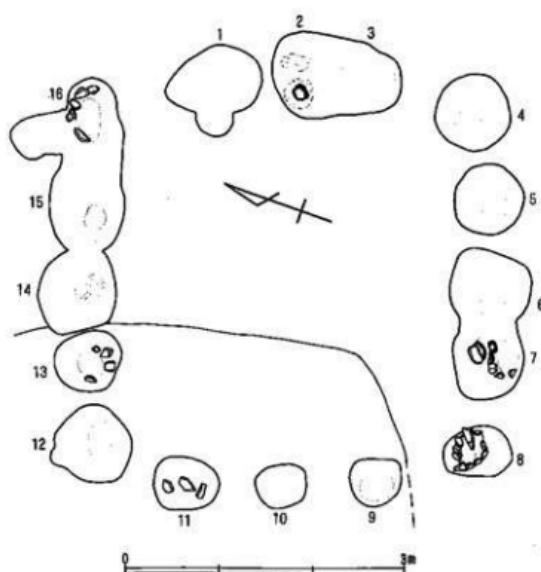
三、建 物 址

これまで「方形柱穴列」「方形配列土坑」などと呼ばれてきたものである。柱穴の個数（柱の本数）が多い辺を長辺、柱穴の個数（柱の本数）が少ない辺を短辺とするが、実際には短辺とした方が長いこともある。

これらは一部を除いて中越期に属すると考えられる。調査期間の制約により、一部は柱穴を完全に掘りあげることができず、柱痕や柱穴を確認するにとどまったものもある。



第57図 第1号建物址 (1:60) 網目は柱痕を示す



第58図 第1号建物址の柱痕 (1:60) 番号は柱痕を示す

第1号建物址 (第57, 58図)

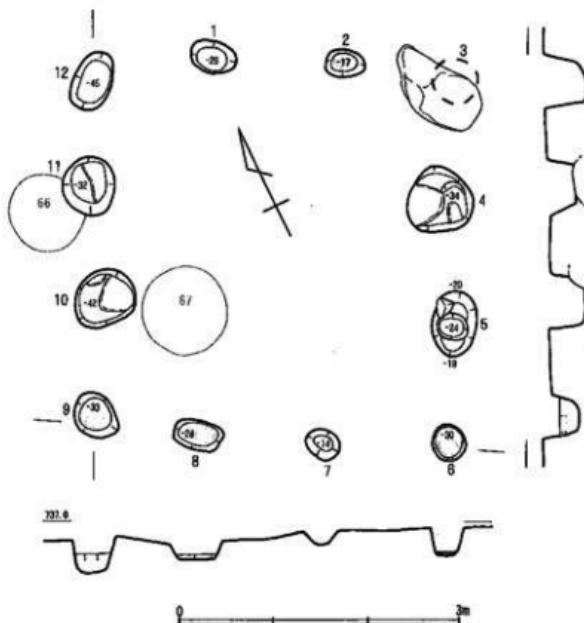
長辺5、短辺3の柱穴からなり、軸は西南西-東北東。西隅の側は17号住居址に切られ、柱穴13は17号址の鏡餅状扁平石1187に覆われている。また、ほぼ重なるように平安時代の4号住居址に切られている。柱穴2・3と6・7と14・15・16はそれぞれ連続しているが、後にはかの遺構に切られ、上部を削られていることを考えれば、柱穴4～8と12～16は掘り方が連続していた可能性が高い。柱穴7・8は地山の礫層を掘り込んでおり、地山礫が柱を支えるような構造になっている。また、埋め土の上部には詰め石がみられた。柱穴11・12は底の全面に地山礫が露出しているが水平である。

10を除く柱穴2～16には、それぞれ径20～35cmの黒色の柱痕がみとめられた。掘り方を埋めている土はローム粒や、ローム塊を多く含む褐色土で、炭粒も若干混じっている。

出土した遺物は多くないが、前期前葉の中越式が主体であり、このことから本址は中越期に属すると思われる。

第2号建物址 (第59図)

18号住居址とほぼ重なる建物址。両者の新旧関係ははっきりしない。



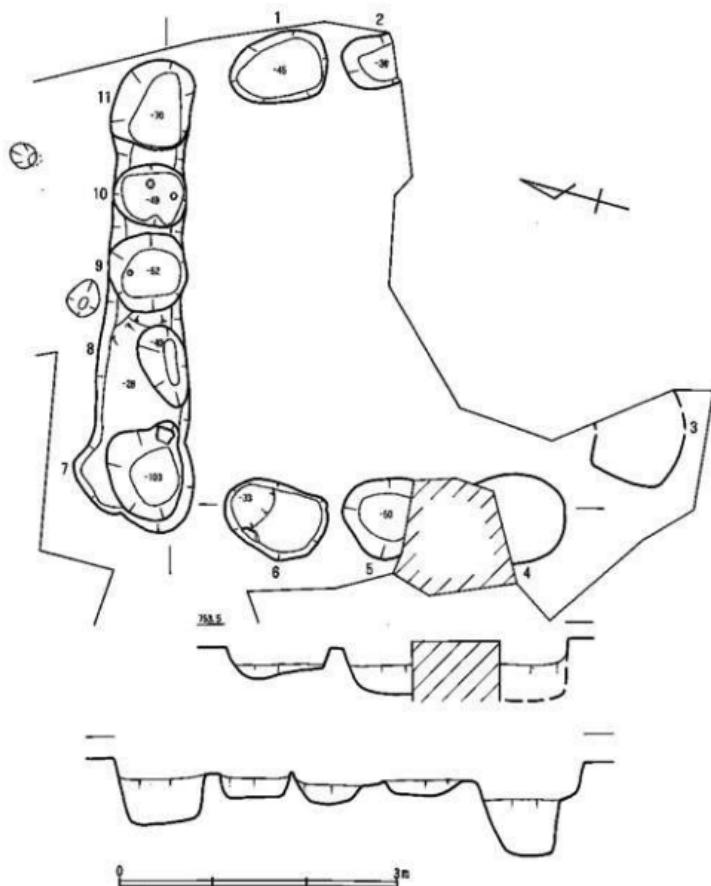
第59図 第2号建物址 (1:60) 罫目は柱痕を示す

各柱穴がほぼ等間隔で並び、各辺の本数に差がないため、ほぼ正方形のいわゆる3間×3間の建物のようであるが、柱穴1・2と7・8が四隅の柱穴を結ぶ四角形の辺よりやや外にはらむためこちらを短辺とみておきたい。してみると本址は、南南西-北北東軸の建物址だと考えることができる。

開田時に上部を大きく削られており、柱穴の遺存状態はよくない。柱穴3は確認できたが、残りが極めて浅く、遺構確認作業中に失われた。各柱穴はあまり大きくはなく、内部には地山礫が露出している。

柱穴2・6・8・9には径15~20cmの柱痕が確認できた。掘り方の埋め土は暗褐色土で、ローム粒はほとんど含まれない。

柱穴内から出土した土器は両手に一杯ほどしかなかったが、いずれも中越期の土器であり、したがって本址は、中越期に属するとみられる。

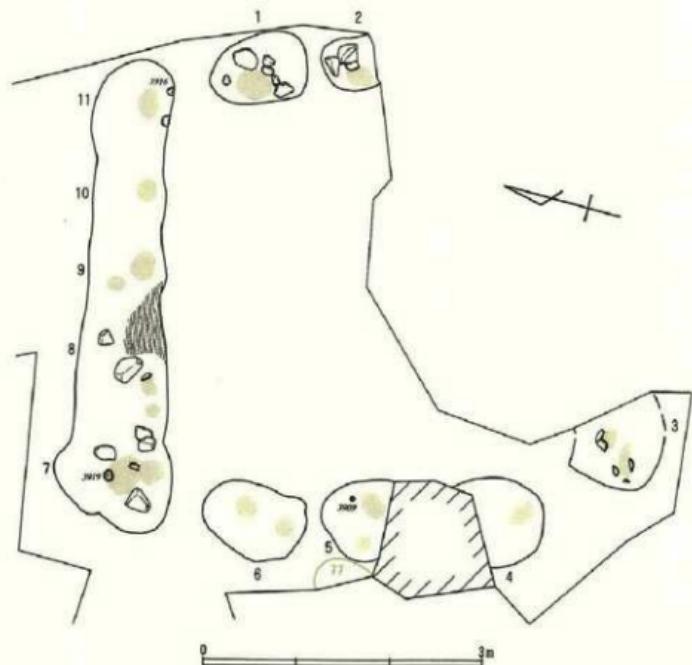


第60図 第3号建物址 (1:60) 網目は柱痕を示す

第3号建物址 (第60、61図)

長辺5、短辺3の柱穴からなる西南西-東北東軸の建物址。南東側は発掘できず、柱穴4と5の間は有線電話の鉄塔の基礎で破壊されているが、短辺はそれぞれ独立した3個の柱穴がゆるく張り出るように並び、長辺の掘り方上部は布掘状に連結している。

ほとんどの柱穴に黒色の柱痕が確認できたが、一つの柱穴に複数の柱痕が残るものが多い。



第61図 第3号建物址の柱痕 (1:60) 緑目は柱痕を、波破線は貼られたロームを示す

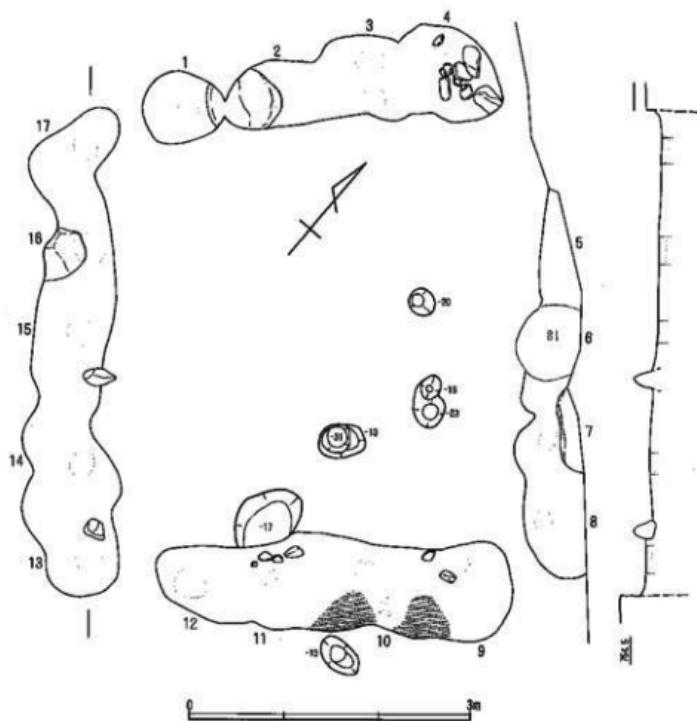
しかも、内寄りの柱痕は直線的に並んでいる。ほかの柱痕が、建て替えによるものなのか、添え柱なのかは不明である。掘り方の埋め土はローム粒を含む褐色土で、部分的に詰め石がみられた。また、柱穴8と9の間の掘り方内寄りには、7cm厚のロームが蓋のように貼られていた。柱穴3・4は柱痕のみの調査にとどまり、柱穴を掘り上げることができなかった。建物址の内側も田の地形を全て除去することができず、精査できなかった。

出土した遺物は比較的多い。柱穴5に石鍬3909、7には凹石3919、11には磨り石3916が遺存した。土器は下吉井期を主に、中越期が混じる。柱穴の掘り方内の土器も二時期が混在していることから、本址は下吉井期から中越期への移行期に属すると思われる。

なお、柱穴7の西側に1.3mほど離れて、褐色土中に集石が発見された。時代は不詳である。

第4号建物址 (第62図)

長辺5、短辺4の南東-北西軸の建物址。各辺の柱穴の掘り方は布掘状に全て連続しており、



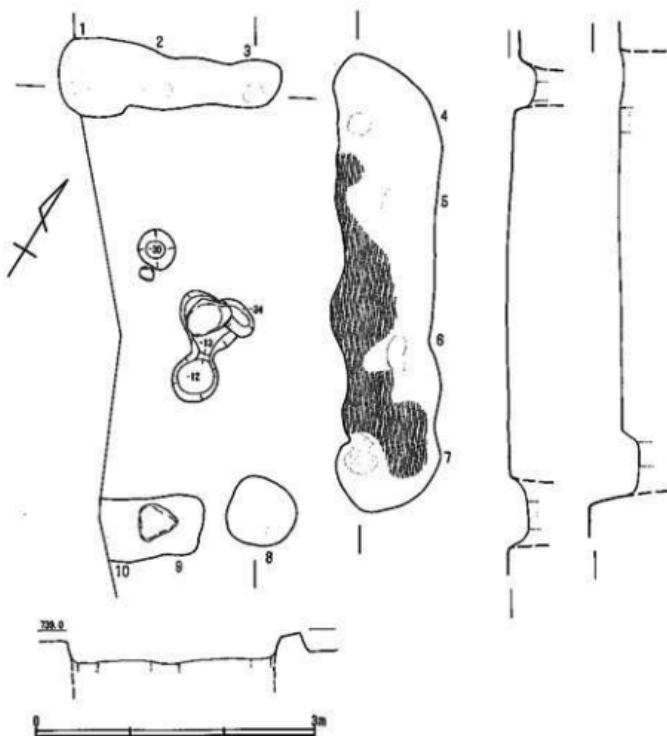
第62図 第4号建物址 (1:60) 線目は柱痕を、波破線は詰め土を示す

それぞれ四隅が開く。柱穴4は34号住居址の炉を切っている。

柱痕のみの確認調査となったため、柱穴は掘り上げていない。柱痕は径18~40cmの黒褐色でほぼ直線的に並ぶが、柱穴3と10には各2個の柱痕がみられた。掘り方の埋め土はローム塊が多く混じる褐色土で、柱穴9と13の柱痕脇には詰め石があった。また、柱穴9と10、10と11の間は、外寄りに柱を支えるために詰めたような土が確認できた。

建物址の内側はしまっておらず、焼土などもみられなかった。また、本址の内外には柱穴状の小穴がいくつかあるが、本址に属するものではないと判断される。

遺物には前期初頭の土器も混じるが、移行期の34号址の炉を切っており、これにより本址も移行期もしくは中越期に属するものであろう。



第63図 第5号建物址 (1:60) 網目は柱痕を、波破線は詰め土・詰め石を示す

第5号建物址 (第63図)

北東側半分のみが調査できた。柱穴4の北東端には54号住居址の床面の礫が一部かかって置かれており、54号址が本址を埋めているものと考えられる。

柱穴1～3と柱穴4～7、柱穴9・10の掘り方は布掘状に連続している。一般的には長辺側の柱穴、柱痕が直線的に並ぶことが多く、本址では1～3と8～10がこれに該当するが、その一方で、長辺側に幅のある掘り方の連続した柱穴があって、短辺側の両外まで延びていることが多いという特徴と矛盾している。柱穴5・6の柱痕の内側、詰め石の切れているところに柱があったと考えれば、長辺4、短辺3の南北-東西軸の建物とみることもできよう。

掘り方の埋め土はローム粒とローム塊混じりの暗褐色土で、柱痕を確認したレベルでは、柱穴4～7の柱痕の周囲に拳大～人頭大の詰め石が多く認められた。

縄文時代の遺構と遺物

建物址の内側はあまりしまっていない。

本址の帰属時期は不明である。

なお、本址の内側には、本址に属するものとは思えない、柱穴状の小穴がいくつある。本址の北東の外には掘ることができなかつた同じような大きさの穴がいくつかあり、それらとの関連が考えられよう。

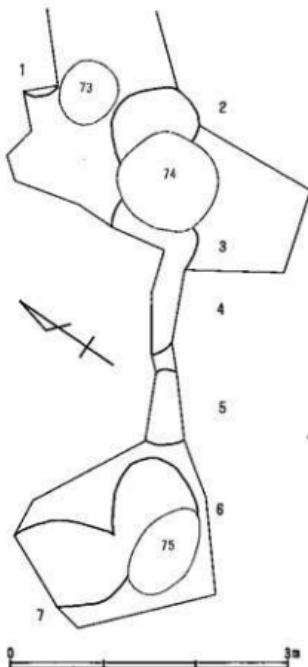
第6号建物址（第64図）

柱穴のごく一部の検出にとどまつたにすぎない。

柱穴の埋め土は暗褐色土。

長辺は5個の柱穴2～6で4.2m、南西～北東軸の建物と考えられる。一部を中・近世の小竪穴73・74・75号に切られている。

十分な調査ができなかつた本址の帰属時期は、不明である。



第64図 第6号建物址 (1:60)

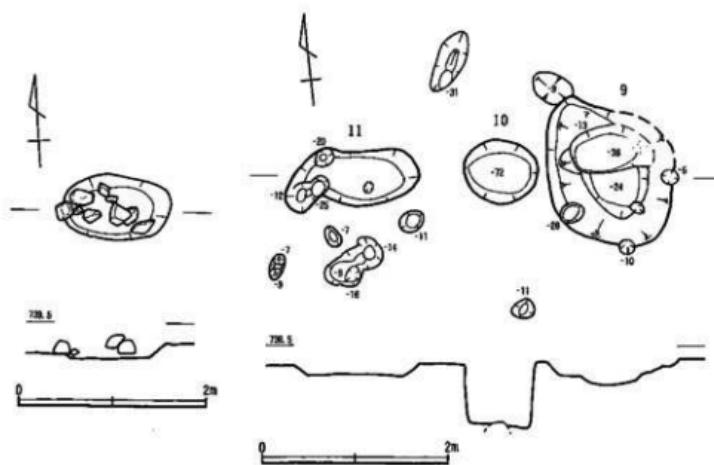
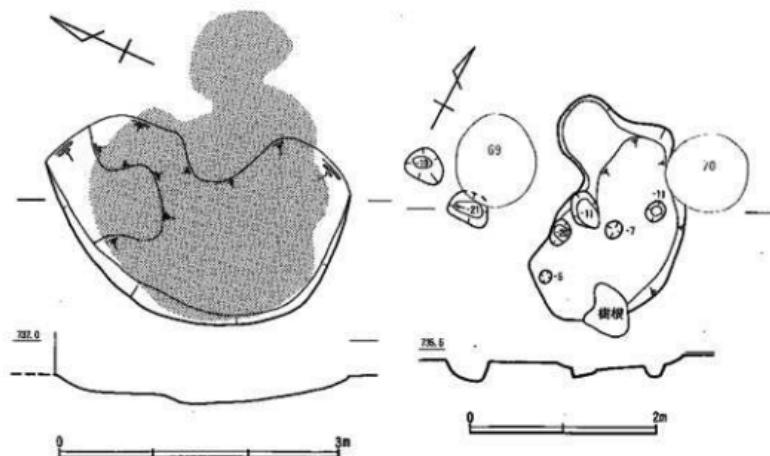
四、小 竪 穴

坂半遺跡では住居址の数に対して、小竪穴の数が著しく少ないことが特徴的である。とくに墓穴と考えられるような小竪穴はほとんど無く、縄文時代の各時期を通してこの少なさは際立っている。

1号小竪穴（第65図）

半月状に凹む小竪穴で、南西側の壁はしっかりと立ち上がっているが、北隅は褐色や黒いシミのある汚れたロームが島状に盛り上がっている。

底から20cmほど浮いて集石があった。拳大～人頭大の礫が中心で、砂岩やホルンフェルスも混じり、これらの石片も含まれていた。また東へ張り出した部分は幼児の拳大～大人の拳大の礫で構成され、凹石4043があった。堆土は集石の上部では黒色。集石以外の部分は暗褐色～褐



第65図 上段：左から1, 5号 下段：左から7, 11, 10, 9号小壓穴

(1:60) 1号小壓穴の網目は集石の範囲を示す

色。

帰属時期は不明である。なお、本址の南西には中・近世の小豊穴34・35・36号が確認されている。

2号小豊穴（第42図）

41号住居址の東に隣接する浅い小豊穴。柱穴や炉はない。堆土は41号址と同じ暗褐色土で、その新旧は全く判断できない。床は41号址に向かって緩やかに傾斜しており、あるいは41号址の付帯施設かもしれない。

床面ほほは中央に凹石4045が顔を出すように発見された。あるいは床に埋め込まれていたかも知れない。また、棒状砾器4047が41号址と接する南壁近くで出土した。

3号小豊穴（第20図）

15号住居址の南西隅と切り合う。ほほ円形の盤状の穴で、底は平ら。15号址との新旧関係は不明。

4号小豊穴（第21図）

16号住居址の西壁を切る楕円形の穴。深くないが底はほほ平ら。16号址床面レベルと大きな差はないが、16号址より明るい褐色で柔らかい堆土であり、住居とは別の遺構であることが確認された。

穴の南隅には土器19が立てられていた。土器の南側の口縁は失われていたが、平たい石があたかもこの土器の口縁のように添え置かれていた。

堆土と土器の様子から、本小豊穴が16号址を切っていると判断された。

5号小豊穴（第65図）

7号住居址の南にある、浅く不整形な穴。底には複数の小穴がある。一部は中・近世の小豊穴70号に切られている。また、南東端は樹木の根による擾乱を受けている。

本小豊穴からは棒状砾器4048、楔形石器4071、不定形の剝片石器4072のほか、図示していないものの木鳥式の薄手の土器と表裏条痕土器の2片が出土している。

6号小豊穴（第47図）

52号住居址の南隅と重複する盤状の穴。底は平ら。ともに似たような暗褐色の堆土で新旧関係は不明。

7号小豊穴（第65図）

58号住居址の北で検出された東西に長い楕円の穴。暗褐色の堆土中には礫が混在しており、そのうちのいくつかは意識的に立てられたようになっていた。遺物の出土はない。

8号小豊穴（第25図）

20号住居址の南東隅の外に検出された、繭のような形の小豊穴。南東-北西方向に長く、底はほほ平ら。堆土上面には焼土がのっていた。

9号小竪穴（第65図）

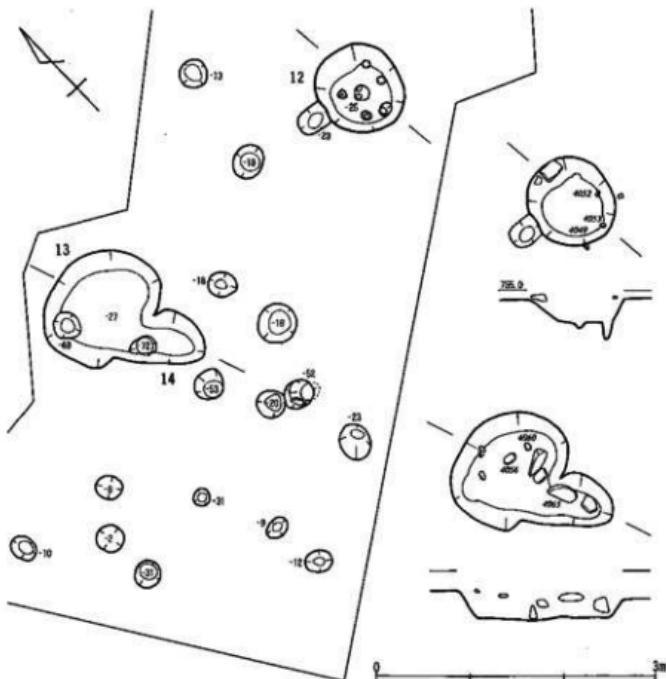
23号住居址と一部が重複するものの、上部が削られており新旧関係は不明。ローム粒混じりの暗褐色の堆土で、浅い皿状のくぼみの中に深い穴があり、この穴の底には地山礫が露出している。また、上面には焼土がのっている。土器片（第315図2～8）が出土した。

10号小竪穴（第65図）

ほぼ垂直な壁のバケツ状の穴。暗褐色の堆土で、底中央には地山礫が露出している。石庵丁4042と、硬砂岩の小ぶりな川原石4051、及び土器片（第315図9・10）が出土した。

11号小竪穴（第65図）

浅い長楕円の穴。底と西の隅に小穴がある。底は平ら。凹石4054と、厚手の土器片（第315図11）が出土した。



第66図 12, 13, 14号小竪穴 (1:60)

12号小竪穴（第66図）

ほぼ円形で洗面器状の小竪穴。底に7つ小穴がある。また西に突き出るように小ぶりな穴が接する。堆土は暗褐色。上面では等間隔で並べられたかのように疊と石器（棒状疊器4049と楔形刃器4052・4053）が同じレベルで発見された。

13号小竪穴（第66図）

東西に長い椭円で、暗褐色の堆土。14号小竪穴と一部重複するが新旧関係は不明。底がほぼ平らな盤状の穴だが、西隅にしっかりした柱穴状の穴がある。12号小竪穴と同様に上面に疊（扁平円疊4056）と石器（凹石4060）が置かれていた。

14号小竪穴（第66図）

13号小竪穴と重複するが、堆土は13号小竪穴と同じ暗褐色土で、新旧関係は不明。13号小竪穴と接する底に柱穴状の穴がある。堆土上部に鏡餅状扁平石の破片4065が斜めに立っていた。

なお、12・13・14号小竪穴の周囲には柱穴状の穴が集中していた。いずれも堆土は暗褐色～黒色の穴だが、帰属時期や性格は明らかにできなかった。

15号小竪穴（第26図）

21号住居址の西角脇にある、深さ27cmの柱穴状の穴。硬砂岩の河原石4055が出土した。なおこの周辺には柱穴状の穴がいくつかみられた。

五、黒曜石の集積

39号住居址東の黒曜石集積（第41図）

幼児の拳大の黒曜石の原石が5個集められていた。いずれも流紋岩が付着した、透明度の高い黒曜石。重さはそれぞれ65、85、85、90、135g。

41号住居址上縁の黒曜石集積（第42図）

39号住居址東の集積に比べ、半分ほどの厚さの板状の黒曜石が6個。いずれも流紋岩が付着しており、やや縞状。重さはそれぞれ30、40、40、40、45、50g。このほかに剝片が1点含まれていた。

注

(1) 下記報告書において、机原三本松遺跡の炭化物との比較考察のため、坂平遺跡の炭化材を資料化、報告した。

「机原三本松遺跡出土木炭放射性炭素年代測定報告」「机原三本松遺跡」長野県富士見町教育委員会 1998

(2) 注1と同じ

(3) 注1と同じ

第二節 遺 物

一、石 器

本遺跡からは、実に多様かつ多量の石器が出土した。大形石器には、石鎌、横刃型石器または打製石庵丁、不定形刃器、粗刃鏽器、棒状鏽器そして磨り石、凹石、團子状の丸石、磨りうす、鏡餅状扁平石、磨製石斧、先端角錐状石槌、敲打器などがある。なかでも磨り石や凹石、磨りうす、鏡餅状扁平石といった調整・製粉具が際だって多いのが大きな特色である。全点を図化した。

それらとは別に見過ごせないのは、磨り石の候補とでもいいうる相応の形や大きさの安山岩塊と、片手に収まる範囲の堆積岩や変成岩で、使用痕のみられない天然礫がかなり出土していることである。前者は100余点で、半数近くに敲打加工がみられる。後者は150点にのぼる。その数量の多さは、これらの天然礫が何らかの役割や意味を担っていたことを主張している。そこで、これらについても全て図化し、遺物として取り扱うこととした。これらを含め、図化した大形石器の总数は2079点である。

小形石器には、石鎌、有肩の刃広・側刃・諸刃の各石器、石錐、搔器、有抉石器、楔形石器のほかに刃部加工または刃こぼれのある不定形の剥片石器がある。石材は黒曜石が殆どで、原石・剥片・石核もかなり出土している。なかでも、刃部加工または刃こぼれのある不定形の剥片石器が極めて多い。これは該期の一般的な傾向ではあるが、注意される。遺構から出土したもの全てのほか、2129点を図化した。

なお、有肩刃広・有肩側刃・有肩諸刃とした石器であるが、いわゆる「石匙」と称されてきた石器を、その形態に従って呼び名を改めたものである。

以下、遺構毎にみていくたい。

1号住居址（第67図 1～14）

1は半月形の横刃型石器であろう。背には縁の表皮を残し、やや厚はったい。2は鈍角な刃をもつ粗刃鏽器で、表裏に縁面を残す。3は分厚く不格好な棒状鏽器。これといった使用痕はないが、正面側に煤が僅かに付着している。4の上下端と両側面はかるく敲いている。

5は河原石。6と7は團子状の丸石。6は周縁をいくらか敲いている。また火熱を受けたのかいくらか黒ずんでいる。8の表面は鈍い光沢を有す。周縁は敲打され、三方の張った角はやや強く敲かれて減っている。9は小形の鏡餅状扁平石で、磨り面や打痕などは見当たらない。10の表面は凸面をなすが、全体に平らですべすべとした磨り面がみられ、周縁をいくらか敲いている。やや大きいが、意外と掌にしつくりと納まる。

11は大形な平板石。左が傾くが、右側を少し嵩上げすると広い水平面となる。本面はわずかにすべすべする程度である。断面で判断するかぎり、円運動の動作よりは前後の動作のほうが合っている。

12・13は不定形剥片石器。12は内湾する小さな刃が連続する。刃部は片面からの調整。14は石錐。つくりは粗く目立った使用痕は見られない。一端を欠くのは使用による破損であろうか。いずれも墨曜石製。

2号住居址（第68、69図 15～53）

15は偏刃の石鎌の刃部とみられる。刃縁は摩滅し、大割りした反対側は全体がすべっこい。

16は肉厚な横刃型石器。背には鞣皮が残り、刃線は鋭い。17の本面側は円錐を打ち削った鞣皮の部分で、刃は表裏に打ち欠いて鋭利である。ひっくり返して拇指を当てて握るとしつりする。

18～22は磨り石。18の表裏は石鹼形を呈する。よくみると、本面側の左上と右下が対角に磨り減っている。両側縁は直線的に面取りしている。また左半分に煤が付着して、黒変している。19の表面には炭粒と煤が残着し、黒く変色している。下端は少し削げて減っている。別な裏面はやや凹面をなし、全体が磨り面となっている。両側面は指のかかる部分だけ敲打されていて、とくに左の上端部は磨り面を喰って削ぎ取っている。この磨り石の下石は凸面をなす鏡餅状扁平石だろう。21は本面側が磨り面。側面は平らに潰している。

20の上端はややざらつき、右辺から下端にかけて敲打による欠けがある。全体に褐色をした渋状のこびりつきがある。22は縱長な凹石。両面とも縱に連続する凹穴がある。また一端には敲打による潰れがみられる。23は饅頭形をした磨り石の大溶岩で、これといった使用痕は見られない。

24～30は棒状砾器。24～26と29は、歯牙で噛んだような傷痕がついている。27の各面は滑らかだが、天然のものである。30の上端はいくらかざらつく。26は割れ口まで煤が残着し、黒くなっている。28は花豆を大きくしたような小形の扁平砾。

31は輝緑岩の大形な鏡餅状扁平石。やや形がいびつである。右側を少しあさ上げすると中央が僅かに凹面となる。天然の鞣面よりは手触りがよい程度で、明確な使用痕は見当たらない。同類の32の中央には尖ったもので突いたような点状の敲き痕がある。その周辺はすべすべして造岩鉱物の輝石も磨れている。また黒い染みが敲き痕の周辺に付着している。左右の側縁は圓の断面線にかかる部分だけ敲打している。33は板状砾の破片。34は硬砂岩の大形砾。

35・36は床面出土の石鎌。35は凸基鎌。37は石鎌未製品だと思われたが、粗製鎌といるべきつくりの粗い石鎌、あるいは大形で肉厚な粗大鎌といべき一群があり、これも粗製鎌とみてよいだろう。38・39は身が斜めの有肩刃広石器で、いずれも表裏面に刃線と平行な線状痕がみられる。39は刃部の剥離が線状痕を切っていることから、線状痕が残るほどの使用のち、刃

部を部分的に再剥離していることがわかる。40・41は石錐。42は小さく薄い剝片で、一对の抉りをもつ。有抉石器に多くみとめられる摩耗や、点状痕とよばれる微小な打痕はみられないが、有抉石器としておく。43・44・45は楔形石器。

46~53は不定形の剝片。46は表裏両面、凸形の刃に沿うように、二方向の線状痕をもつ。刃縁に鋭さがなく、摩耗している。47は右端部のみが刃こぼれしており、彫器のように用いられたとも考えられる。47~53は刃こぼれ状の使用痕跡を有する剝片で、それはいずれも片面のみに見られる。

3号住居址（第70図 54~60）

54は凹石で、両側面にも凹みがつけられている。55は輝緑岩の鏡餅状扁平石。右側3分の2は縁の際まで磨れてつるつるしている。座りはよく、安定している。

56は凹基の石錐で、両脚を欠損している。57は石錐未製品であろうか。先端と基部には両面からの剥離がみられる。58は円基錐の欠損品。59・60は刃こぼれした剝片で、60は片刃である。

4号住居址（第71~74図 61~132）

61と62は横刃型石器もしくは刃器。61の刃先は薄く鋭い。62は半身を欠く。刃は本面側にのみ打ち欠いている。

63~65は粗刃礫器。63は表裏および両側に表皮を残す。表裏とともに、上下縁を階段状に打ち欠いている。刃は下辺のみで、潰したのか鈍い刃先となっている。64の片面は全面表皮である。本面側に打ち欠いて、左側縁のみ棱を潰して撥形にしている。65の片面も転石の表皮を残す。四辺とも一方向からの打ち欠きによって形を決めている。刃部のつくりは意外ときれいである。

66~84は棒状礫器。70~72には、歯牙で噛んだような打痕がしるされている。また70の三つの縁と先端は、ざらざらとした膚をなす。66の下端と67の両端は軽くついたのか、表面が剥げてざらざらしている。73~84は中形から小形のもの。66と70・73は先端が折れて、いずれも熱をうけて黒変している。85も棒状礫器に入れておく。

86~88は敲打器。86は緻密で重く、敲打器として申し分ない。またよく掌に馴染む。両端にはボコボコとした敲き痕が、表裏には歯牙状の小さな打痕がつく。87の下端もボコボコしていて、大粒な角閃石や輝石が露わになっている。おにぎりのような88の下部には、平らな敲打痕がついている。

89~93は磨り石。89は中心部にかけて、石うすの目立てのような浅い敲打が加えられている。反対面には浅くでたらめな凹みがあるが、全体的に均整のとれた凸面をなし、すべっこい。また右側縁は、敲打して面取りしている。90は磨り面が球面をなし、わりとすべっこい。91の磨り面は平らで、複数の浅い凹みを有する。裏側は、図の右側が少しこけるが、磨り面とみなしうる。この磨り石の相手は鏡餅状扁平石をおいてないだろう。92は両面がそれぞれ亀の甲羅形と石鱗形の磨り面をなし、すべすべしている。一方の凹みは漏斗状に深く、他方は連続した浅

縄文時代の遺構と遺物

い凹みである。93は表に2箇所、裏に1箇所凹みがある。もとは磨り石で、側面まできれいに磨られ、両端には打痕がつく。

94~101は凹石。94の反対側には地山の包含層に特有の皮膜が残る。95は表裏に2箇所ずつ四穴がつけられている。96の先端には93と同様の打痕がつく。100と101は粗形の凹石。100は周縁を敲いている。101の表裏中央には広めな凹穴があり、側面には、敲打によって潰れた箇所がある。

102・103は团子形の小石。102には泥状のこびりつきがみられ、103は熱を受けて赤褐色に変色している。104・105は小形な扁平円礫。106の円柱状礫の両側面は2.5cm幅に敲いて潰している。99・107・108は磨り石大の安山岩礫。99は全体に膚が荒れていて、107はざらざらしていて軽い。108の両側面は敲打潰しして、下端は左右から敲いている。109は粗い石基の鎌頭形の石。両側縁を9cmの長さだけ敲打潰しして、右側だけを平らに仕上げている。

110は大形な鏡餅状扁平石。本面が平坦な面をなすが、使用の痕跡は見当たらない。111~113(第71図)は拳大ほどの硬砂岩の河原石。使用痕などは特に見当たらない。これらの他に、磨り石大の安山岩礫が2個出土している。

115は凹基、116は円基の石錐。117・118は有抉石器で、摩耗などはみられない。119は左右対称形な有肩刃広石器。120は有肩側刃石器で、刃線に平行な線状痕がある。121は横刃型、122は弧刃の搔器。123・124は小形の拇指状搔器である。125・126は楔形石器。127~132は不定形の刃器だが、129と132は粗いながらも搔器状の刃を持つ。127~131は刃こぼれとみてよいだろう。

5号住居址(第75、77図 133~144・170~173)

133は身と幅の差が殆どなく、肉厚でがっしりとしている。裏側は素材の表皮を残し、左側縁と弧状の刃部は丁寧に加工され、刃線はよく摩耗している。134の円板形刃器は風化が著しい。本面の上辺中央に打ち割り時の打撃点が観察され、裏側は全面に薄皮を有す。下半は身が薄く、刃部はいくらか手を入れている。133に似たものか。

135は磨り石。右下が他よりも平らに減っていて、すべすべしている。両側面は直線的に削ぐように面取りしている。裏側を掌に當てると、しっくりする。鏡餅状扁平石と併用したものか。137は大きなハンバーグのよう。両面ともほどよい曲率をなすが、磨っている様子はない。両側面は敲いて真っ直ぐに削ぎ取っている。50号址に同じものがある。136は泥岩製の棒状礫器。138と139は硬砂岩の河原石。

140・141・144は拳大の安山岩礫。140の右側面には敲いたような痕跡があるが、他には特に使用痕はない。142・143は鏡餅状扁平石。142は本面側のみ、すべっこいうえに光沢がある。¹⁴³ 磨きのようだ。上側はひびに沿って灰黒色になっている。143の右側縁は半周ほど打ち欠かされている。左側の一部は強く潰され、周縁は敲いている。本面には敲打痕が数箇所あるが、使用痕

なのか目立てなのか判別が難しい。

170は搔器。171・172は楔形石器。173は片面からの鈍角な刃こぼれをもつ剥片で、搔器的な用法が考えられる。

6号住居址（第76、77図 145～169・174～179）

145・146は小形の石鋸。145は刃こぼれか、右側が少し欠けている。146はストレート製の石鋸。右半分を素材の性状線で欠失する。表裏とも上半身がつるつるとしている。尖葉形の147の基部は、本面側が削げている。反対側に縞皮が多く残す。石鋸か。148は刃器。表裏に打ち欠いた鈍い刃を有す。

149は本面側を磨り面とする磨り石。周縁は敲打整形していく、ざらつく。150は粗形の凹石。151は鏡餅状扁平石の破片。

152～159は棒状礫器。154・159の先端は刃こぼれのような小剝離痕をなしている。160は両端が折れている。163～165は硬砂岩の河原石。166は敲打器とするには十分でないが、同様の敲打痕を両端に有し、側面も敲いている。167は硬砂岩の扁平な小砾。

168・169は鏡餅状扁平石。168は表裏ともに使用痕は見当たらない。169は甲羅のような凸面をなし、周縁部まで磨れている。

174は凹基盤の優品。両脚はややねじれている。175～179は不定形の剥片石器だが、177は搔器状の刃をもつ。175・176・179は片面からの刃こぼれ。

7号住居址（第78～82図 180～341）

180は石鋸に類似するもの。右辺は貫入面から損なわれているが、刃縁は摩耗している。181は石鋸の基部で、182は刃部。183は基部を少し欠く。刃部は表裏に打ち欠いて尖葉形に整えている。石鋸とおもわれる。

184～188は石庖丁または横刃型石器の類。184の裏面には縞表が残る。刃部には割り取ったままの鋭い箇所を当てている。185は輝石角閃石安山岩製。片面に縞皮を残す。刃は主として本面側に打ち欠いてつけている。186は不綱工だが鋭い刃縁を有す。187は肉厚の石片に、本面側にのみ加工した刃がつく。188の刃縁はあまり鋭くない。189は大形で分厚い粗刃礫器。転石を一方向から割り取って刃としている。

190～210は棒状礫器。190・191は凹石と同様、2箇所に歯牙でかじったような凹痕を有す。190の先端と192の両端にはかるく敲いたような痕跡がある。193の両端は小剝離状になっている。194の両端には敲打痕がつく。197～200は丈が短く平べったい河原石だが、棒状礫器に入れても違和感はない。202～210は使用によってか、いずれも折損している。206には歯牙でかじったような打痕がつく。196は輝緑岩製の敲打器で、両端には敲打器特有の敲き痕が残る。211の両端にも敲打痕がみえるが、敲打器とするわけにいかない。

212～218は磨り石。212は右に偏って上下に「8」の字形の磨り面を有す。213の磨り面はわ

縄文時代の遺構と遺物

りと平らで、てかてかしていて中ほどに浅い凹みがある。磨り面を喰って周縁は敲打潰している。214と215は両面が磨り面。214は両面に長く連続した凹穴を有し、左側がとくに煤けている。215は全面に土がこびりついて落ちない。2点とも周縁を面取りしている。216は本面側が磨り面で、反対面に僅かに天然の鱗皮を残す。217は両面とも磨り面をなし、縱に連続する凹穴をもつ。周縁をうすく削いでいる。218は輝緑岩製。横断面で明らかに凹面をなし、てかてかしている。また下端には潰れ痕がある。この曲率に合うのは鏡餅状扁平石をおいてない。

219～236は円石の類。219は片面にのみ不連続な凹穴がつき、両端には打痕がある。220は輝緑岩製。歯牙でかじったような凹痕が2箇所ある。棒状砾器とするにはやや抵抗がある。上側は割れた面を潰して滑らかにしている。221・222は片面にのみ浅い凹みを有し、側縁を敲打面取りしている。

224は粗形の凹石。225は芋のようにすんぐりしてて、溝状の凹みがつく。226と227はおむすびのよう。226の本面側には大きな回転状の凹穴があり、三方の角には敲打痕がある。火熱を受けて全体が灰色に変色し、肩が荒れている。227の両面には、漏斗状の大きな凹穴がある。228～236は表裏に凹穴をもつもの。231の右側縁は敲いて面取りしている。右側半分にロームのこびりつきがあり、洗っても落ちない。232の裏面には浅い凹みが一つある。233には表裏とも長く連なった凹穴がつく。左側縁は火熱を受けたのか、灰黒色に変色している。234の裏面は、雨垂れ状の浅い凹痕があり、火を受けたのか黒色になっている。235は全体にすべすべしていることから、河原の石だろう。凹みは片側のみである。236は先端に寄って、表裏同じ位置に凹みがある。先端は敲打によって潰れているが、その面は意外に滑らかである。237は磨り石大の安山岩隕。これといった使用痕は見当たらない。

肉厚でゴロンとした238は、右辺を大きく欠き取り平らに整形している。円柱状を成す239は整形されたものはっきりとしない。240～261は团子状の小石。244・250・251は皮膜のかぶった地山の小砾。使用痕などで目立ったものはないが、241と258には煤が付着し、259と261は熱を受けて変色している。

262～264は扁平な小砾で、使用痕などはみられない。265は鏡餅状扁平石のかけらであろう。266は堆土中から出土した。黄色がかかった地山の平板石。本面側はおよそ平らで、三方をはつっているほかは使用痕など見当たらない。前に見た小形の8も同じようにしてあった。裏側は、出っ張った部分を所どころ敲打している。

267～277は凹基鐵、278は円基鐵。279～283は粗大鐵であろう。ホルンフェルス製の有肩諸刃石器284は両側縁にバランス良く刃が作られている。285・286は有肩側刃石器、287は有肩刃広石器の茎状の部分のみの欠損品。288は有肩刃広石器の未製品。289・290は加工された痕跡をもつ剥片だが、形状などから有肩刃広石器の未製品とみておきたい。291～294はいずれも縦

長の剥片を用いた搔器。295・296は横刃の搔器である。297はチャート、298～300は黒曜石の石錐。301は抉りがしっかりしていないものの有抉石器と思われる。摩耗はない。302は黒曜石で、片面のみ石錐のような細かな剥離が施されているが、いかなるものか不明。303・304は楔形石器。

305～338は不定形の剥片石器、もしくは使用痕を有する剥片。うち、305～308は外湾する刃をもつもので、305は刃部に強い線状痕を残す。いずれも片刃。339は柱穴内から出土したチャートの搔器。欠損して刃の一部分しか残っていないが、あるいは有肩刃広石器であったかもしれない。340と341は床面から発見された土器39と共に取り上げられた、刃こぼれした黒曜石の剥片。

8号住居址（第83～88図 342～554）

342は短冊形の石鋸。薄身で軽く、右側縁に疊皮を残す。刃先はさらに薄く手が切れそう。断面線のすこし上から下手の両縁は、土擦れの摩耗が看取される。343は刃器。片面に表皮を残すやや厚めな石片で、刃部は僅かに摩耗している。

344～377は棒状礫器。349と350はこの部類では大形に属す。346と347は一端側が欠け飛んでいる。348と小形の部類に属す363には、両端に敲打痕が見られる。また両端が折れた368と369や、中程から折れているものが目につく。353の下端は鋭く刃のよう。粗刃礫器としておく。378は敲打器だろう。先細りした先端には特有の打痕がつき、意外と重い。

379～390は磨り石の類。379は石鱗状にちかい磨り面を有する。側縁の全周を面取りしている。380も本面側のみ、均整のとれた亀の甲羅状の磨り面をなす。ずしりと重く、両端には打痕がつく。381は表裏とも石鱗状の磨り面を有する。右側面は敲いて面取りし、平滑になっている。そして火熱を受けて黒く変色し、ひびが入り爆ぜている。382には両面に筋状の浅い凹みがある。反対側が磨り面で、左下のみが減っている。また片側のみ敲打面取りし、上端は凸凹している。383は本面側が磨り面をなし、両面には大きめな凹穴があり、側面の所どころを敲いている。384はゴロンとした球形を成す。本面側は磨り面として申し分ないが、ざらざらしている。いっぽう裏側の中央はすべすべしている。両側面を面取りしている。

385は右側が磨り面で、浅い溝状の凹穴がつき、全体に煤けて黒変している。本面には連続する深い溝状の凹穴がつく。こちらも磨り面としてわるくはないがはっきりと断定できない。386は全体に荒れてざらつくが、本面側は摩耗していく右下が他よりも磨り減っている。387には中央に深めな凹みが、そして裏面には斜めに連続した凹みがつく。裏面側の左上が磨り減っている。側縁は複数の磨り面をなす。388は片面にのみ凹穴がある。いま一方はすべすべとした磨り面であり、火を受け黒変している。389と390は共に表裏に凹みを有し、両面が磨り面をなす。

391～396は凹石。391は表裏に2個ずつの凹みがあり、反対面の下方が煤けている。392は小

縄文時代の遺構と遺物

さな疊の平坦面に、臍のような小さな凹みがある。肉の薄い393の表裏には2穴ずつの凹みがつく。394は表裏同じ箇所に凹穴があり、裏側は1個のみである。395は肩荒れがひどく、輝石などが浮き出ている。396はゴロンとした疊に浅く広い凹みがつき、裏面には連続した凹みがつく。

397は鏡餅状の厚ぼったい安山岩疊。中央には、底が平らなクレーター状の凹みが大小1個ずつある。また本面側は磨っている模様である。側縁は全周敲打して、片側は平らに面取りしている。時期は中期末葉の曾利期であるが、唐渡宮16号址から同様の石器が出土している。大きさはほぼ同じで平たく、まさにお供え餅のようだ。中央に深い凹痕がしるされているのも共通している。⁽¹⁾

398~410は団子状の小石もしくはそれに類するもの。河原または地山の包含疊を用いている。398・401・407・408・410は、地山疊特有の皮膜をかぶっている。406は火熱を受けて赤く変色している。411~419は磨り石大の疊。411の中軸線は、背骨のような稜をなす。412の右側縁は敲打面取りしている。413はそのままで磨り石として使える疊。上半にはひびが入る。414は形の整った団子形の疊。415は片側が少し痩せているが、大きさなど414によく似る。

416は全体に火熱を受け、煤がついて黒く変色している。また全面にわたってひびが入り、今にも剥げてしまいそうだ。そして右側縁は敲打によりすこし抉れている。417と418は不格好な輝緑岩の転石で、使用痕などは見当たらない。419は大粒の輝石が目立つ扁平な疊の半欠品。

420~430は、扁平かそれに近い河原石。唯一、人の手が加わったものが420で、両端に打ち欠き痕がある。428の上端にもみられるが、自然のものか人工的なものか判別が難しい。433はスレートの扁平疊。真っ直ぐな下部が刃もしくは使用面で、擦痕状の細い線がつく。表裏には、下半のみに刃の向きに沿った細い線状痕がみえる。擦切り用の石器か。434と435は大形な鏡餅状扁平石のかけら。双方とも磨り面などは見えず、手は加えていないようだ。

436~439は凹基鐵で、436は五角形鐵状に先端が絞られている。440は赤チャートの有肩諸刃石器で、住居北西壁に近い暗褐色の堆土中より出土。薄手で周縁に細かい剝離がめぐる。441は身が斜めの有肩刃広石器で珪質頁岩製。442の珪質頁岩の搔器は剝片の形状や質が441とよく似ることから、同じ母岩から剝がされたものかもしれない。443は黒曜石製の大形で肉厚な搔器。刃部の剝離も揃っていて美しい。目立った使用痕はみられない。444・445は横刃の搔器。446は、裏に下端の刃線と直交する方向に線状痕がみられる。また上端の、ちょうどT字剝刃でいう刃の位置にも刃が作られている。447も搔器。448・449も搔器だが、報長剝片の両側縁に刃をつけた、いわゆるサイド・スクレイパー。450は剝片下端に刃がある。

451は楔形石器。452・453は下端を両面から調整したもので、刃物というより楔のような使用法が考えられる石器。454~477は使用痕を有する剝片。いずれも微細な刃こぼれがあるが、471~477は片面からの刃こぼれで内湾する小さな刃である。478は表にのみ丁寧な剝離を施し

た鉄片。その部分は刃にはなっていない。

479から488は石鎚。480は両側縁が絞られて三叉状。側縁の内湾する石鎚である。483～488は粗大鎚であろうか。489は珪質頁岩の有肩刃広石器で、抉りは小さく、茎状の部分が大きい。490は頁岩製の有肩刃広石器。身はバランスのよい三角形である。

491～495は搔器。特に492は有肩刃広石器のように抉りをもつが、抉りに対する刃部のあり方が特徴的であり、他の遺構からも同様の搔器が発見されるにいたって、定形化された搔器の一器種とみることにした。ここでは「糸巻形搔器」とする。表の一部と裏面に刃線に直交する方向の線状痕をもつ。これにより、刃線におおむね平行な線状痕をもつ有肩刃広石器とは使用法が異なっていたことが明らかである。また、刃部の再調整が行われている。

496～501は石錐。498は基部に一対の抉りをもつもので、14号住居址下層に類例（953）がある。502～504は楔形石器。505～554は不定形な剥片石器および剥片で、ほとんどが丸こぼれした鉄片。刃線の形には外湾刃、直線刃、内湾刃のほか、きわめて刃部の小さいものがみられる。

なお、344・345・347・350～375、378～381、383～386、388～402、404～411、415～419、436～478は床面～堆土下層出土、346・349・376・377・382・387、403・412・414、479～554は上層出土の遺物である。

9号住居址（第89、90図 555～580）

555は裏面に転石の蹠皮を残し、片面側にのみ打ち欠いた粗刃器。刃先はいくらか手を加えてあるらしく、意外と鋭い。蹠皮の側の中央は火を受けて黒色に変色している。556と557は凹石。やや長めな556の裏面には、縦に2個ずつの凹穴がある。558と559は磨り石。558の裏面は平らで、磨り面として申し分ない。裏側はすべすべとした磨り面をなす。559は表裏とも右上と左下が対角して、磨り減っている。裏側には浅い凹穴が縦に2箇所つく。両側縁とも面取りしている。上端は黒く煤けている。

560は方角状の蹠。歯牙で噛んだような深いあばた状の打痕がつく。反対側は磨り面に似て、すべすべとした感触がある。両側面は直線的に大きく削ぎ落とし、両端は敲いている。561は大形の棒状蹠。全体の2割ほどに地山の包含蹠に特有の赤い皮膜が残る。火熱を受けたのか、2箇所剥落している。562は磨り石大の球状蹠。右側面は面取りして平らにし、さらに下端は2.5cm大の円形に敲き痕がついている。563は薺玉大の蹠。膚は荒れてざらつく。564と565は扁平の河原石。それぞれ縁辺の一部が欠けている。

566は磨りうすの半欠品。中央のへこみは浅く、該期の特徴を備えている。目立てたばかりでざらざらとしているが、何故か削られている。567～569は大形な鏡餅状扁平石。567の両面は滑らかだが、天然か人為的に加工した面かは定かでない。座りは両面ともよく、本面側には突いたような浅い凹みが7～8箇所ある。もう一方には、凹石と同じ打痕が散在する。

568の平坦部は火を受けて黒く変色している。569はレンズ状の断面形をなし、安定しない。

縄文時代の遺構と遺物

中心部の径20cmくらいの範囲はざらつきが少なく、輝石が磨れて平らになっていることから、いくらか手を入れているようだ。右下の周縁は打ち欠いている。570の磨りうすは中期中葉のそれと見紛うほどの作である。うすのへこみはゆったりとしていて、よく磨れている。縁の左辺は直線的で右辺が弧を描くように減っているのは、右腕の前後運動が反映されたものであり、左側の立ち上がりが心なしか急なのも、その結果生じたものと判断される。そして本面側には、漆またはコールタール様の何かでかてかとした染みが広い範囲に付着している。

571はややす詰まりの凹基鎌。572は身が斜めの有肩刃広石器で線状痕をもつ。573は抉りを有し、裏面の強い線状痕は刃線に平行している。その在り方は有肩刃広石器の線状痕と同じだが、ここでは形態を優先して搔器とみておきたい。572・573の2点はいずれも柱穴6から出土した。古い柱穴を埋める際に故意に埋納した可能性がある。574は糸巻形搔器。素材削片の形状を側縁の抉りのようになるよう工夫して刃をつけたものであろうか。575は楔形石器。576～580は不定形の剥片石器および使用痕のある剥片。うち579は搔器状の刃をもつもので、搔器としてもよいかもしれない。なお、571と579は土器28とともに出土した。

10号住居址（第91～93図 581～658）

581は石斧の基部。582・583は石斧だろう。582の身は厚ぼったく、刃部は表裏に加工している。先端左辺の刃縁はよく摩耗している。先にみた183が同類のものだろう。583の基部は厚く刃部は薄い。584・585は石庖丁ないし横刃型石器。片面に素材の膜皮を残す。刃はさほど鋭くない。585は左右とも貫入面から折れていて、左側は風化している。背の稜は漬しを加えている。

586～588は棒状礫器。586には噛み傷様の打痕がある。上端の裏側は使用によるものか、大きく剥ぎとれている。587は手触りのよい、すべすべとした擦面をしている。両面には歯牙で噛んだような傷痕がみられ、下端には敲き痕がある。588の両端には打痕がしるされている。

589～596は磨り石・凹石の類である。589は表裏に一対の凹みを有し、両面が磨り面をなす。本面側はわずかに凹面を呈し、反対面は石鹼形をなす。590は表裏とも磨り面をなし、側縁全周を敲打済ししている。火中に投じられたのか、ひびが入り割れています。そして本面側は黒く煤けている。591も表裏とも磨り面をなす。本面側がとくに光沢を有し、右下はすべっこい。また右側縁を敲打している。593の本面側には、縦に不連続な凹みがある。反対面は石鹼形に磨り減っていて、左右の側縁と下端を敲打している。

592～596は円石。592は表裏ともに縦に連なる似たような凹穴をもつ。側縁の上下に打ち欠き痕を有す。全体に膚荒れし、灰赤色に変色している。594は断面が三角で、連続した凹穴をしるしている。595は平たい饅頭形で、表裏に浅く大きな凹穴が一対ある。596は両面に2個ずつの凹みがつく。そして両端には一円玉大ほどの打痕がある。

597～600は石の團子あるいはそれに類する小形の安山岩礫。597と599は火熱を受けている。

601と602は磨り石大の安山岩礫。下側を除く三方を敲打している。602は表裏とも凸凹して安定しない。

603～605は扁平の小さな河原石。606は小形の棒状礫器。両端は打撃によって割れたり、剝げたりしている。607は皿状を呈する扁平な安山岩で意外と軽い。下端の敲打潰し以外に使用痕などは認められないが、もしかすると小形の磨りうすかもしれない。

608～613は石鎌。総じて肉厚で整形も粗い。614は左右対称で形の整った有肩刃広石器だが、表裏両面から均等に剥離しており、断面が蛤刃になっている。また刃縁中央は刃が潰れている。615の靴形の有肩刃広石器も刃部の剥離は614と同様で蛤刃となり、刃縁もまた同じように潰れている。この2点は、刃部の再調整を繰り返したために刃が潰れて使用できなくなった状態と考えられるが、両面からの均等な剥離の仕方はこの種の石器にはあまり見られない。

616～622は搔器で、うち616・617は小形の拇指状搔器。623～627は石錐。628～631は楔形石器である。632はつぶれ気味の刃をもつ刃器、633～657は不定形の剥片石器および使用痕のある剥片。658は加工剥片としておく。

11号住居址（第94、95図 659～703）

659は鈍角な刃をもつ粗刃礫器。表裏に打ち欠き、右側刃を潰している。660～662は石庖丁もしくは横刃型石器の類と思われる。660は左側と刃部以外は、素材の礫皮を有する。被熱して赤味をおびている。661は半欠品。背から裏側にかけて礫皮を残す。外湾する刃は表裏に加工しているが、鋭くはない。やはり火熱を受けているのか、赤変して煤が付着している。662は背と裏側の下半に素材の礫皮が残る。外湾する刃は鋭く、存外掌にしつくりする。663は庖丁というより鎌形の石器。割り取った素材に、左側の下刃だけ加工している。鎌としてこちら側に柄をつければ、左利き用となる。全体に茶褐色の染みがついているのも気にかかる。

664は中期でいう靴形石器であり、裏側に礫皮を残す。刃は表裏に小さく加工している。665は本面側に礫表をもつ刃器。下刃の銳利な部分の表裏に、さらっと刃をつけている。

666～671は棒状礫器。歯牙で噛んだような浅い打痕がつくものが多く、666と668・669は両面に、671は片面にみられる。また666・668の両端には打痕がつく。搗くというような作業と関係するのか、折損しているものが4点ある。また670は火熱を受けて赤変している。

672～675は磨り石。672は本面側に浅く乱打した凹みを、反対側には縱に2つの凹穴を有する。本面側が磨り面で、全体に凹面をなす。周縁を敲打して、左右両側は磨り面を喰って面取りしている。673の磨り面はざらつく。反対側は地山礫の皮膜がのこる。火熱を受けて灰黒色に変色している。674は浅い打点状の凹みがつく。裏面はすべすべとした平らな磨り面を呈する。周縁は敲打され、左右両側は面取りして平滑になっている。675の中央には、幾つか集合した浅い凹穴がある。裏面はほぼ平らな磨り面をなす。全周を2cmの幅で敲打している。手にして使うには、限界の大きさである。

縄文時代の遺構と遺物

676は扁平な河原石。677～679は団子形の安山岩礫。677は礫皮の色が失せて灰色に変色し、ひびが入って半分ほどが焼けている。678と679の表面はすべすべしていて、整形しているようだ。678は火を受けて黒くなっている。679は全面にロームが付着している。680の先端角錐状石櫂は阿久遺跡で「先端研磨石器」とされたもの。⁽²⁾ 平らな敲打面がベン先状に対面している。

681・682の石錐は、整形が粗く肉厚な粗製錐。いずれも先端に使用によると考えられる衝撃剝離が認められる。683・684は未製品とするが、粗製錐としてもよいかもしれない。685は輪形の有肩刃広石器で、両面に線状痕を残す。686～689は石錐。690は有肩刃広石器の未製品であろう。691・692については、製作途上の剝片であろうか。693は上端を除く周縁に刃が作られている握指状搔器。円形搔器とみてもよいかもしれない。694は横刃の搔器。695は刃線に平行な線状痕と、裏面には摩耗痕をもつ剝片石器。696は楔形石器。697～703は不定形剝片石器、および刃こぼれのある剝片。

12・13号住居址（第96～102図 704～903）

704は薄手の石斧で、基部を欠損している。両刃で、刃線はゆるく弧を描き、側縁は狭いながらも面がある。部分的に素材となった岩石の膚が残されており、研磨痕もよく残る。一見横斧かと思うような形状だが、刃部はほぼ均等な両刃であり、使用痕や刃こぼれの様子から縱斧と判断される。刃縁の磨耗は著しく、ひだ状の使用痕が顕著である。また側縁近くに黒色の付着物がみとめられる。石材は淡い乳白色～灰色の蛇紋岩（リザータイト）。

705～711はいずれも破損した石錐。705の先端は左に延びるようで、先に見た664のような形態になろう。706の身は分厚い。刃先の右側のほうがよく使われている。707の刃先は均整がとれている。裏側の先端は土擦れの跡がよく残る。708の基部は貫入面で斜めに失われ、刃部は欠損している。709の基部の両側縁は敲いて潰しを加えている。710は、弧刃の角と裏側に土擦れによる摩耗が認められる。711は身の厚い小形の錐。刃先がいくらか摩耗している。712の裏側には礫皮が残る。刃先は手を加えているようであり、手鍼の類に含めておきたい。

713は石庖丁。左側は本面側に欠いて抉りをついている。刃縁と表面がすれて摩耗している。さらに左側縁の抉りの部分と右側縁の抉りの一部、上辺中央の小高い位置から左にかけての稜が摩滅し、光沢を有している。714は刃器。刃先は表裏に細かく加工している。715は大形な刃器と目される。刃部は多くを欠損するが、一方向に剥いた片刃である。716は横刃型石器。打ち割ったままの鋭い端縁が刃に相当する。717は粗刃器。階段状に作り出した刃部は、いくらか摩耗しているようだ。718は中期でいう靴形石器に類似する。肩の部分はそれなりに抉りを入れ、稜を潰している。刃先は擦れています。

719～732は棒状礫器。719の片面と728の両面には、歯牙で噛んだような打痕がつく。720の両端と724の下端には敲き痕がみられる。727・730・731は途中から折れている。733～736は河原石であるが、棒状礫器に入れてもおかしくはない。安山岩の細長い736には使用痕などみら

れない。737～744は扁平もしくはそれに類する小石。使用痕などは見当たらない。輝緑岩の745は何の変哲もない小形な砾。746は輝緑岩の柱状礫。両端は折れて壊れているところもあるが、下端の一部に敲打痕が僅かに確認できる。全体がうすく黒ずんで変色している。

747～759は磨り石の類である。747は石鹼形の磨り面をなしすべっこい。裏側は僅かに凹面となり、真ん中に浅い凹みがある。両側縁は面取りして平滑になっている。そして洗っても落ちない泥状のこびりつきがある。748はひどく腐荒れしている。本面側には溝状の凹みが二条斜めにつく。両端は敲いているのかざらざらとし、右側面は面取りしている。749は両面が磨り面で、本面側が亀の甲羅形、裏面が石鹼形を呈する。本面は周縁が磨り減ってすべすべしている。側面は全周敲打していて、左右は磨り面を喰って直線的に面取りして、滑らかになっている。750は表裏に凹穴を有し、両面が磨り面をなす。本面側は平らで少しづらつき、反対側は亀の甲羅形に磨り減る。両面とも左上と右下が対角して磨り減っている。側縁は全周敲打され、両側は磨り面を喰って面取りしている。

751は表裏に縱方向の凹穴があり、本面側に磨り面を有す。両側は磨り面を大きく剥ぎ取るように面取りしていて、とくに右側は平滑になっていて、まるで磨り面のようだ。また本面から左側にかけて変色している。752は石鹼形の磨り面を有し、右下の減りが強い。凹みは縱に幾つかざつとつけられ、両側面と下端に敲打痕がある。753には不連続な凹みが斜めに、裏には不確かな浅い凹みがつく。ややざらつくが磨り面を確認できる。右側面のみ敲打面取りしている。754は細身の磨り石。凹みは釘先で突いたような浅いもので、裏側は縱に長くついている。磨り面は裏側に認められ、少し捩れている。また右側は磨り面を喰って面取りしている。755の磨り面は本面側の右半に偏っていて、つるつるとしている。表裏ともいい加減な凹みが縱方向につく。側縁は幾らか敲いている。両端にも敲打痕がみられる。

756は表裏に浅い凹みを有す。裏面が均整のとれた石鹼形の磨り面をなし、周縁は敲打している。757は石鹼状のつるつとした磨り面をなす。758の表裏には浅いだらだらした凹みがあり、裏側が磨り面でわりと平ら。左側縁は火熱を受けて変色している。759には雨垂れ状のごく浅い敲き痕がある。左側が大きくこけるが、明らかな磨り面を有す。両側縁と下端を敲打している。

760～763は粗形の凹石。760は表裏に2個ずつの深い凹穴がつき、火熱を受けて全体が黒く変色し、上手は欠かれている。761は多孔質の重い安山岩。表裏ともに一つずつの凹穴を有す。762は3～4個の連続する深い凹穴が表裏につく。763には4～5個の凹みが縱に長く連なっている。裏側は浅い凹痕が縱に連続している。

764～772は团子もしくはそれに類する小砾。764は少し平べったい。中ほどに凹穴の一部が残ることから、あるいは凹石なのかもしれない。765は整形している。中央に凹みがつく。766と769・772は地山砾。771は均整のとれた大福餅のような砾。三方には小さな敲打痕がみられ

る。

773～778は磨り石大の安山岩礫。773は磨り石より一回りほど大きい。左側縁の一部を面取りし、右側縁も敲いている。774は全体を敲いて整形しているが、形が変わるほどでない。776は地山の包含砾でごつごつしている。777の真ん中には不確かな凹みがみえる。火熱を受けて灰色に変色している。

779は磨りうすのミニチュア品か。全体が膚荒れしてざらつく。凹みも、天然のものか人工的に凹めたものか直ちに判断できない。780～782は大形な鏡餅状扁平石。780は右側をすこし嵩上げすると平らになる。天然の感触とは違うすべすべした手触りで、硝のようなものか。781の所どころには凹痕がしるされ、中程には歯牙でかじったような打痕が散在している。目立てなのか使用痕なのか判断できない。782は側縁の所どころと下端を敲打していく、とくに下端は抉るように整形している。全体にロームがこびりついていて洗っても落ちない。783は御荷鉢緑色岩。裏側は転石の砾表面。本面側は右側から打ち欠いている。

784～817は石鎌である。全て黒曜石製。784～799のように剥離が揃いバランスのよいものと、800～809のように剥離が粗くごつごつしたものがある。側縁もやや外へ膨らむもの、まっすぐなものなどさまざままで、790・794のように鋸歯状になるもの、799のように先端が絞られた形の五角形鎌、805のように寸詰まりになるものも存在する。一方、807～809は円基というよううに、本住居址出土の石鎌には、坂平遺跡で出土する石鎌のほとんどの形をみることができる。810～814は粗製鎌であろう。また、815・816のようにこれ以上の調整が不可能なものもあり、これらも石鎌とみておきたい。あるいは石鎌のミニチュア品という見方もできるだろうか。

818は黒曜石の有肩刃広石器。819は欠損しているが、形状から有肩諸刃石器とみてよいだろう。820は水晶製の有肩側刃石器。透明度の高い良質な水晶で、遺跡から水晶の剥片や結晶は散見されるが、珍しいものである。821～827は搔器。821は有肩刃広石器の欠損品かもしれない。824・826は拇指状搔器であろう。827は小形の円形搔器である。828～832は石錐。833は有抉石器で、両抉り部を結ぶ帶状の範囲以外は小さな打痕である点状痕や、線状痕、摩耗が著しい。834～844は楔形石器。845～847は加工剥片。848～903は不定形の剥片石器および使用痕を有する剥片。848・852・854・858・860・892などは刃を作り出しているとみてよさそうだが、ほとんどは刃こぼれしているにすぎないものである。

14号住居址（第103～106図 904～1000）

904は刃に当たる箇所を斜めにうすく加工している。靴形石器に似るが、器種を判別しがたい。905は横刃型石器もしくは石庖丁。裏側は素材の表皮を残す。外溝する刃部は、表裏に打ち欠いて刃をついている。やや大形で肉厚だが、本面側に拇指をあてて握ると馴染む。906は板状の安山岩礫で、砾面の一部を打ち欠いて鈍い刃をついている楔形刃器。907の刃は主に本面側に打ち欠いている。刃器の一部だろう。

908～922は棒状縦器。910と911の両端は大きく削げている。また被熱のせいか、ひびが入りボロボロしている。915も片側の両端が失われている。923・924は扁平で長めな河原石。小形の棒状縦器に入れても違和感はない。925と926は扁平な小円碟。927～929は何の変哲もない、粘板岩や硬砂岩などの河原石。

930～941は磨り石・凹石の類。930は鎌頭形の磨り石。本面側は皿を伏せたような面をなす。磨り面として申し分ないが、反対側の方が明らかな磨り面で、左上が片減りしている。そして片側を大きく敲打面取りしている。931の表裏中央には、わずかについた程度の凹痕が一対ある。932は小ぶりの鎌頭形で、平らな磨り面を有す。周縁を敲打調整している。933の表裏中央には一対の凹みがあり、磨り面は平らである。934の本面側は天然の礫面で、縦に浅くついたような小打痕がしるされる。反対側は中央が平らで、周りが石鹼状に減った磨り面を呈する。片側は磨り面を大きく喰って、敲打面取りしている。935は平らな磨り面をなし、2個の凹穴がつく。936には両面に一つずつの凹穴があり、表裏とも磨り面を有する。937は中央が深く周りが浅い凹みを有し、一部分つるつるしている。両側と上下の4箇所に爪大の打痕がつく。裏側は火を受けて灰黒色に変色している。938は2個の凹みがつき、石鹼状の磨り面をなす。裏側は中央に1個の凹みがある。939の両面には縦に連なる深い凹穴がある。火を受けて黒く変色し、上下端が欠かれている。940にはごく浅いざらざらとした凹みがつき、下端には敲打痕がある。941の表裏には、連続した縦長の深い凹穴がつく。942は小ぶりな安山岩礫で、地山石によくみられる皮膜がついている。943は菱形の平べったい安山岩で、両端に小打痕がつく。

944は薄く削げた安山岩を使用している。本面側が天然の礫面。いちばん薄い縁辺に雜な調整を施している。刃は鋭くない。945の下辺は表裏に調整した鈍い刃がついている。上辺は打ち欠いたあと縁を済している。946はいわゆる鉄平石の砥石。表裏とも下半が光沢のあるすべすべとした面をなす。その面のみに、茶色の何か付着物がある。磨り面が割れ口にかかるところから、もとはもう少し大きかったようだ。

鏡餅状扁平石の947には、表裏のところどころに敲いて凹んだ程度の打痕がある。またすべすべしている。何らかの作業に使われた台石であろう。火を受けて黒変している。ひびが入り、見事に断ち割れている。

948～950は肉厚で鋭さのない石鎌。951は珪質頁岩の石鎌未製品。952は黒曜石の粗製鎌であろう。953～956は石鎌。中でも床面出土の953はつまみ部に抉りをもつタイプで、8号住居址上層に類例498がある。957は大形の剥片を用いた搔器。長く外溝する刃と、小さく内溝する刃の二つを併せ持つ。958は有抉石器と思われる。点状痕や摩耗はみられない。959～964は楔形石器。965は片面のみ細かく連続剥離された石器で、7号住居址の302と同じ。

966～971は内溝する小さな刃をもつ剥片。特に971は小さな刃が連続する剥片で、剥片の形は東南アジアで稜穂を摘み取るために用いる「爪鎌」のような形状を呈する。いずれも片刃で、

縄文時代の遺構と遺物

おそらく一方向から一点に力が加わったことによる刃こぼれのようなものであろう。972~974は剥片の長軸下端に刃が作られている、整先のような石器。975・976は刃こぼれのある黒曜石剥片、977・978は加工剥片としておく。

979~981は凹基、982は円基の石鎌。983は基部を欠損した、刃離が粗い石鎌。984・985は身が斜めの有肩刃広石器で、984は刃線に平行な強い線状痕が表裏面に残る。刃離の稜線にみられる線状痕の様子から、左回の、左から右方向への一方向の動きがあったことがわかる。すなわち対象物に対して、石器を右から左方向へ動かすような使用法であったことが推察される。985は刃部のつくりが粗雑。

986・987は石鎌。988・989は楔形石器。990・991はよく似た形状の有抉石器で、点状痕・摩耗はみられない。992は縦長剥片の一方の長辺に刃をもつ搔器。いわゆるサイド・スクレイバー。993は頁岩の搔器。図右の斜辺の裏側には、表の刃とはねじれの関係になる刃が作られている。994~1000は不定形の剥片石器および使用痕をもつ剥片。994は揃った刃離があり、有肩刃広石器か搔器の欠損部かもしれない。999・1000はそれぞれ右辺の裏側にも刃がある。

なお、本址堆土中には集疊があり、904~907、911・913・914・916・917、920~922、925~936、938~946、948~978は住居床面～集疊、908~910、912・915・918・919・923・924・937、979~1000は集疊上面～遺構確認面からの出土である。

15号住居址（第107、108図 1001~1071）

1001は石鎌だろう。基部が少し厚ぼったく、尖葉形を呈する。下手3分の1を表裏に調整して鋭い刃をつけている。1002は粗刃礫器。扁平円疊の両端を打ち欠いて刃を作り出している。裏側の中央には、鼠がかじったような小打痕がつく。1003~1008は棒状礫器。1004~1006の下端には敲き痕がつき、1007の両端は大きく飛んでいる。

1009~1016は磨り石・凹石の類である。1009は表面が磨り面として整っている。全周を敲打調整し、特に上端は大きく減じている。1010は南東隅の床から出土した凹石。膚は荒れ、石基がざらつく。表面に雨垂れ状の浅い凹痕がつき、全周を敲いている。1011は平べったい長めな疊。凹みは片面のみにつく。磨り石として十分使えそうだ。周縁はかるく敲いて調整している。1012はゴロンとした地山の包含疊。本面側と裏側に凹穴を有す。また下端に真珠大的凹穴がしるされている。1013は縦長な疊の両面に連続した凹穴をつけ、両端に敲打痕を有す。火熱を受けて灰色に変色し、ひびが入っている。1014は方柱状の疊の表面に、鼠がかじったような傷の打痕がつく。1015はつるつとした面を有する地山疊。片面にのみ、かじったような打痕をしるしている。1016は石基がざらつき、上端をいくらか敲いている。浅い凹みが表面につく。1017は地山の包含疊。周縁を敲打している。

1018~1020は团子状の小石。1018は球体になるよう整形され、被熱している。1021は磨りうすの破片。浅い凹みの縁回りは明瞭な段をなさず、目立ての打痕が並んでいる。また周堤部は

天然の礫面で、所どころ敲いている。何度か使用されているようで、目立ての凹みも小さくなり、ちゃんとした磨り面を成している。火に投じて断ち割ったとみえ、表裏とも黒変して石基がざらつく。

1022～1026は石鎚。1025は未製品かもしれない。1027は銀杏葉のような形で弧状に大きな刃をもつ肩刃広石器。裏面にうすい線状痕が刃線と平行にみられる。1028は楕円型で片側縁に刃をもつ青チャートの有肩側刃石器。表面には刃線と平行する線状痕がみられる。1027・1028のいずれも、茎状の部分をつくりだす抉りは深くない。1029・1030は小形の拇指状搔器である。1031～1033は搔器。1034～1036は石錐である。1037・1038は、彫器ともいべき先端をもつ石器。1039・1040は楔形石器。

1041～1071は不定形な剝片石器、および刃こぼれのある剝片。両者の境界ははっきりしないが、これらの内でもチャートの1041や、内溝する小さな刃が連続する1062などは刃部加工されているものと判断される。

16号住居址（第109～112図 1072～1166）

1072は石鋸で、側縁の稜を潰している。刃縁には土擦れ痕がみられる。1073～1082は棒状礫器。歯牙で噛んだような打痕が1073・1079・1082の片面に、1074と1078は両面につく。1080には三面に2箇所ずつみられる。そして1074・1080・1081の一方の端には敲き痕がしるされている。1078～1080の3点は途中から折損し、1077にはタール状の黒い染みが付着している。1083の稜縁は敲打潰ししてて、先端には敲き痕がついている。

1084～1088は磨り石。1084と1085は表裏ともによく使い込まれ、片面が平らに、もう一方が石鹼形に磨られている。1084の左図の側は全体に凹面を呈すので、これの下石は鏡餅状扁平石と目される。そして2点とも凸面をなす側は、左下が他の面より平らに減じている。1084の上端の敲打は磨り面を喰っており、両側縁は直線的に面取りされている。1085は被熱により割れている。1086の表裏は中央が平らで、周りがすり減っている。全周を敲打面取りしている。1087は棒状の磨り石で、本面側を磨り面とする。両側面は大きく敲打面取りしている。先端はいくらくか敲いている模様。1088は本面側が磨り面で、周縁は敲いて調整している。

1089～1095は凹石。1089は片側に凹穴があり、下端には幅6mm、長さ3cmの敲き痕がある。1090は片面のみに小さな凹穴がつく。1091は表裏に同じような凹穴を有す。側縁は敲いて調整し、両端は敲打潰れしている。1092は茄子形の細長い礫の真ん中に、凹穴がつけられている。そして両端には、かるく敲いた痕跡が残る。1093は不格好な安山岩礫。表裏とも浅くて広めな凹痕がつく。側面は全周の7割を敲打している。1094は輝緑岩。表裏に小凹痕を有すが、裏側は鼠がかじったような傷痕である。また右側面を敲打している。1095は硬砂岩。表裏同じ位置に連続する凹穴を有し、右側面のみ敲いている。

1096～1098は鶴頭大の天然礫。輝緑岩の1096は両端にはかるく敲いた痕跡がある。1097は硬

縄文時代の遺構と遺物

砂岩で下方が少し欠け、被熱して黒くなっている。1098の側縁はかるく敲いて調整している。1099は皮膜をかぶった地山疊で、右側を除く縁辺を敲いて面取り整形している。1100～1102は両端に敲打痕を止める小形の安山岩疊。

1103～1110は圓子状の小石。1110を除いてすべて地山に由来する安山岩疊である。1104と1105は、被熱し外皮がむけて黒変している。1113を除く1111～1117は小形で扁平な河原石。1111・1112は端部を打ち欠いている。1117は全周を打ち欠いた石製円板。1113は小形な河原石。1118は平板石に覆われていた中形の磨りうす。へこみはゆったりとして浅い。目立ての打痕が少し残るが、よく磨れている。そして火を受けてうす黒く変色し、両端は打ち欠かれている。いっぽう裏側の中央には、あばた状の浅い凹みがしるされている。両側縁は敲打して面取り整形している。

1119の石鎌は先端が紋られた形の五角形鎌。1120は粗大鎌。1121と1122は石鎌の未製品と考えられる。1123は有肩刃広石器で線状痕がみられるが、この線状痕には刃線と平行なものと斜行するものがある。1124は搔器で、いわゆるサイド・スクレイパー。1125は珪質頁岩製の搔器。1126は黒曜石の搔器で、表面に強い線状痕を残す。刃線に斜行する三方向の線状痕である。1127・1128は石鎌。1128は先端が使用により摩耗している。1129は欠損しているが石鎌の基部と考えられる。

1130～1133は楔形石器だが、1130は側縁を搔器としても使用されている。1134と1135は有抉石器である。点状痕、線状痕、摩耗が著しいが、両抉り部を結ぶ帯状の部分には、使用痕はみられない。また、この部分の稜線は潰れたり摩耗していない。1136～1159、1161～1166は不定形の剥片石器である。1150は外湾する小さな刃が連弧状に作られたもの。1165はT字刺刀のような形状をしており、8号住居址の446に似る。1160は打撃痕が残る石核。

1123・1126・1143が柱穴2上面、1161～1166が各柱穴内からの出土である。

17号住居址（第113～115図 1167～1210）

1167は中形の石斧で刃部を欠損する。大形品に比べると表裏面が平らで身は薄手である。残部の長さは6.9cmだが、その形状から全長は8～9cm程度であろう。リザータイト製があばたが多く、研磨痕もよく残っている。整形のための敲打痕はほとんどみとめられず、素材をぎりぎり使って研ぎ上げている。基端も山形に整形されているが、敲打したものではなく、研磨して整えている。

1168は大形の石斧である。残念ながら刃部しか残されていなかったが、その刃の寸法からみて、元はかなり大きいものであったことがうかがえる。始刃状の両刃で、側縁には若干の面が認められる。乳白色の、極上の蛇紋岩（リザータイト）で作られ、油質の光沢を放っており、粗い研磨痕もみられないほど丁寧に磨き上げられている。弧状の刃は刃こぼれしているうえ、ひだ状に強く磨耗している。

1169～1174は棒状礫器。1170と1174は、表裏の同じ位置に歯牙で噛んだような傷状の打痕がつく。また1170・1172の端部は小さく剝げ、1173・1174は皮一枚が剥げてざらざらとした敲き痕がつく。1175は転石の一部を打ち欠いて刃にした粗刃礫器。風化が著しいものの、刃縁は鋭い。1176の左斜辺は岩石の性状線で割れている。右上辺は稜をきれいに潰し、下辺は本面側に主に打ち欠いて刃としているようだ。硬砂岩の1177の下端には、敲打痕がある。上端にもざらざらとした敲き痕がある。

磨り石1178は、鏡餅状扁平石1185の南に載るように接していた。亀の甲羅形を呈し、中央には斜めの連続する凹穴を有す。全体に滑らかな磨り面で、左下の減りが強い。反対側は石鱗形を呈し、やはり斜めに連続する凹穴を有す。全周を敲打調整し、両側縁は磨り面を喰って面取りしている。1179はゴロンとした石の球。加工痕などは見当たらず、全体にロームがこびりついている。1180は一端に偏って凹みがある。裏面は磨り面としても十分な形状を有している。

1181の表裏には中央に一つずつの凹みがあり、本面側には凹穴に接して、鼠がかじったような傷状の打痕がしるされている。1182と1183は小円礫。1182の両端には打撃痕がみられ、片側は本面側に剝がれている。1184は御荷鉢緑色岩の扁平な円礫で、本面側の一部と反対側に礫皮を残す。上下の二方向から打ち欠いている。これは扁平円礫打削技法の原則どおりの姿である。だが、刃縁のつくりが不十分で粗刃礫器とするわけにいかない。

1185～1189は鏡餅状扁平石または磨りうすの類。このうち1185・1186・1188は、東壁際に集積されていた。1185は全体の3分の1の面を敲打して、その周辺も所どころ敲いている。敲打した部分はすべすべした感触がある。目立てなのか、何らかの使用によってついたものか、判断が難しい。ロームに似た土が、所どころにかさぶたのように貼り付いている。1186は外周を少し残して敲打していることから、磨りうすと考えられる。また本面側にはロームのこびりつきがあって、洗っても落ちない。1187は鏡餅状扁平石などが集積されていた北側の床に据えられていた。裏側は平らな転石面で座りはよい。本面側は凸面をなし左側は平坦。表面は滑らかだが、磨ってできた膚の感触とは明らかに異なる。玷のような使われ方がもっとも近い。右下に数回敲打した箇所がある。この石の下からは凹石1180が出土している。1188は断面で見るようく凸レンズ状をなし、不安定。裏側は天然の礫面で凸凹し、左と下手を嵩上げすると安定する。本面はなだらかな凸面をなし、中央には凹石と同じ凹穴がしるされ、所々に歯牙でかじったような浅い打痕がある。何らかの作業に用いたものであろう。被熱してひびが入り、石基がざらつく。そして側縁の2箇所を打ち欠いている。1189は割れた磨りうすの搔き出し口側で、周縁は敲打整形している。へこみは極く浅く、縁を僅かに残して内側全体を作業面としている。なお裏側の高い箇所も、所どころ敲き減らしている。

1190・1191は磨り石より二回りほど大きな安山岩礫。1190は鏡餅状扁平石1185と1188の間に、守られるように置かれていた。全体に石基がざらつく。周縁は下方を除く三方を敲打調整し、

縄文時代の遺構と遺物

両側面は直線的に大きく敲き潰している。1191もざらざらとし、磨り面はない。左側は曲率に合わせて、右側は直に敲いて整形している。

1192・1193は横刃の搔器で、1192は一部に線状痕がみられる。1194～1196も小形ながらしつかりした刃を片面から作り出しており、搔器とみておきたい。1197は楔形石器。1198～1209は不定形の剥片石器だが、1198は搔器状の刃をもつ。1210は打撃痕をもつ石核である。本住居址の黒曜石は総じて透明度が高く、似たような縞をもつ。同じ産地のものとみてよいだろう。

18号住居址（第116、117図 1211～1274）

1211は横刃型石器。片刃をなす刃部は素材の性状線で、その割れ口を当てている。1212は小ぶりな粗刃礫器。刃はわりと鋭い。1213・1214と1217は棒状礫器。1213は途中から折れて、先端は大きく片側に剥がれている。1217は被熱して赤変している。1215と1216は平べったい河原石で、1215は真っ黒に煤けている。

1218は凹石。表裏同じ位置に凹みがつき、裏側のほうが全体に浅い。1219はよく使い込まれたきれいな磨り石。表裏中央に連続する縦長の凹痕を有す。両面が磨り面をなし、右図の下半は特にすべすべしている。1220の表面は少しがらつく。表裏とも石歯形の凸面をなすが、はつきりとした磨り面は裏側の中央部分だけである。左側面の一部と、右側面は面取りしている。

1221と1222は柱穴2から出土した。1221は表裏の同じ位置にごく浅い凹痕がつく。下端の中央にも同じ打痕がしるされ、両側面は真っ直ぐに潰している。そして全体にロームがへばりつく。1222の本面側には凹穴を有すが、裏側は凸凹とした天然の疊面である。両側面は直線的に面取りし、下端には打痕がつく。1223の表裏には、浅く小さな二個一対の凹穴がついている。また下端には打痕がある。

1224～1230は团子形をした安山岩の小砾。1224～1226と1228は磨ったり敲いたりして加工している。そして1224～1227と1229・1230は被熱し、1229は赤褐色に変色している。

1231は剥片の形を利用して浅い抉りにより茎状の部分をつくり出した、大ぶりの有肩刃広石器。裏面に弱い縦状痕がある。1232は珪質灰岩の有肩刃広石器。茎状の部分は大きく、かつ身に対してほとんど角度をもたないことから、有肩側刃石器とみてもよいかもしれない。貫入の多い素材のためか、刃の調整が粗い。1233は搔器、1234は石錐である。1235～1239は楔形石器。1240～1252は不定形の剥片石器と、使用痕を有する剥片。このうち1241・1242・1247は片刃で搔器状の刃をもつ。1252はスレート製で、下端が打ち欠かれているが、刃としての銳さはない。また、1240は柱穴1から出土した。

1253～1273は楔形石器である。1253～1268はいずれも小形ながら上下に明瞭な打痕をもつ。また、1265のように両極の打痕がそれぞれ表裏にあるものもみられる。1269は三方向に打痕をもつもの。1270～1273は圓の上端にのみ打痕をもつが、剥片の形状から楔形石器の半欠品と考えたい。1274は繩石刃状の剥片で、側縁に微細な刃こぼれがみられる。

なお、1243・1249・1250の刃こぼれした剝片と、1253～1273の楔形石器、及び1274は住居床面よりわずかに浮いたところに集積された黒曜石の中の資料である。この集積は1cm四方を超える大きさの剝片24点、1cm四方以下の剝片45点、チップ32点と上記の石器で構成されており、あたかも石器製作時の廃品をかき集めて捨てたような状況を呈していた。この中に1235～1239のような標準的な大きさの楔形石器に比べ、1253～1273のような、より小形の一群が認められることは非常に興味深い。

19号住居址（第118、119図 1275～1335）

1275は打製石庖丁もしくは横刃型石器。背は直線的でやや厚く、外湾する刃は意外に鋭い。右側の後を潰しているのがやや気になる。裏側に拇指をあて挟み持つとしっかりとする。1276～1278は粗刃縫器。1276の本面側は縫表で、刃は割ったままの鋭い縁を当てている。刃の一部は性状線から欠けている。1277の裏側は、上下から割り取っている。表側は平らな縫表で、こちら側へ打ち欠いて鈍角な刃をついている。刃縁は鋭い。1278も片側に丁寧な打ち欠きをしている。1279と1280は棒状縫器。1279の両端は僅かにざらつく。

1281～1284は磨り石。1281は石鱗形に近く磨られ、左上と右下が対角につるつるしている。裏側は僅かに凹面をなし、すべすべとした磨り面を有す。周縁は弱い敲打調整がされている。火中に投じられたのか、ひびが入って今にも爆ぜてしまいそうだ。1282は表裏とも石鱗形の磨り面を有し、側縁は面取りされ、下端は敲打により潰れている。1283は膚が荒れて石基がざらつく。表裏とも丸みのある石鱗状の磨り面を有し、左上と右下が対角に減っている。1284は表裏に継長の連続した凹みを有す。左の面では左下が少し片減りしていて、右の面は僅かに凹面をなすが、磨り面なのか判断できない。周縁を敲いて調整し、片側は内反り気味に潰している。下端には打痕がみられる。

1285～1288は團子状の小縫。1287は火を受けて黒褐色に変色し、1288の上下端には蔽き痕がある。1289～1291は小さな河原石。1292は鏡餅状扁平石の破片。表裏とも僅かに凹面をなし、つるつるしていくらか光沢がある。しかし、磨られたのかあるいは砧のようなものなのか、断定できない。

1293・1294はよく似た凹基の五角形縫。1295は平基、1296は凹基でやや寸詰まりの感はあるがいずれも五角形縫とみてよいだろう。1295は青チャート製である。1297～1300は凹基縫。このうち1299は欠損後に丸みを帯びた先端に再加工されている。以下、1304まで部分的に欠損しているが平基の石縫であろう。1305～1309は搔器。1305は裏面に線状痕がある。1310は石錐。1311は楔形石器。1312～1335は不定形の剝片石器および刃こぼれのある剝片である。

これらのうち、大きさのほぼ揃った搔器1305～1308の4点と、1310・1317および1329の計7点は、剝片10点とともに住居址の東縁上に集積されていた。

20号住居址（第120～123図 1336～1454）

1336は偏刃の石鋸で、刃部の表裏は土擦れしている。全体に煤のようなものが付着している。

1337はツルハシ形の石器。基部は薄くて茎のようだが、身は削から刃部にかけて肉厚でがっしりとして、刃先は尖葉形に収束する。1338は鋤もしくは小形鋤の類と目される。本面側は平らで、裏側が凸レンズ状にやや膨らむ。基部は稜を潰していく、刃縁はさほど鋭くはない。

1339～1341は刃器の類。1339の断面は楔形をなし、刃はわりと鋭い。左側面も表裏に打ち欠いている。1340は石片を利用した小形の刃器で、刃はいくらか調整している。1341はやや雑だが、表裏に調整した刃がつく楔形刃器。

1342は偏刃の小形な石器。先に見た1176と904が同じ部類に属し、中期の靴形鋸に相当するような器種と考えられる。1343は粗刃砾器で、裏側は全面に礫皮を残す。本面側に加工して整形し、刃は表裏に調整加工している。

1344～1353と1365～1368は棒状砾器。1344は本面に2箇所、裏側に1箇所の齒牙でかじったような打痕がつく。1347・1350は両端に、1351は片面に敲き痕がある。1347などは不格好でずんぐりとし、棒状砾器とは縁遠いように見えるが、同様の使用痕がついていることからも形態や大きさに幅をもっている石器のようだ。1365は長細い穂の表裏に2個ずつの凹みを有し、上端は不確かなざらつきがある。1366の表裏には2個ずつの浅い凹痕がつき、両端には打痕がある。全体につるつるしている。1367には乱打状のごく浅い凹みが表裏にあり、いくらか敲いているのか両端がすこしざらざらする。1368は片面のみに凹みを有す。火熱を受けて本面は黒変している。1369は縦長の凹穴が片面にのみつく。1354～1359は小さな河原石。扁平な1357の下端には小さな剥離があるが、人為的か天然かの判断が難しい。

1360～1362は磨り石。大幅餅を潰したような形の1360の表裏には、縦に長く連続する凹みがある。裏側の凹みは表よりも深い。表裏の磨り面は平らですべすべしている。周縁は敲打面取りし、特に右側面は平らに潰している。1361の表裏は平坦な磨り面をなし、一対の浅い打点状の凹痕がある。両側は直線的に面取りしている。1362は本面側が磨り面で、右側は縦長に磨り減っている。また反対面の下手には、広めで浅い凹穴がある。火熱を受けていて側面はざらつく。

1363・1364は凹石。1363の表裏には、深めな回転状の凹穴が縦に2個つく。全周をかるく敲いている。1364は片面のみに浅い凹痕を有し、上端に僅かな打痕凹みがある。被熱して赤く変色し、左右からひびが入る。

1370～1373は磨り石大の安山岩砾。1370の周縁は敲いて調整され、ことに両側面は敲いて一皮剥ぎ取っている。1371の側面も軽く敲いて調整しているようだ。1372は不定形な地山砾で、皮膜がつく。1373は両端とやや出っ張った稜が、ざらざらとする。1374は方柱状の長い砾。先端の一部と、角の稜がざらつく。故意に折られたものようだ。

1375～1384は団子状もしくはそれに準ずる小礫。1375は球体に加工している。1377の輝緑岩も手が加えられているようだ。1383は一回り大きく、右側縁の一部を敲いている。これらのうち1375、1379～1381と1383は火熱を受けて赤変している。また1376と1378は、地山礫に由来する皮膜が剥げ落ちている。1384は見るからに団子形ではないが、上半部が火熱を受けて黒変している。1385は不格好な安山岩礫だが、下端に打痕が認められる。1386は多孔質で凸凹し、底面はいくらか平らで座りがよい。上半部の半周と、底面からの立ち上がり部分は敲いて面取りしている。1387は砂岩製の砥石。本面側が使用面でわずかに減っている。側面はみな礫表である。

1388は磨りうす片。へこみは自立てたのち、きれいに仕上げている。1389と1390は鏡餅状扁平石の大石。1389の本面側は僅かに凸面をなす。右下には削った跡が1箇所とひびが入っているほかは、使用痕など見当たらない。1390は下手を嵩上げすると平らに座る。上半部はわりと滑らかで、いくらか磨っているかもしれないが、砧のように使われたものと目される。下半および反対側は、天然の面のままである。

1391は側縁が鋸歯状の石鎌。1392～1396は凹基の石鎌。1397は基部を欠損しており、先端に鋸さはない。1398・1399は小形で縁辺部のみの片面加工であり、石鎌ないしは石鎌の未製品とみておきたい。12・13号住居址によく似た815・816がある。1400も前の2点があるため、石鎌としておく。1401も凹基の石鎌で、磨りうす1388の脇から発見された。1402は石鎌。1403は有抉石器で、棱線付近、部分的に点状痕がみられる。1404は珪質頁岩製の有肩刃広石器。1405～1412は搔器である。1405は拇指状搔器。1408は片刃で、搔器というよりは鎌といった趣がある。この1408と1409はホルンフェルス製。1410は下端、1411・1412は側縁に刃をもつ。1411は頁岩、1412は珪質頁岩製。

1413～1430は楔形石器。形状は様々で、小形ながら点数が多い。1431～1454は不定形剝片石器および使用痕を有する剝片。1446～1450と1453は、小さく内湾する刃をもつ。とくに1446は16号住居址の1150と刃部のつくりがよく似ている。なお、1430の楔形石器と1452～1454の計4点は柱穴内の出土である。

21号住居址（第124～128、130図 1455～1520・1539～1585）

1455の刃部以外は礫表皮で、刃部は本面側に打ち欠いている。刃先には土擦れの痕がよく残る。1456は小形の石鎌のよう。刃縁の加工は粗く、身はいくらか反っている。

1457と1458は打製石庖丁ないし横刃型石器。1457の裏側と背は天然の礫面。刃部は表裏とも1cm幅で変色している。1458は本面側が礫の表皮で、すべすべとしている。刃はいくらか内湾し、摩耗している。1459～1461は粗製の刃器。1459の右辺は棱を潰し、左辺は僅かに抉りをつけている。刃部は表裏に調整していて、摩滅している。1460の反対側は礫皮をのこす。上辺および左辺を調整して、台形にしている。鈍角な片刃は、見た目より鋭い。1461は不定形で雑な

縄文時代の遺構と遺物

作り。裏側は全面礫皮。刃部は表裏に細かく打ち欠いて、刃縁は鋭い。1462の下端には、表裏に打ち欠いた整のように鋭い刃がつく。棒状礫器の可能性もある。

1463～1476と1483は棒状礫器。1466と1467には歯牙で噛んだような敲き痕がある。1463～1468と1472・1473・1476の両端もしくは一端には、敲き痕がついており、1466の下端は広くついている。そして1466の敲き痕を有する面と1471の本面は磨っているように滑らかである。1483は断面が三角に近い棒状の礫で、磨り石のようにすべっこい。反対面に2個の凹穴がつく。右側縁は軽く敲打調整している。両端には敲き痕がつく。1469と1470は小形の部類であろう。

1477～1480は磨り石。1477の左図の面は右上と左下が対角に磨り減っている。右の面も磨り面として申し分ない。全周を敲打し、左右は面取りしている。1478は亀の甲羅形を呈し、縦に連続した凹みを有す。反対側は石畝状の磨り面をなし、上端には2.5cm大の敲打痕がある。1479は凹みが散在し、左上と右下が対角して磨り減っている。側縁を敲打し、片側は面取りしている。反対側は天然の礫面で、全体が黒変している。1480は石基が荒れてざらつく。表裏に2個ずつの凹穴を有し、反対面の右上と左下が対角にすり減っている。側縁は全周を敲いて面取りしている。

1481～1496は円石の類。1481は片面にのみ浅いだらだらとした凹みがつく。下端は打ち欠かれ、側面も所どころ敲いている。被熱して、赤褐色に変色している。1482の表裏には5～6個の連続した凹穴がつき、側面にも同じ凹穴がしきされている。1484の両面には、やや斜めの連続する凹みがつく。周縁は敲打され、両側面は抉るように潰している。1485は石畝形の片面にのみ、浅くついたような凹みがある。下端と両側面は敲いているようだ。1486の平坦な面には、一円玉大の打痕凹みがある。そして全周を敲打している。裏側は天然の礫面でロームがこびりついていて、洗っても落ちない。1487には溝状の凹みがあり、裏側には浅い乱打状の凹穴が散在している。全体が漆を塗ったかのように黒焦げになっていて、凹みの中まで真っ黒である。1488は平たい地山礫で、赤褐色の皮膜を被っている。打点状の凹穴は浅く、両側縁はいくらくか敲かれているようだ。1489はアンパンのような形を呈し、表裏同じ箇所に凹穴がつく。側縁は敲打されている。1490は片面にのみ「8」の字状の凹穴があり、左側を除く三方を敲打面取りしている。おむすび形をした1491は、両面に皿状の大きな凹みを有し、全体に何かかさぶた状のこびりつきがある。

1492は左上が瘤のように膨らんだ不格好な礫で、8個ほどの凹みが連なっている。右側面を敲打面取りしている。1493は扁平な輝緑岩で、片面にのみ歯牙で噛んだような傷状の打痕がしるされている。凹みの状態など、いわゆる凹石とは異なる。1494は三角の平たい安山岩で、表裏に同じ打痕凹みを有し、それぞれの角には打痕がつく。226の凹石にも同様の敲き痕がしきされていた。1495と1496は表裏の中央に小さな凹みがつく。1496は全周をかるく敲いて調整しているようだ。火中に入れられたのか、ひびがはいっている。板状の1497は砂岩の河原石。中

央に浅い溝状の凹みがつき、反対側には線状の傷が残る。溝状の凹みの中はすべすべとしている。

1498～1502は磨り石大の安山岩礫。1498の平たい礫は、左右の側縁を敲打整形している。1499は目の詰まった重い礫。両側面をかるく敲いて面取りし、きれいに仕上げている。1500は河原石で角がとれて平べったく、磨り石の形とは程遠い。何ら手を加えていない。1501は平べったい柱状礫。両側面を敲打し、片側は面取りしている。1502は凸凹して不格好。片側の側縁のみ敲いて整形している。1504は全周を敲いて調整しているようだ。火熱を受けたらしく、黒紫に変色している。1503と1505の先端には小打痕がしるされている。1505の表面はつるつるしていて、磨っているかのようだ。

1506～1517は団子形の小丸石。1506の左右は大きく抉られている。被熱して石基がざらつく。さらに1507・1512・1518・1519も火熱を受けて、灰色から黒色に変色している。1518と1519は何の変哲もない平たい礫。割れた原因が人為的か自然なのか判断できない。1520は鏡餅状扁平石の破片。本面側は縁一杯までかてかとした磨り面となっている。

1539～1545は石礫。1542は左側縁を欠損後に再調整している。1546・1547は搔器。1548は有抉石器で、稜線がやや潰れ、部分的に線状痕がみられる。1549～1551は楔形石器。1552～1578は不定形な剝片石器および使用痕のある剝片。

1579は有肩諸刃石器。茎状の部分に対して身が小さい。刃部の再生を繰り返し行った結果と考えられる。二刃に刃をもち、表裏面ともにいざれの刃に対しても線状痕がみられる。1580は小形の拇指状搔器。1581は楔形石器で裏面に線状痕がみられる。1582～1585は不定形剝片石器である。これらのうち1579～1583が床面、1584・1585が柱穴内出土である。

22号住居址（第129、130図 1521～1538・1586～1593）

1521の裏側は亀の甲羅形の磨り面をなしている。周縁は敲打後きれいにしている。1522は均整のとれたなるい三角状の平たい凹石で、斜めに連続する凹穴が表裏につけられ、おおむね三つの角に打痕を有す。先に226・1494などに見たが、他にも類例がある。1523は表裏同じ位置に同じような凹穴がしるされている。1524は片側が瘦せた安山岩の転石で、大粒の輝石が目立つ。1525の両端には敲き痕がみられる。下端は薄く剥がれ、潰れている。所々に、ゴマを飛ばしたような黒いしみがついている。

1526～1529は磨り石大の礫。1526は輝緑岩の河原石で、使用痕などは見当たらない。1527は目のつんだ安山岩の河原石。1528は石基がざらつき、膚荒れがひどい。1529の表面にはうっすらと煤がつき、縦にひびが入る。

1530～1534は団子状の小丸石。もっとも形のよい1534は、周縁をいくらか加工しているようだ。1532は団子というよりお餅に近い。火に投じられたか焦茶色に変色し、石基は荒れて輝石などが露呈している。1535は扁平な河原石。

縄文時代の遺構と遺物

1536～1538は鏡餅状扁平石または磨りうすの類。1536の表面は、縁までつるつるしているが、磨ったものか砧のように使用したものか判別は難しい。筆で書いたような線状の焼けがみられる事から、火中に投じたかして断ち割っている。磨りうす1537は敲打してへこみを付け、口元は縁際から、裏側にまで及んで敲打整形している。目立てたばかりでざらざらとし、一度も使用していないようだ。そして何故か見事に割られている。1538は大形な鏡餅状扁平石で、座りはよい。本面は平らで、所どころに点々と突いたような敲打痕がしるされ、左下側は縁に沿って敲いている。また右側の縁は、故意に欠かれている。いわゆる台石であろう。

1586は珪質頁岩の搔器。1587も搔器状の刃をもつが欠損しており、全体の形状は不明。表の一部と裏面に強い線状痕をもつ。1588も両側縁に搔器状の刃をもつ。1589・1590は楔形石器。1591・1592は一部が小さく刃こぼれした不定形の剝片。1593は加工剝片であろう。

23号住居址（第131図 1594～1628）

1594は石庖丁もしくは横刃型石器。円錐打削法によって得られた石片の縁に粗く刃をつけている。1595は石錐形の磨り面を有し、反対側は凸凹した天然の錐面をなす。側面は軽く敲いて調整している。1596は磨り石として申し分ないが、膚荒れしていて良く分からない。上端側をのぞいて敲打され、とくに下端は平らに近く潰れてざらつく。

1597～1604は棒状錐器。1598・1600の両端と1602の一端には、敲打痕がしるされている。1599は表皮が一皮むけて全体がざらつく。1605～1612は团子形もしくはそれに類する小石。1606と1608～1610は火熱を受けて変色している。1605と1612は膚がすべすべとし、河原石のようだ。

1613は何の変哲もない扁平な河原石。1607は断面が台形の方柱状錐。先端には本面側に偏って爪の大きさほどの敲打痕があり、裏側の残線は敲かれている。また左下側に打撃点がみられる。火に遭ったらしくざらざらとし、裏側にかけて爆ぜている。

1614は平基、1615・1616は凹基の石錐。1617は搔器。1618は楔形石器。1619・1620は有抉石器と思われるが、あるいは有肩刃広石器かもしれない。いずれにしても目立った使用痕はみられない。1621～1631は不定形の剝片石器および使用痕を有する剝片である。1625は深く内湾する位置に小さな刃をもつもので、刃の右の弧状に開く部分は、剝片の縁が潰されている。

24号住居址

本址からは、前期前葉の中越式の土器片が2点、黒曜石とチャートの石核がそれぞれ1点出土したのみ。

25号住居址（第132～143図 1632～1900）

1632はダナイト製の石斧の基部。左右の側縁ははっきりとした稜を持たず、丸みをおびている。基礎が敲かれており、やや偏った山形をなしている。また、この左側面に、黒色の物質が付着している。滑らかに磨き上げられていて、強い研磨痕はみられない。表裏両面の基礎近く

のほは同じあたりに、敲打痕がみとめられる。これが欠損後につけられたものか、それ以前にあったのかはわからない。

1633は均整のとれた小形の鎌で、片面に牒表をとる。基部はうすく削ったまで、右側縁の中ほどは稜を潰している。刃部は土擦れしている。1635は石鎌の基部。両側縁とも稜を潰している。1634は削ったうすい縁辺に刃をつけている。もう少し傾いて、斜刃になるのかもしれない。いずれにしても基部の作りが十分でなく、鎌の類とするに問題がないわけではない。両側縁とも稜を潰している。1636は転石を割って、一方から斜めの刃をつけている。これまでにみた904や1176が同類のものである。

1637～1639は刀器の類。1637は素材自体に捩れがあり、従って刃は直線だが通りが悪い。刃は片側に加工して、片刃に仕上げている。1638は裏側に牒皮がのこる。刃縁は鋭い。1639は本側に牒皮を有す。削ったままの鋭い縁が刃となっている。1640～1642は粗刃牒器。1640の表裏は素材の牒皮。大きく外渕する刃部は、主に正面側に打ち欠いている。1641は裏側にかけて円環の表皮を有す。刃縁は鋭くない。1642は分厚くて重く、表裏に牒皮を置く。刃は表裏に粗っぽく打ち欠き、下手から側視すると、算盤玉のように尖って切れそうだ。

1643～1685はみな棒状牒器。1643と1644は小形の部類に属す。1645～1648と1651・1657・1659・1662・1664・1668・1671・1675は両端に敲き痕を有し、1652・1658・1660・1667・1672・1677・1681・1682は一端に敲き痕がある。そして歯牙で噛んだような打痕が両面につく1646・1648・1667・1673・1674・1684と、片面にのみの1655・1656・1662・1663・1670～1672がある。この外に縁に割れている1656や途中で折れている1667・1669・1676～1685がある。またこれらの中には、1653のように被熱してざらつくものや1668のように灰黒色に変色しているものが見られる。1686は断面が逆三角形をなして、刃が難しつけられている楔形刃器。1341などが同じ部類に属す。

1687～1702は磨り石・凹石の類である。1687は左半身が特に磨り減り、すべすべして光沢を有する。裏側は天然面で2箇所の凹みが斜めにつく。側縁は全周敲打され、片側は直に潰している。火を受けて灰黒色を呈する。1688は甲羅状の凸面をなして、中心が滑らかである。反対側は中央が平らな石鍬状の磨り面をなし、下半がすべすべしている。1689は火を受けて左半分が黒灰色に変色している。裏側は石鍬形の磨り面を有し、中央が特にすべすべする。1690は一回り小ぶりだが、石鍬形で均整のとれた磨り面をなす。反対側は2ないし3個の凹みを有すが、磨り面は確認できない。全周を敲いて、面取りしている。やはり火熱を受けて灰黒色に変色している。1691は表裏とも磨り面をなし、本面は滑らかである。裏面は右上と左下が対角して減っている。1692は良い形とはいえない。しかし、パンのような膨らみを有す磨り面は良く整い、下手の一部はここに磨かれている。また右側縁の半分だけを敲いている。

1693はきれいに使い込まれた磨り石。片方の面はこんもりとした石鍬形で、真ん中にあばた

縄文時代の遺構と遺物

状の敲き痕がうっすらとついている。右上と左下が対角してすり減り、膚は滑らかで光沢を有する。また全体がうすい灰色に変色して、ひびが入っている。もう一方も石鱗形で平坦な磨り面を呈し、縦に連続する凹穴がついている。その両端はうすく剝げとれているようだ。1694もきれいで使い込まれた磨り石。片方の面は石鱗形の磨り面をなし、右上と左下が対角して磨り減っている。裏側は平らに近い磨り面で、縦方向の大きな凹穴が目立つ。上端は敲いて潰している。側面は直線的に面取りし、さらに中程の指のかかる部分は抉るように蔽いでいる。そして下端は火熱を受けてひびがはいる。1695は片側がふくらとし、もう一方が平面的な石鱗形を呈する。膚が荒れて磨り面を確認することが出来ないが、左下の減りが強いことから磨り石とみられる。表裏に2個の凹みを有し、周縁は敲打して両側縁は面取りして平滑である。1696も石鱗状の磨り面をなし、2個の凹穴が斜めについている。裏側は滑らかで光沢を有する。周縁は磨り面を喰って面取りされている。1697は均整のとれた石鱗形の面をなすが、ややざらつき、磨り面は確認できない。裏側は全体として凹面をなしている。周縁は敲いて面取りし、左右は削いでいる。もしかすると、面取りしただけの安山岩疊なのかもしれない。

1699の表裏には浅い凹みがつき、石鱗形の磨り面を呈する。両面とも縁に近い外周が摩耗してすべすべし、光沢を有す。片側はわずかに凹面をなしていることから、磨りうすが相手ではないようだ。周縁は敲打している。いまみてきた1693～1695と1699の4点は、大きさや形状または凹穴の状況、さらには周縁の面取りなど多くの点で似通っている。1700は亀の甲羅形を呈し、中央に大きめな凹穴を有す。火を受けて灰黒色に変色し、膚が荒れていて磨り面を確認できない。反対側は凹面を呈し、菱形の凹穴を有す。輝石が磨れて平らになってることから磨られた面であることが知れる。鏡餅状扁平石が相手になるのだろうか。1701は外縁部が磨れてすべっこい。側縁は弱い敲打がなされ、裏面は凸レンズ状のきれいな転石面である。1702の表裏には、乱打状の凹穴がほぼ中央にある。下端はひびが入って、古い傷から剝げ落ちている。裏側は中央の凹穴を換んで、右上と左下が対角して磨り面をなし、すべっこい。裏側のみ煤けて黒くなっている。

1698と1703～1719は凹石の類。ずんぐりとした1698は大形の凹石。本面側は3個の凹みが継まり、裏側は縦に2個が並ぶ。下端には敲打痕がしるされ、片側は平らに面取りしている。鏡頭形の1703は表裏同じ位置に同様の凹穴をもつ。1704は石鱗形をした面に浅い凹みを有す。上下端に敲打痕があり、側縁は面取りされている。全体に地の色は失せて、真っ黒に変色している。1705の表裏には乱打状の凹痕がつき、裏側は浅く広い打痕凹みとなっている。膚荒れして石基がざらつく。1706は片面にのみ浅くかじったような打痕凹みがある。右側縁から下端にかけては、敲打面取りしている。裏側は凸凹した転石面のままである。

1707の表裏には4ないし5個の大小の凹穴が集中し、周縁を敲打している。1708は大粒の輝石や角閃石が目立つ、少し歪な天然礫。表裏には縦に2個の凹みがつけられ、両端には爪の大

きさほどの打痕がみられる。1709の表裏には浅く広い凹穴があり、周縁は敲いて調整している。また先端には、十円玉大の平らな打痕がしるされている。1710の中央に小さな凹みがつけられ、右下角の側面には蔽き痕がある。

1711は片側が直線的となる、身の薄い小判形の礫。表裏の中央には同じようにあけた4個の回転状の凹穴がある。両端は敲打されて、下端は大きく欠け飛んでいる。また左の側縁は敲いて調整している。1712は片側がすこし複数の小判形で、表裏にはよく似た縱長の凹痕がつく。1713は鏡餅をつぶしたような平たい礫。本面側にのみ、斜めの浅い凹みがついている。1714の側縁は半身が薄くて柿の種のような形を呈し、表裏には縦に長く連続する凹穴を有す。両端と左側縁の中ほどには打痕があり、両端は剥げている。1715は安山岩礫の1729と鏡餅状扁平石1795とともに、東南の壁際の床に列をなして据えられていた。平坦な面に連続する凹穴がつけられ、中央はいくらか磨っているようだ。もう一方のこんもりとした丘状の面には、でたらめな凹痕がつく。

1716～1722は小ぶりな凹石。1716は片面にのみ浅い凹みがつく。1717の表裏には縱長な凹みがつき、上下端には打痕がある。また、被熱して赤変または黒変している。鏡頭形の1718の両面には、中央に一つずつの凹みがある。1719の表裏には「8」の字形の凹みがある。1720は片方が山形に膨らむ鏡頭形を呈し、本面側には一つ、裏側に二つの浅い凹穴がつく。一端が大きく損なわれ、その箇所に接する側縁には敲打潰れがある。1721は表裏に「8」の字形の凹みがつく。1722の片面には浅い凹みがつき、被熱して灰色に変色し、一端を失す。

1723～1728は粗製の凹石の類。1723は半身が薄い不格好な礫で、表裏には斜めに連続する回転状の凹穴がつく。また右の縁が黒変している。1724の片側には浅い凹みがしるされている。1725には浅い凹みがつく。熱を受けているのか膚が荒れ、輝石が浮き出ている。左側面と両端は敲いているようだ。1726は片面側にのみ小凹痕がつく。1727は意外に重く、こちらに2個、裏側に1個の凹穴がしるされる。輝綠岩の1728は、中央に浅い打痕がつく。凹石か棒状礫器か見分けるのが難しい。

1729はふっくらとした小判形の安山岩礫で、一方の側縁を直線的に削ぐように面取りしている。また両端には、2.5cm大の潰れ痕がみられる。先に見た137や1502と同類である。1730は硬砂岩で、三辺の稜は1.5cm幅の平らな磨り面をなす。また、三面は天然の滑らかな礫表である。下端側がいくらか欠けているようだ。1731は磨り石より二まわりほど大きな鏡頭形の礫。周縁を2cm幅で面取りしている以外、使用痕などは見当たらない。

1732～1737は磨り石大の安山岩礫。1732の表面は膚荒れし、磨り石であったとしてもよくわからない。両側を面取り整形している。1735も両側を面取りしているだけの安山岩礫で、火熱を受けている。半分に割れた1733は全体が黒味を帯びて、反対面にはひびが入る。1734の両側面と両端には、かるく敲いた痕跡がある。1736は本面側のみ火を受けて黒変している。1737も

全体が赤く変色していることから、火熱を受けているかも知れない。

1738～1741は卵形を呈する小形の礫。1738は被熱しているようで膚がざらつく。1739は全体の3分の1が焼けてうす黒く変色している。1740は全体に凸凹して地山ふうの膚をしている。やはり熱を受けて白色に変色し、ざらつく。1741は周縁を敲いているようだ。1742はトウモロコシ形の棒状礫。両端は黒く、他は赤褐色に変色してひび割れている。

1743～1747は掌大の不格好な安山岩礫。1743の上端は軽く敲いているようだ。1744は磨り石大の礫で、上端がいくらかざらつく。1746は瘤状に出っ張る。1747は全体に焼けて灰色に変色している。1748～1752は掌より一回り小さい安山岩礫。1749は被熱してざらつき、1751は黒色に1752は灰色に変色している。1750の両側縁はかるく敲打している。1753と1754は鏡頭形の安山岩礫。1753の片側は敲打により剥がれ、1754は灰色に変色している。1755～1780は團子または蘿玉形の小礫。1761は唯一、球形に整形している。1755～1757、1763・1766・1771・1775は黒または灰黒色に、1760は黄褐色に変色している。また1769・1777は紫色に、1770は赤黒色に被熱している。そして1778にはロームがこびりつく。

1781～1785は小形な扁平礫。石製円板の1784は周縁を加工して凹くしている。1786は鏡頭のように厚い扁平礫。1787～1789は小判形の扁平礫。1787と1788には天然とも人工ともつかない浅い打痕状の凹みがついている。また1787は黒く変色して、折れている。

1790～1792と1795・1796は鏡餅状扁平石の類。1790の中央は僅かに凹んでつるつるし、左側は表裏に打ち欠いている。1791はもともと僅かに凹面を成している。右側の上半には、5cmほど内側に入った部分を軽く敲いている。目立てと考えてよいだろう。また左側の周縁と下側の縁は、敲打調整している。輝緑岩の1792は掌大の扁平な礫。本面側は8割が熱を受けて赤く変色している。1795の中央は僅かに凹面をなし、縦方向ではやや反っている。凹面はつるつるして、にぶい光沢を有している。これとセットをなすように1715の凹石と1729の安山岩礫が並んでいた。なお裏側の中程には、歯牙で噛んだような径4cm大の敲打痕がある。そして上側は割り取られている。1796は本面側がいくらか凹面をなす。摩耗や敲打など使用にかかる痕跡は見当たらない。ただ片側の縁の一部が欠かれている。

1793と1794は細かく打ち削られた磨りうす。1793には浅い凹みがつけられすべすべしているが、外周の円みが強く、いったいどの部位にあたるのか見当がつかない。1794は搔き出し口に近い部位である。へこみの部分は目立てたばかりで凸凹している。

1797は鉈状石器。片面からの剥離によって作られ、断面は蒲鉾状を呈す。茶色味を帯びた珪質頁岩製だが、この辺りで産出し、石器石材として用いられている珪質頁岩とは全く異なる石質のものであり、本遺跡の石器群中にあって、形状も石材も異質な感じを受ける石器である。

1798・1799は石錐。1800は糸巻形搔器、1801は拇指状搔器、1802は下端に刃を持つ搔器である。1803～1806は楔形石器。1807・1808は石錐。1809～1828は不定形の剥片石器および使用痕

を有する剥片。1809と1812は搔器状の刃をもつ。1811の表面には線状痕がみられるが、刃は潰されている。1820も表裏面に刃線とほぼ平行な線状痕があり、刃が潰れている。1827は両刃で、刃部のすぐ上にこまかに線状痕がみられる。1824や1826は、一方向からの圧力によって部分的に生じた小さな刃こぼれ。1829は不定形剥片石器。1830～1832は加工剥片。

1833～1836は凹基の石錐。1833はやや先を絞った感じ。1837～1840は平基錐。1838～1841は粗製錐。1842は有肩刃広石器の欠損品と思われるが、有抉石器とも考えられる。線状痕、摩耗など、使用痕はみられない。1843は身が斜めの有肩刃広石器。刃のつくりは粗い。抉りの部分、剥離面に線状痕がある。1844は珪質頁岩製の有肩刃広石器あるいは搔器の欠損品。1845・1846はホルンフェルスの搔器。1847・1848も搔器であろう。1847は主稜線が摩耗しており、裏面には一定の方向性がない線状痕が無数についている。1848は、刃部裏面に刃線と平行な線状痕がわずかにみられる。1849・1850は石錐で、1849の先端は、対象物をつづいたかのように潰れている。

1851～1863は楔形石器。1851～1853は石核利用の厚手のもので、1854～1856は縦長の大形品、1857～1860は小形品、1861～1863は適当な大きさの素材の両極に打痕をもつものと、いくつかに大別できる。1862の下端はすっかり潰れてしまっている。1864～1897は不定形の剥片石器および使用痕を有する剥片。1866・1868・1871・1873・1889などのように搔器状の刃をもつもの、1887・1893・1894・1898などのように刃こぼれ状の使用痕跡をもつ剥片がある。1883には刃線にはほぼ平行、1895には刃線に直交方向の線状痕がみられる。ともに鋭い剥片の一辺が刃こぼれしている程度の剥片石器だが、使用に際して違いがあったことを示しており興味深い。

なお、1638・1640～1645、1652・1653・1664・1665・1669・1671、1688・1690・1691、1693～1695、1669・1711・1717・1722・1724、1743・1744、1749～1752、1756・1760、1762～1764、1766・1768・1772、1773～1775、1784・1792・1794、1797～1828は堆土上層からの出土である。

26号住居址（第144図 1901～1917）

1901は身の厚い石錐の基部。両側縁とも稜を潰している。1902は小形な石錐と思われる。1903は横刃型石器の半欠品。裏側は全面に礫皮を有し、刃は裏側から加工している。左斜辺には、打削り時の打撃点が残る。裏側は全面に礫皮を有す。1904の刃器は全体の形がよくわからぬ。右辺は上下から抉るように打ち欠かれ、背稜は敲打潰ししている。刃は鋭くない。

1905は棒状礫器で、中ほどから折れている。1906の膚はすべすべしていて、両端には敲打による潰れが見られる。1907・1908は团子状の小石。1908は皮膜が剥げ落ちている。1909・1910は磨り石大の礫。特に目立った使用痕はない。1910の本面側は、火熱を受けて黒変している。1911は製作途上のよう磨りうす。小形な2123も似る。外周より二回りほど内側を敲打して目立てている。側面の出っ張ったあたりは少し削って整形しているようだ。裏側は高い部分を数箇所敲き減らして平らにし、座りよくしている。

縄文時代の遺構と遺物

1912・1913は石鏃。比較的つくりは粗い。1914～1917は不定形の剝片石器。1914および1916は搔器状の刃をもつ。

なお、1912・1913の2点は本住居址の外縁、北側からの出土である。

27号住居址（第145、146図 1918～1976）

1918は小形の横刃型石器。裏面に素材の礫皮を有し、刃縁は鋭い。1919は粗刃礫器。片面からのみ打ち欠いて、4分の3周を刃としている。右上縁の一部のみ、表裏に細かく加工している。

1920～1926は棒状礫器。1920の表裏の転石面は砥石と見紛うほどすべすべとし、両側面も天然の礫表でわざかにざらざらとする程度である。また両端には、天然とも人工とも判断のつかないザラつきが認められる。1924～1926は欠損品。

1927・1928は磨り石。どちらも表裏に縱長の凹穴がつく。1928は両面が石鍬形の磨り面をなし、本面側のほうがよく磨れている。凹穴は磨り面より新しく、また上下左右は打ち欠かれている。1927はこちら側が磨り面。

1929～1932は凹石の類。1929は上下左右を敲打面取りしている。やや長めな1930は、本面側に2個の浅い凹穴がしるされ、上端には敲打痕がある。1931には小さな凹痕がある。1932は表裏に大きめな回転状の凹穴がついている。

1933は先端角錐状石槌。先端は四角錐形に尖る。1934～1937は団子形の小石。1938は方柱状の礫。被熱して中程から割れている。1939は掌大の礫で、左側縁の一部分だけを面取りしている。1940は下部に鈍い刃をつけている。また大きな凹穴が2箇所しるされている。1941は所謂鉄平石で、下辺の一部と右辺に細かく打ち欠いた痕跡がある。刃器などではない。本面側は火熱を受けて変色している。1942は大形の鏡餅状扁平石。本面側は比較的平坦だが、裏側の天然面より僅かに滑らかな感じがする程度で、明確な使用痕などはない。

1943の石鏃は薄手の剝片を加工しているが、粗く、整っていない。1944は搔器。形状は鎧状石器に似る。1945は不定形の剝片石器だが、表面に線状痕がこる。搔器としておく。1946・1947は搔器。1948は有抉石器で、表面にわずかに点状痕、線状痕がみられ、周縁は摩耗している。1949～1954は楔形石器。1955～1976は不定形剝片石器および使用痕を有する剝片。1970はT字剝刀状に刃のつくもの。また1974は楔形石器かもしれない。

28号住居址（第147、148図 1977～1990・1992～2076・4205・4206）

1977は鉤先と目される。全体に薄く、刃部は鋭い。1978～1980は棒状礫器。中形の1979の両端には、敲き痕がわずかにみられる。1980は砂岩の河原礫。1981は半分に割れた磨り石で、片側は、面取りしている。裏側は左半分がつるつとした磨り面をなし、割れ口にかかる凹穴がついている。1982は片側にのみ、大きな凹穴を有する。裏面は磨り面として申し分ないが、荒れてざらつきよく分からない。1983はゴロンとして不安定な礫。本面側の中央に1箇所、裏

側に2箇所の浅い雨垂れ状の敲き痕がみえる。また側縁全周をかるく敲いている。

1984～1990は円子もしくは薔薇王状の小石。1985には赤錫状の付着物が全体につき、火熱を受けている。1987も被熱して、赤や灰色に変色している。

1992～1996は凹基、1997と1998は平基の石錐で、1999は粗大錐、2000と2001は粗製錐。2002～2009は石錐である。2008と2009の先端には使用による摩耗がみられる。一住居址で石錐8点の出土というのは坂平遺跡では他に例をみない。

2010は靴形の有肩刃広石器の欠損品であろう。全面に剥離がおよび、刃部裏面には刃線と平行な強い線状痕がのこる。2011は搔器。有肩刃広石器の茎状の部分を意識したような突起がある。2012～2015も搔器。2016は楔形石器。2017は有抉石器だが、線状痕や摩耗はみられない。2018は鑿先のような刃をもつ石器。2019も同じ様な刃の形ながら、刃部は刃こぼれ程度の剥片石器。2020～2024は両側縁に刃こぼれをもつ剥片。

2025～2076は不定形のもの。刃部が加工されたものと刃こぼれなどにすぎないものがあるが、そのいずれかを判断することは難しい。2066はチャートで、搔器状の刃がつくられている。このほか、水晶の剥片2点が出土している。

また本址からは黒曜石の小剥片、チップの集積が発見された。石器製作時の残滓をまとめて捨てたもののようにある。あわせて52.5gの小剥片と21.5gのチップが発見されたが、この中から見つかったのが4205と4206である。4205は不定形な剥片で刃部も使用による刃こぼれだと思われるが、刃線に平行な強い線状痕がみられる。4206の石錐は未製品であろうか。両側縁および基部の抉りは片面からしか加工されていない。一応、形にはなっているものの、製作時に片脚を欠損し、廃棄されたものであろう。石器製作の残滓とともに出土したことは興味深い。

29号住居址（第147図 1991）

1991は住居址の確認断面にかかるて伏せられた状態で発見された磨りうすで、29号址唯一の遺物である。へこみは浅く、外周に相似して角が張り、該期の特徴を備えている。中心から搔き出し口にかけてはつるつるするが、奥は目立ての凹凸が残る。また、搔き出し口の縁と上縁左右の角の3箇所は、かるく敲打している。ちなみに凹石の1522・226も同じような箇所を敲いていた。

30号住居址（第149～152図 2077～2165）

2077は背面側に櫛表を残す横刃型石器。刃部は表裏に丁寧な加工をしている。上辺の半分は性状線から欠けている。2078～2081は粗刃櫛器。いずれも片面側から打ち欠いて刃をつけている。

2082の下端には、敲打器特有の敲き痕がある。握りもよく手になじむ。別な面は全面焼けて真っ黒である。2083～2098は棒状櫛器。2085・2086・2090・2091・2096には両端もしくは一端に打ち欠き痕がみられ、2086と2092の表裏には、凹石に通有な漏斗状の凹みがしるされている。

縄文時代の遺構と遺物

そして2090・2091・2097は、中程から折れている。

2099~2105は磨り石・凹石の類である。2099は右の連続する凹穴の方が磨り面をなす。2100の右の面は石歯状に近く磨られていて、中央の凹穴は深い。両側面は敲打している。2101はきれいに形よく使い込まれた、表裏同じような石歯形の磨り面をなす。やはり両面に凹穴がみられる。側縁全周を敲いて面取りしている。2102の裏面は石歯状の磨り面をなす。本面側は縦に連続する凹穴で、裏面は広い範囲を乱打した浅い凹穴となっている。また両側縁を敲いて潰している。2103は浅い雨垂れ状の凹穴がしるされ、反対面はおやきのようなふっくらとした磨り面をなす。2104は浅く乱打したような凹穴がしるされている。裏側は甲羅状の磨り面をなし、全周を敲打面取りしている。2105は連続する凹穴を有する。裏面はややごつごつするが、磨り面をなす。

2106~2110は凹石。2106には浅い凹痕がしるされ、裏面には乱打した凹みが広い範囲にみられる。そしてこちら側だけ火を受けて、黒変している。2107は不格好で茄子のよう。二面にわりと深い2個の凹みを有す。2108は形のよい棒状の礫で、表裏に2箇所ずつの凹穴がしるされる。上方にはひびが入っている。2109は片面にのみ凹穴を有し、被熱して灰白色に変色している。小ぶりの2110は、裏にも一つの凹みを有す。

2111は磨り石大の礫で、全面に褐色土のこびりつきが認められる。2112は細長い天然の礫で、使用痕などは見当たらない。棒状礫器に入れても差し支えないかもしれない。2113は拳大の礫。2114の両側縁は、直線的に大きく削ぐように面取りしている。2115~2118は团子状の小石。特に2118は形がすこぶるよく整っている。整形しているのかもしれない。2117は熱を受けて灰白色に変色している。

2119~2122は扁平な小円礫で使用痕などは見当たらない。2123・2124は磨りうす。2123は未製品のような小形の磨りうすで、目立ての敲打痕をとどめている。2124は表裏にへこみを有する。へこみは浅く、縁との境がはっきりとしないのは、該期の大きな特徴である。

2125~2128は凹基の石歯。2129は有肩刃広石器。石材は青と赤が入り混じったチャートで、形も非常に整っており、美しい。2130は頁岩製の鎌状の石器。2131は珪質頁岩の搔器。2132は円形搔器だが、上端には刃がつけられていない。2133~2136は搔器状の刃をもつ不定形な剥片石器。しかし、2136は小形の拇指状搔器としてよいかもしれない。2137・2138は搔器状の刃こぼれをもつ剥片。2139は欠損しているが、搔器としてよいだろう。2136と似た刃の形になるものと推察される。2140・2141は石錐。2141はつまみ部の側縁が磨られている。2142は有抉石器だが、縫状痕、摩耗などはみられない。2143は石核を利用した肉厚の楔形石器。2144~2165は刃こぼれのある剥片で、2164は水晶の剥片が使用され、一部が刃こぼれしているものである。

31号住居址（第153~162図 2166~2381）

2166は身が薄い板状をなす石斧の基部で、緑色片岩製。側縁は僅かに面を有す程度である。

基端は両側縁が敲かれて山形に整形されているが、敲き整形のままで、研磨されていない。

2167は靴形の石鎚。身は厚く、両側縁とも稜を潰している。2168~2171は石庖丁もしくは横刃型石器。2170は片翼形に刃がつけられ、ナイフのよう。2171は打ち削ったままの石片を使用している。刃は意外に鋭い。2172は一見して鎌のようで、背が厚く刃は薄い。刃部はすこし摩耗し、右側が全体に擦れて光沢を放つ。

2173~2175は粗刃礫器。2173は本面側の上半に鱗皮を残す。刃は石の性状線で割けた平らな面を当て、こちら側に2箇所ほど小さく欠いて調整している。2174の上半は鱗皮で、刃部は一方向から打ち欠いている。刃は鋭くなく、一部摩耗している。2175は分厚くて重い。全周を大割りしたのち、背と刃部は細かく加工している。2176は楔形刃器。刃は鈍く潰れ気味である。横長な2177も同様に、鈍く潰れたような刃部を有する。他にも同様なものがみられるところから、これらは一器種を構成しているようである。

2178~2198はみな棒状礫器。方柱状の2182は、この類のなかでは大形に属する。南角近くの壁に立てかけられていた。両端もしくは一端に敲打痕を有する2186・2188・2196、小さく削ぎ欠けた2178・2188・2190・2191、歯牙状の小凹痕を有する2180・2186がある。また2181・2196・2198などは、真っ二つに折れている。

2199~2202は敲打器の類。2199は棒状礫器でもよいかも知れない。両端に敲打痕を残し、程よい大きさで手に馴染む。2200も両端に敲打痕が見られる。上端は作業の拍子に削げてしまつたものらしい。下端は中央に打痕が集中している。2202は下端にのみ小さな打痕がつく。これらの敲打器が石器の製作に使われたかは疑問である。2201は円柱状の礫を二つに断って後、周縁を敲いて整形している。底面は凹凸が少なく、わりと平らになっている。この辺では見かけないが、関東地方でスタンプ形石器と呼んでいる早期の石器に類似する。2203~2206は小形の扁平礫。使用痕などは見当たらない。2207~2213は河原礫。2210は被熱して赤変している。

2214~2223は磨り石の類。2214・2229と2242が等間隔に並べられていた。漫頭形の2214は表裏中央に浅い打点状の凹みを有し、本面の右下は片減りしている。側縁は全周面取りをして、きれいに仕上げている。また全体が灰色に変色していることから、焼かれているらしい。2215は全体にややざらつく。側視すると僅かに湾曲して磨り減っていることから、相手は凸面をしている鏡餅状扁平石であろう。反対側は天然の礫面で、中程には点状に敲いた凹穴がしきされている。側縁は全周面取りして、一部は強く敲いて欠いている。2216の表裏は、てかてかとした磨り面をなす。とくに左図の右半面がすべっこい。全体に雨垂れ状の打痕があり、反対面には下方に凹穴がつく。身の厚い側以外の三方を敲いて面取りし、2215と同じく一部には、抉るように敲いた箇所がある。2217の表裏中央には、浅い小凹痕がつく。ともに磨り面をなし、本面は右半分がよく磨れている。また側縁は全周を敲打して、一部は面取りしている。

2218は石鎌形の磨り面を有し、右上と左下の対角する部分が磨り減っている。反対面には縱

縄文時代の遺構と遺物

に連続する6～7個の凹穴がつき、側縁は全周面取りしている。2219は表裏とも磨り面をなす。縁の際まで磨れていることから、磨りうすと併用されたものだろう。2220は甲羅状の磨り面で、左上と右下の対角する所が他よりも平らに近く減っている。反対側には連続する凹穴があり、左半分がよく磨れて減っている。周縁は全周を敲いている。2221は石鱗形の磨り面を有する典型的なもの。右側が全体に片減りし、真ん中に深い回転状の凹穴をもつ。反対面はやや平坦で、斜めに溝状の凹穴がつけられている。さらに左右の側縁は直線的に削ぐように面取りしている。お供え餅状の2222は、表裏の真ん中にそれぞれ浅く敲いたような凹穴がしるされている。片面側は凸面をなしてざらつき、反対側に凹面の磨り面を有する。これまで幾つか見てきたように、輝緑岩などの凸面をなす鏡餅状扁平石が相手に相違ない。火に遭って全体にひびがはいっている。2223は磨り石の破片。本面側に磨り面を有す。被熱して膚が荒れている。

2224～2239は四石の類。2224～2227は小ぶりなもの。卵大の2224は、表裏に深い凹みをつけている。また変色していることから、火熱を受けているようだ。2225は反対側にも一つの凹穴がしるされている。全体が黒変している。2226の表面はすべすべしていて、裏側にも凹穴がある。周縁は敲いてきれいにしている。2227は反対側にもう一つの、わりと深い凹穴がつけられている。

2228～2230は中形のもの。2228の表裏には3～4個の打点状の凹穴がつく。周縁はかるく敲いて調整している。また両端には敲きによるちょっとした剥げ落ちがある。2229は比較的平らで、いくらかすべすべした感触があり、中央にあばた状の凹みがつく。下端には打点状の敲き痕がついている。2230は硬砂岩製。扁平な円錐の中央には、表裏に深い打痕凹みがある。

2231～2235は棒状のもの。2231は表裏とも5、6個の連続した凹穴を有す。片側縁は面取りしている。2232は左側面がすべすべしている。下端には弱い敲き痕がみられる。2233は表裏の同じ位置に2個ずつの凹穴がつく。2234は反対側の後ろの部分にも2箇所、深い凹穴がしるされている。両端には敲打痕があり、一端側はべらべらと剥げている。輝緑岩製の2235は、表裏の同じ位置に2個ずつ浅い打痕凹みがつく。これら棒状の凹石は、先にみた棒状器と形や様態が酷似し、明確に分けることが困難な場合がよくある。このような類縁関係は、機能上の類似または作業上の連続性といったものによると考えられる。

2236～2238は粗形の凹石。2236は大粒の輝石が多く混じっている。中央には大きくて深い回転状の凹穴がしるされていて、右側面のみ敲打して削ぎ落としている。2237は磨りうす2269に抱かれるようにしてあった。地山石特有の黄色い皮膜があり、輝石などが露出している。片面にのみ、浅くダラッとした大きな凹みがある。2238の反対面には雨垂れ状の深い凹みがつき、そこだけは初な肌が現れている。下半部は焼けて灰白色に変色している。2239は棒状器に分類すべきものかもしれない。表裏に浅い打点状の凹みを有し、両端はかるく敲いているようだ。

2240～2246は磨り石大の安山岩錐で、これといった使用痕の見られないもの。2240は不格好

で座りが悪い。膚が荒れ、被熱しているらしい。2241は肉厚だが、形はよく整っている。本面側はわりと平らで、反対側は天然の疊面を有す。側縁は調整しているかもしれない。扁平な2242は、側視すると凹面状に反っている。上縁だけ敲いて調整している。小ぶりな2243は全体に風化が進んでざらつく。2244は大粒の鉱物が目立つ。やや角張り座りが悪い。側縁は敲いていくらか調整している。球状をなす2245も不安定。2246は掌におさめるにはやや大きい。ほどよい曲面をなすが、反対側は天然面で厚みが一定でない。2247は扁平で不格好。棒状疊器ともつかない2248の各面は、すべすべしている。左の肩に小さな敲き痕があり、下端には敲打器と同様の漬れ痕がついている。敲打器に含めるべきかもしれない。2249と2250は側縁を大きく敲打面取りしている。2249の先端はペン先状に敲いている。先端角錐状石器に含めるべきかもしれない。2250の本面は、意外とすべすべしている。全周を敲打面取りしている。

2251～2253は砕丸のような感じのもの。2251の裏面は平らでやたらにすべっこい。左側面は敲いているようだ。2252は座りがよく、本面側の左上と右下がわりと平らですべすべしている。上端側だけ敲いている。2253の反対面はいくらかつるつるしている。

2254の左側縁はきれいに面取りしている。全体が被熱して焦茶色に変色している。もとの石器がなんであったかよく分からぬ。2255～2261は団子形の小石。2257は球体に加工していく、すべっこい。2256と2257は火熱を受けて変色している。2262～2264は扁平な小円錐で、先端に打欠きがみられるが、人為的に加工したものか自然かの判断が難しい。

2265と2266は鏡餅状扁平石の破片。2265の表面はすべすべしている。2266はひびが入っていることから、焼かれて割られたものと思われる。2267と2268は磨りうすの残欠品。2267のへこみと周堤部の境は中期の磨りうすのようにはっきりとしない。目立ての打痕が残るが、すべすべしている。裏側の平坦面もよく使われていてすべっこい。

2269と2270は磨りうす。いずれも床面に伏せられていた。2269は凹石を抱くようにしていた。惜しいかな、双方とも搔き出し口側が損なわれている。2269は目立て痕が僅かに残るが、すべっこい。平らな周堤部も全体に敲いている。そしてへこみの形は、左に比べ右側が膨らんでいる。利き手の動作によるのだろう。また割れ口以外は煤けて黒く、縦筋もひびが入っている。2270はへこみも浅くて平ら。その際には、連続する目立ての打痕が残る。周堤部も点々と敲いている。また、側縁は全周を敲いて整形している。さらに裏側も万遍なく全体を敲打している。なお、割れ口からはひびが入り、タール状のこびりつきがみられる。

2271～2273は鏡餅状扁平石。いずれも床面に水平に据えられていた。2271は柱穴1に一部被さるようになっていた。使用痕などみえない。火熱を受けて幾つかに割れ、裏側の下半は皮一枚薄く爆ぜている。そして外周が黒く変色している。2272は表裏とも位置を定めずでたらめに敲いている。本面側の割れ口部分だけがすべすべしている。2273は表裏どちらでも安定する。しかし使用痕は見当たらない。

縄文時代の遺構と遺物

2275～2297は石鎌。うち2279は五角形鎌。2280は特に尖端が意識された感じで調整も整った優品。2284は寸詰まりながら先が絞られた五角形鎌。2285はやはり先が絞られたもの。2286は側縁が内済する三叉状の石鎌。残念ながら尖端と片脚を欠く。2288～2297は粗製鎌だが、2288～2293は比較的薄手の剥片を用いている。2298は有抉石器。平面は鼓形をしており、抉りを結ぶ帯状の部分を除く全体が著しく摩耗し、点状痕、線状痕が顕著である。

2299～2303は有肩石器の類である。2299は有肩諸刃石器である。裏面に強い線状痕と若干の点状痕がみとめられる。表面はごく古い剥離面のみに線状痕が残り、幾度か刃部の再加工が行われていることをうかがわせる。2300は表裏の面に線状痕がみられる。2301は刃部表面に線状痕がみられ、刃縁は潰れぎみ。茎状の部分の削に身が小さいのは度重なる刃部再生のためか。2302はこの種の石器の欠損品と考えられるが、あるいは有抉石器かもしれない。点状痕、線状痕などはみられない。2303は玄武岩製。やや大形の有肩刃広石器で、刃部は欠損している。

2304・2305は横刃の搔器。両刃の2304は搔器というより石庖丁に近い。両面ともに後縁は敲いて潰されている。使用する際に手に当たる部分をなめらかにしたものか。いっぽう、画面に刃部の使用とは関係のない線状痕や摩耗が顕著であり、着柄されていた可能性もある。2306～2309は小形の拇指状搔器。2310～2313も搔器である。2314～2317は石鎌。2318～2323は楔形石器。このうち2320は、有肩刃広石器の茎状の部分を欠損後に転用したものであろう。

2324～2376は不定形の剥片石器および使用痕のある剥片である。2326は両刃の刃器。2343は肉厚で刃に鋭さがない。2349は主棱線が潰れている。2346～2361は内済する小さな刃、もしくは刃こぼれをもつもの。2362～2376は縱長剥片の両側縁が刃として使われているもの。

2377～2380は加工剥片である。このうち2380は有肩刃広石器の茎状の部分、または有抉石器の欠損品の可能性がある。2381はホルンフェルス製の刃器で、搔器状の刃をもつ。

32号住居址（第163～167図 2382～2524）

2382は粗刃器で、裏側に縦皮を残す。2383は大形な刃器で、裏側に素材の縦皮を残す。こちら側に粗く打ち欠いて刃部をつくっている。また、円窓を打ち割った際にできた衝撃痕が右側に2箇所、裏側に1箇所みられる。

2384～2397は棒状器。2386は両端に、2385・2394・2396は一端にのみ、僅かにざらつく程度の敲き痕がみられる。2385・2386・2393・2394・2397には、この器種に通有な歯牙で噛んだような傷痕がついている。また2388・2392・2395の先端には階段状の小剥離痕がみられる。2398～2405は河原石。2398はやや扁平だが、他はみな棒状をなす。小形な棒状器とも考えられるが、使用痕などはとくにみられない。

2406と2407は磨り石。2406はすべすべとし、側面すると僅かに内側に湾曲している。反対面は甲羅形を呈するが、磨り面ははっきりとしない。片側縁のみ面取りしている。これもまた相手は鏡餅状扁平石であろう。2407は全体が風化してざらつき、磨り面も荒れています。片側縁の

み敲打面取りしている。

2408～2418は凹石。2408は本面側にのみ、4～5個の連続した凹みがあり、凹穴には黒褐色の付着物が入っている。2409の表裏には、縦に長く連続する回転状の凹穴がしるされ、側縁全周を敲打している。2410はハンバーグのようだ。表裏に連続する凹穴がつき、全周を整形している。全体の2分の1に浅状のこびりつきがみられる。2411の表裏の中央にはごく浅い凹みがしるされ、側縁を2cm幅で敲打調整している。2412はひびが入り、一部を欠失する。2413はやや縱長で扁平な蹠。本面側は紡錘形に、裏側には「8」の字形の深めな回転状の凹穴がつく。側縁は全周を敲打していて、一部は抉るように欠いている。2414と2415は团子形の小形な凹石。2414は黄土色の皮膜を有する。2415は表裏の中央に漏斗状の凹穴を有する。周縁は敲打していて、ざらざら感が残っている。また対角に欠け痕がついている。2416は河原石か。片面にのみ浅い敲き痕がしるされ、側縁から裏面にかけては細いひびがはいる。2417と2418は粗形の凹石。両方とも、地山蹠に特有の皮膜をかぶっている。2417はこちら側のみ連続した凹穴で、2418は縱長な凹穴が表裏につく。凹穴の中はざらざらとしている。

2419～2429は团子状もしくはそれに類する小石。2420は整形して球体をなし、わりと重い。このうち2419・2421・2422・2429は熱を受けて変色していて、2429は赤および黒色に変色し、輕石のように軽くなっている。2430は裏側が平らにちかい面をなす。故意に欠かれたようだ。

2431と2432は面取りしている安山岩蹠。いずれも手で握り持つには、やや無理がある。2431の本面側は広い範囲を乱打している。側面は上側を除く三方を敲打して削ぎ取り、右側は平らに整形している。2432も本面側のみ全体的に敲打し、周縁を敲いて調整している。

2433は上端が敲かれて少しがらつく。2434は地山蹠特有の皮膜をかぶる。全体にすべっこいが、右側の棱には弱い敲打による調整痕があり、ざらつく。また下端には敲打器に似た打痕がしるされている。2435は目の詰まった比重の重い河原石。使用痕はないが、本面側のみ被熱して紫～褐色に変色している。2436～2438は何の変哲もない河原石。2438は小形な扁平蹠。

2439は未製品のような磨りうす。搔き出し口を意識してU字形に縁際まで立てをし、口元だけ磨っている。下面となる反対側は舟底形で不安定である。周縁は敲いて整形している。2440は壁に斜めに据えられていた丸石。横に膨れたいびつな形である。2441は輝緑岩の鏡餅状扁平石の片片。

2442～2452は石鎚。2451は粗製鎚、2452は粗大鎚である。2453は珪質頁岩の有肩刃広石器。刃部の刺離は長さが揃っていて鋭い。2454は玄武岩で搔器の欠損品であろう。2455は小形の母指状搔器。2456も搔器である。2457は石刃を思わせるような縱長剝片の両側縁を刃にしている搔器。2458～2463は縱長剝片の下端が刃の搔器。2464は両刃の削器であろうか。2465と2466は有抉石器。2465は表裏両面の抉りを結ぶ帯状の部分の上下に強い線状痕を、下部に点状痕を残すほかは、全面的な摩耗はみられない。2466は使用痕が一切なく、ただ抉りを入れただけ

縄文時代の遺構と遺物

の剥片。2467は周縁を細かく加工されているが、薄く割れやすい剥片であり、実際に使用されたとは考えにくい。異形石器としておく。石錐には、全体を加工整形した2468～2470、剥片を利用して機能部をつくりだした2471～2473の2種がある。2474～2479は楔形石器。2475・2479の打痕は上下で90度ねじれている。2480～2524は不定形剥片石器および刃こぼれのある剥片。2493・2503は刃部加工されている。また、2516や2517のような彫器ともいいくべき刃をもつものもある。2521は加工剥片かもしれない。2523と2524は刃こぼれのある水晶の剥片である。

33号住居址（第160図 2274）

2274は33号址から出土した唯一の刃器。身が「く」の字に曲がっている。刃線は主に反対側へ加工して、背は敲打して潰している。

34号住居址（第168、169図 2525～2561）

2525は小形の石斧で、基部を欠損している。刃線は薄く研ぎ出され、片面に小さな衝撃による剝離がみられるが、その上へさらに研ぎつけて、鋭さを保っている。淡い乳緑色の質の良い蛇紋岩（リザーティト）製である。

2526は横刃型石器で、割り取った薄い石片を利用している。2527は背稜から裏側にかけて膠皮を残す、肉厚の横刃型石器。刃は正面側にのみ加工している。

2528・2530は縦型、2529は横型の粗刃膠器。2528は河原石の一端を敲き割って、階段状の鈍い刃をつくっている。2530は刃部の下半側を薄く剥いでいる。2529は階段状の刃部をとてもきれいに作り出している。刃部の中央は使用の結果、やや内湾している。2531は反対面に膠皮を有する。形は悪いが、打ち削った鋭利な端を刃としている。

2532は正面側にのみ磨り面を有する。外周は目立てたかのようにざらつき、両側縁は面取りしている。灰黒色に変色して、二つに割れている。2533は両面が磨り面。側縁の半周が敲打潰しがされている。

2537～2540は凹石。2537は三角形で薄い板状の膠。三方の角を敲いて潰し、右側縁の一箇所だけ敲打している。これらが使用によるものか、別な意味があつてのことなのか、よくわからない。2538の両面には、歯牙でかじったような浅い凹穴がついている。2539は表裏に5～7個の凹穴がついている。ずんぐりとした2540の表裏には、斜めに5～6個の凹みがしるされていて、両端には敲き痕が認められる。

2541と2542は磨り石大の安山岩膠。2541には地山膠に由来する皮膜がついている。2542は緻密で重くすべすべしていて、河原石のようだ。いずれも使用痕は見当たらない。2543～2546は棒状膠器。2545の両端は僅かに敲いて小さく剥がれている。

2534～2536は何の変哲もない河原石で、2536だけは被熱して灰黒色に変色し、所どころにひびが入っている。

2547は石錐。凹基だが、抉りは浅く、脚はゆるく「八」の字状に開く。2548は加工剥片。石

鐵か有肩刃広石器、あるいは搔器をつくろうとしたものか。裏面はほとんど加工されていない。2549は搔器。先端裏面には若干の摩耗がみられる。2550の円形搔器は、小さな板状剝片の周縁を刃にしている。2551・2552は楔形石器。2553は石錐。2554・2555は刃部加工された剝片石器。2555には一部摩耗がみられる。2556～2559は刃こぼれのある剝片である。2560は内湾の小さな刃をもつ剝片石器。2561は刃こぼれなどはみられないが、刃縁が摩耗して鋭さをなくしている剝片。使用によるものであろう。

35号住居址（第170図 2562～2565）

本址からは磨り石が一つと、黒曜石の剝片石器が3点出土しただけである。2562の磨り石は焼かれたらしく半分に割れて、ひびが入っている。

2563～2565は使用による刃こぼれをもつ剝片。いずれも片面からの力による刃こぼれである。

36号住居址（第171～179図 2566～2727）

2566・2567は石鉋の類。2566は基部と刃部の一部が岩石の性状線で欠けている。2567は鍛先であろう。裏面に鞣皮を残す肉厚の石片を使用している。2568も裏側に鞣皮を有すや猫背な石片でうすく鋭い刃をつけている。2569は中期でいう靴形石器に近い。刃縁はいくらか摩耗している。2570は部厚く身幅の広い偏刃の鉋のような形の石器。

2571～2581は石庖丁または横刃型石器の類。2571は横長の薄い石片。2572は貝殻状の薄い石片で、本面側に拇指を当て握るとしっくりする。2573の本面側は鞣皮で、刃縁は打ち割ったままで鋭く、切れそう。2574は扁平円錐打削法によって得られた典型的な石片で、本面側の上端と裏側の右端には、割取り時の衝撃痕がみられる。刃は表裏に加工して、直線的に仕上げている。2575は刃縁の左半分がとくに鋭利で、上辺中央だけ稜を潰している。2576は肉厚で、刃部は鋭くない。

2577～2580は身の中央に背稜を有する石片を用いている。2577の上半部は鞣皮を止め、刃縁は薄く鋭い。小形の2578も刃縁は鋭利。裏側に拇指を当てて握ると手になじむ。2579の刃部は、裏側にのみ打ち欠いている。2580は刃器。背後の部分を敲いて割っている。手で握れるのはこれが限界の大きさである。

2582・2583・2585・2586はいずれも楔形刃器である。2584は不格好な粗刃器で、本面側に鞣の表皮を残す。

2587～2602は棒状鞣器。2587・2590・2593・2594の端部にはかるく敲いたような痕跡がみられる。また2591・2593・2597には、歯牙でかじったような傷痕がしるされている。そして2592と2594・2598は被熱して変色している。2592は3箇所で割れており、上側の部分は37号住居址から出土した。2603の下端は、敲いて一皮むいたようにざらざらしている。そこには一円玉大の平らにすり減った箇所があり、すべすべしている。2604の下端には敲打痕がみられ、火を受けて黒変している。

2609をのぞく2605～2619は磨り石の類。2605は周縁の減りが目立つ。裏面は礫表。側縁は全周をきれいに面取りしている。2606は左下の4分の1だけがすべすべしている。側面の8割を面取り整形している。2607は表裏とも磨り面をなす。被熱して変色し、半分に割れている。2608は石鱗状の磨り面を有す。2610は表裏とも磨り面で、全周を面取りしている。とくに右側面は直線的に敲いている。2611は表裏中央に回転状の凹穴を有す磨り石。左側が磨り面ですべすべとし、右側は天然の礫面である。両側縁を絞るように敲いてあり、掌にしつくりと納まる。2612の本面側は磨り面として申し分ないが、全体が風化していて判別できない。表裏に凹穴がつき、側縁は大きく面取りしている。2613の上端は大きく欠かれ、磨り面を侵している。周縁は2cmの幅で敲打し、面取りしている。火熱を受けて黒く変色し、磨り面も荒れています。

長円形の2614はこちら側が磨り面で、縱長な凹穴があいている。裏側も縦に2箇所しるされている。側縁は全周を敲打して磨り面を喰うように面取りし、一部は抉るように敲いている。被熱のせいか全体が荒れている。大形な2615は左側が磨り面だが、あまり使用されてはいない。両側縁は磨り面を切って平らに敲打潰している。そして一部は2614と同じように欠き取っている。平べったい2616の表裏には縦長に連続する浅い凹穴がしるされている。すべすべしているのは半身だけで、利き手による偏りであろうか。裏側は本面ほど磨られてはいない。2617は凹石2624とともに、堆土のやや高いレベルで並んでいた。表裏に長い凹穴をついている。本面側が磨り面のようだ。2618は裏側が磨り面をなす。長細い2619は左側のみ磨り面となっている。

2620～2629・2637は凹石。2620の表裏には一つずつの凹穴がしるされている。不定形で座りの悪い2621の表裏には、一つずつの浅く小さな凹みがついている。左下の一部がすべすべしていることから、磨り石として使われたかもしれない。2622は2619と良く似ている。これより二回りほど大きい2624の表裏には、斜めに連続する回転状の凹穴があり、両側面にも2個ずつの凹穴がしるされている。

2623と2625は小形の部類に属す。2623には焦茶色の渋のようなものと土の混ざった付着物がこびりついている。おにぎり形の2626は表裏の中央に浅い凹みがある。被熱して赤または黒く変色している。2637は風化してざらつく。裏面には縦に並ぶ凹みがある。本面は形が整っていることから、磨り石の可能性もある。そして全体に焦茶色した付着物がかさぶた状に貼り付いている。

2627～2629は粗形の凹石。2627は、表裏と側縁の3箇所に縦に長い凹穴を有す。2628の表裏には、一つずつの凹穴がしるされ、タール状の付着物が点々とついている。また焼かれたのか、ひび割れしている。2629は片側にのみ凹みがある。一端は欠かれ、裏側は熱をうけて赤変している。2630～2635は卵大かそれよりも小さな安山岩礫で、2632は地山礫特有の皮膜が被っている。2630は被熱して施く、2633は荒れてざらざらしている。2635は側縁の半周を敲き減らして

いる。

2609と2636・2638は磨り石大の安山岩隕。2609は均整のとれた鏡餅状の隕。2636は全体に風化していて、焦茶色をした付着物がつく。片側縁のみかるく敲いている。2637は平坦な面を呈す。風化してざらざらしている。裏側は隕の表皮がのこる。2638は卵より一回り大きい隕で、ややごつごつしている。いずれも使用痕などは見当たらない。

2639は泥岩製の砥石。両面とも凹面をなし、左側の二面も使われている。元はもっと大きかったらしく、上側と右側は古めな破損面をなす。火熱を受けて一部が黒変している。2640の両端は表裏に打ち欠いている。2641～2663はみな河原石の類。扁平なものから棒状のものまで大きさも様々である。2661には、磨り石と同様の磨り面が認められる。2662は被熱して細いひびが入っている。

2664～2674は鏡餅状扁平石または平板石の類。このうち2664～2668は床面に平らに据えられていた。2664は長軸方向では僅かに凸面をなすが、ほぼ平らで、天然の面よりは僅かにすべすべとしている。右側面と裏側は熱を受け、焼けている。2665の平板石は平らで座りよく、本面側が上になって出土した。裏側よりはつるつるしていて、数カ所に点状の打痕が確認できる。2666の平板石も本面側が上になって出土した。平坦な面いっぱいに、磨りうすのような逆U字形の磨り面を有し、不平らな低いところは磨れていない。左側縁から下端にかけては、打ち割って形を整えている。2667はほぼ平らで、小高い部分に打痕がしるされている。全体に磨れてつるつるしていて、打痕の部分もざらざらした感じが全くない。裏側は全体を敲打して、周縁は敲いて潰している。2668は縦長な輝緑岩で、本面が上になって出土した。座りはよく安定している。被熱し、本面側は8割ほど赤色化して薄く焼けている。磨り面など使用の痕跡は見当たらない。2669は僅かに凹面をなし、縁の際まですべっこい。目立てとみられる細かな敲打痕が残っているが、磨りうすとするには足らない。2670の本面は僅かに凹む。被熱してひびが入っている。使用痕は見当たらない。2671は表裏どちらでも座りよい。磨り面などは確認できない。2672の表裏はともに平滑で、天然の隕面より僅かにすべっこい。2673はやや小ぶりのずんぐりとした鏡餅形を呈する。使用痕などは見当たらない。2674もとくに使用の痕跡は見当たらない。

2675は先端が絞られた感じの凹基盤で、やや寸詰まりの感がある。2676・2677は剥離の粗い石鎚。2678から2680は粗大鎚であろう。2681は剥片の下端に凹基盤をつくろうとしたような抉りのみがある。ここでは石鎚の未製品として扱うが、刃こぼれのある剥片といつてもいいかもしない。2682は円形搔器。2683は拇指状搔器である。いずれも典型的な形をした優品。2684は青チャートの搔器。石庖丁といった方が適切であろうか。2685～2687は搔器。2688～2691は石錐。2692は有抉石器。点状痕、摩耗などはみられない。2693～2696は楔形石器で、うち2695は石英。2697～2699は彫器ともいべき刃をもつ石器。2700と2701は縦長剥片の両側縁を刃と

縄文時代の遺構と遺物

して用いた剝片。2702～2722は刃こぼれした剝片である。2723～2727は加工剝片。

37号住居址（第180～182図 2728～2822）

2728は石鎌のような形をなす。全体に肉厚で、左側縁のみ稜を潰している。刃部に相当する部分は分厚く残っている。2729は刀器とするより楔形の石器であろう。円碟から割り取った石片の鈍い縁辺を刃に当てているが、刃は潰れ気味である。2730は磨り石。表裏に打痕状の縦長な凹みを有する。左半身だけがすべすべし、煤が全体に付着している。いっぽう裏側は継い凹面の磨り面をなす。やはり相手は鏡餅状扁平石であろう。上下端には一皮むけたような打痕があるが、その面は意外ときれいである。

2731～2736は棒状器。2731の表裏はややざらざらとし、左右両側面はすべすべしている。これまでもいくつも見えてきたように、この器種においてはごく普通のありかたのようであり、どうやら天然の状態らしい。2732～2734は折れてしまったものか。2733・2735・2736の先端には敲いた痕がみられ、2735の両端は細かな小剥離状態になっている。

2737は扁平な小円碟で、下半を打ち割って鈍い刃をつけている。2738は目の詰まった重い石。両端と片側縁に敲打によるつぶれがある。2739～2746は团子形の安山岩碟。2741と2745は丸く整形している。また2742～2744と2746は被熱して肩が荒れている。

2747・2748は鏡餅状扁平石。2747の本面側は下半のみすべすべしていて、中央やや上手にかかるく敲いた痕跡がみられる。反対面にも所々に同じ敲き痕が確認できる。そして両側縁は敲打して稜を潰している。2748は東の角の擾乱土中より出土した。座りが悪く、平らになるように据えて作図した。本面は裏側より僅かにすべっこいようだが、天然か人工的なものか判断できない。

2749～2766は石鎌で、ほとんどが凹基鎌。2750は側縁が内湾したもので、剥離の細かい優品。2760～2766は粗製鎌であろう。2767は頁岩、2768は黒曜石の有肩刃広石器で、2768は刃部の剥離が細かい。2769は搔器の欠損品か。2770は石刃のような縦長剝片の両側縁を刃とした搔器。2771は裏面に抉りを入れようとした痕跡があり、有抉石器とみておきたい。2772は有抉石器。点状痕はみられないが、主縁が摩耗している。2773と2774は彫器ともいべき刃をもつ不定形な剝片石器。2775と2776は楔形石器で、2775は肉厚。2777と2778は加工剝片。

2779～2822は刃こぼれした剝片。2790のみ、片面から意識して剥離しているが刃に鋭さはない。2811は裏面にこまかに線状痕がある。2814～2820は縦長剝片の側縁を、2821と2822は下端を刃として用いたもの。

38号住居址（第183～186図 2823～2910）

2823は短楔形の石鎌で、本面側は礫の表皮。刃縁は薄く、よく切れそう。2824は斜辺をのぞく三方をきれいに剥ぎとてあり、いずれの辺も刃として通用する。器種の同定が難しい。2825は打製石廻丁。背は瘤状に少し尖り、稜を潰している。刃には何か黄土色の付着物がつい

ている。2826は石片の縁辺を欠いて、分銅形にしている。器種の中では、黒曜石製で有抉石器とした小形の石器にいちばん近いが、同じものではない。

2827と2828は粗刃礫器。2827の上辺は少し欠けているようだ。刃部はもともと鈍角に作られていて、後が磨れてまるくなっている。右側辺は鋭利である。2828は両端が刃部らしく、いずれも鋭い。

2829～2838は棒状礫器。2829の両端は小剝離状に欠け、2831・2832の両端と、2833の一端にはかるく敲いたような潰れがみられる。2839はずんぐりとした円柱状の礫。端部をのぞく、全体の3分の2がすべすべしている。形態的には4010が最も近い。硬砂岩製の2840の先端には、小さい円形の敲打痕がある。敲打用の石槌ではなく、棒状礫器と同様の使われ方が想像される。

2841～2845は磨り石の類。2841は片面だけが磨り面をなす。右側面のみきれいで面取りしている。先端には僅かに敲いた痕跡が確認できる。2842は表裏とも磨り面をなし、片面には縱に連続する凹穴を有する。側縁は磨り面を喰うように全周を敲打し、面取りしている。そして、凹みのある側は全体が黒く煤けている。2843の本面側は平らな磨り面をなし、左上と右下が磨り減っている。反対面は礫表で凸凹していて、真ん中に大きな凹穴がある。全周は敲打面取りされ、左右は直線的に削いでいる。鎌頭形の2845は均整のとれた凸面を呈し、すべすべとした磨り面をなす。表裏には凹穴がつけられ、ひびが入っている。2844の表裏には、連続する縱方向の凹穴がある。本面側はすべすべとした磨り面をなし、右半身がとくに減っている。反対面は真っ平らで、そちらも磨り面として用いられたようである。両側面を敲打していて、右側は直線的に潰している。また一端は、表裏に打ち欠かれている。

2846～2850・2857は凹石。2846は2844の磨り石と瓜二つで、表裏には縱に長く浅い凹穴があり、一端が欠かれている。全体に渋状の染みがついている。2847には4～5個の連続した凹穴があり、表裏ともそっくりの形をしている。裏側は割と平坦である。細長い2848は二個一対の凹穴が表裏につく。右側面のみかるく敲いて面取りしているようだ。2849の左側面は敲打面取りしている。小ぶりで平たい2850の表裏には、一つずつの凹穴がある。2857の真ん中にはきれいな凹みがついているが、裏側は天然の礫面。全周を敲打面取りしている。

2851～2856、2858～2863、2866～2868は団子形もしくはそれに類する小石。2855・2856・2859は火熱を受けて変色し、膚は荒れてざらざらしている。2864・2865は磨り石大の安山岩礫。2864の本面側はすべすべしている。また側面はかるく敲いているようだ。2869～2876は何の変哲もない河原石。2873は熱を受けている。2875・2876は扁平な小円礫。2877は掌大の扁平円礫。表裏の中ほどにはあばた状の敲き痕が見られる。2878はやや長めな礫。

2879の磨りうすは3つに割れて別々に発見された。中央のへこみは深く、中期のそれと見紛うほどである。周縁部は整形時の敲き痕がみられる。また搔き出し口は僅かに欠けている。側縁は上下、左右を敲打整形している。そして裏側の中央には浅い小凹痕がある。特に裏側が変

縄文時代の遺構と遺物

色して脆くなっていることから、こちら側が直接火を受けたものと思われる。1118が形や状況などそっくりである。

2880～2884は石鏃。2880は側縁がやや鋸歯状。2882は脚が「八」の字に聞くもの。2884は粗製鐵であろう。2885は珪質頁岩の有肩刃広石器で、形とバランスがよい。984に似る。刃線にやや斜行する線状痕が刃部の左半分にみられる。2886は頁岩製の有肩諸刃石器で、鎌状ともいえる。全面に黒色の付着物がみられるが、着柄痕や結縛痕はみとめられない。2887は糸巻形搔器。2888も同様の意識を持って剥片を利用したものであろう。2889は小形の搔器。2890は赤チヤート、2891は黒曜石の横刃の搔器。2892は楔形石器。2893は刃こぼれした剥片だが、剥片そのものの形が2887によく似ていることから、同じような使い方がされた可能性がある。2894～2909は刃こぼれのある剥片。2910は頁岩の不定形石器。

39号住居址（第187～192図 2911～3030）

2911と2912は打製石庖丁。2911の刃部は薄く鋭い。背の稜は潰しがなされている。2912の刃部は表裏に加工した両刃で、所どころ欠けている。2913は細長い扁平な縛の先に片側から刃をついている。先にみた1455が同類である。

2914～2933はみな棒状礫器。先端が階段状に欠け剥げた2914・2915・2918・2931、先端に敲き痕のある2920・2933、歯牙状痕を有する2917～2919・2922・2933がある。2933は被熱して、ひびが入っている。用途と関係あるのか、いくつか折れているのが注意される。

2934～2939は磨り石の類。2934はよく使い込まれていて、側縁は算盤玉のように尖っている。表裏とも磨り面をなし、左図の側は左上と右下が対角して極端に磨り減っている。左利き用か。2935も左下の減り方が強い。磨り面としては反対面の方がふさわしいが、膚が荒れている。周縁を敲打し、左右は面取りしている。2936の左側は石鹼状の典型的な磨り面をなす。反対面も磨り面だろうが、膚荒れしていてよくわからない。側縁は磨り面を喰って全周を面取りしている。また熱を受けて全体が灰色に変色している。2937は目の詰んだ安山岩疊。表裏中央に浅い小凹痕を有す。全周をきれいに面取りしている。とくに片側は直線的で平滑にしている。2938と2939は膚が荒れていって、本来の磨り面を確認できない。2938の凹みのある中央は鉋で削ったように平らなことから、磨り面らしい。裏側は天然の縛面で、浅く何度もついたような敲き痕がしるされている。周縁は一皮剥くように面取りし、左右は直線的に整形している。2939はずっしりと重い。両面とも磨り面のようだ。本面は広い範囲に浅いでたらめな凹痕がつく。側面は左右のみ、かるく敲いている。

2940～2953は凹石。2940の表面には連続する縦長な凹みがつく。裏側は全面に尖ったものでついたような凹みがみられ、側面は全周敲いて整形している。また本面側は、被熱して灰黒色に変色している。2941は表裏とも「8」の字に凹みがつき、下端には虫が食ったかのような敲打による欠け跡が見られる。2942の表裏には縦長な浅い凹痕がしるされている。本面側には灰

色に変色している部分がある。

鏡頭形の2943・2944は表裏に凹穴を有する。2944は右側面のみかるく敲いている。すんぐりとした2945は片面にのみ凹みがあって、下端には敲き痕がってざらつく。長細い2946～2948は縦に3～4個の凹みを有し、下端にかるく敲いた跡がある。2948は上下端がざらつく程度。2949の連続する凹穴は、一つ一つがわりと大きい。卵形の2950は浅い凹みが表裏につく。2951～2953は粗形の凹石。表裏に「8」の字形の凹みがしるされている。2953には皿状の大きな凹みがあり、また上端には五百円玉大の敲き痕が見られる。

2954～2966は団子形の小丸石。2962・2964・2966は火熱を受けて変色し、2963はざらつく。また、2957の表面にはタール状の付着物がみられる。2961・2965には地山礫特有の皮膜がついでいる。

2967～2974は磨り石大の安山岩礫。2967の表裏にはY字形に細いひびが入り、被熱して赤褐色に変色している。形のよい2968には橙色の土がこびりついている。いっぽう形のよくない2973と2974にも、ロームか粘土がこびりついている。2971は火熱を受けたのか、赤色に変色している。大形な2978は地山石に特有な皮膜が剥げ落ちて、表面がざらつく。2972・2975～2977は河原の礫。2972は被熱して灰色に変色している。2976・2977は扁平小円礫。2976は周縁全周を敲いて潰している。

2979は製作途上のような磨りうす。周縁は一部を残して打ち欠かれている。中央は広く敲打され、僅かに凹んでざらざらしている。周堤との境は、釘先状の打痕がおよそ環状についている。2980・2981は鏡餅状扁平石。小ぶりな2980は熱を受けて赤褐色に変色し、ひびが入っている。2981は故意に割ったらしく、割れ口には打撃痕がみられる。

2982～2988は凹基の石礫。2985の尖端から左側縁ほどまでの欠損部は使用の衝撃によるものであろう。2988は周縁を加工してなんとか凹基盤の形にしたもの。2989は有肩諸刃石器。二刃に刃をもち、一方は両刃、もう一方は片刃で、片刃の裏面には刃縁に斜行する線状痕がある。2990と2991は炉の上面から出土した、刃こぼれのある剝片。2992と2993は石礫の欠損品。2994は搔器。2995は珪質頁岩、2996はホルンフェルス、2997は黒曜石の搔器。2998～3000は石錐。3001～3003は楔形石器。3004は彫器ともいいくべき刃をもつ石器。3005・3006は刃部加工された剝片石器。3007～3029は刃こぼれのある剝片。3030は加工剝片。

なお、2992～3030は本住居址内の北の角近くから発見された黒曜石の集積中の遺物である。この集積は、ほかに黒曜石の剝片80点とチップ25点で構成されていた。

40号住居址（第193、194図 3031～3061）

大形な3031は大きく反っていて良い素材とはいえない。斜辺に礫表皮をおき、主に本面側へ調整して作り出した刃縁には滑らかな感触がある。靴形石器に準ずるようなものであろう。刃器の3032は割り取った石片の鋭利な縁を刃に当てている。

縄文時代の遺構と遺物

3033・3035・3036は棒状礫器。どれもずんぐりとしている。3036は天然の地膚ですべすべとしていて、上端にはかるく敲いた痕がみられる。3034の下端には敲打による潰れ痕がある。棒状礫器の範疇かと思われるが、ここでは敲打器とみておく。全体が黒く煤けている。

3037～3040は磨り石。3037は形よくきれいに使い込まれた磨り石。片側は石鱗形の磨り面をなし、継に連続する凹穴を有する。右上と左下が対角して片減りしている。いっぽう裏側は亀の甲羅形をなし、同様に右上と左下が対角して磨り減っている。右利き故であろうか。そして両側縁を直線的に削ぎ取るように面取りしている。全体が荒れてざらざらしている。3038は表裏ともにつるつるとした磨り面を呈する。側面は全周2cmの幅で敲打整形されている。火に遭ったらしく、ひびが入り割れている。3039は表裏ともつるつるとした磨り面を有し、両面には連続する回転状の凹穴がつけられている。側縁は1cmの幅で敲打され、下端は磨り面を喰うようく敲打潰しされている。そして表裏とも大きなひびが入っている。3040も表裏に磨り面を有す。裏側は5個の連続する凹穴がしるされている。また側面は敲いて調整している。

3041は凹石。表裏には継に連続する凹穴があり、側面は軽く敲いている。3042は扁平な小円碟で、端部には自然とも人工とも判断のつかない剥離がみられる。3043は磨り石より二回りほど大きな安山岩碟。割れ口は古く、本面と割れ面には灰黒色に変色した所がある。

3044～3048は石鎌。剥離は粗く、形も整っていない。3049は搔器。3050はつくりの良い石錐。3051は影器ともいべき刃をもつ石器。3052～3061はいずれも刃こぼれした剝片。

41号住居址（第194、195図 3062～3089）

3077は薄身の石庖丁。3078は縦長の穂の一端を片側に加工して刃をつくっている。1455と同類であろう。3079は粗刃礫器。刃は本面側にのみ打ち欠いて、整えている。

3080～3082は棒状礫器。3080は4面ともすべすべとしている。いっぽう3081は荒れてざらつく。3082のすべすべとした本面には、小さな歯牙状痕が2箇所つき、先端には打痕がしるされている。

石团子形の3083は緻密で重い。3084～3088は凹石。3084・3085は片面のみに凹みがある。3084の下端はいくらかざらつき、裏側は熱を受けて灰黒色に変色している。3086・3087は両面に凹穴がつく。3086の下端には敲き痕がついてざらつき、全体の7割が灰黒色に変色している。3088は粗形の凹石。わりと軽い地山碟の3面に広めな凹みがついている。側縁はかるく敲いて調整している。

3089は小ぶりな磨りうす。へこみは浅く、該期の特徴をそなえている。奥の縁は将棋の駒のように角張っている。側縁は所どころ敲いている。裏面も数箇所をかるく敲打している。

3062は石鎌。脚は「八」の字に外へ開く感じ。3063は石錐。3064は有抉石器。抉りより下は後縁が摩耗し、光沢を失っている。側縁も抉りより下は摩耗して鋭さがない。3065～3067は楔形石器で、3067は角柱状の剝片。3068～3072は刃こぼれのある剝片。3073～3076は加工剝片だ

が、3073は下端が刃こぼれしているようである。

42号住居址（第196～198図 3090～3153）

3090は偏刃の石鉈の破片とみられる。刃縁の後は漬しがしてあり、被熱で変色している。3091は横刃型石器で、礫皮を残す本面側に片刃をついている。3092は身幅が広くてやたらに分厚い偏刃の鉈のような形をした石器で、36号址の2570とよく似ている。

3093～3102は棒状藤器。3093～3095の表面はすべすべしているが、使用によるものではなく、礫本来のものである。3094は敲いたのか、角がはじけている。3095は表裏に、3100の本面側にはねずみがかじったような一円玉大の傷痕がある。3095・3102の先端は少しがらざらしている。また中ほどから折れているものが半数あり、使用法との関連が注意される。

3103と3104は磨り石。3103は石鹼形の磨り面を呈する。つるつるして光沢を有し、右半分が片減りしている。反対側は平坦な面に縱長な凹穴がある。周縁は敲打面取りしている。また身の半分が黒変している。3104は表裏に凹穴を有する。石鹼形の磨り面は、左上と右下が他に比べて減りが強い。側面は全周を敲打して、左右は大きく面取りしている。火熱を受けているのか、全体が荒れてざらざらしている。

3105～3111は凹石。大形の3105は、小刻みに突いたような浅い打痕が縦に長くしらされている。周縁を敲打していて、とくに両側面は強く敲いている。均整のとれた3106は表裏に2個ずつの凹穴を有す。磨り面のようでもあるが、よく判別できない。3107は本面と同じような凹穴が、左側面と上下端についている。卵形の3108は表裏に凹穴があり、下端には先端角錐状石槌と同様なすべすべとした平坦な面が3～4面確認できる。被熱して灰黒色に変色している。3109の表面には、浅い縱長の打痕がついている。3110は断面が三角形状の各面に、乱打した凹穴がつく。また両端には敲打痕があり、上端の方は弱く目立たないが、下端は大きく潰れてい。同様な形の3111は表裏に2個ずつの凹みを有する。上端は擦るなどしたのか、僅かに摩滅感がある。

3112は磨り石大の安山岩礫。使用的痕跡は見られない。3113は卵をそのまま大きくした感じの礫で、周縁をいくらか調整している。被熱しているようだ。小ぶりでぞんぐりとした3114は、地山石に由来する皮膜がついている。3115は团子形の小石。火熱を受けたらしく灰色に変色している。3116～3118は形の良くない安山岩礫。3116は被熱して変色している。3118は左下の角から右へ、6cm分だけがざらざらとしている。

3119は小形な鏡餅状扁平石。本面は平坦で、側縁は一周敲いて整形している。使用痕は見当たらない。周縁の3箇所を敲いているようだ。3120は伏せられた状態で出土した、平べったい磨りうす。へこみはゆったりとした凹面をなし、周縁との境あたりは目立ての敲打による凹凸が残っている。全体に磨れて僅かにつるつるしている。

3121は尖端を欠損しているが、剥離の細かい凹基盤。3122・3123は粗製盤。3124は石鉈の未

縄文時代の遺構と遺物

製品と考えてよいだろう。基部の抉りを入れる際に剥離が先端までおよび、廃棄された様子がうかがえる。3125は石錐であろうか。3126は有抉石器だと思われるが、使用痕はみられない。3127は小形の楔形石器。

3128は有肩側刃石器だが、目立った使用痕はない。3129の有肩刃広石器は刃部左端が欠損し、刃線に対し左上がりの線状痕がみられる。左端を突き立てて右方向に引くように使ったとすれば、このような欠損と線状痕の関係は矛盾なくとらえられる。3130はホルンフェルスの有肩刃広石器。3131は珪質頁岩の靴形石器。下の外済した刃はややつぶれ気味で、むしろ斜辺の内済した刃が鋭い。あるいは天地逆に考えて、鎌状の石器を考えることもできよう。3132はつくりの良い見事な円形搔器。3133～3153は刃こぼれのある剝片。

43号住居址（第199、200図 3154・3173～3184）

本址からは遺物がほとんど出土しなかった。3154は何の変哲もない扁平な小円碟である。3173は楔形石器。3174～3183は刃こぼれのある剝片。いずれも片面からの刃こぼれだが、3178と3182には線状痕がみられ、特に3178は両面から刃こぼれを生じている。3184は粘板岩の不定形な剝片石器。

44号住居址（第199図 3155）

本址からは遺物がほとんど出土しなかった。3155は、表面がすべすべとしたコロッケのような安山岩碟。下端は打ち欠かれ、貝殻状に剥げている。

46号住居址（第199、200図 3156～3172・3185～3194）

3156と3157は横刃型石器。3156は肉厚で、本面側に礫皮を残す。刃縁は鋭く、表裏にかかる刃を調整している。3157は半分のみだが刃は鋭くて、切れそう。3158は河原の小石。

3159～3161は棒状礫器。3159は素材が悪く、風化してざらざらしている。両端にはかるく敲いた痕跡がある。3161にも同様の痕跡が見られる。側縁の下方には、爪大の敲き痕がしるされている。3160の稜はざらざらとしている。両端には敲き痕があり、中央には天然とも人工ともつかない、浅い凹みが見られる。

3162～3167は凹石。豆を大きくしたような3162の表裏には、2個ずつの回転状の凹穴がある。そして両端には敲打痕がはっきりとしるされている。3163には乱打した凹穴があり、凸凹している。3164と3165は、表裏と左右の4面に凹穴がついている。3165は上下にも見られる。鎧頭形の3166は表裏に1個ずつの回転状の凹穴と、下端には敲き痕がある。五平餅のような3167の表裏には、二個一対の凹穴がつく。

3168・3169は团子状の石。3169の右側は、敲いて面取りしている。3171は磨り石大の碟で、上半部の側面を軽く敲いて調整している。3172は被熱して灰色に変色している。3170も火に遭ったらしく二つに折れてひびが入り、赤及び黒色に変色している。

3185は石錐。欠損しているが丁寧なつくりである。3186・3187は搔器。3188の石錐は尖端が

若干潰れている。3189と3190は楔形石器。3191～3194は刃こぼれのある剝片。

47号住居址（第201、202図 3195～3206・3223～3226）

3195は小形の石鉗で刃先の一部を欠く。刃部は土摺れし、両側縁は腰まで潰しがなされている。斜刃の3196は鉈のような片刃を有す石鉗に似た石器。3197は横刃型石器。

3198～3201は凹石。大形な3198は表裏の中央にそれぞれ凹穴がある。周縁は全周を敲打整形し、右側は直線的に削いでいる。縦長な3199・3200の表裏には2個ずつの凹穴がついている。3199の下端右寄りには敲打痕が、3200の右上の側縁には敲打調整した箇所がある。3201は石基が荒れてざらつき、輝石が浮き出ている。

3203は断面が三角形をなし、一つの稜を敲いて面取りしている。下端には敲打による潰れ痕があり、ざらざらしている。全体が煤けて、黒紫に変色している。3202は自然礫。3204は地山礫に由来する皮膜が覆っていて、漆黒の煤が付着している。裏側は凹面をなし、砧のように滑らかである。周縁は角がとれてすべっこい。3205は团子状の小石。被熱して表面がざらざらしている。3206は地山石特有の皮膜の被った安山岩礫。火中に投じられたのか、黒または赤色に変色している。右側の欠け傷は、火中に投じられた後になされたもの。

3223・3224は石鉗だが、3224は粗製鉗だろうか。3225は石錐の欠損品で、基部のみ。3226は刃こぼれしている部分が内湾する剝片。この剝片の左半分は上下刃とも裏側へ刃こぼれしている。

48号住居址（第202図 3207～3222・3227～3231）

3207は小形な鉗。周縁の加工は最低限に止めている。刃先は鋭い。3208は粗刃器で、本面側の上半分は礫表。左半分は表裏に加工して刃をついている。3209～3211は棒状礫器。3210の表裏と右側面には二個一対の浅い歯牙状痕がみられる。3211の下部は打ち欠かれている。

3212・3213は磨り石。3212は表裏に連続する浅い凹穴を有する。両面とも磨り面をなすが、こちらの方が整っている。3213の中央には一円玉大のごく浅い敲き痕がある。もう一方はざらざらしていて不明だが、面の形はいかにも鏡餅状扁平石を相手にした磨り石のようである。側縁は軽く敲いて調整しているようだ。

3214～3216は凹石。3214は裏側が極端に痩せた長めな地山礫。表裏には縦に2個ずつの凹穴がしるされている。3215の表裏には乱打した浅い凹痕がある。上端のみざらざらとしている。鏡頭形の3216の両面には、3～4個の敲き痕がついている。周縁をいくらか調整しているようだ。3220は磨り石よりも二回りほど小さな礫で、使用痕などは見当たらない。3217～3221は团子形の小石。3218の表面にはロームがこびりついていて、洗っても落ちない。いずれも被熱している。

3222は鏡餅状扁平石の碎片。裏側の面よりはこちらの方がいくらかすべすべしている。火熱を受けて赤く変色し、縁辺ははじけ飛んでいる。

縄文時代の遺構と遺物

3227は楔形石器。3228～3231は刃こぼれのある剝片。3230は角度のある刃をもつ。

49号住居址（第204図 3257）

本址は48号址と重複している。出土した石器は僅か1点のみである。3257は草鞋のような形をした大形の安山岩砾。こちら側は石鹼状の面形を呈する。左右は大きく面取りし、とくに右側面を直線的に削いで、丁寧に均している。上端には一円玉大の敲き痕が、いっぽう下端は本面側に寄って虫の喰ったような敲き痕がつけられている。1502・1729などが同類の石器であった。

50号住居址（第203～206図 3232～3256・3258～3311）

3232の刃部は、主に本面側に打ち欠いている。側縁などには殆ど手を加えていない。火に煮たらしく、全体が黒変している。3233～3237は横刀型石器または刃器の類。3233の刃は鋭くない。本面側が櫛の表皮。3234は裏面が櫛表で、鈍い刃を有す。3235は不格好。3236は背から裏側にかけて櫛皮を止める。刃は鈍く、楔形刃器であろう。左右の刃は打ち欠いて形を整えている。3237はスレート製の大形な円板形刃器で、反対側は櫛表。刃縁は反対側からの打ち欠きでぎくしゃくしている。3248は粗刃櫛器。縁はかるく調整している。

3238～3247は棒状櫛器。3239と3246は一端が、3241は両端が、階段状に剥げ欠けている。3239と3245には歯牙状の浅い凹痕がみられ、3246は4面にしるされている。3247は僅かにざらつく程度の浅い傷状の小打痕が観察される。また火熱を受けたのか、ひびが入り黒く変色している。3238も被熱して赤く変色し、脆くなっている。

3249～3251は磨り石。3249は表裏とも中央の平坦面が磨り面をなす。側面は全周を敲打し、左右は平らに面取りしている。下端には五百円玉大の打痕がある。3250は表裏中央に一对の広く深い凹穴がつく。本面側が磨り面で、右側の減りが目立つ。周縁を敲打面取りし、上下端には敲きによる潰れがある。3251の表裏にはよく似た深い凹穴がある。磨り面は片側のみで、膚が荒れている。敲打面取りは片側縁のみ。反対の面は茶褐色に変色している。

3252～3254は凹石。3252の表裏には連続する長い凹み穴がつく。全体がすべすべしていて、磨っているようだ。下端には弱い敲き痕がある。3253は表裏に凹み穴があり、裏側の凹みは縱に長くついている。また全周をきれいに面取りしているが、下端には五百円玉大の櫛面が残っている。また、焼かれているようだ。3254の表裏には縱に連続する凹穴がある。下端には打痕がつく。3255は扁平な小円砾。3256は三方の稜に当たる部分を、皮一枚剥き取るかのように敲いている。下端は僅かに地膚を残し、上端は全面剥き取っている。地膚の残った3面はいずれも平らで、火熱を受けているようだ。

3258～3270は円子状の小石。硬砂岩の3259と3265はつるつるに磨き上げていて、3262も整形している。3258・3264・3266・3267・3269は被熱し、3263は焼けている。そして3260・3268・3270にはロームがこびりついている。

3271・3272は鏡餅状扁平石。3271の中央には、焦茶色の物質が縦に長くついている。3272は周縁を欠き、細いひびが入っている。左側は縦に沿って歯牙状の細かな打痕がついている。平坦部はつるつるしているが、砧のように使用されたものか磨ったものか断定できない。裏面は天然の礫面。

3273と3274は粗製鐵であろうか。3275～3278は搔器。3279は石錐。3280～3284は楔形石器で、3280は上下の打痕が80度ほどねじれている。3285～3310のうち、3285と3288は刃部加工された剥片石器、それ以外は刃こぼれをもつ剥片である。3290は表裏面とも同じ位置に、刃線に平行な線状痕がみられる。頁岩の3311は搔器としておきたい。

51号住居址（第207図 3312～3315・3320～3325）

3312の磨り面は石鹼形を呈する。裏側は天然の礫面で、僅かに凹面をなす。側面は左右ともきれいに面取りしている。また両端には十円玉大の打痕がある。細身で長めな3313の表裏には、間隔のある二個一对の浅い凹穴がしらされている。裏面は僅かに凹面を呈しへっこいことから、鏡餅状扁平石を相手とする磨り石の可能性がある。両端および右側面は、一皮剥くように敲打調整している。凹石3314の片面はカマボコ形に盛り上がっていて、中央に凹穴がある。側面は左右とも大きく削ぐようにきれいに面取りしている。3315は平たい硬砂岩の河原礫。

3320は平基の石錐で、尖端をわずかに欠く。3321は楔形石器。3322～3324は刃こぼれのある剥片。3325はホルンフェルスの搔器で、表面と裏面の一部に黒色物質が付着している。この黒色物質は煤ではないようだが、いかなるものはわからない。

52号住居址（第207図 3316・3326～3330）

3316はスレートの扁平小円礫。人工とも天然ともつかない小剥離がある。

3326は凹基の石錐で片脚を欠く。3327は楔形石器。3328は大きく刃こぼれした剥片。3329には刃こぼれなどはみられないが、稜線が潰れている。3330は搔器。

これらのうち、3327～3330の4点が柱穴内からの出土である。

53号住居址（第207図 3317～3319・3331～3335）

3317は台状の不格好な安山岩の礫で、地山礫に見られる皮膜が残っている。下端に敲打痕がある。3318は鏡餅状扁平石または磨りうすの破片。火を受けて黒変している。磨りうす3319のへこみは深く、中期のものと見紛うほどである。目立てた直後らしくざらざらしている。周堤部にもあばた状の浅い打痕が残っている。裏側は、火に遭ったらしく全体に薄く変色していて、これが削れた直接の要因となったようだ。

3331～3333は刃こぼれのある剥片。3334は石錐だと思われるが、機能部が薄くはっきりしない。刃こぼれのある剥片かもしれない。3335は楔形石器。

54号住居址（第208～211図 3336～3410）

石斧3336はやや扁平気味の身を呈する。いわゆる定角式石斧というほどには、面と角が明瞭

ではない。刃線は円弧状で、両刃の鉈状をなし、基端は二方向から敲いて山形に整形されている。一部に素材のあばたがあるものの、滑らかで丸みを帯び、形の整った石斧である。表裏面の下3分の1ほどに一定方向の研磨痕がみられ、使用しつつ研ぎなおしている様子がうかがえる。刃縁は磨耗が著しく、刃こぼれもみられる。石材はあまり良質ではない白色のダナイトで、縞がある。

3337は基部がやや傾く、身の厚い石鎌。左側縁の稜を強く潰して抉るようにしてあることから、柄に対して斜めに着柄したものと思われる。3338は身の反った肉厚な石片。反対面に打割り時の衝撃痕がのこる。

3339～3342は石庖丁または横刃型石器。3339の刃縁は鋭く、礫皮の部分は砥石のようにつるつるしている。3340は薄く、背にいくらか礫皮が残る。ほとんど手を加えていないが、刃は薄く切れそう。裏返して拇指を当てて握るとしっくりとする。3341の刃部以外は礫皮で、風化が著しい。3342は表裏に加工して刃をつけている。3343は扁平な円錐に刃を作り出した粗刃礫器。

3344～3349は棒状礫器。3345の片面には歯牙状の浅い凹みがあり、本面は他の面よりもすべすべしている。下端には小さな敲き痕がある。3344の端部には天然とは異なるざらざらした打痕がつく。3350～3354は团子形の小丸石。3352以外は被熱して変色している。3354は球状に整形され、表裏中央は軽く敲いて凹ませている。3355は先端角錐状石槌の類。両端には、敲打痕が対角してペン先状についている。

3356・3357と3364・3365は磨り石。3356は平坦な面にアバタ状の浅い打痕凹みがつく。熱を受けて膚が荒れ、洗っても落ちない土がこびりついている。磨り面ははっきりしない。3357の表裏には二個一対の凹穴がついている。反対面は片減りしていく磨り面らしい。被熱して灰黒色に変色し、膚が荒れている。3364の両面には継に連続する凹穴がつくが、裏側の凹みは極めて浅い。両端は軽く敲打していく、側縁も荒っぽく面取りがしてある。大形でアンパンのような3365の表裏の中央には、大きな回転状の凹痕がつく。右半分は片減りしていく、すべっこい。周縁は敲打されて、左右は磨り面を侵して面取りしている。

3358～3363と3366・3367は凹石。3358・3359の表面には、何か焦茶色のものが貼りついている。3359の両端はいくらか敲いている。3360は地山石で、一端に寄って表裏に回転状の凹穴がある。不定形な3361には、何か先の細いものでついたような小さな凹痕がつく。3362と3363の端部には、一つは虫が喰ったような、いま一つは平らな敲打痕がある。小ぶりな3366の両端にも歯牙で噛んだような打痕がつく。ジャガイモのような3367には、地山礫特有の皮膜がついている。三面に一つずつの回転状の凹穴がしるされている。火中に投じられたらしく、黒灰色に変色している。

3368は全周を敲打整形し、片側面は大きく削いで平らにしている。面取り以外に使用痕などは見当たらない。小ぶりな3369は火熱を受けて黄白色に変色し、ひびが入って半分を欠失する。

全体に点々と突いたような敲き痕がある。卵を少し長くしたような3370も、全体をかるく敲いているようだ。3371は扁平な小円錐。3372～3375は河原石。3374の両端には天然とも人工ともつかない打痕状の傷がある。3376はこの辺りではあまり見かけない石材。鏡餅状扁平石の3377は平坦面の所々にでたらめな敲き痕がしるされているほか、縁の際まで磨れてすべすべしている。さらに周縁部の3箇所を敲いている。裏側は天然の礫面。

3378は五角形錐の優品。肩部を欠損し、裏面から再調整を施している。図の白抜きが再調整された部分で、スクリーントーン部には線状痕や摩耗がみられ、その違いは歴然としている。3379は使い込まれて尖端が丸くなっている石錐。明確な回転の痕跡をとどめていることから、手でつまんでもんだのではなく、柄をつけて回転させたことがわかる。また、黒曜石の石錐がこれほどにすり減るには、相手となるものも硬質のものであったことが推察される。3380は指でつまめる基部を持った石錐。3381は弧刃の搔器。3382～3385は楔形石器で、3385は下半が欠損している。3386は刃部加工された剥片石器。3387は刃こぼれのある剥片だが、線状痕がみられる。3388～3409は刃こぼれのある剥片。3389の刃の一部は、調査時に欠損したもの。3410は加工剥片。

55号住居址（第212図 3411～3419）

3411は輝緑凝灰岩製の小形の石斧。刃部には刃こぼれと磨耗がみられるが、刃の片面のみが減っていて、横斧であったことがわかる。全体が丁寧に磨かれて表面は滑らかだが、基端の剥落が著しい。これらは明らかに研磨痕や整形された面を切っており、使用中に剥落したものと判断される。着柄して使用している際に、基端に力が加わったものであろう。なお、裏面に右上がりのいく筋かの線状をなす、ごく薄い黄褐色の付着物が見られる。

3412は石鉈。薄く鋭い刃縁は表裏とも土擦れしている。3413の粗刃礫器は裏面が全面礫皮。3414の表裏中央には、浅い乱打状の凹痕がつく。両端には、敲き痕がある。

3415は粗製鐵。3416は身が斜めの有肩刃広石器で、一部欠損しており、風化が著しい。ホルンフェルス製。3417は珪質頁岩で、薄い刃をもつ錐状の石器。3418は楔形石器。3419は刃こぼれのある剥片。

56号住居址（第212、213図 3420～3460）

3446と3447は磨り石。3446は石錐形を呈し、右側半分は片減りしてつるつるしている。裏面は僅かに凹面をなし、すべっこい。側縁は敲打され、上端と右側縁は面取りしている。やや小ぶりな3447の表裏は、両面とも磨り面をなし、左の面は甲羅形に磨り減っている。二つとも被熱しているのか、膚が荒れている。3448の表裏には浅い凹痕がつく。凹穴のある面と側面は天然の礫面を残し、ほかは敲いてうすく剥いでいる。3449の表裏には乱打状の凹痕が5～6個つく。側面はいくらか敲いているようだ。3450は硬砂岩の河原石。

3451～3459は団子またはおはぎの大安山岩礫。3454・3455の表面にはロームが全体にこびり

縄文時代の遺構と遺物

つき、3453と3456は被熱している。3460は平たい大形の礫。下端は大きく欠けているが、割れ口の角は敲いて潰している。

3420は石錐。3421は粗製錐だろうか。いずれも一部欠損している。3422は光沢を帯びた灰色のチャートで、両刃だが、有肩刃広石器もしくは搔器の欠損品であろう。3423は搔器。薄い片刃で、切る作業に適するとみられる。3424～3426は楔形石器。3427は石錐、あるいは彌器であろう。表面に線状痕がみられる。3428は有抉石器。複数の抉りもしくは連弧状の小さな刃をもつ剥片で、異形石器ともいえるが、図で横断面をとった部分が一对の抉りと考えられ、これより下の稜線がつぶれ、若干の点状痕や線状痕がみられることから有抉石器とする。3429～3445は刃こぼれのある剥片。3429には表裏面に線状痕がみられる。

57号住居址（第214図 3461～3477）

3461は刃器。裏側は全面縛表で、刃縁は鋭い。3462は饅頭形の磨り石。両面とも平らな磨り面を呈する。側面は敲いて一皮剥いている。3463～3465は凹石。3463の表裏には2個ずつの凹穴がつく。本面側は磨り面かもしれない。周縁はかるく敲いて調整している。3464には、両面に3個ずつの連続する凹穴がある。両側縁の同じ位置にも凹みがつけられている。また両端にも凹痕があるが、下端のほうはかなり凹んでいる。大形の3465は裏側の半分を欠損する。側縁は2.5cmの幅で敲打調整されていて、左右は大きく面取りしている。輝緑岩の3466の表裏には歯牙状の敲き痕があり、上端はいくらかざらざらとしている。一応凹石に入れておく。团子石の3467は球体に整形して磨かれ、溝状の凹みもきれいに磨っている。

3468と3469は棒状礫器。3468の両端には、天然とも人工ともつかない小剥離痕がある。3469の左半面は意外にすべすべとしていて、両端には弱い敲き痕がつく。3470は円板形の刃器で、側縁は均一に加工して形を整えている。

3471は珪質頁岩の搔器。剥離は粗い。3472は石錐。3473と3474は楔形石器。3474の上端の打痕は裏面にある。3475～3477は刃こぼれのある剥片。

58号住居址（第215～218図 3478～3562）

3482は曲刃の鉋もしくは靴形鉋で、刃先はよく摩耗している。左側縁は基部を絞るように加工し、穂は敲いて潰している。そして、潰しがしてある中間を除き基部と刃部は煤けていて、洗っても落ちない。

3478～3481は刃器または横刃型石器の類。分厚い3478は原形を同定するのが難しい。3479の背から裏側にかけては石材の表皮。刃は片側に粗くついている。3480は打ち割った石片の薄く鋭い縁を刃にしている。3481の本面側は礫の表皮で、刃縁はいくらか調整している。3483の裏面は礫の表皮で、一辺を片側に割りとって刃にしている。

3484～3497は棒状礫器。3485の表裏はざらつくが、側面はすべすべしている。3487の肩は荒れている。3485・3486・3495・3497の表裏には歯牙でかんだような浅い打痕がしるされている。

3486のほかはみな二個一対で、こうした様態は円石と同じである。3488～3490・3495～3497の端部には打痕がついている。3488は小剝離状をなし、3486・3487・3489は欠け飛んでいる。3490の片側縁は敲打潰しがしてある。3497のなかほどには打痕凹みを切るように、浅い線状の傷がついている。また3494にはタール状のこびりつきがあり、3496は火を受けて淡く黒変している。

3498～3503は磨り石の類。3498の表裏にはやや縱長の深い凹穴がある。磨り面をなすと思われるが、荒れているうえに黒変していて、はっきりしない。側面には同じ位置に凹穴がある。3499は表裏に2個ずつの回転状の凹穴を有し、両面とも石鱗形の磨り面をなす。周縁はかるく敲いている。輝緑岩の3500は表裏とも磨り面をなす。つるつるとした磨り面を侵して、あばた状の浅い乱打痕がしるされ、周縁も敲打調整している。ひび割れて赤変している。3502の表裏には二つずつの凹穴があるが、磨り面はいまひとつ判然としない。上端の一部と右側縁を面取りしている。3503の両面には3～4個の凹穴が縱につく。凹穴の付近は平らな磨り面をなし、周縁はよく磨り減っている。裏面はいくらか凸凹しているが、磨られているようだ。両側面は平らに整形され、それぞれ一つの凹穴がある。均整のとれた縱長な3501には、表裏に二つずつの突いたような浅い凹穴がある。全体にすべっこく、磨り面とみてよさそうだ。両端にはかるい敲き痕がある。

3504～3510は凹石の類。3504・3505は片面に凹穴を有し、両端には敲打による潰れ痕がある。3506と3507の表裏には2～3個の連なった凹穴があり、片面側がわりと深く、他面側が浅い凹みとなっている。卵形の3508には縱長の連続する凹穴があり、やはり裏面側が浅い。3509の表裏には連続する凹穴が斜めについている。裏側の凹みは浅い。身の厚い3510には片面のみに浅い凹みがつき、両端には弱い敲き痕がある。鎧頭形をした小形の3511の両端には、敲打による潰れ痕があり、下端は薄く剥げている。粘板岩の3512は、断面がレンズ状になるように表裏に加工している、石製円板。周縁は下手をのぞいて稜を潰し整形している。先に見た1117・1784が同じものである。

3513～3518は団子形の小丸石。3514と3517は赤変して肩がざらざらしている。砲丸投げの鉄球のように大きな3519の表裏には、浅い凹みが1個ずつある。また片側縁のみ面取りしている。3520と3521は河原石。硬砂岩の3521は赤変して肩が荒れている。

3522は製作途上のような磨りうす。中央を敲き減らしていく、周縁との境には目安となる範囲を釘先状についている。周縁の7割方も敲打して整形している。座りはよく、がたつかない。3523は鏡餅状扁平石の破片。表裏とも自然面とは異なるすべすべした感触があり、所どころに打痕凹みがある。側縁は敲いて調整している。3524は輝緑岩の小形な磨りうす。細長く浅いへこみは凸凹感が残るが、磨かれてすべすべしている。実用品ではないようだ。

3525～3528は石鎚。3525は剝離が細かい優品。3528は片面のみの加工。3529は搔器で、直線

縄文時代の遺構と遺物

の片刃。3530～3532はいずれも珪質頁岩の石錐。3530と3531は柄を着けるもの。3532は指でつまむものであろう。坂平遺跡出土の石錐はこの3点を除く全てが黒曜石製であり、その意味で本址は特徴的である。3533～3535は楔形石器。3536～3561は全て刃こぼれのある剝片。内湾刃の3550はあるいは刃部加工されているかもしれない。3562は水晶の結晶頂部。加工の痕跡はないが、透明度は高い。実用以外の目的で所持していたものであろうか。

59号住居址（第219、220図 3563～3634）

3563は砂岩製の粗刃器で、裏側が全面磨表。刃は粗く加工しているが鋭い。3564～3572は棒状器。3564の先端には弱い敲き痕があり、火熱を受けている。3568の側面はつるつるとしていて、表裏も天然の滑らかな膚である。左下の稜には小さな欠け傷がある。3569には浅い小打痕がしるされ、左下端には打ち欠き痕があり、被熱して赤変している。3570は裏側の稜にも歯牙状の凹痕が2個ずつあり、下端には弱い敲打潰れがみられる。3571の一部には打ち欠き痕があり、側縁は黒く煤けている。

饅頭形の凹石3573は、上下端にも弱い敲打痕がある。3574は三方の脊稜と端部を敲打面取りしている。また、それぞれの面はすべすべしている。先に見た1730と同類である。扁平な砂岩砾の3575の左側縁は滑らかで、しかも光沢を有している。砾石ではなく、何かなめすための道具のようだ。

3576は花豆大の硬砂岩砾。扁平な3577は火熱を受けて黄土色に変色している。3578は小形の磨りうす。搔きだし口を意識して、やや縦に長く目立てをした後に敲き減らしており、ざらざらとしている。また裏側の中ほどには凹穴がある。下端はかるく敲いている。1118の磨りうすと様態がそっくりである。

3579・3580は石錐。ともに磨り硝子のように光沢のない黒曜石。3581と3582は粗製錐。3583と3584も粗製錐とも思われるが、はっきりしない。加工の痕跡のある剝片である。3585～3588は粗大錐である。3589は拇指状の搔器。刃部は小さいが、整った形の良い刃をつくり出している。3590は横刃の搔器で、部分的に両刃である。

3591～3593は石錐。3594～3596は楔形石器。3597は彫器であろうか。3598は有抉石器で、抉りを結ぶ帯状の部分の上下は点状痕、線状痕、摩耗が著しい。3599～3601は不定形の剝片に細かい調整が施されている。抉りを意識したような加工がみられるため有抉石器である可能性もあるが、判断はできない。いずれも使用の痕跡はみとめられない。3602～3633は刃こぼれのある剝片で、3621がチャートであるほかは全て黒曜石である。3634は加工剝片。

60号住居址（第221～227図 3635～3785）

3635は石錐の基部とみられる。3636は錐の刃部で、裏面に磨表を残す。3637も刃部とみられ、片側に減っている。3638～3640は横刃型石器の類。3638の背には砾皮をおく。刃縁は鋭く、手が切れそう。右肩に簡単な加工がみられる。3639は小さな石片の一辺を刃とする。3640は刃が

薄く、先は尖っている。3641・3642は身の中央に脊線を有する礫を用いた刃器。3641は裏側が礫表皮。36号址にいくつか類例があった。

3643～3651と3655～3659は棒状礫器。3650・3657の膚は光沢を有する。また先端に小さな衝撃痕を残す3645・3649・3651や、敲き痕を有する3646・3648・3656～3658がある。3652・3653は敲打器。3652の先端には爪の大きさほどの打痕があり、火熱を受けて黒く焼けている。3653の両端には敲打潰れがみられ、下端は後に沿って長くついている。3654は鈍い刃を有する楔形刃器。

3660～3666、3678・3679は磨り石の類。3660は表裏とも磨り面で、左下と右上が対角に磨り減っている。両側縁は、磨り面をいくらか侵して面取りしている。また全体に、茶褐色の土状のこびりつきがある。3661は本面側が磨り面と思われる。側縁を敲打した後、片側のみ面取りしている。3663は両面が磨り面で、それぞれ縦に長いアバタ状の打痕がつく。周縁は敲打調整している。熱を受けて黒変していて、被熱後に左右を直に削ぐように面取りしている。ジャガイモのような3662の片面には凹穴があり、裏側の左半分が磨り面をなす。これも焼かれた後に片側面が面取りされている。

潰れた鎌頭のような3664の磨り面は、側視すると凹面をなしている。相手は凸面をなす鏡餅状扁平石に他ならないだろう。3665の曲半は磨り面として申し分ないが、判然としない。半身が瘦せていて、浅い打痕がしるされている。また全体に黒変して、ひびが入っている。おやきのような3666は右上と左下が対角して磨り面をなし、側面は敲いて調整している。3678は輝緑岩の磨り石で、裏側がすべすべとした磨り面をなす。表裏には連続する回転状の凹穴と、先端には敲打痕がある。3679の表裏はつるつるしている。また浅い点状の敲き痕がつく。上端は敲いた箇所をきれいにしている。

3667～3677は凹石。3667は表裏に凹穴を有し、裏側は浅いアバタ状の凹みである。3668も同様に裏側が浅く、上端には敲打痕があって、一皮剥げて飛んでいる。3669・3672～3674は先の尖ったもので突いたような点状の凹痕が、3672は片面に他は両面についている。そして3669は周縁を敲いているようだ。3670は片面のみに浅い凹穴と、左右と下端の三方に敲打痕がある。また、被熱のためかひびがはいっている。3671の表裏には縦長の大きな凹穴があり、両側縁は敲いて整形している。3675と3676は長めな安山岩礫の両面に、縦長の連続する凹穴がある。3675は地山礫に由来する皮膜をかぶる。3676の表裏は磨り面のようにつるつるしていく、下端には一円玉大の敲打痕がある。そして火中に投じられたのか、全体にひびが入っている。3677の表裏中央には削と大きな回転状の凹穴が一つずつしるされている。

3680～3684は団子～鎌頭大の安山岩礫。テニスボールほどの大きさの3680は、点々と茶褐色の渋状のこびりつきがみられ、3681にはロームが全体にこびりつく。3685～3687は磨り石大の礫。3685と3687の下端には敲打したような跡があるが、天然か人工的なものかは判別が難しい。

3685と3686は被熱して灰黒色に変色している。

3688～3693は河原の躰。3689の一端は敲打潰れしている。そのほかは使用痕などみられず、3690などの小躰は何に使用されたかまったく不明である。3694は砂岩製の砥石。本面が使用面で、上下方向の動作による使用減りが観察される。元はもっと大きかったらしく、上側と右側は古めな破損面をなす。3695は鏡餅のようだ。表裏の凸面には、何ら使用された痕跡が見当たらない。全周を敲打していて、上端から右側縁にかけては面取りしている。

3696は日の詰んだ安山岩躰で、一隅は瘤のように膨らんでいる。目立ての敲き痕がないことから、中央はもともと僅かに凹面を成していたようだ。使用の頻度は少ないものの、搔出し口までつるつるに磨れていて手触りよい。裏側もつるつるとしていて、磨いているかのようだがはっきりしない。3698の所どころには尖った先で突いたような打痕凹みがあり、中央と搔出し口はすべすべしている。使い始めたばかりと目される。二つとも磨りうすの類とみなされようか。

3697は製作途上のような磨りうす。中央には無数の打痕がしるされ、ざらざらしている。3696や3698が使用されていることを考えれば、目立ての初な状態なのかもしれない。側縁も所どころかるく敲いている。3699は輝緑岩の鏡餅状扁平石。中ほどと縁に近い部分には凹痕があるが、これらが人工か天然か判断できない。両側縁は故意に削られ、弾け飛んでいる。

3700～3707は凹基の石鎌。3700・3701は均整のとれた優品。3703は球頭を含む質の良くない黒曜石を用い、剥離は粗く、ねじれている。3704は油質の青チャート。3705・3706は粗雑なつくり。3708は平基、3709は円基の石鎌。3710～3714は五角形の石鎌。3715はハート形で脚がしっかりしていないが、石鎌とみておく。3716と3717は粗製鎌であろう。3718は鍬状といってよい有肩劔刃石器。茎状の部分をつくりだす抉りはあまり明瞭でない。珪質頁岩製で表裏両面に茶色く、光沢のある物質が付着している。3719は有肩劔刃石器の茎状の部分だろう。

3720～3722は黒曜石の搔器。3720は裏面の刃縁際にわずかながら刃線に平行な線状痕がある。3721は糸巻形搔器に似た形の剥片を用いているが刃部以外は無加工。3722は丸みのある良い刃をつくり出している。3723は頁岩の搔器。鳥翼形の剥片だが、刃がつくられているのは欠損部より左側に限られる。3724は石錐であろうか。欠損しているが、石錐だとすれば人形である。3725は指でつまむ基部がついた石鎌。3726は有扶石器で、点状痕・摩耗などはみられないが、下端に連続した複数の打痕をもつ。この打痕は剥片そのものの形をかえるところまではいっておらず、どのような意味をもつものか分からぬ。このような打痕は37号住居址の2772にもみとめられる。

3727～3746は楔形石器。3747は不定形な剥片だが、刃部は丁寧に加工されている。3748も薄い剥片ながら両面より刃部調整されている。3749～3783は不定形の剥片石器。刃こぼれのある剥片がほとんどだが、3761は搔器状の片刃がつくりだされている。3778と3779は搔器であろう。

特に3779は拇指状の整った刃をもつ。また、3756・3757・3782には稜線のつぶれや摩耗がみとめられる。3784と3785は加工剝片。

61号住居址（第228図 3786～3804）

粗刃器の3786は縦長の分厚い石片の一端に、雑な刃を作っている。3787～3790は棒状器。3787の端部には小さな欠けが、3790の両端には敲打痕とその際に生じた小さな剝げがある。そして3789の本面に二つと両側面に一つずつ、また3790の表面にはそれぞれ歯牙状の浅い凹痕が刻まれている。3791と3792は上辺を除いて周縁を敲打している。敲打器とすべきだろうか。

3793と3794は磨り石。3793は両面とも磨り面をなすようだ。側縁はきれいに面取りし、片側は直線的に削いでいる。火熱をうけて灰色に変色している。3794も表裏に磨り面を有する。やはり片側縁を面取りしている。3795は大粒の鉱物が目立つ安山岩器の表裏に凹穴をつけている。3796は皮膜をかぶった磨り石大の地山器。面取りしているようで、右側面の皮膜が剥げ落ちていている。

3797は抉りの浅い凹基盤。薄い剝片の縁辺のみ剥離して整形している。3798と3799は薄手の楔形石器。3800は不定形の刃器で、刃線と平行な線状痕がある。下方の大きな剝離は調査時に失ってしまったもの。3801も刃部加工が施されている不定形の剝片石器。3802と3803は刃こぼれのある剝片。3804は全面に点状痕、線状痕、摩耗、稜線のつぶれがある黒曜石。この状態は有抉石器の使用痕と全く同じである。

62号住居址（第229～232図 3805～3895）

3805は小形な鉗と目される。裏側は全面器表で、左側縁は基礎まで棱を残している。3806は片側が全面器皮の薄い石片で、刃縁は鋭く一部分だけ表裏に調整している。上辺の突起が気になるが、横刃型石器の類だろう。3807は分厚いが刃縁は鋭い。3808はやたらに分厚く、刃は大割りしてつけている。粗刃器のようなものである。3809と3810は、円器を片面側に打ち割って、粗刃器特有の刃を作り出している。

3811～3814は棒状器。3813の下端は階段状に小さく剝げ、上端には敲打痕がある。3814の表裏には、二個一対の浅い歯牙で噛んだような打痕がある。3815は磨り石大の安山岩器。周縁は敲打調整していて、片側は大きく面取りしている。トウモロコシ形の3816の表面はつるつるとしている。本面に一円玉大の浅い凹痕があり、先端にも弱い敲打痕がある。3817～3819は敲打器の類。輝緑岩の3817は、表裏に重ね状の浅い乱打痕がつく。また先端は敲き削がれている。3818の下端と3819の上端には敲打器特有の潰れがみられる。

3820～3829は磨り石の類。ハンバーグのような3820は右下が片減りしているが、磨り面は確認できない。表裏には、縱に長い不連続な凹痕がつく。3821の左上と右下は対角してすべすべしている。3822は全体に土がこびりついてよく判らないが、曲率からして磨り石と思われる。周縁を調整している。少し形の悪い3823の下半は、縁に沿って磨り面が見られ、右下の減

縄文時代の遺構と遺物

りが強い。裏面は、左側のみすべすべとしている。3824は上手にちょっとした稜がある、それより下手はすべすべとした凹面となっている。裏側は左下が磨り面のようだ。両端には弱い敲打による潰れ痕がある。全体が灰色に変色して、縱横にひびが入って割れている。硬砂岩の3825の片側は、つるつるとした平らな磨り面を呈する。両側面とも敲打が加えられ、両端には打痕がしるされている。3826は表裏に回転状の凹穴を有する。別な面が磨り面らしいが、火熱を受けてざらざらとしていて判別が難しい。3827も表裏に回転状の凹穴を有する。右側が特に磨り減っている。双方とも上端は大きく敲き減らされている。3828は裏が磨り面。片側縁を面取りしている。3829はいびつな安山岩だが、裏側の左下に磨り面を有する。表裏に浅い凹みがあり、両端には敲打痕がある。

3830～3836・3838は凹石。3830には、尖ったものでついたような小さな凹みがあり、右側縁の一部を敲いている。3831の表裏には3～4個の回転状の凹穴がある。端部には敲打痕があり、右側縁は一皮剥くように敲いて面取りしている。3832はいびつな地山礫で、2～3個の皿状の浅い凹みが両面につく。3833は輝石がやたらに目立つ礫で、表裏に浅い凹みがある。3834にも多量の輝石が入っている。凹穴は両面にあけられ、端部には打痕がつく。3835の表裏には皿状の凹みがつけられていて、端部は敲打の衝撃で弾け飛んでいる。これとそっくりなのが3836である。二つとも熱を受けている。断面が三角の3837の両面にも、連続する浅い小凹痕がある。棒状礫器かもしれない。3838は小さな打痕凹みが表裏についている。本面側の大半と三つの稜を、一皮剥き取るかのように敲いている。

3839は拳大の安山岩礫で、被熱して灰黒色に変色している。3840～3843は圓子状またはそれに類する小石。すべて地山礫で、3841は熱を受けて薄紫色に変色している。3844・3846～3848は河原の礫で、安山岩の3847は端部が弾け飛んでいる。3845は鏡餅状扁平石の破片。こちらのほうが裏側よりもつるつるしているが、使用痕なのかは判別できない。3849は磨りうすの破片。目立ての途中らしく、一部分が島状に残っている。これも何故か断ち割られている。

3850は四基の石鎌。薄手でバランスの良い石鎌だが、尖端と片脚を欠損する。尖端は、裏面より再調整を試みた痕跡がある。あるいはその際に脚部を欠いて廃棄したものか。このように再生されたのが、尖端が絞られた形式の石鎌かもしれない。3851は石鎌の未製品。基部に抉りを入れる際に尖端を欠損している。3852と3853は楔形石器。3854～3857は搔器。3855は拇指状の搔器で、刃線に直交する線状痕が刃部の剥離の中に散見される。3856は赤色頁岩で、一見有肩刃広石器のようでもあるが、意識的に基状の部分をつくり出した形跡はない。

3858～3895は刃部加工された不定形石器、もしくは刃こぼれのある剝片である。3860は外溝する小さな搔器状の刃をつくりだしている。3862は剝片の肉厚な部分にのみ、長さの揃った剥離を施して全体を一枚の刃に調整している。3863は搔器状の刃を持つ剝片石器で、裏面上部に縁をつぶした痕跡と摩耗がみとめられる。刃部に伴う使用痕ではないので、着柄痕か手のあた

りをよくするための調整とみられる。3864は剥片の丸い縁を一方から粗く剥離して刃にしている石器で、線状痕がみられる。3888は刃こぼれのある剥片。整形のためだろうか、側縁に集中した打痕がある。3891～3895は両側縁に刃をもつ剥片石器である。

63号住居址（第233図 3896・3897）

本址は部分的にしか調査ができなかったことから、遺物は磨りうす2点のみである。磨りうす3896は緩くへこんで、つるつるしている。それも左寄りにやや膨らんでいて、搔き出し口も左に広く作っている。いっぽう裏側は平らで、こちらもすべすべとした磨り面をなす。縁際まで磨れていることや、その減り方から、回転する動作がうかがえる。小ぶりで小判形をした3897は、僅かに凹んでいる程度。目立ての凹凸がいくらか残るが、すべすべしている。裏面は中央に2箇所突くようにして凹ませた敲き痕がある。また周縁の所どころを敲いている。

1号建物址（第234図 3898～3901・3903・3904）

3898は片側に細かな調整を加えた不格好な刃器。3899は柱穴から出土した棒状礫器。3900はホルンフェルスの河原石。右側縁のみ数箇所敲打している。3901は本址を確認する際に発見された凹石。片面にのみ乱打状の浅い傷痕があり、側面はすべすべしている。

3903は微細な剥離調整が施された剥片石器で、上部の剥離は一对の抉りになっており、有抉石器と思われるが、使用痕はみられない。3904は刃こぼれのある剥片。

2号建物址（第234図 3902・3905～3907）

3902はあまり形のよくない刃器。本面側に拇指を当て握れば、とてもしっくりする。3905は楔形石器。3906と3907は刃こぼれのある剥片。

3号建物址（第235～237図 3908～4002）

3908は均整のとれた石鋸。刃は斜刃で、裏側は身の半分まで摩耗している。3909は千枚岩で、石材としても珍しい。刃縁の一部は擦れて、側縁は稜を潰している。3911は粗刃礫器の半欠品。3912～3915は棒状礫器。3912の先端は欠けている。3913の一部は、砥石のように磨れている。3914の先端は敲打潰れしている。3910の外溝する刃部は、広い範囲が摩耗している。

磨り石3916は表裏とも磨り面をなし、浅い凹みを有す。右側の面は左上と右下が対角に磨り減っている。両側縁は直線的に面取りしている。また両端も敲き痕でざらざらしている。全体に煤が付着し、灰色に変色している。3917も表裏が磨り面で、周縁は面取りされている。やはり端部がざらざらしていて、火に遭っているようだ。

3918～3920は凹石。3918の表裏には一つの浅い凹みがあり、両端はいくらか敲いているようだ。3919の表裏には連続する凹穴がついていて、左右側面の所どころを敲いている。3920の表裏中央には、歯牙で噛んだような傷痕がある。小粒な安山岩礫の3921と3922は焼けて変色している。

3923はスレート質粘板岩の石製円板。3924は楔形刃器としてきたもので、下端には敲いて潰

縄文時代の遺構と遺物

れたような鋭い刃がつく。尖った上端も、敲打して潰している。3925は河原砾。3926は鏡餅状扁平石の破片で、本面の左上には歯牙状の傷痕がある。

3927～3939は建物址の柱穴掘方の中より出土した。3927・3928は石鎌。3929・3930は石錐で、3929は尖端の一部が摩耗しており、3930には裏面の基部に横方向の線状痕がみられる。3931～3933は楔形石器。3934～3938は刃こぼれのある剝片。うち3934は刃こぼれした部分から刃線に直交方向の強い線状痕がみられる。3939は複数の集中した打痕を有する石核。

3940～3948は石鎌。3941は五角形鎌。3943は基部が欠損した凸基鎌であろうか。3944～3948は粗製鎌もしくは粗大鎌であろう。3949と3950は搔器。3949は拇指指搔器で、刃部表面に強い線状痕を残す。3951～3954は石鎌。3955～3963は楔形石器である。3964・3965は刃部に加工の施された剝片石器で、ともに線状痕がみられる。3966と、3970～3972・3978は搔器状の刃をもつ剝片石器。ほか、4000までは刃こぼれのある剝片である。3987には線状痕がみられる。4001と4002は加工剝片である。4002は石錐の未製品ともいべき雰囲気をもっている。

4号建物址（第238、239図 4003～4029）

4003の本面側は磨り面で、すべすべとしている。上端を除く三方の側縁は敲いて調整され、右側は面取りされている。反対は天然の砾面。4004は粗形の凹石。4面に3～4個の回転状の凹穴がつく。被熱のせいか一部は薄く剥がれて、ざらざらとした膚となっている。

4005～4007は棒状櫛器またはその類。4006と4007の両端には、軽く突いたような打痕がみられる。4008は何の変哲もない河原石。4011は楔形の石器として分類してきたもの。团子石の4012は火熱を受けて赤褐色に変色している。4009は小形な鏡餅状扁平石の破片。被熱して灰白色に変色し、ロームに似た土がこびりついている。フランスパンのような4010の両端には、軽く敲打した跡がみられる。全体に少し膚が荒れてざらざらとしていて、ロームがうっすらと付着している。類品が38号址にあった。

4013～4015は石鎌。4016と4017は石錐で、4018は楔形石器。4019～4021は搔器で、4021の刃部には横方向の線状痕がみられる。4022～4029は刃こぼれのある剝片。

5号建物址（第239、240図 4030～4041）

4032は割り取った石片の縁にいくらか手を入れたもの。4033は鉈の刃のような形の刃器。基部から裏面にかけては砾表で、刃縁は鋭い。4034の刃部は荒っぽく剥ぎ取った粗雑なつくりだが、刃先は摩耗している。

4035・4036は磨り石。4035は片側が磨り面をなし、右下が磨り減っている。表裏の中ほどに乱打状の浅い打痕がある。周縁は敲打され、両側は直線的に面取りしている。4036は表裏とも磨り面をなす。左の面は右上と左下が、右の面は右下と左上が対角して減っていて、かなり使い込まれている。両面とも斜めに連続する凹痕があり、右の面は回転状の凹穴が連なって溝になっている。また、側縁は直に削ぐように面取りしている。また両端は敲打によるのだろう、

大きく欠き取られ変形している。

4037～4040は凹石。4037の表裏には尖ったもので突いたような、浅い点状の打痕がある。卵形をした4038の表裏には凹痕があり、ロームがこびりついている。4039は地山輝で、茶褐色の皮膜が覆っている。表裏に一つずつの皿状の凹みがあり、下端は大きく欠かれている。4040は大きめな安山岩輝で、一つだけはっきりとした凹穴があり、その周辺には不確定な凹凸がついでいる。周縁は敲打され、左右と下端は大きく面取りしている。4041は團子形の小石。焼かれて角が荒れている。

4030は小形の楔形石器。4031は石核である。

1号小豎穴（第241図 4043・4044）

凹石4043は真ん中に大きな凹みを有す。安山岩の4044はおはぎのようで、焼かれてひびがはいつている。

2号小豎穴（第241図 4045・4047）

凹石4045の表裏には打痕状の凹みが、両端には敲き痕がある。棒状器4047には使用痕などとくに見当たらない。

3号小豎穴（第241図 4050）

4050は小形鏡餅状扁平石の破片と思われる。

5号小豎穴（第241、242図 4048・4071・4072）

棒状器4048は欠かれている。4071は楔形石器。4072は刃こぼれのある刺片。

9号小豎穴（第242図 4066～4070）

4066は円基の石鎚。4067は楔形石器。4068と4069は刃部加工された刺片石器。4070は珪質頁岩の加工刺片である。

10号小豎穴（第241図 4042・4051）

4042は粘板岩ホルンフェルス製の石庖丁。刃線は真っ直ぐで、片側に加工している。左面側はよく摩耗し、右面側は刃部から3分の2までの範囲に刃線に平行する、0.5～1cmの長さの条痕がついている。そして植物質の汁のような何かが付着している。硬砂岩の4051の左下端には、敲打痕が見られ、熱を受けてひび割れている。

11号小豎穴（第241、242図 4054・4073・4074）

4054は粗製の凹石で、平らな面に回転状の凹穴がある。4073は拇指状搔器。4074は刃こぼれのある刺片。

12号小豎穴（第241図 4046・4049・4052・4053）

小ぶりの4046は表裏に小さな凹痕がつく。棒状器の4049は折れている。4052・4053の下端には純く潰れた刃がつけてある。楔形刃器だろう。

13号小豎穴（第241、242図 4056～4060・4075）

扁平円錐の4056はこの辺ではあまり見かけない、オットレ石子千枚岩という石材。使用痕などは特に見当たらない。4057～4059は安山岩の小礫。4058は火を受けて薄黒く変色している。4060は地山礫。表裏とも敲いた部分だけ、皮膜がとれて初な面となっている。

4075は刃こぼれのある剝片だが、線状痕がみられる。

14号小豎穴（第241図 4065）

4065は鏡餅状扁平石。表裏ともすべすべするが、天然かどうか判別が難しい。周縁は火熱を受けて灰色に変色している。

15号小豎穴（第241図 4055）

4055は硬砂岩の河原石。

中・近世38号小豎穴（第243図 4076～4085）

2号址の中ほどには、中・近世の小豎穴38号が設けられており、多量の礫が詰まっていた。その中に該期の石器がいくつか混入していた。4076は粗刃礫器。刃縁と刃面の後には使用による摩滅がみられる。磨り石4077は表裏が磨り面で、本面側の右下は片減りしている。両端及び右側縁は面取りしている。4078の中央は平らな磨り面で、裏側も石鹼形の磨り面を呈す。側面は敲いて整形している。

4079と4080は棒状礫器に準ずるもの。4079の平坦部には、歯牙でかじったような痕跡があり、上端には肩荒れ程度の打痕がしるされている。4080の本面には大きな深い敲き痕が、裏面には軽く突いたような傷痕があり、左下端には敲打痕がつく。4081は地山礫で、全面を皮膜が覆っているが、表裏には1個の大きな皿状の凹穴があいていて、そこだけが初な面となっている。4082は拳大の安山岩礫。4083は火熱を受けてひびが入り、端部はとくに荒れている。敲打器と目される。4084は小形な板状石。本面は裏面に比べていくらかすべすべしているが、手を加えたものか天然かの判別は難しい。三つの角には敲打痕がしるされている。前に見た凹石の226・1522・2537もそうだった。鏡餅状扁平石4085は座りが悪く、下手を嵩上げして小石などで支えないと安定しない。平らな面の中心から下端にかけての狭い範囲は、すべすべと磨れていて、両側縁と下端は敲打調整している。

遺構外出土の石器（第244～252図 4086～4209）

4086～4118は石鉤であるが、一部に断定できないものも含む。4086・4087は小形で、4086は側縁の稜を潰している。4087の刃先側は表裏とも土擦れにより摩耗している。4088も小形鉤の類かとみられる。刃縁は摩滅している。4089は身幅のわりに丈が短く、裏側は全面礫表。4090も同様にして身が厚く、側縁は稜を潰している。4091は刃先を欠く。4092の両側縁は大きく欠けているが、斜刃の鎌かと目される。本面側は礫表のままで、身の下半分は土擦れしてすべすべしている。4093は小形で身は厚い。裏側は全面礫皮で本面側に加工した、鋭い刃縁を有する。

4094も同様で、反対面に礫表を止める。4095は薄身。4096の刃先は整のように鋭い。4097は刃先と思われる。4098の刃先は土擦れしている。4099の左側縁は、刃部との境あたりから潰している。肉厚だが刃先はわりと鋭い。4100は身が薄く軽い。4101は割り取った石片の端が刃に相当するが、十分に加工がなされていない。4102は偏刃で、本面側の刃先と裏側は全体が摩耗している。4103はホルンフェルス製で、大形な石鉤の刃部とみられる。その大きさからして晩期のものと目される。

4104は着柄部の両側縁を絞るように潰しを加えている。刃は偏刃。4105も偏刃で、刃縁は土擦れし、身の半分までがつるっとしている。裏側も表ほどではないが、擦れていて手触りがよい。4106は折れた刃部にいくらか手を入れて刃を再生したものようだ。4107は薄身で出来の良い偏刃の鉤。刃は右辺がとくに摩耗している。4108は右側縁を潰している。4111は斜刃で、刃先は表裏とも土擦れしている。分胴型の4118は、後期以降のものだろう。抉りのある中胴部以外は、表裏とも刃先まで摩滅している。4114の裏側は全面礫表。全体に分厚く、大鎌把な作りである。4115は打ち削ったままで、形を整えてはいない。石片の薄く鋭い端を刃部に当てていて、礫皮側は土擦れしている。4116は草履形の扁平礫で、下半が割り取られている。縁辺の所どころを敲いて潰している。分厚い石片を素材とする4117は、基部と右側縁を加工している。2913と同類であろう。

4119～4128は横刃型石器あるいは粗製の刃器の類。4119は扁平円礫打削技法によって得られた典型的な石片で、本面上端にその衝撃点を有する。割り取った縁辺の中央部を片側へ調整して、内湾気味の刃をついている。4120は裏側が礫皮で、割り取った鋭い縁を刃としている。やはり本面の上端に衝撃痕がある。4121は裏面が礫表。これも上端に衝撃点が看取される。刃縁はすべて摩耗している。小ぶりな石庵丁の4122・4123も外済する刃縁が摩耗している。4124は礫皮を残す分厚い刃器。4125の刃縁は鋭い。4126は裏側に鋭い片刃の刃を作りだしている。頁岩製の4127は、縁辺に簡単な調整をしただけの刃器で、刃はすこし内湾して反っている。4128は鉋の刃のような片刃で、本面側にもきれいに調整している。

4129～4136は棒状礫器。4129～4132と4136の端部には、かるく突いたような敲き痕がついている。また4133・4134の端部は階段状に欠けている。4130・4132・4136には歯牙で噛んだような打痕が表裏にしるされている。

4137～4142は磨り石の類。4137は均整のとれた石錐形の磨り面を呈し、右半面には目立てのようないい痕がついている。裏面は縱に長く乱打した浅い凹痕があり、左半分がすべすべしている。側縁は全周を面取りしたあと、きれいにしている。そして全体が煤けて灰色に変色している。4138は石錐形をした磨り面を呈し、左下が他よりも平らに減じていて、光沢を有する。裏側は一面ざらざらとするが、輝石が磨れているのでそちらも磨り面であったようだ。周縁を敲打して、左右は削ぐように面取りしている。そして本面側にはひびがはいっている。4139は

縄文時代の遺構と遺物

本面側が、4140は裏側が磨り面。双方とも両側縁を直線的に削ぎ取ってから、きれいに磨っている。4141は片側のみ磨り面で、一端が少しおかれている。4142の表裏中央には、回転状の凹穴が2個ずつつく。本面側のみ滑らかな磨り面をなし、左上と右下が対角して磨り減っている。

4143～4146は凹石。4143の表裏には、斜めに連続する浅い凹痕がつく。周縁は敲打整形している。4144の表裏には乱打状の浅い打痕がつき、下端には平らな敲打潰れがある。鎧頭形の4145の表裏には、ごく浅い敲き痕がしるされている。火中に投じられたのだろう、全体が黒変して細いひびが入っている。鎧頭形をした4146の片面には浅い凹痕がつき、片側のみ面取りしている。膚が荒れていることから、火に遭っているようだ。団子石に分類すべきかも知れない。団子石の4147は全体を敲いて整形している。4148は先端角錐状石椎で、両端には対面してペン先状に尖った平らな面がある。4149～4152は端部に打ち欠き痕がつく、小形な扁平石。4149の表裏には連続する凹痕がしるされている。4153・4154は扁平な小円錐の周縁を打ち欠いた石製円板。

4155は小形の石斧で、1518-1番田の中央に集められた耕土中から採集された。短冊形にちかく、わずかに角と面がみとめられる。刃線は直線的で、身幅に対して刃の幅が狭い。またこの刃部は一方の面から刃こぼれしており、横斧であったことがわかる。基端も研磨されているが、さらに部分的に磨耗もしている。全体に研磨痕がみとめられるが、裏面はつるつるに磨かれており、鏡面のような光沢を有する。あるいは基礎の磨耗とともに、柄の木擦れの結果かもしれない。淡い乳緑色の、良質な蛇紋岩（リザータイト）製である。小形の横斧としたが、堅のような着柄も考えられよう。

4156は一般に乳棒状磨製石斧と呼ばれる円柱石斧で、1486番田の中央に集められた耕土中から採集された。刃部と基部のいずれも欠損している。身はやや扁平で、敲打整形された痕跡も明瞭に残されている。輝緑凝灰岩製。

丸石4157の周縁は、2～2.5cmの幅で敲いている。また左下の一部を5cmほど、敲いて平らに潰している。これとよく似たものは1502-1番田の中・近世の小堅穴から見つかった4158で、周縁を3cmの幅で敲いている。

4159は1480-3田の地形の下から、逆位で出土した。へこみは広くゆったりとして、搔き出しき口は意外に広い。それも素材の石の形状に従っている。4160はいわゆる周堤をもたず、外縁から敲いてごく浅い作業面をつくっている。部分的に目立ての敲き痕が残るが、磨れている。火熱を受けて灰褐色に変色し、見事に断ち割られている。4165と4166は、両方とも裏面がつるつるとした磨り面をなして、4165には凹穴がいくつかみられる。4167は平安時代の5号住居址の二つある竈のうち、南側の竈に利用されていたもの。方板状の天然礫で、中央はもともと僅かに窪んでいる。中央の磨り面と口元は目立てをしているが、すべすべとして光沢を放つ。左下の角は欠けた後に割れ口を磨っている。半分に割れた4162の搔き出しき口には、調整時の敲打

痕が残っていて、周縁は2.5cmの幅で敲いて整えている。作業面は左側に反れるように減っていて、右側は逆に搔き出し口に収束するように緩く減っている。4167の反対である。被熱のせいか、全体が薄茶または灰色に変色している。

4161・4163・4164のへこみは深く、中期のものと見紛うほどである。4161の側縁は軽く敲いている。みな熱を受けて変色している。4168は平安時代の3号住居址から出土したもの。周縁をいくらか残し、全体を敲打している。凸凹しているがすべすべしており、既にうすとして使用されたらしい。裏側もいくらか敲いている。そして本面の殆どと裏面の一部が焼けた焦茶色になっている。周縁は4分の3周ほどを敲いている。4169には爪大の敲打痕と歯牙状の細かな打痕が全体にしるされている。側縁は所どころ敲いて整形している。また全体にロームがこびりついていて、洗っても落ちない。4170にはあばた状の敲き痕がつき、ざらざらとしている。下端は裏側からはつっている。また左右の側面は所どころ敲打して、面取りしている。これら3点は裏面が天然の疊面であること、側縁を敲打整形していることなどが共通している。

4171～4179は鏡餅状扁平石の類。4171には、天然とも人工的とも判断できない凹痕がばらばらとあり、焦茶色の染みが全面についている。平安時代の5号住居址から出土した4173は、礪の袖石に用いられていた。特に目立った使用痕はないが、後の転用で赤変してひび割れている。4172の中央は僅かに小高くなっている、全体はすべすべしている。そして上手には1箇所、敲打痕がしるされている。いっぽう裏面はつるつるとして光沢があり、砧のような使い方がなされたようだ。おせんべいのように平たい4174は、すべすべして滑らかである。4172同様に砧のようである。また左側縁は敲いて整形している。

4175は半分を欠失する。中央はつるつるとした磨り面をなし、割れ口の7割方を磨っている。砥石として使用されたのかもしれない。4176は平安時代の4号住居址から出土したもので、数箇所に打痕状の凹穴がしるされている。裏側は幾分不平らだが、表に比べてややすべすべして、砧のような使われ方がされたものだろうか。

4177は座りも悪く、素材の形がいまひとつである。しかし中ほどには、疊ながら目立てのような敲き痕がしるされていて、平らに調整しているように見える。何に使われたのか見当がつかない。平たいおせんべいのような4178の中央には大きな凹みがあり、ざらざらとしている。裏側は全体が磨り面をなして、僅かに中央が凹んでいる。4179の外周には浅い打痕凹みがある。裏側にも目立たないが、敲き痕がついている。

4180は四基の石鎚で、基部の割にややす詰まりの感があるが、剥離は細かく、バランスのとれた優品。4181は五角形鎚の優品。残念ながら片脚を欠く。4182も五角形の石鎚。4183はあまり出来の良くない石鎚だが、中央部に線状痕がみられる。模様さみに装着した痕跡か。4184・4185は小形の四基鎚。4186は基部の加工がない円基の石鎚。4187～4191は有肩刃広石器。4187はホルンフェルスで風化が著しく、左右を欠損している。4188は頁岩、4189と4191は黒曜石製。

縄文時代の遺構と遺物

4190は油質の青チャート。4192の有肩諸刃石器は頁岩で、あたかも紐で結縛されたかのように見紛う白色の石目がある。

4193～4196は搔器。4193は横刃型、4194は小形の拇指状搔器。4195は上端のみわずかに刃が跡切れるが、円形搔器としていいだろう。4196も上端には刃がなく、4195と同じく円形搔器を意識していると思われる。4197は平安時代の4号住居址の竈の袖石の下から発見された搔器。珪質頁岩の大形の搔器で、表裏で刃の付け方が異なる。いわゆるエンド・スクレイバーとサイド・スクレイバーを併せ持った形。4198はホルンフェルスの搔器。4199・4200は石錐。4199は一端が欠損しているが、両端とも良く使い込まれ、回転による摩耗が著しい。

4201は異形石器。片面からの調整で使用痕はみられない。4202は有抉石器であろう。稜線はつぶれ、細かな線状痕と摩耗がみられる。4203も有抉石器だが、有肩刃広石器を転用したものかもしれない。有肩刃広石器として使用中に破損し、図の断面線付近を再調整し、ここを抉りの代わりとして再利用したものであろうか。表面の点状痕や線状痕のあり方に差が認められる。

4204は頁岩製の有肩刃広石器の優品である。上葛木区の窪田実夫さんが採集したもので、採集地点は今回の発掘区の鹿ノ沢川を挟んだ南東の畑である。目立った使用痕はみられない。形態から前期中葉～後葉のものではないかと推測される。

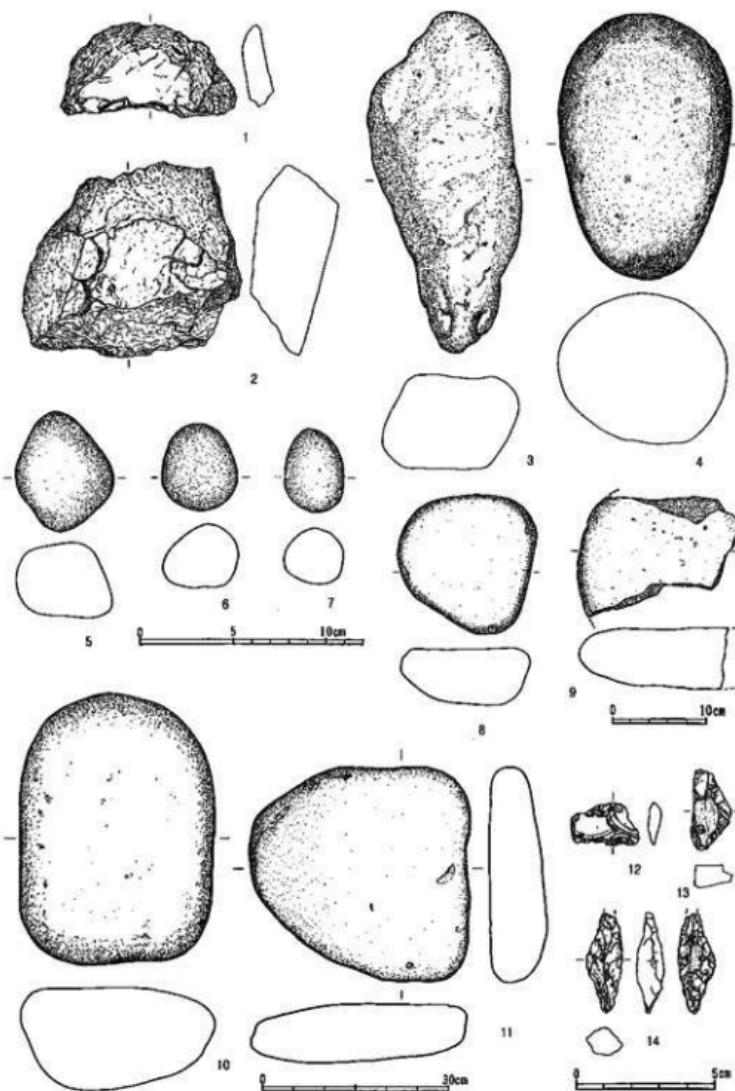
4207は粗雑なつくりの有肩刃広石器である。青チャートだが、石の質もあまり良くない。刃のつくりも雑である。

4208と4209は旧石器時代の石刃で、特に4208は風化もすすみ、石の肩には古色がある。いずれも黒曜石製。

なお遺構外出土の小形石器の中には、図化していないものが159点あるが、これらは主に不定形の剥片石器および使用痕のある剥片である。

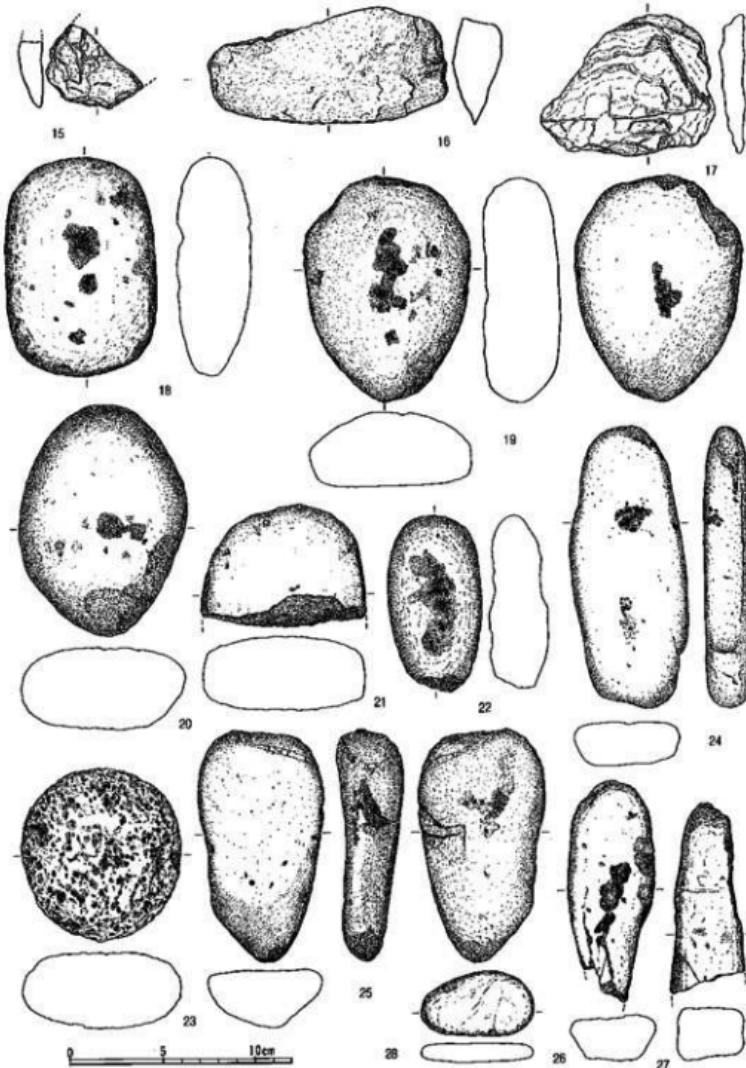
石製品（第252図 4210・4211）

4210と4211は珠状耳飾である。4210は31号住居址出土で、濃い鉛色の滑石。4211は40号住居址出土で、オリーブ色がかった薄い鉛色の滑石である。坂平遺跡から出土した装身具とみられる石製品は、この2点のみであった。



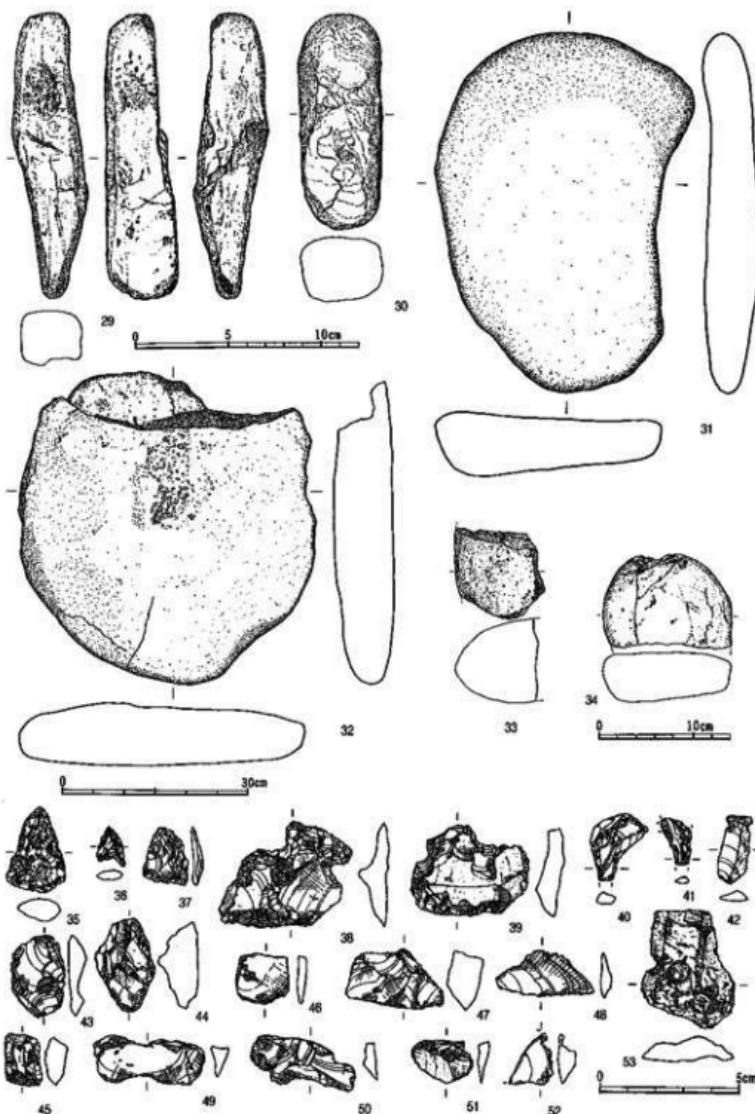
第67図 1号住居址出土の石器 (1/3 8・9:1/6 11:1/9 12~14:1/2)

1: 熟板岩 2: 鋸縫岩 3: 石英斑岩 4・5・7・9: 雄石安山岩
6・8・10・11: 雄石角閃石安山岩 12~14: 黒曜石



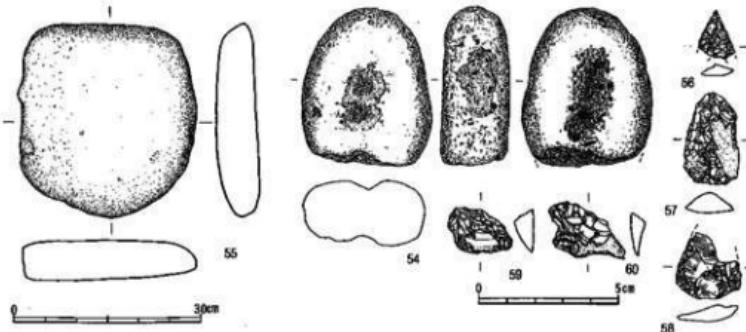
第68図 2号住居址出土の石器 (1/3)

15: スレート 16-19-20: 庫石安山岩 17: 黏板岩ホルンフェルス 18-21-23: 鮎石角閃石安山岩
24-25: 輝綠岩 26: 硬砂岩 27: 花綠岩 28: 千枚岩



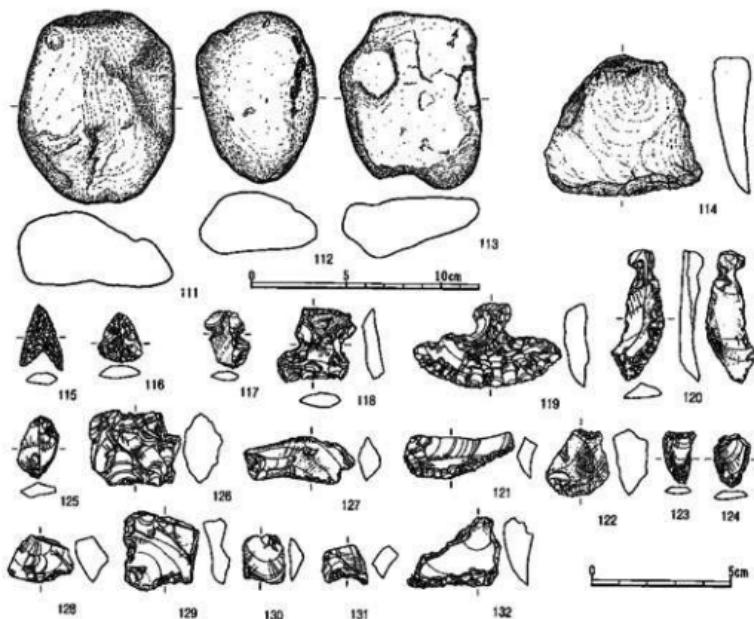
第69図 2号住居址出土の石器 (29-30:1/3 31-32:1/9 33-34:1/6 35-53:1/2)

29:舞岩 30:砂岩質砂岩 31:海綿岩 32:輝石角閃石安山岩
33:輝石安山岩 34:板砂岩 35-53:黒曜石



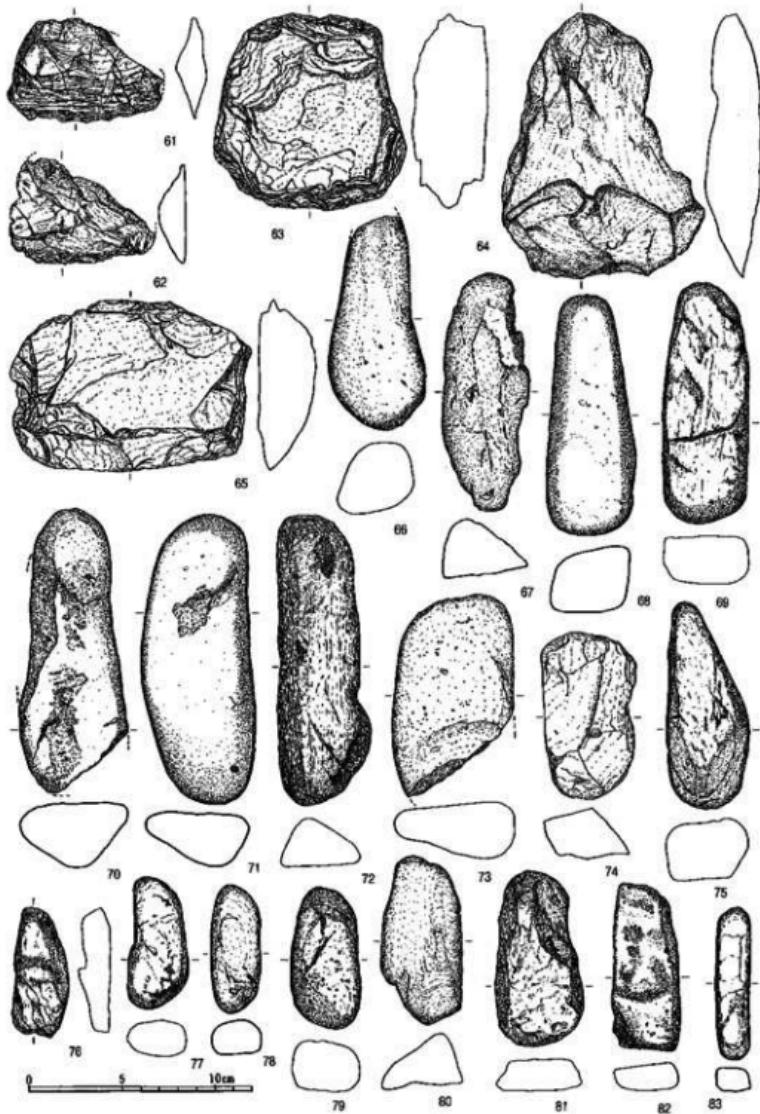
第70図 3号住居址出土の石器 (54:1/3 55:1/9 56~60:1/2)

54: 塚石安山岩 55: 舞鶴岩 56~60: 黒曜石



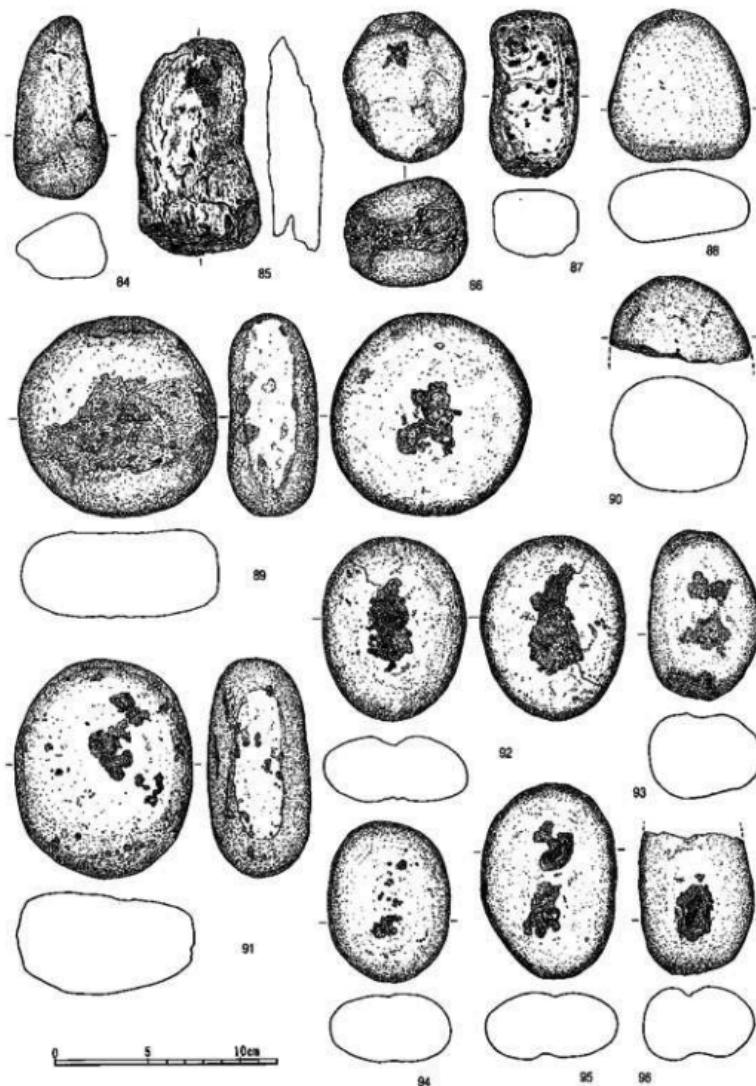
第71図 4号住居址出土の石器 (111~114:1/3 115~132:1/2)

111~113: 硬砂岩 114: 貝岩 115~132: 黒曜石



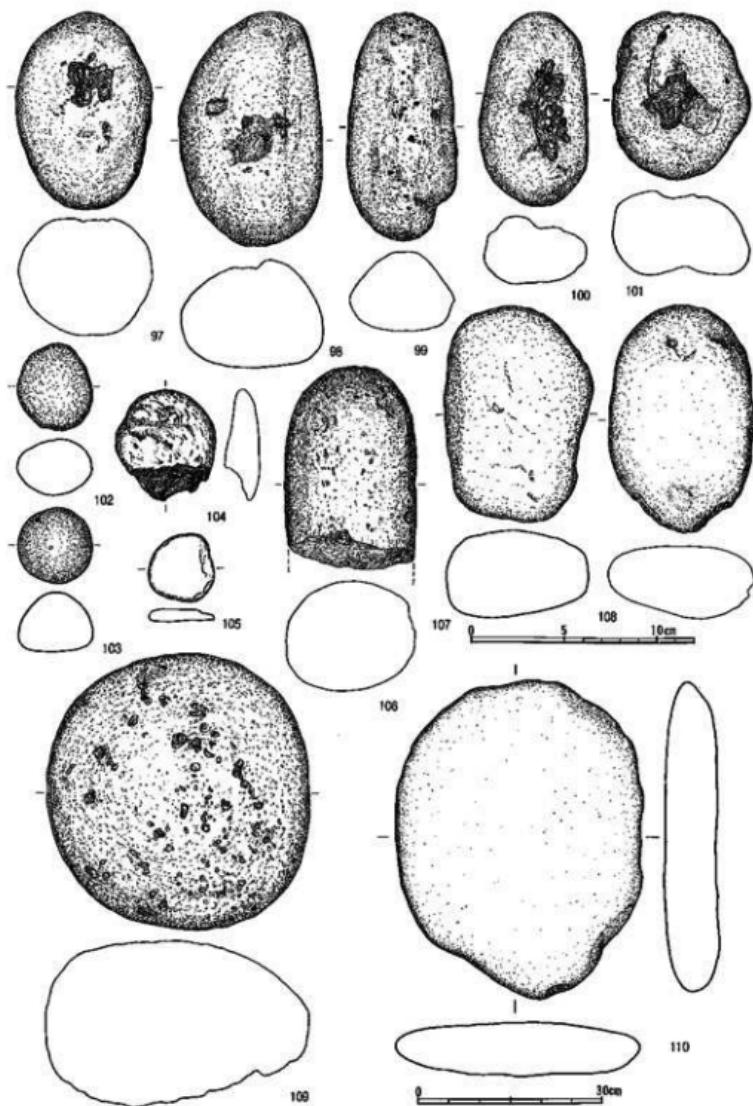
第72図 4号住居址出土の石器 (1/3)

61-65・76-77-83: 粘板岩	63-67・70-72-74-78-79: 滅渺岩	64: 粘板岩ホルンフェルス
66: 单斜輝石斜方輝石角閃石安山岩	69-75-80-81: 砂岩	82: 基性安山岩
68-71-73: 輝緑岩	62: スレート質粘板岩	



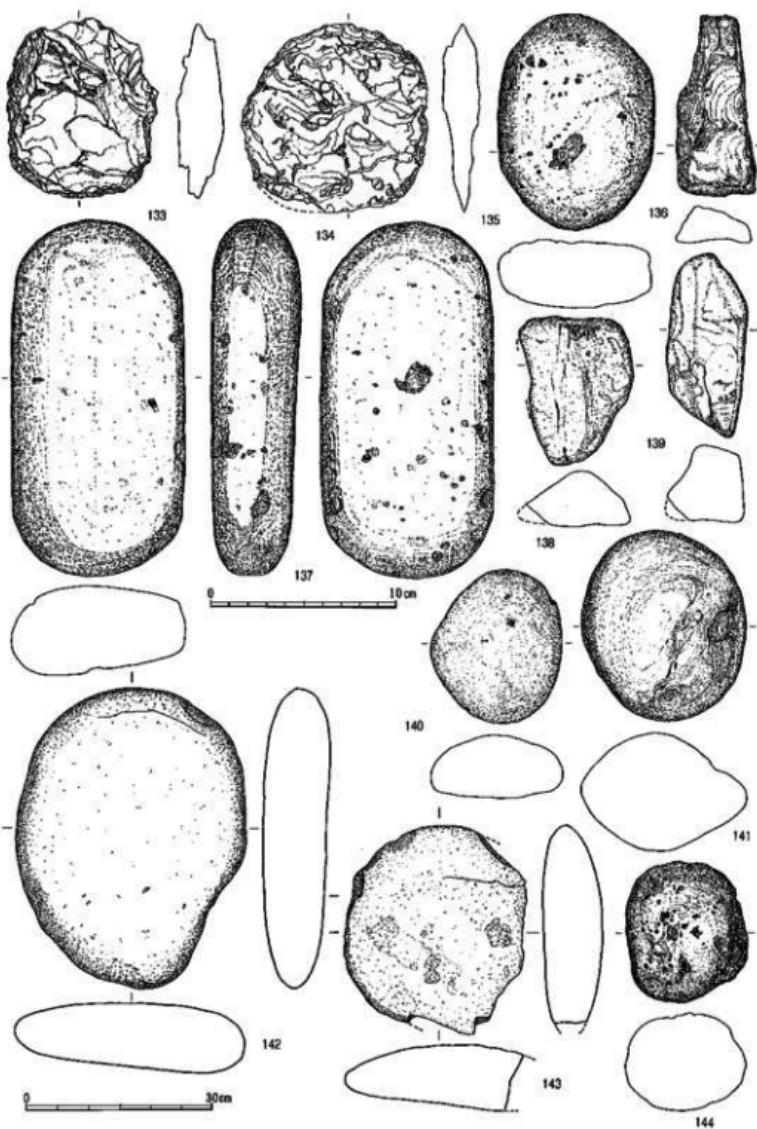
第73図 4号住居址出土の石器 (1/3)

84: 硬砂岩 85: 緑泥片岩 86-89-91-93-96: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩
87: 輝石角閃石安山岩 88-92: 輝石安山岩



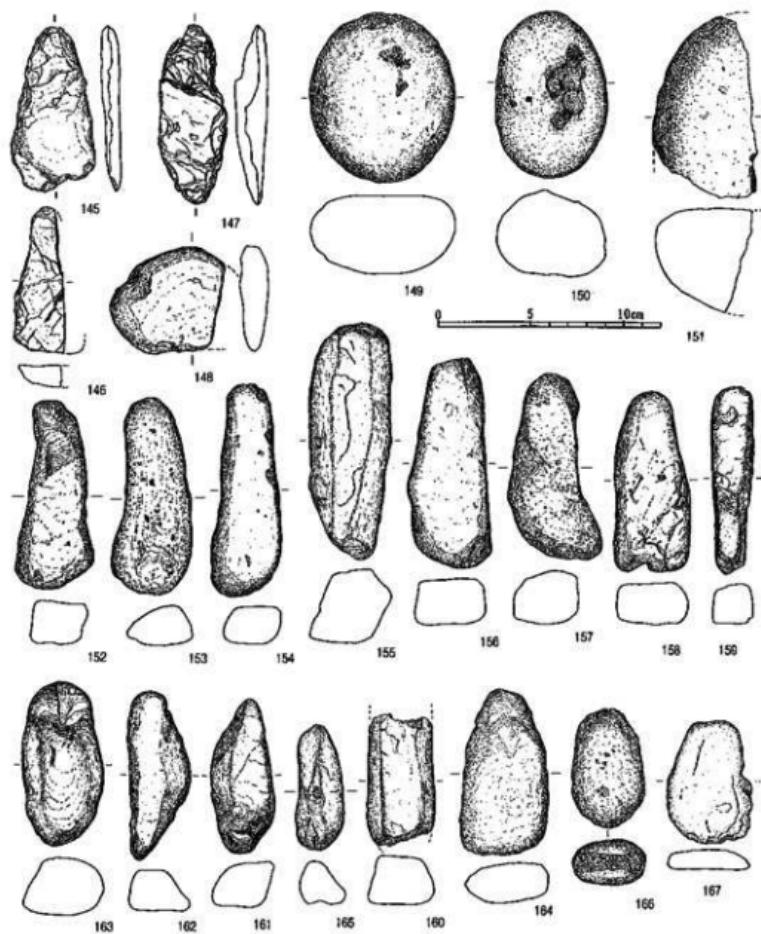
第74図 4号住居址出土の石器 (1/3 110:1/9)

97-101～103-107: 岩安山岩 104: 組板岩 105: スレート 100-110: 岩角閃石安山岩
98-99-106-108-109: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩



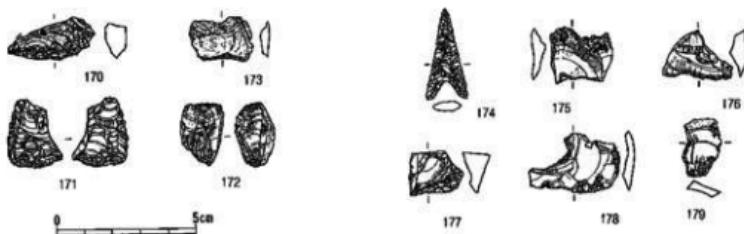
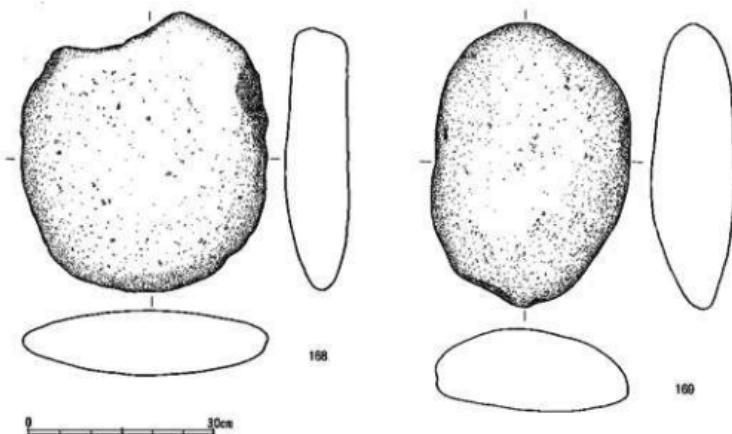
第75図 5号住居址出土の石器 (1/3 142-143; 1/9)

133-138-139: 硬砂岩 135-137-140-141-143: 鮎石安山岩 134: 裸板岩 136: 泥岩
142: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 144: 鮎石角閃石安山岩



第76図 6号住居址出土の石器 (1/3)

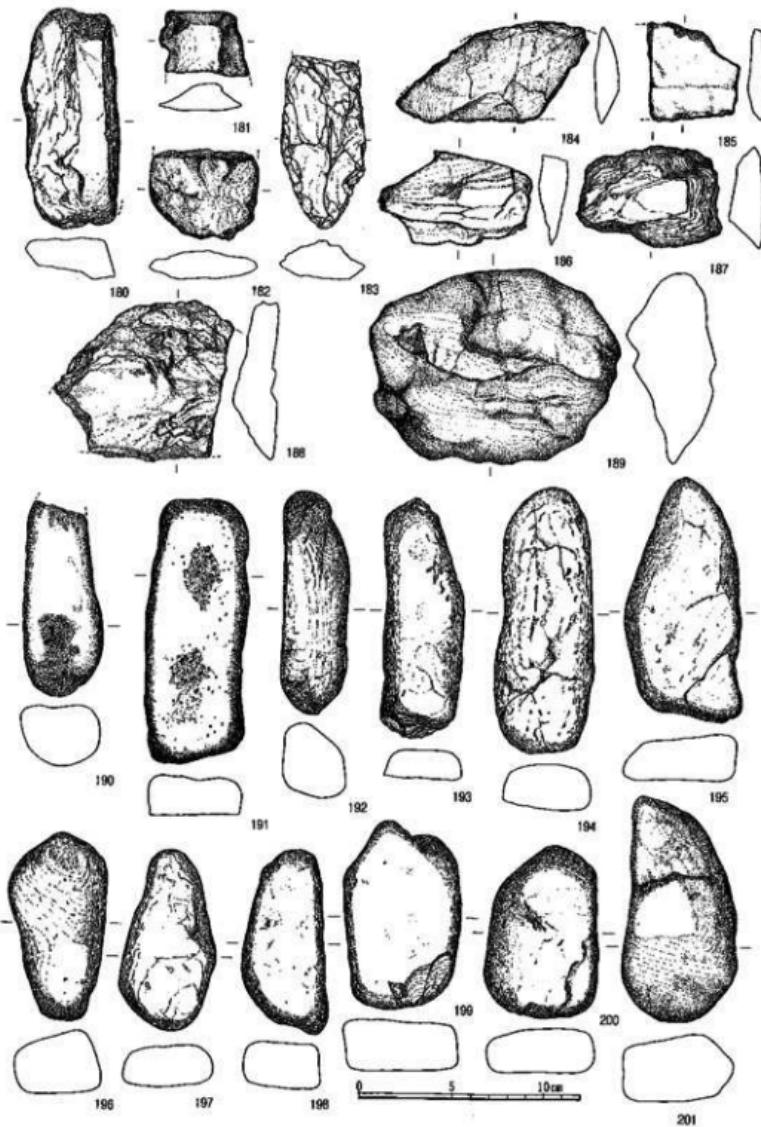
145・146: 粘板岩 147・159: スレート 148: 砂岩 151: 毬縞岩 149・150・153・157・164・166: 輝石角閃石安山岩
152・154~156・158・160~163・165・167: 硬砂岩



第77図 5. 6号住居址出土の石器 (168・169:1/9 170~179:1/2)

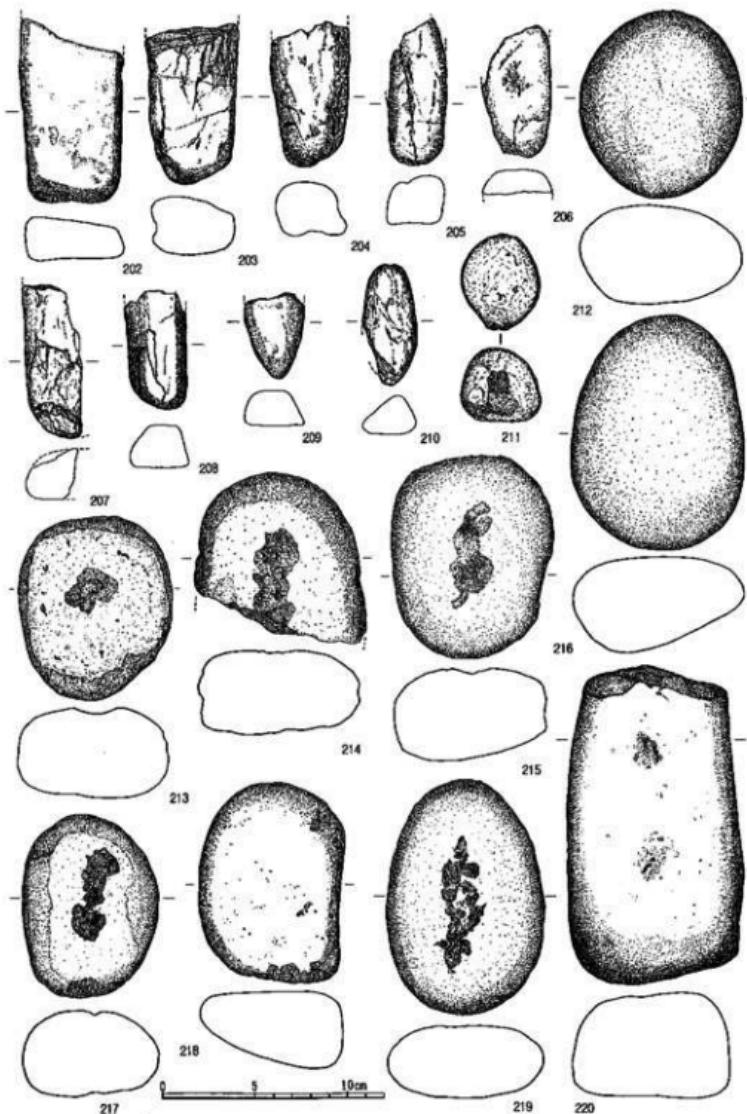
170~173:5号住居址 168・169・174~179:6号住居址

168:輝緑岩 169:輝石角閃石安山岩 170~179:黒曜石



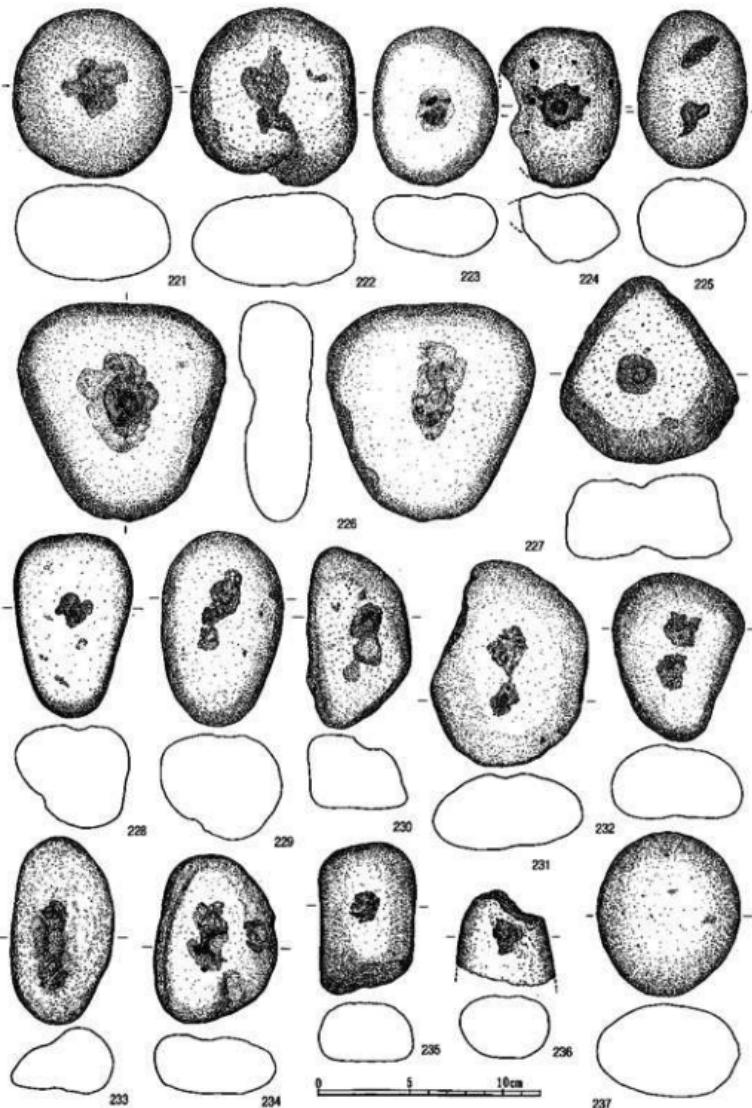
第78図 7号住居址出土の石器 (1/3)

180: 粘板岩質ホルンフェルス 181-183: 灰岩 186-187-197: 粘板岩 184-192-194-198-201: 硬砂岩
 189-195: 砂岩 185: 鮎石角閃石安山岩 188: スレート質ホルンフェルス 190-191-196: 鮎緑岩
 193: 硬砂岩質砂岩 182: 粘板岩質硬砂岩



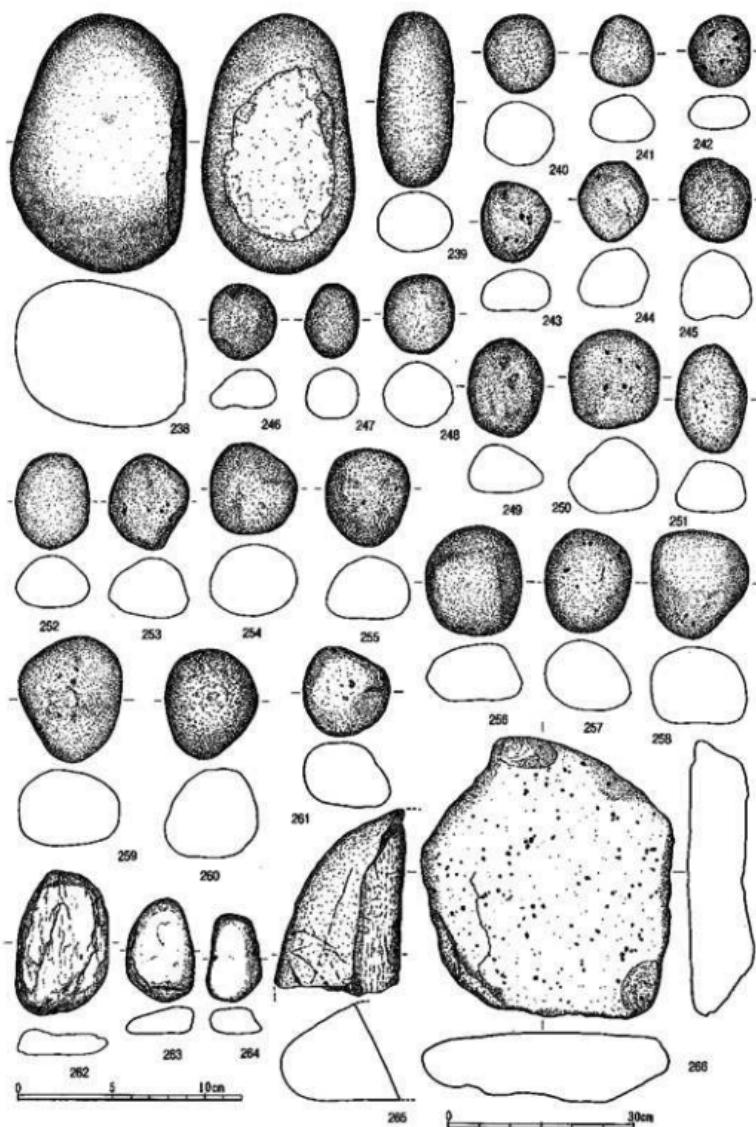
第79図 7号住居址出土の石器 (1/3)

202-206-218-220: 磷綠岩 204-205-208-209: 硬砂岩 203: 砂岩 211-217-219: 雜石安山岩
210: 黏板岩 207: 鶴荷鉢綠色岩



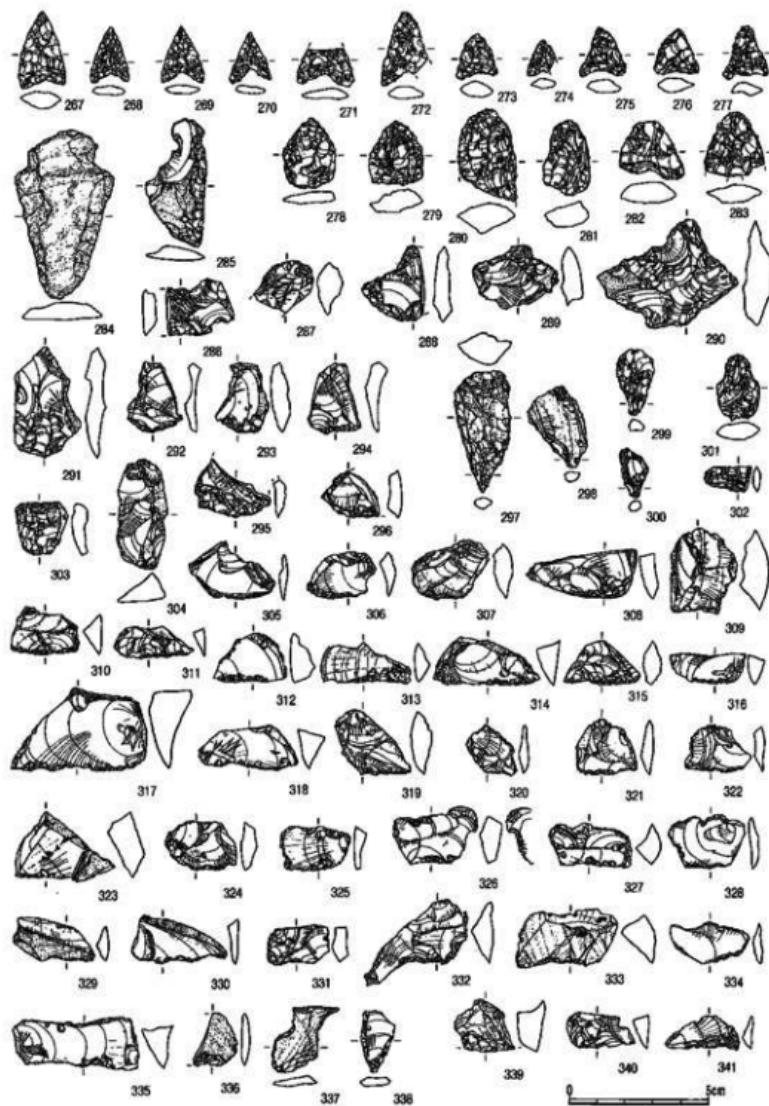
第80図 7号住居址出土の石器 (1/3)

221~223・225・228~233・235~237: 雄石安山岩 224・226~227・234: 雄石角閃石安山岩



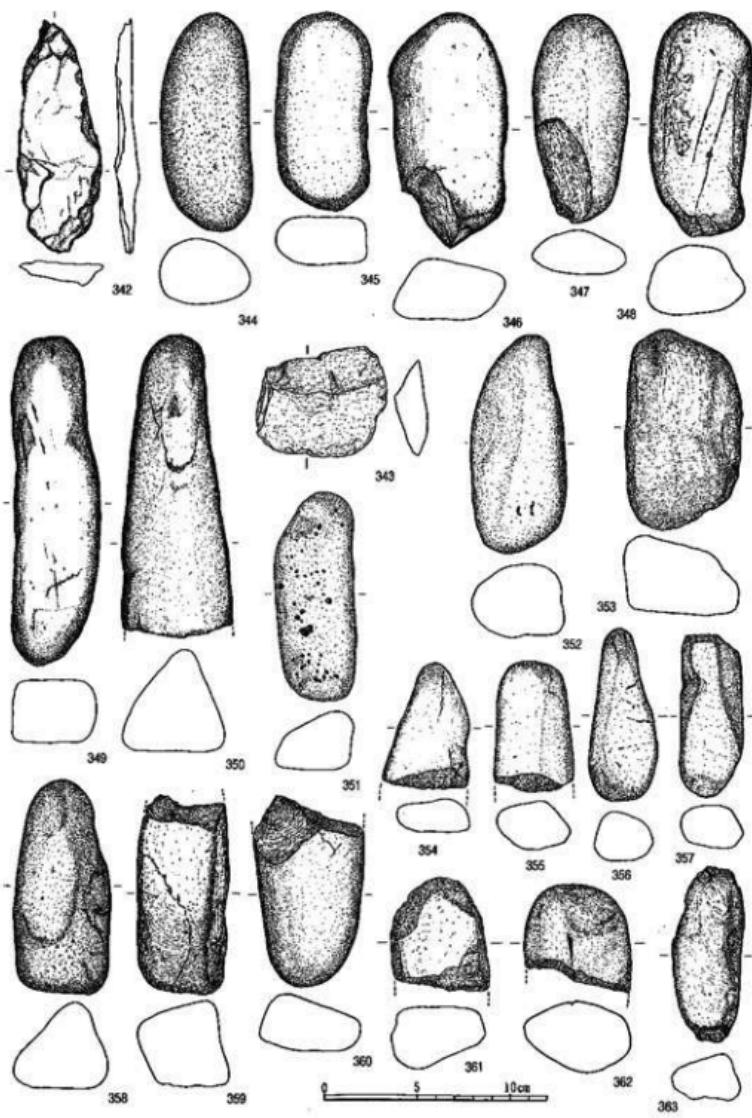
第81図 7号住居址出土の石器 (1/3 266:1/9)

238-239-241~248-250-254-256~261: 磐石安山岩 240-249-255: 磐石角閃石安山岩
 262: 緑色岩 263: スレート 264: 板船岩 265: 橫砂岩 266: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩



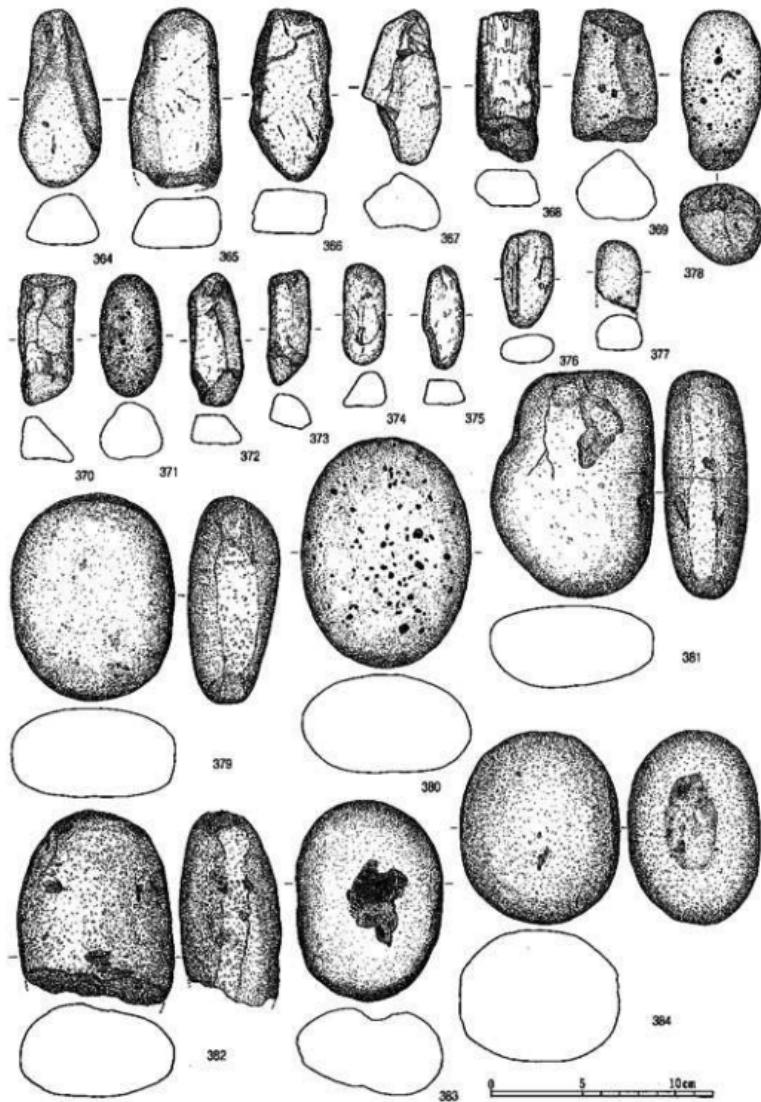
第82図 7号住居址出土の石器 (1/2)

267~283・285~296・298~338・340・341:黒曜石 284:粘板岩質ホルンフェルス 297~339:チャート



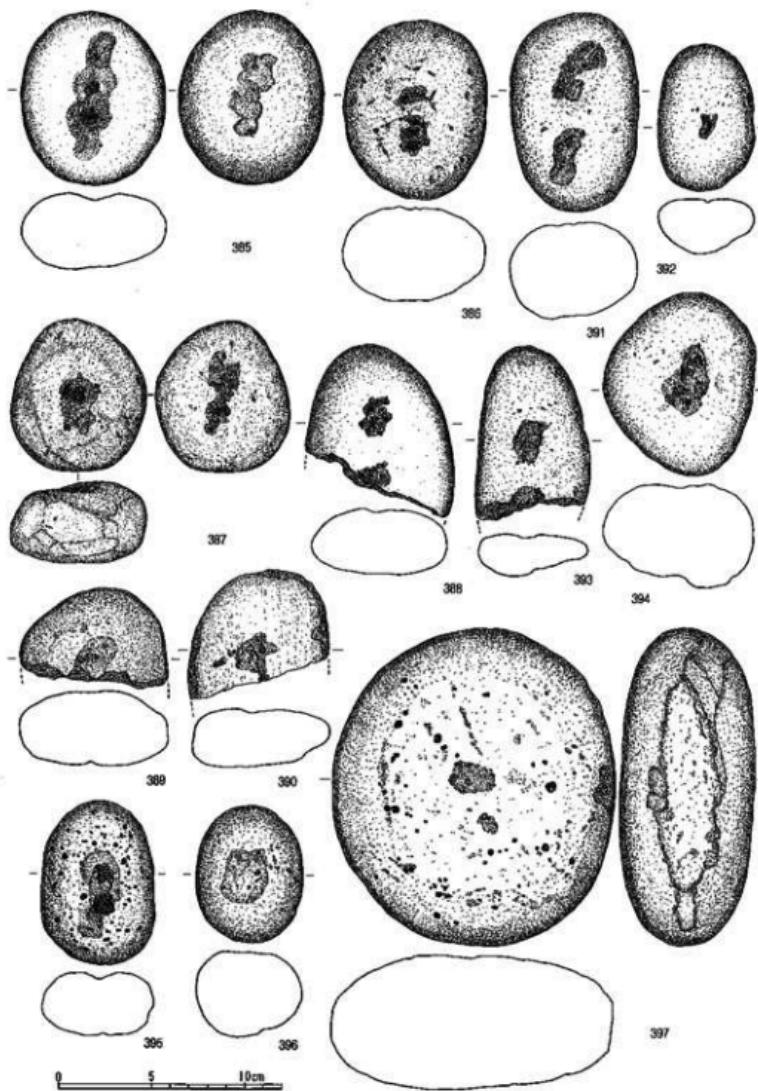
第83図 8号住居址出土の石器 (1/3)

- | | | |
|--------------|----------------------------------|------------------------|
| 342: スレート | 343-346-349-355-356-359-362: 硬砂岩 | 344-345-352-358: 岩石安山岩 |
| 350-360: 槍縫岩 | 361: 緑色岩 | 351: 菱石角閃石安山岩 |
| 354-357: 砂岩 | 363: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 | 353: 組板岩質砂岩 |



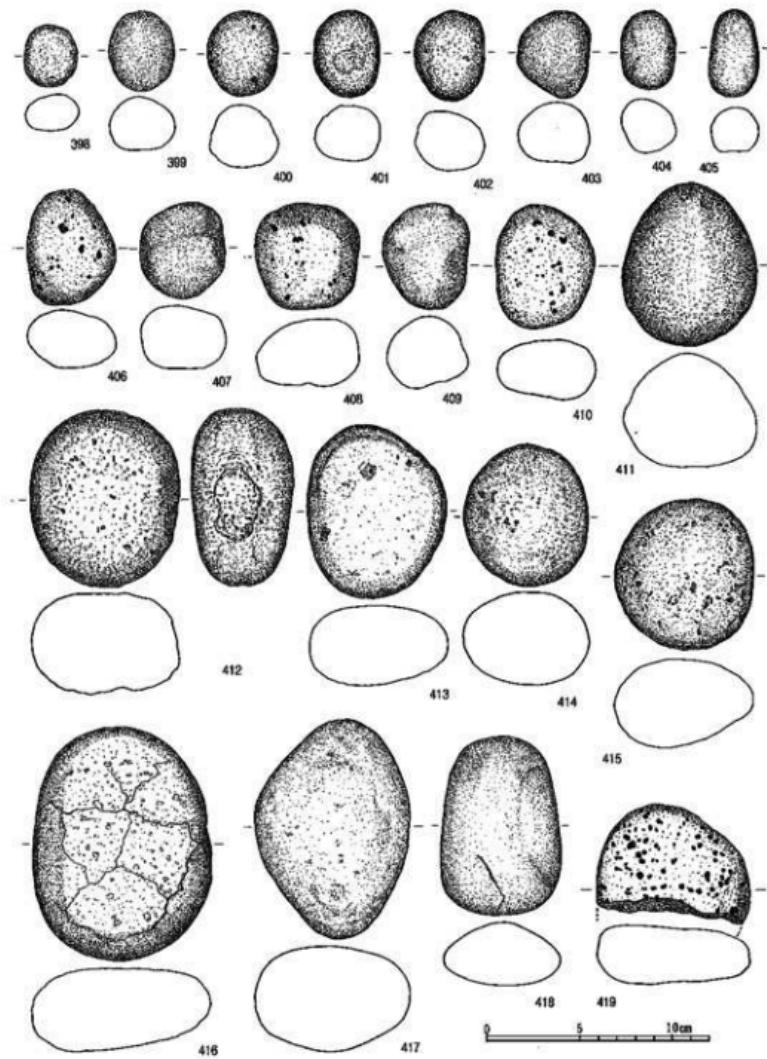
第84図 8号住居址出土の石器 (1/3)

364-379～384：輝石安山岩 365～367-372-374～376：輝綠岩 368：千枚岩
369-371-378：輝石角閃石安山岩 370-373：砂岩 377：輝綠岩



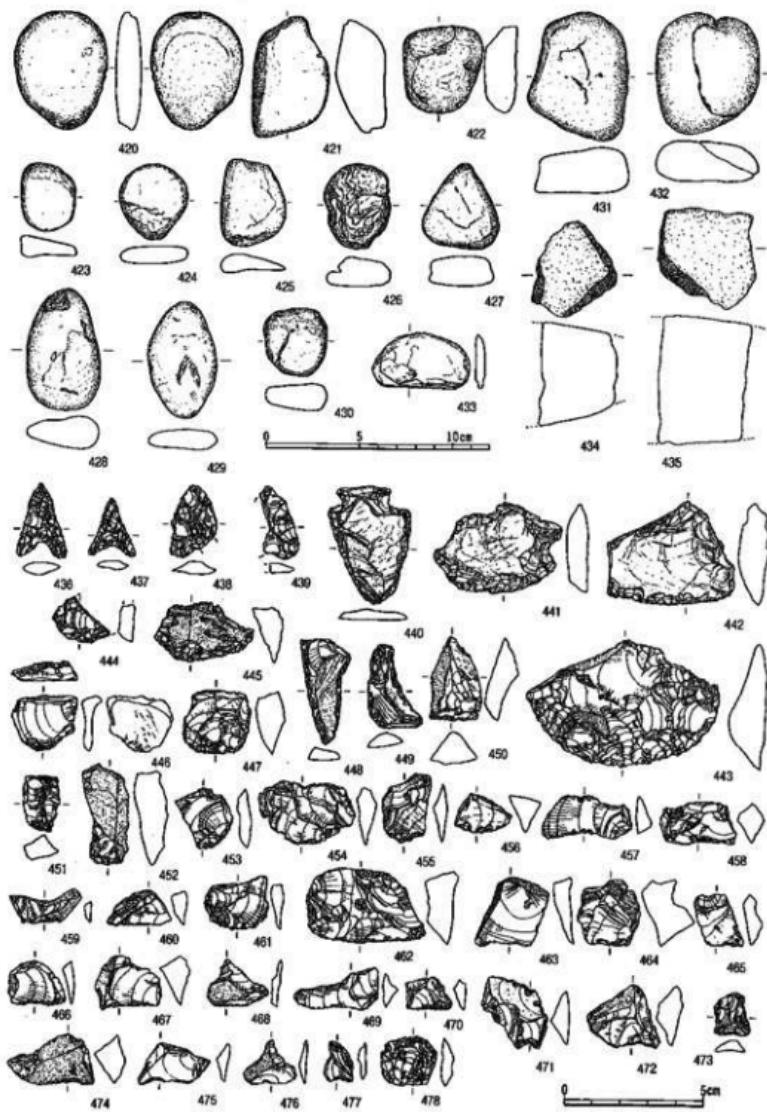
第85図 8号住居址出土の石器 (1/3)

385~387·389·391~394·396·397: 舞石安山岩 388·395: 舞石角閃石安山岩
390: 扇斜輝石斜方輝石角閃石安山岩



第86図 8号住居址出土の石器 (1/3)

398: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 399-401・403-406~410・419: 輝石角閃石安山岩
400・402・404・405・411~416: 輝石安山岩 417-418: 輝綠岩



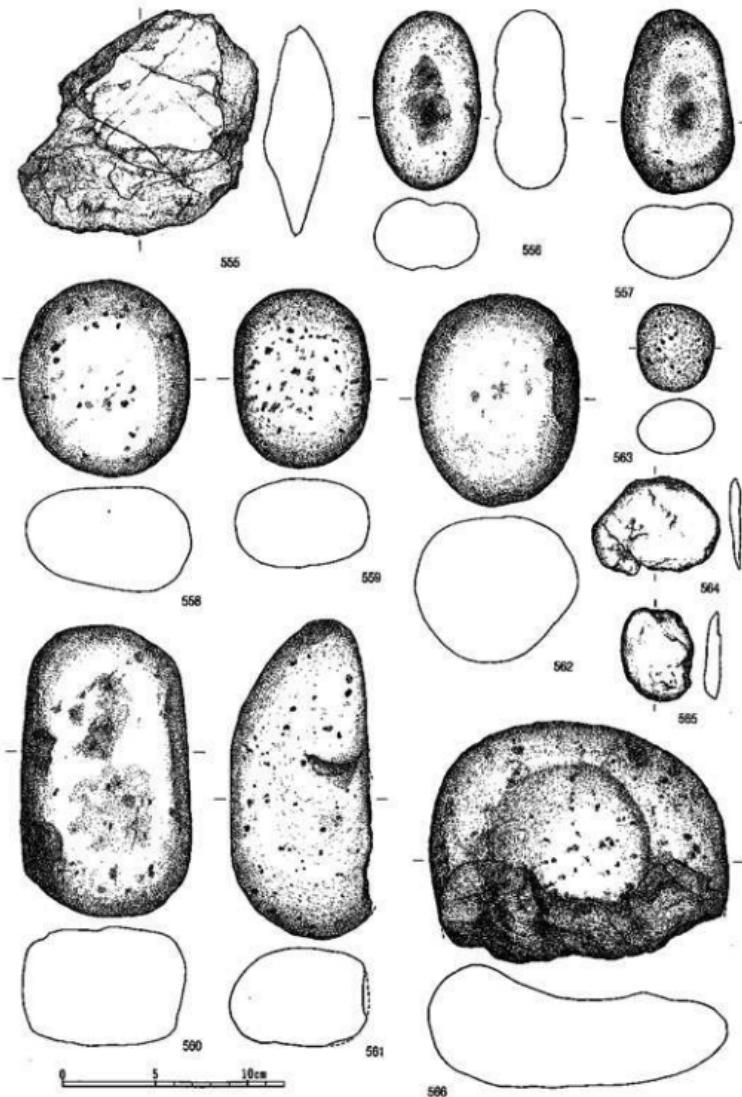
第87図 8号住居址出土の石器 (420~435: 1/3 436~478: 1/2)

- 420: 粘板岩スレート 421: 輝緑透灰岩 422: 粘板岩 423~427~428~430~431: 硬砂岩 424~433: スレート
 425: 砂岩 426: チャート 429: 緑色岩 432: 雜荷鉢緑色岩 434: 輝石安山岩 435: 輝石角閃石安山岩
 436~439~443~478: 黒曜石 440: チャート 441~442: 建葉頁岩



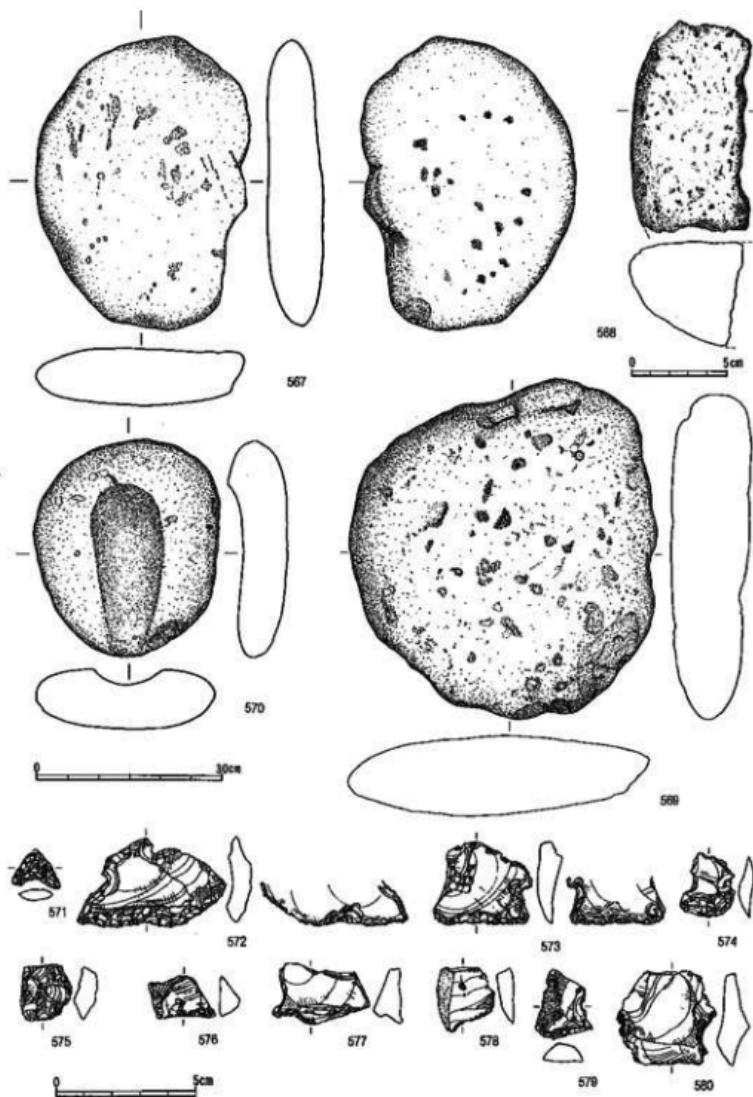
第88図 8号住居址出土の石器 (1/2)

479~448・492~524・526~546・548~554: 黒曜石
489~491: 珪質頁岩
490: 頁岩 525: チャート 547: 粘板岩



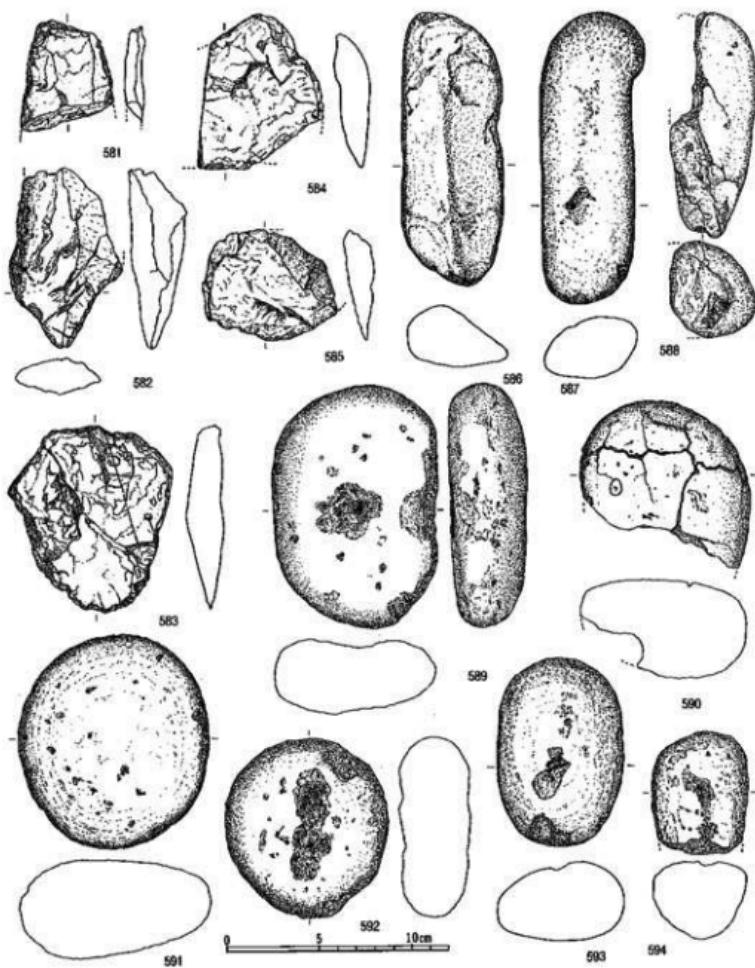
第89図 9号住居址出土の石器 (1/3)

555: 細砂岩 556~558・560~563・566: 輝石角閃石安山岩 559: 輝石安山岩 564・565: 粘板岩



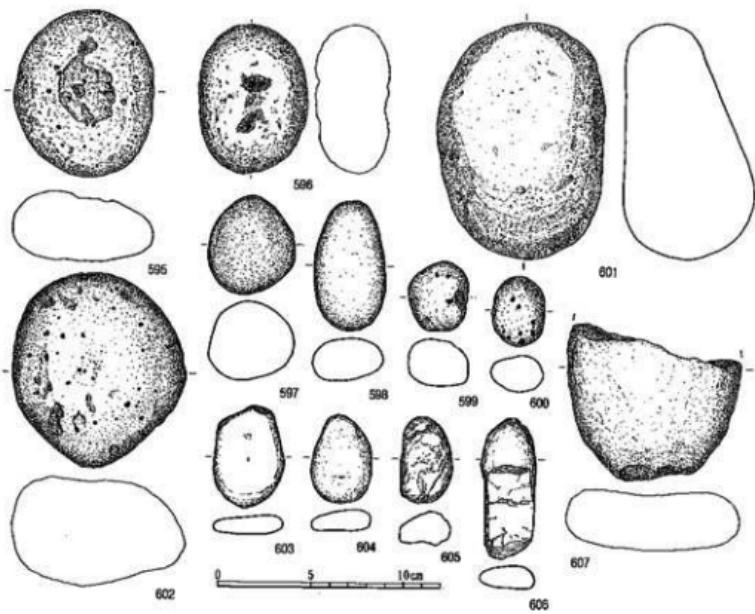
第90図 9号住居址出土の石器 (1/9 568:1/3 571~580:1/2)

567-569-570: 埠石安山岩 568: 埠石角閃石安山岩 571~580: 黒曜石



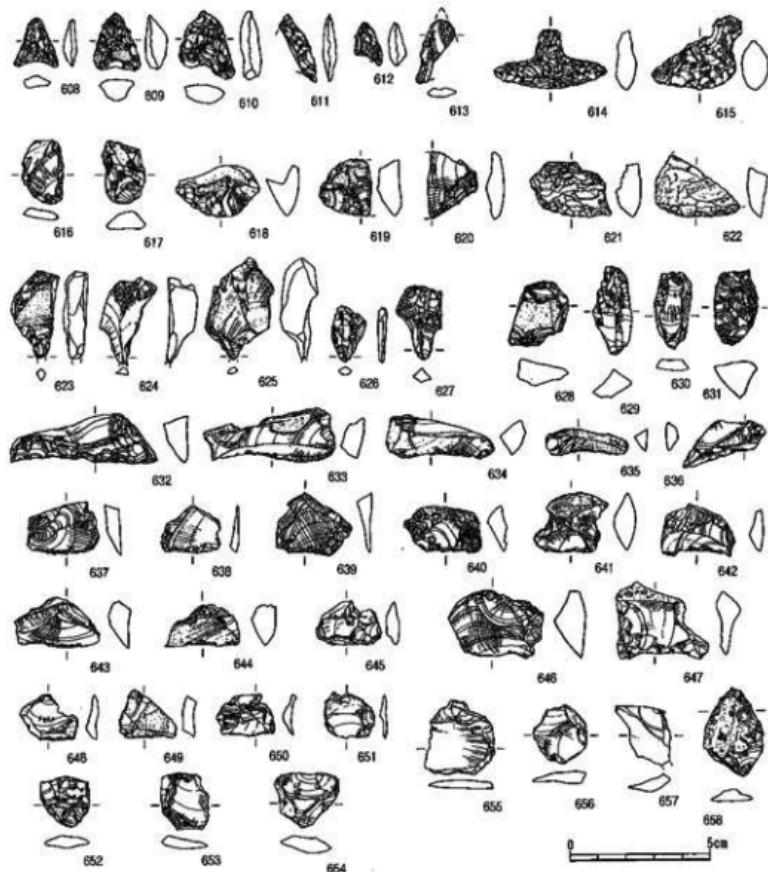
第91図 10号住居址出土の石器 (1/3)

581~585: 硬砂岩 589~592・594: 輝石安山岩 586: 砂岩質硬砂岩 587: 輝綠岩
588・593: 輝石角閃石安山岩



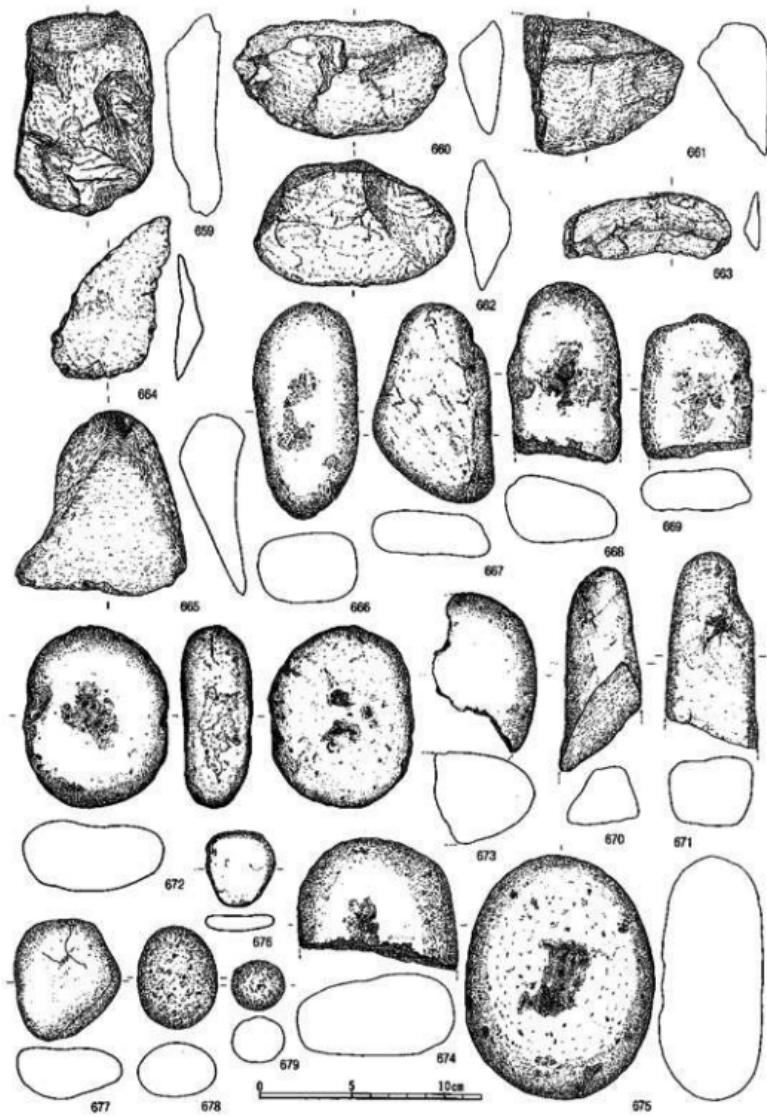
第92図 10号住居址出土の石器 (1/3)

595~597・600~602・607 : 雄石角閃石安山岩 598~599 : 雄石安山岩
603~606 : スレート 604 : 硬砂岩 605 : 結晶片岩



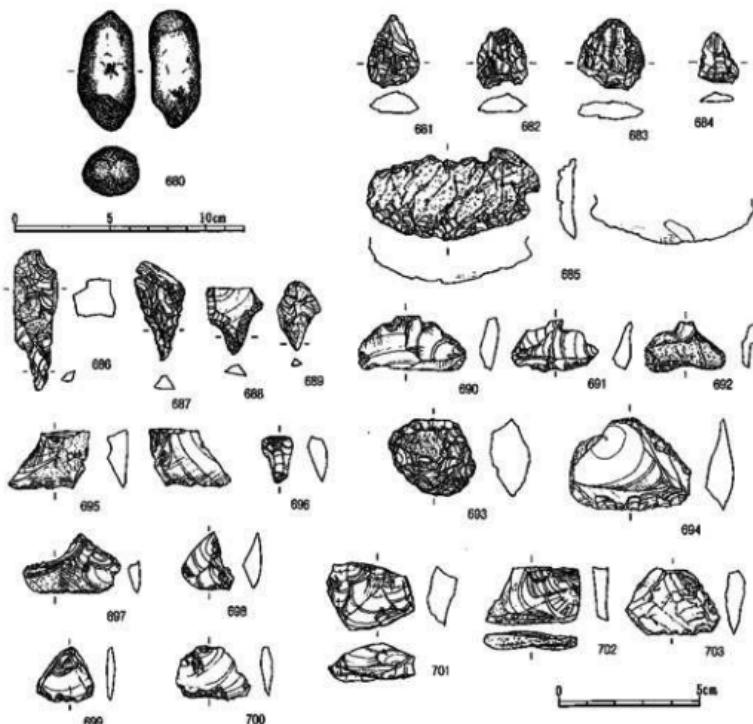
第93図 10号住居址出土の石器 (1/2)

608~620・623~658: 黒曜石 621: 白岩 622: 粘板岩



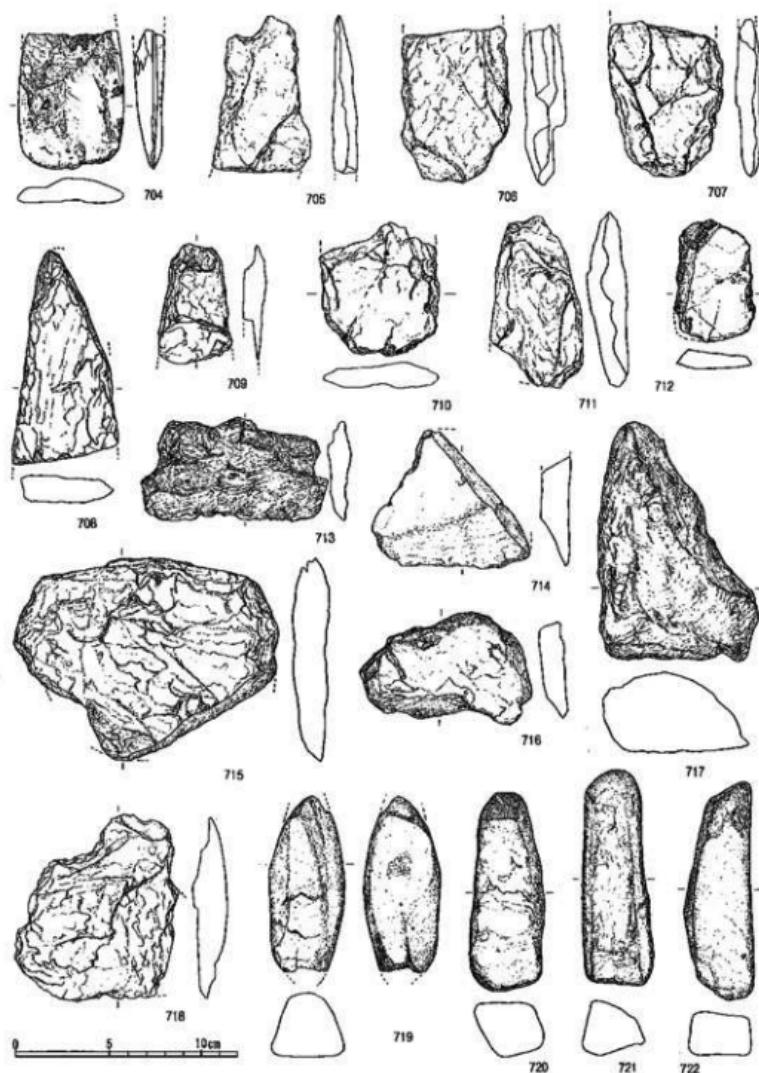
第94図 11号住居址出土の石器 (1/3)

659: 粘板岩質砂岩 660-665: 砂岩 661-663-667-670-671: 細砂岩 664: 砂岩ホルンフェルス
666-668-669: 舞鶴岩 672-675-677-679: 榛石安山岩 676: スレート



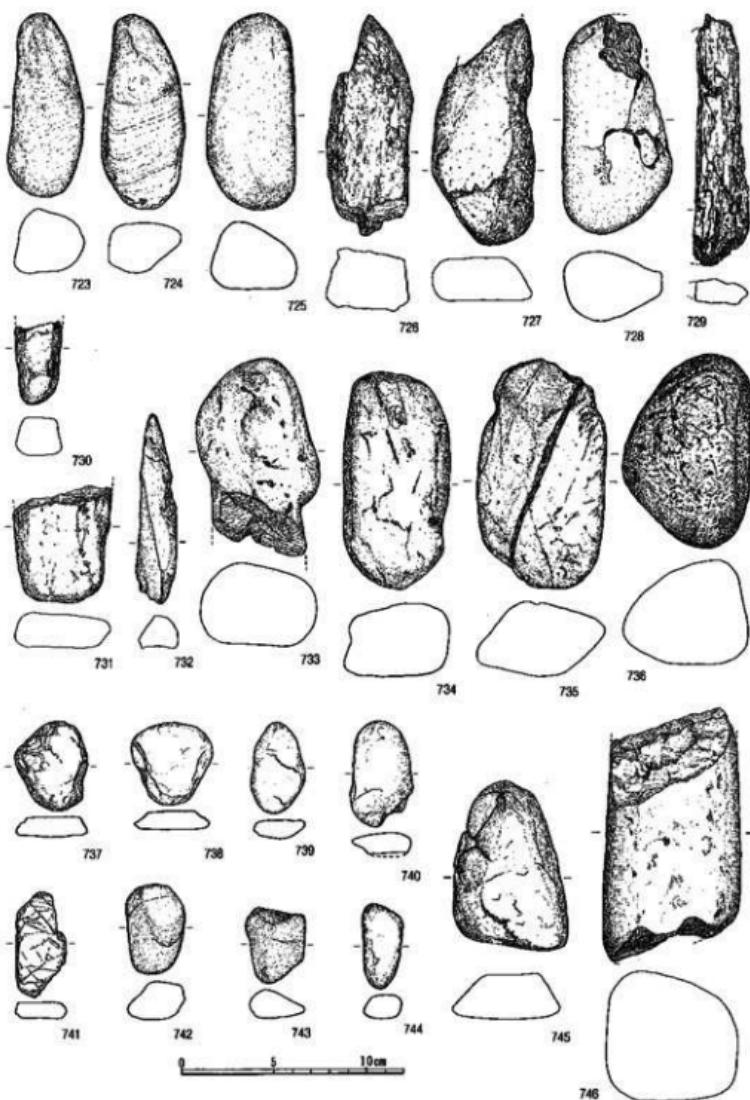
第95図 11号住居址出土の石器 (1/2 680:1/3)

680:砂岩 681~702:黒曜石 703:チャート



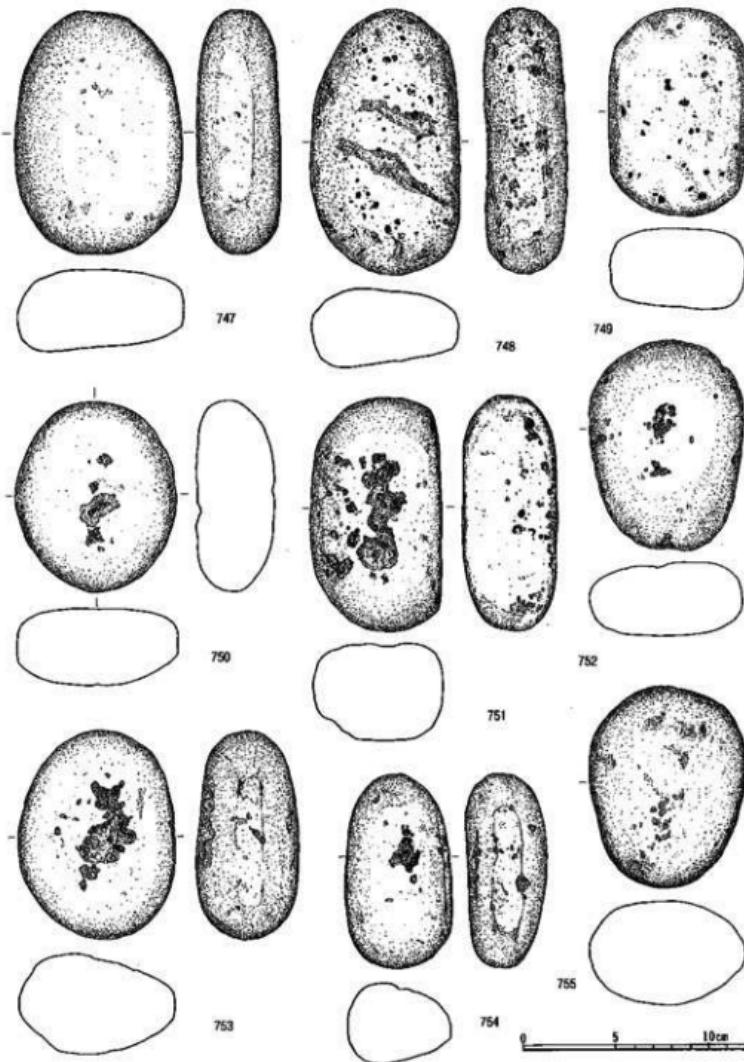
第96図 12, 13号住居址出土の石器 (1/3)

704: 鱗紋岩 705~707・714: ホルンフェルス 708・711・715・717: 粘板岩ホルンフェルス 709: 粘板岩ストレート
710: 硬砂岩 712・713・718: 粘板岩 716~721・722: 砂岩 719: 砂岩質硬砂岩 720: 閃綠岩



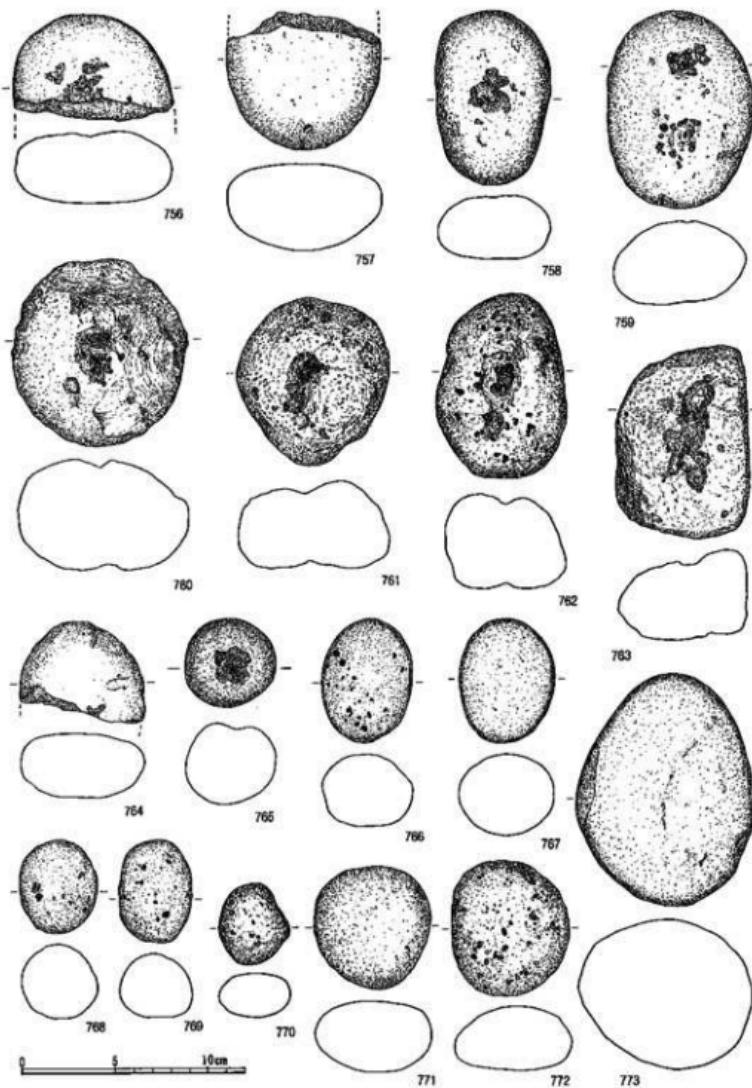
第97図 12、13号住居址出土の石器 (1/3)

723-724: 砂岩 725-728: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 726: 粘板岩ホルンフェルス
 727-731-733-736-739-742: 硅砂岩 730-745-746: 輝緑岩 732-743-744: 粘板岩
 729: 千枚岩 737: チャート 738: 緑色岩 740: スレート 741: 变成岩



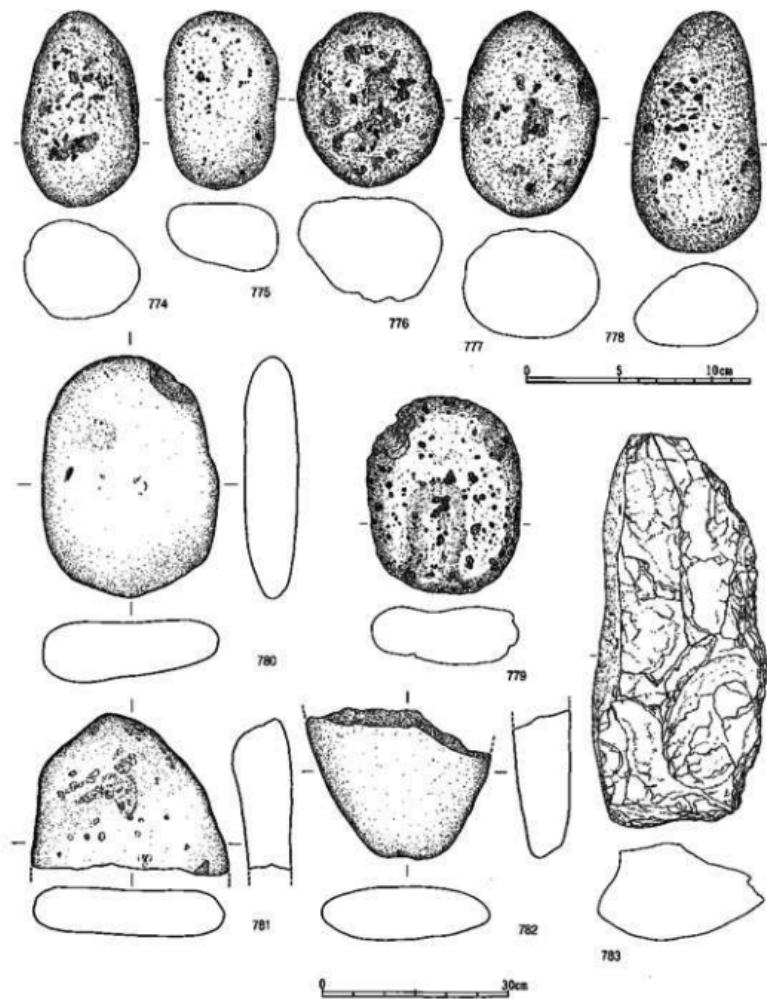
第98図 12, 13号住居址出土の石器 (1/3)

747・748・751・753～755：革新輝石斜方輝石角閃石安山岩 749・750・752：輝石安山岩



第99図 12、13号住居址出土の石器 (1/3)

758・759・761・762・766・769・770・772：単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 763：輝石角閃石安山岩
756・757・760・764・765・767・768・771・773：輝石安山岩



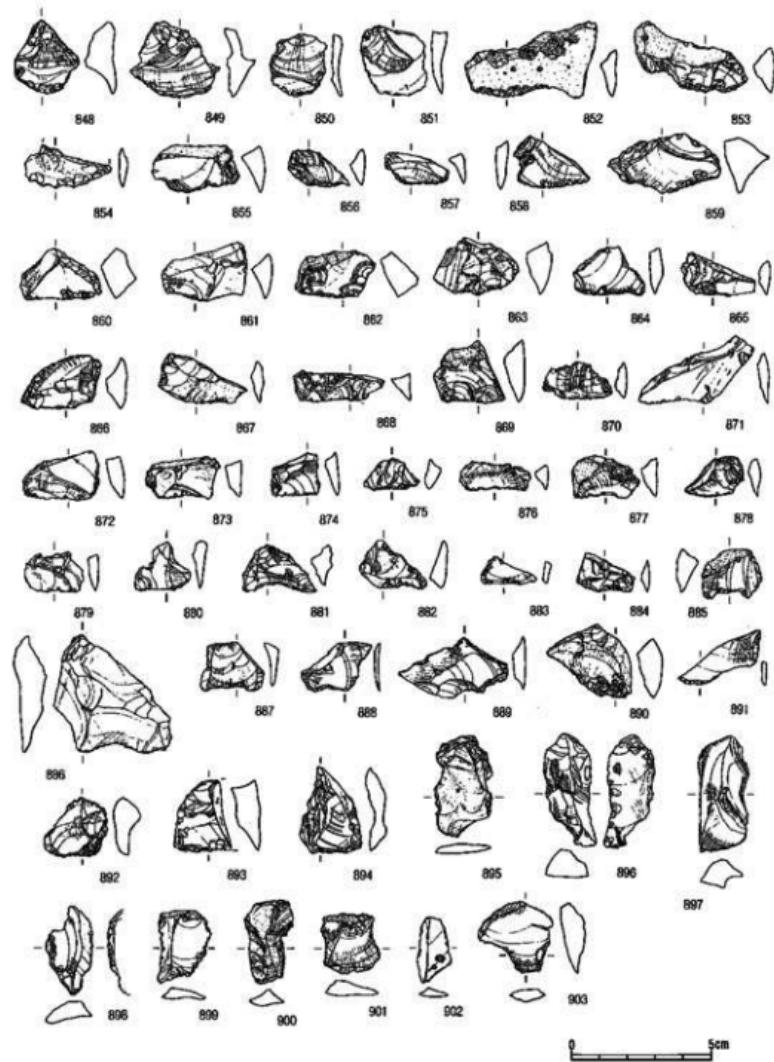
第100図 12, 13号住居址出土の石器 (1/3 780~782:1/9)

774~776・777・779: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩
 775・780~782: 輝石安山岩
 778: 輝石角閃石安山岩
 781: 褐綠岩
 783: 鋸齒鉄綠色岩



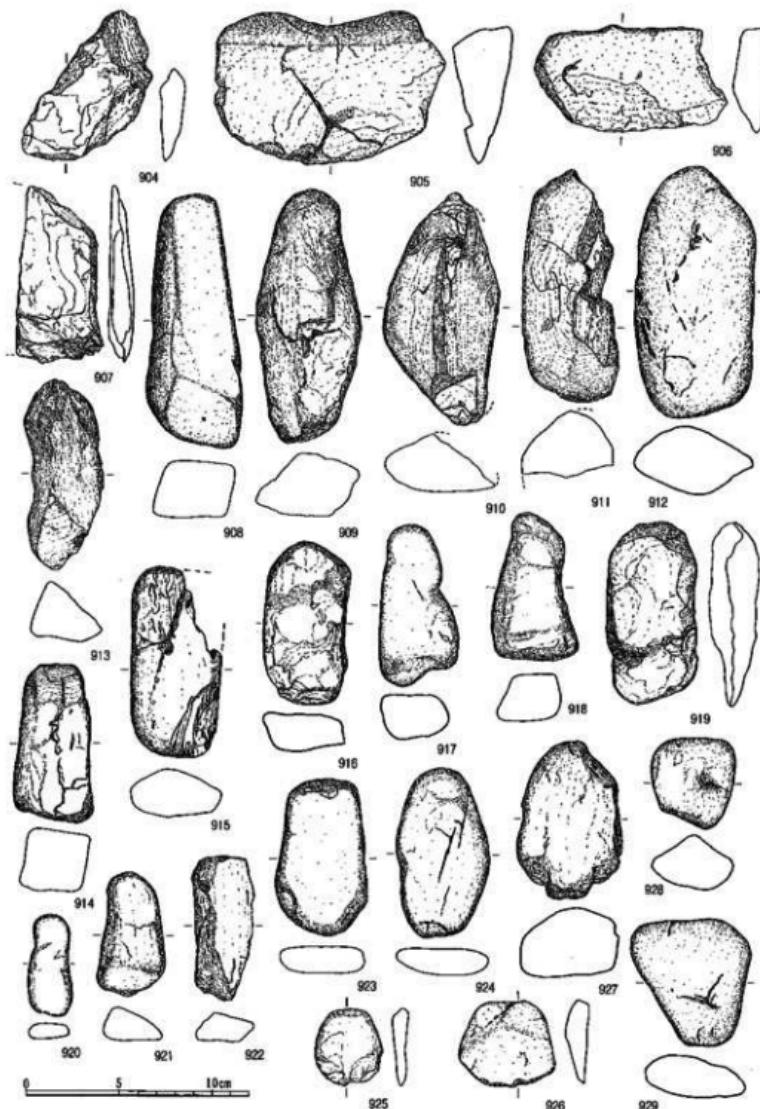
第101図 12、13号住居址出土の石器 (1/2)

784~818・821~847: 黒矅石 819: 白岩 820: 水晶



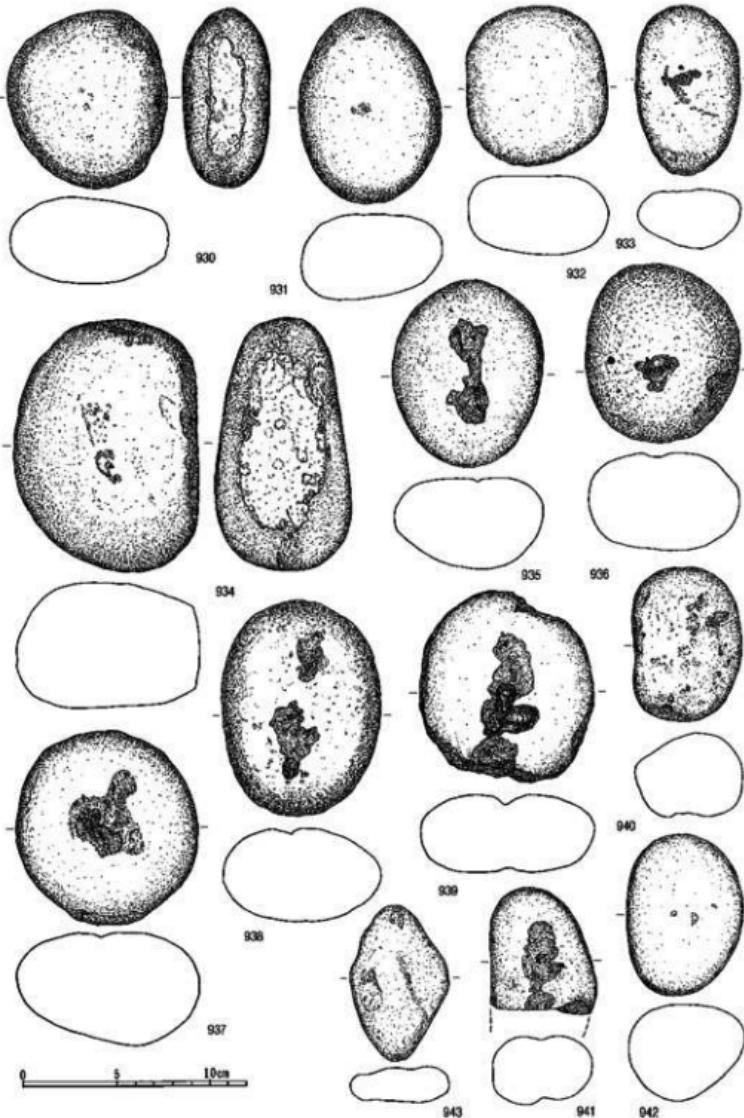
第102図 12、13号住居址出土の石器 (1/2)

848~853・855~885・887~903: 黒曜石 854~866: チヤート



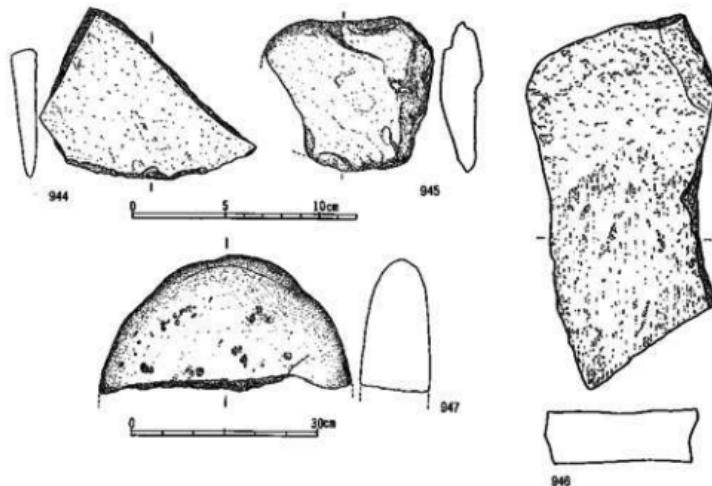
第103図 14号住居址出土の石器 (1/3)

904-919: 砂岩質粘板岩 905-910-912-921-923-924-928-929: 硫砂岩 913-914-918-922: 砂岩
 907-915-916-920-926: 粘板岩 906: 半斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 908: 輝綠岩 909: 石英閃綠岩
 917: 砂岩ホルンフェルス 925: 絹雲母片岩 927: 泥岩



第104図 14号住居址出土の石器 (1/3)

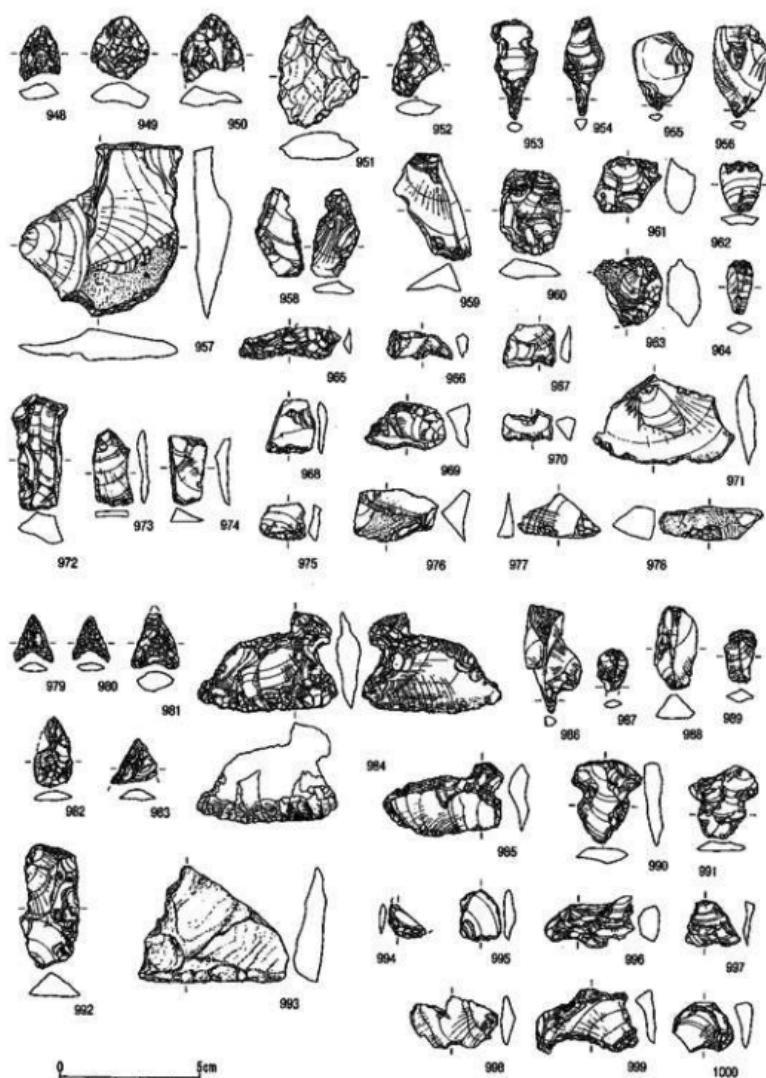
930：輝石角閃石安山岩 931～936・938・940～943：单斜辉石斜方辉石角闪石安山岩 937・939：辉石安山岩



第105図 14号住居址出土の石器 (1/3 947:1/9)

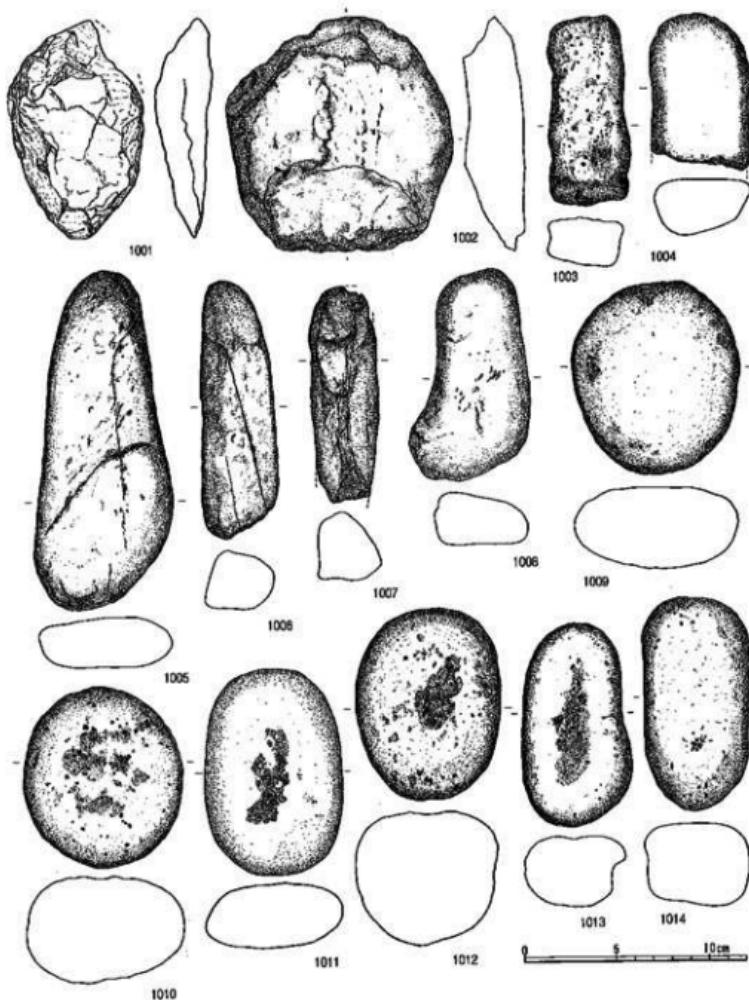
944: 平斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 945: 組合岩ホルンフェルス

946: 黑蘇輝石普通輝石安山岩 947: 輝石角閃石安山岩



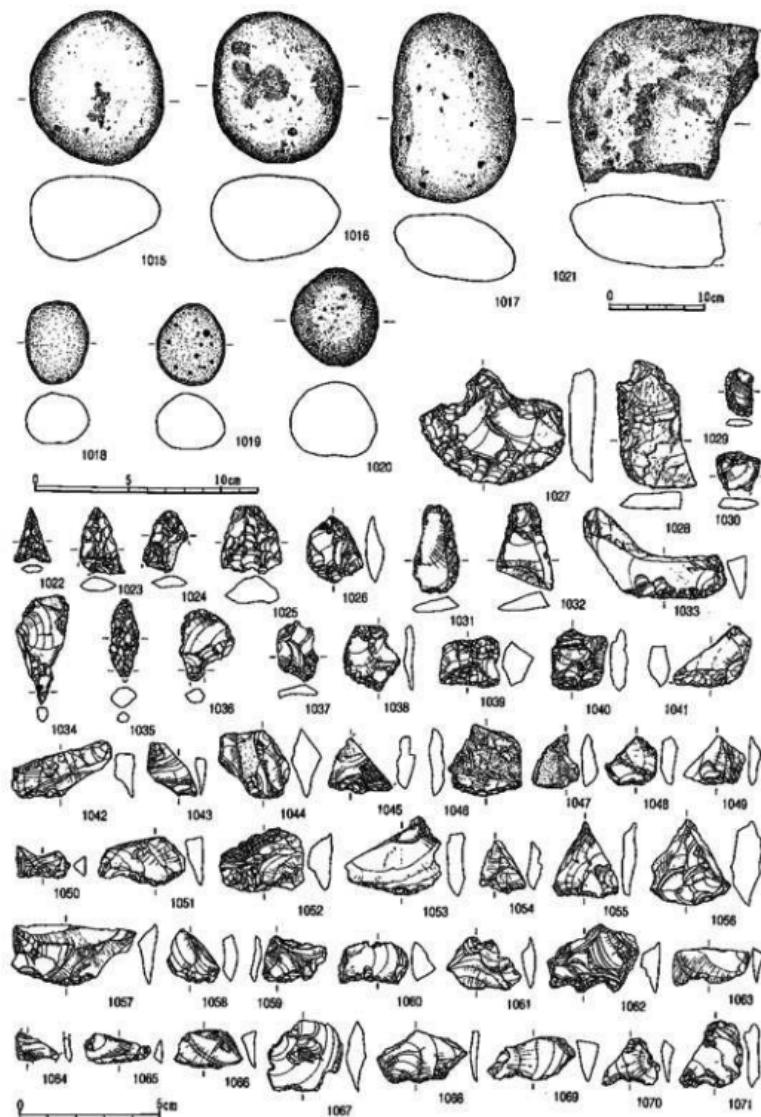
第106図 14号住居址出土の石器 (1/2)

948~950・952~992・994~1000: 黒曜石 951: 玄武岩 993: 白岩



第107図 15号住居址出土の石器 (1/3)

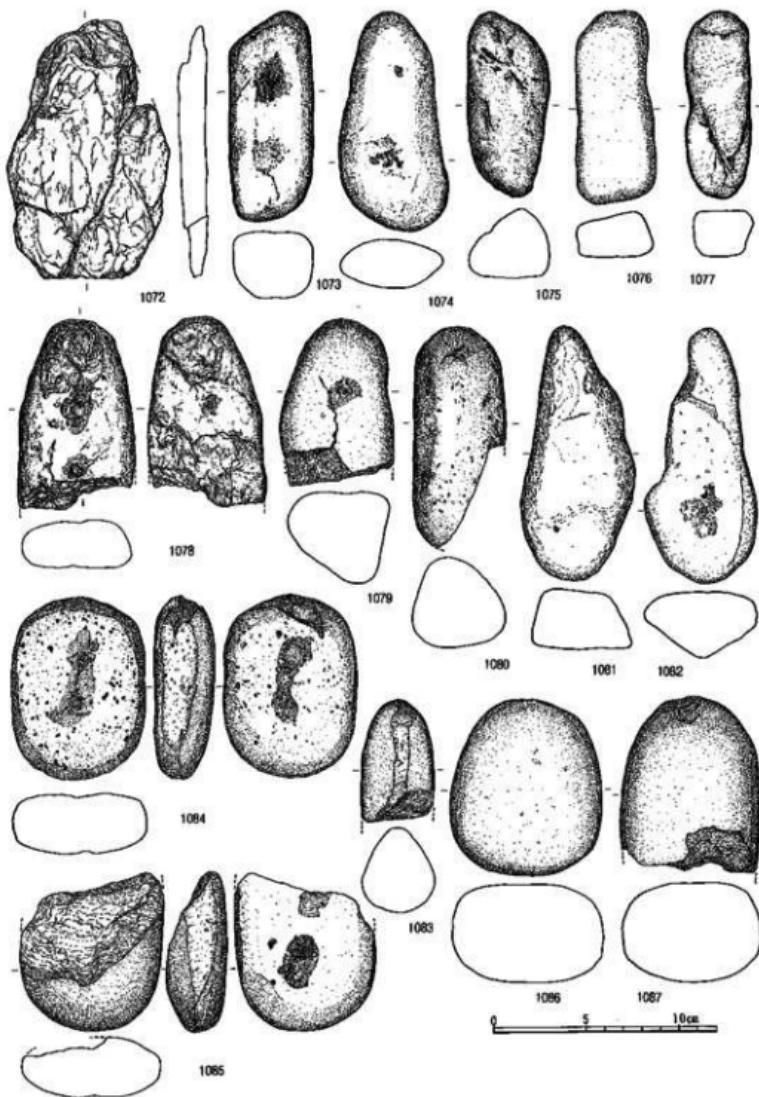
1001: 粗板岩 1002-1005~1008: 硬砂岩 1004-1011-1014: 鮫石安山岩
1003-1009-1010-1012-1013: 鮫石角閃石安山岩



第108図 15号住居址出土の石器 (1015~1020 : 1 / 3 1021 : 1 / 6 1022~1071 : 1 / 2)

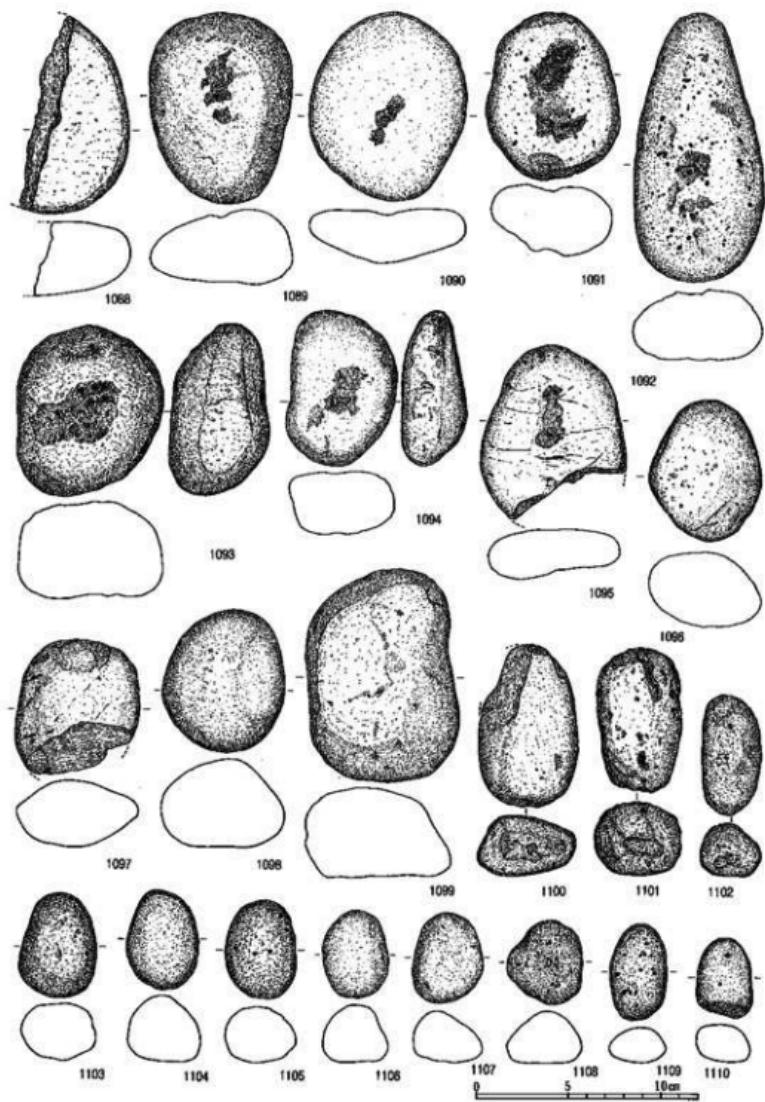
1015~1019·1021 : 鮎石角閃石安山岩 1020 : 鮎石安山岩

1022~1027·1029~1040·1042~1071 : 黒曜石 1028~1041 : チャート



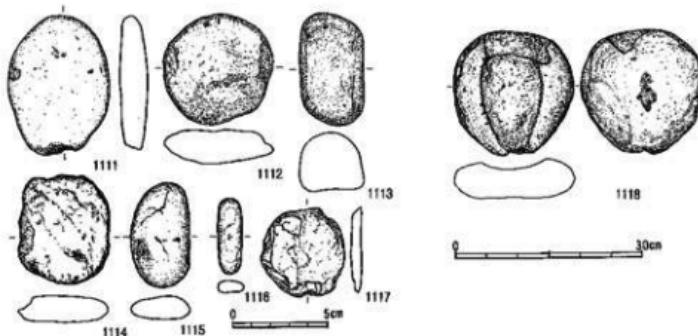
第109図 16号住居址出土の石器 (1/3)

1072: 粘板岩ホルンフェルス 1073-1075-1083: 硅砂岩 1074-1080-1082: 輝緑岩 1076-1085: 輝石安山岩
1079-1084-1086-1087: 輝石角閃石安山岩 1077: 泥岩 1078: 蛇紋岩 1081: 花崗岩質砂岩



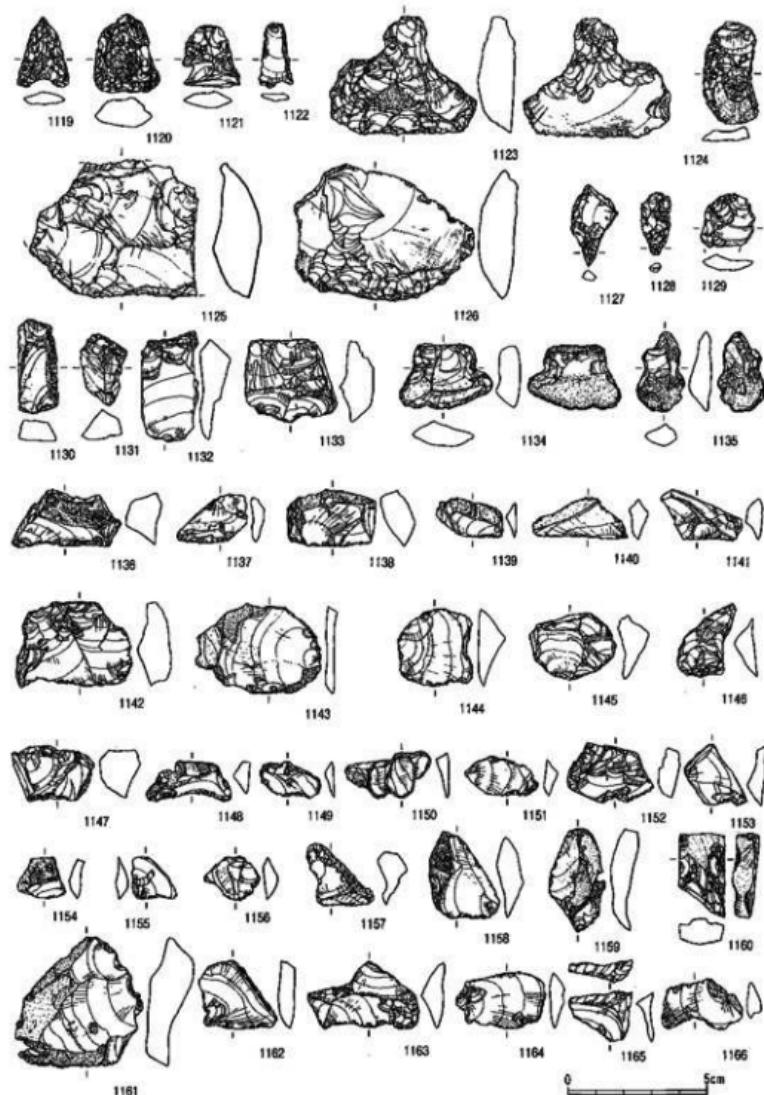
第110図 16号住居址出土の石器 (1/3)

1088-1090・1093・1098-1103・1106-1107・1110:輝石安山岩 1091-1104・1105-1109:輝石角閃石安山岩
1095-1097:鍛砂岩 1094-1096:輝綠岩 1092:單斜輝石斜方輝石角閃石安山岩



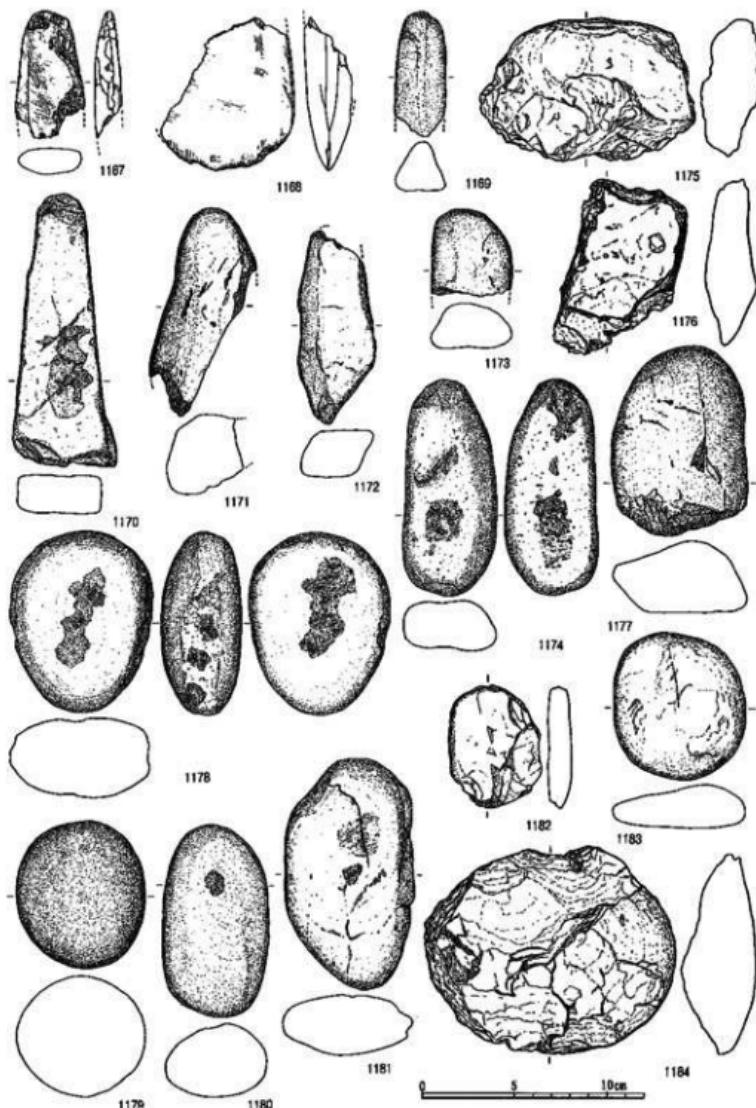
第111図 16号住居址出土の石器 (1/3 1118:1/9)

1111-1112-1118:輝石角閃石安山岩 1113:硬砂岩 1114:緑色片岩
1115:変輝岩 1116:粘板岩ホルンフェルス 1117:粘板岩スレート



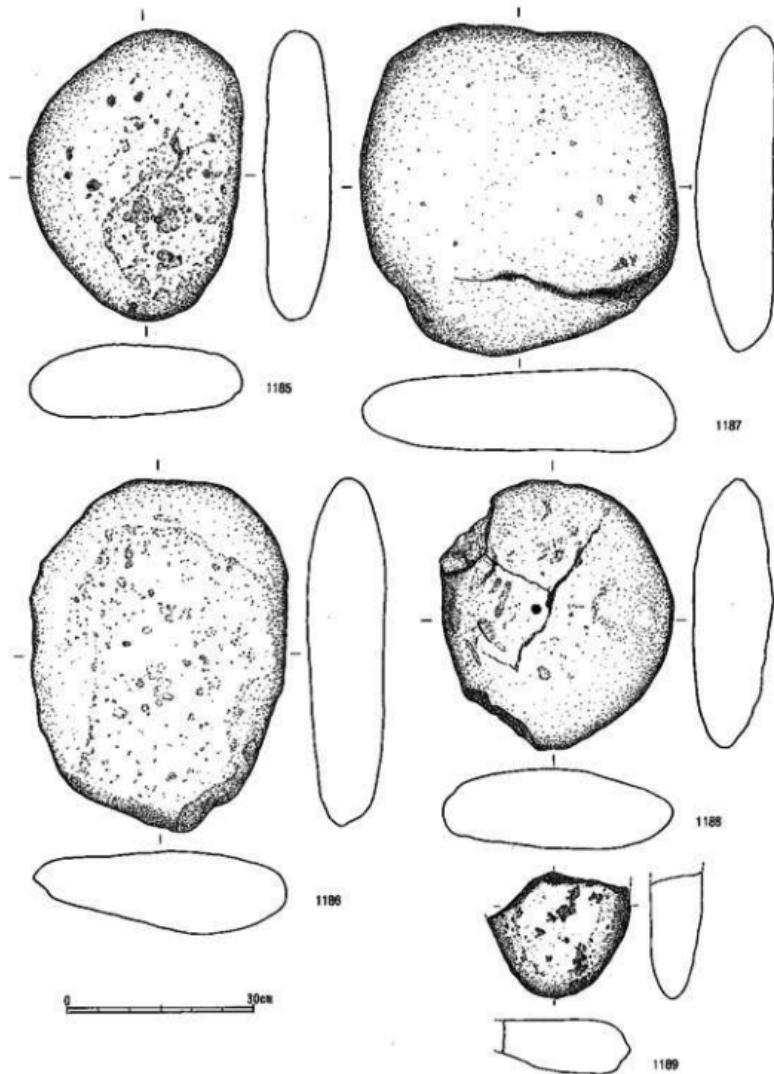
第112図 16号住居址出土の石器 (1/2)

1119~1124・1126~1166: 黒曜石 1125: 珠質岩



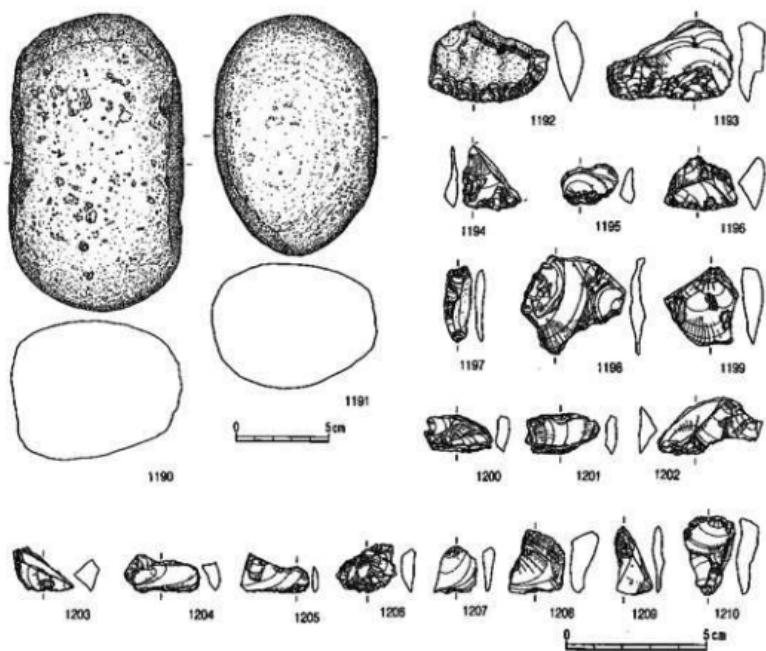
第113図 17号住居址出土の石器 (1/3)

1167-1168: 蛇紋岩 1169-1174: 爪縞岩 1176-1184: 鋸齒鉛緑色岩 1170-1173-1177-1181: 硬砂岩
1175-1182: 粘板岩 1178-1180: 爪石角閃石安山岩 1179: 爪石安山岩 1183: 沙岩



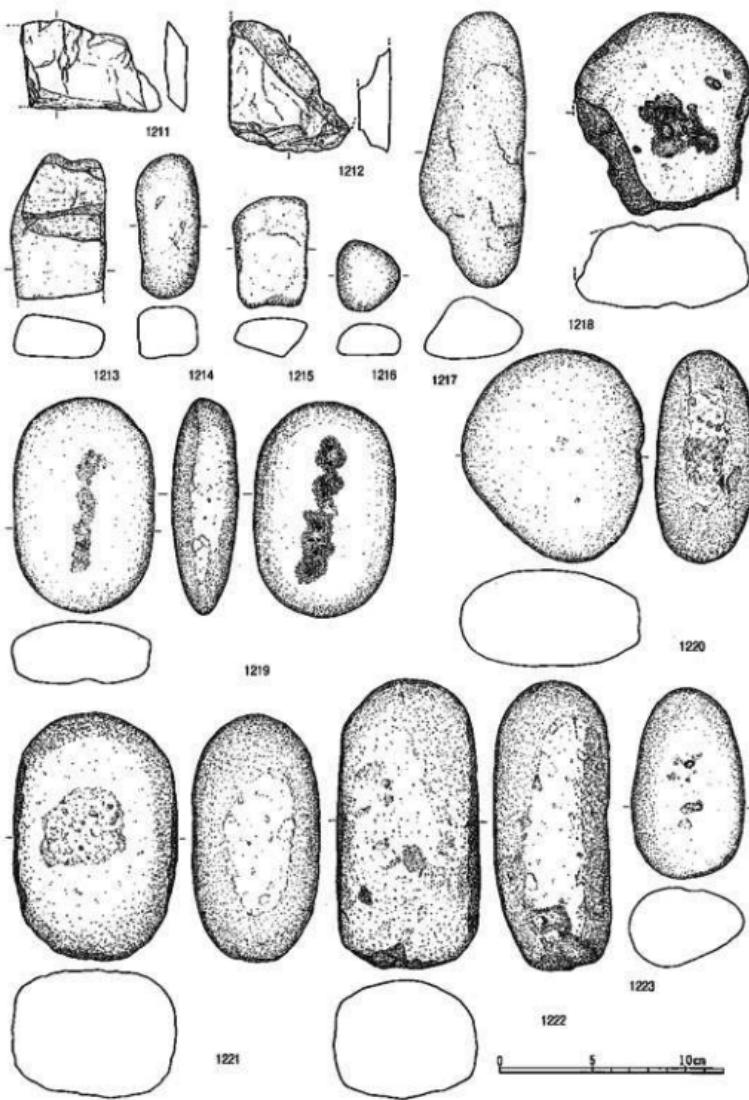
第114図 17号住居址出土の石器 (1/9)

1185: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 1186-1189: 輝石安山岩 1187-1188: 輝石角閃石安山岩



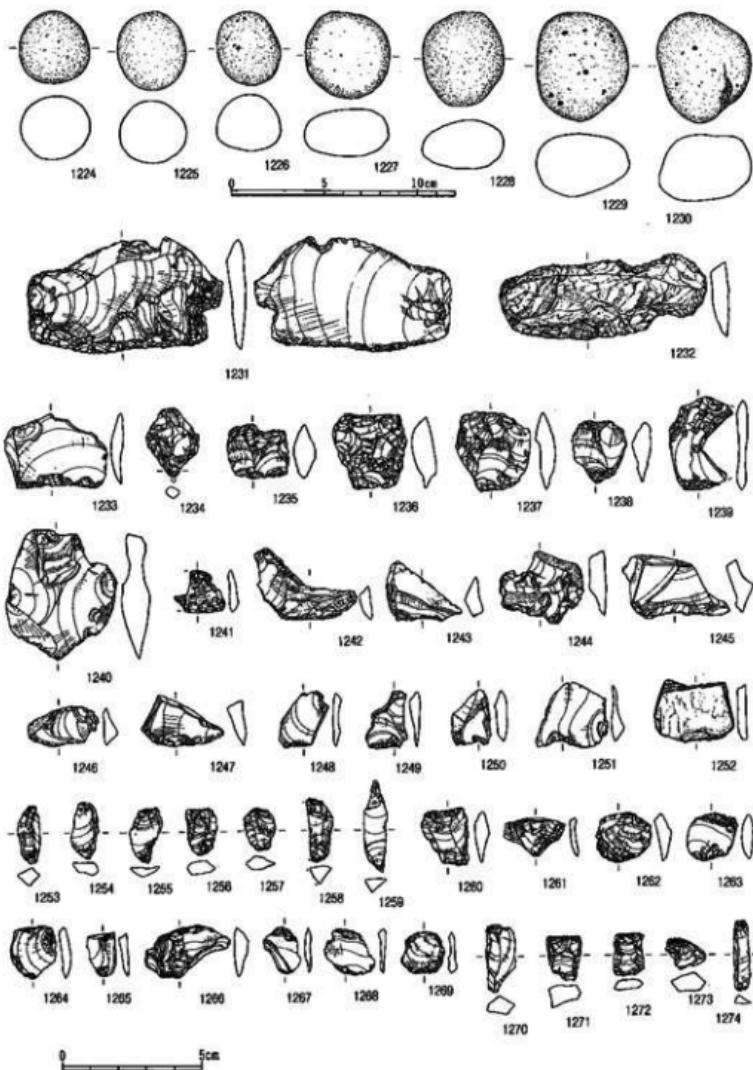
第115図 17号住居址出土の石器 (1190-1191:1/3 1192~1210:1/2)

1190-1191:輝石角閃石安山岩 1192~1210:黒曜石



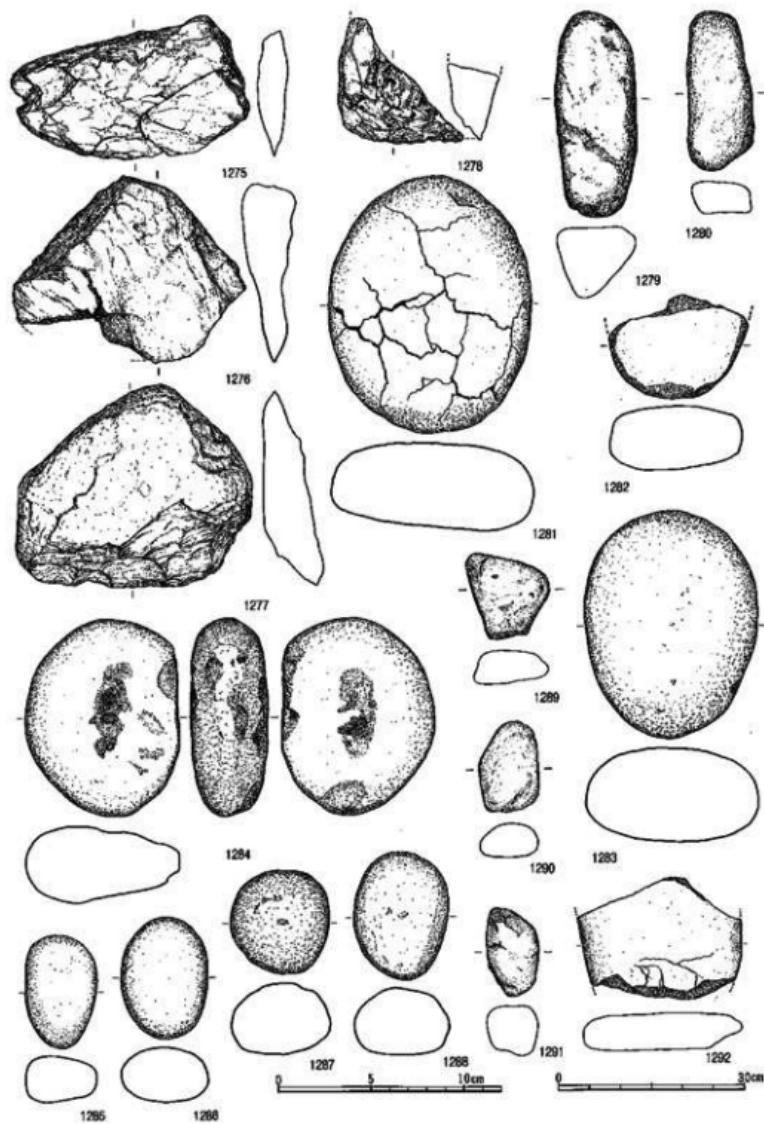
第116図 18号住居址出土の石器 (1/3)

1211: 結板岩 1212-1214: 結板岩ホルンフェルス 1216-1218-1223: 鹰石安山岩
1213: 輝緑岩 1215: 輝石角閃石安山岩 1217: 硬砂岩



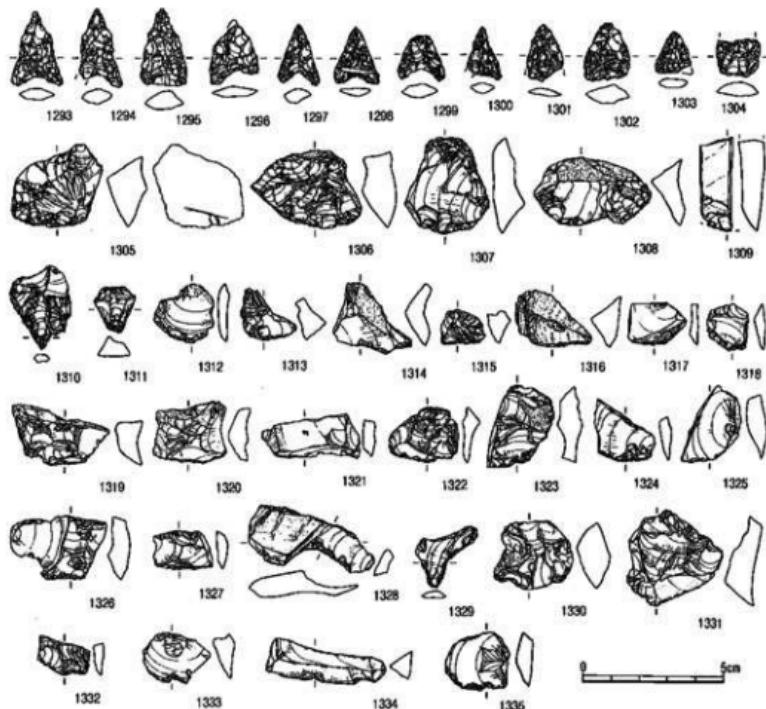
第117図 18号住居址出土の石器 (1224~1230 : 1/3 1231~1274 : 1/2)

1224-1226・1228~1230 : 磐石角閃石安山岩 1225-1227 : 磐石安山岩
 1231-1233・1251-1253~1274 : 黒曜石 1232 : 錫質頁岩 1252 : スレート



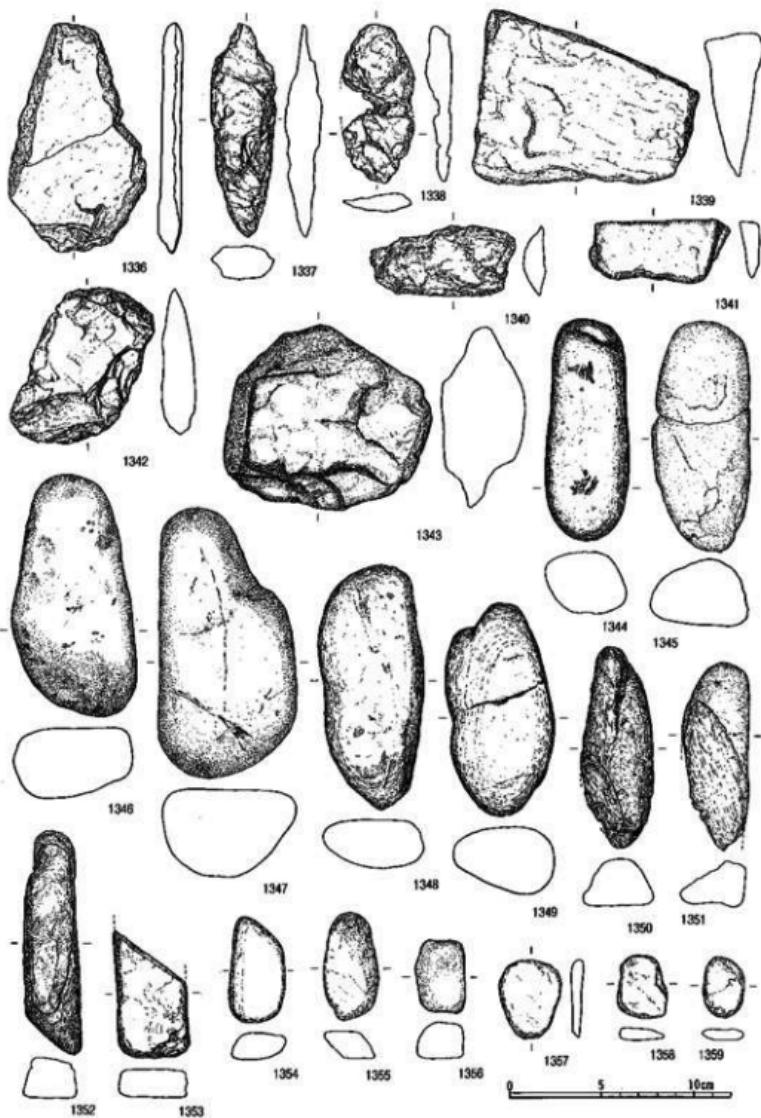
第118図 19号住居址出土の石器 (1/3 1292:1/9)

1275: ホルンフェルス化粘板岩 1276: 粘板岩ホルンフェルス 1279-1288-1290: 硬砂岩
 1280-1281-1287: 崩石角閃石安山岩 1282-1286-1291: 崩石安山岩 1277: 粘板岩黄砂岩
 1278: 玄武岩 1289: 灰岩 1292: 輝緑岩



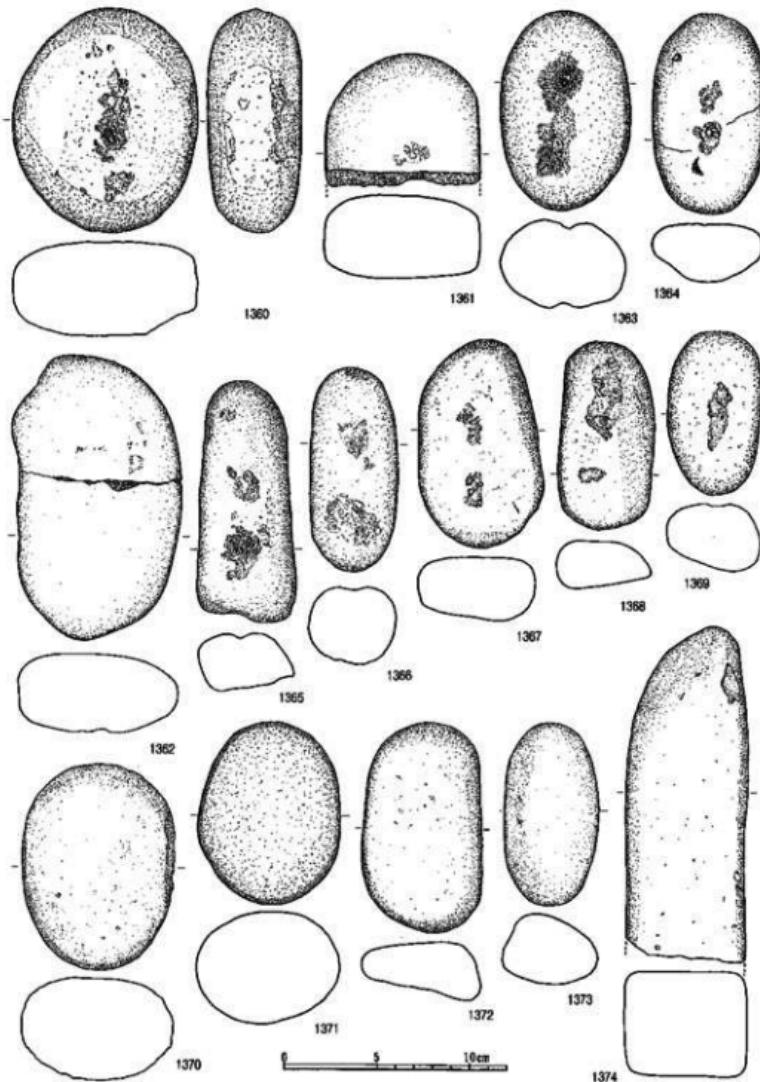
第119図 19号住居址出土の石器 (1/2)

1293・1294・1296~1308・1310~1335: 黒曜石 1295: チャート 1309: 頁岩



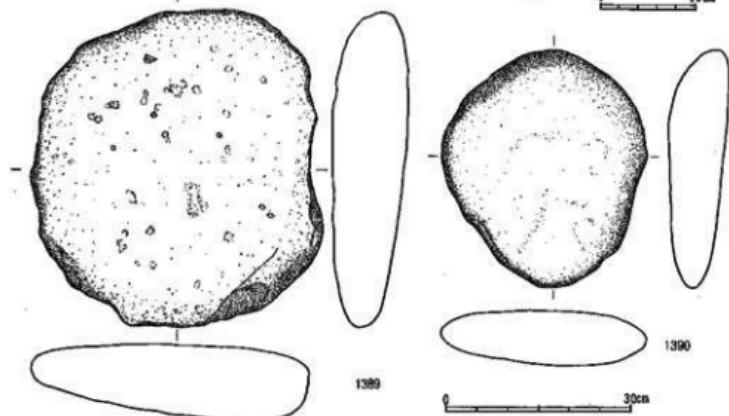
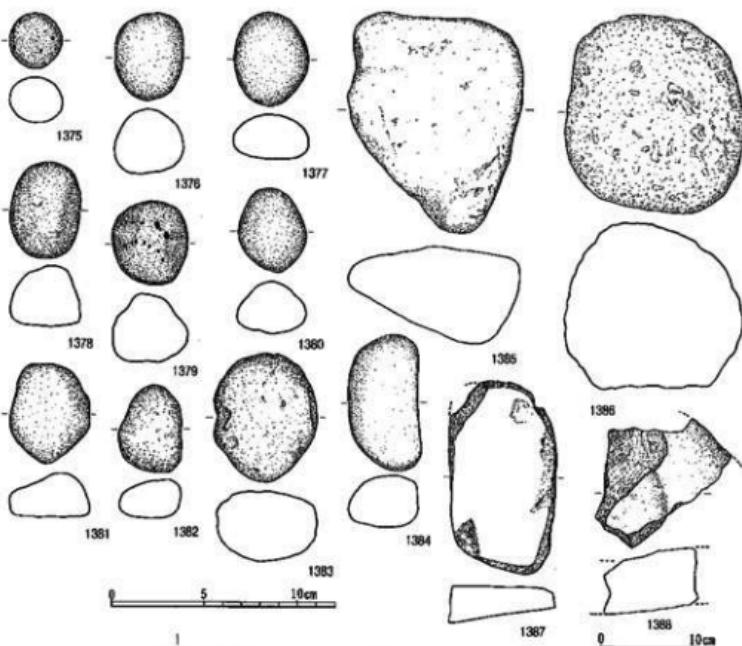
第120図 20号住居址出土の石器 (1/3)

- 1336: 郊外鉛緑色岩 1337-1341-1343-1344-1347-1350-1352: 磨砂岩 1339-1353-1358: 粘板岩
 1346-1356: 磐石安山岩 1348-1349: 磐絆縞灰岩 1338: 縞灰岩 1340: 粘板岩ホルンフェルス
 1342: 粘板岩質砂岩 1345: 磐縞岩 1354: 海浜石? 1355: ホルンフェルス 1357: スレート
 1359: 粘板岩質スレート



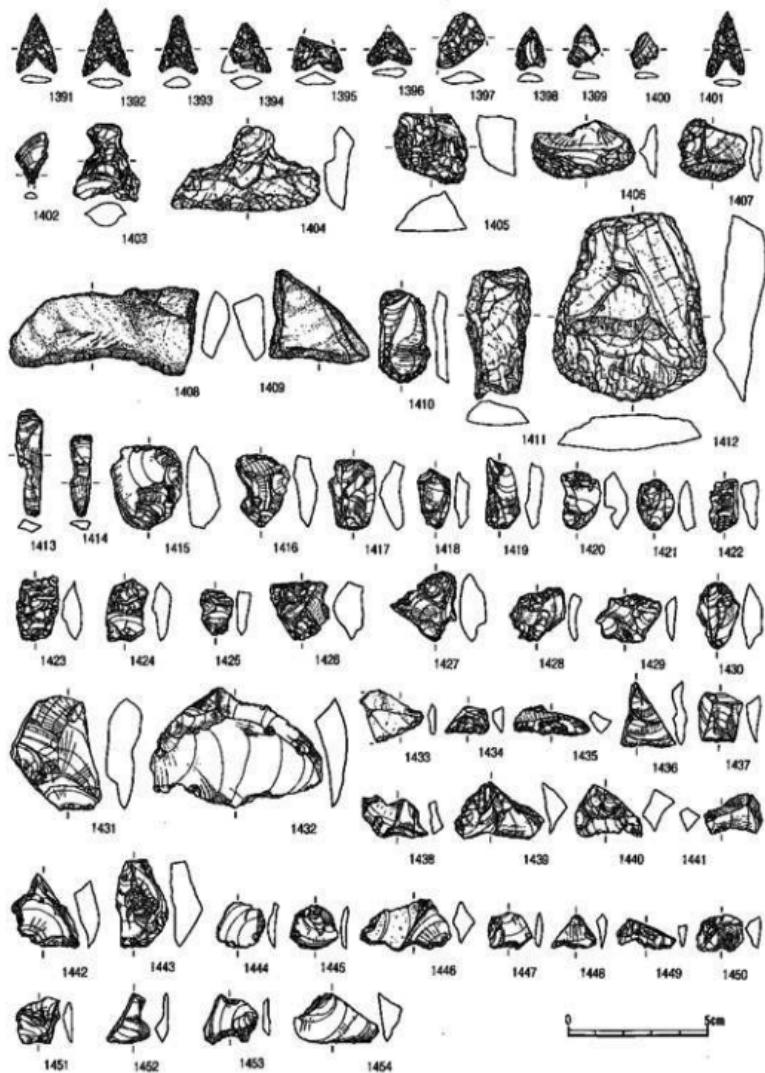
第121図 20号住居址出土の石器 (1/3)

1360・1361・1363・1365～1367・1369・1371～1373：輝石安山岩
1362・1364・1368・1370：輝石角閃石安山岩 1374：輝綠岩



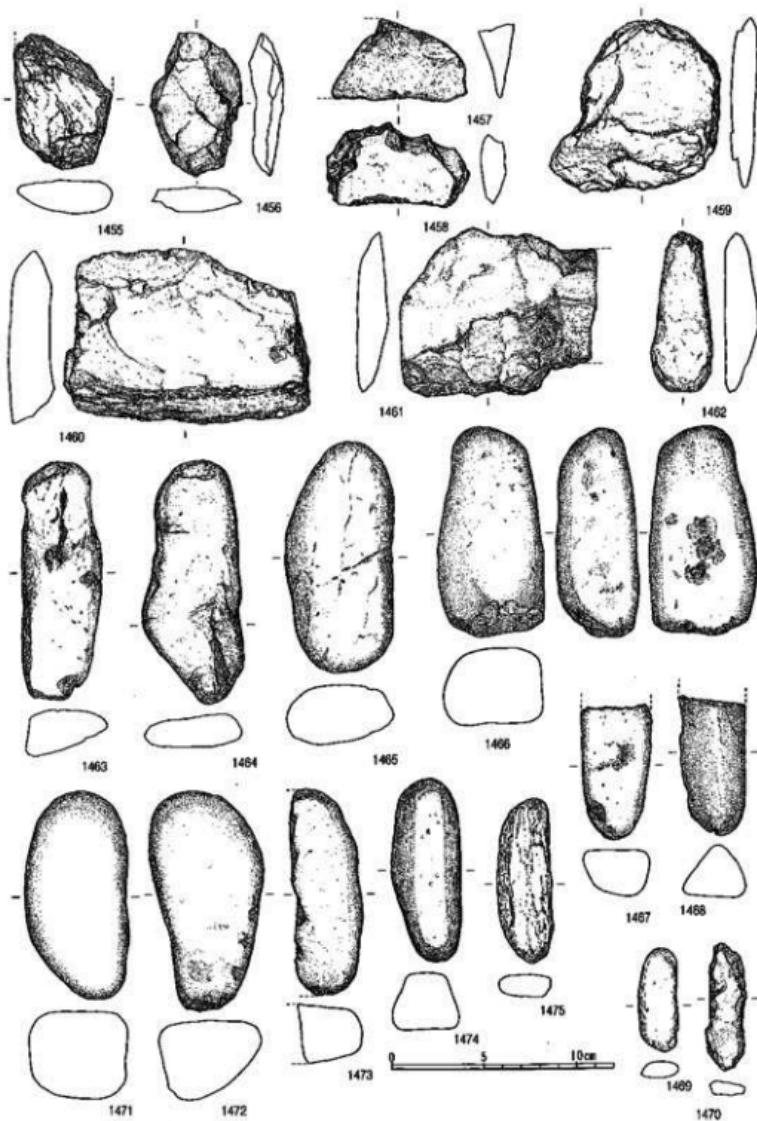
第122図 20号住居址出土の石器 (1/3 1388:1/6 1389-1390:1/9)

1375-1378-1379-1382-1383-1385-1386-1388-1389:輝石角閃石安山岩
1376-1380-1381-1384:輝石安山岩
1377:輝綠岩
1387:砂岩
1390:單斜輝石斜方輝石角閃石安山岩



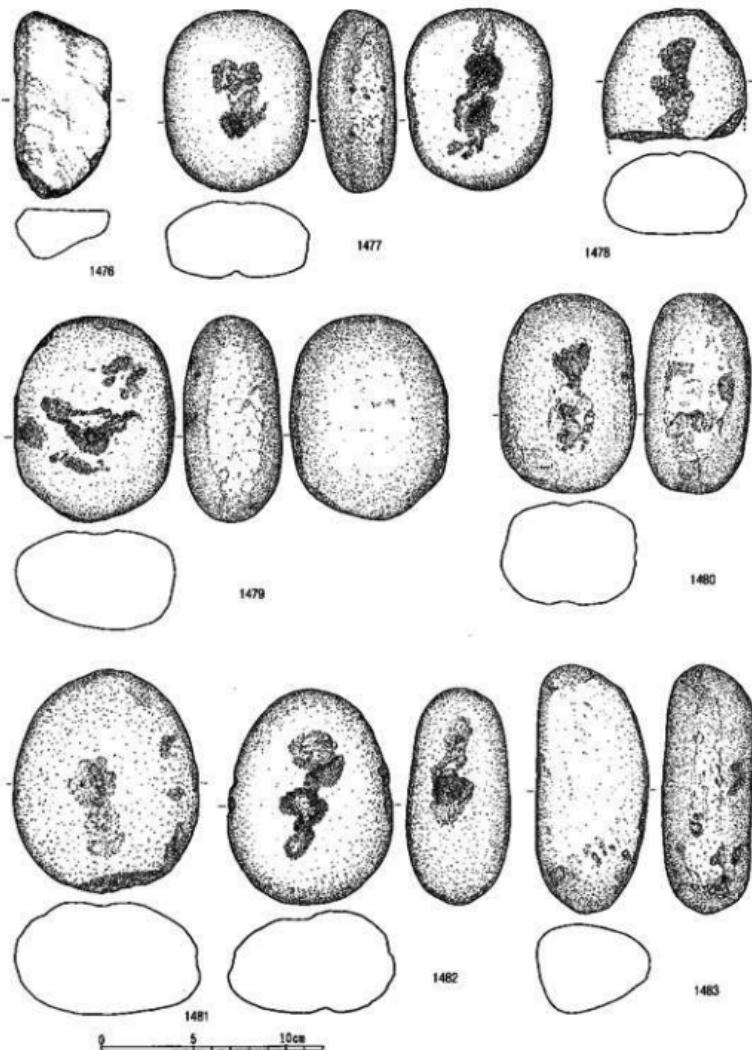
第123図 20号住居址出土の石器 (1/2)

1391~1403・1405~1407・1410・1413~1432・1434~1454 : 黒曜石 1404~1412・1433 : 珠質岩
1408・1409 : ホルンフェルス 1411 : 灰岩



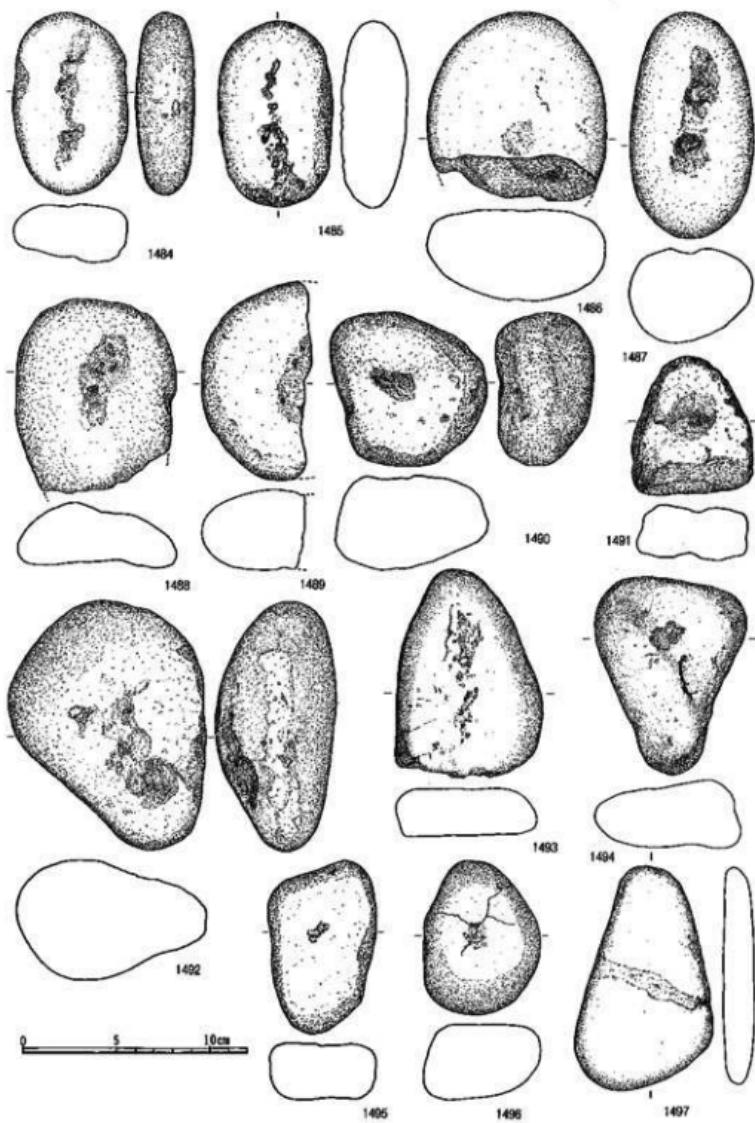
第124図 21号住居址出土の石器 (1/3)

1455: 粘板岩 1456-1459-1462-1470: 粘板岩ホルンフェルス 1457-1458-1461-1463-1473: 硬砂岩
 1465-1467-1468: 菱錫岩 1460: ホルンフェルス 1464: 砂岩 1466: 鹰石安山岩 1469: 結晶片岩
 1471-1472: 鹰石角閃石安山岩 1474: 石英斑岩 1475: 千枚岩



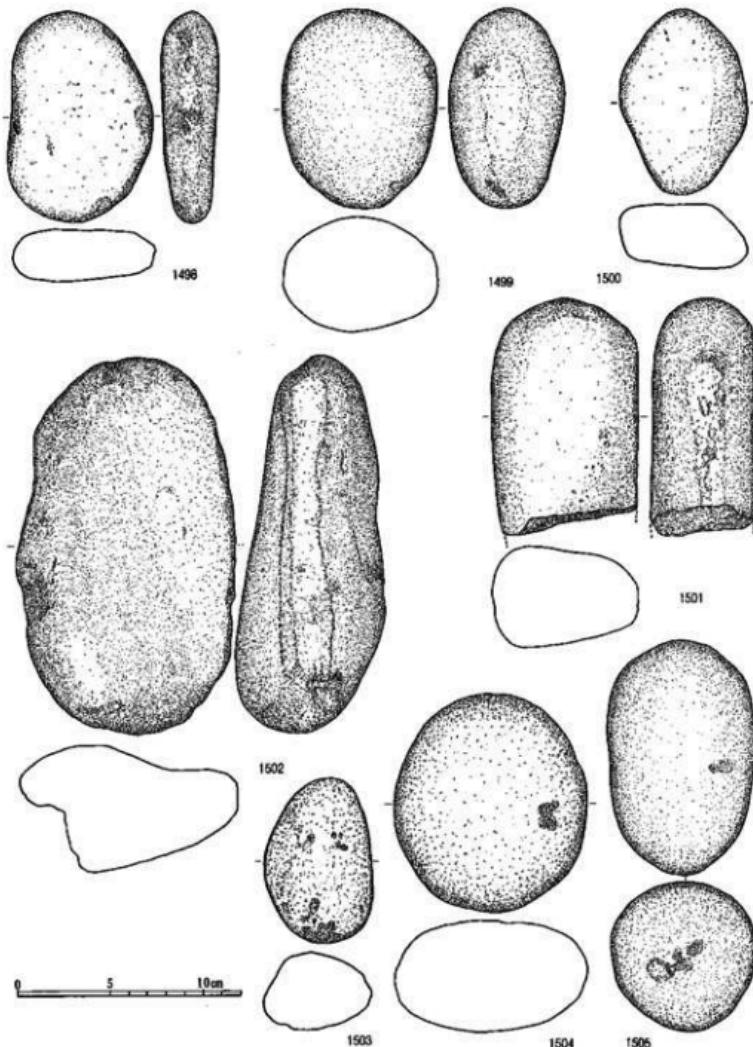
第125図 21号住居址出土の石器 (1/3)

1476: 粘板岩ホルンフェルス 1477-1479~1482: 鋒石角閃石安山岩 1478-1483: 鋒石安山岩



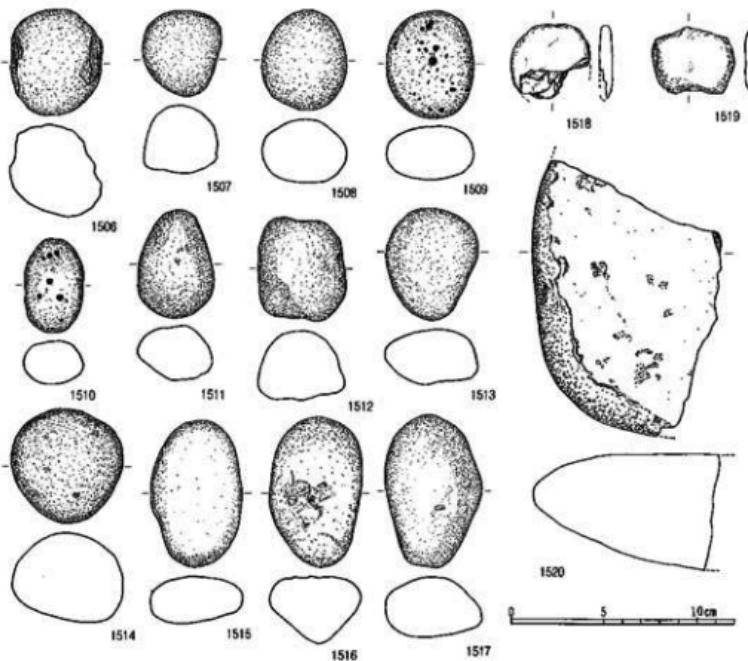
第126図 21号住居址出土の石器 (1/3)

1484~1487・1489~1494・1495:輝石安山岩 1488~1490~1492:輝石角閃石安山岩 1493~1496:輝綠岩 1497:砂岩



第127図 21号住居址出土の石器 (1/3)

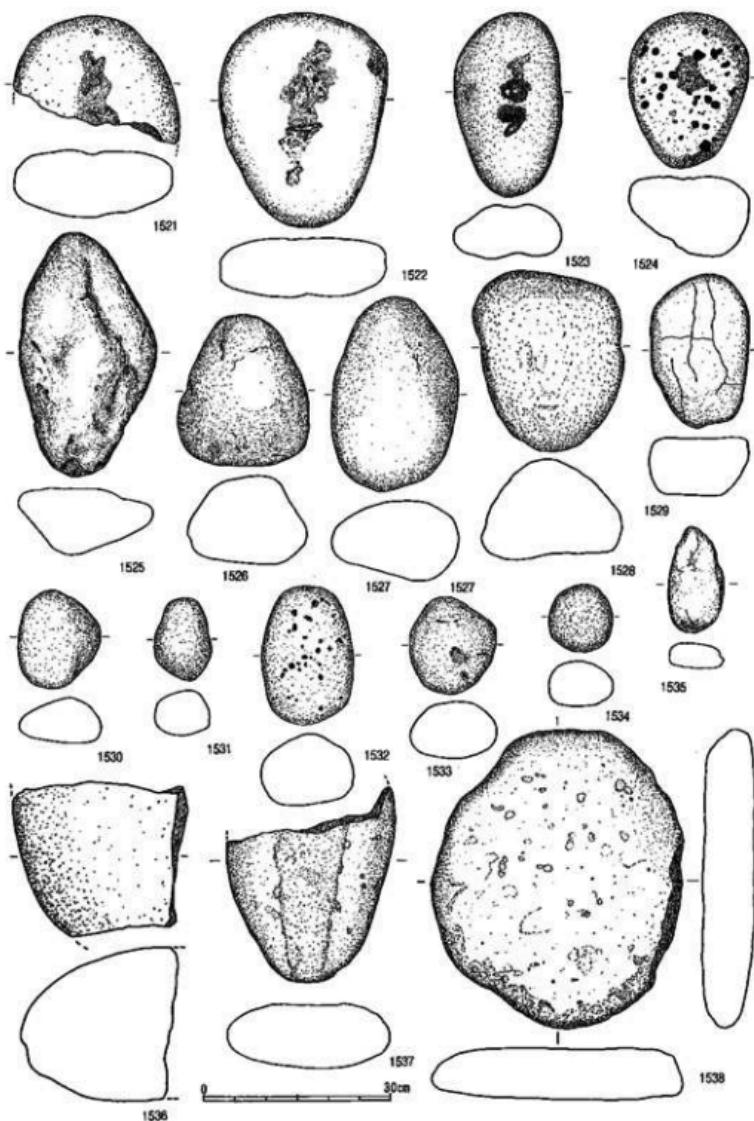
1498・1500・1501・1503～1505：輝石安山岩 1499・1502：輝石角閃石安山岩



第128図 21号住居址出土の石器 (1/3)

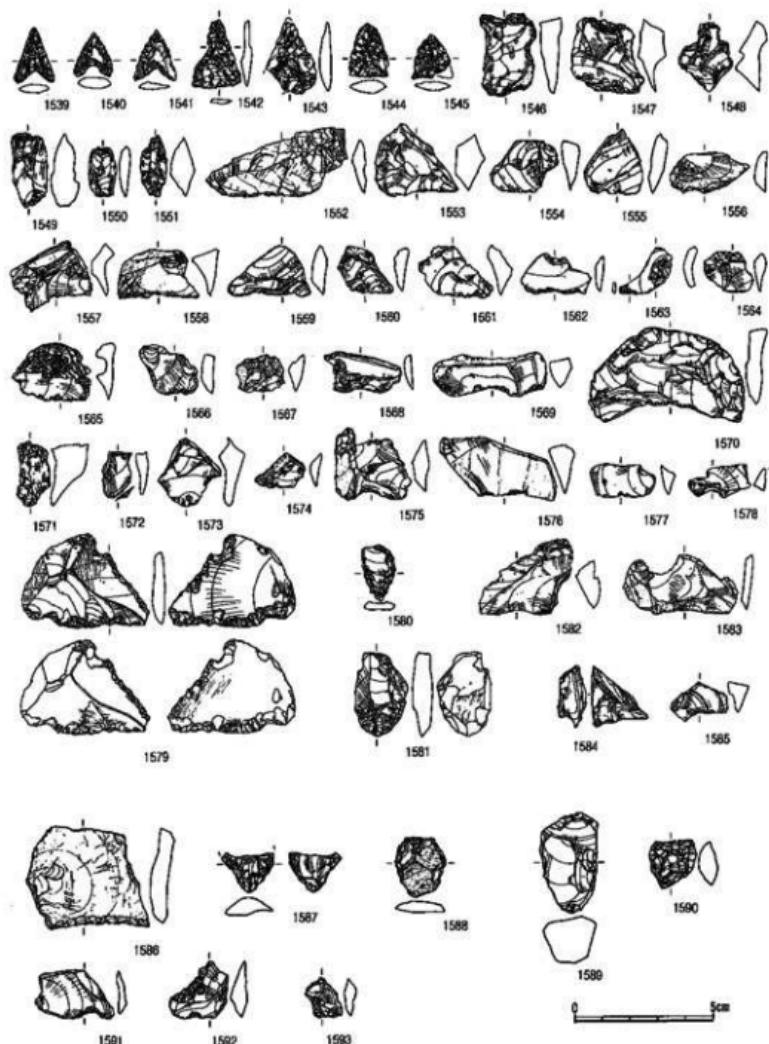
1506～1512・1514：坪石角閃石安山岩 1518・1519：スレート

1513・1515～1517：坪石安山岩 1520：坪隕岩



第129図 22号住居址出土の石器 (1/3 1537・1538:1/9)

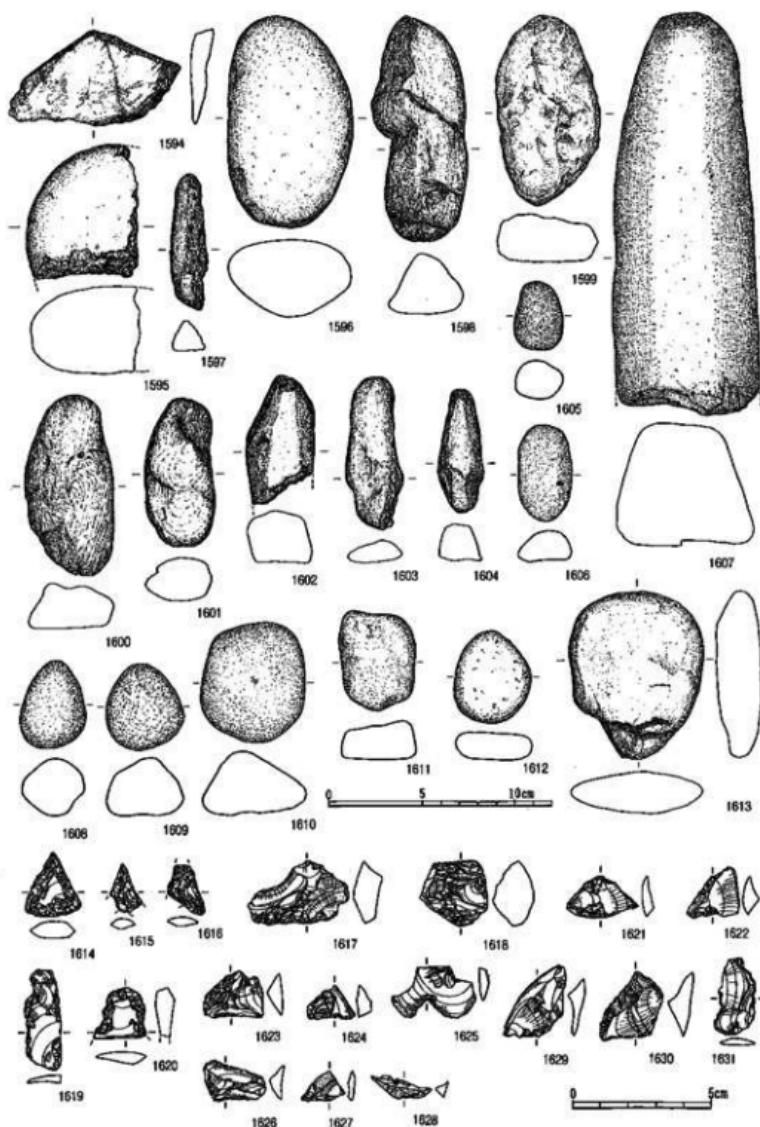
1521～1524・1527・1529・1531・1533・1534・1537・1538:輝石安山岩 1535:粘板岩
1528・1530・1532・1536:輝石角閃石安山岩 1525:硅砂岩 1526:輝綠岩



第130図 21, 22号住居址出土の石器 (1/2)

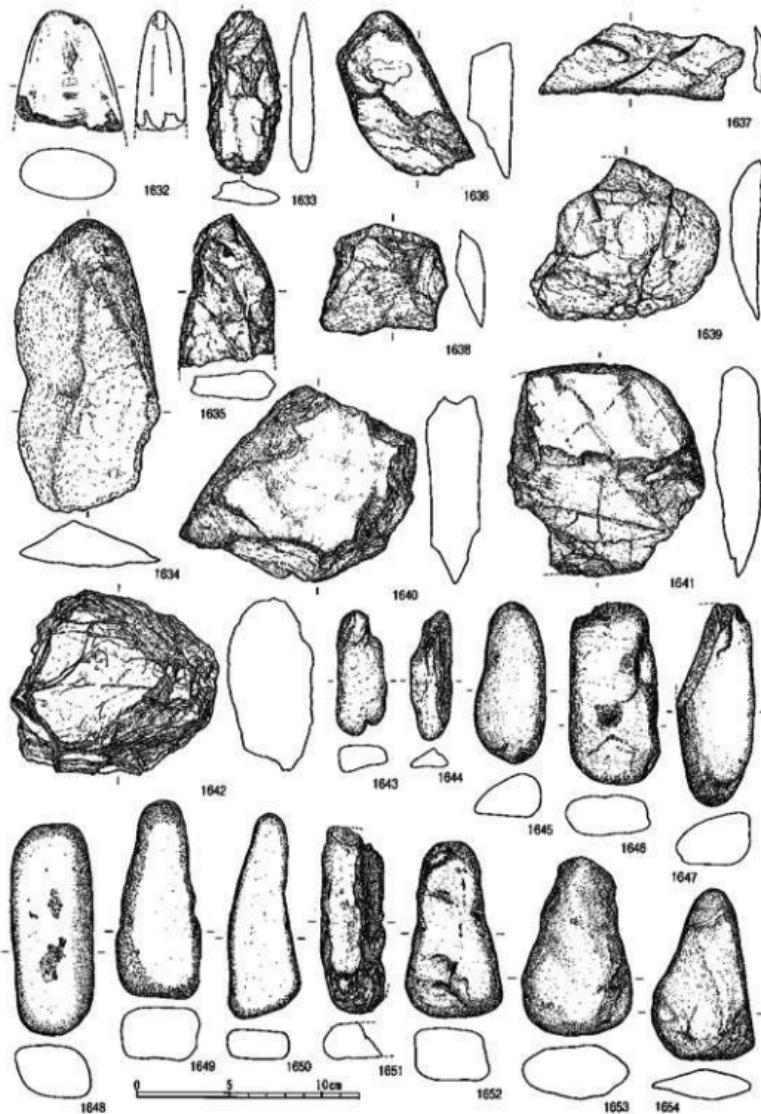
1539~1585 : 21号住居址 1586~1593 : 22号住居址

1539~1551・1553~1585・1587~1593 : 黒曜石 1562~1586 : 達賀貝岩



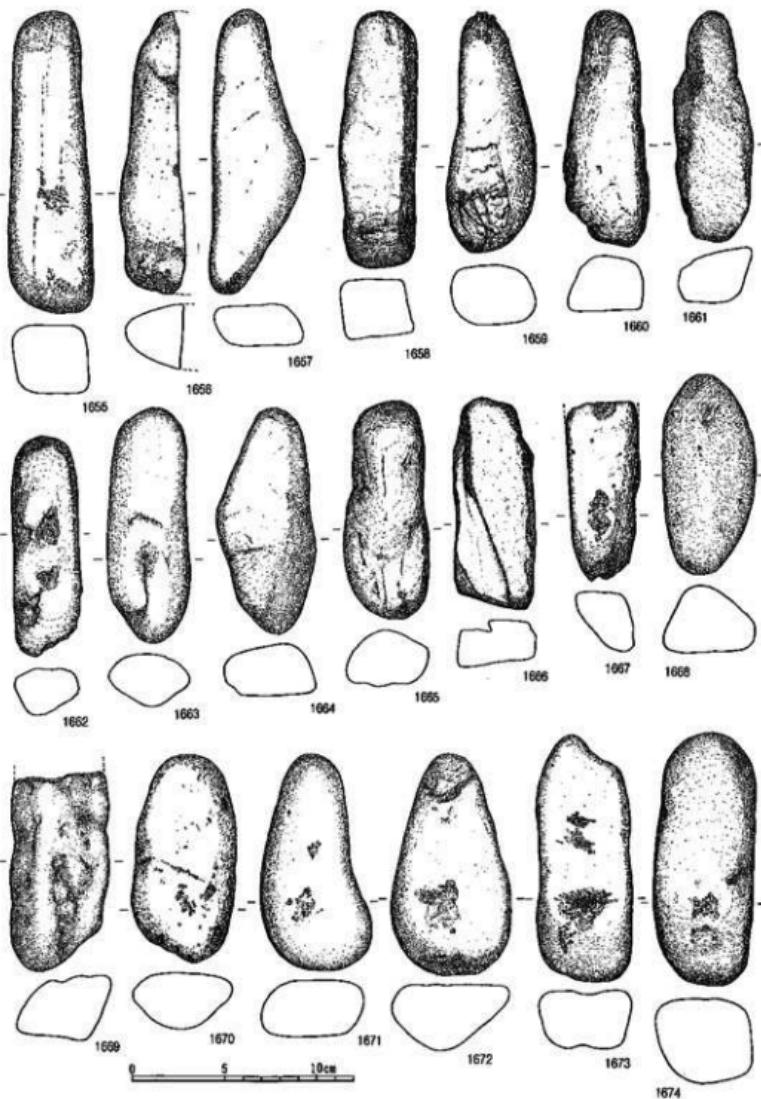
第131図 23号住居址出土の石器 (1/3 1614~1631:1/2)

1594: 粘板岩 1595~1608~1610: 鋸石角閃石安山岩 1597~1600~1602~1603~1613: 硅砂岩 1596~1607: 雜紋岩
1605~1606~1611~1612: 鋸石安山岩 1601: 砂岩 1604: ホルンフェルス 1614~1631: 黒曜岩



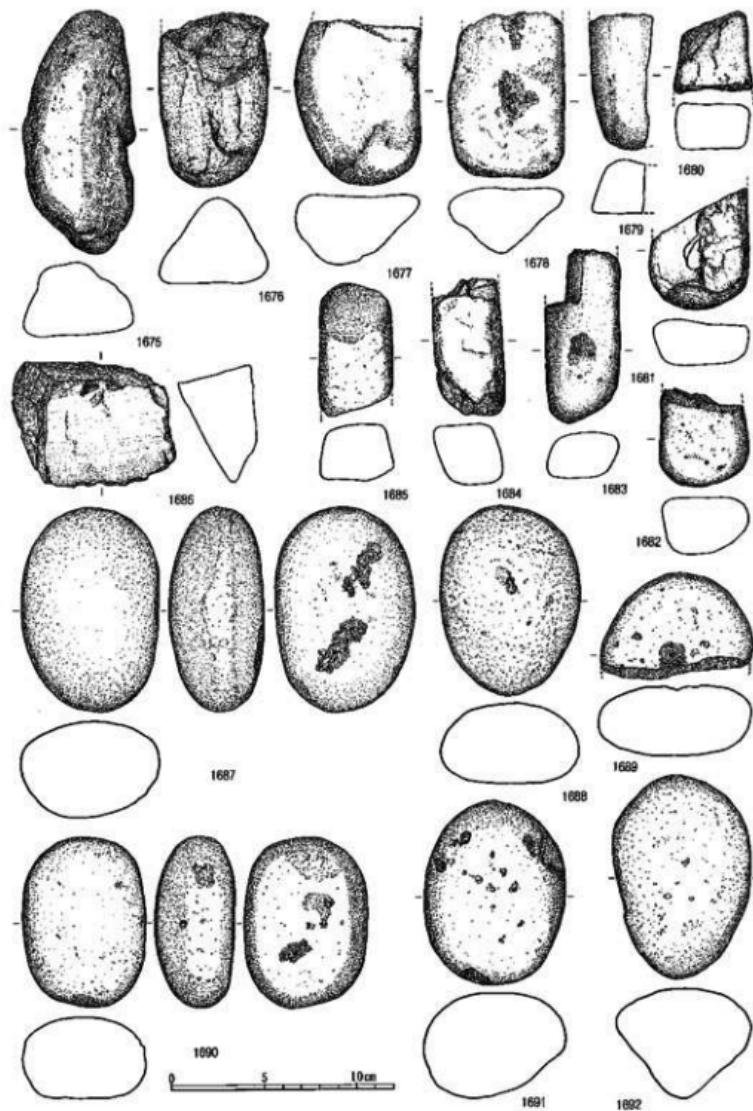
第132図 25号住居址出土の石器 (1/3)

1632: 松紋岩 1633: 緑色岩 1635・1637・1638・1640: 粘板岩ホルンフェルス 1634・1639・1642・1643: 粘板岩
1636・1641・1645～1647・1650・1652・1653: 硬砂岩 1644・1651: 結晶片岩 1648・1649: 輝緑岩 1654: 硬砂岩質砂岩



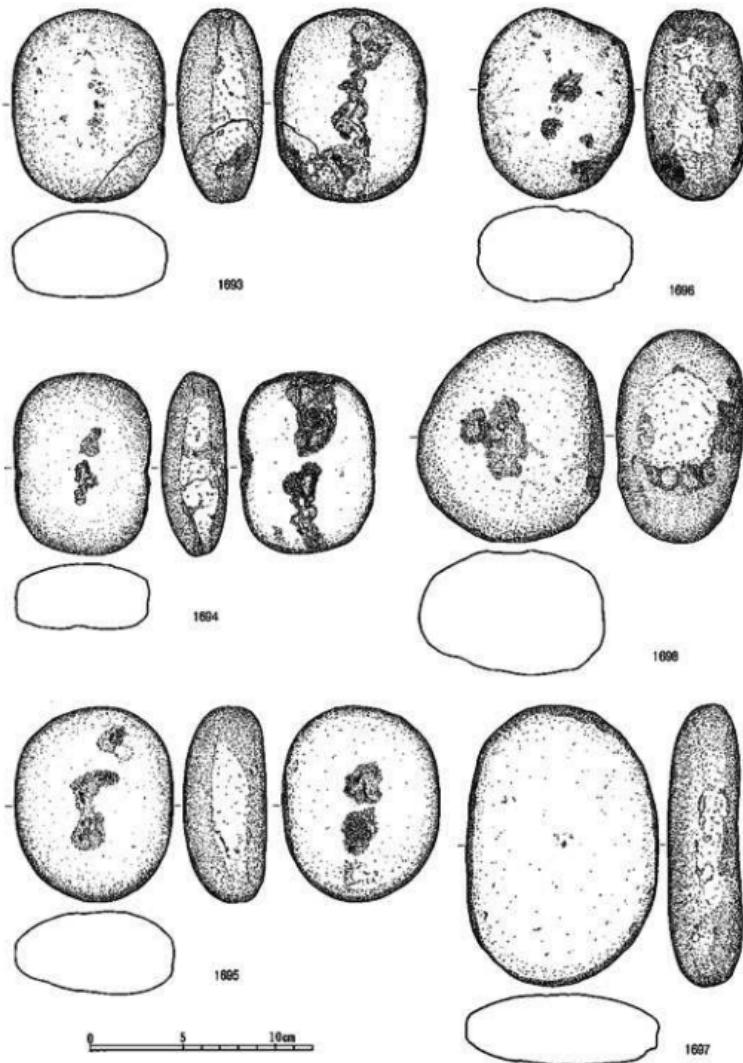
第133図 25号住居址出土の石器 (1/3)

1655・1670～1674：輝緑岩 1656～1667：硬砂岩 1668・1669：輝石角閃石安山岩



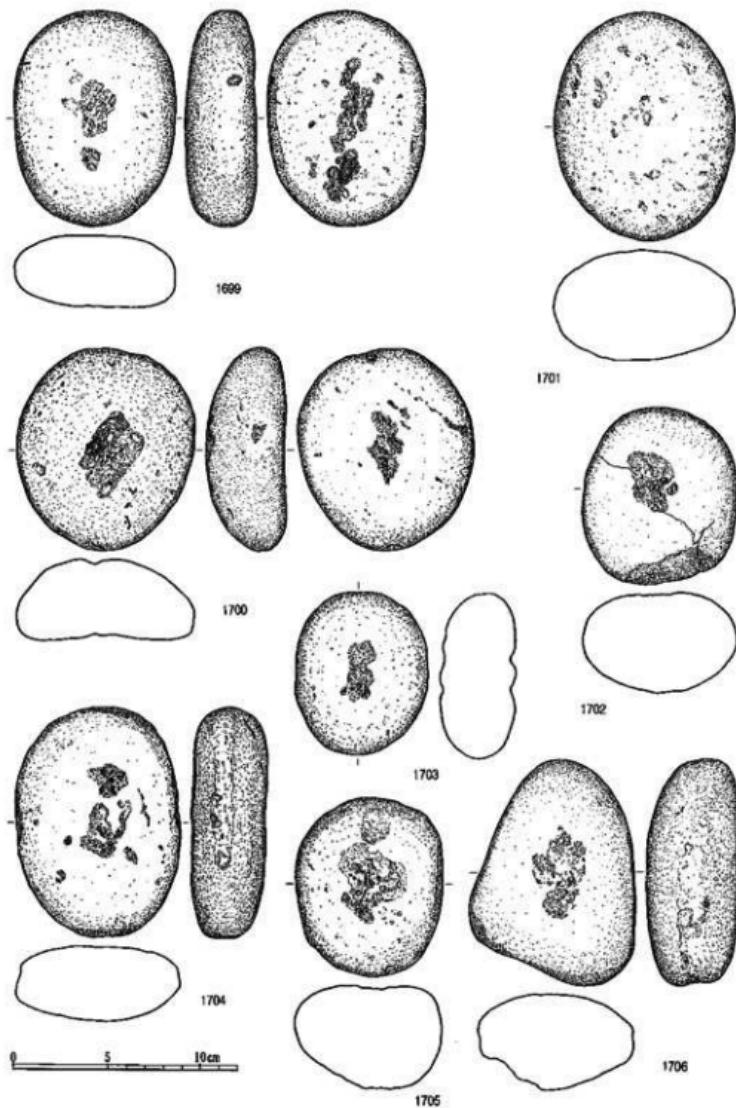
第134図 25号住居址出土の石器 (1/3)

1675: 石英岩
1676-1680-1685-1686: 硅砂岩
1677-1679-1683: 繊維岩
1678-1687-1690: 鋸石角閃石安山岩
1681-1684: 粘板岩
1682-1688-1689-1691-1692: 鋸石安山岩



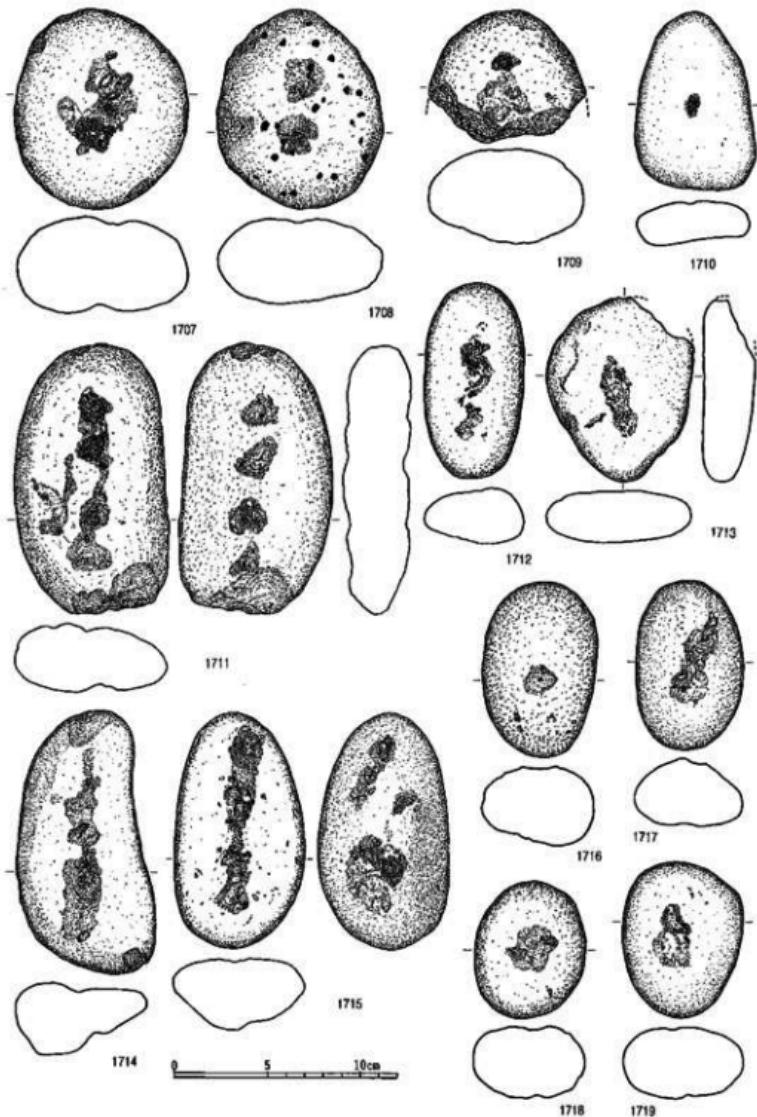
第135図 25号住居址出土の石器 (1/3)

1693~1697: 鹿石角閃石安山岩 1698: 鹿石安山岩



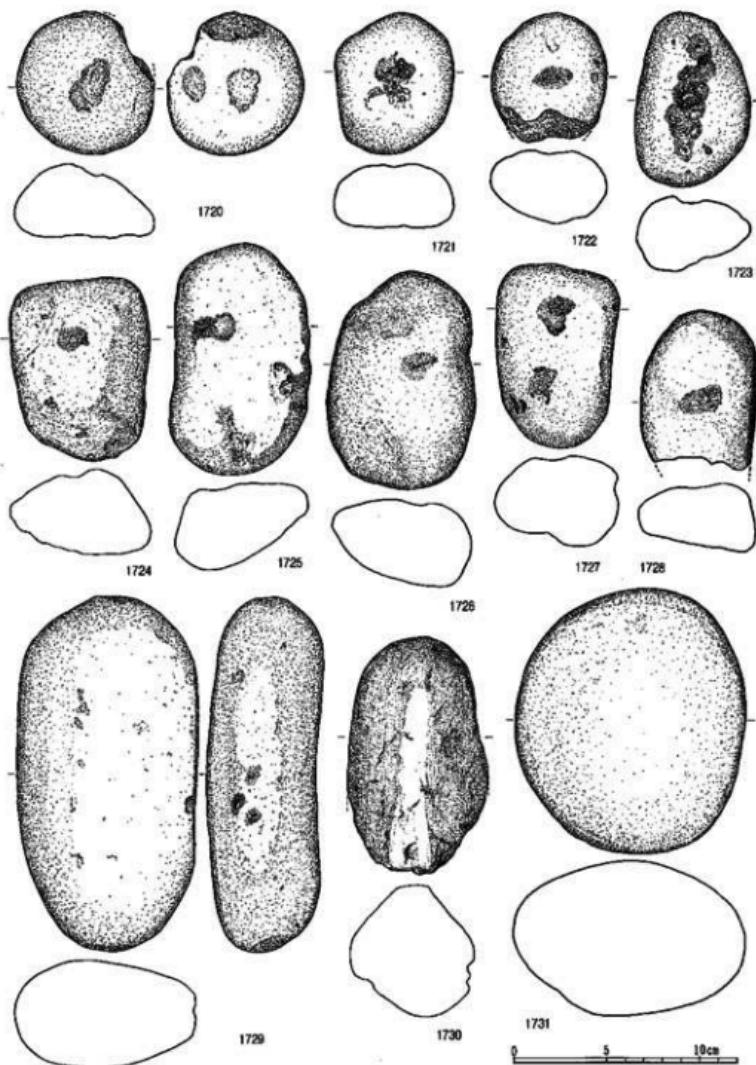
第136図 25号住居址出土の石器 (1/3)

1699-1700-1702-1705：岸石角閃石安山岩 1701-1703-1704-1706：輝石安山岩



第137図 25号住居址出土の石器 (1/3)

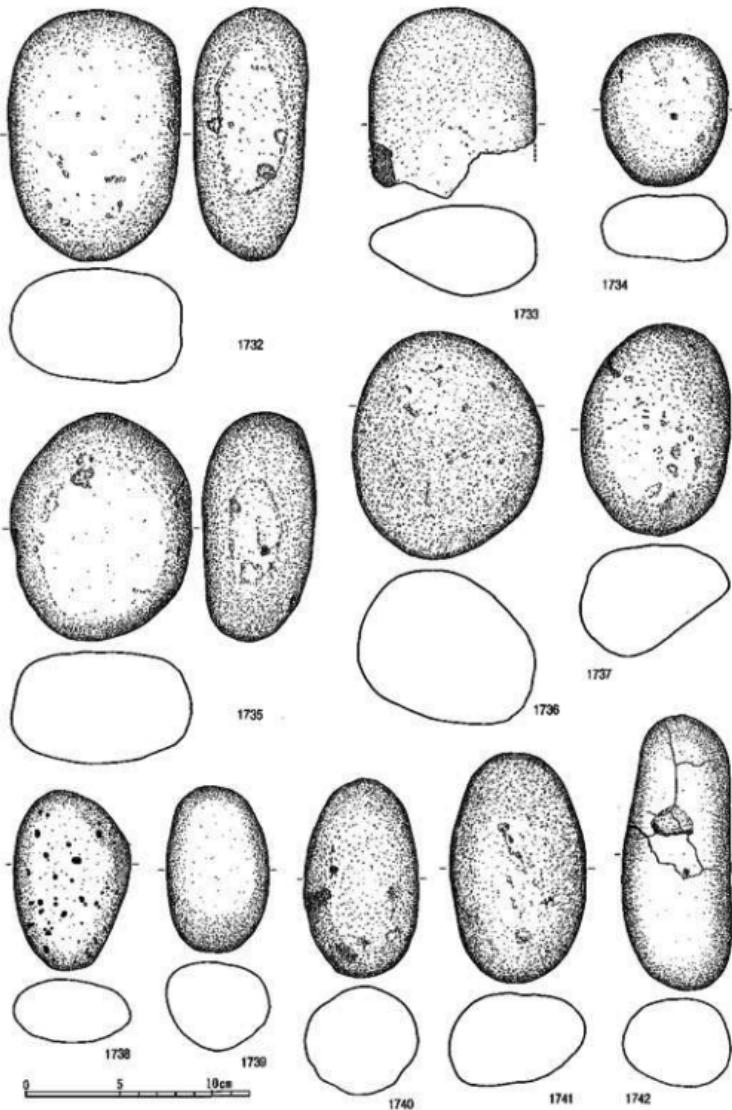
1710・1713・1714・1716・1717・1719：輝石安山岩 1707～1709・1711・1712・1715・1718：輝石角閃石安山岩



第138図 25号住居址出土の石器 (1/2)

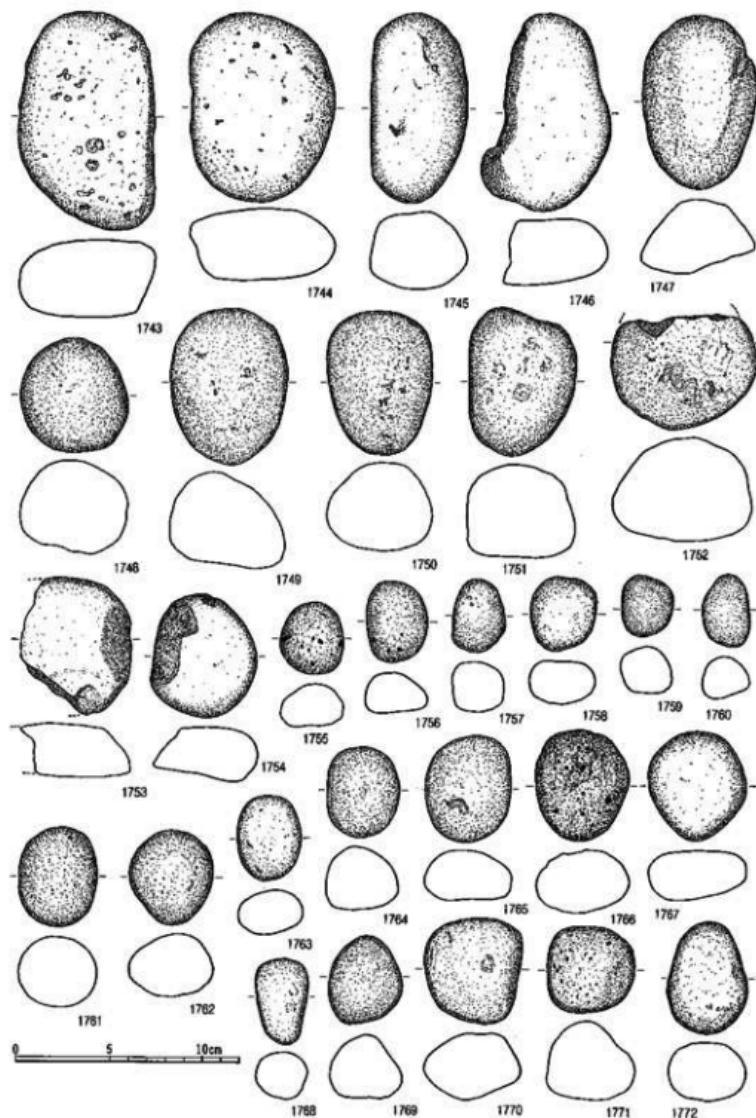
1720・1721・1723・1727・1729・1731: 岩石安山岩 1730: 破砂岩

1722・1724～1726: 岩石角閃石安山岩 1728: 鮫綠岩



第139図 25号住居址出土の石器 (1/3)

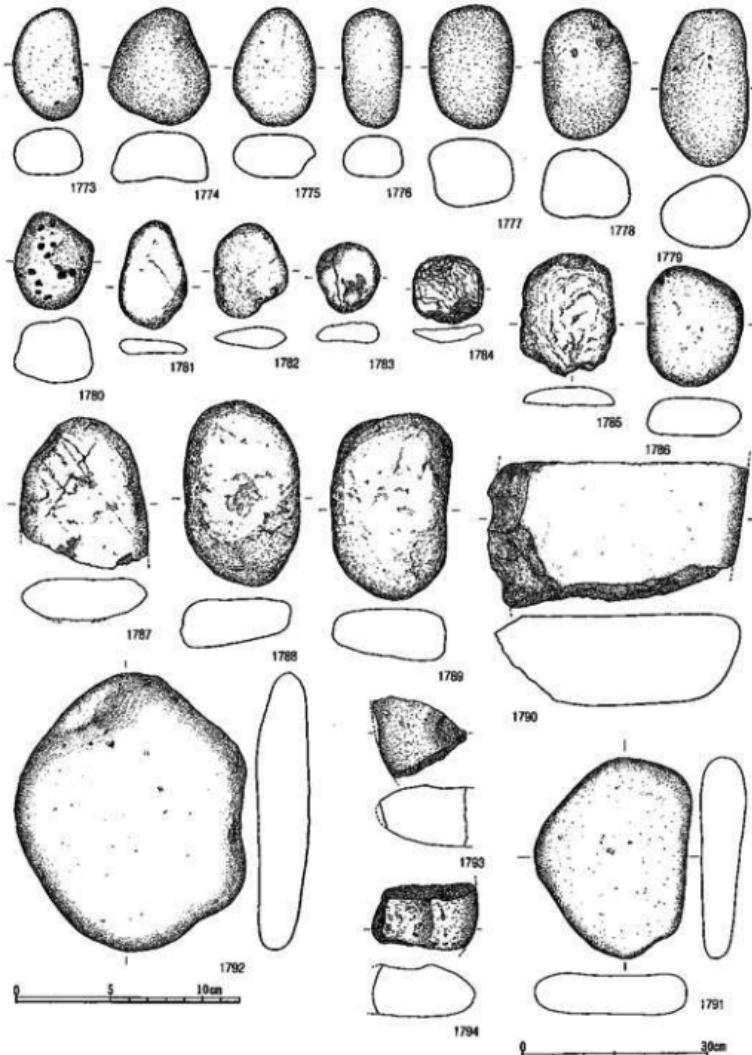
1732・1735・1737～1740・1742：輝石角閃石安山岩 1733・1734・1736・1741：輝石安山岩



第140図 25号住居址出土の石器 (1/3)

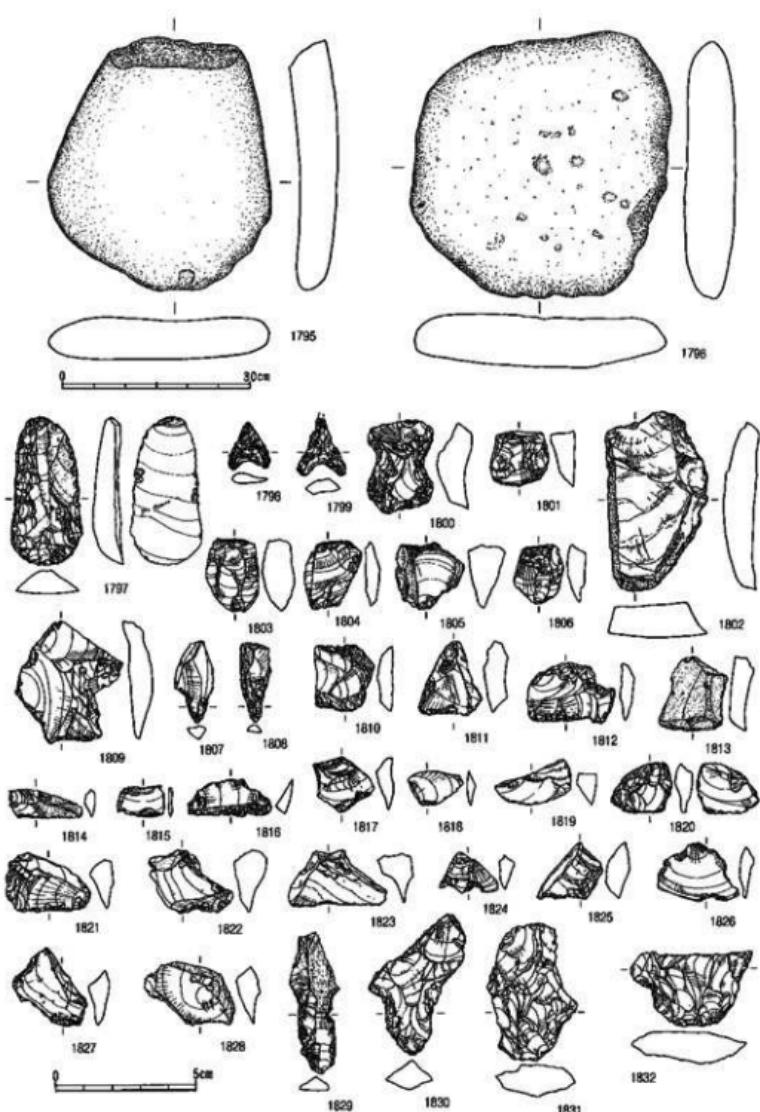
1743~1746·1748~1750·1754·1757·1760~1762·1764·1766·1767: 鮫石安山岩
1747·1751~1753·1755·1756·1758·1763·1765·1768~1772: 雄石角閃石安山岩

1759: 硅砂岩質砂岩



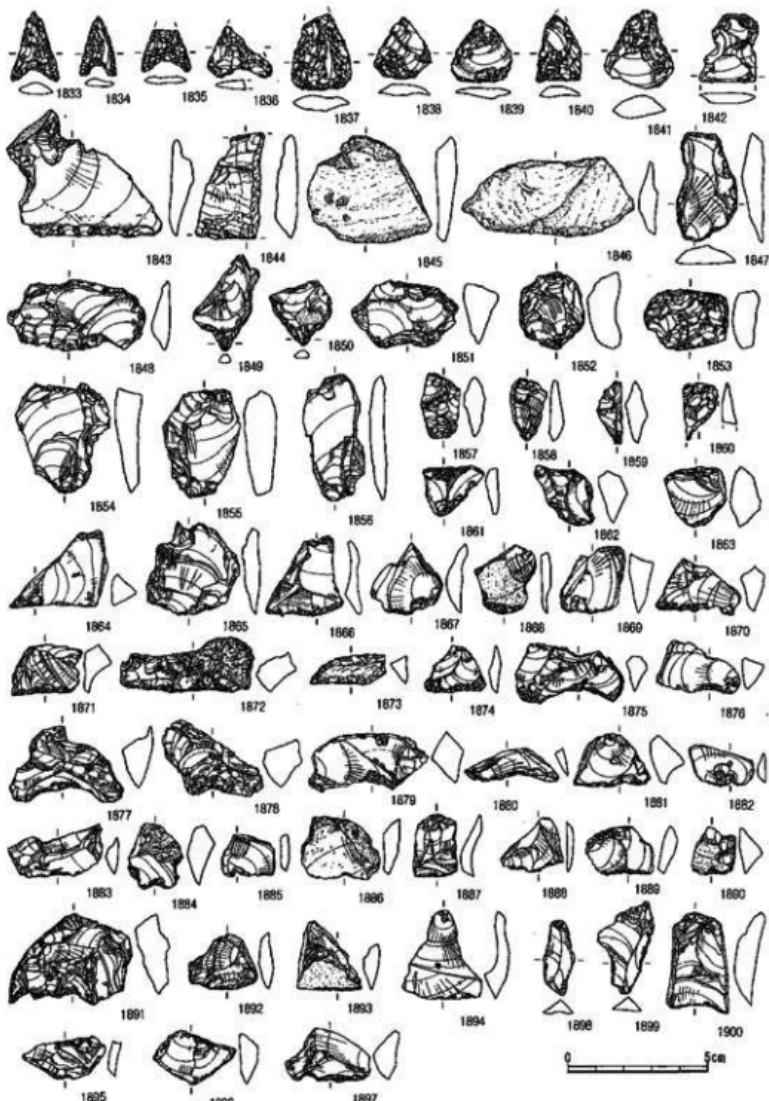
第141図 25号住居址出土の石器 (1/3 1791-1793・1794: 1/9)

1773-1776-1778-1780-1793: 離石安山岩 1774-1775-1794: 離石角閃石安山岩
 1779-1786-1790-1792: 斧綠岩 1781-1788: 粘板岩 1782-1784: 結晶片岩
 1783: 硅砂岩 1785: スレート 1787: 線兆片岩 1789: 粘板岩スレート



第142図 25号住居址出土の石器 (1795-1796:1/9 1797~1832:1/2)

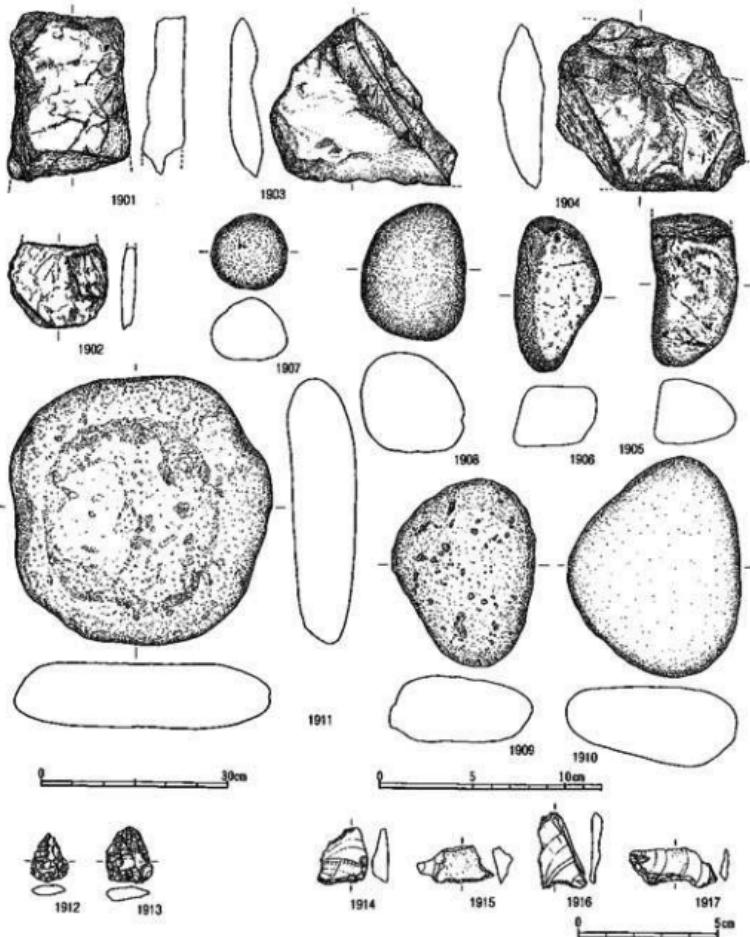
1795:輝緑岩 1796:輝石安山岩 1797-1802-1830:珪質頁岩 1798-1801-1803-1829-1831-1832:黒曜石



第143図 25号住居址出土の石器 (1/2)

1833~1843·1847~1872·1874~1900: 黒曜石 1844~1873: 珪質頁岩

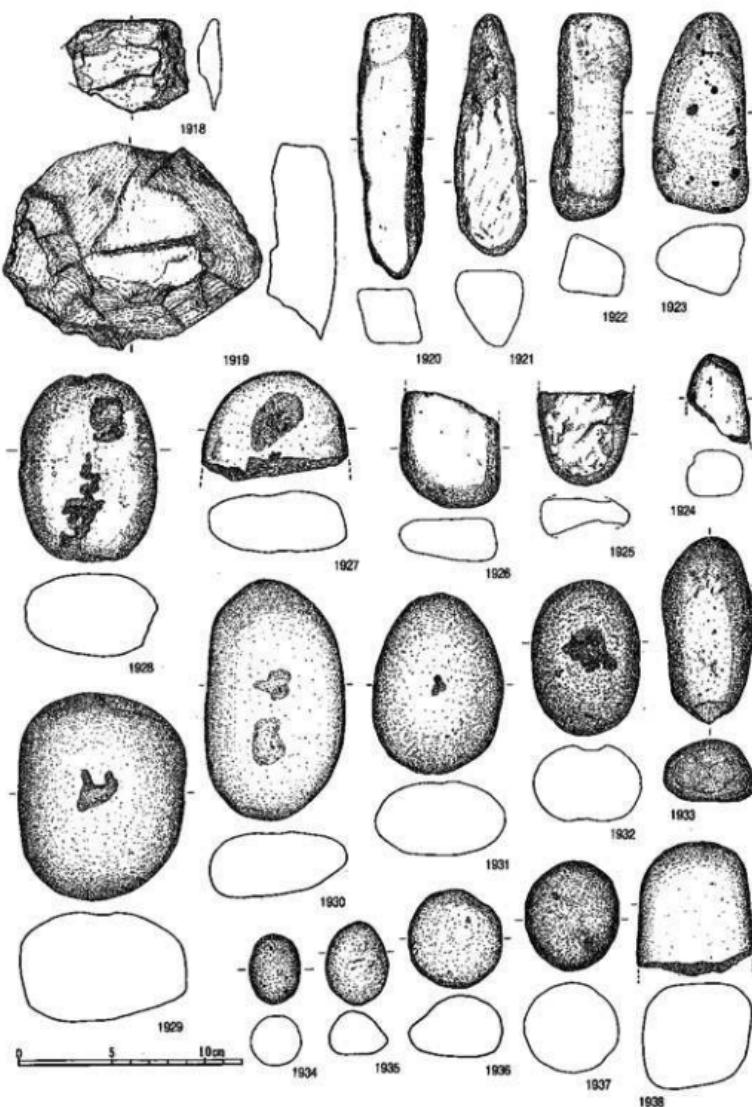
1845·1846: ホルンフェルス



第144図 26号住居址出土の石器 (1/3 1911:1/9 1912~1917:1/2)

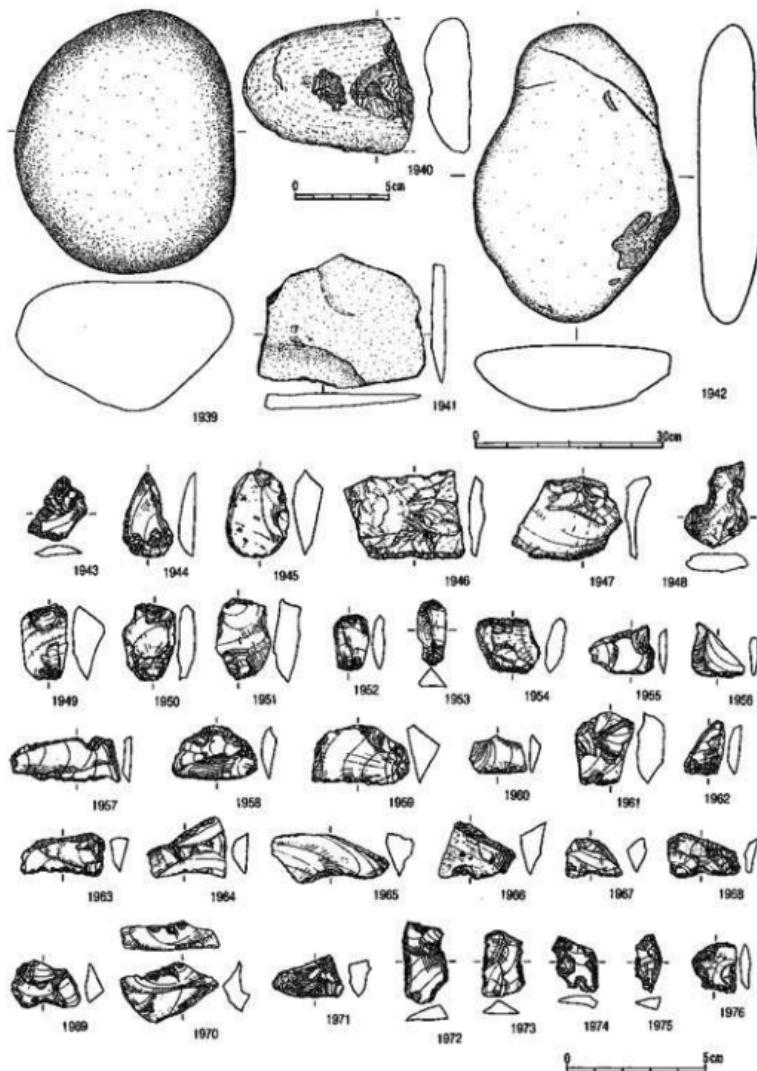
1901~1904~1905: 硬砂岩 1906~1910: 半斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 1902: 粘板岩

1903: 粘板岩ホルンフェルス 1911: 輝石角閃石安山岩 1912~1917: 黒曜石



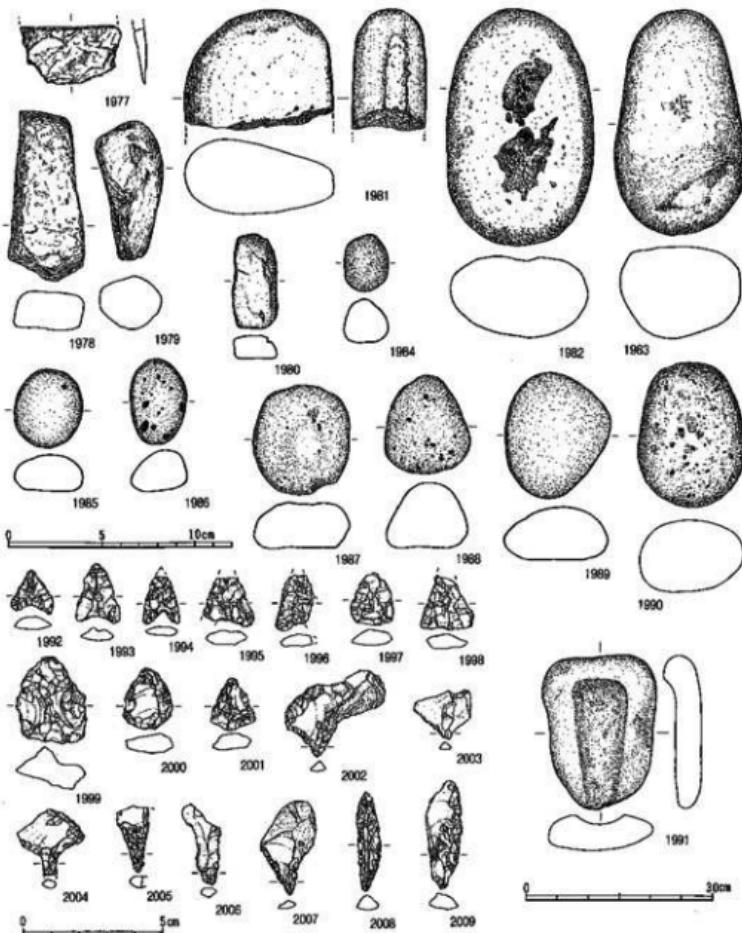
第145図 27号住居址出土の石器 (1/3)

1918: 粘板岩 1919: ホルンフェルス 1920-1924-1926-1935: 硬砂岩
 1923-1927-1932-1934-1937-1938: 单斜輝石斜方輝石角閃石安山岩
 1921: 硬砂岩質砂岩 1922-1925: 輝綠岩 1933-1936: 角閃石安山岩



第146図 27号住居址出土の石器 (1939-1940:1/3 1941-1942:1/9 1943-1976:1/2)

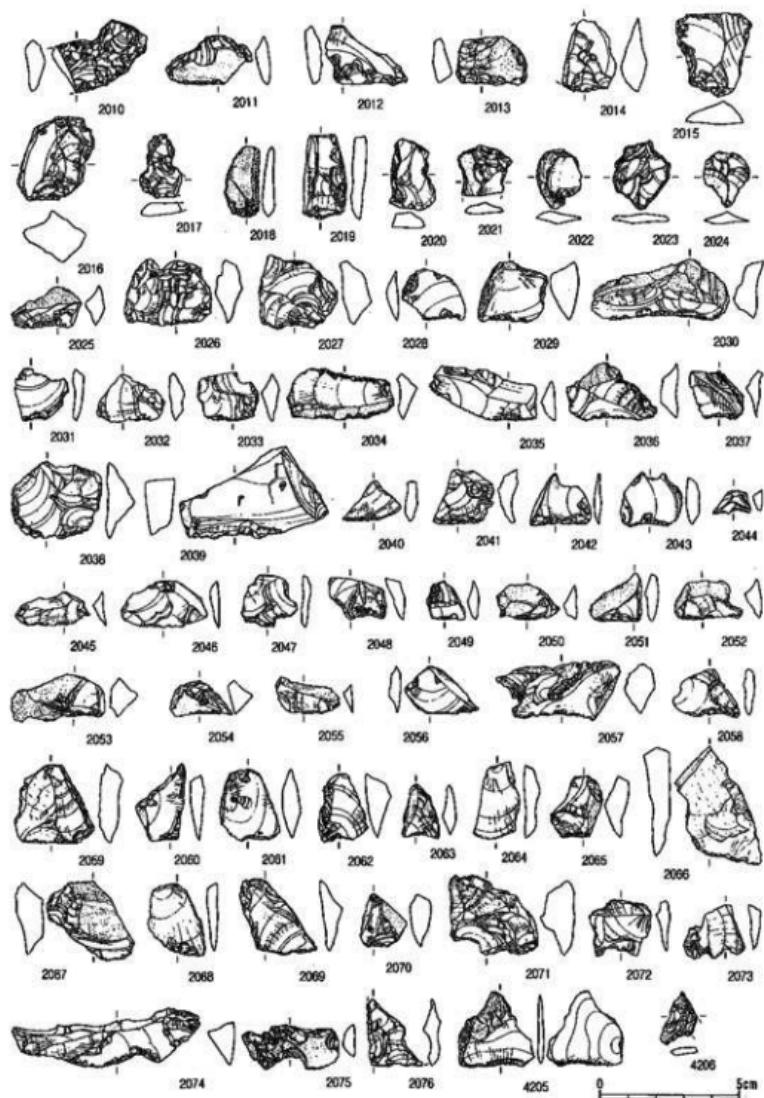
1939: 卵斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 1940: 硬砂岩 1941: 花崗輝石普通輝石安山岩
1942: 輝緑岩 1943~1945~1947~1976: 黒曜石 1946: 珠貝質岩



第147図 28・29号住居址出土の石器 (1/3 1991:1/9 1992~2009:1/2)

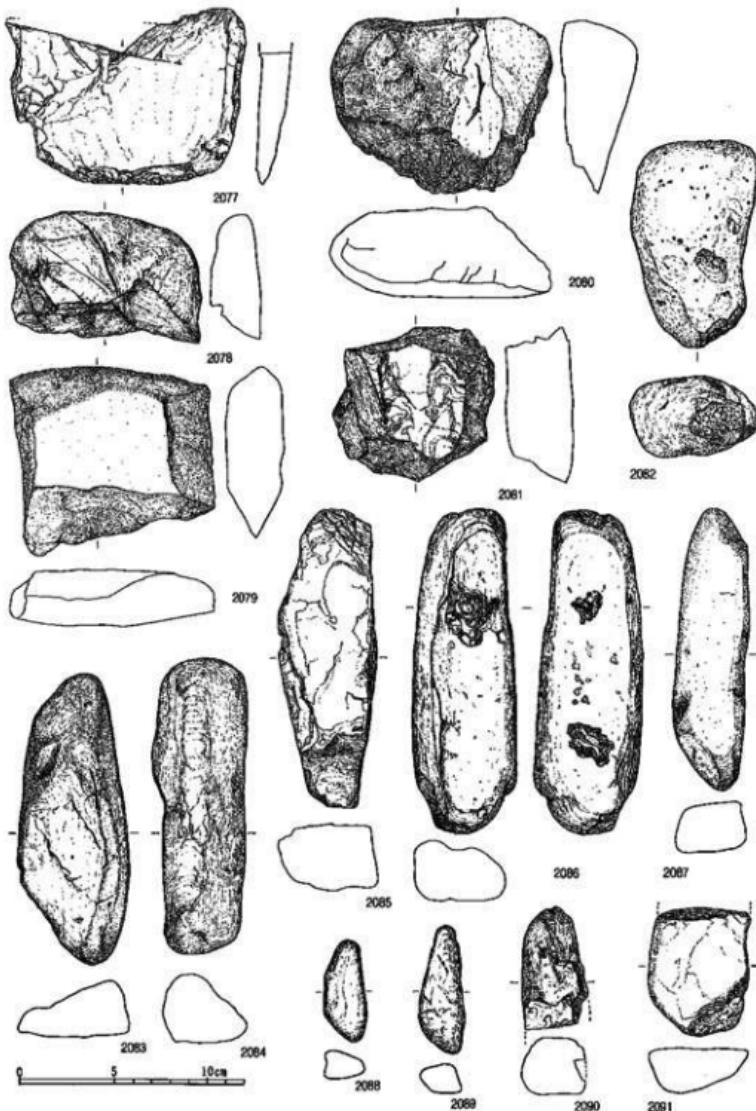
1977~1990·1992~2009: 28号住居址 1991: 29号住居址

1977~1978: 粘板岩ホルンフェルス 1979: 粘板岩 1980: 砂岩 1981~1983·1990: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩
1984~1988·1991: 麻石角闪石安山岩 1989: 麻石安山岩 1992~2009: 黑曜石



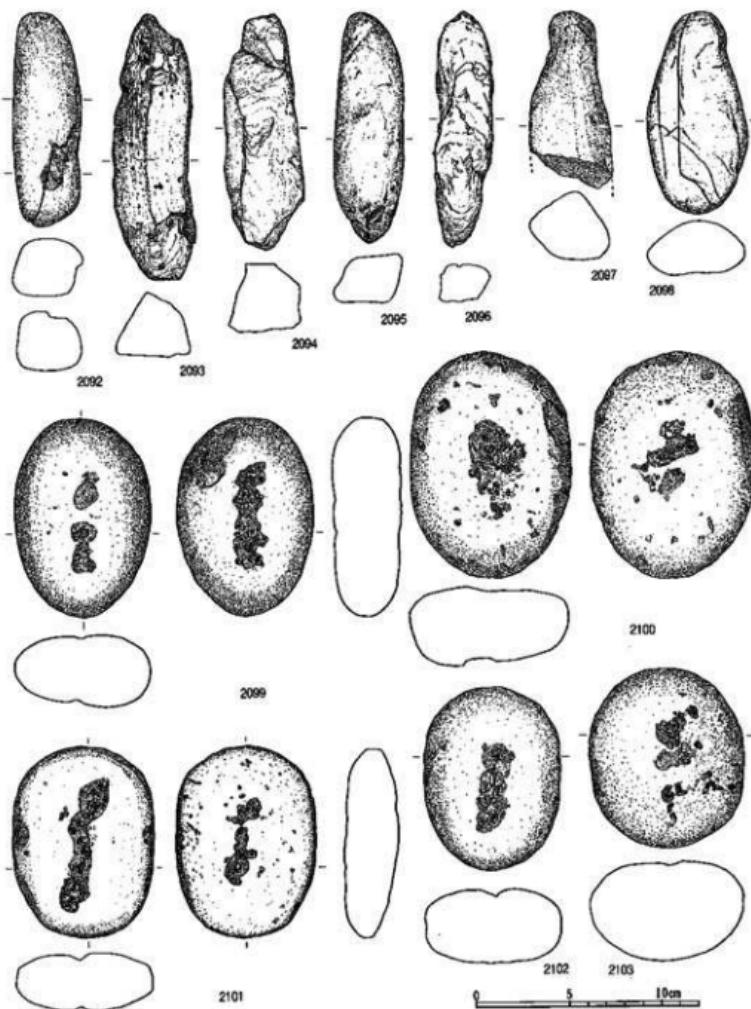
第148図 28号住居址出土の石器 (1/2)

2010~2065・2067~2076・4205~4206: 黒曜石 2066: チヤート



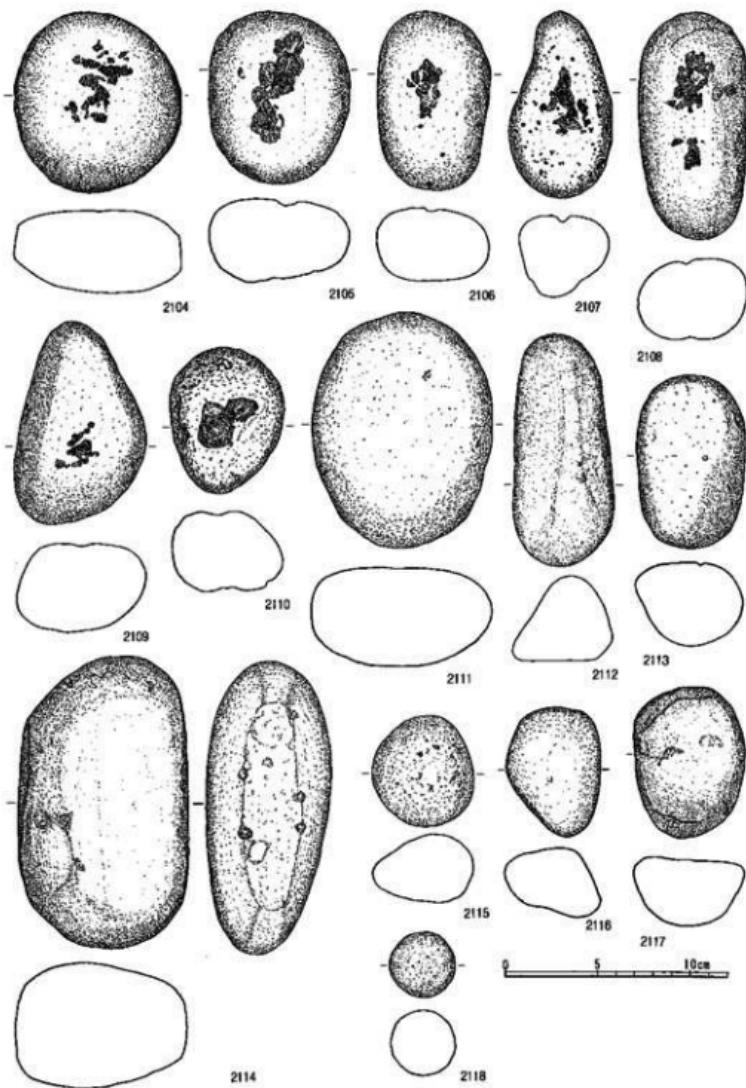
第149図 30号住居址出土の石器 (1/3)

2077-2079-2080-2083-2085-2088~2091: 硬砂岩 2078: 砂岩ホルンフェルス 2081: 粘板岩ホルンフェルス
2082: 厚石角閃石安山岩 2084: 砂岩 2086: 砂岩質硬砂岩 2087: 鞍綠岩



第150図 30号住居址出土の石器 (1/3)

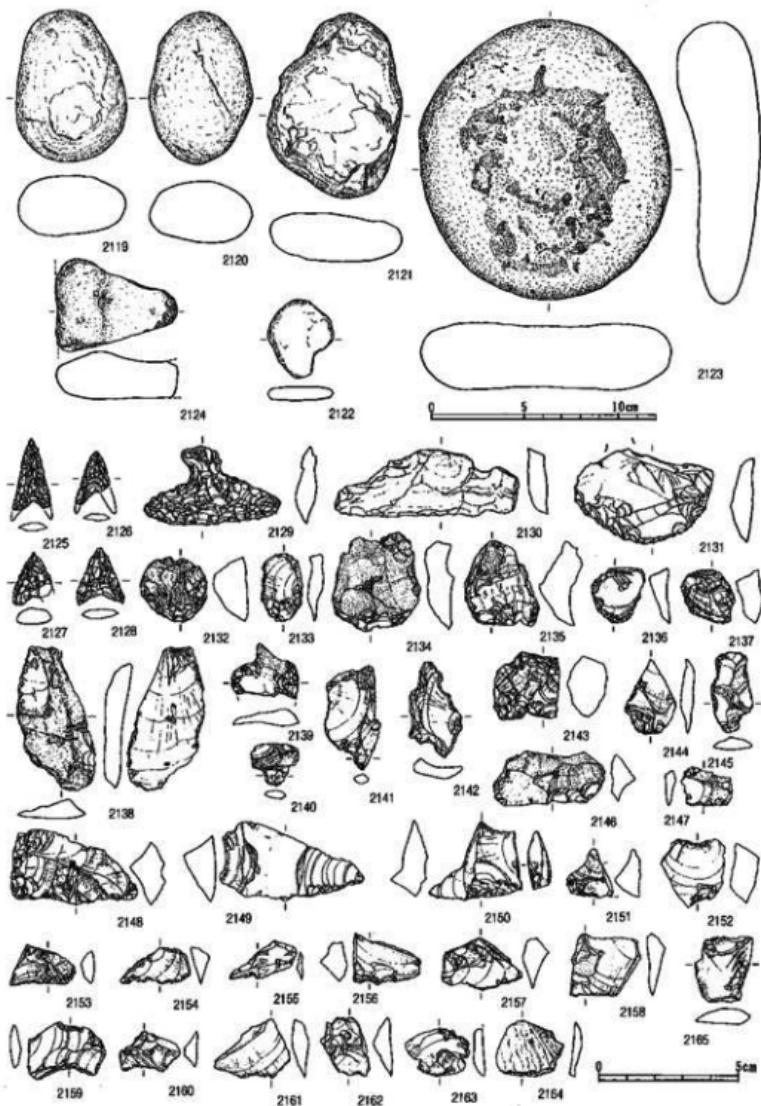
2095-2098: 砂岩
2093-2100-2103: 麻石角閃石安山岩
2092: 砂岩
2096: 粘板岩
2097: 麻綠岩
2099: 麻石安山岩



第151図 30号住居址出土の石器 (1/3)

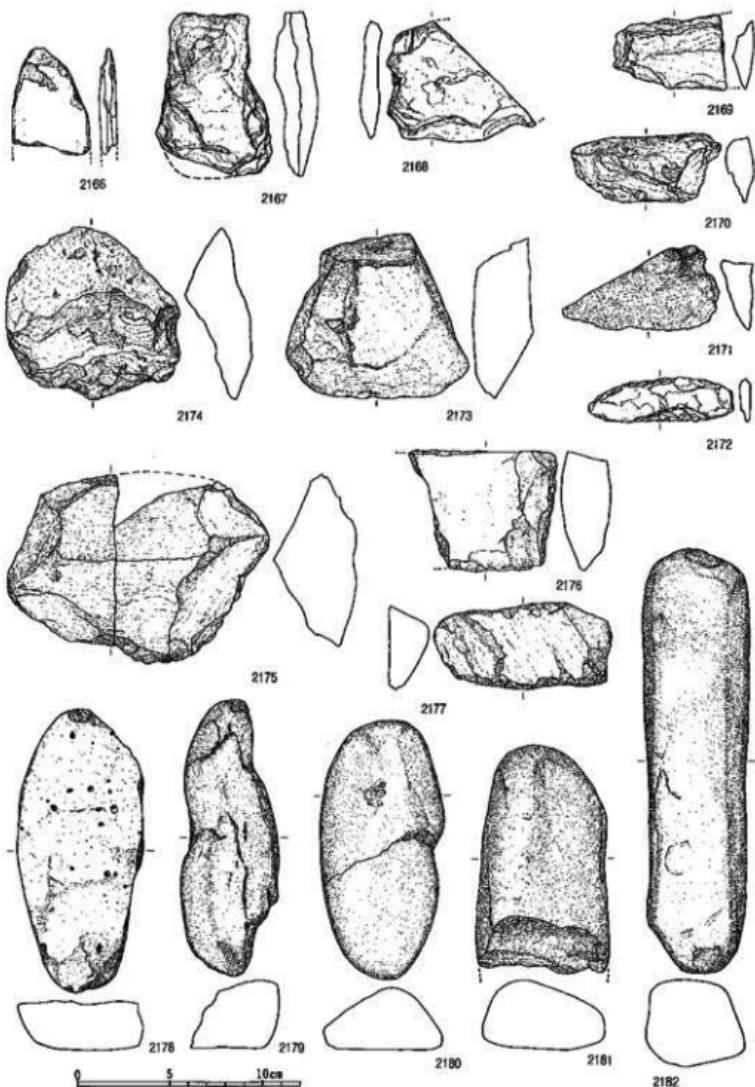
2104・2106・2108・2113～2115・2117・2118：輝石安山岩 2112：輝緑岩

2105・2107・2109～2111・2116：輝石角閃石安山岩



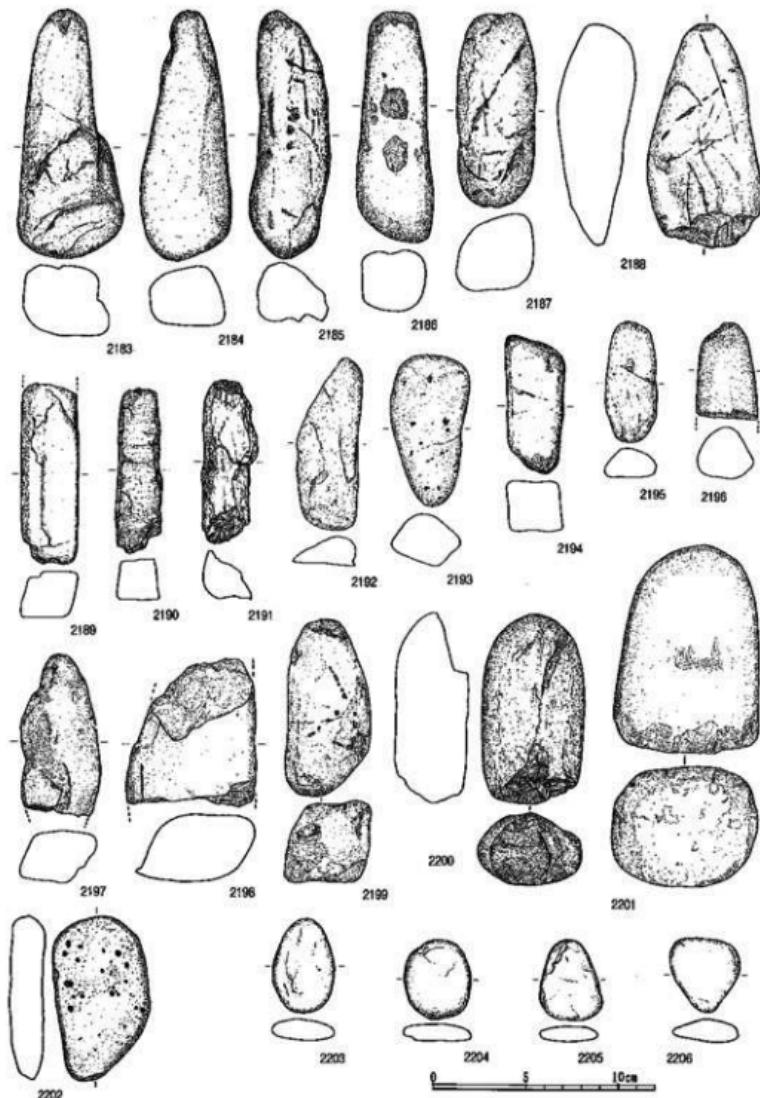
第152図 30号住居址出土の石器 (2119~2123: 1/3 2124: 1/6 2125~2165: 1/2)

2119~2120: 硬砂岩 2123~2124: 鮫石角閃石安山岩 2121: 粘板岩質砂岩 2122: スレート 2124: 水晶
2125~2128・2132~2163・2165: 黒曜石 2129: チャート 2130: 白岩 2131: 珪質白岩



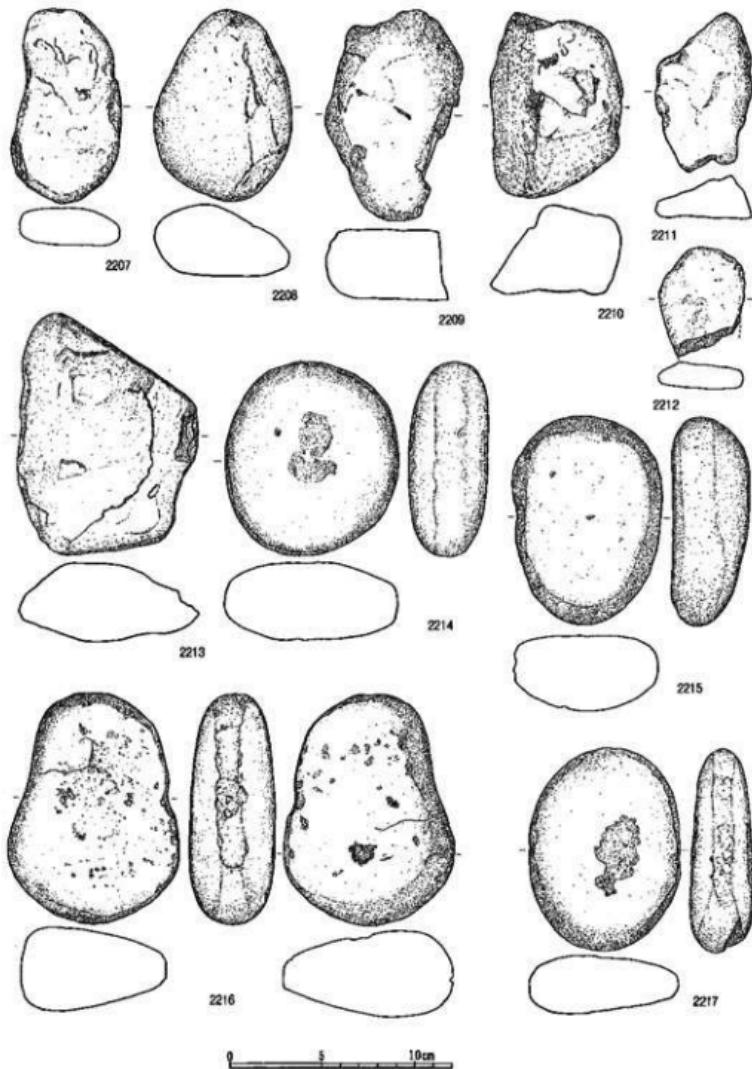
第153図 31号住居址出土の石器 (1/3)

2166: 緑色片岩 2167-2168-2171: 粘板岩ホルンフェルス 2169: 粘板岩 2170: 硬砂岩質砂岩
 2173-2176: ホルンフェルス 2177-2179-2181: 硬砂岩 2172: スレート 2174: 鋸齒鋸緑色岩
 2175-2182: 砂岩質粘板岩 2178: 碧石角閃石安山岩 2180: 磁綠岩



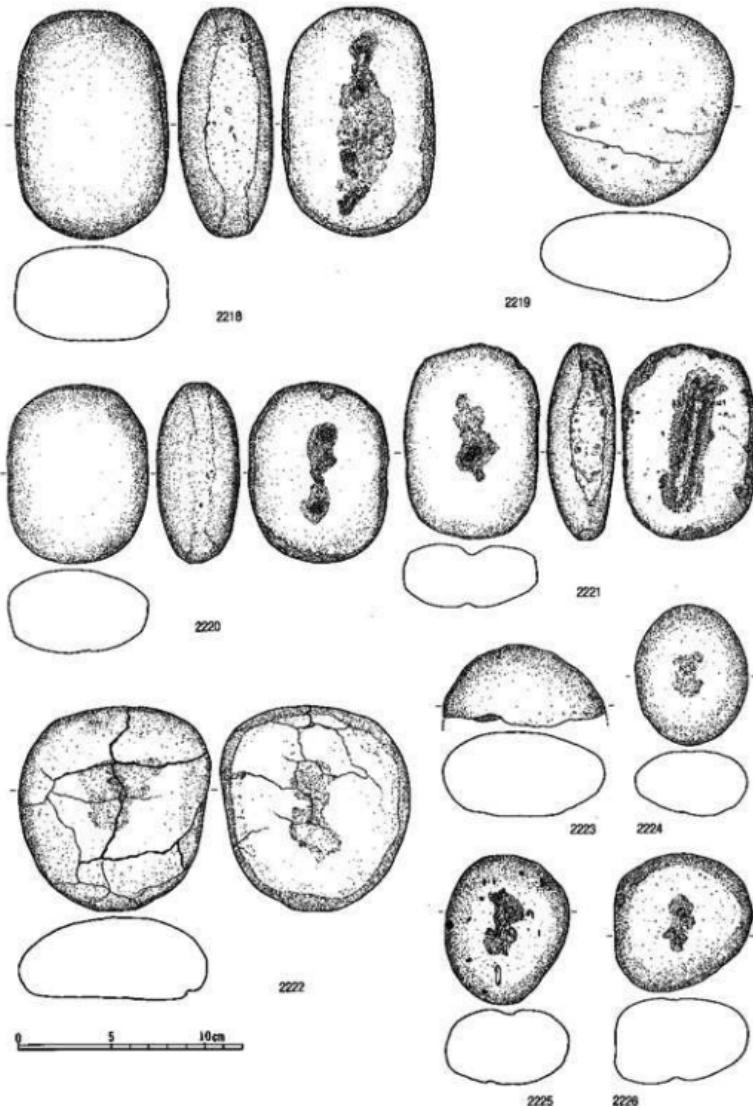
第154図 31号住居址出土の石器 (1/3)

2183-2185-2188-2190-2192-2194-2195-2198-2199: 硅砂岩 2184-2189-2201: 麻縄岩
2193-2196-2202: 岩角閃石安山岩 2203-2206: スレート 2191: 千枚岩
2197: 砂岩 2200: 砂岩質硅砂岩



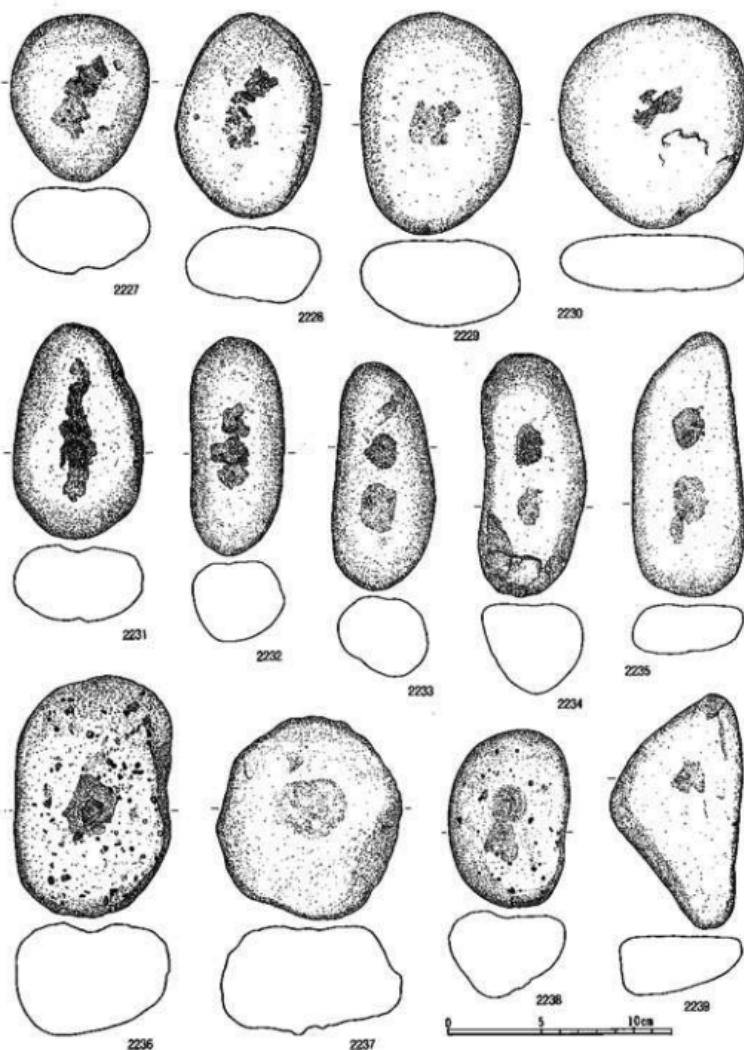
第155図 31号住居址出土の石器 (1/3)

2207: 粘板岩 2208~2212: 硬砂岩 2214~2215~2217: 厚石安山岩 2216: 厚石角閃石安山岩
2213: ホルンフェルス



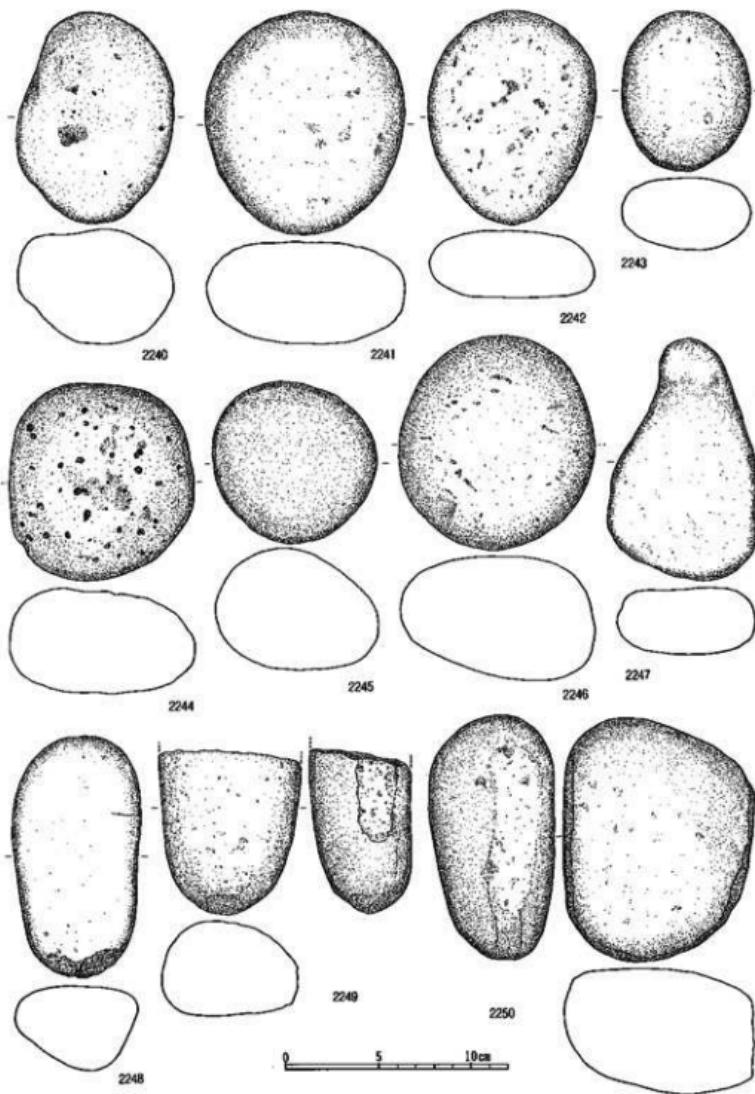
第156図 31号住居址出土の石器 (1/3)

2218・2223・2224：毬石安山岩 2219～2222・2225・2226：摩石角閃石安山岩



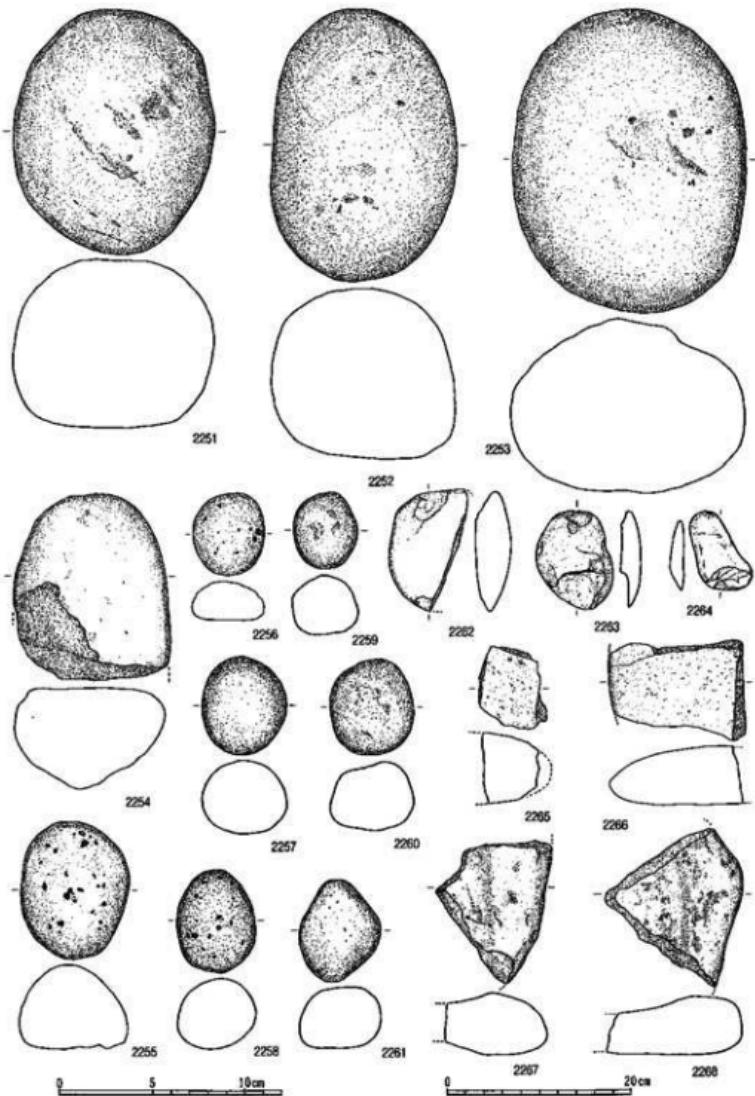
第157図 31号住居址出土の石器 (1/3)

2227-2228・2232・2236・2237：坪石角閃石安山岩 2229-2231・2233-2236-2238：坪石安山岩
2234-2235-2239：坪綠岩 2230：輕砂岩



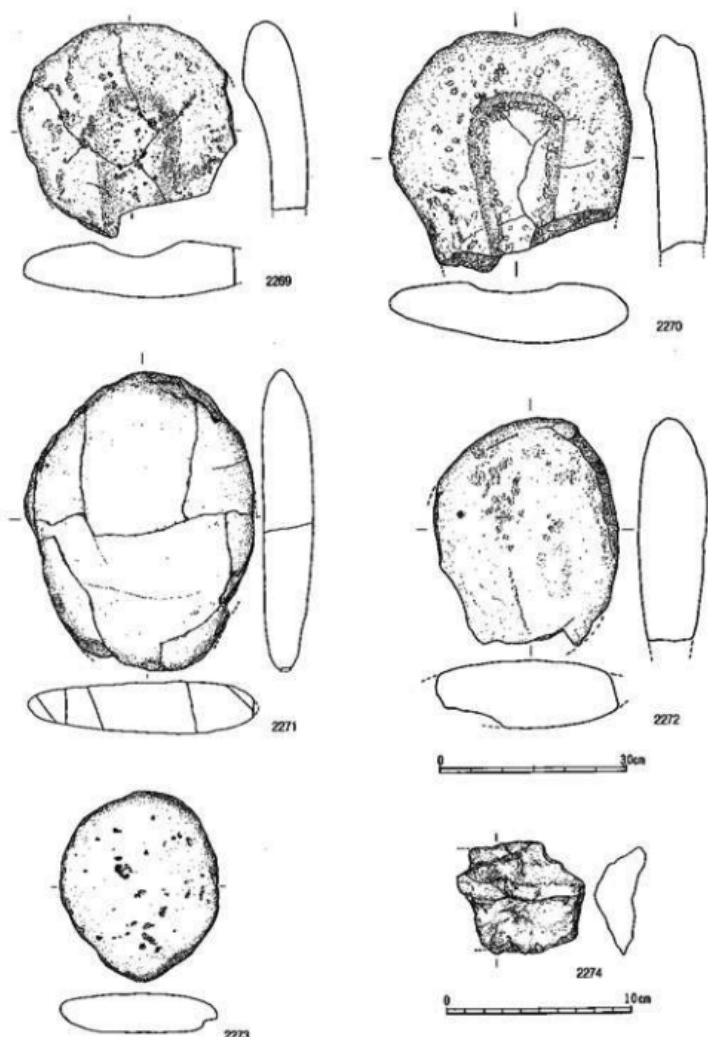
第158図 31号住居址出土の石器 (1/3)

2241~2244・2247・2249:輝石角閃石安山岩 2240・2245・2246・2248・2250:輝石安山岩



第159図 31号住居出土の石器 (1/3 2265~2268:1/6)

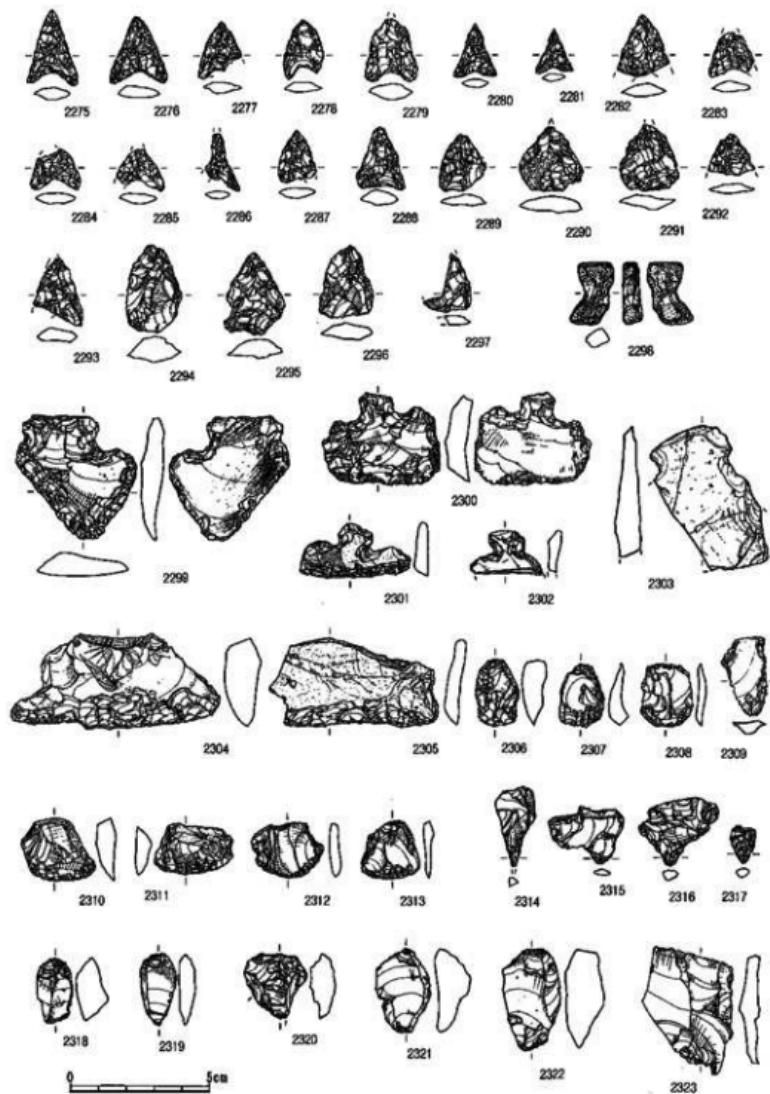
2251-2253・2255-2261-2262-2264-2266: 舞石安山岩 2257: 砂岩 2258: 硬砂岩
2252-2254-2256-2260-2263-2265-2267-2268: 舞石角閃石安山岩 2259: スレート



第160図 31, 33号住居址出土の石器 (1/9 2274:1/3)

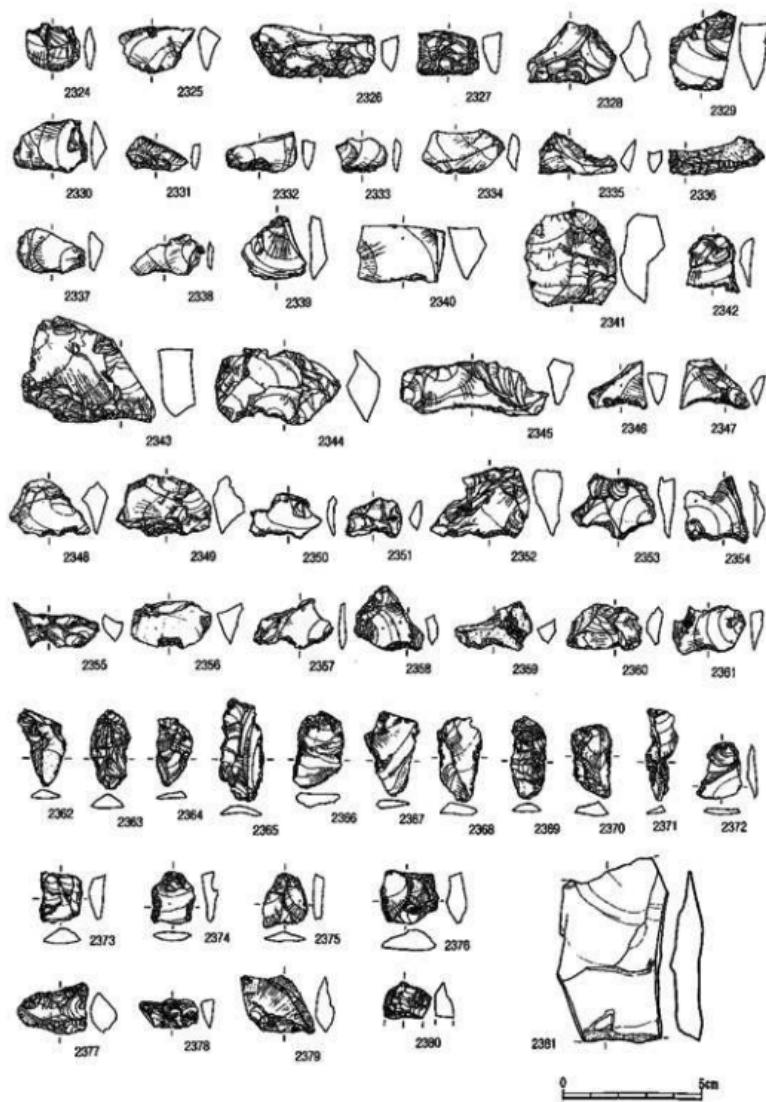
2269~2273:31号 2274:33号

2269・2273:輝石角閃石安山岩 2270・2272:輝石安山岩 2271:輝綠岩 2274:砂岩質粘板岩



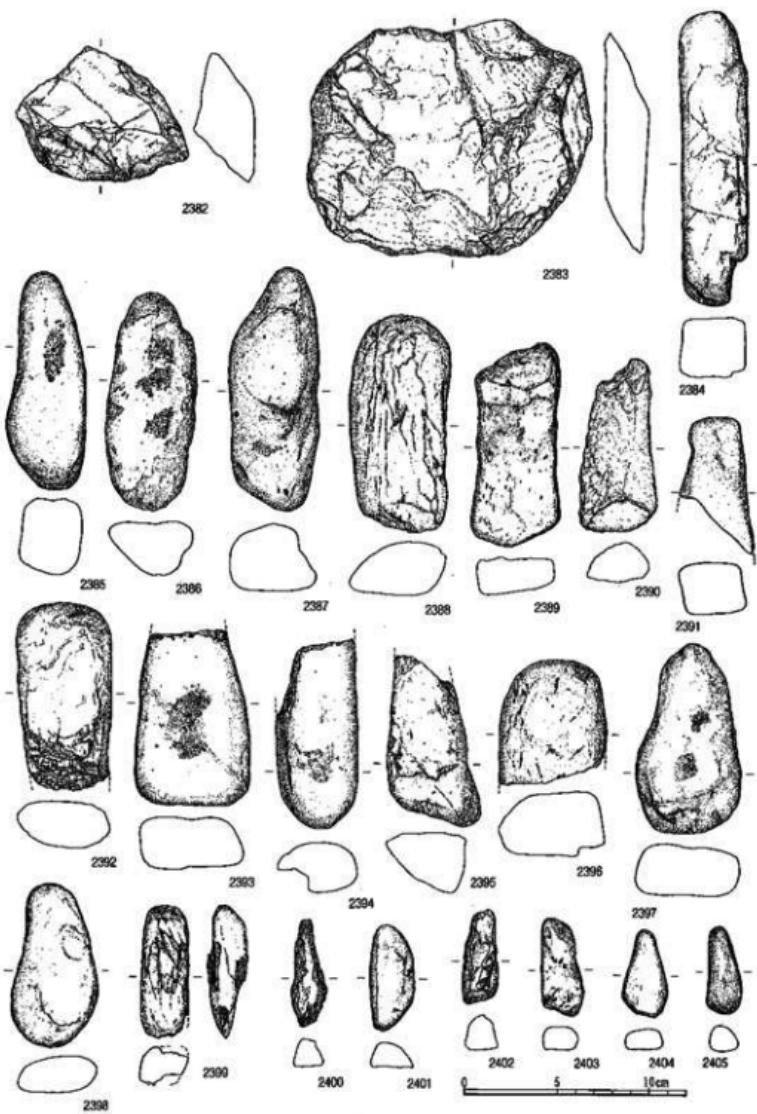
第161図 31号住居址出土の石器 (1/2)

2275~2302・2304~2323: 黒曜石 2303: 支武岩



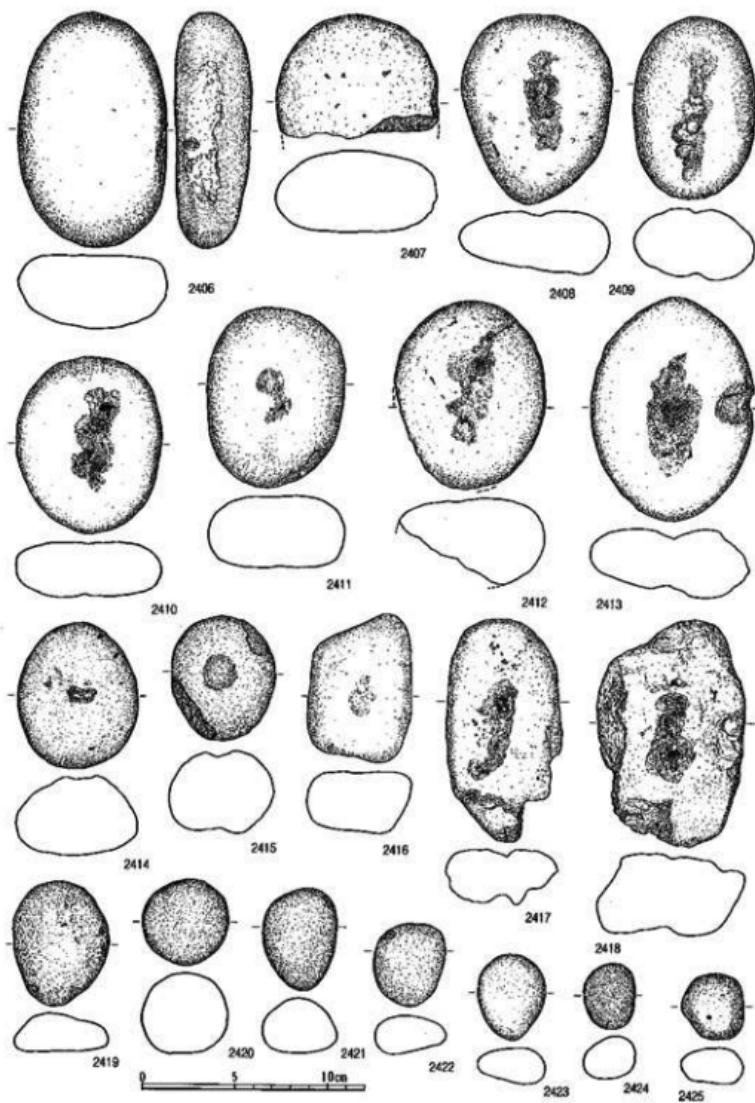
第162図 31号住居址出土の石器 (1/2)

2324~2380: 黒曜石 2381: ホルンフェルス



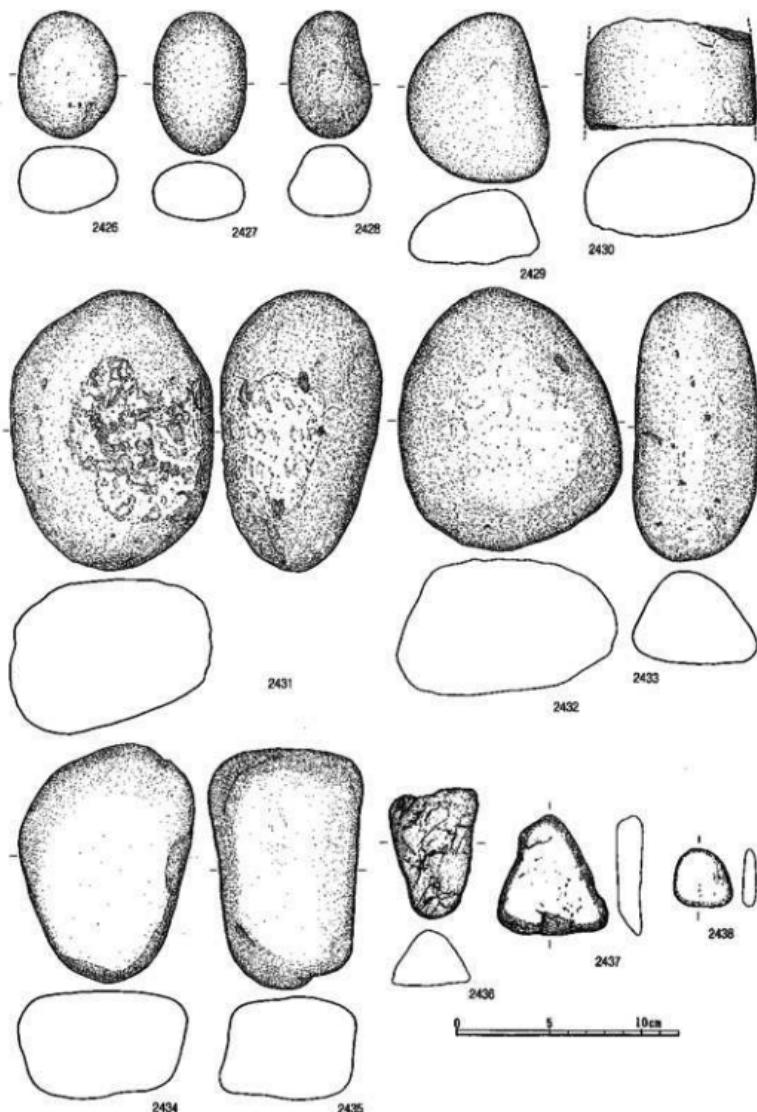
第163図 32号住居址出土の石器 (1/3)

2382-2388-2391-2395-2396-2401:硬砂岩 2383-2384-2390-2399-2400-2402:粘板岩 2387-2389:輝石角閃石安山岩
 2385-2393-2394:輝綠岩 2386:花崗岩質砂岩 2392:滑石片岩 2397:砂岩質硬砂岩 2398:結晶片岩
 2403:石英斑岩 2404:砂岩 2405:御磯鉛綠色岩



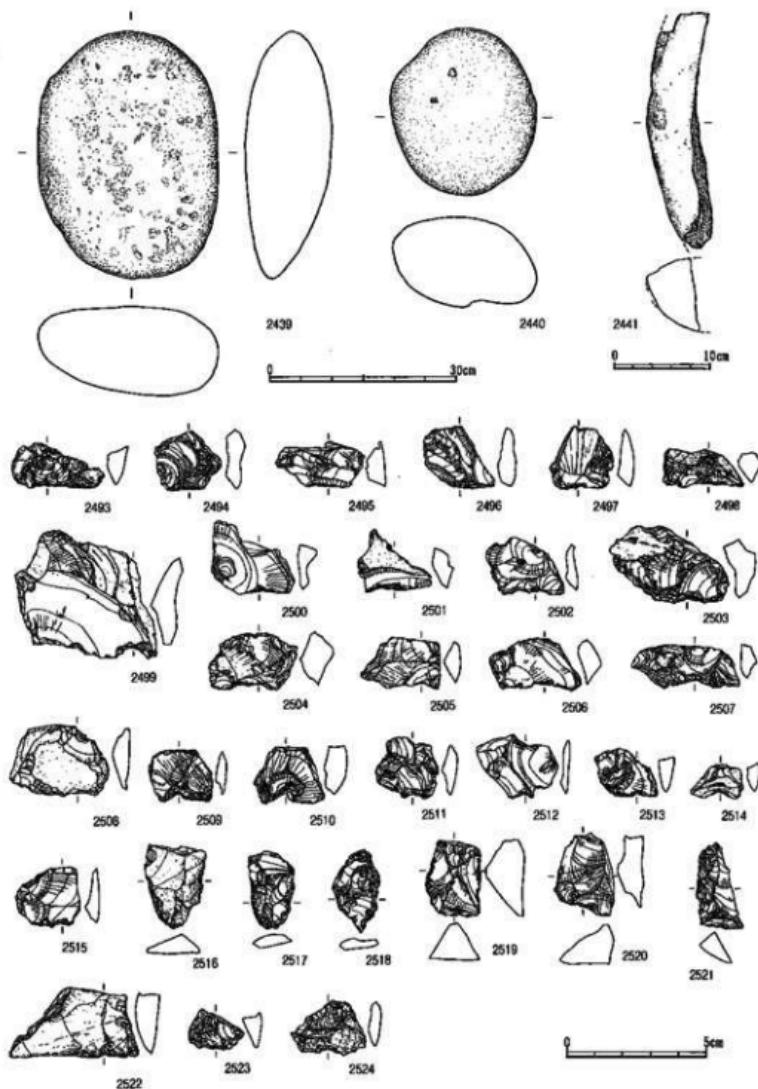
第164図 32号住居址出土の石器 (1/3)

2406-2410・2411-2416・2417-2423：輝石安山岩
2407-2409・2412-2415・2418-2422・2424-2425：輝石角閃石安山岩



第165図 32号住居址出土の石器 (1/3)

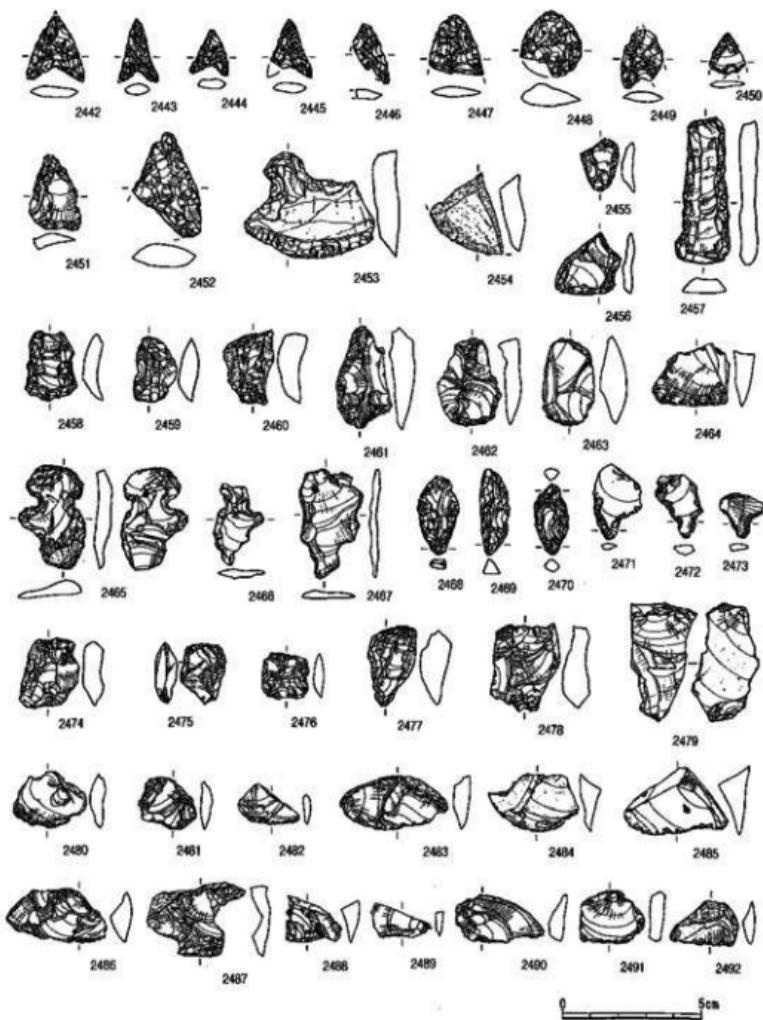
2425-2428・2431-2433: 蝙石安山岩 2427・2429-2432・2434-2435: 蝙石角閃石安山岩
2436-2437: 硅砂岩 2430: 蝙綠岩 2438: スレート



第166図 32号住居址出土の石器 (2439-2440:1/9 2441:1/6 2493~2521:1/2)

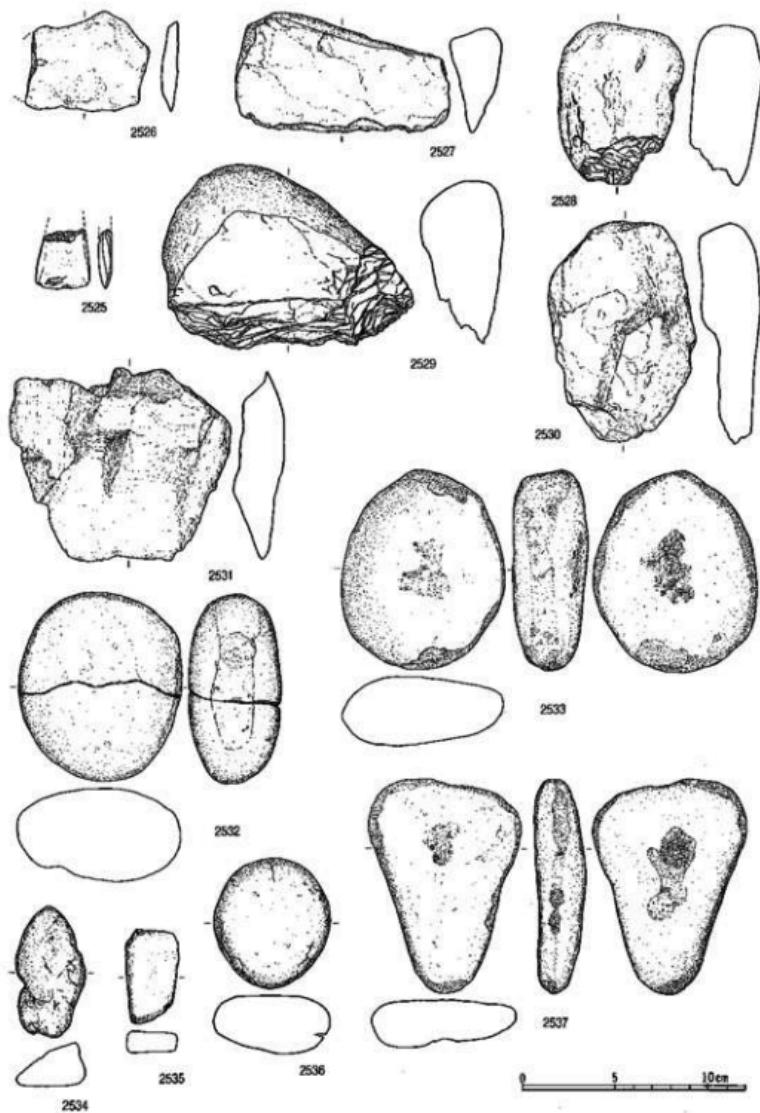
2439-2440:輝石角閃石安山岩 2441:輝綠岩 2493~2521:黒曜石

2522:珪質頁岩 2523-2524:水晶



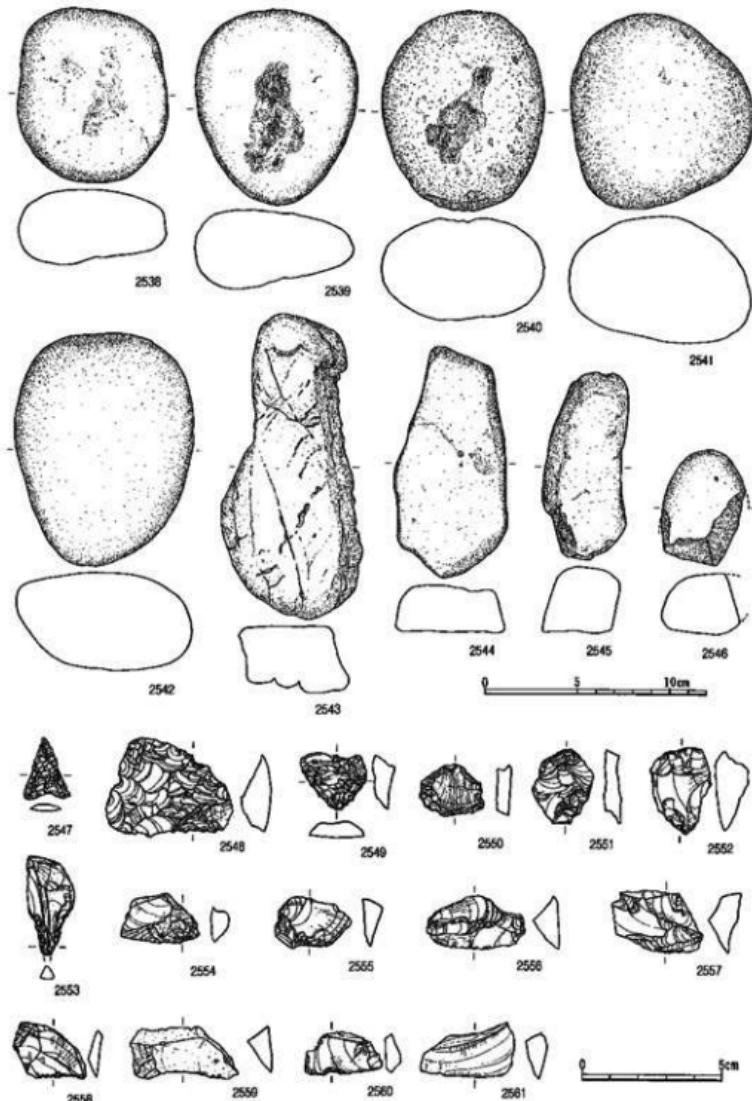
第167図 32号住居址出土の石器 (1/2)

2442~2452·2455·2456·2458~2492: 黒曜石 2463~2467: 珪質頁岩 2454: 玄武岩



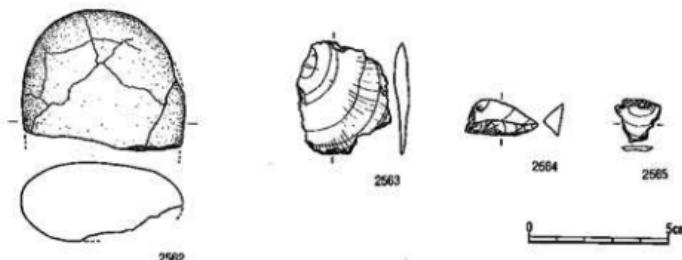
第168図 34号住居址出土の石器 (1/3)

2525: 細粒岩 2526-2531: 扁板岩キルンフェルス 2527-2530: 扁板岩
2535-2537: 厚綠岩 2532: 鮎石安山岩 2533-2536: 鮎石角閃石安山岩 2528-2529: スレート
2534: 硬砂岩



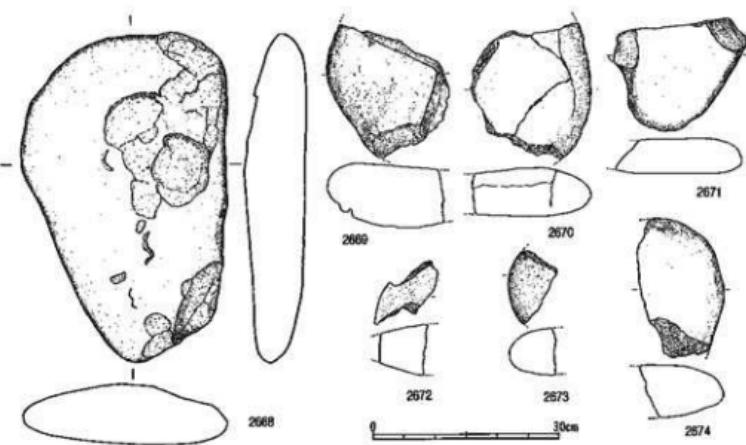
第169図 34号住居址出土の石器 (1/3 2547~2561:1/2)

2538~2542・2544:海石角閃石安山岩 2543~2545~2546:板砂岩 2547~2561:黒輝石



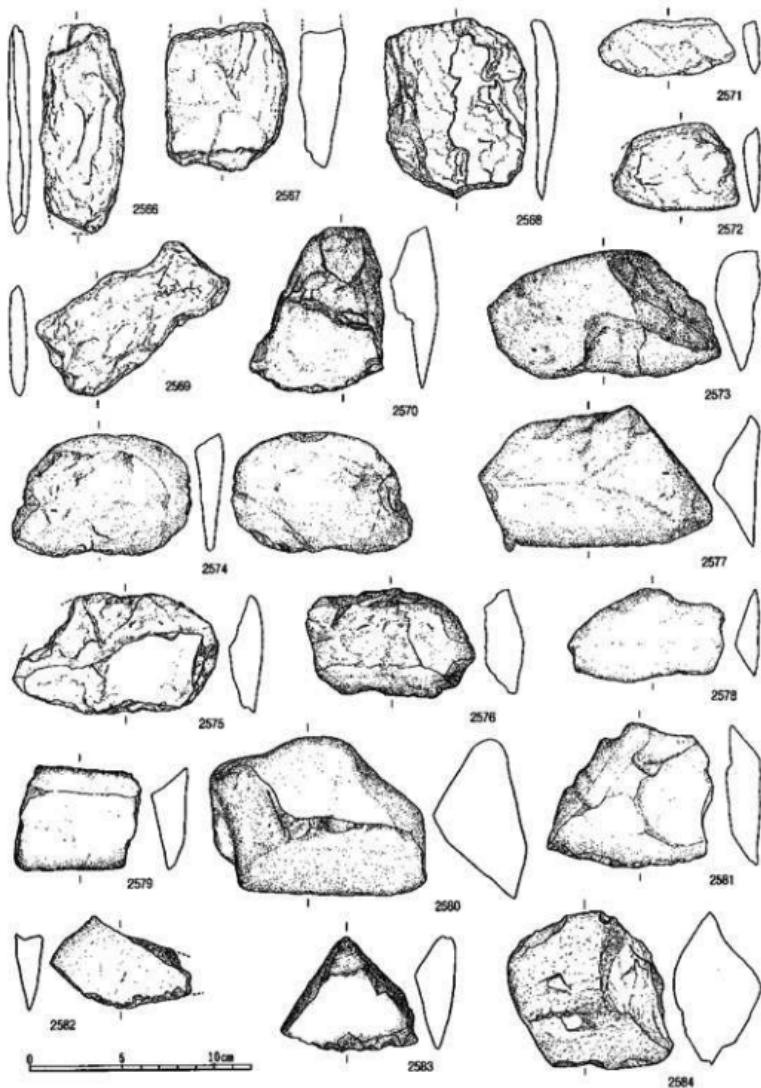
第170図 35号住居址出土の石器 (2562:1/3 2563~2565:1/2)

2562:輝石角閃石安山岩 2563~2565:黒曜石



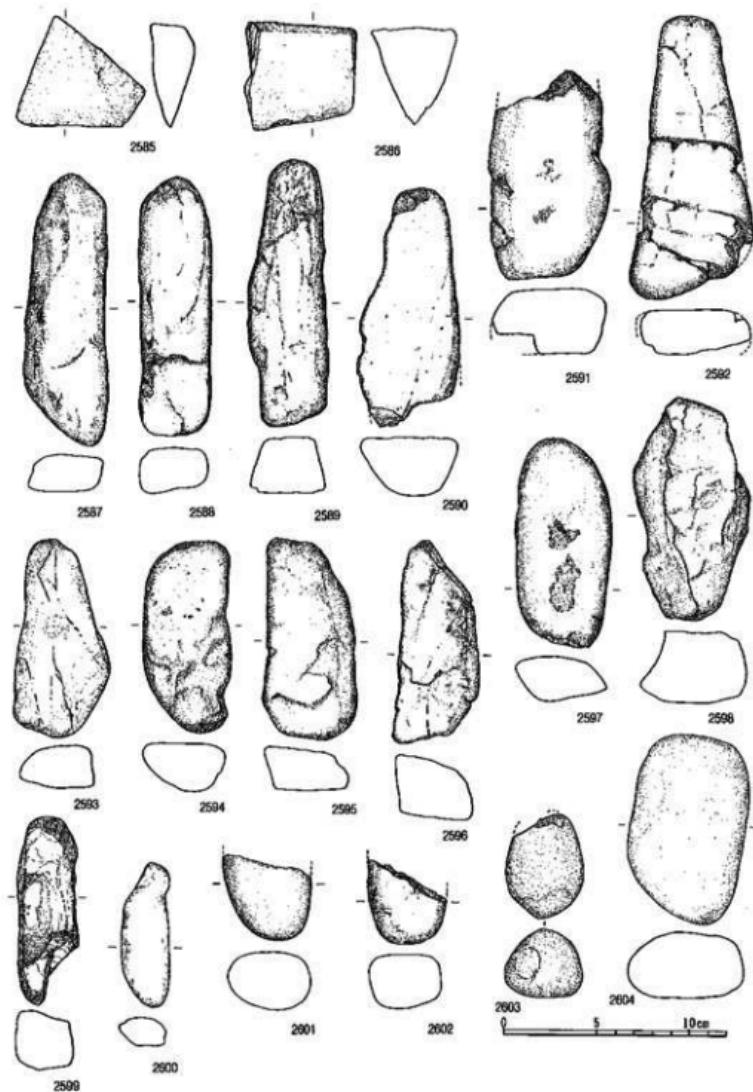
第171図 36号住居址出土の石器 (1/9)

2668-2671:輝隕岩 2669-2670-2674:輝石角閃石安山岩 2672-2673:輝石安山岩



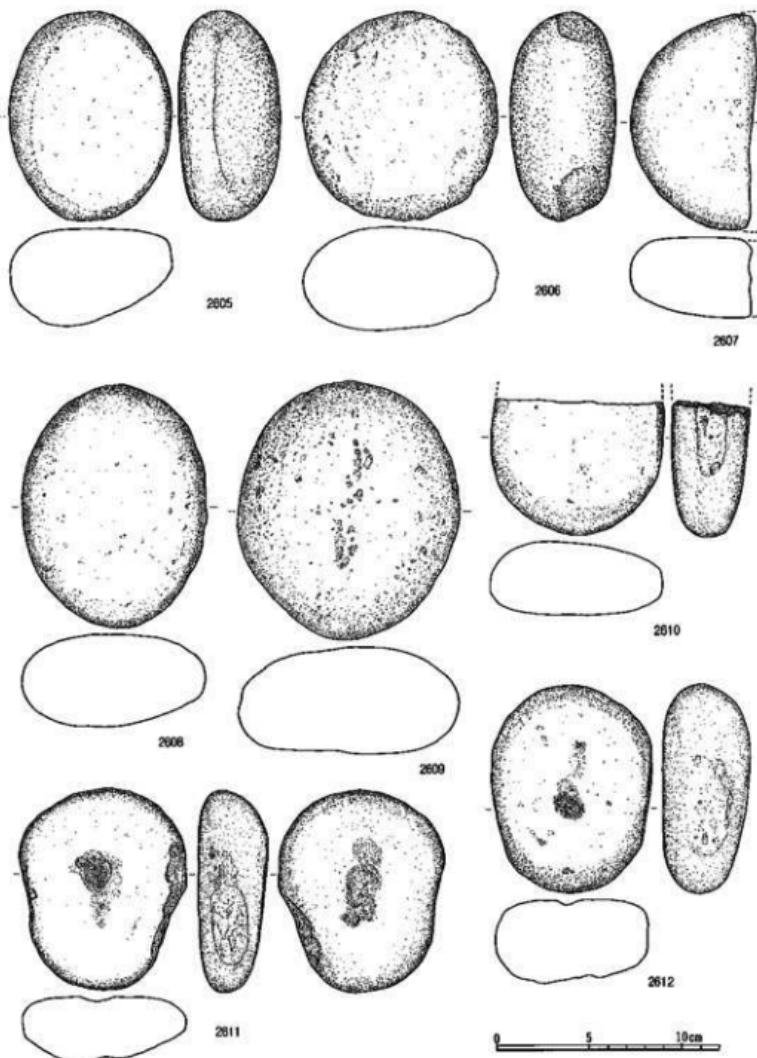
第172図 36号住居址出土の石器 (1/3)

2566・2567・2569・2572 : 粘板岩 2570・2574・2578・2582・2583 : 破砂岩 2577・2584 : 砂岩
 2571・2568 : 粘板岩ホルンフェルス 2573 : 蝶綠岩 2575 : 御荷鉾緑色岩 2579 : 鋒石角閃石安山岩
 2581 : 貝岩 2580 : 砂岩ホルンフェルス 2576 : 緑色岩



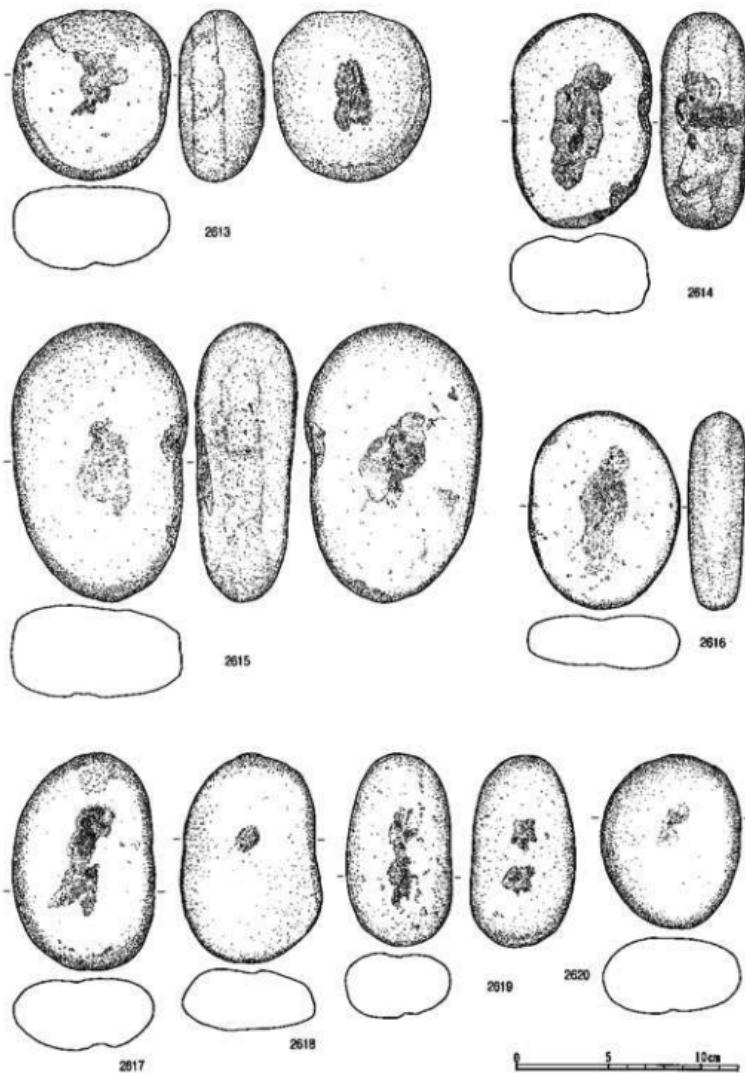
第173図 36号住居址出土の石器 (1/3)

2585-2590-2592-2593-2596-2598-2599-2602：鍛砂岩 2603-2604：輝石角閃石安山岩 2591：輝綠岩
2594：輝石安山岩 2595：矽岩質鍛砂岩 2597：輝綠凝灰岩 2600：スレート 2601：石英斑岩



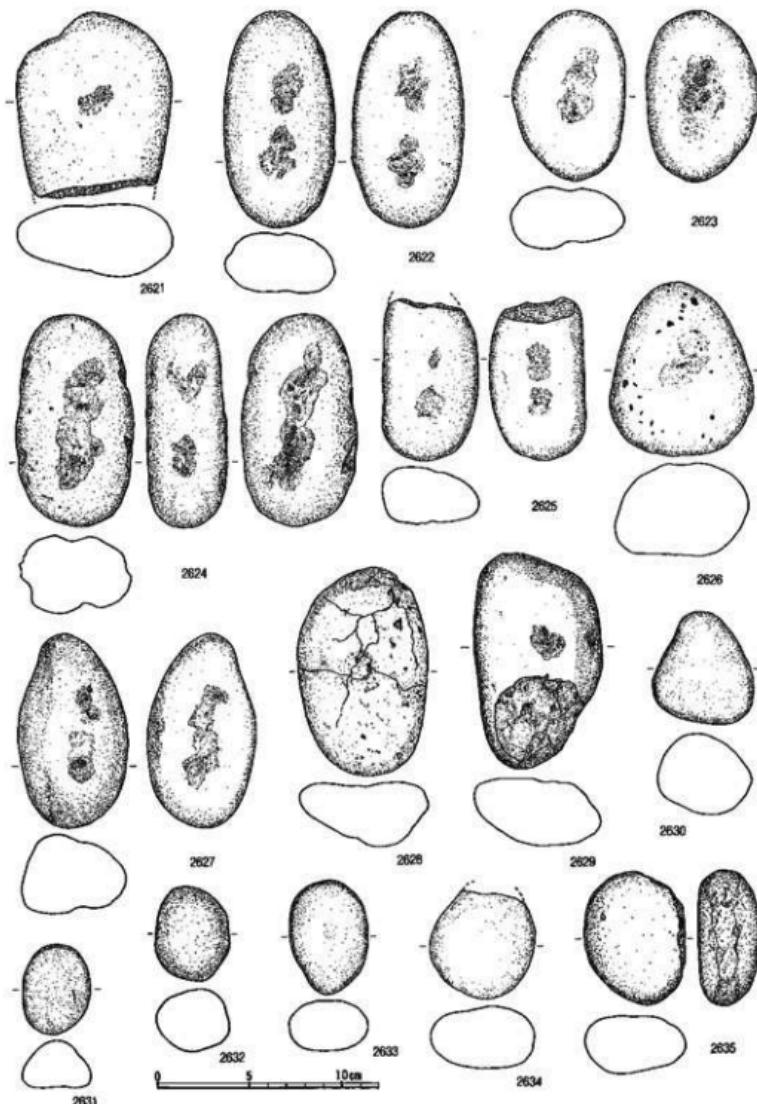
第174図 36号住居址出土の石器 (1/3)

2605-2609-2610：輝石角閃石安山岩 2605～2608-2611-2612：輝石安山岩



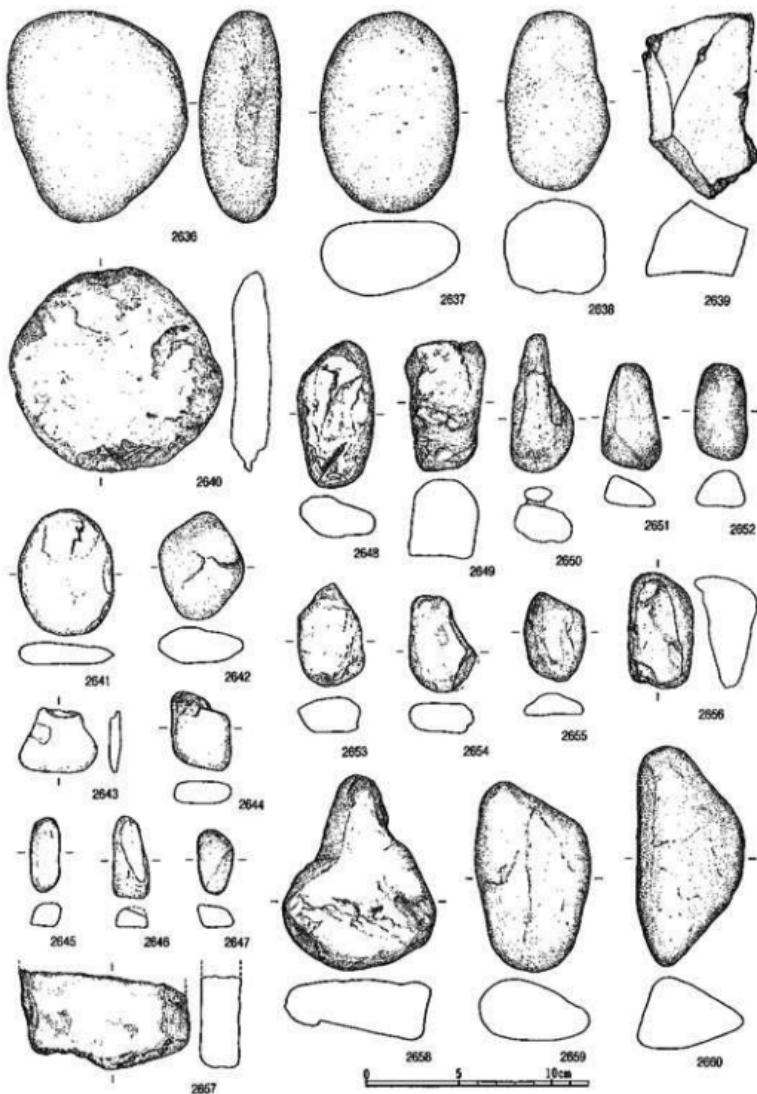
第175図 36号住居址出土の石器 (1/3)

2613~2615・2618・2620 : 岩石角閃石安山岩 2616・2617・2619 : 岩石安山岩



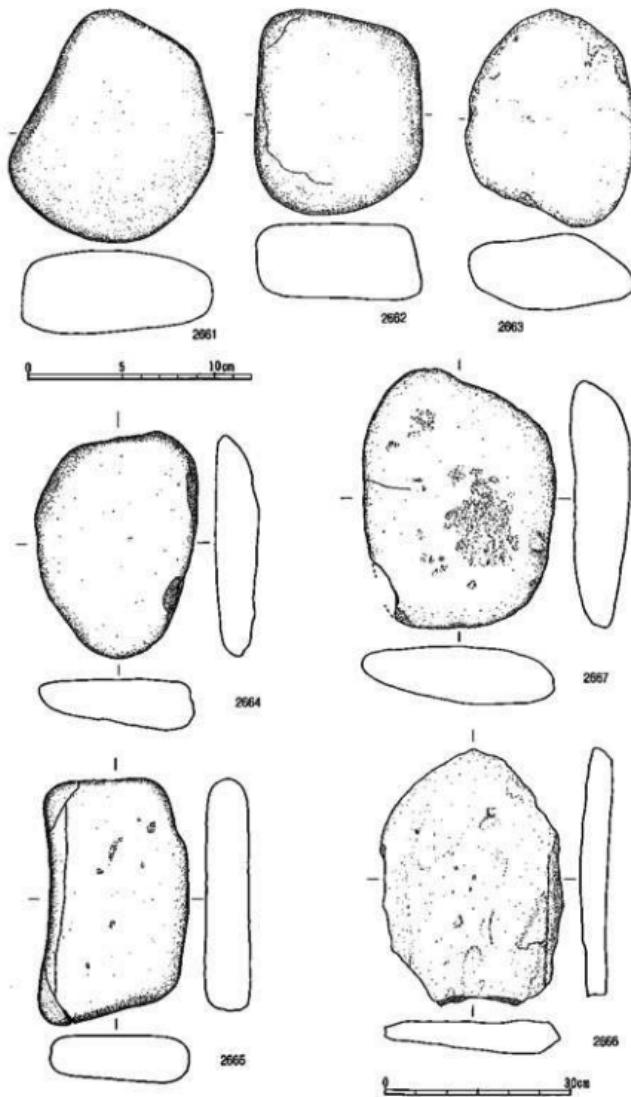
第176図 36号住居址出土の石器 (1/3)

2621・2627・2632・2635：輝石安山岩 2622～2626・2628～2631・2633・2634：輝石角閃石安山岩



第177図 36号住居址出土の石器 (1/3)

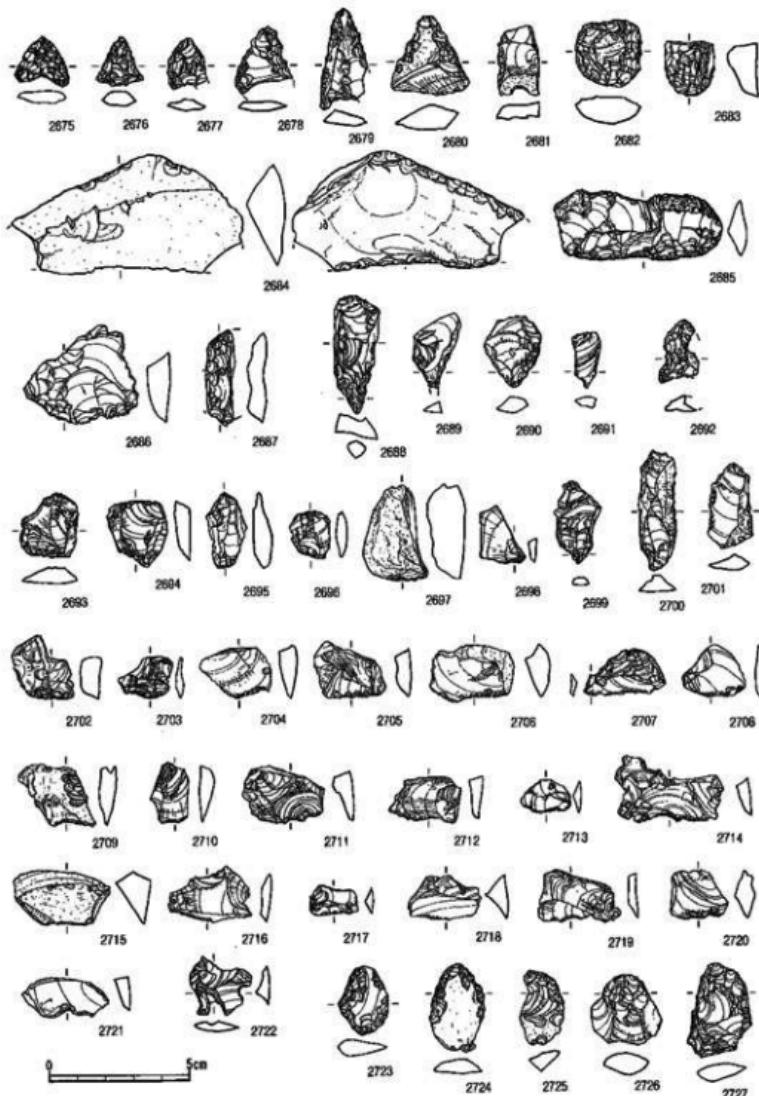
2636~2638:輝石角閃石安山岩 2642~2644·2645~2647·2649~2654·2655~2657~2660:板状岩
 2643~2646·2653:粘板岩 2639:泥岩 2640:御宿鉾緑色岩 2641:スレート
 2648:河原理 2650:チャート 2651~2656:ホルンフェルス 2652:輝石安山岩



第178図 36号住居址出土の石器 (2661~2663:1/3 2664~2667:1/9)

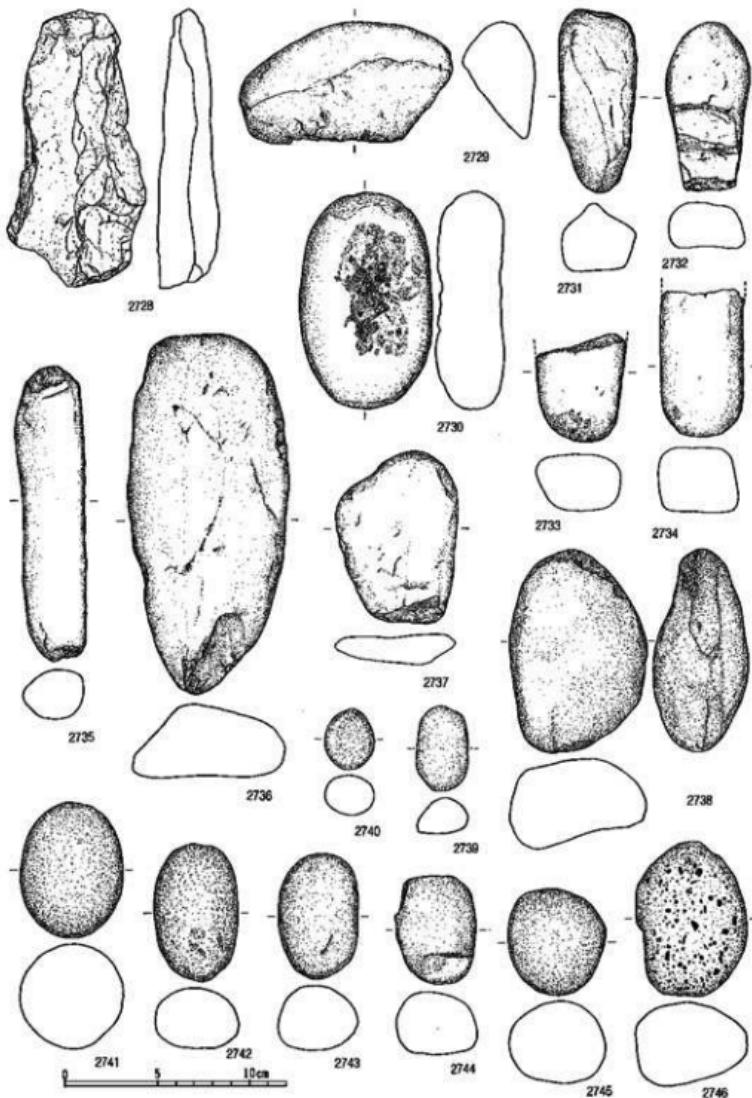
2661・2662・2664・2667: 鹰石角閃石安山岩 2663: 花崗岩

2665: 鹰綠岩 2666: 紫蘇輝石普通鷹石角閃石安山岩



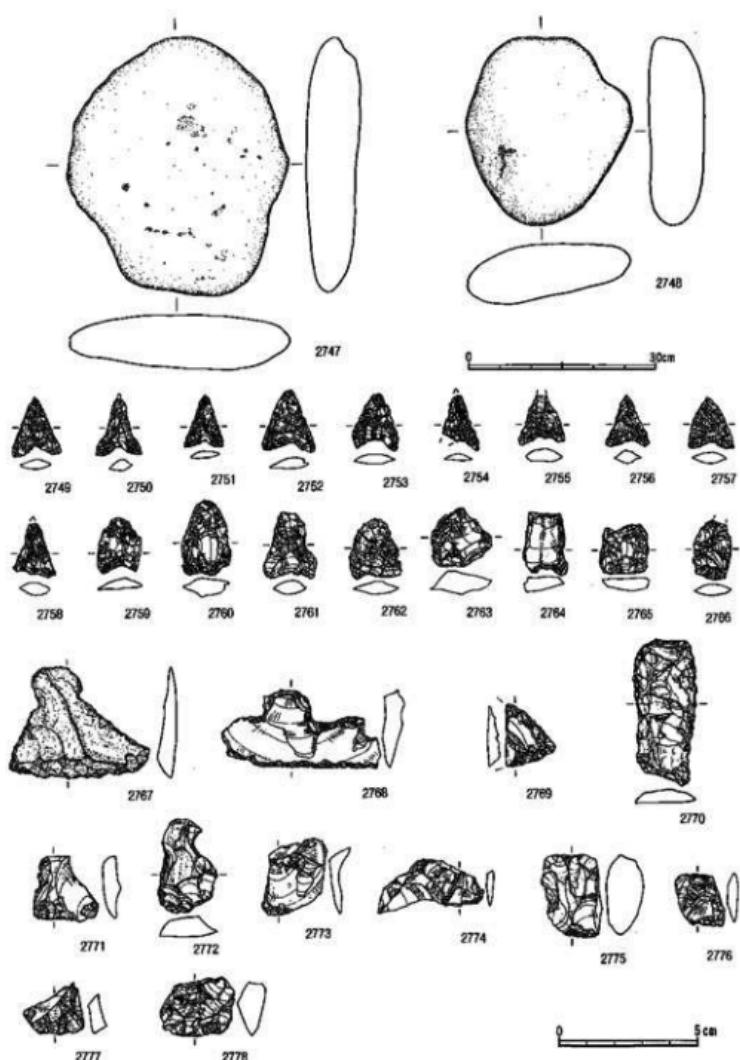
第179図 36号住居址出土の石器 (1 / 2)

2675~2683・2685~2687~2694・2696~2727: 黒曜石 2684~2686: チャート 2695: 4/美



第180図 37号住居址出土の石器 (1/3)

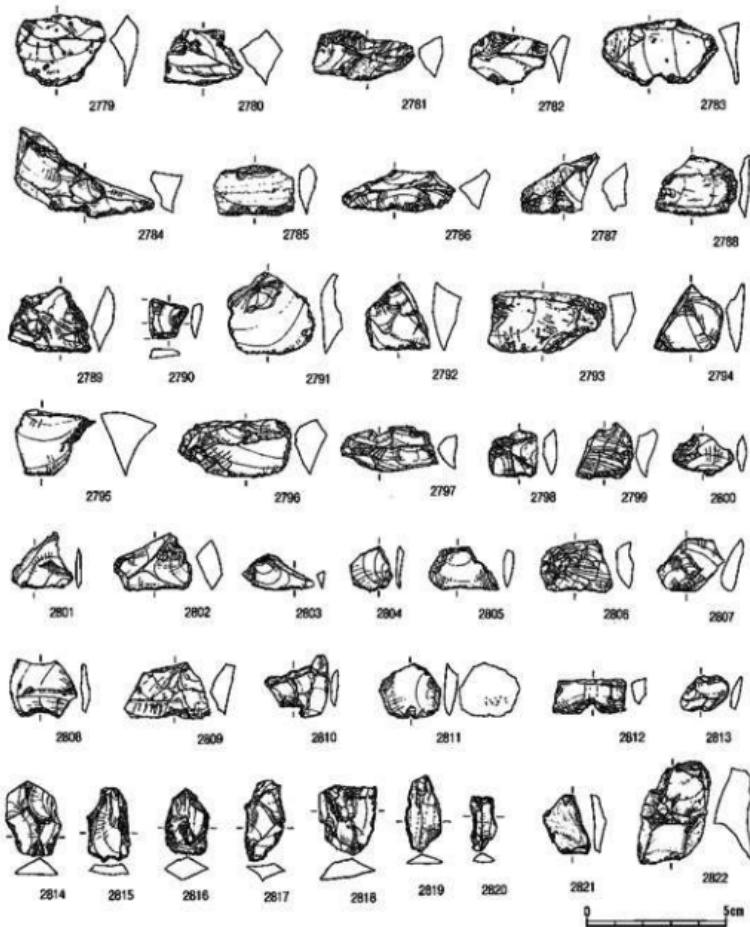
2728: 粘板岩 2735: 砂岩質凝灰岩 2729-2731-2734-2736-2737: 砂岩 2730-2738-2741-2745: 鮫石安山岩
2742-2744-2746: 鮫石角閃石安山岩 2732: スレート 2733: 鮫綠岩



第181図 37号住居址出土の石器 (2747・2748:1/9 2749~2778:1/2)

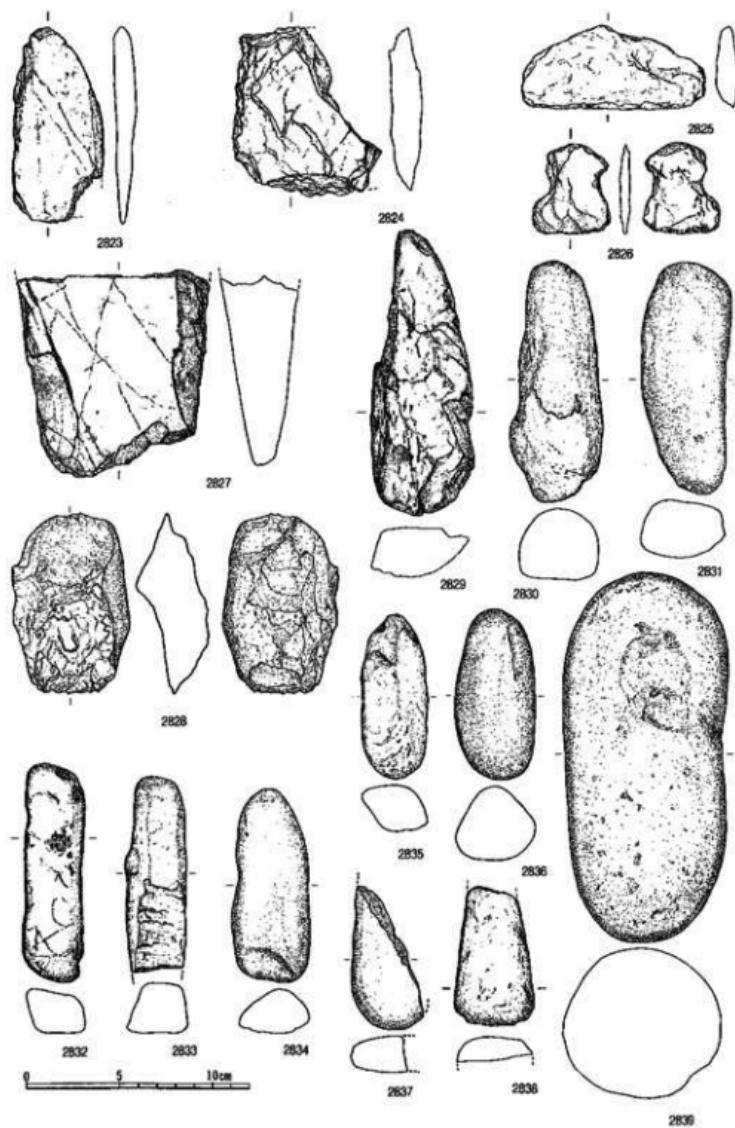
2747:輝石安山岩 2748:單斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 2767:頁岩

2749~2766・2768~2778:2771~2778:黒曜石 2770:珪質頁岩



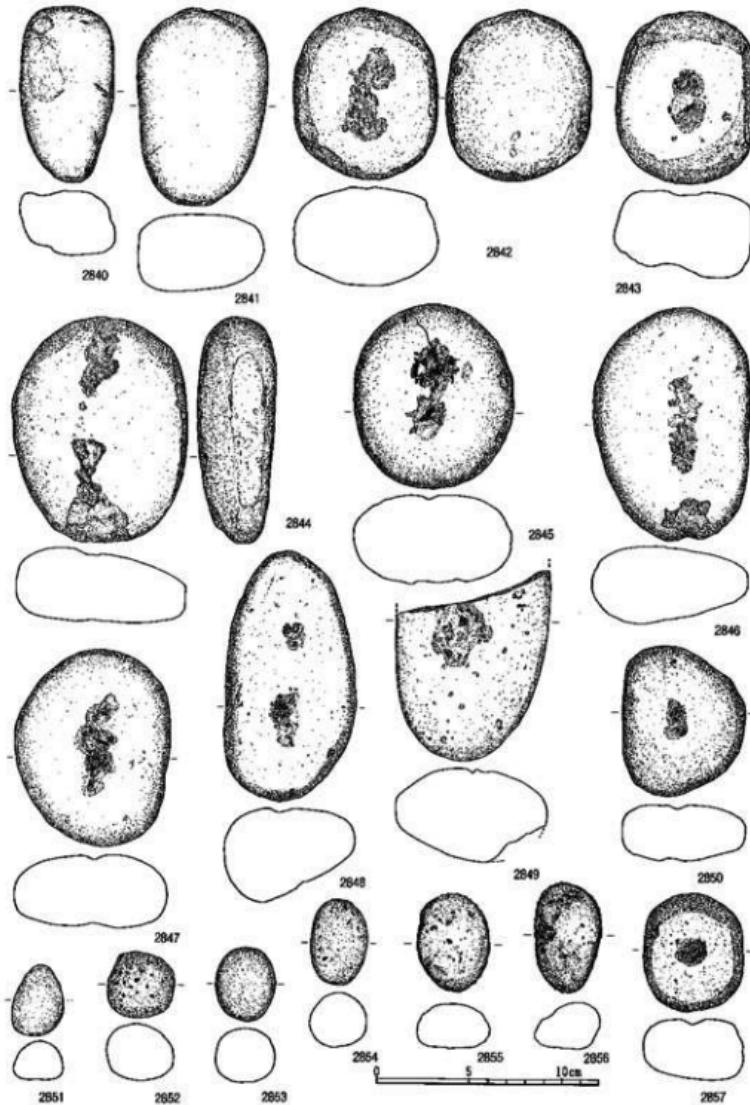
第182図 37号住居址出土の石器 (1/2)

2779~2822: 黒曜石



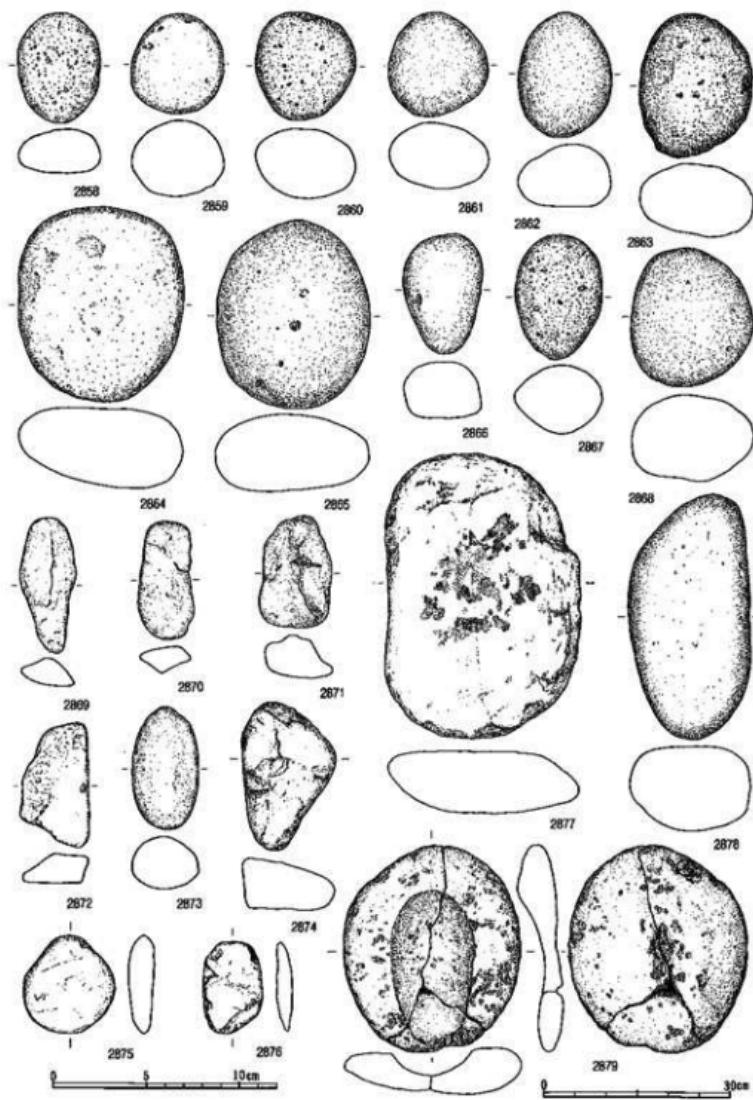
第183図 38号住居址出土の石器 (1/3)

2623: 砂岩 2624-2627-2629-2632: 滅砂岩 2628-2630-2635-2638: 粘板岩
 2631-2634-2636-2639: 烤石角閃石安山岩 2633-2637: 烤綠岩
 2625: 粘板岩ホルンフェルス 2626: 砂岩質粘板岩



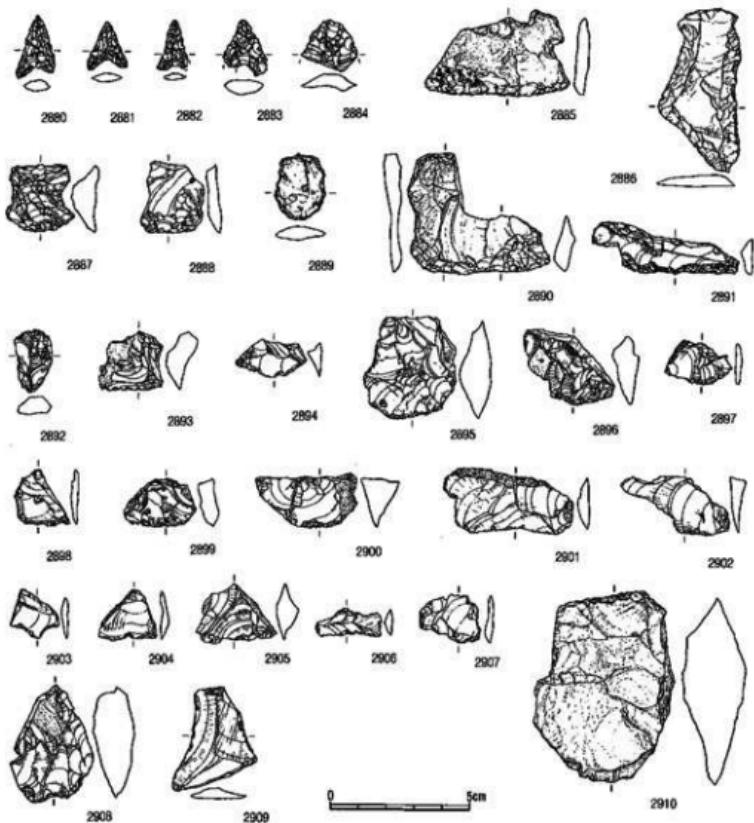
第184図 38号住居址出土の石器 (1/3)

2840 : 球形岩 2841~2848・2850~2855・2857 : 舟石角閃石安山岩 2849 : 石英斑岩 2856 : 舟石安山岩



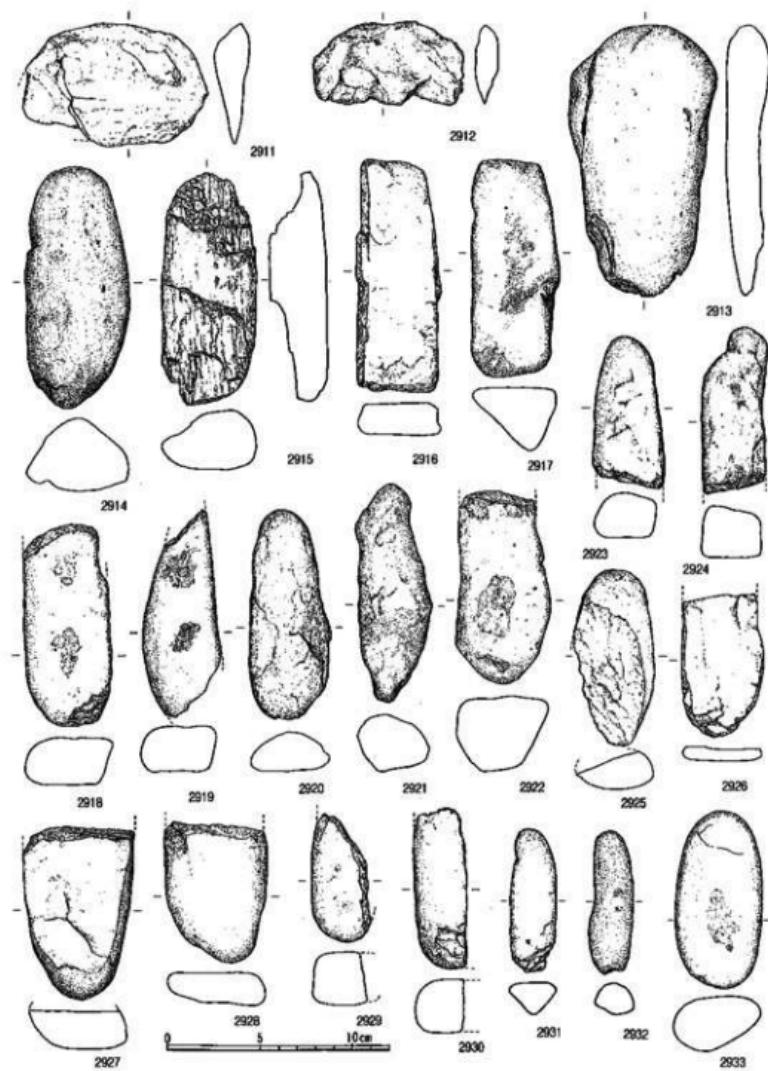
第185図 38号住居址出土の石器 (1/3 2879:1/9)

2858~2868·2873·2878: 珪石角閃石安山岩 2869~2872·2874: 球砂岩 2875~2877: 粘板岩 2879: 鹿石安山岩



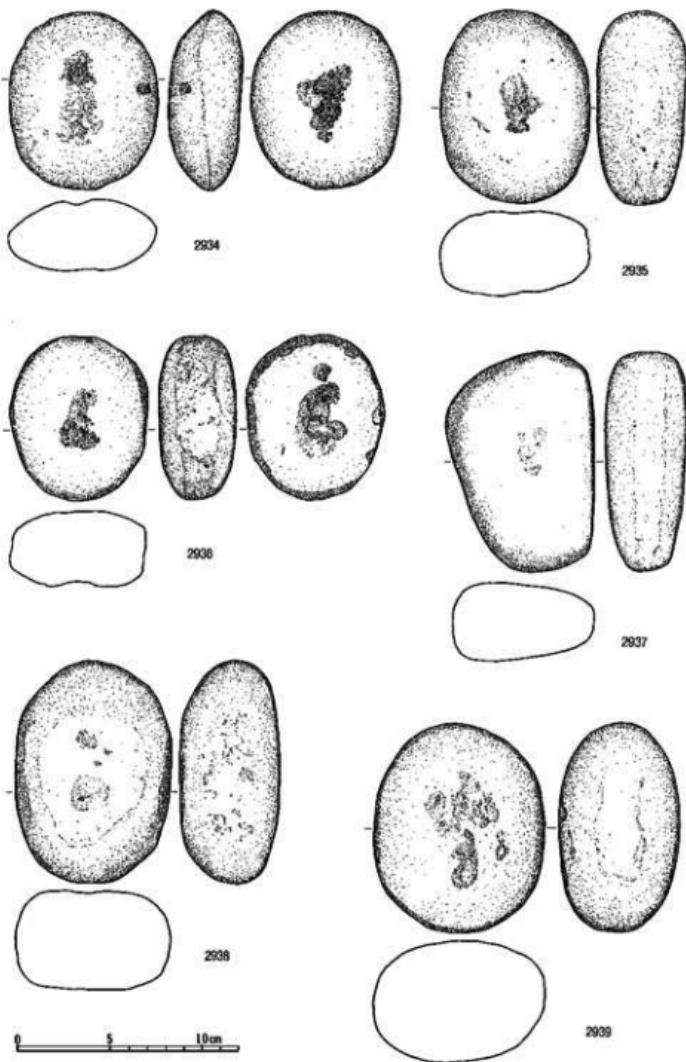
第186図 38号住居址出土の石器 (1 / 2)

2880~2884・2887~2889・2891~2909: 黒曜石 2885: 硅質頁岩 2890: チャート 2886~2910: 貝岩



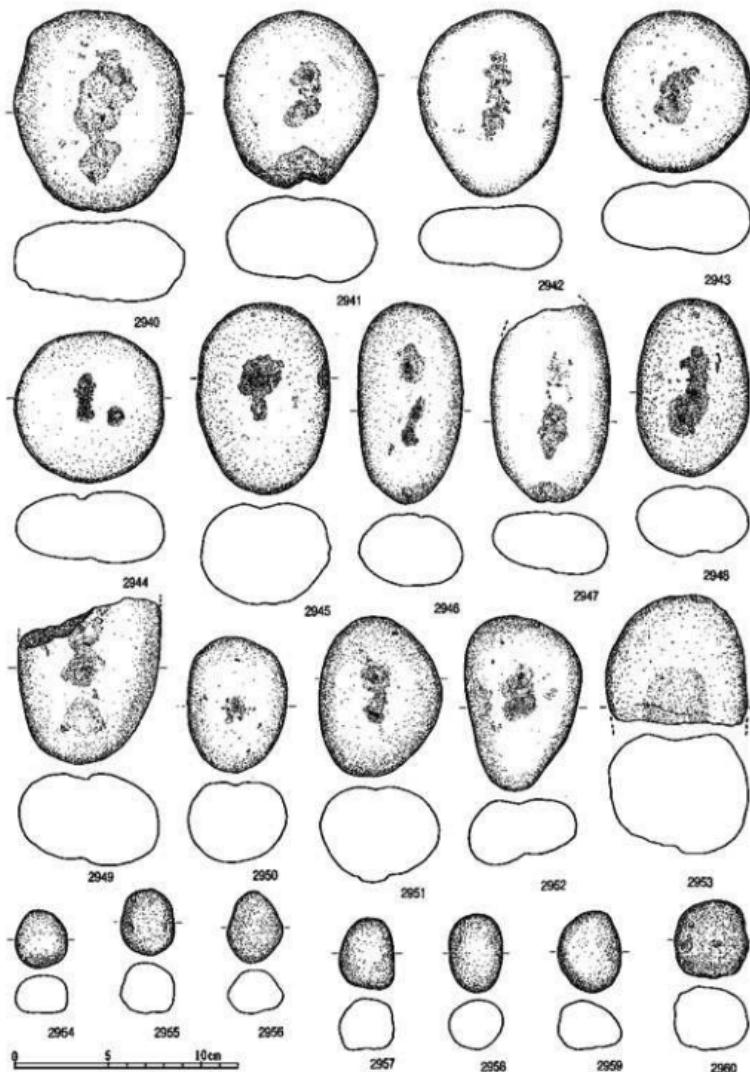
第187図 39号住居址出土の石器 (1/3)

2911-2915・2926-2931: 粘板岩 2913-2919-2923-2928-2930-2932: 硬砂岩 2912-2920: 粘板岩ホルンフェルス
 2914: 鹰石角閃石安山岩 2916: 砂岩ホルンフェルス 2917-2918-2922-2924-2927-2929-2933: 鹰岩
 2921: 砂岩 2925: 鹰綠凝灰岩



第188図 39号住居址出土の石器 (1/3)

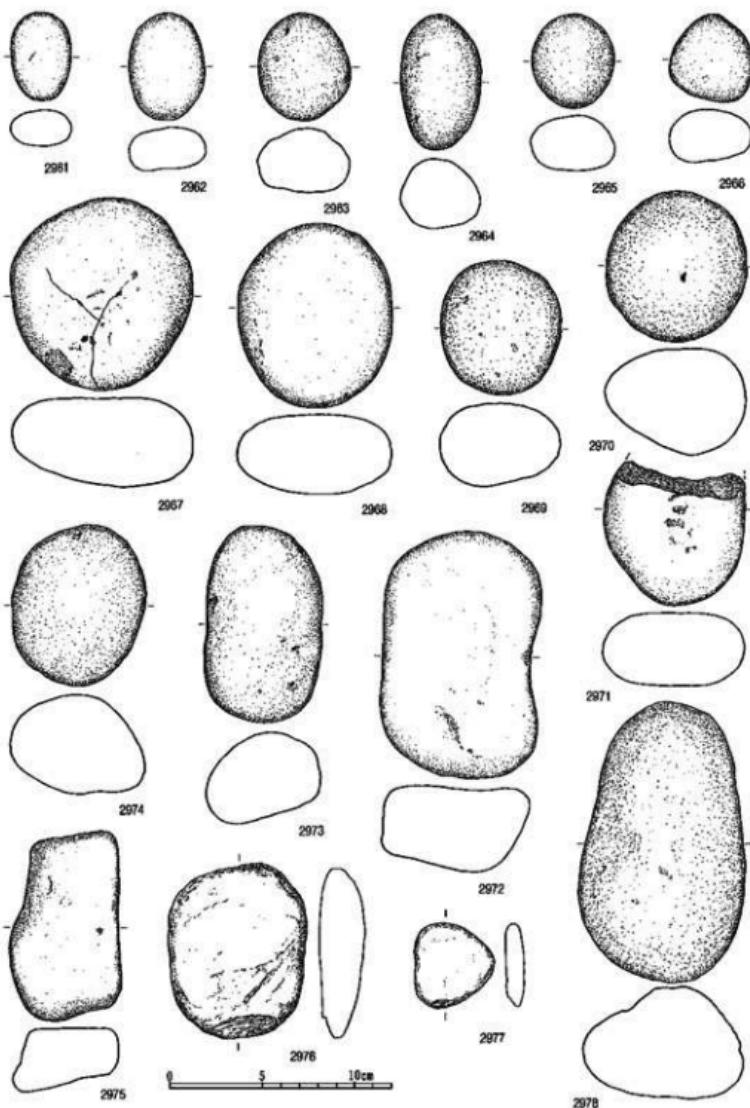
2934~2936: 輝石角閃石安山岩 2937~2939: 輝石安山岩



第189図 39号住居址出土の石器 (1/3)

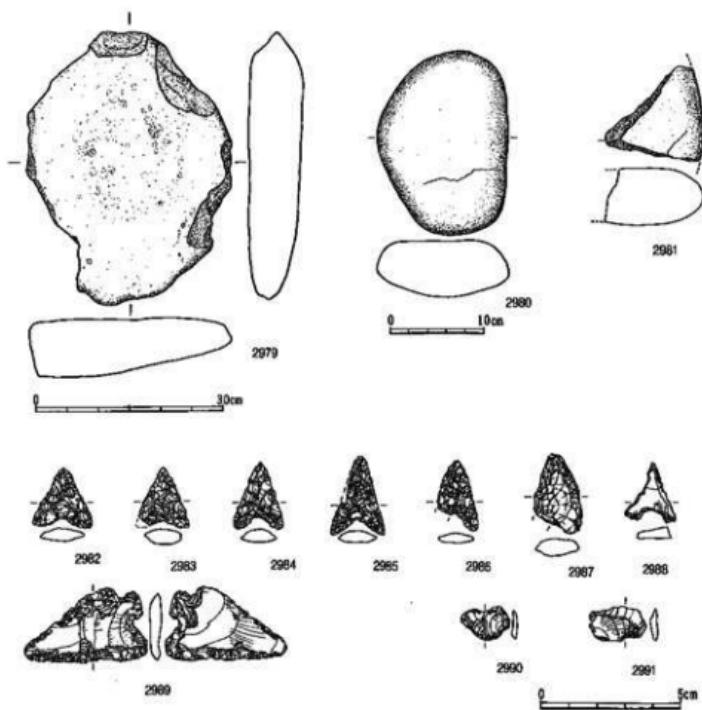
2940・2941・2945・2946・2948・2949・2951～2953：輝石角閃石安山岩

2942～2944・2947・2950・2954～2960：輝石安山岩



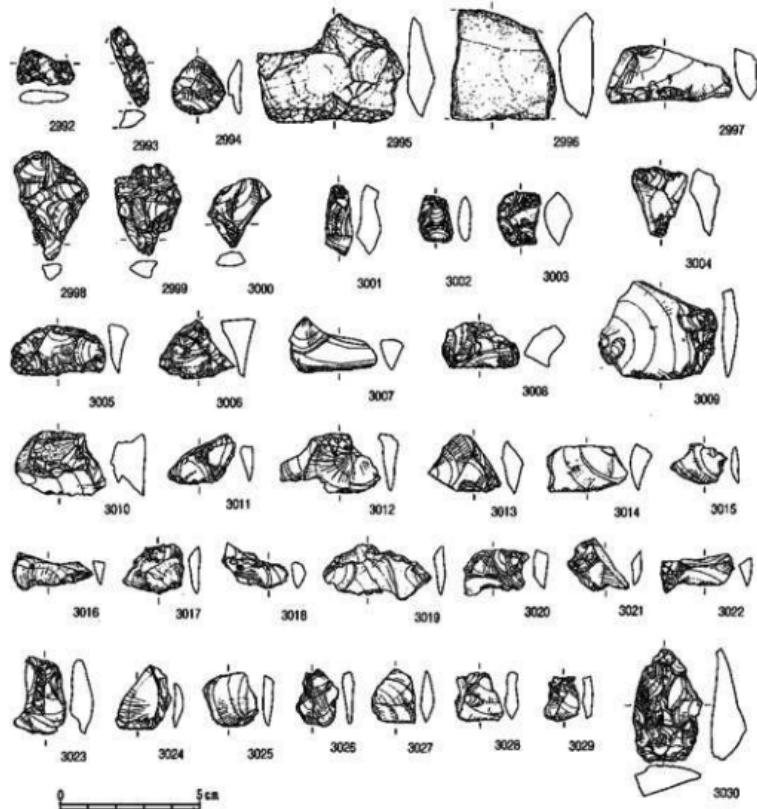
第190図 39号住居址出土の石器 (1/3)

2961-2962-2964~2968-2970-2972-2974-2975-2978: 蝙石安山岩 2976: 輝緑凝灰岩
2963-2969-2973: 蝙石角閃石安山岩 2977: スレート



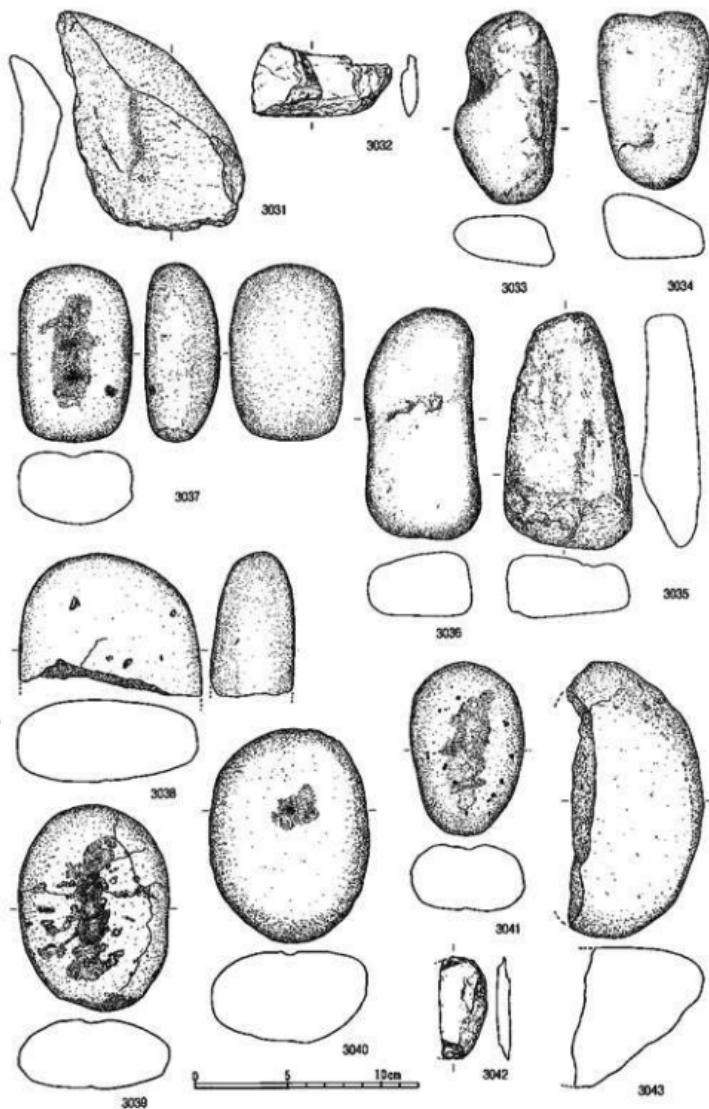
第191図 39号住居址出土の石器 (2979:1/9 2980-2981:1/6 2982~2991:1/2)

2979~2981:輝石安山岩 2982~2986~2988~2991:黒曜石 2983:チャート 2987:珪質頁岩



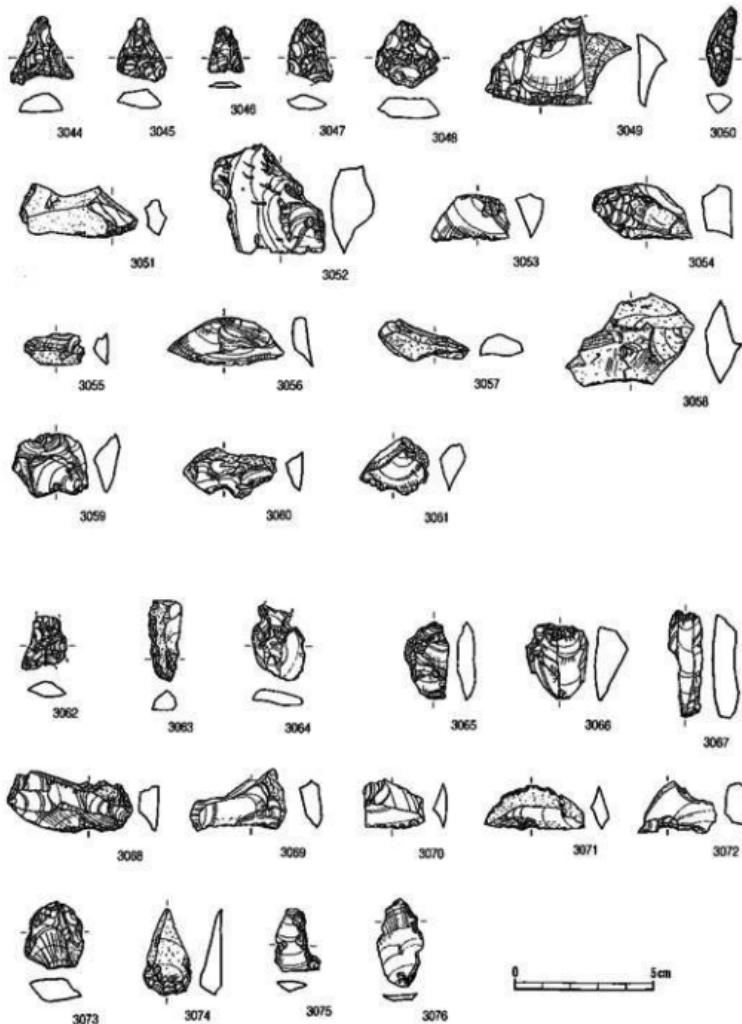
第192図 39号住居址出土の石器 (1/2)

2992~2994・2997~3030: 黒曜石 2995: 珪質頁岩 2996: ホルンフェルス



第193図 40号住居址出土の石器 (1/3)

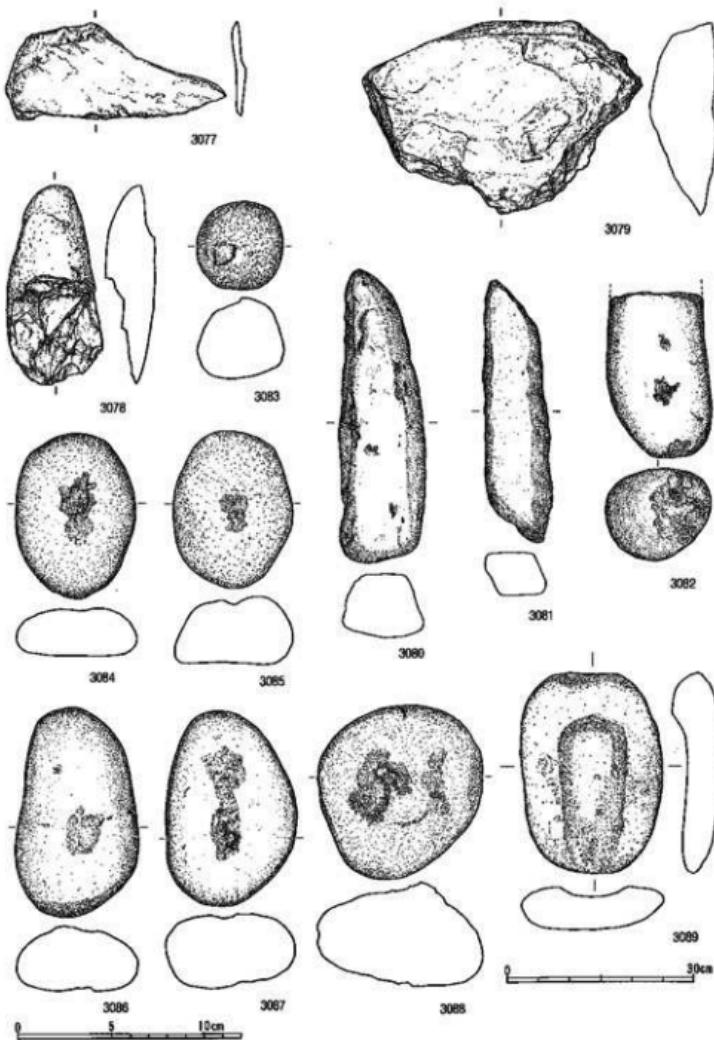
3031-3033-3034: 硬砂岩 3032-3042: 黏板岩 3036-3037-3041: 鮎石安山岩 3038-3040-3043: 鮎石角閃石安山岩
3035: 黏板岩ホルンフェルス 3039: 菊緑岩



第194図 40、41号住居址出土の石器 (1/2)

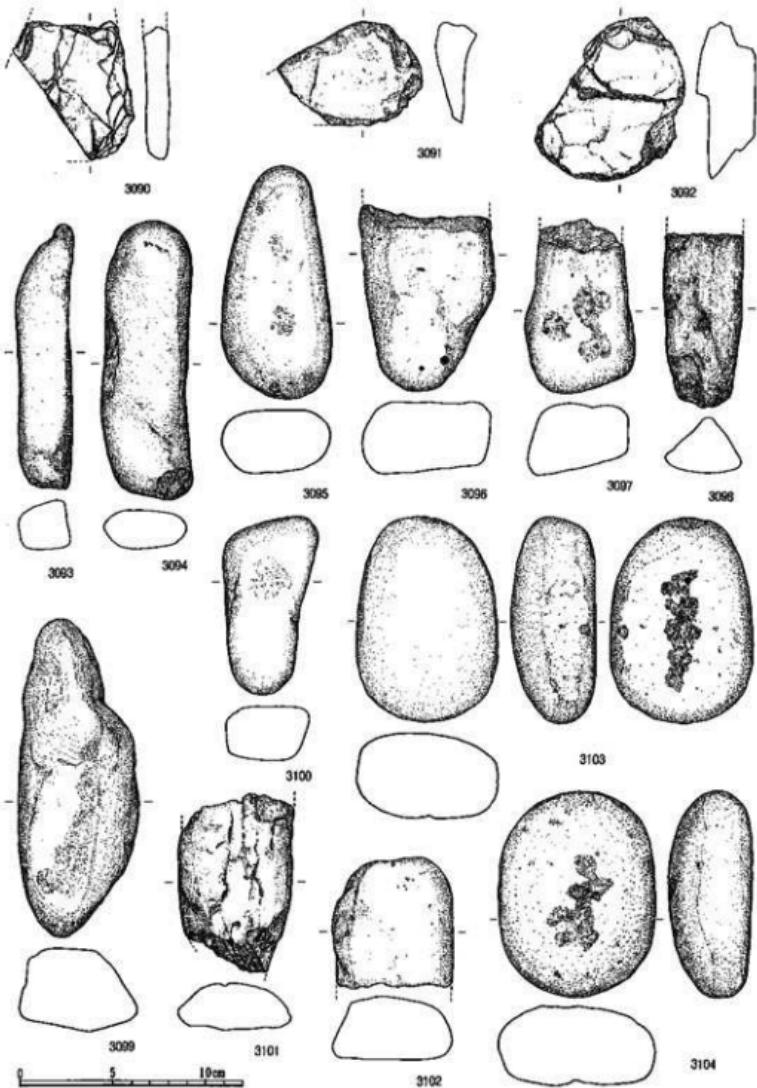
3044～3061：40号住居址 3062～3076：41号住居址

3044～3076：黒曜石



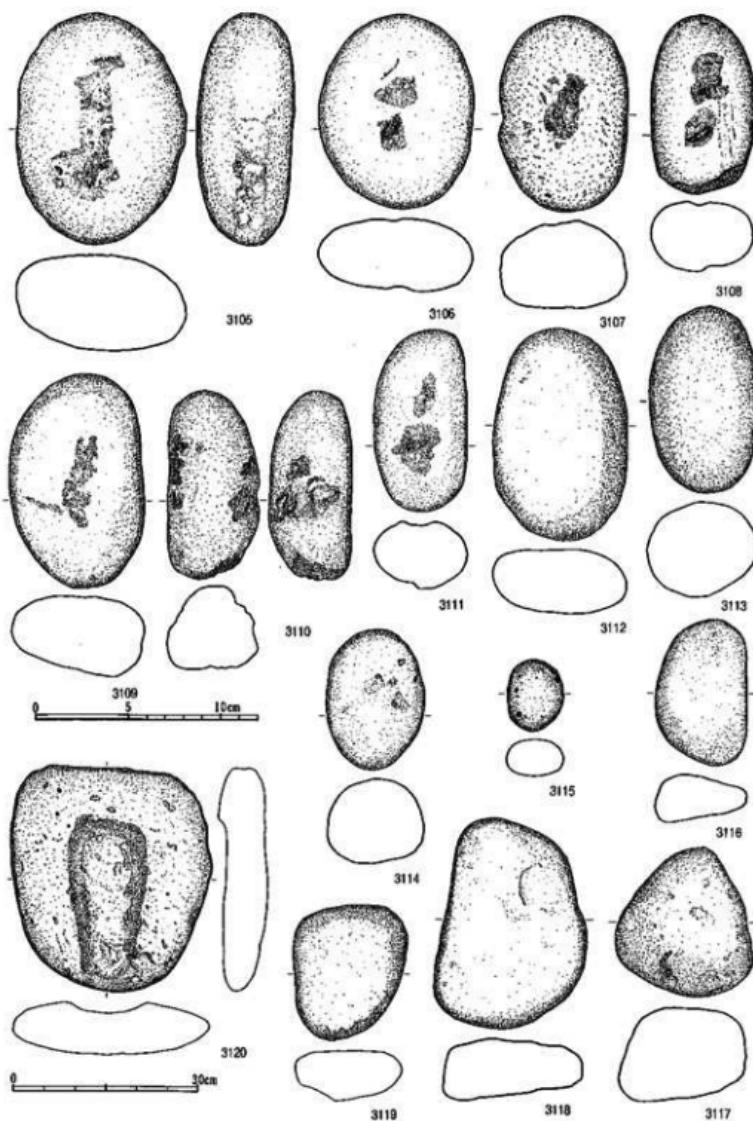
第195図 41号住居址出土の石器 (1/3 3089:1/9)

3078-3080-3081: 硬砂岩 3083-3087-3088: 輝石安山岩 3084-3086-3089: 輝石角閃石安山岩
3077: 粘板岩ホルンフェルス 3079: 砂岩質粘板岩 3082: 輝綠岩



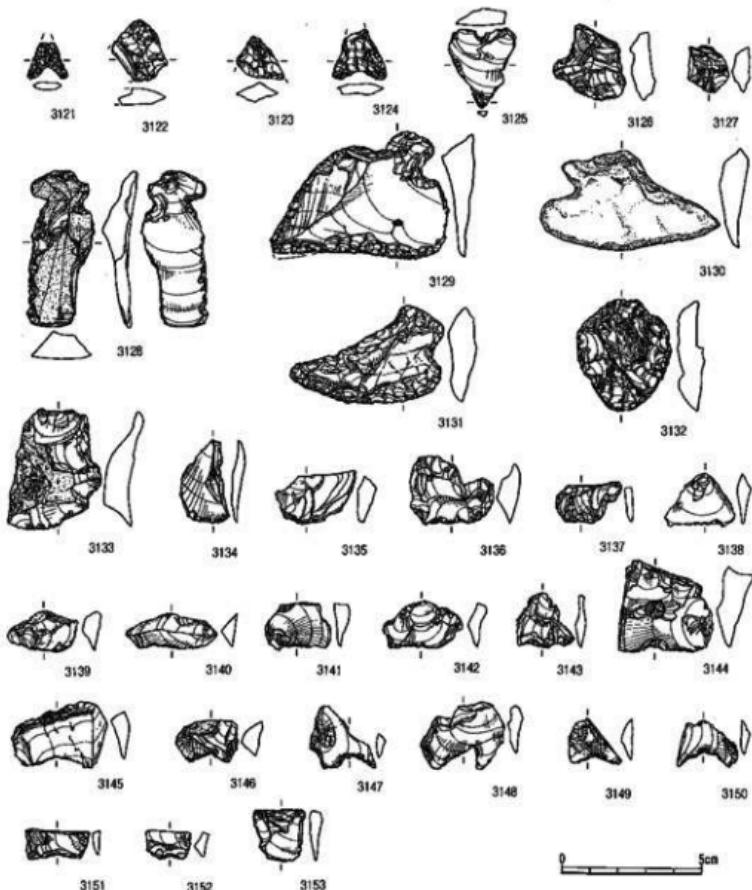
第196図 42号住居址出土の石器 (1/3)

3090:輝緑凝灰岩 3091-3093-3094-3099-3100-3101:硬砂岩 3095-3096-3103:輝石安山岩
3097-3104:輝石角閃石安山岩 3092:砂岩 3098-3102:輝綠岩



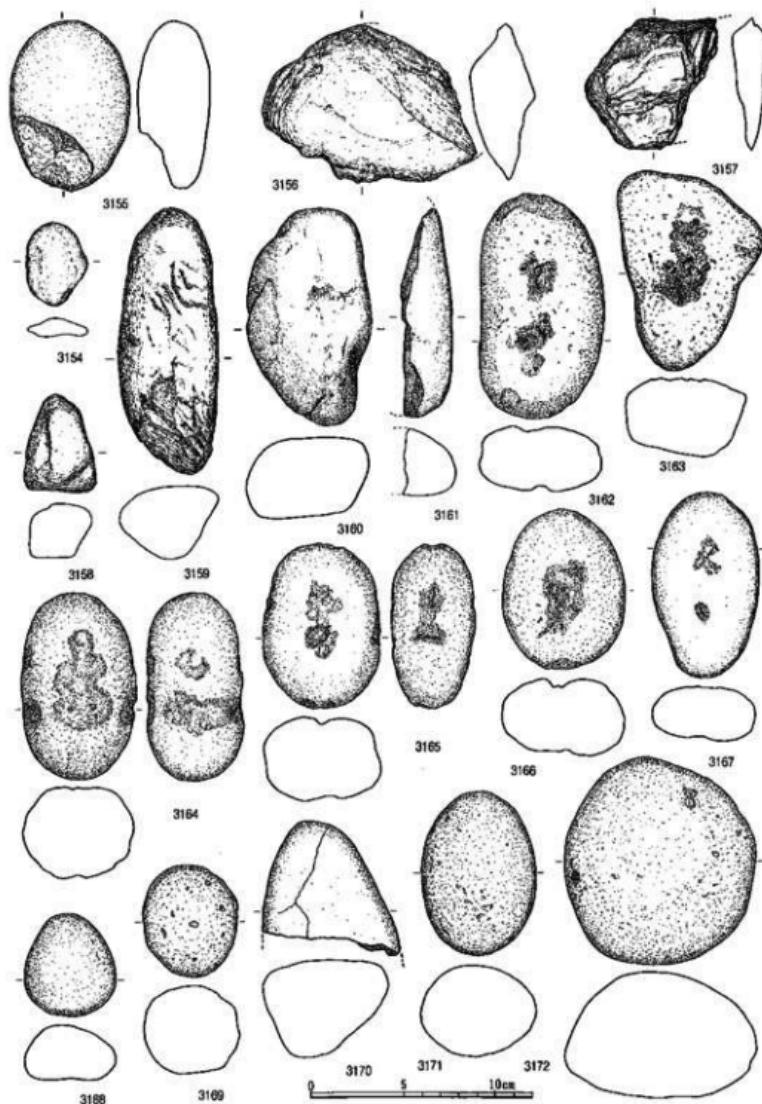
第197図 42号住居址出土の石器 (1/3 3119-3120 : 1/9)

3105-3106-3110-3111-3113-3116-3117-3119-3120 : 鞍石角閃石安山岩
3107-3109-3112-3114-3115-3118 : 鞍心安山岩



第198図 42号住居址出土の石器 (1/2)

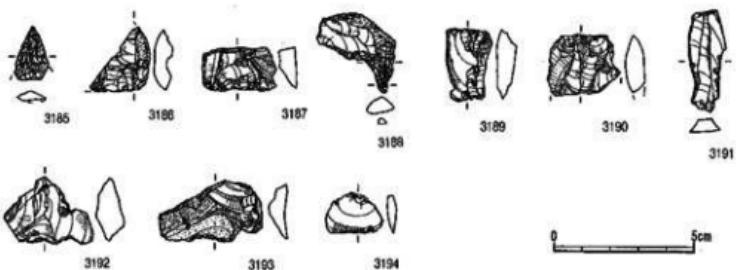
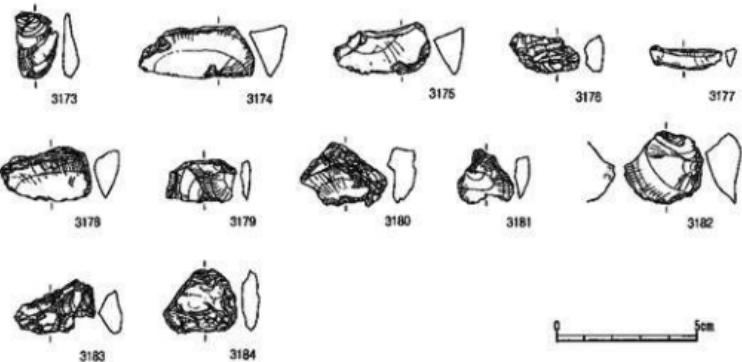
3121~3129・3132~3153: 黒曜石 3130: ホルンフェルス 3131: 建賀貞岩



第199図 43, 44, 46号住居址出土の石器 (1/3)

3154: 43号住居址 3155: 44号住居址 3156~3172: 46号住居址

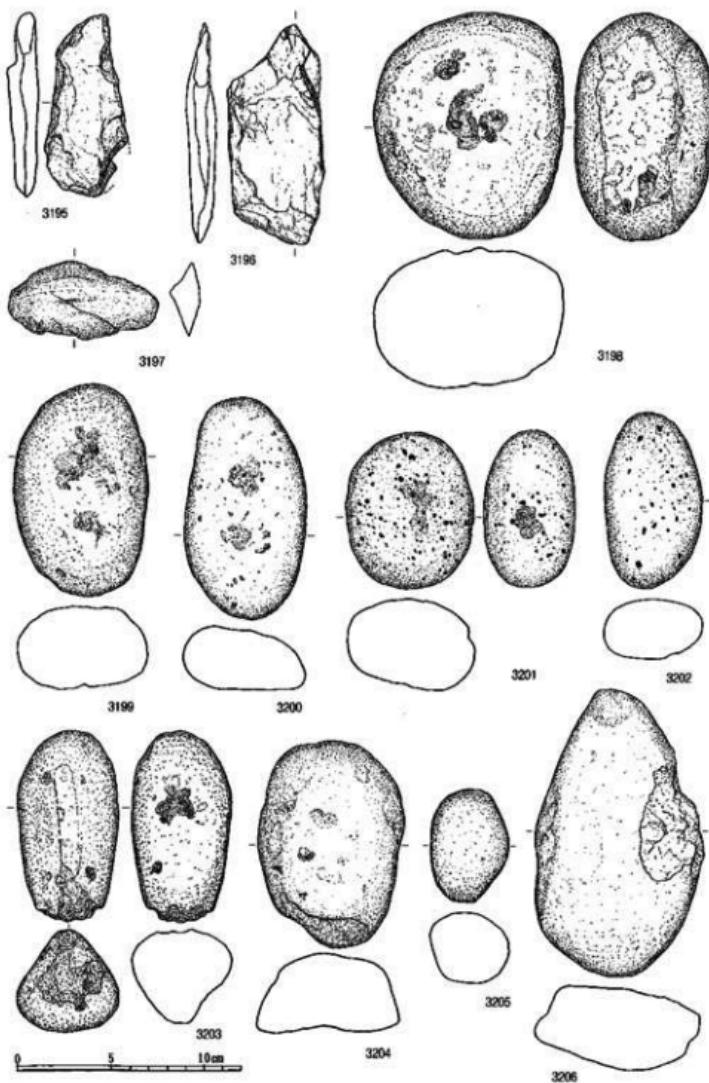
3155~3164: 磐石安山岩 3154: 磐岩 3156: 粘板岩 3157: ホルンフェルス 3158: 石英斑岩
3159~3160: 球砂岩 3162~3163~3172: 磐石角閃石安山岩 3161: 磐綠岩



第200図 43, 46号住居址出土の石器 (1/2)

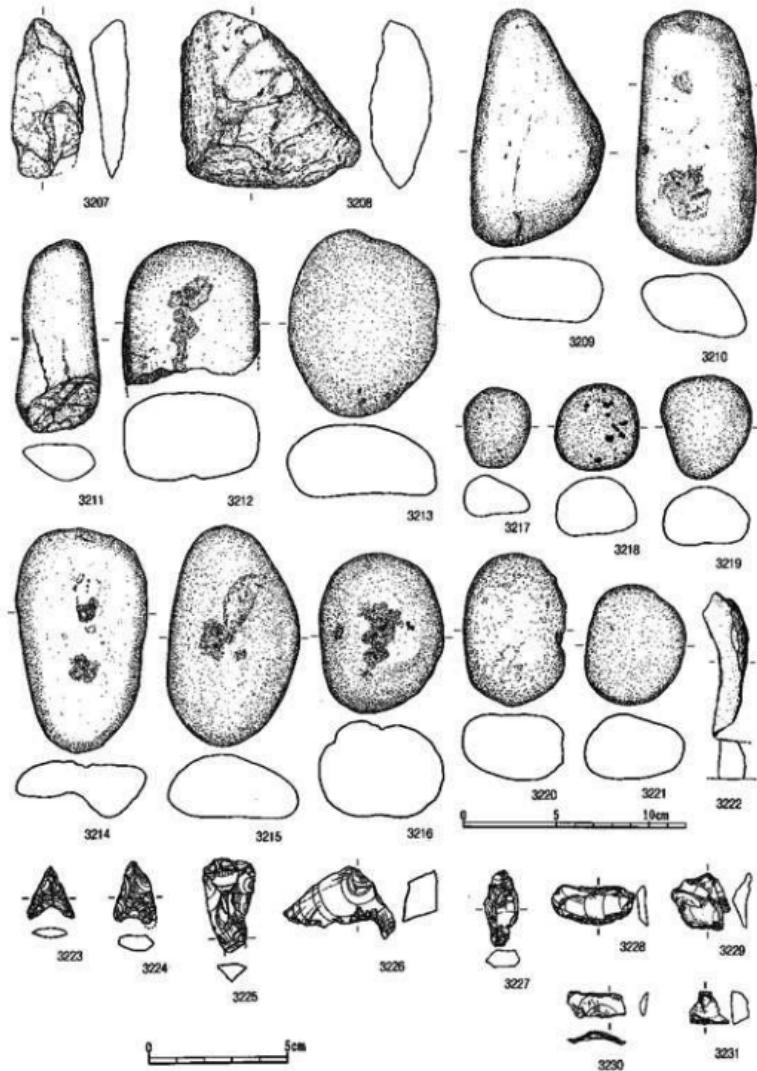
3173~3184 : 43号住居址 3185~3194 : 46号住居址

3173~3183・3185~3194 : 黒曜石 3184 : 結板岩



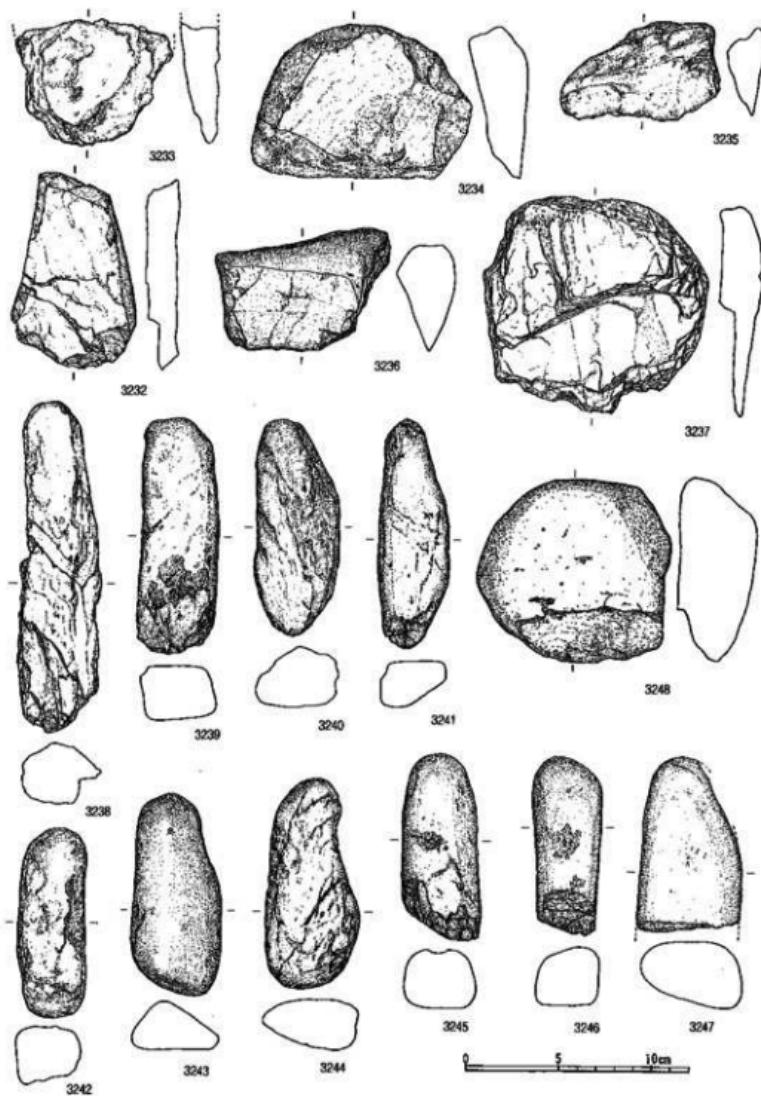
第201図 47号住居址出土の石器 (1/3)

3195・3197：硬砂岩 3196：粘板岩 3198・3199・3201・3204：輝石安山岩
3200・3202・3203・3205・3206：輝石角閃石安山岩



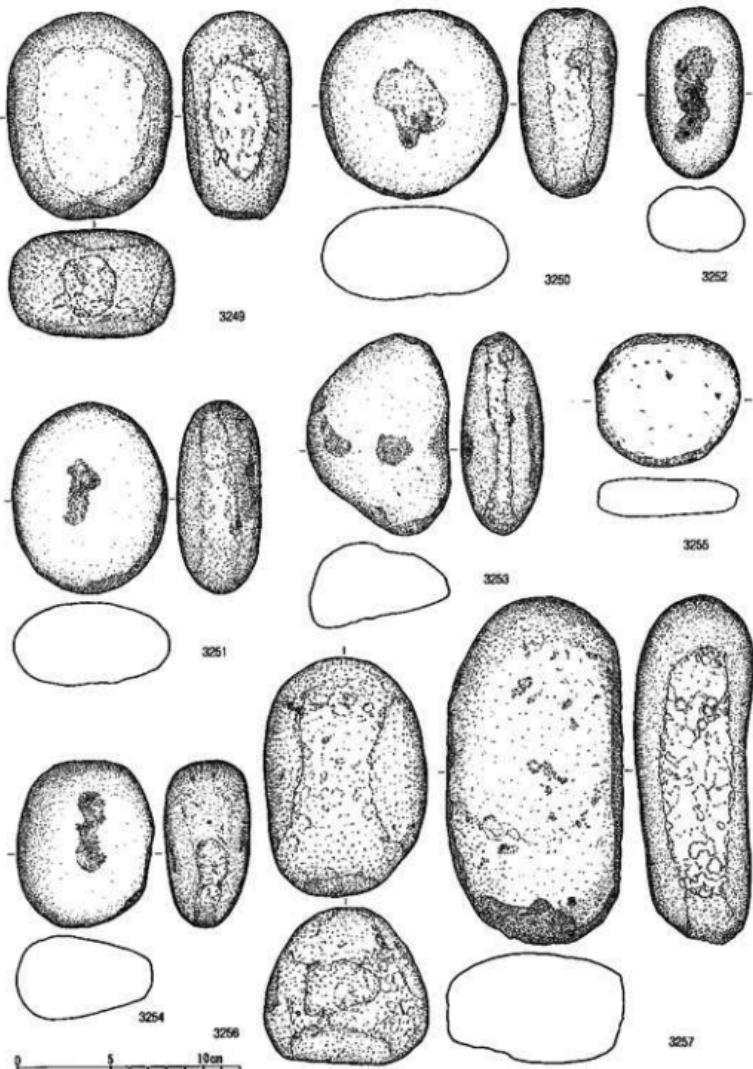
第202図 48号住居址出土の石器 (1/3 3222:1/9 3223~3231:1/2)

3207: 粘板岩 3208: 砂岩質鍛形岩 3209-3210: 硬砂岩 3212~3214・3216~3221: 鞍石角閃石安山岩
3211~3222: 鞍隕岩 3215: 鞍石安山岩 3223~3231: 黒曜石



第203図 50号住居址出土の石器 (1/3)

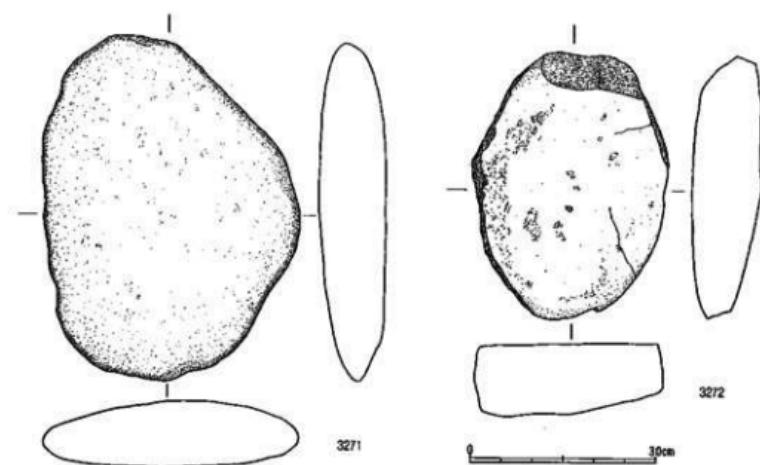
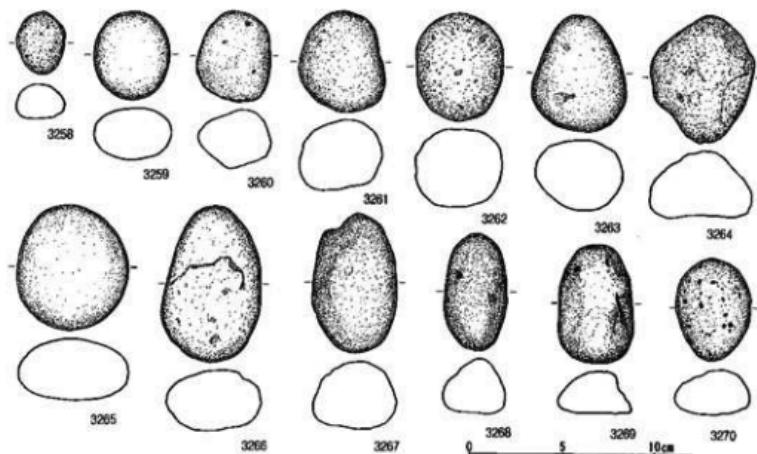
3233：砂岩ホルンフェルス 3234-3242：ホルンフェルス 3222-3225-3236-3239-3241-3243-3246：硬砂岩
3237：スレート 3238：粘板岩 3240：砂岩質硬砂岩 3248：輝石安山岩 3247：輝綠岩



第204図 49, 50号住居址出土の石器 (1/3)

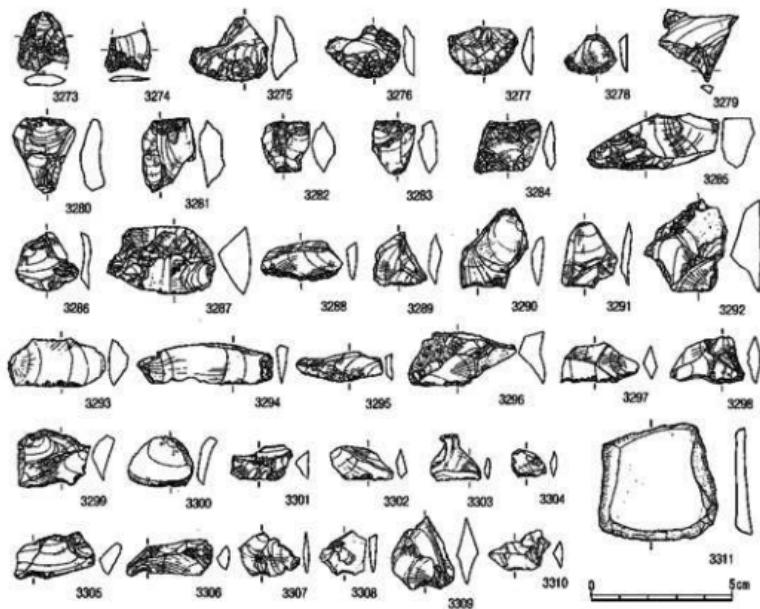
3257: 49号住居址 3249~3256: 50号住居址

3249-3257: 雄石角閃石安山岩 3250~3254-3256: 雄石安山岩 3255: スレート



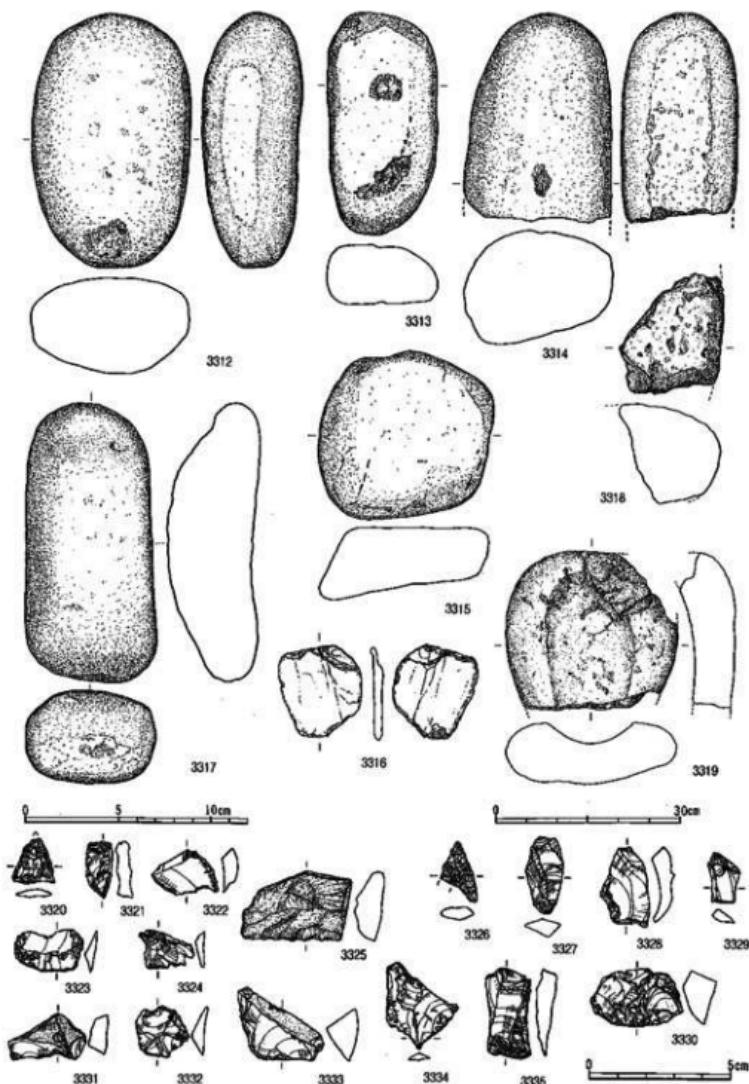
第205図 50号住居址出土の石器 (1/3 3271・3272; 1/9)

3258・3260・3264・3267・3269: 舞石角閃石安山岩 3259・3265: 硅砂岩 3261～3263・3266・3268: 舞石安山岩
3270: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩 3271・3272: 舞鎧岩



第206図 50号住居址出土の石器 (1/2)

3273~3310: 黒曜石 3311: 白岩



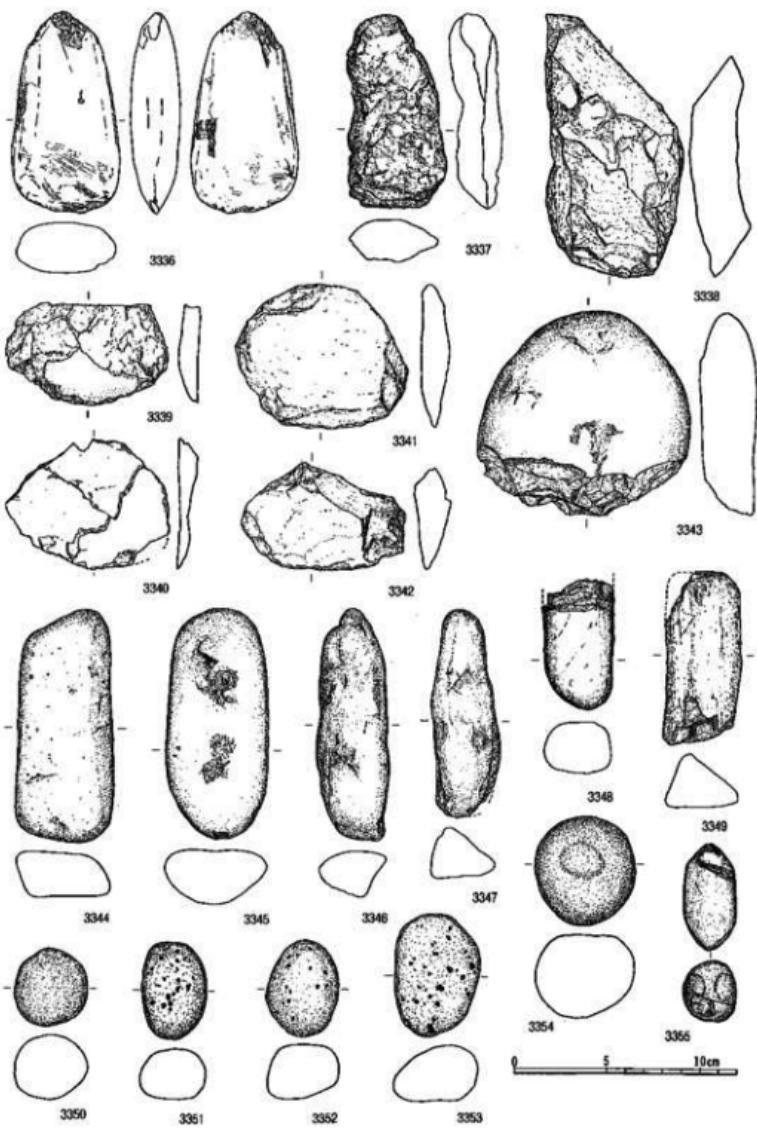
第207図 51, 52, 53号住居址出土の石器 (1/3 3319:1/9 3319:1/2)

3312~3315・3320~3325 : 51号住居址 3316~3326~3330 : 52号住居址

3317~3319・3331~3335 : 53号住居址

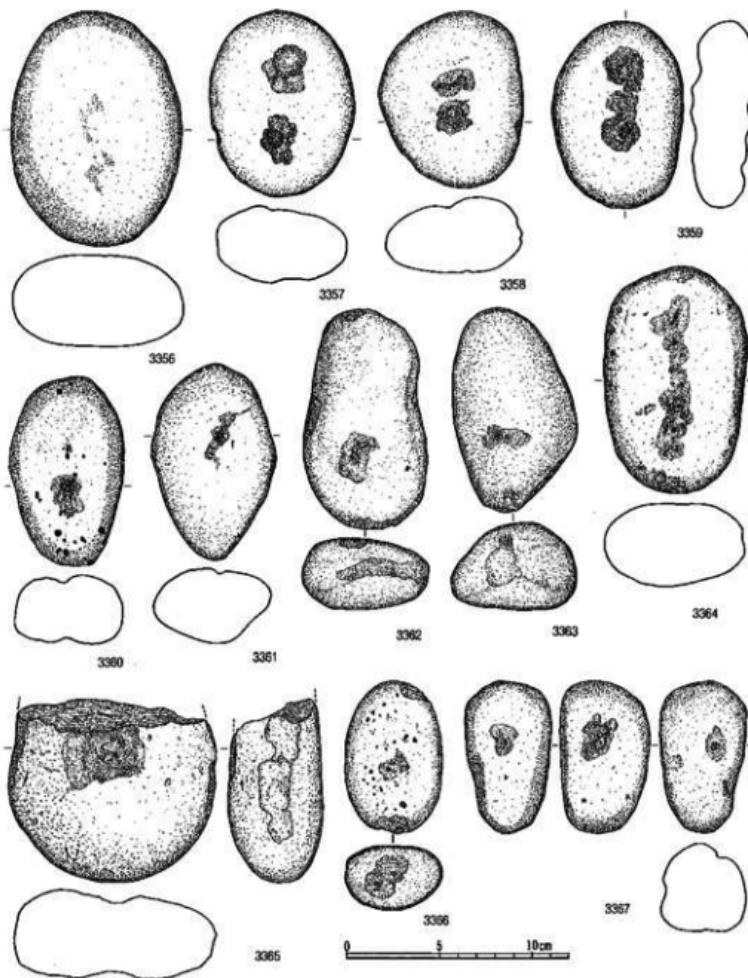
3312~3314, 3318~3319 : 鮎石安山岩 3315 : 硬砂岩 3316 : スレート 3317~3319 : 鮎石角閃石安山岩

3320~3324, 3326~3335 : 黒曜石 3325 : ホルンフェルス



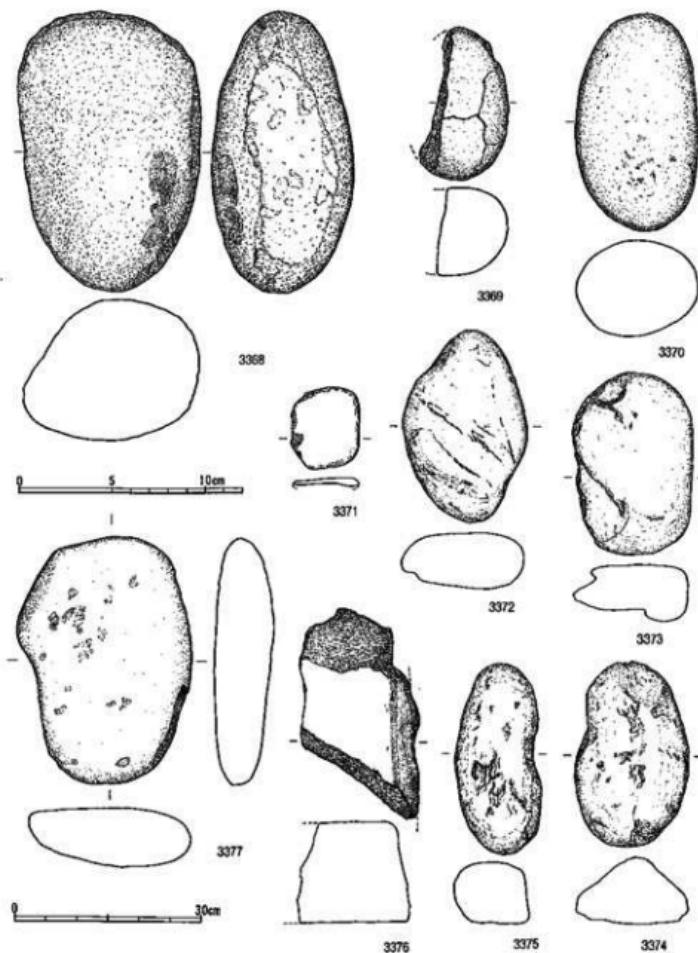
第208図 54号住居址出土の石器 (1/3)

3336: 蛇紋岩 3337: 粘板岩質砂岩 3338~3340·3345~3348·3355: 砥砂岩 3341·3349: 粘板岩ホルンフェルス
3350~3352·3354: 舞石安山岩 3342: 粘板岩 3343: 鋸荷鉢緑色岩 3344: 舞綠岩 3353: 舞石角閃石安山岩



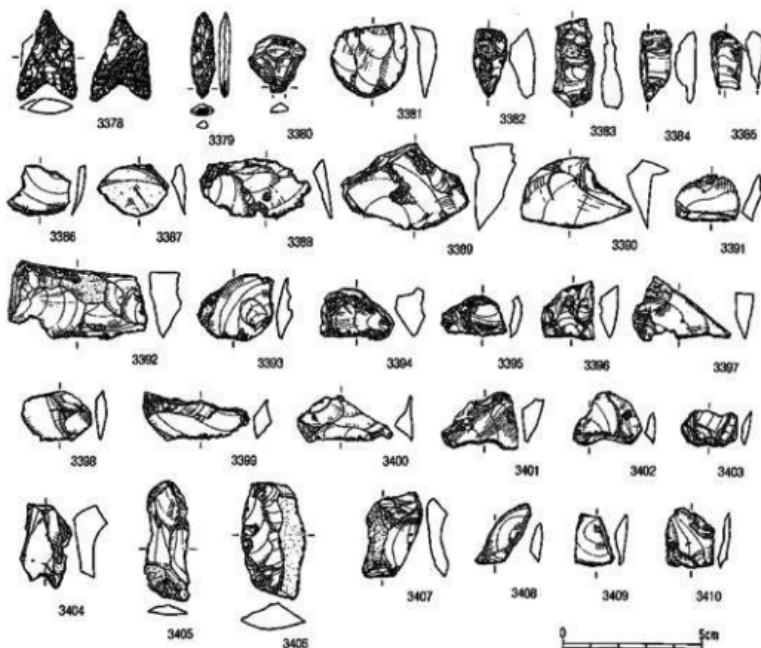
第209図 54号住居址出土の石器 (1/3)

3356・3358・3359・3361・3362・3365・3367：輝石安山岩
3357・3360・3363・3364・3366：輝石角閃石安山岩



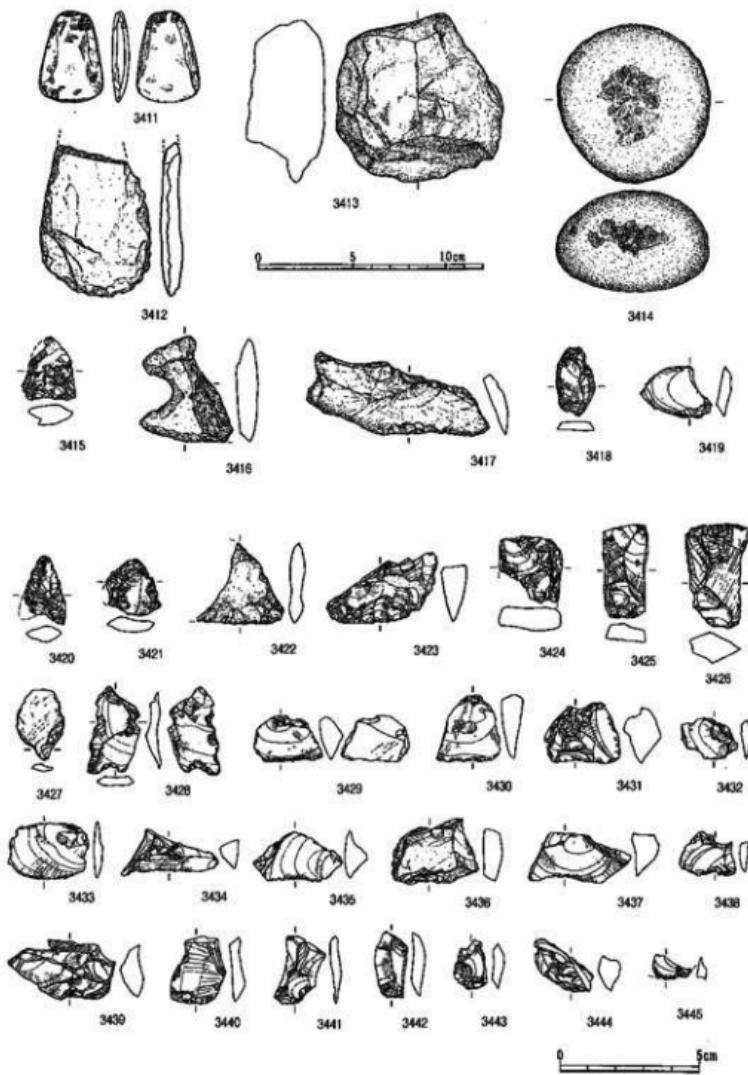
第210図 54号住居址出土の石器 (1/3 3377:1/9)

3368・3377：輝石角閃石安山岩 3369-3370：輝石安山岩 3372-3373：透矽岩 3371：スレート
3374：花崗岩 3375：粘板岩 3376：閃綠玢岩(?)



第211図 54号住居址出土の石器 (1/2)

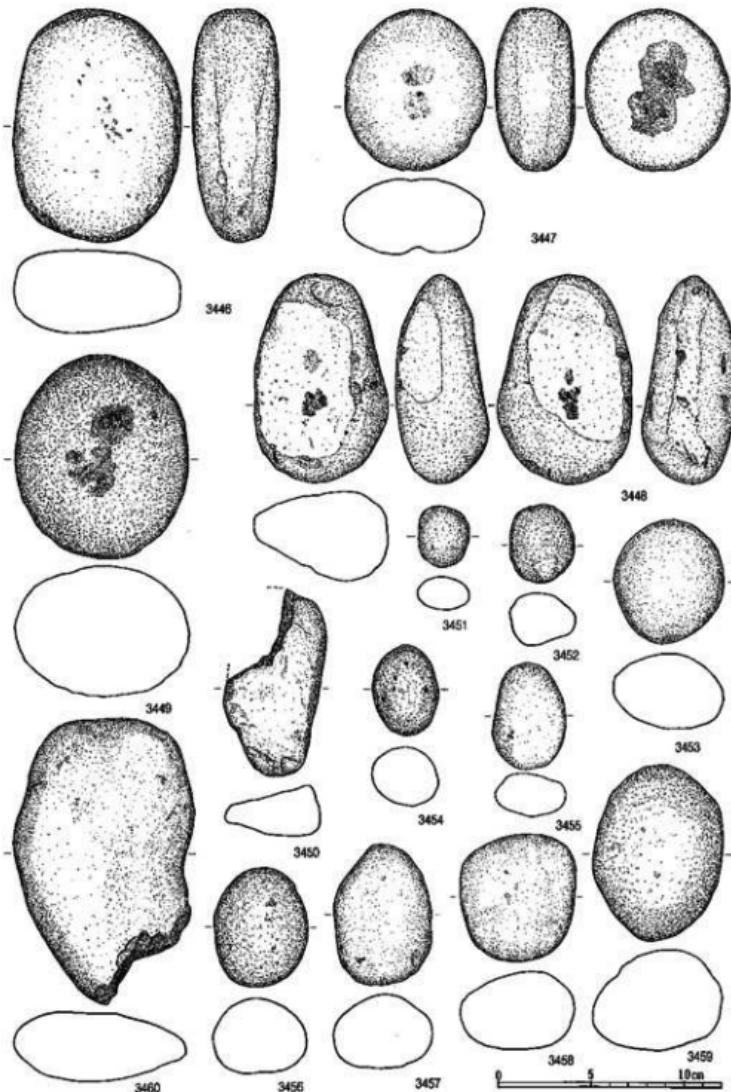
3378~3410：墨曜石



第212図 55, 56号住居址出土の石器 (3411~3414 : 1/3 3415~3445 : 1/2)

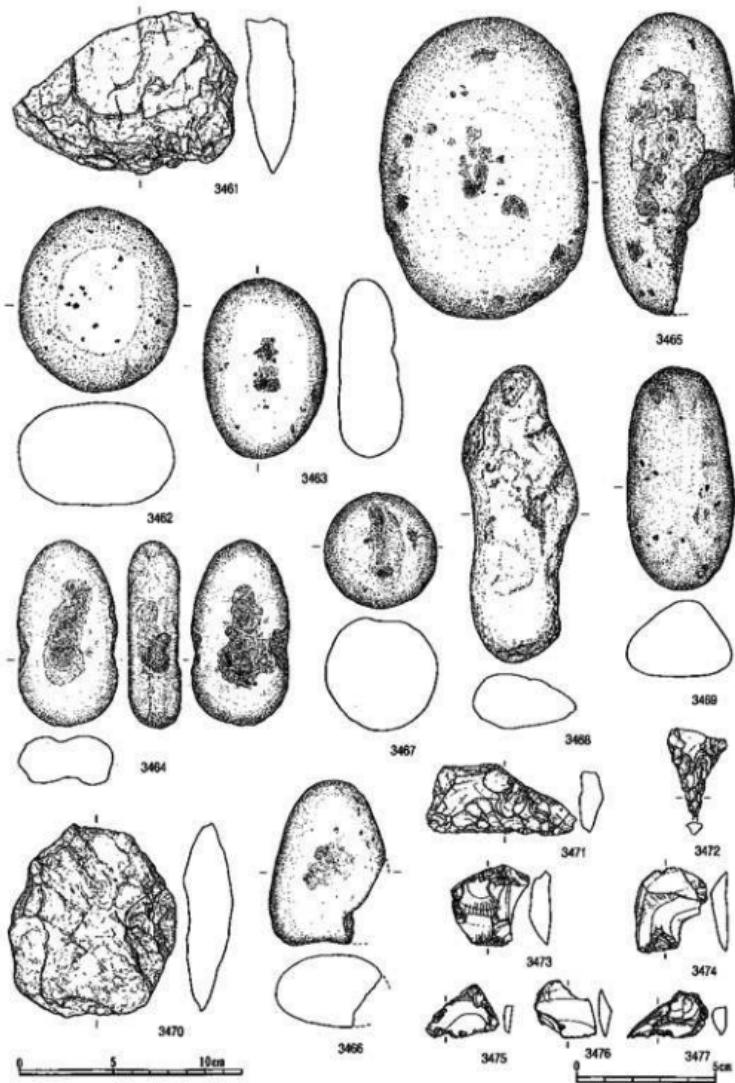
3411~3419 : 55号住居址 3420~3445 : 56号住居址

3411：輝線凝灰岩 3412-3413：硬砂岩 3414：輝石安山岩 3415-3418~3421-3423~3445：黒曜石
3416：ホルンフェルス 3417：珪質頁岩 3422：チャート



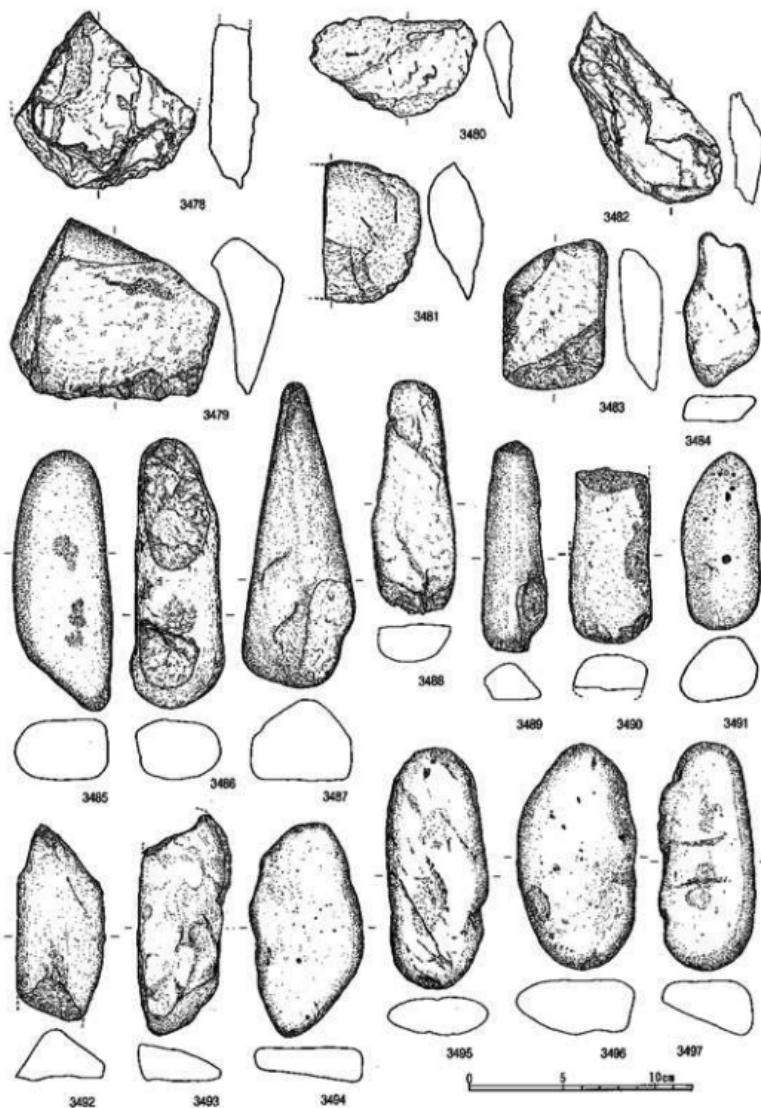
第213図 56号住居址出土の石器 (1/3)

3446~3449-3451~3454-3456~3460: 鋸石角閃石安山岩 3450: 褐砂岩 3455: 鋸石安山岩



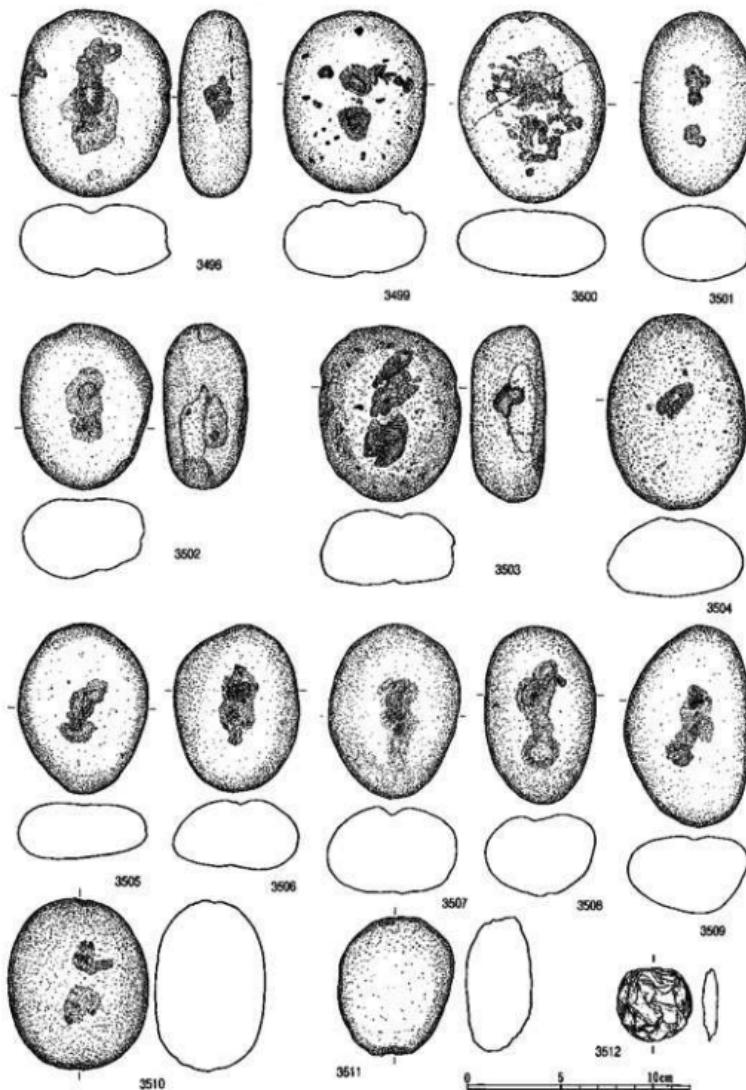
第214図 57号住居址出土の石器 (1/3 3471~3477:1/2)

3461: 粘板岩 3462: 輝石角閃石安山岩 3463~3465-3467-3469: 輝石安山岩 3466: 輝隕岩
3468: 鈍荷鉛綠色岩 3470: 粘板岩質砂岩 3471: 珪質頁岩 3472~3477: 黑曜石



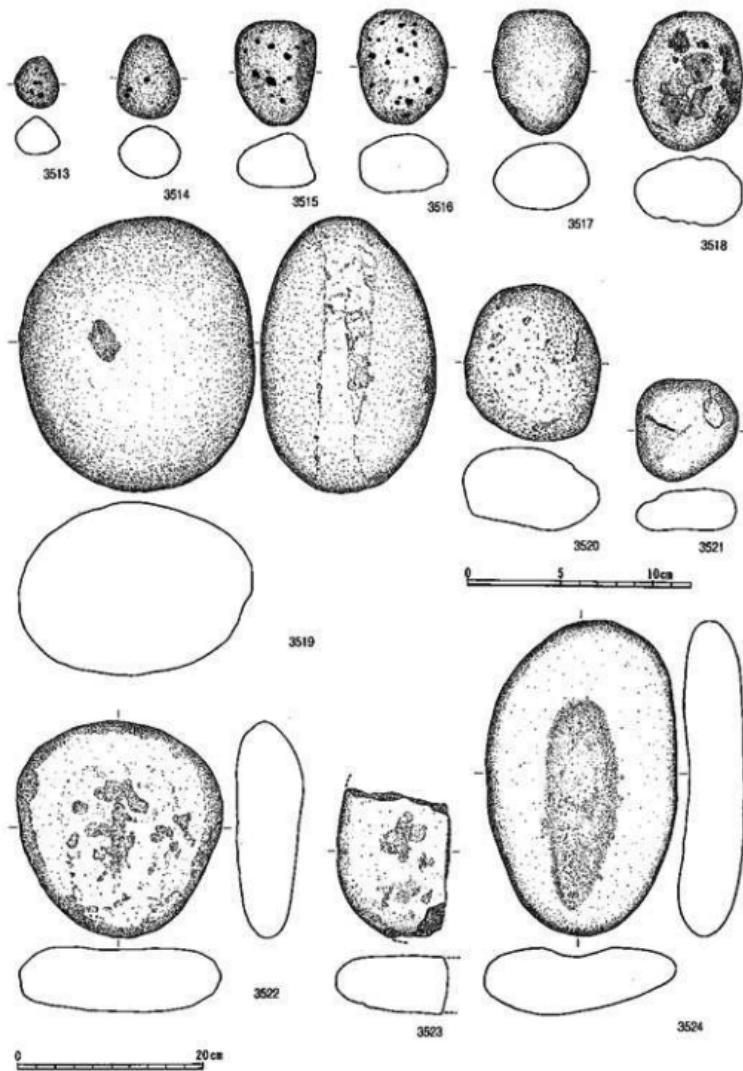
第215図 58号住居址出土の石器 (1/3)

3478 : 組板岩ホルンフェルス	3480-3481-3483-3484-3488~3490-3492-3495 : 穀砂岩	4382 : 組板岩
3479-3485-3494-3497 : 輝緑岩	3487-3493 : 砂岩質硬砂岩	3491-3496 : 鮎石安山岩



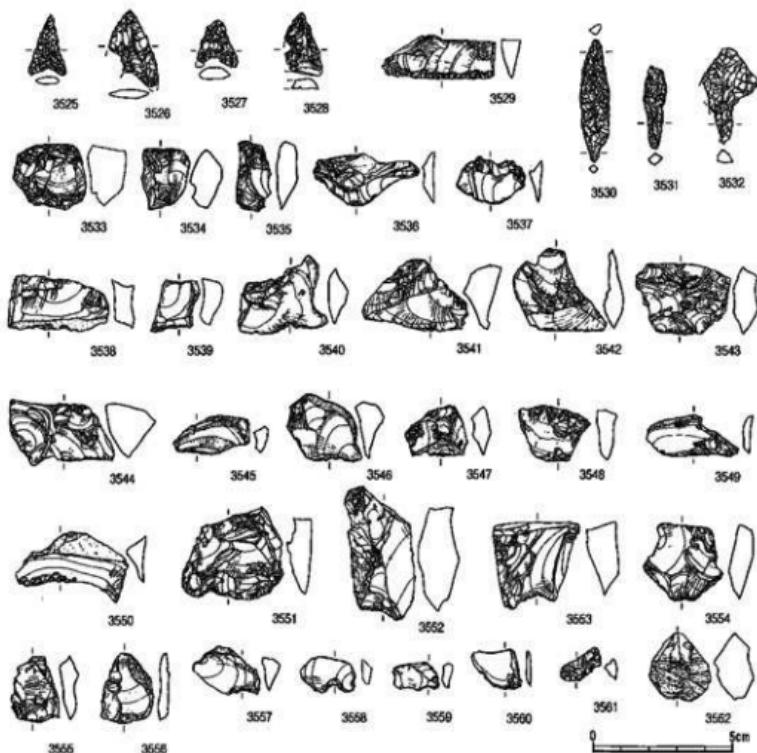
第216図 58号住居址出土の石器 (1/3)

3498-3502～3504・3508・3506・3510：輝石安山岩 3499-3501・3505・3507-3509-3511：輝石角閃石安山岩
3500：輝緑岩 3512：粘板岩



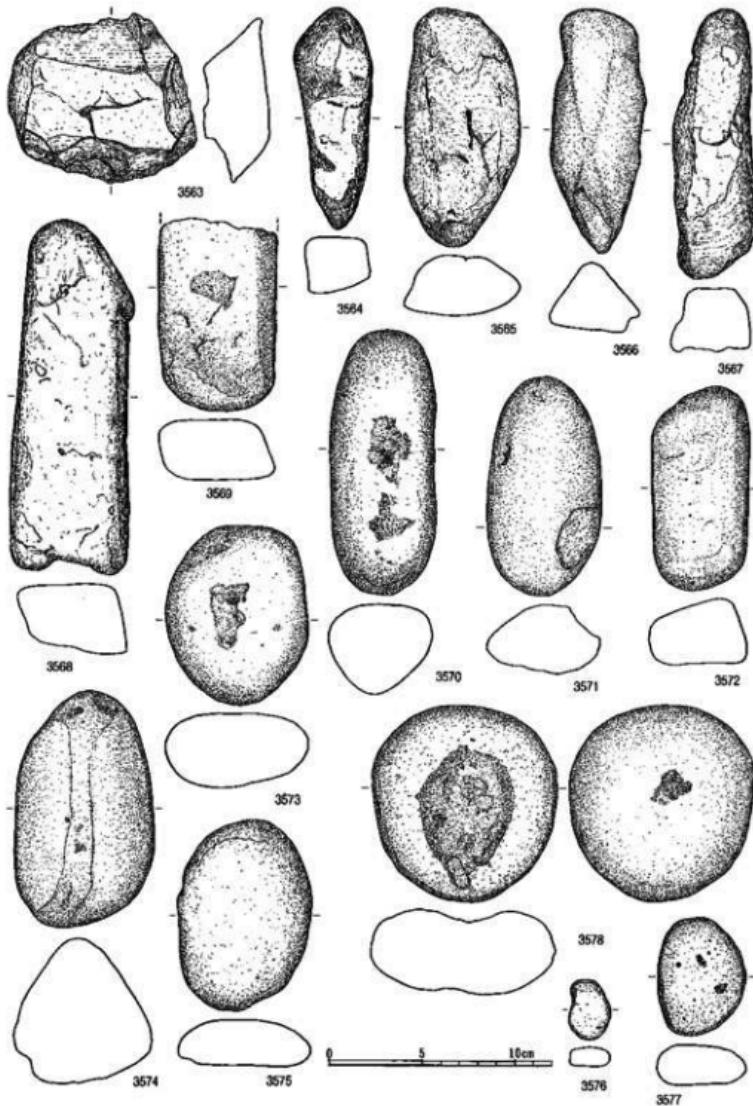
第217図 58号住居址出土の石器 (1/3 3522-3523:1/6)

3513~3517・3519・3522: 鮫石角閃石安山岩 3518・3520: 鮫石安山岩 3523・3524: 鮫綠岩 3521: 硬砂岩



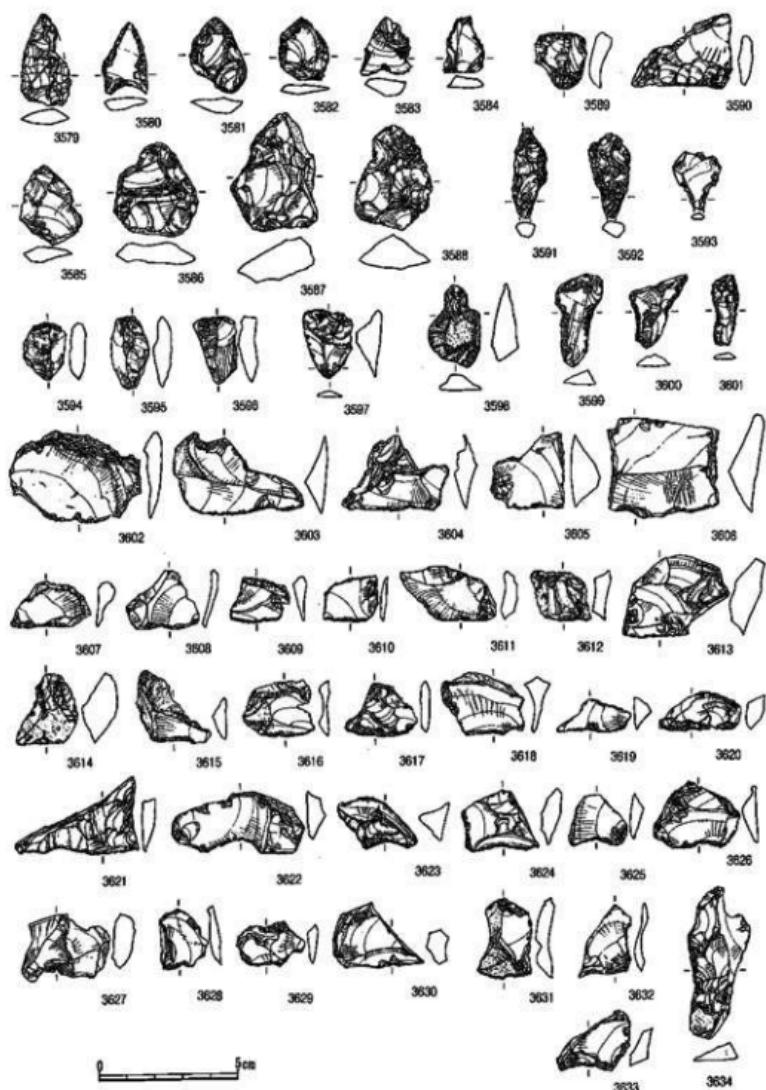
第218図 58号住居址出土の石器 (1/2)

3525～3529・3533～3561：黒耀石 3530～3532：珪質頁岩 3562：水晶



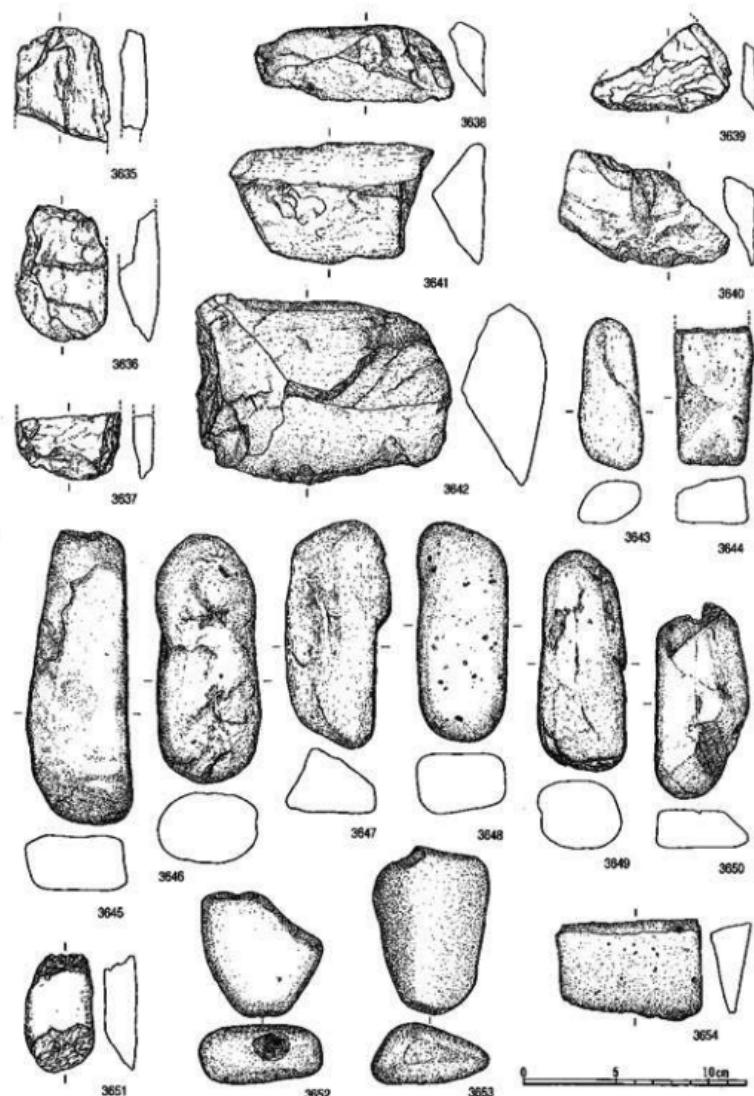
第219図 59号住居址出土の石器 (1/3)

3563-3565~3567-3573:砂岩 3564-3568-3576:種沙岩 3569-3575:輝緑岩
3570~3572-3574-3577:輝石角閃石安山岩 3578:輝石安山岩



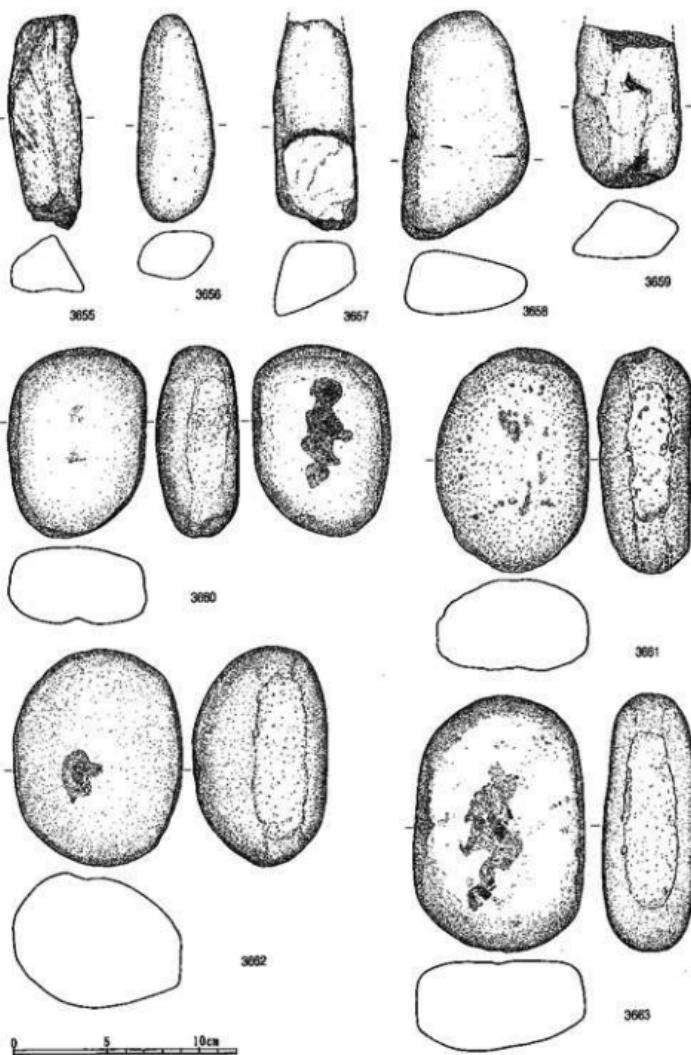
第220図 59号住居址出土の石器 (1/2)

3579~3620, 3622~3634; 黒曜石 3621: チャート



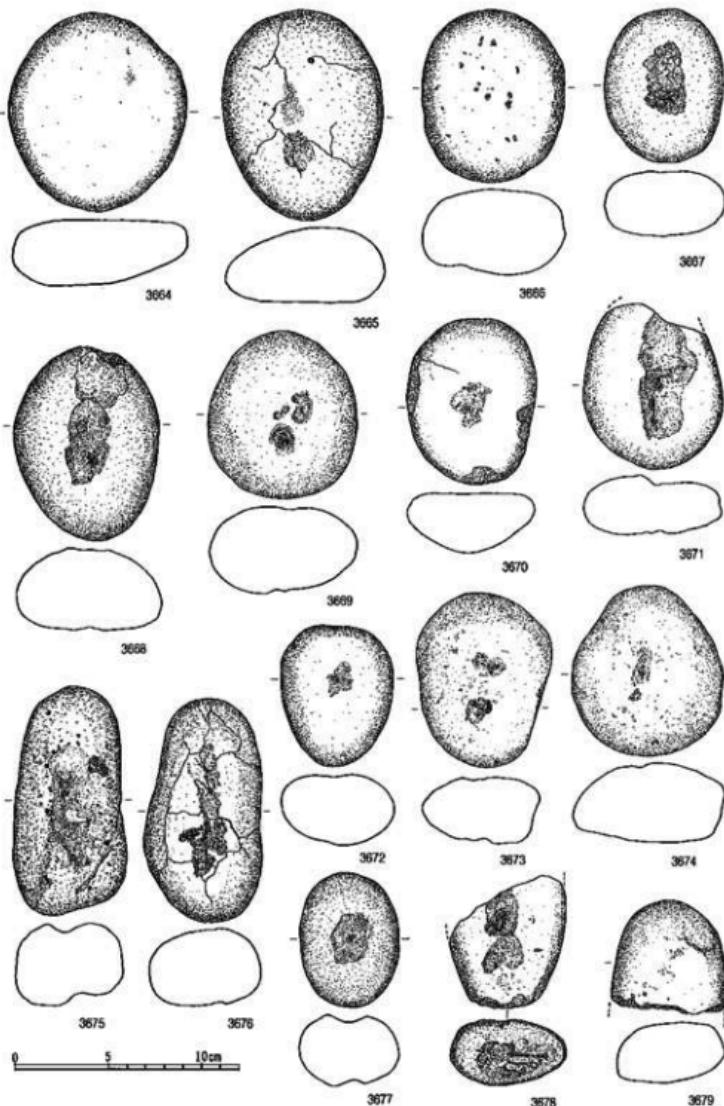
第221図 60号住居址出土の石器 (1/3)

3635-3640 : 粘板岩
 3636 : 粘板岩ホルンフェルス
 3637 : 硬砂岩質砂岩
 3638-3639-3641-3643-3645-3646-3649-3650 : 硬砂岩
 3642 : 砂岩質粘板岩
 3652-3654 : 埴石安山岩
 3644-3648 : 輝角閃石安山岩
 3647 : 粘板岩質砂岩
 3651 : 鋸荷鉛綠色岩



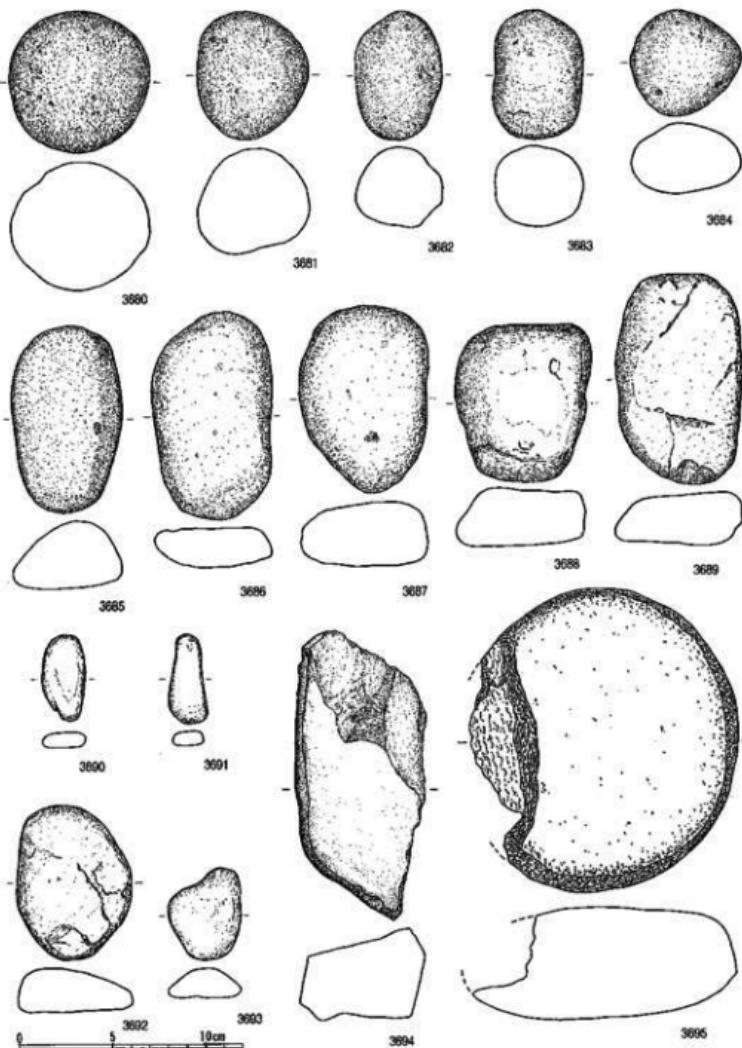
第222図 60号住居址出土の石器 (1/3)

3655: 粘板岩 3656-3657: 鋸綠岩 3658-3659: 滑砂岩 3660-3663: 鋸石安山岩
3664-3665: 鋸石角閃石安山岩



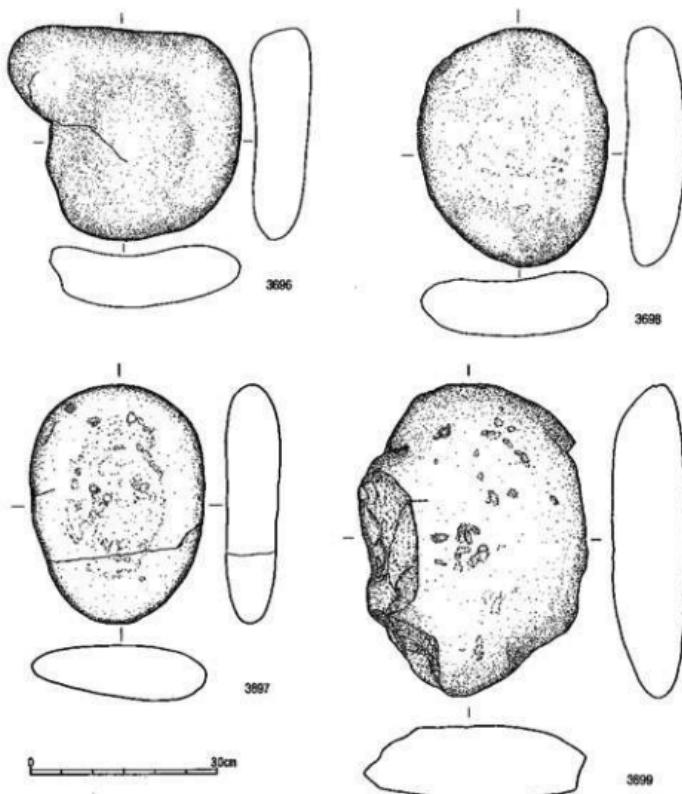
第223図 60号住居址出土の石器 (1/3)

3664~3666~3668~3670~3673~3675: 鮎石角閃石安山岩 3678: 鮎鋸岩
3667~3671~3672~3674~3676~3677~3679: 鮎石安山岩



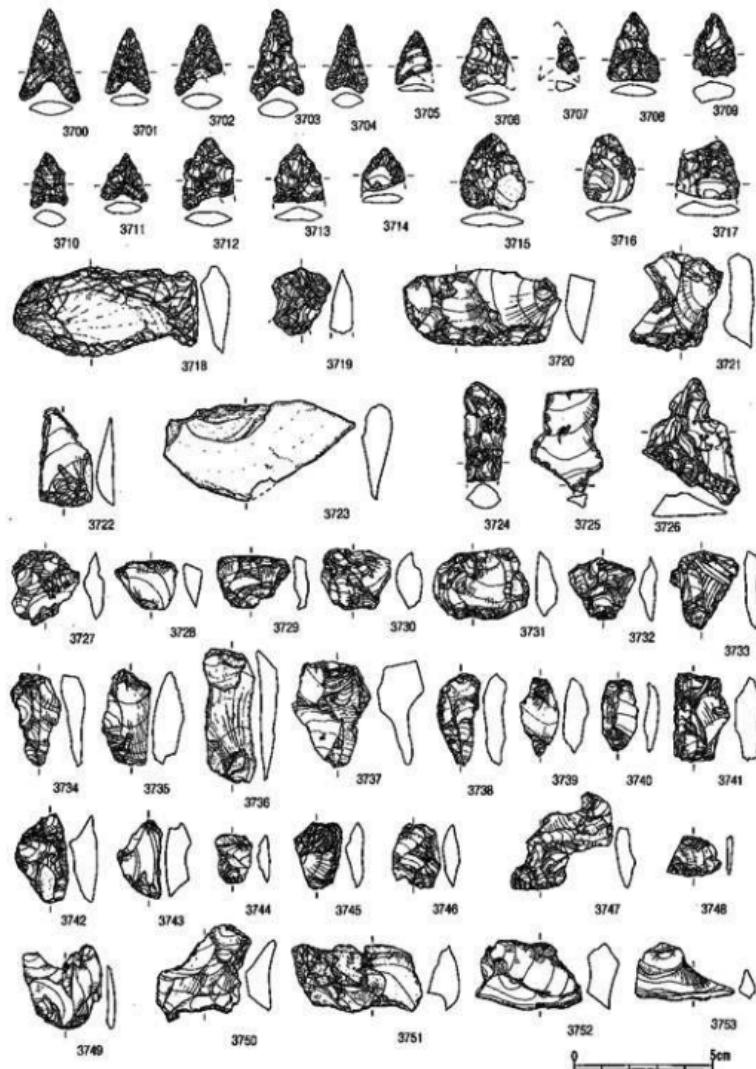
第224図 60号住居址出土の石器 (1/3)

3680~3687-3695: 岸石角閃石安山岩 3688: 石英斑岩 3689-3692: 球粒岩
 3690: スレート 3691: 粘板岩 3693: 御前鉢緑色岩 3694: 砂岩



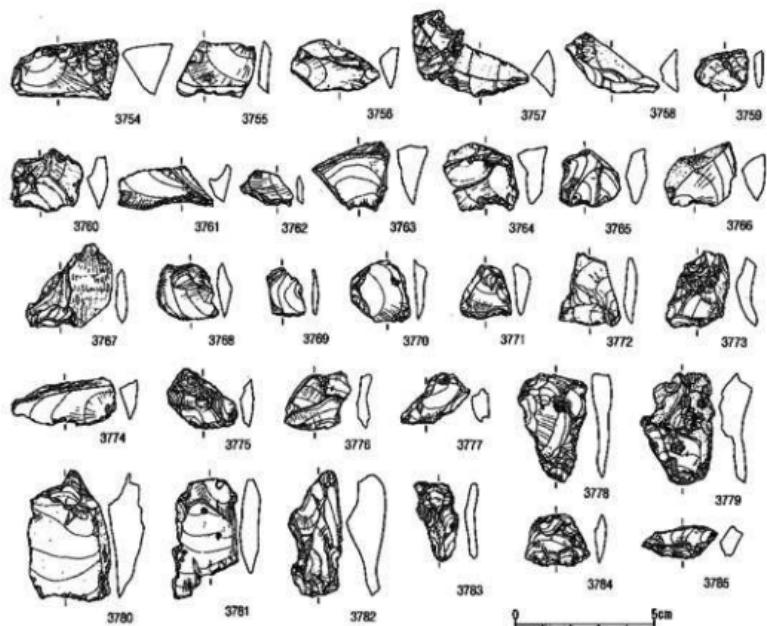
第225図 60号住居址出土の石器 (1/9)

3696-3697-3699: 鋸石安山岩 3698: 単斜輝石斜方輝石角閃石安山岩



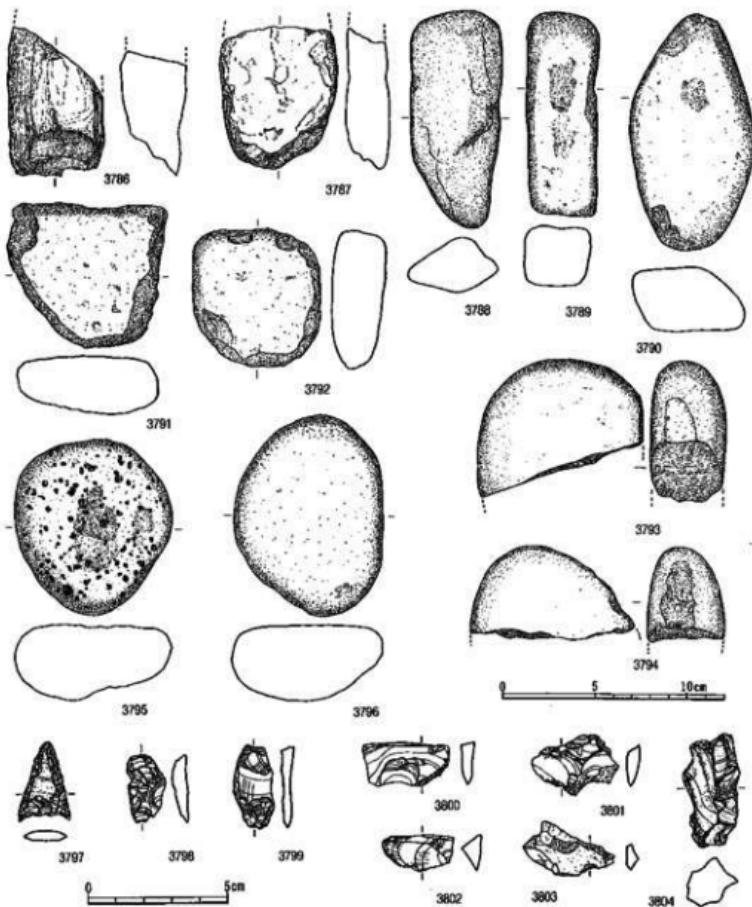
第226図 60号住居址出土の石器 (1/2)

3700~3703・3705~3717・3719~3722・3724~3726: 黒曜石 3704: チャート 3718: 砂質頁岩 3723: 頁岩



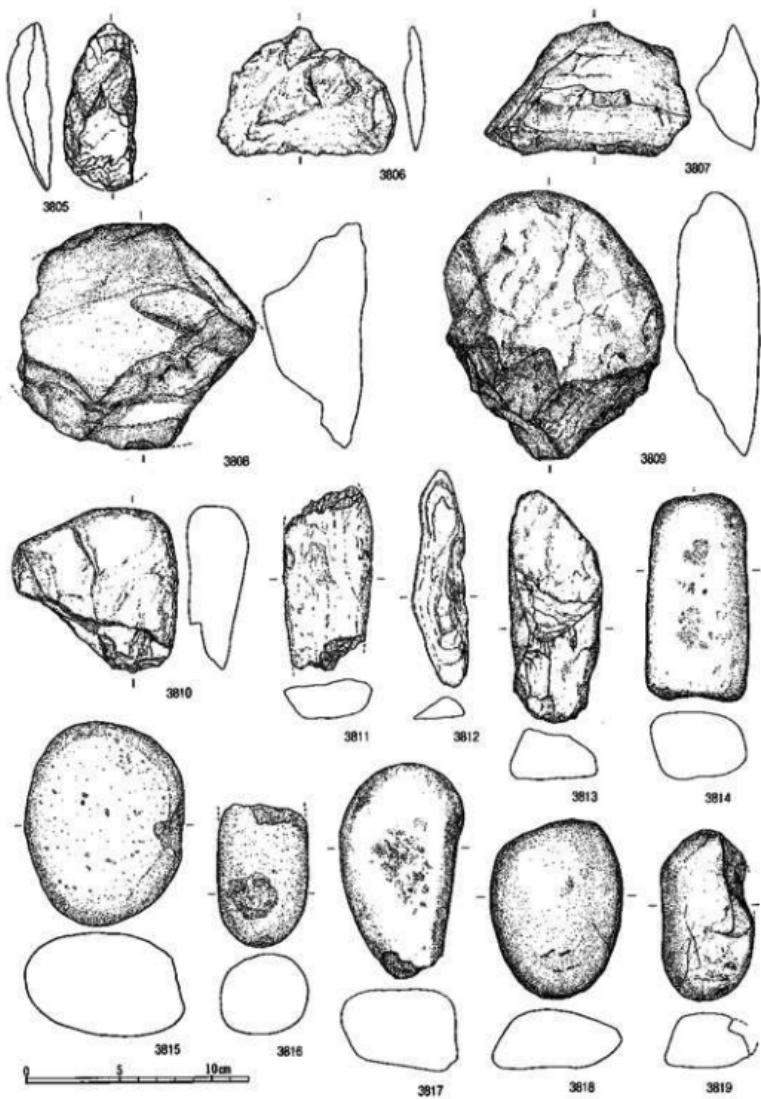
第227図 60号住居址出土の石器 (1/2)

3754~3785: 黒曜石



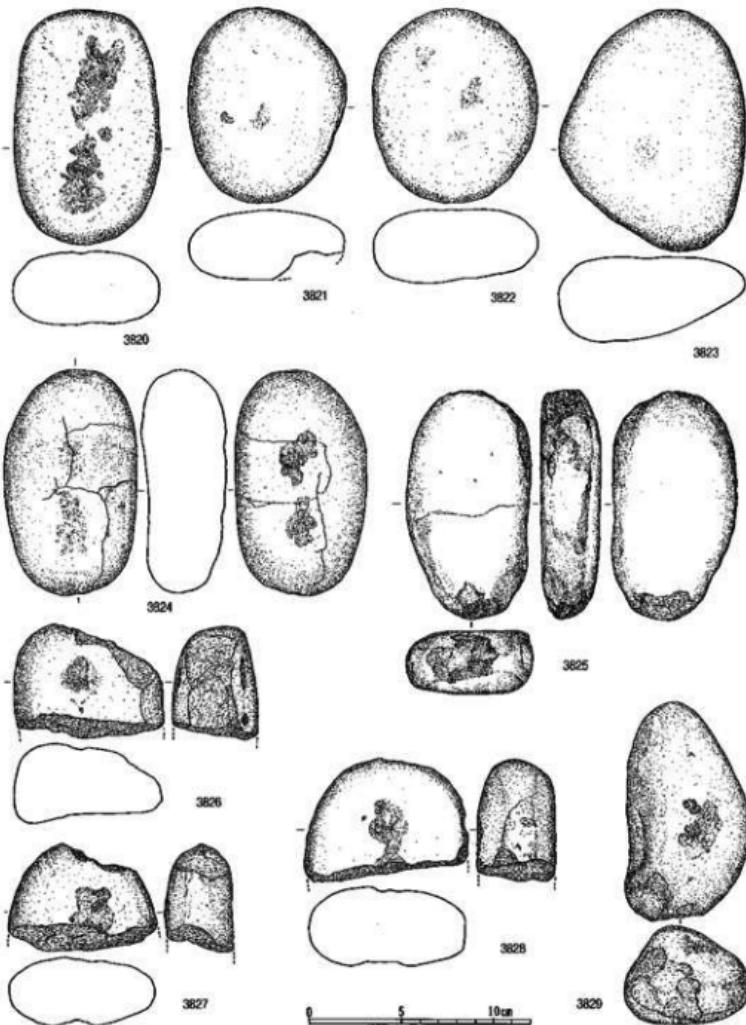
第228図 61号住居址出土の石器 (1/3 3797~3804:1/2)

3786:粘板岩 3787:粘晶片岩 3788・3790:硬砂岩 3789:輝綠岩 3791~3793・3795~3796:輝石角閃石安山岩
3794:輝石安山岩 3797~3804:黒曜石



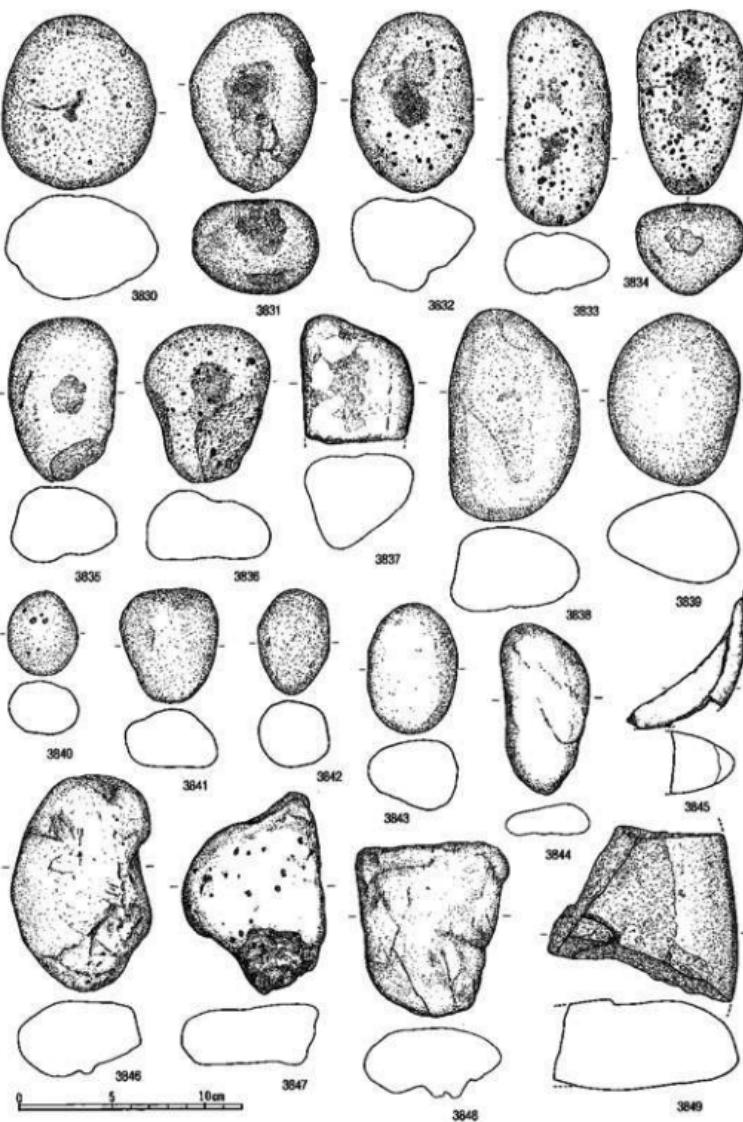
第229図 62号住居址出土の石器 (1/3)

3806-3810-3812：粘板岩ホルンフェルス 3815-3816：輝石角閃石安山岩 3805-3808-3809-3819：硬砂岩
3814-3817-3818：輝綠岩 3807：ホルンフェルス 3811：千枚岩 3813：粘板岩



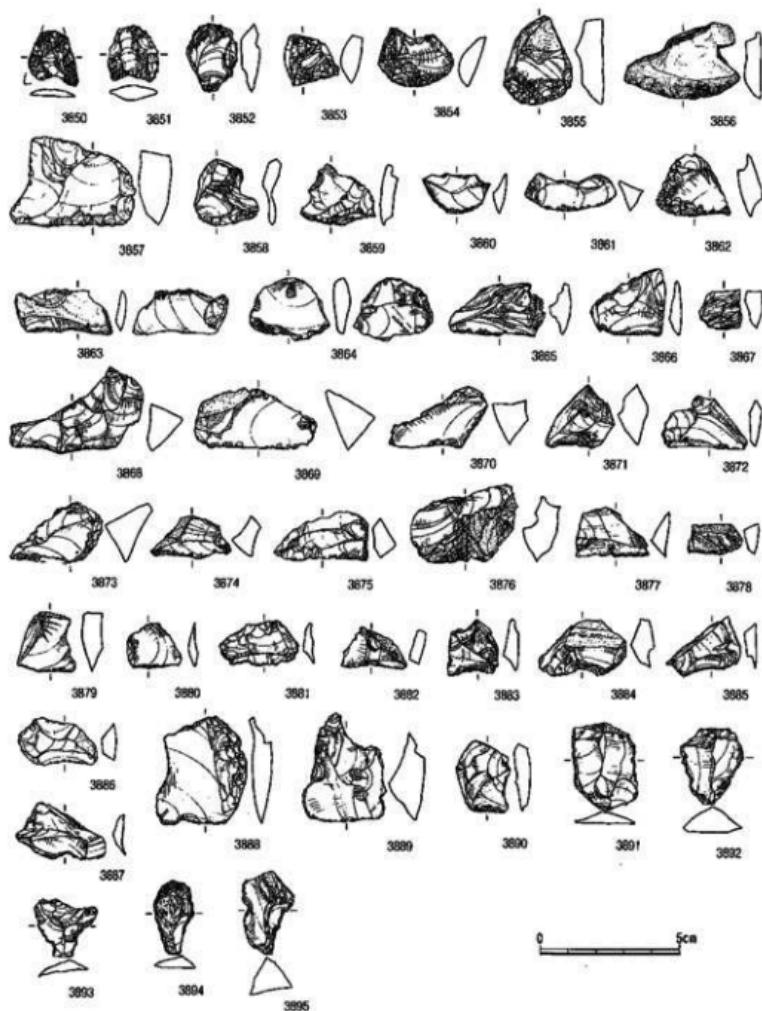
第230図 62号住居址出土の石器 (1/3)

3820～3824・3826～3829：輝石角閃石安山岩 3825：辰砂岩



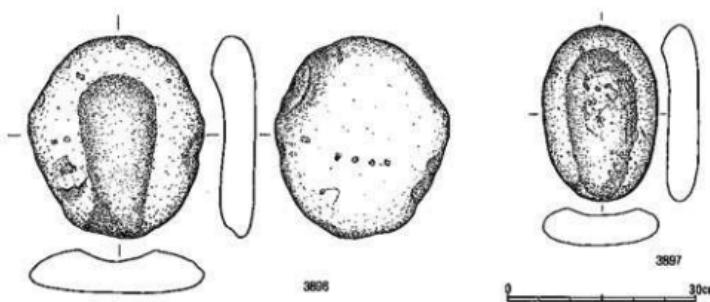
第231図 62号住居址出土の石器 (1/3 3845-3849:1/6)

3830～3836・3838～3843・3849：輝石角閃石安山岩 3837-3844-3846：辰砂岩 3845：輝綠岩
3847：輝石安山岩 3848：辰砂岩質砂岩



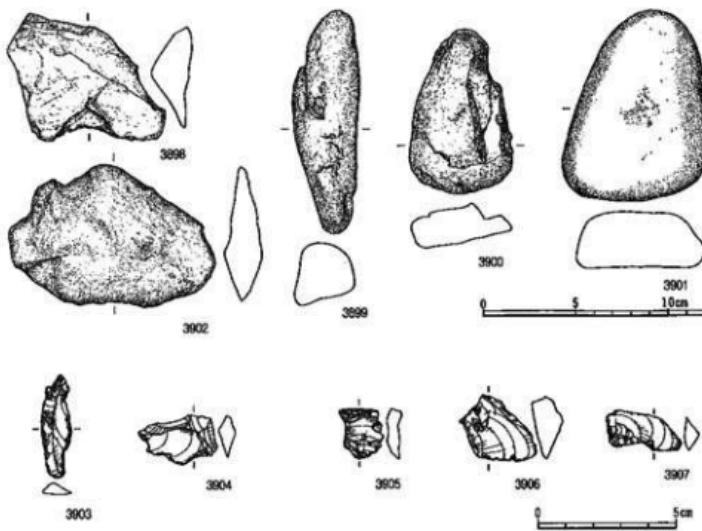
第232図 62号住居址出土の石器 (1/2)

3850~3855・3857~3895: 黒曜石 3856: 白岩



第233図 63号住居址出土の石器 (1/9)

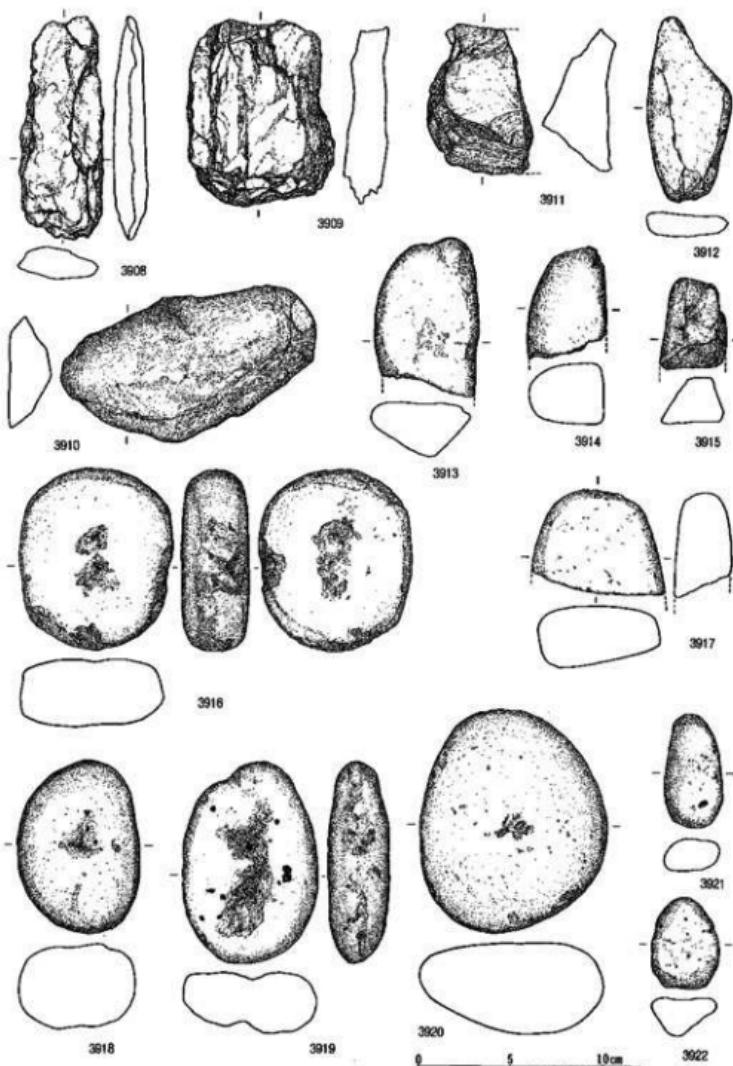
3896-3897: 磐石角閃石安山岩



第234図 1, 2号建物址出土の石器 (1/3 3903-3907:1/2)

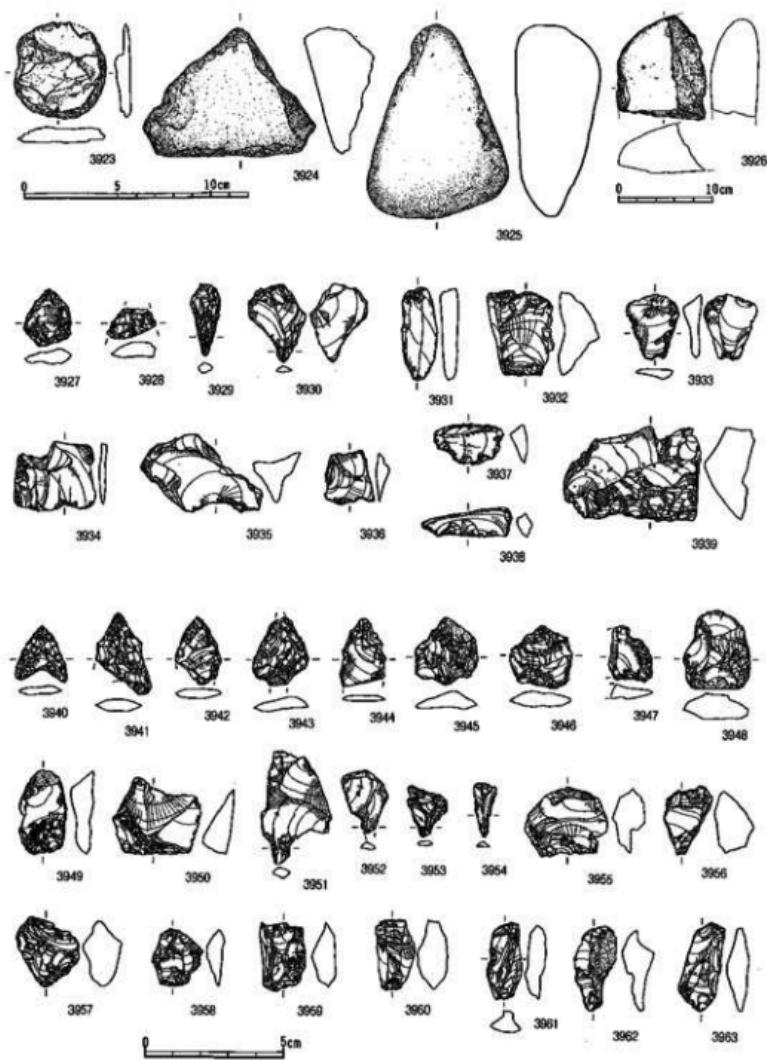
3898-3901・3903・3904: 1号建物址 3902-3905-3907: 2号建物址

3898: 粘板岩 3899: 輝綠岩 3900: ホルンフェルス 3901: 磐石角閃石安山岩 3902: 砂岩
3903-3907: 黒曜石



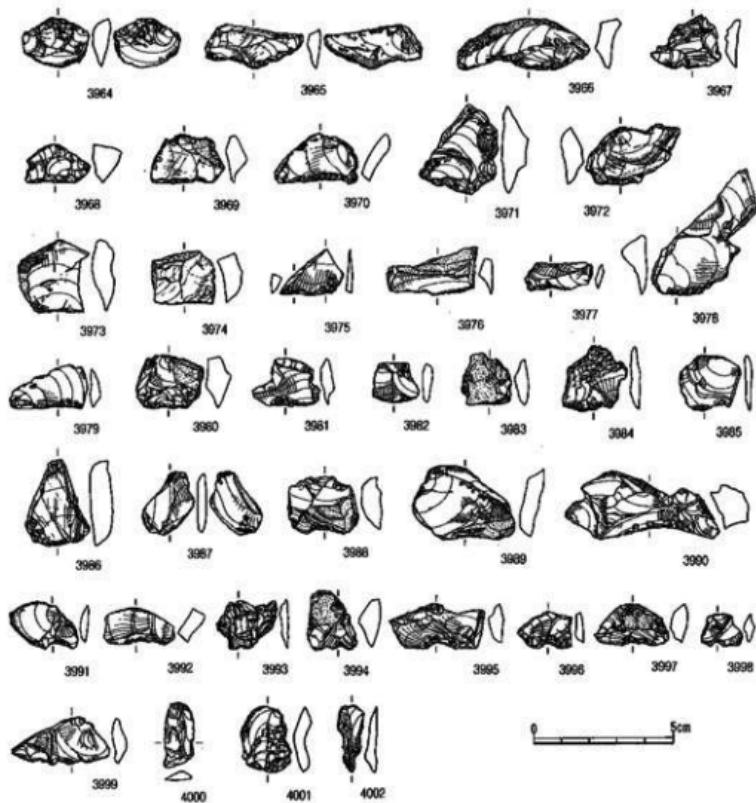
第235図 3号建物址出土の石器 (1/3)

3908-3912：粘板岩ホルンフェルス 3909：千枚岩 3910-3911-3913-3915：ホルンフェルス
 3916-3920-3921：輝石角閃石安山岩 3917-3919-3922：輝石安山岩 3914：硬砂岩



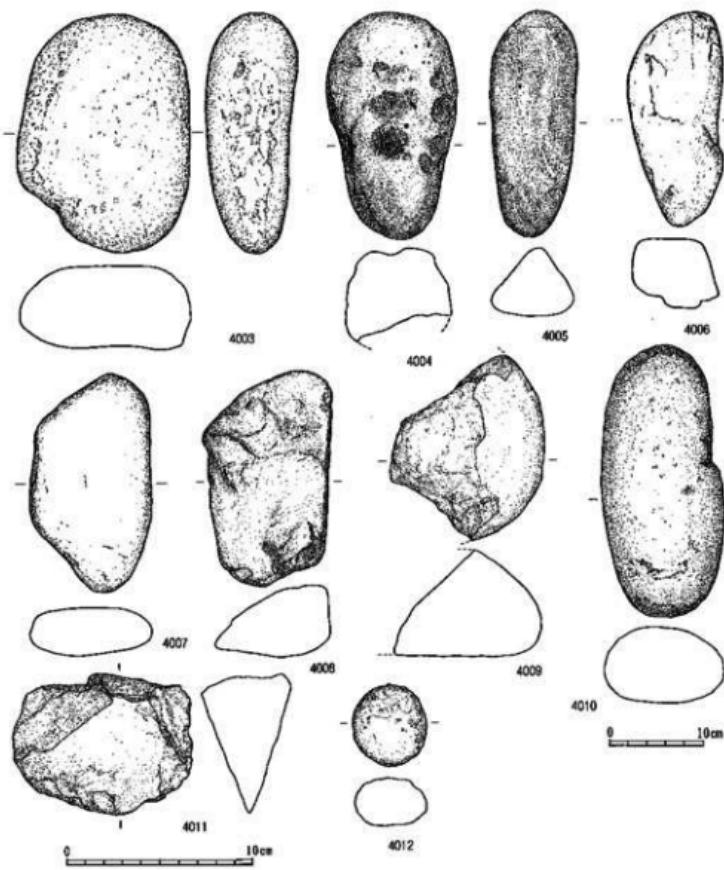
第236図 3号建物址出土の石器 (3923~3925 : 1 / 3 3926 : 1 / 6 3927~3963 : 1 / 2)

3923 : スレート質粘板岩 3924 : 花崗麻岩 3925 : 硬砂岩 3926 : 比石安山岩 3927~3963 : 黒曜石



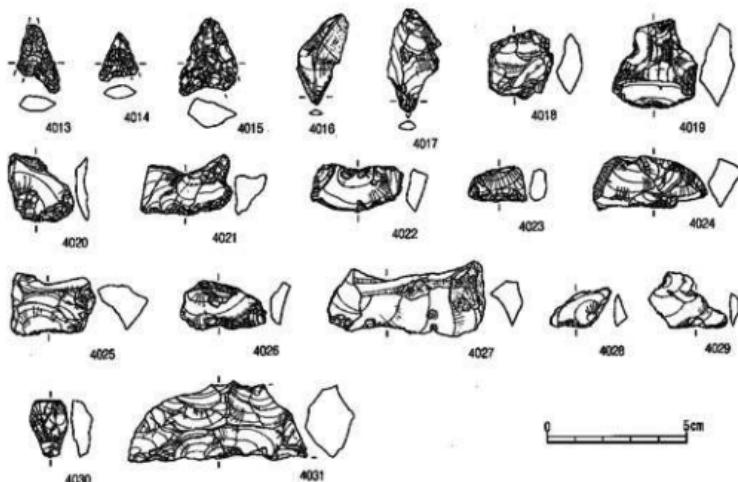
第237図 3号建物址出土の石器 (1/2)

3964~3973・3975~4002: 黒曜石 3974: チャート



第238図 4号建物址出土の石器 (1/3 4010:1/6)

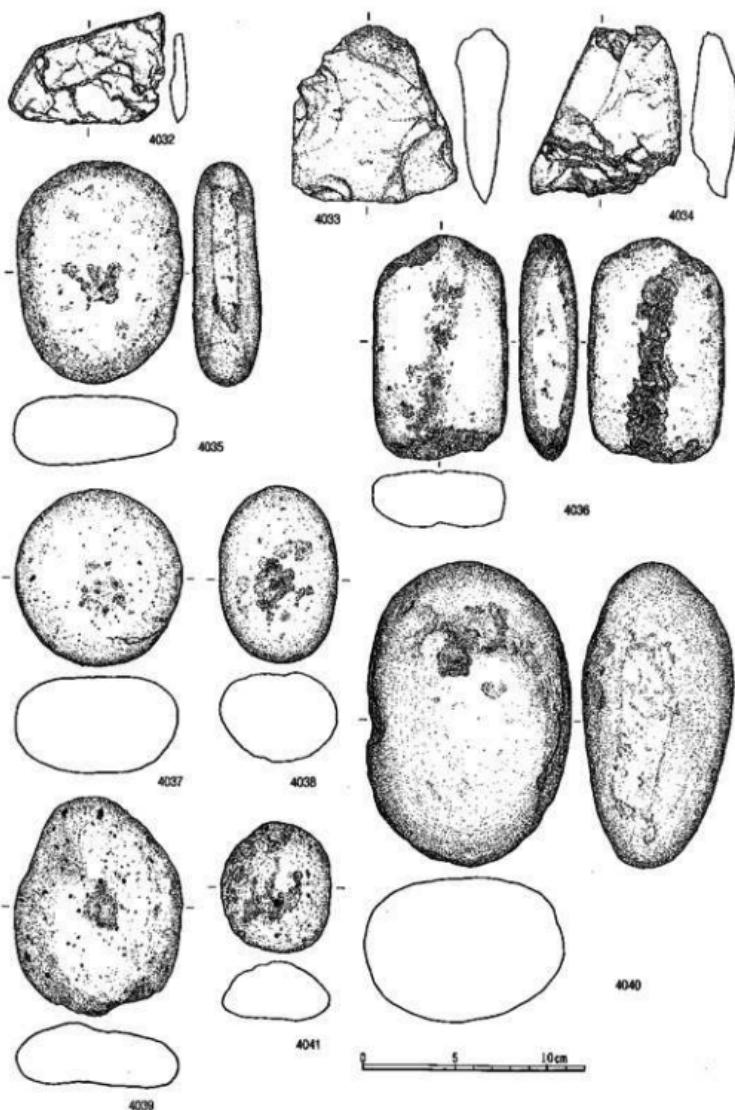
4003-4005・4010: 磐石安山岩 4004-4009-4012: 磐石角閃石安山岩 4006-4007: 硬砂岩
4008: ホルンフェルス 4011: 砂岩ホルンフェルス



第239図 4, 5号建物址出土の石器 (1/2)

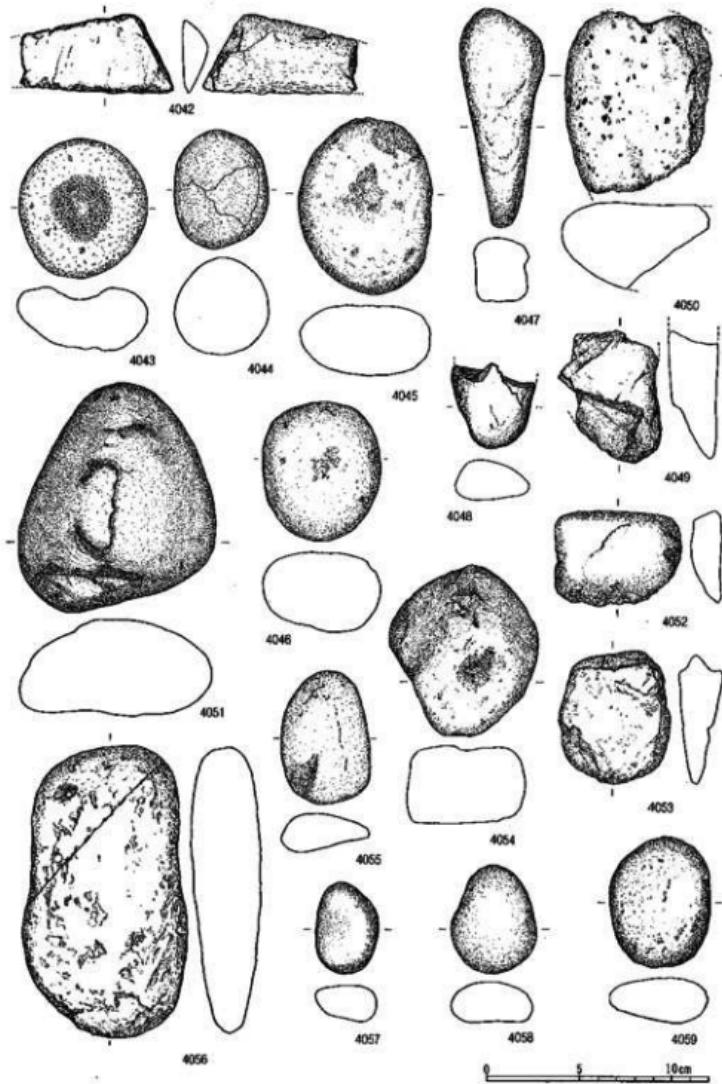
4013~4029: 4号建物址 4030~4031: 5号建物址

4013: チャート 4014~4031: 黒曜石



第240図 5号建物址出土の石器 (1/3)

4032-4034: 穡砂岩 4033: 黏板岩 4035-4037-4038-4040: 輝石安山岩 4036-4039-4041: 輝石角閃石安山岩



第241図 小堅穴出土の石器 (1/3)

4043・4044: 1号小堅穴
4045・4047: 2号小堅穴
4050: 3号小堅穴
4048: 5号小堅穴
4042・4051: 10号小堅穴
4054: 11号小堅穴
4046・4049・4052・4053: 12号小堅穴
4056~4059: 13号小堅穴
4055: 15号小堅穴

4042: 粘板岩ホルンフェルス
4043・4046・4050・4054・4057~4059: 煙石安山岩
4047~4049・4051~4053・4055: 硬砂岩
4056: オットレ石千枚岩